WEB版　日訳サヒーフ・ムスリム

日本ムスリム協会

ウェブ公開によせて

アッサラーム　アライクム

　世界のムスリムが最も信頼するハディースのひとつ「サヒーフ　ムスリム」が日本人イスラーム学徒の手により和訳され、1987年、日本サウディアラビア協会から出版された。その後2001年に同協会のご厚意により、当・日本ムスリム協会で再版する機会が与えられた。このハディース集は本邦初のアラビア語原典からの翻訳であることから、特に日本人のムスリムたち、イスラーム研究者たちの間で活用されてきた。この度、広くより多くの人たちに利用してもらうために日本ムスリム協会のホームページ上で一般公開することとした。
　預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の言行録集であるハディースはアッラーの言葉を記した聖典「クルアーン」に次ぐ大切な書として、ムスリムにとっては生き方の指針となり、生活の規範となっているものである。したがってムスリムにとってはイスラームを理解し実行するために、また非ムスリムにとってはイスラームをより深く知るための文献として必須なものである。
　今日、世界に約14億のムスリムがいると言われ、イスラームは世界の政治、経済にも大きな影響を与えつつある。この公開ホームページを活用していただき、日本においてもイスラームへの理解と関心をより一層深めていただければと願っている。

2009年11月20日
イスラーム暦ズルヒッジャ月
日本ムスリム協会会長　徳増公明

解説

1."ハディース"について

本書は、イマーム・ムスリム・ビン・アル・バッジャージの著作『サヒーフ　ムスリム』(ムスリム正伝集)の日本語訳(全三巻)である。本書は、イスラームの預言者ムハンマドに関するハディース(伝承)、すなわち、預言者の言葉、行為、また、黙認事項などの豊富な採録集であり、預言者の日常を詳細に記録したこれらのハディースを通じ、信徒らはイスラームの基本条項のみならず、預言者と共に生きた当時の教友ら(サハーバ)の生活の仕様に至るまで知り得る内容となっている。

イスラーム以前から、アラブ部族間では先祖伝来の生活慣習を"スンナ"と称して遵奉する傾向があったが、イスラーム以降には、預言者ムハンマドの言動が全信徒の日常生活や信仰の有り様を示す規範とみなされ、いわば、新しい"スンナ"としての位置を占めることになった。そして、この預言者のスンナに関する知識は、クルアーンの教義同様、全信徒の共有すべき知識、つまり、ハディースとして相互に伝達され遵守されるに至った。

周知のように、クルアーンにおける啓示は信仰のみならず、信徒の生活全般にわたる広範な教説を含むものであるが、その具体的指導は預言者のスンナによって補足される必要があった。たとえば、礼拝や巡礼に関する言葉はクルアーンの中に何度も繰り返されているが、それらに伴う細かい規則についての言及はみられないので、信徒は預言者のスンナに倣って実際の形式を学ばねばならなかったのである。

このように、預言者在世の頃からハディースは信徒の実生活上不可欠な知識であったわけで、そのため預言者自身も"相互にスンナを伝達し合うように"と教友らに指示されたといわれる。ただ、預言者在命中には、不明な問題が生じた時、人々は直接預言者に問いただすことができたので、ハディースは記憶や私的な記録として断片的に保存されただけで、組織的にまとめられることはなかった。預言者没後の四大カリフ時代以降、急速にイスラーム世界が拡大発展するに伴った幾多の新しい問題や状況に対処していく関係上、初めて権威ある参考指標としてのハディースに対する全般的知識の必要性が痛感されるようになったのである。そのため、遠く征服地や新開地などに分散した教友らをたずねて預言者に関するハディースを聴聞収集する者たちが現われだした。当時、マディーナは元より、マッカ、クーファ、バスラなどには比較的多くの教友やハディースに詳しい人々が居住していたこともあって、これらの町にはハディース学習を志す多くの学徒が参集したといわれる。ハディース聴聞のため遠隔地まで苦労を重ねて旅した人々の逸話は数多く知られている。これらの篤実な学徒の研鑽や"旅"を契機として幾多の貴重なハディースは保存され、また、各地方の信徒にも広く伝播されることになったのである。

ともあれ、イスラーム世界各地に流伝するハディースの組織的編纂が試みられるのは、8世紀以降のことであり、散逸したとはいえヒジャーズのアブドル・マーリク(767没)、クーフアのスフヤーン・サウリー(777没)などにより、先駆的な小ハディース集が編纂されたことが知られている。

現存する初期の重要なハディース集は、イマーム・マーリク(795没)による『ムワッタア集』であるが、内容はハディースを題目毎に整理し、法律事典的要素を備えた体裁となっている。なお、このように題目毎に分類して編纂する方式はムサンナフ型と呼ばれ、後代のハディース編纂様

式の主流となったものであるが、このムサンナフ形式に対し、ハディースを最初の伝承者の名の下に一括して記述する形式をとるものもあり、ムスナド型と呼ばれている。ムスナド型の著名なハディース集には、イマーム・アフマド・ビン・ハンバル(855没)による『ムスナド集』がある。
　後代、正伝の名を冠せられた六書は、いずれもムサンナフ形式を採るもので、小項目や簡単な説明が編者自身によって付されたものもあり、いずれも参照に便利な体裁になっている。なお六書、すなわち、六正伝集とは、ブハーリー(870没)、ムスリム(875没)の両"サヒーフ集"に加えてイブン・マージャ(886没)、アブー・ダウード(888,9没)、ティルミズィー(892没)、ナサーイー（915没)らの四『スンナ集』の総称である。
　ハディース編纂は、これら六書に終わったわけではなく、その後も数世紀にわたって継続的に行われ、バイハキー(1063没)、スニーティー(1505没)などによる著名な集録も編まれている。また、イスナード(伝承者経路)を最初の語り手以外は全部省略し、マトン(本文)のみを記述する簡単な形式のハディース集も編纂されている。
　ブハーリーやムスリムの両"サヒーフ集"は、内容の多様さ、また、採録に当っての真偽批判基準の厳格さによって、もっとも信頼できるハディース集としての声価を得たものであるが、この真偽についての検討はイスナードとマトンの両面から為されるのが通常であった。イスナード、すわち、伝承者の経路についての検討とは"AはBより聞き、BはCより伝えられた"という形式で、正しく最初の語り手に遡源できるかどうかについての調査を意味するが、この場合、各伝承者の知的能力、信頼度、年齢、居住地域、更には、本文を伝える伝承者経路の数も吟味された。マトンすなわち、伝承本文の検討においては、イスラームの教義に反していないか、特定の党派への偏向はみられないか、歴史事実に即しているか、などと共にアラビア語表現上の品性までも詮索されている。これらの検討を受けたハディースは全て、サヒーフ(確実なもの)、ハサン(妥当性をもつもの)、ダイーフ(典拠薄弱なもの)など三段階に分類された。ブハーリーやムスリムは、彼らなりの判定基準で、確実なハディースのみを採録したとの見解から"サヒーフ集"の名を冠したのである。
　ハディースが法学上ではクルアーンに含まれる規定を補足する権威ある源泉であり、イスラーム初期の歴史研究上重要な文献となっていることは再言するまでもないが、信徒にとってはなによりもこれらの存在は、信仰への理解と預言者像への親近感を促進する大きな要素となっている。

2.著者ムスリムについて
　『サヒーフ　ムスリム』の著者イマーム・ムスリムは正確には、アブー・アル・フサイン・ムスリム・ビン・アル・バッジャージ・アル・クシャイリー・アン・ナイサーブーリー(817/21〜875)と呼ばれる。イランのナイサーブール(ニーシャープール)で生れ、死後もその郊外のナスラーバードに埋葬された。四大カリフ時代、枢要な地位を占めた先祖をもつ名家の出身とも伝えられるが、詳しくはわかっていない。15才頃よりハディース学習を志し、広くアラビア、エジプト、シリア、イラクなどを旅行してイスハーク・ビン・ラフワィヒ、アフマド・ビン・ハンバル、クタイブ・ビン・サイードなど当時の秀れた伝承学者に学んだ。イマーム・ブハーリーとも親交があり、終生、ブハーリーのハディースに関する学識を尊敬してやまなかったといわれる。

なお、イマーム・ムスリムは生涯に約30万のハディースを収集したと伝えられる。そのうちサヒーフ集に収められたハディースの総数は、話題別に分類した場合、3,000余であるが、伝承者経路(イスナード)の数で計算した場合には、この2倍以上の数量に達するといわれる。このサヒーフ集以外にも、彼の著作や論稿は20数種もあり、その大半はハディースに関連したものである。なおまた、彼には多くの弟子がおり、なかにはアブー・ハーテム・ラーズィー、ムーサー・ビン・ハールーン、それに『スンナ集』の編者ティルミズィーら著名人の名がみられる。

　イマーム・ムスリムのサヒーフ集の特色はイマーム・ブハーリーの収録と異なり、大題目以外には、小題目、解説の類が一切付されてない点である。現在ほとんどのテキストに大題目区分として"キターブ(…書)"、内容を説明した小題目区分としての"バーブ"がみられるが、この小題目区分は後代の注釈者の筆によるもので、イマーム・ムスリム自身が付記したわけではない。第二の特色としては、イスナードおよびマトンの記述が厳密で、人物名や表現用語上の差異に関してこまごまとした指摘がみられる点が挙げられる。

本文は、信仰、礼拝、婚姻、商取引、遺産、戦争、神学、終末、注釈論など、今回我々のテキストとした『サヒーフ　ムスリム』では、56書(キターブ)に分けられ多様な内容となっている。

　なお、このサヒーフ集の注釈書としては、イマーム・アン・ナワウィー(1277没)による『シャルフ　サヒーフ　ムスリム』が有名である。

3.翻訳について

　本書のアラビア語テキストとしては、エジプトの碩学ムハンマド・フアード・アブドル・バーキー校訂の『Sahih Muslim Lil-Imami Abil-Hussain Muslim』(カイロ1955年刊初版本)を訳出原本とし、かつイマーム・アン・ナワウィーの注釈付『Sahih Muslim bi-Sharhi An-Nawawi』(カイロ1929年刊)にあるハディース本文を併用した。テキスト前部には、ハディース全般に関する解題や説話の紹介が記されているが、本書ではそれらは省略され、訳出は、"信仰の書(キタ.ーブル・イマーン)"以降より始められた。

　訳出に関しては、以下の諸点についても予め断っておきたい。

a)第一巻の翻訳は3名が分担し、人物名や地名など頻出度の多い事項の表記に関しては統一を図った。文体やいちいちの用語法は訳者それぞれのスタイルに一任された。

b)イスナード(伝承者経路)に現れる人物名を逐一列記するのは煩雑すぎるため、最初の語り手以外は省略された。この方式は、Muhammad Al-Husain Al-Baghawi(1122没)の『Masabih As-Sunna』およびこれに若干の変更を加えて、1336年頃改題、再版された『Mishkat Al-Masabih』やイマーム・アン・ナワウィー(前出)による『Riyad As-Salihin』に倣ったものである。

c)預言者、アッラーのみ使い、ムハンマドといった呼称には必ず"アッラーの加護と平安を!(サッラッラーフ アライヒ ワ サッラマ!)"という祈願の言葉を付すのが伝統的慣習であるが、頻度があまりに多すぎるため、訳出は省略せざるを得なかった。教友らに関する祈願についても同様である。

d)マトン(本文)表現用語の差異については、前述したように、極めて厳密な指摘がみられるが、訳語上の限界もあり、訳者それぞれの判断によって簡略化されたり、補足説明が加えられた場合がある。

e)前述したように、テキストの小題目(バーブ)は著者イマーム・ムスリム自身の筆によるものではなく、後代の注釈者らによって書き加えられたものである。それ故、これも訳者の判断で内容中心に簡略化されたところがある。
f)会話体の多いハディースでは、内容を変更しない限り、必ずしも直訳形式をとらぬ場合があった。また、理解を容易にするため、テキストにない状況説明を付加したところもある。
9)訳出に当っては、前述したイマーム・アン・ナワウィーの注釈書『Sharh As-Sahih Muslim』およびAbdul-Hamid Siddiqiによる英訳『Sahih Muslim』(Lahore 1973)を参照した。なお、クルアーンについては『聖クルアーン』(日本ムスリム協会昭和58年版)を参考にした。
h)テキスト全体は、三分冊で出版されるが、第一巻においては"信仰の書"、"斎戒の書"および"ハイドの書"を磯崎定基、"礼拝の書"および"モスクと礼拝場所の書"の大半を飯森嘉助、残りの"礼拝の機会を失した時の償い"以降"旅行者の礼拝の書"までを小笠原良治が担当した。

　クルアーンの日本語訳がすでに数種も存在する現今、イスラーム理解を一層深めるためには、権威あるハディース集の翻訳紹介が急務であるとの見解から、イマーム・ムスリムの"サヒーフ集"がその対象に選ばれたのであるが、訳業が実際に進められだしたのは1984年の夏頃からであった。爾来、非力を嘆じながらも、本業の傍ら、担当者はそれぞれ翻訳に苦心してきたのであるが、語学や表現上の未熟さ故に思わぬ誤りを犯しているかとも省みている。ささやかな我々の努力による本書が日本におけるイスラーム理解にいささかなりとも貢献できることを願うと共に、将来、これを轍としてより一層完全なハディース翻訳書が数多く紹介されることを心より期待したい。

　なお、この翻訳は、日本サウディアラビア協会の浜田明夫氏、富塚俊夫氏、武藤英臣氏らの推(車篇に免)と全面的な協力によって進められた。また、和久井生一氏には翻訳文体の全般的調整をお願いした。ここに記して感謝申し上げたい。
1987年1月

イマーン（信仰）に関して
1巻　P.27-31

ヤヒヤー・ビン・ヤアマルはこう伝えている。
バスラで初めてカダル（天命）について語ったのは、マーバド・ジュファニーであった。
私とフマイド・ビン・アブドル・ラフマーン・ヒムヤリーはハッジ（大巡礼）及びウムラ（小巡礼）に出かけたが、その折、私たちは、もしもアッラーのみ使いの教友たち（アスハーブ）の誰かにマッカで会うことができたら、カダル（天命）についてどのように考えるのか聞きたいものだと話し合っていた。
私たちは、たまたまモスクに入ろうとしていたアブドッラー・ビン・ウマル・ビン・ハッターブに出会った。
そこで私たちは取り囲むように彼の左右に立ってー同僚が私に質問をまかせているようなのでー私が代表して彼に次のように問いかけた。
「私たちのところに聖クルアーンを読みハディースについての知識も深い人々がやってきて、様々に体験談を語ってくれた。彼らはその話の中で、カダルつまり予め定められた天命など有りえないと語っていた」
アブドッラーはこれに対し次のように答えた。
「そのような者たちにまた会う機会があれば告げるがよい。私は彼らの見解に同意できない。私にとって彼らは全く無縁の輩にすぎないと」
アブドッラー・ビン・ウマルは次のようにも述べた。
「アッラーに誓って申すが、そのような者がたとえ、ウフド山にも匹敵するほどの黄金を持ち、それを善行のために使ったとしても、カダルを信じない限りアッラーは喜び給わぬだろう」
アブドッラーは更に以下の話も語ってくれた。
「私の父ウマル・ビン・ハッターブはこう話していた。
私がアッラーのみ使いのところにいた或る日、純白な衣服を着、真黒の髪をした一人の男が突然現われた。
どこか遠くから旅してきた様子ではなかったが、我々の誰一人として彼について知る者はいなかった。
彼は預言者の側に膝を組み、手のひらを太腿の上において座り、次のようにいった。
『ムハンマドよ。イスラームについて述べてみよ』。
アッラーのみ使いは答えた『イスラームとはアッラーの他に神はなく、ムハンマドはアッラーの御使いであると証言し、サラート（礼拝）を行い、ザカート（喜捨）を供し、ラマダーン月には断食し、旅の資金に支障がない限り、アッラーの館（カーバ神殿）に巡礼することです』。
その男はこれに対し『あなたの言葉は正しい』といった。
この事に関して、父ウマル・ビン・ハッターブは『彼がそのような質問をし、またその答えが真

実であると確信したことに驚いた』と語っていた。
その男は更に、『イマーン（信仰）について告げよ』ともいったが、み使いははこれに対し、『アッラー、その天使たち、経典類、使徒たち、審判の日についての信仰、善悪に対するカダルを信ずることです』と述べた。
その男は、この答えを『正しい』といい、更にまた『イフサーン（善行）について述べよ』と問うた。
み使いはこれに対しても『あたかも目前に座すかのようにアッラーを崇めることです。あなたにアッラーのお姿を拝することができなくても、アッラーはあなたをみておいでになるからです』と答えた。
彼は更に『週末の時期について述べるように』といったが、み使いは『おたずねになる方以上に、私がこれに関して存じているわけではありません』といわれた。
その男はまた、『審判の日の近づく兆候について語れ』とも述べたが、これに対し、み使いは、『その時期になると、奴隷女が女主人を生み、裸足で衣服もまとわぬ羊飼いの者らが競い合って豪華な住いを建てることでしょう』といわれた。
その後この人物は立ち去った。
私はしばらくの間、そこにとどまっていたが、この時、み使いは『ウマルよ、あの質問者が誰であるか知っていますか』といわれた。
私が『アッラーとアッラーのみ使いのみが最も良くご存知でありましょう』と答えるとみ使いは『あの方は天使ジブリールです。あなたたちに信仰について教えるため、ここにこられたのです』といわれた」
ヤヒヤー・ビン・ヤアマルは、別の伝承者経路で次のように伝えている
「マーバドがカダルの問題について語ったが、私たちはその見解に賛同しなかった」
なお、この伝承者経路の口述者の一人カフマスの伝えるハディースには、前記内容とやや異なった表現がみられる。
ヤヒヤー・ビン・ヤアマル及びフマイド・ビン・アブドル・ラフマーンは別の伝承者経路でこう伝えている
「私たちはアブドッラー・ビン・ウマルに会いカダルやそれに関連する事柄について話し合った。アブドッラーは預言者についてウマルの語ったハディースを私たちに伝えてくれた」
なお、このハディースの後半には、前記とはやや異なった表現が使われている。
前記と同内容のハディースは、父ウマルから聞いたイブン・ウマルによっても別の伝承者経路で伝えられている
アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いが人々と一緒におられた或る日のこと、一人の男がそこに来てこういった。
「アッラーのみ使いよ、イマーンとはなんですか」
これに対しみ使いは、「アッラーとその天使たち、経典類、最後の審判の日にアッラーにお会いすること、その使徒ら、そして来世における復活を信仰することです」と答えた。
彼は更に「アッラーのみ使いよ、イスラームとはなんですか」と問うた。

み使いはこれに対し次のように答えた。
「イスラームとは、アッラーのみを崇拝し、アッラー以外のいかなるものをも拝さぬこと、義務として課せられる礼拝を行い、定めのザカートを提供し、ラマダーン月の断食を守ることを意味します」
質問者は更に続けて、「アッラーのみ使いよ、善行（イフサーン）とは、どのようなことですか」と問うた。
み使いは以下のように答えた。
「アッラーをあたかもあなたの目前に座すかのように崇拝することです。
たとえあなたがアッラーをみることができなくてもアッラーはあなたをみておられるのです」
彼はまた「アッラーのみ使いよ、最後の審判の時は、いつであろうか」と問うたが、み使いは次のように答えた
「たずねられる者が、おたずねになる方以上にそれに関して知っているわけではありません。
しかしながら、私はその時の兆候の幾つかを申し上げます。
その時期が近づくと奴隷女が、成長してから自分の主人となる子供を生み、また裸体で靴もはかぬ者らが人々を支配するようになるのです。
こういう類の事柄が終末期の兆候です。
更にその時、黒羊を飼う牧童らは大きな建物を競い合って建てますが、それもアッラー以外は誰も知り得ぬ五つの兆候の中の一つです」
このあと、み使いはクルアーンの聖句をお誦みになった。
「アッラー、本当にかれだけが、審判の時を知っておられる。
かれは雨を降らせられる。
また胎内にあるものを知っておられる。
だが人間は誰も明日自分が何を稼ぐかを知らず、誰も何処で死ぬかを知らない。
本当にアッラーは全知にして凡てに通暁される御方であられる」（クルアーン第31章34節）
この後、その方は立ち去った。
み使いが「あの方を私の所につれ戻すように」といわれたので、教友たちは急いで探しまわったが見つけることはできなかった。
み使いは、この折、「あの方は、人々に信仰について教えるため来られたジブリールなのです」といわれた。
前記のハディースは、ムハンマド・ビン・アブドッラーにより別の伝承者経路でも伝えられるが、「奴隷女が将来その主人（ラッブ）となる子供を生む」という表現には“ラッブ”にかわり“バアル”（主人・所有者）という言葉が用いられている。
アブー・フライラはこう伝えている
アッラーのみ使いは「信仰の問題を私にたずねるように」と述べられたが、（み使いを畏敬するあまり）教友たちの誰一人として、質問する者はいなかった。
とかくする中に、一人の男がそこに来、み使いの膝近くに座っていった「アッラーのみ使いよ、イスラームとはなんですか」。

これに対しみ使いは答えた「いかなるものをもアッラーと同等とせず、礼拝を行い、ザカートを供し、ラマダーン月の断食の定めを守ることです」。
その男は「あなたの言葉は正しい」と述べ、更に「アッラーのみ使いよ、信仰とはなんですか」とたずねた。
み使いはいわれた「それはアッラーとその天使たち、その経典類、アッラーにお会いすること、その使徒たち、更に復活と天命（カダル）を心から信仰することです」
その男はまた「アッラーのみ使いよ、イフサーン（善行）とはなんですか」とも問うた。
これに対し、み使いは「イフサーンとはアッラーをあたかもあなたの目前にみるかのように恐れ尊むことです。
あなたにアッラーを見ることはできないが、アッラーはあなたをいつも見ておられるのです」と答えられた。
その男は、「あなたの言葉は正しい」と述べ、更に「審判の時はいつですか」とたずねた。
み使いは「これに関しては、質問する方がされる者よりもよく御存知でありましょう。
しかしながら、その兆候の幾つかを述べるとすれば、奴隷女が将来自分の主人となる子供を出生するのを見るのも兆候の一つですし、裸足で衣服も着けぬ盲目の聾唖者ら（無知で愚かな人々）が地上の支配者になるのを見るのも兆候の一つです。
更に黒羊を飼う牧童らが豪華な建物を競い合って造るのも兆候の一つです。
審判の時は、アッラー以外に知り得ない、我らには知ることのできぬ五つの事項中の一つなのです」と述べ、次いで次の聖句をお唱えになった。
「アッラー、本当にかれだけが審判の時を知っておられる。
かれは、雨を降らせられる。また胎内にあるものをも知っておられる。
だが、人間は誰も明日自分が何を稼ぐかを知らず、誰も何処で死ぬかを知らない。
本当にアッラーは全知にして凡てに通暁される御方であられる」（クルアーン第31章34節）
その男は立ち上がり去って行った。
み使いが「あの方を私の処につれ戻すように」といわれたので、人々はすぐ彼を捜したが発見できなかった。
み使いはこの折、「あの方は、ジブリール様です。あなたたちが私に質問しなかったので、信仰についてあなたたちに教えようとしたのです」といわれた。

礼拝について
1巻　P.31-32

タルハ・ビン・ウバイドッラーは伝えている
ざんばら髪の、ネジド出身の一人の男がアッラーのみ使いの処にやってきた。
私たちは、初め彼（の声）が一体何をいっているのか理解できなかったが、彼がみ使いに近づくに及んで、ようやく、イスラームについてたずねていることを知ることができたのだった。
この折、み使いは彼にむかって、「昼と夜の間に五度の礼拝をすることです」と説明された。
これに対し彼は「それ以外にも礼拝しなければならないのですか」とたずねたが、み使いは、「いや、必要ない。ただし、任意に礼拝するのは構わない」といわれた。
み使いは断食とザカートについても彼に説明された。
彼は「規定以外には行う必要はありませんか」とたずねたが、み使いは「いや、その必要はない。ただし自発的な敬神行為であれば構わない」と答えられた。
この男は立ち去る時、「アッラーに誓って。私は定められた通りにやるつもりです」と述べた。
み使いは、これに対し「もし彼が今の言葉通りに行えば大変結構なことです」といわれた。
タルハ・ビン・ウバイドッラーによる前記と同内容のハディースは、マーリク・ビン・アナスによっても伝えられるが、アッラーのみ使いの言葉に表現上多少の差異がみられる。
マーリクの伝承には、アッラーのみ使いは「あの男の父親に誓っていうが、彼がその言葉通りに行うなら大変結構なことだ」
または、「彼の父親に誓っていうが、誓い通りに行うならば彼は天国に入ることができるだろう」といわれた　と記されている。

アッラーへの信仰に関して
1巻　P.32-34

アナス・ビン・マーリクは伝えている
私たちは、アッラーのみ使いに特に必要ない限り質問することを禁じられていた。
それ故砂漠の住民の誰か賢明な男がみ使いの処に来て、質疑するのを私たちは喜び、それを拝聴したのだった。
或る時、砂漠から一人の男がみ使いの処に来て、「ムハンマド様、あなたの使いが私たちの処にき、アッラーがあなたを預言者としてお遣わしになったというあなたのお言葉を私たちに語っていました」と告げた。
み使いはこれに対し「彼の言う通りです」といわれた。
するとその男は「だれが天を創造されたのですか」と質問した。
み使いはこれに対し「アッラーです」とお答えになった。
その男は更に「だれが地上を創造されたのですか」と問うたが、み使いは「アッラーです」とお答えになった。
その男はまた「だれがこれらの山々を高くし、そこにある様々なものを造ったのですか」ともたずねたが、み使いはそれにも「アッラーです」と答えられた。
これに対しその男はいった「天と地を造り、そこに高い山々を置かれた御方に誓って申しますが、（その御方）アッラーがあなたをお遣わしになったのですか」み使いは「そうです」と答えられた。
その男は更にまたいった「あなたの使いの方々は、夜と昼の間に五度の礼拝を行うようにと私たちに教えました」。
み使いはこれにも「彼のいう通りです」と答えられた。
その男はいった「あなたを遣わされた御方に誓って申しますが、その礼拝を命じたのは、アッラーですか」み使いは「そうです」と答えられた。
その男は続けていった「あなたの使いの方々は、私たちの財産に対し、ザカートの義務が課せられると告げました」み使いはこれにも「彼の言葉通りです」とお答えになった。
その男はまたいった「あなたを預言者として遣わされた御方に誓っておたずねしますが、そのザカートについてあなたに命じたのは、アッラーですか」。
み使いは「そうです」とお答えになった。
その男は更にいった「あなたの使いは、毎年ラマダーン月に断食することが私たちの義務であると告げました」。
み使いはこれにも「彼の言葉は正しい」と答えられた。
その男はいった「あなたを預言者として遣わされた御方に誓ってお聞きしますが、それを命じられたのはアッラーですか」。

み使いは「そうです」と答えられた。
その男はいった「あなたの使いは（カーバの）館への巡礼（ハッジ）が、そこまで旅することが可能な者にとって義務であると私たちに説きました」。
み使いは「彼のいう通りです」とお答えになった。
その男は立ち去る時こう述べた「真理をあなたに授けられた御方アッラーに誓って申しますが、私はこれらのことを一切付加することも省略することもなく定めの通り遵守します」。
預言者はこれに対し「もしも彼がその言葉通り行ったとしたら、彼は天国に入れるであろう」といわれた。
サービトによると、アナスは次のように伝えている
「私たちがアッラーのみ使いにあれこれ質問することは、クルアーンによって禁じられていた」
このあとアナスは前記と同内容のハディースを語った。

天国に入るための信仰に関して

天国に入るためのイマーン（信仰）に関して
1巻　P.34-35

アブー・アイユーブ・アンサーリーによると、ある日アッラーのみ使いの旅中に一人のベドウィンが現われ、彼のらくだの鼻綱をとらえて次のようにいった
「アッラーのみ使い様（または、ムハンマド様）私を天国に導き地獄の火から遠ざけるものに関して教えて下さい」
預言者はしばらく立ちどまり、教友らを一瞥してから、こういわれた「この人はよい機会に恵まれた」（または、「よい考えに気付いた」）
預言者はそのベドウィンに質問を繰り返させた後、次のように説かれた「あなたを天国に近づけ地獄より遠ざける行為は、あなたがアッラーを崇い、アッラー以外のなにものをも尊ばないこと、礼拝を行い、ザカートを支払い、親族には善行を為すことです」
この言葉を述べた後、預言者はそのベドウィンにらくだの鼻綱をはなすよう、お命じになった。
このハディースは、アブー・アイユーブ・アンサーリーによっても別の伝承者経路で伝えられている。
アブー・アイユーブによると、一人の男が預言者の処に来て次のようにいった
「私を天国に近づけ、地獄の火から遠ざける行為について教えて下さい」
これに対し預言者は「アッラーを崇め、なにものをもアッラーと同等に尊んではならない。礼拝を行い、ザカートを払い、親族に善を行いなさい」と告げた。
その男が帰りかけた時、預言者は「もしもこれらを守ることができれば、あなたは天国に入るだろう」といわれた。
アブー・フライラによると、一人のベドウィンがアッラーのみ使いの処に来て、次のように述べた
「み使い様、私が天国に入り得る行為について教えて下さい」
これに対しみ使いは「アッラーを崇拝し、彼以外になにものをも尊んではならない。定められた礼拝を行い、義務としてのザカートを支出し、ラマダーン月の断食を守りなさい」と説かれた。
そのベドウィンは「生命の主たるアッラーに誓って申しますが、私はこれらを忠実に守り、欠けることのないよう怠らず努めます」といった。
彼が立ち去った時、預言者は「天国に住むものたちは、喜んで彼の姿をそこに見ることであろう」といわれた。
ジャービルによると、ヌアマーン・ビン・カウファルが預言者の処に来てこういった。
「もしも私が礼拝義務を守り、シャリーア（イスラーム法）で禁ずるものを避け、許すものを守ってゆけば、私は天国に入れるでしょうか」
これに対し預言者は「その通りです」といわれた。
前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でジャービルによっても伝えられ、それには次の

表現が加えられている「私は、あなたがいわれた通りに致します」
ジャービルは伝えている
或る男がかつてアッラーのみ使いにこう質問した「私が礼拝義務を怠らず、ラマダーン月の断食を行い、（シャリーアによって）正当と認められていることを守り、禁じられることを避けて勝手な判断を加えない場合、天国に入れるでしょうか」
み使いがこれを肯定なさると、その男は「アッラーに誓って、私は必らず（シャリーアを）正しく守ります」といった。

イスラームの基本、五柱に関して

「イスラームの基本は五つの柱よりなる」との預言者の言葉に関して
1巻　P.36-37

ウマルの息子アブドッラーによると、預言者はこういわれた
「イスラームの基本は五つの柱で構成される。即ち、唯一神アッラーへの信仰、礼拝の実践、ザカートの供出、ラマダーン月の断食、マッカへの巡礼である」
或る男がアブドッラーに、「巡礼とラマダーン月の断食とでは、どちらが上位ですか」とたずねた時、彼は「預言者は『ラマダーン月の断食が巡礼より上位である』といわれた」と答えた。
ウマルの息子アブッドッラーによると、預言者はこういわれた
「イスラームは五つの柱より成り立っている。それらはアッラーのみが崇拝されアッラー以外にはいかなる神々も拒否されること、礼拝の実践、ザカートの供出、神の館（カーバ）への巡礼、ラマダーン月の断食である」
ウマルの息子アブドッラーによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「イスラームの基本は、五つの柱より成り立っている。それらは、アッラー以外に神はなくムハンマドは神のしもべでありみ使いであることを証言すること、礼拝を行うこと、ザカートを支出すること、（カーバ）の神殿への巡礼を果すこと、ラマダーン月の断食を守ることである」
ターウースによると、或る男がウマルの息子アブドッラーにこうたずねた
「どうしてあなたは遠征に参加なさらないのですか」
これに対し、彼は次のように述べた。
「アッラーのみ使いが、イスラームは五つの柱より成り、それらは、アッラー以外の神はないとの信仰告白と、礼拝の実践、ザカートの供出、ラマダーン月の断食、神殿への巡礼である　といわれるのを私は聞いたことがある（注）」
（注）「老令のため遠征に参加し得ない故、私はムスリムとして五つの柱の義務を果たすだけである」という意味でこう述べたのである

アッラーと預言者に関して

アッラー及びその預言者への信仰について
1巻　P.37-40

イブン・アッバースによると、アブドル・カイスの使節が、アッラーのみ使いの処にやって来て次のように述べた
「み使い様、私共はラビーア部族の者ですが、あなた様と私共の間に不信者ムダル部族の居住地があり、私共は神聖月間以外には、自由にあなた様の処に来ることができません。
それ故、私たちだけでできること、また、私たちの周辺に住む者らを導くため、なにを行うべきかについて教えてください」
これに対し、み使いはこういわれた
「それでは、あなたたちに四つの行うべき事柄とアッラーより禁じられる四つの品目について次のことを命じます。
先ず為すべき四つとはアッラーに対する信仰行為で、アッラー以外に神はなくムハンマドは神のみ使いである　との真理を証言し、礼拝を行い、ザカートを供し、また、あなたたちの得た戦利品の五分の一（フムス）を提出することです。
更に、私はあなたたちに酒を入れるひょうたんつぼ（ドゥッバー）、酒がめ（ハンタム）、木鉢（ナキール）、皮袋（ムカイヤル）（注）を使うことを禁止します」
ハラフはこれに関連して次の言葉を加えている「『アッラー以外に神はないと証言すること』と説明しながら預言者は、アッラーの唯一なることを指でお示しになった」
（注）いずれもナビーズ酒の製造、保存に使われた
アブー・ジャムラは伝えている
私はイブン・アッバースの話を人々に説明する役だったが、その折たまたま一人の女性がきて、ナビーズ酒の容器についてたずねた。
それに対して彼（イブン・アッバース）はこう語った
「アブドル・カイスの使節が、アッラーのみ使いの処にきた時、み使いは彼らの部族名をおたずねになった。
彼らが『ラビーア部族の者です』と答えたところ、み使いは大変歓迎された。両者間にはこれまでなんら対立関係はなかったからである。
彼らは次のように述べた。
『み使い様、私たちは遠隔地からやって来ましたが、あなた様と私たちの間には不信者のムダル族が居住しているため、聖月間以外にあなた様の処に来ることが困難です。
それ故どうか私たちの仲間への導きや天国に私たちも入れるような教えをいただきたく思います』
これに対しみ使いは次のようにいわれた
『私はあなたたちに四つの行為をすすめ、別に四つの行為を禁じます』

更に付言して『私はあなたたちにアッラーへの強い信仰を持つことを望みます』と述べ、『アッラーへの信仰とは何を意味するか、理解していますか』とおたずねになった。
彼らが『知りません』と答えると、み使いは『それはアッラー以外に神は存在せず、ムハンマドは神のみ使いであると証言すること、礼拝の実践、ザカートの支出、ラマダーン月の断食、更に、戦利品の五分の一を提出すること　を意味します。
なお私は、あなたたちにひょうたんつぼや酒がめ、または他の飲酒容器類を使うことを禁じます』といわれた」
シュウバによるハディースには、容器に関し木製鉢（ナキール）、または、皮袋（ムカイヤル）という表現がみられる。
み使いはまた「これらのことを記憶し、ここに来れなかった者たちに伝えるように」ともいわれたと記されている。
イブン・アッバースによるハディースは前記のシュウバのそれと同内容であるが、その中に次の表現がみられる
預言者はこういわれた
『私はひょうたんつぼや、木鉢、ニス塗りの瓶、または松脂を塗った容器などでナビーズを作ることを禁ずる』
またイブン・ムアーズは彼の父より聞いた話として、アッラーのみ使いがアブドル・カイス族のアシャッジュに対し『あなたは、アッラーが悦び給う二つの美点、即ち理解力と思慮深さをそなえている』といって賞讃したことを伝えている。
カターダによると、アブドル・カイス族の使節団の一人が以下の話を彼に語ったが、アブー・サイード・フドリーによればその人の名はアブー・ナドラであったという
アブドル・カイス族の人々はアッラーのみ使いの処にきて、次のようにいった
「アッラーの預言者様、私たちはラビーア族の者ですが、私たちとあなた様との中間に不信者のムダル族居住地域があるため、聖月間以外には私たちはあなた様の処に来ることは不可能です。どうか私たちの仲間のためにも、天国に入れるよう善行について教えてください」
アッラーのみ使いはそれに対し、こういわれた
「私はあなた方に四つの善行をすすめ、別に四つの悪行を禁じます。
善行とはアッラーを崇拝し、アッラーになにものをも比肩してはならぬこと、礼拝を行い、ザカートを支出し、ラマダーン月の断食を守ることです。
それに戦利品の五分の一を提出しなければなりません。
私が禁ずる四つとは、乾いたひょうたんつぼ、緑色の瓶、ニス塗りの容器、なつめやしの木で作った鉢（ナキール）を使用することです」
彼らが“ナキール”とはなにかと質問したところ、預言者はそれが木の幹をくりぬいた容器で、中に小粒のなつめやしの実（サイードによると、預言者は“タムル”といわれたという）を入れ、
水を注ぎ発酵させて酒を造ったり、またそれを飲んだりするために使われる道具である　と答え、「あなた方の一人は酔ったあげく、その従兄を剣で傷つけたではないか」といい加えられた。
彼らの一人はこれに対して「実際私たちの仲間の一人が酔っぱらって人を傷つける事件を起こし

たのですが、そのことを恥じ、み使い様には内密にしていたのです。
しかしながら、もし私たちがこれらの道具を使えないとすればどんな容器が水を飲むのに適当でしょうか」とたずねた。
み使いがこれに対し口元を縄で結ぶ皮製の水袋が適当であると述べると彼らは「み使い様、私たちの国には野ねずみが多く、皮の水袋はそれらにかじられてしまいます」と答えたが、アッラーの預言者は三度も繰り返して「たとえ野ねずみにかじられようとも皮袋を使うように」と指示されたのでした。
アッラーの預言者はこの後、アブドル・カイス族のアシャッジュにむかい「あなたはアッラーの喜ぶ二つの特性、即ち理解力と思慮深さに富む人物です」といっておほめになった。
カターダによるアブドル・カイス族がアッラーのみ使いの処にやってきた時の前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられるが、それには「小粒のなつめやし（クタィーアー）、または、（普通の）なつめやし（タムル）の実、および、水をそれに注ぐ」などの言葉は記されていない。
また、サイードが伝える預言者の言葉「なつめやしの実（タムル）」という表現もみられない。
アブー・サイド・フドリーによると、アブドル・カイス族の使節は、アッラーの預言者の処に来て次のようにいった
「アッラーの預言者様、アッラーが私たちをあなた様のために役立たしめますようにと願っております。
（ところで）どんな飲物が私たちに良いのか、教えてください」
預言者はこれに対し飲物については触れず「酒用木鉢（ナキール）から飲んではならない」と述べ、ナキールとは何かとの質問に対し「内部をくりぬいた木の株である」と答えると共に
「ひょうたん瓶や酒器を用いてはならない。
縄で口元をしめる皮袋（ムウカー）を使うように」と指示された。

イスラームの宣教法に関して
1巻　P.40-41

イブン・アッバースによると、ムアーズは次のように語った
アッラーのみ使いは私をイエメンに派遣するに当り、こういわれた
「あなたは、啓典を信ずる人々に会うだろうが、先ず彼らに対し『アッラー以外に神はなく、私（ムハンマド）はアッラーのみ使いである』と説きなさい。
彼らがそれを信仰したら、次に、アッラーは一日五度の礼拝を命じていることを説き、更にそれを受入れたならば、アッラーはザカートを義務として定めており、それは貧者に給するため富裕者より集められることを教えなさい。
ただし、彼らがこれを受入れたとしても彼らの最も大切な財産までザカートとして徴収してはならない。
迫害され苦しむ人々の祈りの声は心して聴くように。アッラーとその人たちとの間にはなんら障壁もなく、彼らの声はそのままアッラーのもとに達するものです（注）」
（注）迫害される者の祈りはたとえ不信者のそれですら、直接アッラーに達するといわれる
イブン・アッバースによると、預言者はムアーズをイエメンに派遣なさった折、次のようにいわれた
「あなたは、啓典を信ずる人々に会うだろう」以下は前記ハディースと同内容である。
イブン・アッバースによると、アッラーのみ使いはムアーズをイエメンに（知事として）派遣した時、こういわれた
「あなたはこれから啓典の民らの地域に赴くのであるが、先ず最初に彼らに説くべきことはアッラーへの信仰で、
彼らがこれを十分理解したならば、一日五度の礼拝が課せられていることを説き、
更に、これが守られるようになったならば、アッラーが彼らにザカートを義務として命じており、これは富裕者より集め貧者に分配されることを話しなさい。
そしてこれに彼らが納得したならば、ザカートを集めなさい。
ただし、彼らの最も大切な品々までザカートとして徴収するようなことがあってなりません」

不信者に対する戦闘命令について

不信者に対する戦闘命令について
1巻　P.41-43

アブー・フライラはこう伝えている
アッラーのみ使いが亡くなられ、アブー・バクルがカリフ（後継者）に選ばれた時、アラブの幾つかの部族がイスラーム信仰を棄てた。
これに関しウマル・ビン・ハッターブはアブー・バクルに次のようにいった
「アッラーのみ使いは、かつて
『“アッラー以外に神はない”との信仰を持たぬ者と戦うようアッラーより命ぜられた。信仰を告白したものは、私の責任において庇護されるが（罰に価する）違反者への報いはアッラー（の判断）に委ねられる』
と述べられたが、あなたは（背信者らと）戦うつもりですか」
これに対しアブー・バクルは「ザカートと礼拝を分離させる者に私は必ずや戦いをいどむだろう。
ザカートは礼拝同様信仰の基本であり富める者の義務である。
今、（ザカート運搬用のらくだの脚をむすんだ）紐をゆるめようとしない者らも、み使い在世の頃には（義務としてザカートを）支払っていたのである。
今それをやめる者に対して、私は断固として戦うであろう」と答えた。
この言葉にウマル・ビン・ハッターブは「アッラーに誓って申します、今やアッラーはアブー・バクルの心を開き、ザカート供出を拒否する者らに対する戦いが正当であることを気づかせ給うた。
アブー・バクルの決意は正当であると私は思う」と述べた。
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはかつてこういわれた
「私は、人々がアッラー以外に神はないと証言しないかぎり、これと戦うよう命ぜられた。
それを証言した者の生命財産の安全は私によって保証される。
ただし法を犯した違反者は別で、その処置はアッラーの判断にまかせられる」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「私は、人々がアッラー以外に神はないという真理を証言し、私がアッラーのみ使いであること、および、私が託された教えを信ずるまで戦うよう命ぜられている。
人々がそれを行ったならば、彼らの血と財産の安全は私によって守られる。
ただし法を犯した違反者は別で、その処置はアッラーの判断にまかせられる」
ジャービルによると、アッラーのみ使いはいわれた
「私は、人々がアッラー以外に神はないと証言するまで戦うことをアッラーから命ぜられた。
人々が、アッラー以外に神はないと証言した時、彼らの血と財産は私によって守られる。
ただし法を犯した違反者は除かれ、その処置はアッラーにまかせられる」

この後、み使いは次のクルアーン聖句をお誦みになった。
「だから、あなたは訓戒しなさい。本当にあなたは一人の訓戒者に外ならない。かれらのための支配者ではない」（クルアーン第88章21-22節）
アブドッラー・ビン・ウマルによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「私は人々が『アッラー以外に神はなく、ムハンマドは神のみ使いである』と証言し、礼拝を行い、ザカートを支出するまで戦うようアッラーに命ぜられた。
もし彼らがそれらを行う時、彼らの血と財産は私によって保証されるだろう。
ただし、彼らが法に反する行為を犯した場合は別で、その処置はアッラーに委ねられる」
アブー・マーリクによれば、彼の父はアッラーのみ使いがこういわれるのを聞いた
「アッラー以外に神はないと証言し、アッラー以外にいかなる神をも崇拝しない者は、財産、生命を脅かされることはない。その者らの処遇はアッラーに委ねられる」
アブー・マーリクによれば、彼の父は預言者がこういわれるのを聞いた
「アッラーの唯一性を信ずる者は……」
以下は前記と同内容のハディースである。

信仰について

信仰について
1巻　P.43-45

サイード・ビン・ムサイイブが彼の父から聞いたハディースによると、アブー・ターリブの臨終に近い頃、アッラーのみ使いは彼を見舞いにおいでになった。
そこには、アブー・ジャフル・アムル・ビン・ヒシャームとアブドッラー・ビン・アブー・ウマイヤ・ビン・ムギーラがいた。
み使いはこういわれた
「伯父上よ、『アッラー以外に神はない』と告白して下さい。
そうすればあなたが信者であることをアッラーの前で私が証言します」
これに対しアブー・ジャフルとアブドッラー・ビン・アブー・ウマイヤはいった
「アブー・ターリブよ、あなたは父アブドル・ムッタリブから受け継いだ先祖伝来の信仰を棄てるのですか」
み使いは、伯父に対し信仰告白をするよう繰り返し頼んだが、アブー・ジャフルらも彼の（同じ）言葉を繰り返していった。
アブー・ターリブは最後に決断して、アブドル・ムッタリブの信仰を守ることとし、「アッラー以外に神はない」と告白することを拒否した。
これに対しみ使いはいわれた
「アッラーよ、私はあなたが止めるよう命ずるまで、あなたに伯父のための許しを乞い続けるでしょう」
その後間もなく、アッラーは次の聖句を啓示された。
「預言者であれ、信者であれ、不信者のために許しを乞うのは、たとえその親族であったとしても、許されない。
（彼らが）地獄の居住者たることは、すでに明白であるのだから」（クルアーン第9章113節）
次の聖句もアッラーのみ使いに啓示された。
「あなたが愛する者であっても、正しい道にあなたがその者を導き得るわけではない。
アッラーこそ人を思いのままに導き給う方であり、だれを導き給うか最も良く知り給う方であられる」（クルアーン第28章56節）
前記と同内容のハディースは、ズフリーによっても別の伝承者経路で伝えられる。
ただし、クルアーンのこれら二聖句に言及しない伝承者もあって、後半部分に表現上若干の差異がみられる。
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いは死の床に臥す彼の伯父にこういわれた
「『アッラー以外に神はない』と告白して下さい。
そうすれば私が審判の日にあなたがムスリムであることの証言者になります」
しかし伯父（アブー・ターリブ）はこれを拒否した。

この折、アッラーは次の聖句を啓示された。
「あなたが愛する者であっても、正しい道にあなたがその者を導き得るわけではない。
アッラーこそ人を思いのままに導き給う方であり、だれを導き給うか最も良く知り給う方であられる」（クルアーン第28章56節）
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いは臨終近い彼の伯父にこういわれた
「『アッラー以外に神はない』と唱えて下さい。そうすれば審判の日に私は、あなたがムスリムであることの証言者になります」
これに対しアブー・ターリブはいった
「死を恐れるあまり改宗したのだと私をクライシュ族の者らが非難する心配さえなければ、私はお前の言葉に従っただろうに」
この折、聖句が啓示された。
「あなたが愛する者であっても、正しい道にあなたがその者を導き得るわけではない。
アッラーこそ人を思いのままに導き給う方であり、だれを導き給うか最も良く知り給う方であられる」（クルアーン第28章56節）

アッラーに目見えることについて

信仰によってアッラーにお会いすることについて
1巻　P.45-51

ウスマーンによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「『アッラー以外に神はない』との真理を十分知って、死を迎える者は天国に入る」
フムラーンによると、ウスマーンはこう語った
「私はアッラーのみ使いが、（前記と同内容のハディースを）語るのを聞いた」
アブー・フライラは次のように語った
私たちは預言者と共にタブークへの遠征に参加した。
その途中食糧がほとんど尽き、状況が切迫した。
そのため人々は乗用らくだを食糧として屠殺することにした。
ここに至ってウマルはいった
「アッラーのみ使い様、どうか兵たちそれぞれの持つ僅かな食糧でも全部集め、あなたがその上にアッラーの加護を祈ってください」
預言者はそれに同意なさった。
そこで麦を持つものはその麦を、なつめの実を持つ者は、そのなつめの実をそれぞれ手にしながら寄り集まった。
ムジャーヒドによると、なつめの種を持参した者らもおり、なつめの種でどうするのかと聞かれた時、彼らは「これをしゃぶりながら水を飲むのだ」と答えたという。
（ともあれ）預言者はこれらの食糧の上にアッラーの恵みを祈った。
（するとその分量は奇跡的に増大し）人々は、食糧を十分に補充することができたのであった。
この時、預言者は次のようにいわれた。
「アッラー以外に神はなく、私はアッラーのみ使いであることを証言します。
（アッラーの）しもべにしてこれら二つに疑念を抱かず審判の日にアッラーにお会いする者は必らず天国に入れるであろう」
アブー・フライラ、または、アブー・サイードより聞いて、アアマシュはこう伝えている
タブーク遠征の折、食糧が欠乏し兵たちは飢えに苦しんだ。
彼らはアッラーのみ使いに乗用ラクダを殺して食糧としその脂肪を使いたいと許可を求めた。
み使いは「望むようにしなさい」とお答えになったが、ウマルがそこにきて次のようにいった
「アッラーのみ使い様よ、もし彼らにそれを許したら乗り物が足りなくなります。提言しますが、兵たちそれぞれに残っている食品を持ってくるように命じ、それらの食品にアッラーの恵みを祈って下さい。そうすればアッラーが加護を下さるに違いありません」
み使いはこれに同意なさった。
そして皮製のマットを持ってこさせ、それを敷いてから兵たちに食糧の残りを持って集まるよう命じた。

それで或る者は一握りの穀物やひとつかみのなつめの実などを持って集まった。
パンの切れ端を持って来る者もあった。
僅かずつ集まったこれらの食品はマットの上に置かれた。
み使いはこれら食品の上にアッラーの恵みを祈って後、こういわれた
「各自容器にいっぱい食品をとりなさい」
それで兵たちはそれぞれの容器に食物をあふれるばかりに満たしたが、一人として空の容器を持つ者はいなかった。
彼らは腹一杯食事をしたが、マットの上にはまだ余りが残されていた。
み使いはこの折、次のようにいわれた。
「アッラー以外に神はなく、私はアッラーの使徒であることを証言します。まことにこの二つに疑念を抱くことなくアッラーにお会いすることを願う者は、天国から決して遠ざけられることはないであろう」
ウバーダ・ビン・サーミトによれば、アッラーのみ使いはこういわれた
「『アッラー以外に神はなく、アッラーは唯一にして彼に比肩すべきものはない。
ムハンマドはアッラーのしもべにして使徒である。
イエスもまたアッラーのしもべ、そのしもべ女の息子であり、アッラーがマリアを介して伝達されたそのみ言葉、その精霊である。
天国は存在し地獄もまた存在する』と証言する者を、アッラーはそれぞれの望みのまま八つの門のどれからでも天国にお入れになる」
前記と同内容のハディースは、ウマイル・ビン・ハーニーによっても伝えられている。
ただしこれには「アッラーは（これらの真理を確信する者を）八つの門のどれからでも望みのまま天国に入らしめ給う」という表現はみられない。
スナービヒーはこう伝えている
彼は死の床にあったウバーダ・ビン・サーミトを見舞い悲しみ泣いた。
これに対しウバーダは次のように述べた。
「落着きなさい。どうして悲しむのですか。
アッラーに誓って、もし私が証言を求められたらあなたが信者たることを必ず証言します。
また、もし執り成しを求められたならば、あなたのために必ず執り成しを致します。
そして、もし他にもできれば、あなたのために役に立ちたいと思います」
それから彼は言葉を続けていった
「アッラーのみ使いから私が聞いた話はあなた方にとっても有益であり私はその全てを話しましたが、まだ一つだけ残っています。
私はもうすぐ死ぬ身でもあり、今話しておきましょう。
み使いは次のようにいわれました。
『アッラー以外に神はなく、ムハンマドはアッラーのみ使いであることを証言する者に対し、アッラーは地獄の日を禁じ給うだろう』と」
ムアーズ・ビン・ジャバルはこう伝えている

私は、ろばの背で預言者のすぐ後に座り、間には鞍の一部がみえるだけだった。
預言者はこの折「ムアーズ・ビン・ジャバルよ！」とお呼びになった。
私は「アッラーのみ使い様、あなたのお側におります。なんなりとお申しつけ下さい」と答えた。
同じことがしばらく間をおいて二度ほど繰り返された後、預言者はこういわれた
「あなたはアッラーが、どのような権利をしもべらに要求なされたか知っていますか」
私はこれに対し「アッラーとそのみ使いが最もよくご存知です」と答えた。
預言者は「アッラーがしもべらに要求した権利は、しもべらがアッラーを崇め、アッラーになにものをも混えてはならないということです」といわれた。
その後、しばらくして預言者は「もしもアッラーをなにものをも混えることなく信仰した場合、しもべらがアッラーに要求すべき権利は何か知っていますか」と問いかけられ、「知りません」と私が答えると「それはアッラーが彼らを（地獄の業火で）苦しめないようにと願うことです」といわれた。
ムアーズ・ビン・ジャバルはこう伝えている
私はウファイルという名のろばの背でアッラーのみ使いの後に座った。
この折、み使いはこういわれた
「ムアーズよ、あなたはしもべらに対するアッラーの権利と、アッラーに対するしもべらの権利について知っていますか」
私が知りませんと答えると、み使いはこういわれた
「しもべらに対するアッラーの権利は彼らがアッラーのみを崇拝し、アッラーに対しなにものをも同位者としないことです。尊きアッラーに対するしもべらの権利は、アッラーになにものをも混えない者を罰しないことです」
ムアーズがみ使いに対し「この喜ばしい教えを人々に知らせてもよいですか」とたずねると、彼は「誰にも話してはならない。人々が（イスラームの）これ以外の教えを守らなくなる恐れがあるからです」といわれた。
ムアーズ・ビン・ジャバルによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「ムアーズよ、あなたはしもべらに対するアッラーの権利を知っていますか」
ムアーズが「知りません」と答えると、み使いはいわれた
「アッラーのみを崇拝すべきで、なにものをも彼の同位者としてはならないことです」
更にみ使いは「もしも、しもべらがその通りに行った場合、アッラーに対するしもべらの権利はなんですか」とおたずねになり、私が「知りません」と答えると、「アッラーが彼らを罰しないことです」といわれた。
アスワド・ビン・ヒラールによると、ムアーズはこう伝えている
アッラーのみ使いが、私の名をお呼びになった。
私が答えると「あなたは、人々に対するアッラーの権利について知っていますか」といわれた。
これ以下の記述は、前記のハディースと同内容である。
アブー・フライラはこう伝えている

私たちは、アッラーのみ使いのまわりに座り、アブー・バクルやウマルも一緒だった。
しばらくしてみ使いは立ち上り、外に出て行ったまま、長い間帰って来なかった。
そのため、私達は「誰も彼について行かなかったために敵にとらわれたのではないか」と心配しだした。
不安になって私たちは立ち上がったが、最初に危惧しだしたのは私だった。
それで私は、み使いを探しに外に出て、アンサールの居住区にあるバヌー・ナッジャール所有の庭園に行き、その門のあたりまでみてまわったが誰もいなかった。
しかし外部の井戸から庭園にひき込まれた小川（ラビィウ）が見えたので、私はそれにひかれきつねのようにそっと近づいて行った。
すると、そこにみ使いがおられたのだった。
み使いは「アブー・フライラか」といわれた。
私が「そうです」と答えると、また、「どうしたのだ」といわれた。
私は「あなたが私共のところから立って出て行かれ、長い間帰って来ないので、誰もいない処で敵にとらわれたのではないかと不安になりました。
私が最初にそのような危惧にとらわれたのです。
それで私は庭園に来て、丁度きつねがやるように、そっと近づいたのです。
仲間らもすぐにここにやって参ります」と答えた。
み使いは「アブー・フライラよ」と呼ばれ、履物を私に下さってからこういわれた
「私のこれらの履物を持って行きなさい。
そしてこの庭園の外で、アッラー以外に神はないと真実証言するものがいたら、その者は天国に入れることを伝え喜ばせてあげなさい」
さて、私が会った最初の人物はウマルでした。
彼はそれらの履物は何かと私にたずねたので、私は次のように答えた。
「これはみ使いの履物です。
これらと共に彼は、アッラー以外に神はないと心の底から証言するものは誰でも天国に入れるという良き知らせを告げることを私に託したのです」
この時ウマルが、突然私の胸を強く押したので、私はひっくりかえってしまった。
彼はいった「アブー・フライラよ。戻りなさい」
私はみ使いのところへ戻ったがほとんど泣き出さんばかりでした。
ウマルは私のすぐ後についてきた。
み使いが「どうしたのか」といわれたので、「ウマルに出会いアッラーのみ使い様が私に託した朗報を彼に話したところ、彼は私の胸をたたかい後にひっくりかえらせ、ここに戻るようにと命じたのです」と告げた。
これに関してみ使いは「どうしてそのような事をしたのか。ウマルよ」といわれた。
ウマルはこれに答えて「アッラーのみ使い様、父母にかけて申し上げますが、あなたは、アブー・フライラに履物をもたせて、アッラー以外に神はないと心の底から証言する者に会ったら誰でもその者は天国に入れるという良き知らせを託したのですか」とたずねた。

み使いが「その通りです」とお答えになると、ウマルは次のようにいった
「どうか、そのような事はなさらないで下さい。
なぜならば、私は人々がただその事だけを信ずるのを心配するからです。
彼らに善行を奨励して下さい」
み使いはウマルの言葉に同意され「そう勧めよう」といわれた。
アナス・ビン・マーリクはこう伝えている
アッラーの預言者はムアーズ・ビン・ジャバルに対し、彼が預言者の後で共にろばの背中に乗っていた時、「ムアーズよ」と呼びかけられた。
ムアーズは「あなたのお側におります。何なりとご用命下さい」と答えた。
このことが三度繰り返された後、アッラーのみ使いは次のようにいわれた
「アッラー以外に神はなく、ムハンマドは神のしもべであり、神の使徒であると心底から証言する者であれば、誰でもアッラーにより地獄の業火から守られるであろう」
これに対しムアーズが、「その事実を人々に知らせて喜ばせてはいけませんか」といったところ、み使いはこういわれた
「もし、彼らに知らせたならば、彼らはただそれだけに頼ることになるだろう」
ムアーズは、この話を彼の死の床において初めて語ったのであるが、それは人々に誤ちを犯させないためであった。
イトバーン・ビン・マーリクはマディーナへ来て、こう語った
何かの原因で私の視力が悪化した。
そこで私はアッラーのみ使いに次のように記した手紙を送った
「私はあなた様が私の家においで下さることを心より願っております。あなたのご出席のもとに礼拝を行うその場所を、私は祈りの場にしたいと思います」
預言者はそこにおいでになり、また、アッラーがお望みになった教友の何人かも共にやってきた。
預言者は家にお入りになり礼拝をなされた。
彼の教友たちは仲間同志で話を始め、話題はマーリク・ビン・ドゥフシャムにおよんだ。
彼らは、預言者がマーリクを呪って死に到らしめるか、または、災難に会わせるよう神アッラーに祈願すればよいのにと話していた。
この間にアッラーのみ使いは、礼拝を終え、次のようにいわれた
「マーリク・ビン・ドゥフシャムは、アッラー以外に神はなく、私がアッラーのみ使いであることを証言しないのですか」
これに対し「彼は勿論証言は致しますが、しかし、決して心底からのものではありません」と彼らが答えると、み使いは「アッラー以外に神はなく、私がアッラーのみ使いであると証言する者は、地獄に入ることはなく、業火もその者を焼き尽くすことはないであろう」といわれた。
アナスはこれに関連し、次のように述べている
「このハディースを聞いて私は非常に感動しました。それで私は息子にこれを書きとどめるように命じました」

アナスによると、盲目のイトバーン・ビン・マーリクはこう伝えている
私はアッラーのみ使いに手紙を送り、私の家に来て、礼拝場所を定めて下さるようお願いした。
それで、み使いは教友ら共々、私の家に来られたが、その時、マーリク・ビン・ドゥフシャムという人物について教友の間で論議がかわされた。
以下は前記と同内容のハディースである。

信仰の喜びについて

信仰の喜びについて
1巻　P.51

アッバース・ビン・アブドル・ムッタリブによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「信仰の喜びを味わうとは、アッラーを主と崇め、イスラームの教えを日々の導きとし、ムハンマドをアッラーのみ使いと信じることである」

イマーンの種類について

イマーンの種類について
1巻　P.52-53

アブー・フライラによると預言者はこういわれた
「信仰（イマーン）には70以上の種類がある。謙譲も信仰の一つである」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「信仰には70以上、もしくは、60以上の種類がある。
その最善なるものは、アッラーの外に神はないと証言することであり、最も小なる信仰とは道路から邪魔になる者を片付ける行為である。
謙譲も信仰の一つである」
サーリムはその父から聞いてこう伝えている
預言者は、或る男がその弟に謙譲について教えているのを聞き、こういわれた。
「謙譲は信仰の一つである」
ズフリーは前記と同内容のハディースを伝え、次の表現を加えている
預言者は、たまたまアンサールのある男がその弟に謙虚さについて諭している時、その傍らをお通りになった。
イムラーン・ビン・フサインは、預言者の次の言葉を伝えた
「謙虚であれば善い結果が生ずるものです」
これに関連しブシャイル・ビン・カアブは「知恵の書　にも節制及び平穏は謙譲より生ずると記されています」と語ったが、イムラーンは「私はあなたにアッラーのみ使いの言葉を伝えているのに、あなたはあなたの読んだ本について話しておられる」といって彼を咎めた。
カターダはこう伝えている
私達は、イムラーン・ビン・フサインと一緒に座っていた。
そこにはブシャイル・ビン・カアブもいた。
イムラーンは、アッラーのみ使いが或る時お話しになった「謙虚さは完全なる善行である」もしくは「謙虚さは善行を完全にする」という言葉について語った。
これに関してブシャイル・ビン・カアブはいった
「或る種の書物、または、知恵の書には、謙虚さが心の平穏やアッラーに対する分別を生ぜしめるとあり、また謙虚さには弱点もあると記されている」
この言葉にイムラーンは両眼が赤くなるほど怒って「私がアッラーのみ使いのハディースをあなたたちにお話ししているのに、あなたはそれに相反することを述べようとしているではないか」といった。
私（カターダ）が思うに、イムラーンはアッラーのみ使いのハディースを語ったのに対し、ブシャイルはそれと同じ類の一般的な話をしたためイムラーンが怒ったのである。
それで私たちは、イムラーンに対し「アブー・ヌジャイドよ（イムラーンの呼び名）ブシャイル

は私たちの仲間であり、なにも間違った事を述べたわけではない」といってなだめた。
前記と同内容のハディースは、イムラーン・ビン・フサインによっても伝えられている。

イスラームの重要な教えについて

イスラームの最重要な教えについて
1巻　P.53

スフヤーン・ビン・アブドッラー・サカフィーは伝えている
私はアッラーのみ使いにこういった
「あなたが亡き後（もしくはあなた以外に）イスラームに関して誰にも質問する必要のないほどに重要な事項を教えて下さい」
これに対しみ使いは「アッラーを信じます　と唱え、それを固く守っていくことです」といわれた。

イスラームの長所に関して
1巻　P.53-54

アブドッラー・ビン・アムルはこう伝えている
或る男がアッラーのみ使いに「イスラームの長所はどんな点にありますか」とたずねた。
み使いはこれに対し「食物を分ち合い、知っている者や知らぬ者の区別なく挨拶を交わす点です」とお答えになった。
アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースはこう伝えている
或る男がアッラーのみ使いに「どんなムスリムがよいムスリムですか」とたずねた。
これに対しみ使いは「言葉によってでも、手によってでも他人を平安にする人がよいムスリムです」といわれた。
ジャービルによると、預言者はこういわれた
「ムスリムとは、手によってでも、言葉によってでも他のムスリムたちを安んずる人のことです」
アブー・ムーサー・アシュアリーは伝えている
私はアッラーのみ使いに「イスラームの何が最も秀れている点ですか」とたずねた。
これに関しみ使いはこういわれた「お互いの言葉と行動によってムスリムたちが守られ、安全である点です」
ブライド・ビン・アブドッラーは、これと同内容のハディースを伝えているが、それに次の表現がみられる。
「アッラーのみ使いは『どんな人たちがよいムスリムですか』と質問された」

信仰の真髄について
1巻　P.54-55

アナスによると、預言者はこういわれた
「信仰の素晴らしさを見出した者は誰でも三つの特長をもっています。
第一は、彼にとってアッラーとそのみ使いは他のいかなるものより尊いこと、
第二は、アッラーの教えに従って他人をも愛すること、
第三は（アッラーを信ずる故に）地獄の業火に投げ入れられることなく救われたのであるから、不信者に戻ることを嫌うことです」
アナスによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「信仰の真髄を知った人はだれでも三つの信条を身につけている。
アッラーのためのみに人を愛すること、彼にとってアッラーとそのみ使いはだれよりも尊い存在であること、アッラーを信ずる故に救われたのであるから不信の徒に戻るよりは業火の中に投げこまれる方をよしとすることである」
アナスによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。
それには「不信の徒に戻るよりは」の代りに「再びユダヤ教徒、または、キリスト教徒になるよりは」という表現がみられる。

預言者を愛することについて
1巻　P.55

アナスによれば、アッラーのみ使いはこういわれた
「いかなるしもべであれ（アブドル・ワーリスによれば、“いかなる人であっても”）私をその家族、財産、あるいは、全人類よりも愛するようにならない限りイスラームの信仰者とはいえない」
アナス・ビン・マーリクによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「あなた方誰もが、私をあなた方の子供、父親、あるいは全人類よりも大切な存在と考えるようにならない限り、イスラームの信仰者とはいえません」

同胞愛について

同胞愛について
1巻　P.54-55

アナス・ビン・マーリクによると、預言者はこういわれた
「あなた方が自分自身を愛するように、兄弟や隣人を愛するようにならない限り、まことの信仰を持つとはいえません」
アナスによれば、預言者はこういわれた
「私の命を司る方に誓って申しますが、自分のためになるものを隣人のため、もしくは、兄弟のためにも役立てようとしない者は、まことの信仰を持つとはいえません」

隣人を傷つけぬことについて

隣人を傷つけぬことについて
1巻　P.56

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「隣人を不当な行為でおびやかす者は、天国に入ることができない」

隣人や弱者への寛容について

隣人や弱者に寛大であることについて
1巻　P.56-57

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「アッラーと審判の日を信ずる者は、良き言葉のみを語るか、さもなければ、沈黙を守りなさい。また、アッラーと審判の日を信ずる者は、隣人に対し寛容をもって接しなさい。そしてまた、アッラーと審判の日を信ずる者は、客人に対し十分な親切を尽くしなさい」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「アッラーと審判の日を信ずる者は、隣人を傷つけてはなりません。アッラーと審判の日を信ずる者は、客人に対し寛容を示すべきです。そしてまた、アッラーと審判の日を信ずる者は、良き言葉を話すか、さもなければ、沈黙を守るべきです」
アブー・ハシーンの伝えるハディースも以下の言葉を除き、前記のアブー・フライラによるものと同内容である。
アッラーの使徒はこういわれた
「アッラーと審判の日を信ずる者は、隣人に親切を尽くすべきです」
アブー・シュライハ・フザーイーによると、預言者はこういわれた
「アッラーと審判の日を信ずる者は、隣人に親切を尽くすべきです。アッラーと審判の日を信ずる者は、客人を歓待すべきです。そしてまた、アッラーと審判の日を信ずる者は、良きことを語るか、さもなければ、沈黙を守るべきです」

嫌悪すべきものの排除について
1巻　P.57-58

ターリク・ビン・シハーブはこう伝えている
イード（大祭）の礼拝前に、フトバ（説教）を行う習慣を始めたのはマルワーンであった。
ある男が立ち上がって「礼拝はフトバの前に行われるべきである」と抗議したのに対し、マルワーンは「その慣習は廃止された」と答えた。
これに関連して、アブー・サイードは次のように述べた
「この人物は、彼に課せされた義務を果たしたのである。私は、アッラーのみ使いが次のようにいわれるのを聞いたことがある。『あなた方がなにか嫌悪すべきものを見た場合、手でそれを排除すべきです。そしてもしも排除するために十分な力がない場合は、舌（言葉）でそれを行うべきです。そしてもしもそれすらもできない場合には、心の中でそれを拒否すべきです。それも、最もささやかな信仰の一端です』」
前記と同内容のハディースは、アブー・サイード・フドリーによってもマルワーンに関連する物語と共に伝えられている。
アブドッラー・ビン・マスウードによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「私以前に、アッラーによってそれぞれの国に遣わされた預言者は全て、人々の間に弟子たちと教友らを持ち、彼らは預言者の教えと命令に従ったのである。
その彼らのあとに、彼らが行わなかった事を話し、また、彼らが命じられなかったことを行う彼らの後継者たちが現われたのであった。
それらの者に対し、手を用いて反対した者は信仰者であった。
彼らに対し、舌をもって反対した者も信仰者であった。
そしてまた、彼らに対し、心でもって反対した者も信仰者であった。
それら以外の者には、唐がらしの種ほどの信仰すらもあったとはいえない」
これに関連しアブー・ラーフィは次のように述べている。
「私はこのハディースを、アブドッラー・ビン・ウマルに話したが、彼はこれを否定した。
その時、たまたま、アブドッラー・ビン・マスウードがカナートに滞在していたので、アブドッラー・ビン・ウマルは私と共に彼を訪問することを望んだ。
それで、私は、彼について行き、イブン・マスウードの前に座って、このハディースに関して質問した。
彼は、私がイブン・ウマルに告げたのと同内容のハディースを物語ってくれた」
なおアブドッラー・ビン・マスウードによるこれと同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられ、それには次の表現がみられる。
「預言者の中でその指導に従い、その教えを守る弟子たちを持たない者はいなかった」
以下は前文と同内容であるが、ただし、イブン・マスウードの滞在や彼とイブン・ウマルとの会

見については言及されていない。

イエメン人の信仰に関して

イエメン人の信仰に関して
1巻　P.58-59

イブン・マスウードによると、預言者は、イエメンの方角を手で指し示しながら、こういわれた
「イマーン（信仰）はこの方角の人々にある。心情の冷酷さ、粗雑さは、らくだを尻尾の後で追い立てる飼主らの間で見られる。そこでは悪魔（シャイターン）が両角をむきだしている。彼らはラビーアとムダルの両部族である」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「イエメン人らがやってきたが、彼らは、心情のやさしい人たちである。信仰はイエメン人らに根ざし信仰の理解もイエメン人らに深い。そしてまた、イエメン人らは十分な賢明さを備えている」
アブー・フライラは、前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えている
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「あなたたちの処にイエメン人らがやってきたが、彼らは心やさしく、感情が豊かな人たちです。イエメンの人たちは信仰をよく理解しており、十分に賢さを備えている」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「最も不信なる者たちが東方にある。傲慢、自惚れは天幕住いの馬やらくだの飼育者らの間に見られる。一方静穏さは、やぎや羊を飼育する人たちに見られる」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「信仰はイエメン人らの間にあり、不信は東方にある。静穏さは、やぎや羊の飼育者の中にあり、高慢と偽善は馬やらくだの飼育者の間に見られる」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「傲慢と偽善がらくだの飼育者らに見られ、静穏さはやぎや羊の飼育者の間に見られる」
前記と同内容のハディースがズフリーによっても伝えられ、それには次の言葉が付加されている
「信仰はイエメン人らにあり、聡明さもイエメン人らにある」
アブー・フライラによると、預言者はこういわれた
「イエメン人らがやってきたが、彼らは感情が細やかで、心やさしい人たちである。信仰はイエメン人らにあり、聡明さもイエメン人らにある。
静穏はやぎや羊の飼育者らの中に見られる。
一方、高慢、偽善はらくだの飼育者らの間に見られ、彼らは日の昇る方角にテント住いをする者たちである」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「あなたたちのところにイエメン人らがやってきたが、彼らは心やさしく柔和な人たちである。
信仰はイエメン人らにあり、彼らは聡明さを備えている。
一方、不信の最たる者らは東の方角にいる」

前記と同内容のハディースは、アアマシュによっても別の伝承者経路で伝えられるが、「不信の最たる者らは東の方角にいる」という表現はみられない。
シュウバの伝えるハディースは、前記と同内容であるが次の言葉が付加されている
「傲慢と偽善はらくだの飼主らの間に見られる。平穏と誠実は羊の飼主の間に見られる」
ジャービル・ビン・アブドッラーによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「野卑な心情と傲慢さは東方の人々の間にあり、信仰はヒジャーズ地方の人々の間にある」

「不信者は天国に入れぬ」に関して

信者以外は天国に入れないことに関して
1巻　P.60

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「信仰心を持たぬ限り、誰も天国に入ることはできない。また、お互いが愛し合わない限り、信仰心を持つとはいえない。
そうすることで互いに親愛感を育てる方法を私はあなた方に教えなかったですか。
それは、お互いがアッサラーム・アライクム！（あなた方の上に平安を！）と言って挨拶を交わすことです」
ジャリールはアアマシュからきいてアッラーのみ使いの言葉をこう伝えている
「私の生命を手にしておられる方に誓って。信仰がなければ、あなた方は天国に入ることはできない」
なお、このハディースの他の部分は前記と同内容である。

誠実な信仰に関して
1巻　P.61

タミーム・アッダーリーによると、預言者はこういわれた
「アル・ディーン（宗教）とは真摯たることを意味する」
これに関し、私たちが「誰に対してですか」とおたずねしたところ、預言者は「アッラー、その経典、そのみ使い、そして、ムスリムの指導者たち、及び一般のムスリムに対してです」といわれた。
タミーム・アッダーリーによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。
タミーム・アッダーリーによる前記と同内容のハディースは、更に別の伝承者経路でも伝えられている。
ジャリールはこう伝えている
私はアッラーのみ使いに、礼拝を守り、ザカートを払い、そして、全てのムスリムに対し誠意を尽くすことを誓った。
ジヤード・ビン・イラーカはジャリール・ビン・アブドッラーがこう話すのを聞いた
「私は預言者に、全てのムスリムに対し誠意を尽くすことを誓った」
ジャリールはこう伝えている
「私は預言者に対し、よく教えを聞きそれに従うことを誓った。預言者は私に対し、全てのムスリムのためにできる限り、誠意を尽くすようにと教示なさった」

不信者の行為について

不信者の行為に関して
1巻　P.61-63

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「姦通者が姦通を続ける限り信者ではない。
窃盗者が窃盗を続ける限り信者ではない。
大酒飲みが酒を飲み続ける限り信者ではない」
伝承者の一人は父親から聞いてこのハディースを語り次のようにいった
「アブー・フライラはこう付言している『人々の注目を集めるほど高価な品物を略奪する者は、その行為を続ける限り信者ではない』」
アブー・バクル・ビン・アブドル・ラフマーンはアブー・フライラから聞いてこう伝えている
アッラーのみ使いはいわれた「姦通者が姦通を続ける限り」
以下は前記と同内容のハディースである。
ただし"略奪"という言葉はみられるが“高価な品物”という表現はない。
なお、イブン・サイード・ビン・ムサイブとアブー・サラマがアブー・フライラから聞いて伝えるハディースには“略奪”という表現はみられない。
アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、アブー・バクル、及びズフリーによっても伝えられている。
なおそれには"略奪"という言葉はあるが“高価な品物”という表現はみられない。
前記と同内容のハディースは、フマイド・ビン・アブドル・ラフマーンやハンマーム・ビン・ムナッバによっても別々の伝承者経路で伝えられている。
アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられるが、中には「人々の注目を集めるほど」との表現がみられないものもある。
ハンマームによるハディースには「信者たちを注視させる」また「略奪を続ける限り信者ではない」更にまた「搾取者はその行為を続ける限り、信者ではない。それ故、これらの悪を避けよ」などの言葉が付加されている。
アブー・フライラは預言者の言葉をこう伝えている
「姦通者は、その行為を続ける限り信者ではない。窃盗者は窃盗を続ける限り信者ではない。酒飲みはそれを飲み続ける限り信者ではない。その罪を懺悔する者は後に許されるであろう」
ザクワーヌはアブー・フライラより聞いて、前記と同内容のハディースを伝えている。

偽善者の特徴について
1巻　P.63

アブドッラー・ビン・アムルによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「次の四つの特徴を持つ者は、全くの偽善者である。
これらを一つでも持つ者は、それを棄てぬ限り偽善者であり続けるだろう。
それらは、話せば嘘を言い、同盟すればそれを裏切り、約束をすればそれを破り、争い事になると不正を行う者たちである」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはいわれた
「偽善者には三つの特徴がある。それらは、話す時嘘言を口にし、約束事にはそむき、信頼されるとそれをあざむくことである」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはいわれた
「偽善には三つの特徴がある。それらは、話す時嘘を言い、約束するとそれにそむき、信頼されるとそれを裏切ることである」
アラー・ビン・アブドル・ラフマーンは前記と同内容のハディースを伝え、更にこう付言している
「（前述の）三つが不信者の特徴である。たとえ彼が断食や礼拝を行い、ムスリムであると主張したとしても」
前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝わっている。

同胞を不信者と呼ぶ者に関して

ムスリム同胞を不信者と呼ぶ者に関して
1巻　P.63-64

イブン・ウマルによると、預言者はこういわれた
「或る人が信仰上の兄弟の一人を不信者であるといったとすれば、（少なくとも）その二人のどちらかは不信者であるに違いない」
イブン・ウマルによれば、アッラーのみ使いはこういわれた
「或る人が兄弟を、不信仰者と呼ぶ場合、そのどちらかは不信の徒であるに相違ない。
不信者と呼ばれたとしてもそれが真実でない場合は、その言葉を口にした者にその非難は返ることになろう」

父親を否認する者の信仰について

父親を否認する者の信仰について
1巻　P.64-65

アブー・ザッルによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「自分の父親以外の人物を、承知の上で父親であると主張する者は、不信の徒以外の何者でもない。
また、実際は自分のものでもないのにその権利を主張する者は、我らの仲間ではない。
そのような者は地獄に住むことになろう。
また、誰かを事実でもないのに、不信者、もしくは、アッラーの敵と呼ぶとすれば、その言葉は当人に戻ってくることだろう」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはいわれた
「自らの父親を嫌ってはならない。自らの父親をうとむ者は不信仰の罪を負うことになろう」
サード・ビン・アブー・ワッカースによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「自分の本当の父親でないことを知りながら、他の人を父親であると偽って主張する者は大罪者に相当し、天国は彼には禁じられる」
アブー・バクラ・サカフィユもまた、アッラーのみ使いからこれと同内容のハディースを聞いたと述べている。
サード及びアブー・バクラはそれぞれこう伝えている
私の両耳が聞き私の心が記憶しているが、ムハンマド様はこういわれた
「事実を知りながら、自分の父親以外の人物を父親であると主張する者に天国は禁じられている」

同胞を非難することについて

ムスリム同胞を非難することについて
1巻　P.65

アブドッラー・ビン・マスウードによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「同胞のムスリムを非難することは不法であり、ムスリム同志が相争うのは不信行為である」
ズバイダによれば、アブー・ワーイルもこのハディースをアブドッラーから伝えられている。
アブドッラーによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

同胞間の争いについて

ムスリム同志の争いは不信行為であることについて
1巻　P.65

ジャリール・ビン・アブドッラーは伝えている
預言者は最後の巡礼の折、彼に人々を沈黙させるようにお命じになって後こういわれた
「私の亡き後、互いに殺し合うような不信者に戻ってはならない」
前記と同内容のハディースは、イブン・ウマルによっても別の伝承者経路で伝えられている。
アブドッラー・ビン・ウマルによると、預言者は最後の巡礼の折こういわれた
「注意せよ！（もしくは、心せよ！）　私の亡き後、互いに相争う不信者に戻ってはならない」
前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

中傷や悲嘆に関して

中傷や悲嘆に関して
1巻　P.65-66

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはいわれた
「二つの事柄が不信者に近い者らの間に見られる。それらは他人の血統を中傷したり、死者を過度に悲嘆することである」

逃亡奴隷について

逃亡奴隷を不信者と呼ぶことについて
1巻　P.66

ジャリールによれば、預言者はこういわれた
「逃げ出した奴隷は、主人のところに戻らぬ限り、背信行為を犯すことになる」
マンスールはこれに関連し、次のように述べている
「アッラーに誓って、このハディースは、預言者の語られたものである。
しかしながら、バスラで私の口から、このハディースが人々に伝えられるのを私は喜びとしない（注）」
（注）当時バスラでは、ハワーリジュ派が勢力を占め、この派の信奉者以外を不信者として非難していた。
マンスールは使徒の言葉がハワーリジュ派の見解と同一視されるのを恐れたのである
ジャリールによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「逃げ出した奴隷の主人は、その奴隷に関する一切の責任を免除される」
ジャリール・ビン・アブドッラーによれば、預言者はこういわれた
「奴隷が主人のところから逃亡した時、その奴隷の祈りは受入れられない」

星座を信仰する者について

星座を信仰する者について
1巻　P.66-68

ザイド・ビン・ハーリド・ジュハニーは伝えている
アッラーのみ使いはフダイビーヤで早朝礼拝を為さった。
その折、前夜来の降雨の跡がみられた。
礼拝後、み使いは人々に向かい「あなた方には、私たちの主が何をいわれたかわかりますか」と問われた。
彼らが「アッラーとそのみ使いのみが最もよく御存じです」と答えると、み使いはこう話された。
「アッラーは『私のしもべらの中には、私を信仰する者と不信なる者とがある。アッラーの加護と慈悲によって降雨があったと述べる者は、私を真に信仰する者であり、星座を崇拝する者らではない。そして、これこれの星の動きの故に降雨があったと語る者は、私への信仰を持たず、星座を信ずる者らである』といわれた」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはいわれた
「あなた方には主が何をいわれたか、わかりませんか。主はこういわれたのです
『しもべらの中でいつも、星座であるとか星座によるとか語っている一部の不信者らに対し、私はなんらの恩寵も与えないであろう』と」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「アッラーは（彼の加護を）信ずることなく、朝を迎える者らに対し、決して恩寵を天から下し給わないだろう。彼らはアッラーが雨を降らしたのに、しかじかの星座がその原因であると話す者たちである」
イブン・アッバースによると、或る夜の降雨に関し、まだご存命であった預言者は、こういわれた
「人々の中にはアッラーへの感謝の念を持って朝を迎える者と、不信なまま朝を迎える者とがある。
感謝をもって朝を迎えた者は、これはアッラーの恩寵であると語り、恩知らずの者らは、しかじかの星座のおかげであると語っている。
次の聖句が啓示されたのはこの事に関してである。
「わたしは沈んでゆく星にかけて誓う。
それは、本当に偉大な誓いである。
もしあなた方に分かればよいのだが。
本当にこれは、非常に尊いクルアーンである。
（それは）秘蔵の啓典の中に書かれてあり、清められた者の外に触れることはできない。
万有の主からの啓示である。

これは、あなた方が軽んじるような教えであろうか。
また、あなた方は（それを）虚偽であると申し立て、あなた方の暮らしを立てるのか」（クルアーン第56章75-82節）

アンサールについて

アンサールについて
1巻　P.68-69

アナスによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「偽信者の証しは、彼らがアンサール（注）を嫌悪することであり、また信仰者の証しはアンサールを愛することである」
（注）アンサールとは、イスラーム初期マッカからの移住者ら（ムハージルーン）を助けたマディーナ在住のムスリムたちを意味する
アナスによると、預言者はいわれた
「アンサールを愛するのは信仰の証しであり、アンサールを憎むのは偽信の証しである」
バラーウによると、預言者はアンサールについてこういわれた
「信仰者の外に彼らを愛する者はなく、偽信者の外に彼らを嫌う者はいない。
彼らを愛する者をアッラーは愛し、彼らを憎む者をアッラーは憎み給う」
シュウバによると彼は、伝承者の一人アディユに対し「このハディースをバラーウから直接聞いたのですが」とたずねた。
すると彼は「バラーウが私に語ってくれたハディースです」と答えた　という。
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはいわれた
「アッラーと審判の日を信ずる者は、アンサールに憎しみを抱くことはない」
アブー・サイード・フドリーによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「アッラーと審判の日を信ずる者はアンサールを決して憎むことはない」
ジッルによると、アリーはこう語った
「種子を散らし、様々な生き物を創り給うた方に誓って。（文字知らずの）預言者は、かつて私に関しこう述べられた。信仰者はアリーを愛し、偽信者はアリーを憎むであろう」

信仰に欠ける女性について

信仰に欠ける女性について
1巻　P.69

アブドッラー・ビン・ウマルによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「女たちよ！　サダカを供し、神の許しを求め多く祈りなさい。私は数多くの女たちを地獄の住民の中に見ました」
一人の賢そうな女性が「み使い様、どうして、私たち女性が地獄に多いのですか」とたずねた。
これに対してみ使いは「あなた方には人を呪う者、また夫たちに忠実ではない者が多い。
私は女性ほど知性に欠け、信仰心が薄く、男たちのやさしい心情につけこむものを見たことがない」といわれた。
するとその女性は「私たちの知性や信仰で何がよくないのですか」と質問した。
み使いはこういわれた「あなた方の知性の不足は、二人の女性の証言が男性一人のそれと同等であるという事実からもわかります。
また、あなた方は何日も礼拝することなく過し、ラマダーン月でも日中の断食を守っていない。
これらが信仰心に欠けている証拠です」
これと同内容のハディースは、イブン・ハードによっても別の伝承者経路で伝えられている。
イブン・ウマルによる前記と同内容のハディースは、アブー・フライラによっても伝えられている。

礼拝を行わない者に関して

礼拝を行わない者に関して
1巻　P.69-70

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
アダムの子がスジュード（平伏叩頭）に関する聖句を唱え平伏叩頭した時、悪魔（シャイターン
）は、独りひきこもって泣きながらこういった。
『ああ！（アブー・クライブによると、ああ、悲しいかな！）
アダムの子は命ぜられるまま平伏叩頭したため、天国を約束された。
私は平伏叩頭するよう命ぜられても、それも拒んだために地獄に落とされるのである』
前記と同内容のハディースはアアマシュによっても伝えられているが、それには悪魔の言葉とし
て「私は命令に従わなかったために、地獄に落とされるのである」と記されている。
ジャービルによると、預言者はこういわれた
「まことに人々の中で、多神教徒や不信者は礼拝を行わぬ者らである」
アブー・ズバイルによると、ジャービル・ビン・アブドッラーはこう伝えている
私はアッラーのみ使いが次のようにいわれるのを聞いた。
「人々の中で多神教徒、不信仰者の輩は、礼拝を放棄した者たちである」

最善の行為について

アッラーへの信仰は最善の行為であることについて
1巻　P.70-72

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いは、最善の行為についてたずねられた時「それらはアッラーへの信仰（イマーン）、アッラーのための努力（ジハード）、更に規定に従った巡礼（ハッジ）である」とお答えになった。
なお、ムハンマド・ビン・ジャウハルによるハディースには、アッラーのみ使いの言葉は「アッラーとそのみ使いに対する信仰」であると記されている。
なおまた、これと同内容のハディースはズフリーによっても伝えられている。
アブー・ザッルは伝えている
私がアッラーのみ使いに「どのような行為が最善ですか」とたずねた時、み使いはこう答えられた
「アッラーへの信仰と、アッラーのためのジハードである」
私は更に「どのような奴隷を解放するのが最善でしょうか」とたずねた。
み使いはこれに対し「家族の役に立ち、しかも値段の高い奴隷が最善である」といわれた。
「もし私にそれができない場合には、どうすればよいのですか」とたずねると、み使いは「労務者を助けるか、もしくは不慣れな仕事をする者に役立ってあげなさい」といわれた。
私はいった
「み使い様、私は御覧のように弱くこれら全てを行うことはできません」
これに対しみ使いはいわれた
「他人に迷惑をかけぬよう慎しみなさい。それもあなたからのサダカ（施し）になります」
アブー・ザッルによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。
アブドッラー・ビン・マスウードによると、次の話が伝えられている
私はアッラーのみ使いに「どのような行為が最善ですか」とたずねた。
み使いは「定められた時刻の礼拝です」といわれた。
「次は何ですか」と繰り返したずねたところ、み使いはこういわれた
「両親への親切、アッラーに尽くすための努力（ジハード）です」
私はもっとたずねたかったが、み使いの迷惑を恐れ、質問をそれだけにとどめた。
アブドッラー・ビン・マスウードはこう伝えている
私が「アッラーの預言者様、どのような行為が人を天国へより近づけるのですか」とたずねたところ、預言者は「定めの時刻の礼拝です」といわれた。
「その次は何ですか」と繰り返したずねたところ、預言者は「両親への孝養とアッラーのための努力です」といわれた。
アブー・アムル・シャイバーニーはかつて、アブドッラーの家を指さしながらこう語った
この家の主人アブドッラーは、アッラーのみ使いに次のようにたずねたと私に語ったことがある

「『どんな行為がアッラーに愛されるのですか』これに対し、み使いは『定時刻の礼拝である』とお答えになり、『次は何ですか』と順次繰り返したずねたところ、『両親に対する善行、アッラーのためのジハードである』といわれた」
アブドッラーはまた、こうも語っていた
「これがアッラーのみ使いから私が聞いた話の全てであるが、もしも私が更に質問を続けたならばみ使い様は、もっと語って下さったに相違ありません」
前記と同内容のハディースは、シュウバによっても別の伝承者経路で伝えられ、それには「アブー・アムルはアブドッラーの家を指さしたが、彼の名前まではいわなかった」との言葉が付加されている。
アブドッラーによると、預言者はこういわれた
「もろもろの行為のうち最善なるもの、もしくは、最善の行為は定めの時刻における礼拝の遵守と両親への孝養である」

多神信仰に関して

多神信仰は最大の罪行であることについて
1巻　P.72-73

アブドッラーはこう伝えている
私がアッラーのみ使いに「アッラーの目からみて、最大の罪は何でしょうか」とたずねた時、彼は「あなた方を創ったアッラーに対し同格者を置くことです」といわれた。
「まことにそれは大罪です」と述べた後、私はそれに次ぐ大罪についてたずねた。
彼はこれに対し「食料不足への恐れから、あなた自身の子供を殺すことです」といわれた。
私は更に、これに次ぐ大罪について問うた。
すると彼は「あなたの隣家の夫人と姦通行為をすることです」といわれた。
アブドッラー・ビン・マスウードによると、或る男がこういった
「アッラーのみ使い様、アッラーの目からみて、何が最大の罪行ですか」
これに対し彼は「あなた方を創り給うたアッラーに対し、同格者を置くことです」といわれた。
その男が重ねて「次の大罪とはなんですか」と質問を繰り返したところ、
彼は「食料不足への恐れから、あなた自身の子供を殺すことです。
更にはまた、隣家の夫人と姦通することです」とお答えになった。
これに関連する証しとして、アッラーは次の聖句を啓示された。
「（信仰者とは）アッラーと並べて、外のどんな神にも祈らない者、正当な理由がない限り、アッラーが禁じられた殺生を犯すことなく、また姦淫しない者である。
だが凡そそんなことをする者は、懲罰される」（クルアーン第25章68節）

最大の罪行について
1巻　P.73-74

アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクラによると、彼の父はこう語った
私たちと一緒におられた時、アッラーのみ使いは「最大の罪行について、私はこれまで話さなかったのですか」と三度繰り返され、その後こういわれた
「それらはアッラーに対し同位者を置くこと、両親に従わぬこと、偽りの証言、もしくは、偽りの言葉を述べることです」
み使いは、初め背を後にもたれさせていたが座り直し、何度もこの言葉を繰り返していわれた。私たちは、もうおやめになればよいのにと思ったほどであった。
アナスによると、預言者は大罪についてこういわれた
「それらはアッラーに対し同位者を置くこと、両親に従わないこと、人を殺したり、偽りの言葉を口にすることである」
ウバイドッラー・ビン・アブー・バクルはこう語っている
私はアナス・ビン・マーリクから聞いたのであるが、アッラーのみ使いは大罪について人々から質問された時「大罪とはアッラーに同位者を置くこと、人を殺すこと、両親に従わないことである」といわれた。
み使いは更に続けて「私は次の罪行について話さなかったか」といわれ、「偽りの言葉、もしくは、偽りの証言も大罪に相当する」と付言された。
これに関連し、シュウバは「アッラーのみ使いがいわれたのは恐らく“偽りの証言”という表現だったに相違ない」と述べている。
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「七種の罪行を避けよ」。
人々が「それらはなんですか」とたずねると、アッラーのみ使いはこう述べられた
「アッラーに何ものであれ同位者をおくこと、魔術を信仰すること、正当な理由もなくアッラーの禁ずる殺人を行うこと、孤児の財産を横領すること、高利子を取ること、軍隊の進撃に参加しないこと、貞淑な女性信者を軽率に中傷すること　である」
アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「己れの両親を誹謗することは、大罪の一つです」
これに対し人々は「み使い様、己れの両親を誹謗する人がいるのですか」といった。
するとみ使いは「その通りです。なお、もし或る男が他人の父親を誹謗すれば、その人もこの男の父親を誹謗します。また他人の母親を誹謗すれば、その人もこの男の母親を誹謗するようになります」といわれた。
前記と同内容のハディースはサード・ビン・イブラヒームによっても、別の伝承者経路で伝えられている。

高慢さについて

高慢さを禁ずることについて
1巻　P.74-75

アブドッラー・ビン・マスウードによると、預言者はこういわれた
「心の中にからし種の実の重さほどでも高慢さを持つ者は、天国に入ることはできない」
或る男がこれに対し「ともすれば人はよい衣服や履物を好みそれを誇りたがるものです」と述べたところ、
預言者は更に「アッラーは確かに美しく、また自ら優美さを好まれる方です。
ただ虚栄心がもたらす高慢さは真実を軽んじ人々を軽蔑するもとになるものです」といわれた。
アブドッラー・ビン・マスウードによれば、アッラーのみ使いはこういわれた
「心の中にからし種の実ほどでも信仰を持つ者は、地獄に落ちることはない。
また、心にからし種の実ほどでも高慢さを持つ者は、天国に入ることはできない」
アブドッラーによれば、預言者はこういわれた
「心にからし種の実ほどでも高慢さをもつ者は、天国に入ることはないだろう」

天国や地獄に入る者について
1巻　P.75-76

イブン・ヌマイルによると、アッラーのみ使いはいわれた
「アッラーに何かを比肩させる者は地獄に落ちるであろう」
この言葉に関連し、アブドッラー・ビン・マスウードは「アッラーに何ものをも比肩させることなく、死んだ者は天国に入るだろう」と述べている。
ジャービルによると、或る男が預言者の処に来てこういった
「アッラーのみ使い様、義務として心得べき二つの重要な事柄は何ですか」
これに対し彼は「アッラーに何であれ同位者を置くことなく死ぬ者は天国に入り、アッラーに何ものかを比肩させる者は死後、地獄に落ちるということです」といわれた。
ジャービル・ビン・アブドッラーによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「何ものも同位者を置くことなく、アッラーに会える者は天国に入り、アッラーに何かを比肩させる者は地獄に落ちるだろう」
ジャービルによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。
アブー・ザッルによると、預言者はこういわれた
「天使ジブリールが、私の処に来てよい知らせを伝えて下さった。
彼はこういった『あなたのウンマ（信仰共同体）の人たちで、アッラーに何であれ比肩することなく死ぬ者は、天国に入るだろう』と」。
私（アブー・ザッル）がこれに対し「姦通や盗みを行った者もですか」とたずねたところ、み使いは「その通りです。たとえ姦通罪や盗罪を犯した者であっても」といわれた。
アブー・ザッルはこう伝えている
私が預言者の処にきた時、彼は白い布を身体にかけて眠っておられた。
私は再度おたずねしたが、その時も眠っておられた。
しかし三度目におたずねした時には、起きておられたので私は彼のお傍に座った。
この折、預言者はいわれた「アッラー以外に神なしとの信仰を堅持するしもべで、その信仰のまま死ぬ者は、必ず、天国に入ることができる」
この時、私は「もし姦通や盗みの罪を犯した者でもですか」とたずねた。
預言者はこれに対し「その通りです。たとえ姦通や盗みの罪を犯したとしても」とお答えになった。
私は再び同じ質問を繰り返したが預言者は同じ答えを三度口にされ、四度目に「たとえアブー・ザッルは納得しないとしても」といわれた。
なお、アブール・アスワドは、アブー・ザッルはその場所から出て行きながら「たとえアブー・ザッルが納得しないにしても」というアッラーのみ使いの言葉を繰り返し唱していたと伝えている。

信仰告白を唱えた偽信者について

カリマ（信仰告白）を唱えた不信者について
1巻　P.76-79

ミクダード・ビン・アスワドはアッラーのみ使いにこう質問した
「み使い様、もし私が戦場で不信者の一人と出会い、その後が私と闘い、剣で私の一方の手を切り落とし、その後になって、私の攻撃から身を守るため木の陰にかくれながら『私はアッラーを信じムスリムになります』と述べたとします。み使い様、この場合、その言葉に構わず彼を殺してもよいのでしょうか」
これに対しみ使いは「彼を殺してはならない」とお答えになった。
私は続けてこういった
「み使い様、彼は私の手を切りつけ、そしてそれを切断した後に、この言葉を述べたのです。このような場合、彼を殺すべきではないでしょうか」
しかし、み使いはこういわれた
「殺してはいけない。もしあなたが彼を殺したならば、彼はあなたが彼を殺す前と同じ立場に付くことになり、あなたは彼が信仰告白（カリマ）をする前の立場に置かれることになります」
前記と同内容のハディースは、別の伝承老経路でも伝えられる。
なお、アウザーイとジュライジュによるハディースには、次の言葉が付加されている
「私はアッラーのため、イスラームを受入れます」
また、マアマルによるハディースには次の言葉がみられる
「私が彼を殺すため抑えつけた時、彼は『アッラー以外に神はない』といった」
バヌー・ズフラの同盟者でアッラーのみ使いと共に、バドルの戦闘に参加した者の一人ミクダードはこういった
「み使い様、次の場合どうお考えですか。もし私が戦場で不信者の一人と出会った時」
以下は前記と同内容のハディースである。
ウサーマ・ビン・ザイドはこう伝えている
アッラーのみ使いは、我々を襲撃隊として派遣なさった。
我々が朝ジュハイナのフラカートを急襲した時、私は一人の男を捕え、その男が「アッラー以外に神はない」と唱えたのも構わず槍で刺し殺した。
そのことを思い出したので私は預言者に正直に報告した。
するとみ使いは「アッラー以外に神はないと彼は唱えたのか、それにも拘わらずあなたは彼を殺したのか」といわれた。
私はこれに対し「み使い様、彼は殺されるのを恐れてその信仰告白を口にしたのです」といった。
しかしみ使いは「あなたは心の底からその告白がなされたのかどうか知るために彼の胸を切り裂いたのか」といわれ、何度もその言葉を繰り返された。

そのため私は、この事件以前にイスラームに改宗しなければよかったろうにと今更に省みたほどであった（注）。
これに関連しサードは「アッラーに誓って。たとえ、この太った人物（ウサーマ）が殺したとしても、私はいかなるムスリムをも殺すことはないだろう」と述べた。
また、この話に関連し、或る人が「アッラーはこう教えています。
（すなわち）「迫害がなくなって、この教義がアッラーのためになるまで、かれらに対して戦え」（クルアーン第2章193節）といった時、サードは「我々は迫害をなくすために戦った。
しかし、あなたやあなたの仲間たちは戦うことでかえって迫害をひきおこしているではありませんか」と述べた。
（注）イスラームに改宗することで、過去の罪か一切許されるためこういったのである
ウサーマ・ビン・ザイドはこう伝えている
アッラーのみ使いは、ジュハイナ部族の居住地フラカートに我々を派遣した。
我々は早朝この部族を襲い敗北せしめたが、この折、私とアンサール（マディーナ出身のムスリム）の一人は敵一名を捕えた。
我々が捕えた時、彼は「アッラー以外に神はない」と唱えたので私の仲間は手を止めたが、私は構わず槍で披を刺し殺した。
このことが預言者にすぐ伝わったため、我々が帰った時、預言者は私にむかってこういわれた。
「ウサーマよ、アッラー以外に神はない　と彼が告白したのにあなたは彼を殺したのか」
これに対し私はいった
「み使い様、彼はこの告白を難を逃れるため唱えただけです」
預言者はしかし「あなたは彼が、アッラー以外に神はない　と告白した後で彼を殺したのか」と私に何度も繰り返していわれた。
そのため、私はこの日以前にイスラームに改宗しなければよかったろうにと省みたほどでした。
サフワーン・ビン・ムフリズによると、イブン・ズバイルらの騒乱当時、ジュンダブ・ビン・アブドッラー・バジャリーは、アスアス・ビン・サラーマに使いを送ってこう述べた
「あなたの家族の人たちを集めなさい。話したいことがあります」
それでアスアスは使いを出し親族の者らをよび集めた。
彼らが集まった時、ジュンダブは黄色の頭巾付きマントを着、そこにやって来て「そのまま話し合いをつづけなさい」といったが、順番に話し手が変りジュンダブの番になった時、頭巾を脱いで次のように語り出した
「私があなた方の処に来たのは他でもなく、あなた方に預言者に関する次のハディースを伝えるためです。
（すなわち）アッラーのみ使いは或る多神教徒の部族にムスリムの小隊を派遣なさった。
両軍は相戦ったが、多神教徒軍の一人がまことに勇で目をつけたムスリムと戦う毎に必らず打ち殺した。
ムスリム軍中にもその男を倒そうとねらう者がいた。
我々はその者がウサーマ・ビン・ザイドであろうと話し合っていた。

（ともあれ）ウサーマがこの多神教徒の戦士と戦い剣を振り上げた時、彼は『アッラー以外に神はない』と唱えだしたがウサーマは、構わず彼を殺してしまった。
この勝利の吉報を伝える使いがみ使いの処に来た時、み使いは戦いの様子をおたずねになった。
それで使いの者は、ウサーマについて彼が行ったことを報告した。
そのためみ使いはウサーマをお呼びになり『どうしてその男を殺したのか』と質問なさった。
ウサーマは『み使い様、彼はムスリムを襲い、だれかれを殺したのです』といって殺された何人かの名をあげた。
そして続けてこう述べた
『私が彼に立ちむかった時彼は私の剣を見て“アッラー以外に神はない”と唱えたのです』
み使いはこれに対し『あなたは彼を殺したのか』といわれ、『その通りです』と答えると『もしその男が、審判の日にあなたの前にやってきた時、“アッラー以外に神はない”と唱えたことに関して、どう弁解するのか』といわれた。
ウサーマは『み使い様、アッラーに私への許しを祈って下さい』といったが、み使いはこれに答えずただ『審判の日にどうするつもりなのか』と同じ言葉を繰り返されるばかりだった」

ムスリムに敵対する者について

ムスリムに敵対する者について
1巻　P.79

アブドッラー・ビン・ウマルによると預言者はこういわれた
「我らにむかって武器を取る者は、我らの仲間ではない」
イーヤース・ビン・サラマはその父よりきいて、預言者の言葉をこう伝えている
「我らにむかって剣を抜く者は、我らの仲間ではない」
アブー・ムーサーによると、預言者はこういわれた
「我らにむかって武器をとる者は、我らの仲間ではない」

同胞に対し不誠実な者について

ムスリムに対し不誠実な者について
1巻　P.80

アブー・フライラによるとアッラーのみ使いはこういわれた
「我らにむかって武器をとる者は、我らの仲間ではない。我らに対して不誠実なる者は、我らの仲間ではない」
アブー・フライラはこう伝えている
或る時、アッラーのみ使いは穀物を積み重ねた場所の傍を通りかかった。
彼が手をその積み重ねた穀物の中にさし入れた時、指が水気でぬれた。
それで彼はその穀物の持主に対して「どうしたのか」とおたずねになった。
持主は「雨でびしょぬれになったのです」と答えた。
彼はこれに対し「どうしてあなたは、このびしょぬれになった穀物を上の方に出しておかないのか。そうすれば人々は、たやすく気がつくだろうに。このようにして他人をあざむこうとする者は、私の仲間とはいえない」と述べ注意なさった。

過度に嘆き悲しむことについて
1巻　P.80-81

アブドッラー・ビン・マスウードによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「自らのほほを打ち、シャッの前面を裂き、また、ジャーヒリーヤ時代（イスラーム以前）の人々がよく発したような叫び声をあげる者は、我らの仲間ではない」
なお、イブン・ヌマイル及びアブー・バクルの伝えるこれと同内容のハディースには、「裂き、そして叫ぶ者は」という表現がみられる。
前記と同内容のハディースは、アアマシュによっても伝えられ、それにも「裂き、そして叫ぶ者は」という言葉が記されている。
アブー・ブルダ・ビン・アブー・ムーサはこう伝えている
或る時アブー・ムーサーは激痛に苦しみ、失神して頭を彼の妻の膝の上に横たえていた。
妻の一人がこの折泣き叫んだが、彼は彼女に何もいうことができぬほどであった。
しかし痛みが少しおさまって後、彼はこういった
「私はアッラーのみ使いが無視なさった類の者を相手にしようとは思わない。
み使いは、悲しみの余り大声で泣き叫んだり、髪を切り取ったり、衣服をひき裂いたりする者を相手にはなさらなかった」
アブー・ブルダによるとアブー・ムーサが激痛のため気を失った時、彼の妻ウンム・アブドッラーがそこにきて大声で泣き叫んだ
アブー・ムーサはやや病がよくなった時「おまえは知らなかったのか」といってから「かつてアッラーのみ使いは『髪を切りとったり、大声で泣き叫んだり、また衣服をひき裂いたりして悲しむような女に私は関心をもたない』といわれた」と彼女に語って聞かせた。
アブー・ムーサーによる前記と同内容のハディースは、他にも三つの異なった伝承者経路で伝えられている。
その中には、アッラーのみ使いの言葉が「関心をもたない」ではなく、「そのような者は、我らの仲間ではない」となっているものもみられる。

噂話をいいふらすことについて

噂話をいいふらすことについて
1巻　P.81-82

フザイファは、出まかせ話を広める男の噂を聞いた時、アッラーのみ使いの言葉をこう伝えた
「悪い噂をいいふらす者（ナミーマ）は、天国に入れない」
ハンマーム・ビン・ハーリスはこう伝えている
噂話をいつも知事（アミール）に報告する男がいた。
ある日私たちがモスクにいた時、噂話を知事に報告すると人々がいっている当の男がやってきて私たちの近くに座った。
フザイファはこの折「『告げ口をするものは、決して天国に入れないであろう』とアッラーのみ使いがいわれるのを聞いた」と語った。
ハンマーム・ビン・ハーリスはこう伝えている
私たちがモスクでフザイファと一緒にいた時、一人の男がきて近くに座った。
誰かがフザイファに、この人物は権力者（スルターン）に噂話を告げ口する男であると話した。
フザイファは、この人物に聞かせたいと願いながら「私はアッラーのみ使いが『他人の噂をいいふらす者は、天国に入ることはない』といわれたのを聞いたことがある」と語った。

三種の人間について
1巻　P.82-83

アブー・ザッルによると、預言者はこういわれた
「三種の人間に対して、アッラーは審判の日、決して話しかけることも慈悲の目差しで見ることも、また、彼らを清めることもなさらず、彼らには厳しい罰が課せられるであろう」
アッラーのみ使いはこの言葉を三度繰り返された。
アブー・ザッルは「それでは彼らは救われず、全てを失うことになります。
一体どんな人たちですか」とたずねた。
み使いは「彼らとは、衣服をひきずりながら威張って歩く者、恩着せがましい者、偽りの言葉を述べたて品物を売る者のことである」といわれた。
アブー・ザッルによると、預言者はこういわれた
「次の三種の者らには、審判の日アッラーは何らの言葉も語りかけないだろう。
それらの者は、言葉だけで実際はなにも与えない偽慈善者、偽わりの誓いをいい立てながら品物を売る者、衣服をひきずって歩く威張屋である」
スライマーンは前記と同内容のハディースに以下の言葉を加え伝えている。
「次の三種の者らに対しアッラーは話しかけず、見ることもなく、彼らの罪を清めようともなさらない。
彼らは厳しい罰を受けることだろう」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「次の三種の者たちに対し、アッラーは審判の日、話しかけることも罪を清めてやることもなさらないだろう」
なお、アブー・ムアーウイヤは次の言葉を加えている。
「アッラーは彼らを見ようともなさらず彼らには厳しい罰があたえられるだろう。
その者らは分別あるべき年令の姦通者、嘘の多い統治者、そして、威張った態度の物乞いらである」
アブー・フライラによるとアブー・バクルの話として、アッラーのみ使いはこういわれた
「次の三種の者らに対し、アッラーは決して語りかけず、彼らを見ることも、また、彼らの罪を清めてやることもせず、彼らを厳しく罰することだろう。
彼らは十分に水を持ちながら、砂漠で他の旅人にそれを与えようとしない者、また、天使らが相集う聖なる日没前（アスル）礼拝後の時間に、人々に品物を売りさばき、
しかも『神に誓って。
その品物はこれこれの値段で購入したものだ』と嘘八百並べたてて買手を信用させる者、
更にまた、世俗の利益を目的に指導者（イマーム）に忠誠を誓い、その指導者が何か利になる物を与えた時に忠誠を尽しながら、もし何も与えない場合には誓いを守らない者らである」

前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられるが、それには「他人に品物を売るため駆け引きをする者」という表現がみられる。
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いは、こういわれた
「審判の日に、アッラーが話しかけることも、見ることもなさらず、厳しい罰のみを課する者に次の三種がある。
聖なる日没前（アスル）の礼拝の後、ムスリムの財産に関し取引き契約の誓いを述べておきながら、それを破る者」
以下の部分は、前述のハディースと同内容である。

自殺に関して
1巻　P.83-86

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「刃剣で割腹自殺した者は、地獄の火中でその刃剣を手にもって自らの腹を永久に刺し続ける者となるだろう。
また、毒を飲んで自殺した者は、地獄の火中で永遠に毒をすすり続ける者となるだろう。
更にまた、山頂から投身自殺した者は、地獄の火中を永遠に落ち続ける者となるだろう」
前記のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。
サービト・ビン・ダッハークによると、彼は或る木の下でアッラーのみ使いに忠誠を誓ったが、その折、み使いはこういわれた
「たとえ、偽りであっても、イスラーム以外の他の宗教に誓いを立てたとしたら、その宗教の信徒となるだろう。
また、何かの道具を用いて自殺した場合、審判の日にその道具によって罰を受けることになるだろう。
また、人は己の所有物以外を奉納物としてはならない」
サービト・ビン・ダッハークによると、預言者はこういわれた
「自己の所有物以外を奉納品としてはならない。信者を呪うことはその者を殺すことに等しい。
この世で、ある道具を用いて自殺した者は、審判の日にその道具で罰せられることになろう。
富を増やすため、偽りの主張をする者にアッラーは同情せず、かえってその富を減少せしめるだろう。
偽りの誓いをする者は報いを受けることだろう」
サービト・ビン・ダッハークによると、預言者はこういわれた
「イスラーム以外の宗教に入ることを誓った者は、たとえそれが意図的な似非誓言であっても、その宗教の信者とみなされよう。
また、何かの道具を用いて自殺した者に対し、アッラーは、地獄の火中でその道具を用いてこの者を罰するであろう」
なお、シュウバによるハディースには、アッラーのみ使いの言葉がこう伝えられている。
「イスラーム以外の宗教に、たとえ偽りであっても誓言した考は、その宗教の信者とみなされよう。
また、なにかの道具を用いて自殺した者は、審判の日、その道具で殺されることになろう」
アブー・フライラはこう語っている
我々はアッラーのみ使いと共にフナインの戦いに参加したが、この折、み使いはムスリムであると主張する一人の男を指差して、彼は地獄の住民の一人であるといわれた。
戦闘が始まると、その男は死に物狂いに戦い負傷した。

この時或る人が「み使い様、あなたが前に地獄の住民であると述べた男は勇敢に戦って死にました」と伝えた。
み使いはこれに対し「彼は地獄の火中に入れられた」といわれた。
けれどもこのあと、その男は死んだのではなく致命傷を負っただけであると知らされたため、一部の人たちの間には、み使いの言葉に疑念を持つ者が現われた。
しかし、夜になってからその男は、傷の痛みに耐えかね、自殺してしてしまった。
み使いはこのことを知らされた時「アッラーはまことに偉大なお方です。
私はアッラーのしもべであり、み使いであることを証言致します」といわれ、
その後、ビラールにまことのムスリムのみが天国に入り得ること、更に、アッラーは罪人を例証としてでも、この宗教の正しさを人々が教えようとなさることを人々に知らせるようお命じになった。
サフル・ビン・サアド・サーイデーはこう伝えている
アッラーのみ使いと多神教徒らの軍勢が遭遇し、両軍は戦った。
み使いが味方の軍隊に戻った時、敵方も自分の陣地にひき返した。
み使いの教友の中にクズマーンという名の偽信仰者がおり、彼は敵が出てくるとつけねらって必らず、自らの剣で相手を倒した。
教友らは口々に「今日、あの男以上の働きをした者はいない」といってほめたが、これに対しみ使いは「彼は地獄に落ちることだろう」といわれるのみであった。
これを聞いた一人が「それでは私が彼を尾行してみます」といって、彼と共に出て行き、彼が止まると止まり、彼が走りだすとただちに走って彼の後を追った。
そうこうする内に遂にその男は、重傷を負い痛みに耐えかねて死を急いだ。
剣の刃を地面に立て胸にその切っ先を当てて自らの身体を押しつけて自殺してしまったのである。
彼を尾行した男はみ使いの処にきて「あなたがまことのアッラーのみ使いであることを私は証言致します」といった。
これを聞いてみ使いは「なにが起ったのか」おたずねになった。
その男は「あなたが彼を地獄に落ちる者だといわれたので私たちは驚いたのですが、私は彼の様子を人々に知らせたいと思い、ずっと彼を尾行し結局彼が重傷を負い、傷の痛みから死を急ぎ、自らの剣を地面に立てその切っ先に胸をあて、身体を押しつけ自殺したのを見たのです」と答えた。
これに対しみ使いはいわれた
「人々の目には天国の住民たるにふさわしいと見える行為をする者であっても、実際は地獄に落ちる場合がある。
また、人々の目には地獄に落ちる者の所業と見られる行為をする者であっても、実際は天国の住民たるにふさわしい人物である場合がある」
ハサンはこう伝えている
「かつて或る人が腫物に苦しみ、激痛の余り、矢筒から一本の矢をひきぬいてその腫れ物をひっ

かいたため、流血が止らなくなり死んでしまった。
主はこの時『私は天国にこの男が入るのを禁じた』といわれた」
この話を語って後、ハサンは片手をモスクの方に伸ばしながら「アッラーに誓って。
ジュンダブが実にこのモスクでアッラーのみ使いからこのハディースを聞き、私に語ってくれたのです」といった。
ハサンはこう伝えている
「ジュンダブ・ビン・アブドッラー・バジャリーが前記のハディースをこのモスクで語ったが、私たちには忘れ難い話であった。
私たちはアッラーのみ使いに関するジュンダブの話には、一片の偽りもないと確信している」

戦利品の私物化に関して
1巻　P.86-87

ウマル・ビン・ハッターブは伝えている
ハイバルの戦いの日、教友らの一行がそこにきて「某々は殉教者である」などと話していた。
彼らは傍を通った或る男に対しても「某は殉教者である」といってほめたてた。
これをきいたアッラーのみ使いは「いや、そうではない。私は彼が衣服、もしくは、マントを戦利品から盗んだ罪で業火に焼かれるのをみた」といわれ、次いで「イブン・ハッターブよ、行って人々に、まことの信仰者以外は天国に入ることはできないと伝えよ」とお命じになった。
これに関し、ウマル・ビン・ハッターブは「私はすぐ外に出て、まことの信仰者以外は天国に入ることはできないと人々に知らせた」と語っている。
アブー・フライラは伝えている
我らは預言者と共にハイバルの戦闘に参加した。
アッラーは我らに勝利を与えて下さった。
我らは金・銀の類は一切略奪せず、戦利品として手にしたのは、小さな品物や食物、それに衣服などにすぎなかった。
我らはその後、アッラーのみ使いと共に谷間に下った。
この折、み使いにはドゥバイブ族の一員ジュザーム家のリファーア・ビン・ザイドなる人物から贈られた一人の奴隷が付いていた。
我らがその谷間に着くと、その奴隷は立ったままらくだの鞍をはずし始めた。
しかしこの時、突然一本の流れ矢が飛んできて彼に刺さり、それが彼の致命傷となった。
我々は口々に「み使い様、殉教者として倒れたのですから、彼のためには、めでたいことです」といった。
これに対しみ使いは、「いや、それは違う。私、ムハンマドの命がその御手にゆだねられている方に誓って申すが、ハイバルの戦闘の折、戦利品の中から不当に小さなマントを盗んだため、彼は衣服と共に地獄の火で焼かれている」といわれた。
人々はこの言葉を聞いてひどく心配しだした。
或る男は一本、もしくは、二本のレース（組みひも）を持ってやって来て、「み使い様、私はこれをハイバルの戦いの日に手に入れました」と述べた。
これに対しみ使いは「これらは火炎の取り付いたレースである」といわれた。

或る自殺者について
1巻　P.88

ジャービルはこう伝えている
トゥファイル・ビン・アムル・ダウシーが預言者の処に来て「アッラーのみ使い様、あなたは強固な要塞と庇護を必要としますか」とたずねた。
ダウス族はジャーヒリーヤ時代から堅固な要塞をもっていた。
預言者はこの申し出を断ったが、それはアッラーがすでに彼の保護をアンサールに託していたからであった。
預言者がマディーナに移った時、トゥファイル・ビン・アムルも、彼の部族員の一人を連れてそこに移り住んだ。
しかし、マディーナの気候はその人（トゥファイルの部族の者）に合わず病気になった。
そして苦しみのあまり、鉄製の矢の穂先で指の関節を切り裂いたため、両手からの出血を止めることができず死去してしまった。
トゥファイル・ビン・アムルは或る夜彼の夢を見た。
彼の状況は良好にみえたが、両手を布で包んでいた。
トゥファイルはこの時、彼に「アッラーはお前に何をして下さったのか」とたずねた。
彼はこれに対し、「アッラーは私が預言者の許に移ったことを賞し私を許して下さったのです」と答えた。
トゥファイルは更にいった。
「お前は、どうして両手を布で包んでいるのか」
彼は「『なんじ自らが傷つけたものを私は癒すことはしない』とアッラーがいわれたからです」と答えた。
トゥファイルがこの夢の話をみ使いに告げた時、み使いは「おお、アッラーよ、彼の両手をも許し給え」と祈願なさった。

審判の日に吹く風について

審判の日に吹く風について
1巻　P.88-89

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「その日アッラーは、イエメン方向から絹よりもやわらかな風を吹かせ給う。
それに当たる者は、心に（アブー・アルカマの言葉によれば）穀物の粒の重さほどの信仰さえあれば、
また、（アブドル・アズィーズの言葉によれば）極く少量の塵の重さほどの信仰さえあれば、だれでも死（注）を迎えることができるであろう」
（注）この場合の“死”は、信仰者を天国に導くための“死”を意味する

争乱の起る前の善行について

騒乱の起る前に善行を積むことについて
1巻　P.89

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた「善行を積むよう急ぎなさい。暗黒の夜の一部のような大騒動の時代が始まる前に。その時期には、朝信仰者であった者が夜には不信者となり、また、夜信仰者だった者が朝には不信者となるのです。そして人々は信仰を物的利益のため、たやすく売り換えるのです」

信者の恐れについて

信者の恐れについて
1巻　P.89-90

アナス・ビン・マーリクはこう伝えている
次の聖句「信仰する者よ、あなたがたの声を預言者の声よりも高く上げてはならない。
また、あなたがたが互いに声高に話す時のように、かれに大声で話してはならない。
あなた方の気付かない中に、自分の行いを虚しくしないために」（クルアーン第49章2節）が啓示された時、
サービト・ビン．カイスは「自分は地獄に落ちる者の一人に違いない」といって家にとじこもり、預言者の処にも行かなくなった。
預言者はサアド・ビン・ムアーズに「アブー・アムル（サアドの呼び名）よ、サービトはどうしたのか。
病気になったのか」とおたずねになった。
サアドはこれに対し「私は彼の隣人ですが、彼の病気については知りません」と答え、彼の処に行った折アッラーのみ使いの言葉を伝えた。
その折、サービトはこう語った
「あのような啓示が下されたのです。
あなたも知っているように、私の声はみ使いの声よりも大きいのです。
それ故私は地獄に落ちる者の一人なのです」
サアドはサービトのこの言葉をみ使いに伝えた。
するとみ使いは「いや、そうではない。
サービトは天国の住民の一人になるのです」といわれた。
アナス・ビン・マーリクによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられ、それには「サービト・ビン・カイスはアンサールの中でも雄弁家で知られていた。この啓示を下された時云々」と記されている。
なお、後半の記述にはサアド・ビン・ムアーズについての言及はみられない。
なおまた、更に別の伝承者経路で伝えられる同内容のハディースには「この啓示「あなた方の声を預言者の声よりも高く上げてはならない」が下された時云々」と記されるが、これにもサアド・ビン・ムアーズについての言及はみられない。
アナスによる前記と同内容のハディースは、更に他の伝承者経路でも伝えられているが、それにもサアド・ビン・ムアーズについての言及はなく、次の言葉、すなわち「天国の住民となる一人が我々の間を歩きまわっているのを見た」が付加されている。

改宗以前の行為について

改宗以前の行為について
1巻　P.90

アブドッラー・ビン・マスウードによると、人々はアッラーのみ使いにこうたずねた
「み使い様、私共はイスラームに改宗以前の行為についても責任を持つのですか」
これに対し、彼は「あなた方の中でイスラームの教えに従い善行を積む者は、改宗以前の行為に対して責任は問われないだろう。
しかし、イスラームに改宗した後でも悪を重ねる者は、改宗以前の罪に対しても改宗後の罪と同様に責任を問われることになるだろう」とお答えになった。
アブドッラー・ビン・マスウードはこう伝えている
我々はかつてアッラーのみ使いに「イスラームに改宗以前の行為についても責任を持たねばならないのですか」とたずねた。
み使いは次のように答えられた。
「イスラームの教えに従って善行を為す者は、改宗以前の行為についての責任は問われない。
しかしながら改宗した後でも悪行を続ける者は、改宗以前と以後、相方の行為について責任を問われるだろう」
前記と同内容のハディースは、アアマシュによっても別の伝承者経路で伝えられている。

改宗、ヒジュラ、巡礼について

改宗、ヒジュラ及び巡礼の功徳について
1巻　P.90-91

イブン・シャマーサ・マフリーはこう伝えている
私たちは死期間近いアムル・ビン・アースの病床を見舞った。
その折、私たちを見て、彼は長い間泣きつづけ壁の方をむいてしまった。
彼の息子アブドッラーはやさしくなだめながら「アッラーのみ使いが来世について、よき知らせをあなたに話して下さったではありませんか」と繰り返しいって慰めた。
アムルはそれでようやく顔を私たちの方にむけて次のように語りだした。
「我々にできる最善の行為はアッラー以外に神はなくムハンマド様は神のみ使いであると証言することです。
私の人生には三度の大きな局面がありました。
最初のそれは、私以外にはだれにも見られなかったほど、み使いに強い憎しみを抱いていたことです。
その頃、私は彼を迫害し殺害しようと強く願っていたのです。
もしもそのような状態の時私が死んだとしたら、私は間違いなく地獄の徒となったことでしょう。
その後、アッラーが私の心にイスラームへの愛を徐々に教えこんで下さった時、私はみ使いの処に行きこう話したのです
『どうかあなたの右手を伸ばしてください。そうすれば、私はあなたに忠誠を誓います』
み使いはすぐ右手をさしだされた。
しかし私はこの時、私の手をひっこめました。
み使いが『どうしたのか』といわれたので、私は『或る条件を申し上げたい』といいました。
『どんな条件であるか』と問われたので私は『これまでの私の行為を許していただきたいのです』と申し上げたのです。
み使いはこれに対し『イスラームに改宗することで、それ以前の罪が全て許されること、また、ヒジュラした者（マディーナに移り住んだ者）も、巡礼を行った者もそれ以前のもろもろの罪を許されることを知らなかったのか』といわれました。
ああ、私にとってみ使いほど愛すべき方はおられないし、またみ使い以上に私の目に尊く映る方はおられなかったのです。
あまりに尊崇の思いが強いために、み使いのお顔を十分に拝することができないほどでした。
それ故、み使いの御容貌について問われても、私の目が完全にはみ使いを拝してないので述べることができないほどです。
もしもこんな状態にある時私が死んだとしたら、私は十分天国に入り得る希望を持ち得たかも知れません。

この後私にはムアーウィヤの下でアリーの軍勢と戦ったり、エジプトの知事に任命されたりするなど、責任を伴なう様々な変転がありました。
勿論それが私にとってどのような結果をもたらすかわかるはずもなかったのです。
私が死んでも決して泣き女を雇ったり、松明をかぎすなどの大げさな葬式はしないで下さい。
墓に埋葬する時には十分土をかぶせて下さい。
そしてらくだを屠殺する間、できれば私の墓の周りにしばらく立っていて下さり、その肉の幾分かを受取ってもらえれば、私はあなた方と一層親密さを保つことになり、そのことはまた、アッラーの天使たちが私を判断する場合の良き証しになるでありましょう」
イブン・アッバースはこう伝えている
多神教徒の或る者らは、多くの人々を殺し、またしばしば、姦通罪を犯した。
その彼らが、ムハンマド様の処にきて「あなたの主張や説教はまことに結構な内容です。
もしも私たちが過去に犯した行為が贖罪されるとあなたが約束して下さるならば私たちはイスラームに改宗致します」といった。
この折、次の啓示が下された。
「（信仰者とは）アッラーと並べて、外のどんな神にも祈らない者、正当な理由のない限りアッラーが禁じられた殺生を犯すことなく、また姦淫しない者である。
だが凡そこのような行為をなす者は懲罰されるであろう。
復活の日には懲罰は罪に応じ倍加され、その地獄で屈辱の中に永遠に住むであろう。
悔悟して信仰し、善行に励む者は別である。
アッラーはこれらの者の、いろいろな非行を変えて善行にされる」（クルアーン第25章68-70節）
「言ってやるがいい。『自分の魂に背いて過ちを犯したわがしもべたちよ。
それでもアッラーの慈悲に絶望してはならない。
アッラーは本当にすべての罪を赦される。
かれは寛容にして慈悲深くあられる』」（クルアーン第39章53節）

改宗以前の善行について

イスラームに改宗前の善行について
1巻　P.92-93

ハキーム・ビン・ヒザームはウルワ・ビン・ズバイルに次のように語った
私がアッラーのみ使いに「改宗以前の私の敬神行為に対するアッラーの報酬はいかなるものですか」とたずねた時、み使いはこういわれた
「あなたは改宗以前の善行によってイスラームを受入れることができたのです」
ハキーム・ビン・ヒザームはウルワ・ビン・ズバイルにこう語った
私は「アッラーのみ使い様、私が改宗以前に行った施し（サダカ）、奴隷の解放、親族内の協調といった様々な敬神行為に対し、審判の日にアッラーは私になんらかの報償をお与え下さるとあなたは思いますか」とたずねた。
これに対しみ使いは「あなたは改宗以前のそれらの善行お陰でイスラーム教徒となれたのです」といわれた。
ハキーム・ビン・ヒザームはこう伝えている
私は、アッラーのみ使いに「改宗以前に幾つかの善行を致しました」と申し上げた
（ヒシャーム・ビン・ウルワはそれらをアッラーに対する敬神行為であると説明している）
これに対しみ使いは、「あなたがイスラームを受入れたのは、あなたの過去の善行のお陰なのです」といわれた。
私はまた「神に誓って。私は改宗以前と同じく、イスラームの教えを余すことなく実行致します」と申しあげた。
ヒシャーム・ビン・ウルワは彼の父からきいて次の話を伝えている
ハキーム・ビン・ヒザームはイスラームに改宗する以前に（アッラーの御名において）100名の奴隷を解放し、100頭のらくだを献納した。
それからイスラームに改宗して後、更に100名の奴隷を解放し、100頭のらくだを献じた。
この後、彼は預言者の処にきて、前記と同内容の話をしたのである。

信仰の誠実さについて

信仰の誠実さについて
1巻　P.93-94

アブドッラーはこう伝えている
次の聖句「信仰して自分の信心に不義を混じえない者、（これらの者は安全であり、正しく導かれる者である）」（クルアーン第6章82節）が啓示された時、教友たちは非常な不安にかられ口々に「我々の仲間で一体、誰か誤ちを犯さない者がいるだろうか」といい合った。
これに対しアッラーのみ使いは次のようにいわれた
「この啓示の意味は、あなたたちが想像するようなものではありません。
賢者ルクマーンが彼の息子にむかって「息子よ、アッラーに他の神を同等に配してはならない。それを配するのは大変な不義である」（クルアーン第31章13節）と述べた時の言葉なのです」
前記と同内容のハディースは、アアマシュによっても別の伝承者経路で伝えられている。

全てを見通すアッラーに関して

心の全てを見通すアッラーの言葉に関して
1巻　P.94-96

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いに次の聖句「天にあり、地にある、凡てのものはアッラーの有（もの）である
。
あなた方自身の中にあるものを、現わしてもまた隠しても、アッラーはそれとあなたがたを清算しておられる。
アッラーは、おぼしめしの者を赦し、またおぼしめしの者を罰される。
アッラーは凡てのことに全能であられる」（クルアーン第2章284節）が啓示された時、教友たちは余りに厳しすぎると思った。
それでみ使いの処に来てひぎまずいて座り、こういった
「み使い様、私共は礼拝、断食、アッラーのための戦い、貧者への施しなど、私共が為し得る幾つかの義務を果たすよう命じられています。しかるに今、このような啓示があなたに下されました。私共にはこの啓示に従って暮らすのは不可能です」
これに対しみ使いはいわれた
「あなた方はずっと以前に『私たちは拝聴するが従わない』といった二つの聖典信仰者、すなわちユダヤ教徒やキリスト教徒たちと同じ言葉をいおうとするのですか。
あなた方はそれよりもむしろ『私たちは御教えを聞き服従致します。主よ、あなたの御赦しを願います。わたしたちの帰り所はあなたの御許であります』と唱えるべきです」
それで教友らは「私たちは御教えを聞き、服従致します。
主よ、あなたの御赦しを願います。
わたしたちの帰り所はあなたの御許であります」（クルアーン第2章285節）と唱えた。
人々がこの言葉を唱え、しかもそれが流れるように美しく彼らの舌で発せられたそのすぐ後に、アッラーは次の聖句を啓示された。
「使徒は、主から下されたものを信じる。
信者たちもまた同じである。
皆、アッラーと天使たち、諸啓典と使徒たちを信じる、わたしたちは、使徒たちの誰にも差別をつけないという、またかれらは祈ってこういう
『わたしたちは教えを聞き、服従します。
主よ、あなたの御赦しを願います。わたしたちの帰り所はあなたの御許であります』」（クルアーン第2章285節）
人々が教えに従った時、アッラーは先の言葉を廃棄され、新たに次の言葉を啓示された。
「アッラーは誰にもその能力以上のものを負わせられない。
その稼いだもので自分を益し、その稼いだもので自分を損う。

『主よ、わたしたちがもし忘れたり、過ちを犯すことがあっても、咎めないで下さい』」
預言者はアッラーによりこれらの言葉を唱えるよう導かれながらこういわれた
「はい、「主よ、わたしたち以前の者に負わせられた重荷を、わたしたちに負わせないで下さい」」
預言者は更にこう唱えた
「はい、「主よ、わたしたちの力でかなわないものを担わせないで下さい」」
預言者はつづけて唱えた。
「はい、「わたしたちの罪障を消滅なされ、わたしたちを赦し、わたしたちに慈悲を御くだし下さい。
あなたこそわたくしたちの愛護者であられます。
不信心の徒に対し、わたしたちを御助け下さい」（クルアーン第2章286章）」
（この言葉に対し）アッラーは「承知した」といわれた。
イブン・アッバースはこう伝えている
次の啓示、「あなたがた自身の中にあるものを、現わしてもまた隠しても、アッラーはそれとあなたがたを清算しておられる。」（クルアーン第2章284節）が下された時、人々はかつて経験したこともないほど恐れの思いを抱いた。
預言者はこの様子を見て「『わたしたちは御教えを聞き、それに従い、服従致します』　と唱えなさい」といわれた。
アッラーはこのようにして人々の心に信仰を徐々に教えこまれ、そして後、次の啓示を顕わされた。
「アッラーは誰にもその能力以上のものを負わせられない。
人々は自分の稼いだもので、自分を益し、その稼いだもので自分を損う。
『主よ、わたしたちがもし忘れたり、過ちを犯すことがあっても、咎めないで下さい』」
アッラーはこの言葉に対し、「そのようにするであろう」といわれた。
また「主よ、わたしたち以前の者に負わされたような重荷を、わたしたちに負わせないで下さい」との願いに対してもアッラーは「そのようにするであろう」といわれた。
そして、更に、「わたしたちを赦し、わたしたちに慈悲を御くだし下さい。
あなたこそわたしたちの愛護看であられます」（クルアーン第2章286節）との願いに対してもまたアッラーは「そうするであろう」といわれた。

心の邪悪を許されることに関して

アッラーが心中の邪悪を許されることについて
1巻　P.96

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「アッラーは邪悪な思いにとらわれた私の民人でも、それを人に語ったり実行したりせぬ限りお許しになるだろう」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「アッラーは我らの仲間の者が心中に邪悪な思いを抱いたとしても、それを誰にも話さず、また実行しない限りお許しになるであろう」
前記と同内容のハディースは、カターダによっても別の伝承者経路で伝えられている。

善行および悪行の記録について

善行および悪行の記録について
1巻　P.96-98

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「アッラーは天使たちに『わたしのしもべに悪心を抱く者があっても、それを記録してはならない。
もし実際に彼が悪を犯した場合は罪行一つと記しなさい。
また、もしも善心を持ちながら、それを実行してない者がおれば彼のため善行一つと記録しなさい。
もしそれを彼が実行した場合には、彼に関する記録簿に善行10箇と記しなさい』とお命じになった」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはいわれた
「アッラーはこう述べられた『私のしもべで善行を為そうと志しながら、それを実行してない者に対し私は善行一つと記録する。
しかし、もし彼がそれを実行した場合には、彼のためにその程度に応じて10から700までの善行印を記録する。
また一度悪行を犯そうとしながら実行しなかった者に対しては私は何も記録にとどめることはしない。
そしてもし実行したとしても悪行一つと記すのみである』」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使い、ムハンマド様はいわれた
「アッラーはこう話された『もしも私のしもべで、善行を志しながら実行してない者があれば、私はその者のために善行一つと記す。
また、もしそれを実行した場合には、彼のために善行10箇と記入する。
もし悪行を企図しながら、それを実行しなかった者があれば私はそれを許して記録せず、実際に犯した場合にのみ、彼の名の下に悪行一つと記す』」
み使いはこうもいわれた
「天使たちは、次のように語ってくれた。
『あなたのしもべが、なにかの悪行を犯そうとしている時、そのことに極めて敏感であられる主は、“よく監視し、もし彼が罪を犯したならばそれを記せ。
ただし何も犯さぬ場合には、彼のため善行一つと記入せよ。
なぜなら彼は私（アッラー）のために罪を犯すことを思いとどまったのである”といわれた』」
アッラーのみ使いはこうもいわれた
「あなた方のうち、正しい信仰を持つ者に対して、その善行の全ては程度に応じて10倍から700倍まで増加して数えられ記録されます。
罪を犯した場合には全てがそのまま記録されます。

この記録をもって審判の日にアッラーにお会いするのです」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「善行を志しながらそれを行わなかった者に対しては善行一つが記録され、善行を志しそれを実行した者には、その程度に応じて、10倍から700倍の善行印が記録される。
なお、悪行を企図した者でもそれを実行しなかった場合にはなんら記録されることはない。
ただ悪を実際に犯した場合にはそのまま記録される」
イブン・アッバースは、アッラーのみ使いが主について語った言葉をこう伝えている
「まことにアッラーは善行、悪行についてよく記録なさる方である。
善行を志しながら、果さなかった者にアッラーは善行一つと記され、また善を志しそれを実行した者に対しては、アッラーは10倍から700倍の増加分、またそれ以上の善行数を記録なさる。
悪行を企図してもそれを行わなかった場合、アッラーは完全な善行一箇を記して下さる。
またもし悪を企てそれを行った場合には、アッラーは彼に悪行一つと記録なさるのである」
前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられているが、それには次の言葉が付加されている
「アッラーは人の犯した悪行を抹消することさえなさる。アッラーはまた、極悪者（注）以外には誰をも破滅させることはなさらない」
（注）原文は“ハーリク”すなわち“破滅を運命づけられている者”という意味。
悪行を専らにし一片の善意をも持たぬ者をいう

悪をささやかれることについて

信仰者が悪をささやかれることについて
1巻　P.98-101

アブー・フライラによると教友らが預言者の処に来てこういった
「まことに我らの心底には誰しも口にするのをはばかられる事柄、すなわち悪への誘惑心があることに気付いております」
アッラーのみ使いはこれに対し「あなた方は本当にそこに気付いたのか」とおたずねになり、「その通りです」と彼らが答えると、「それと戦うことで真実の信仰心がはっきりしてくるのです」といわれた。
アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路によっても伝えられている。
アブドッラー・ビン・マスウードはこう伝えている
預言者は悪への誘惑についてたずねられた時「それは純粋な信仰を持つために有益なものです（注）」と答えられた。
（注）信仰の純度が高まると、心中の些細な悪に対しても敏感になることを意味する
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「人々はあれこれと互いに疑問を述べ合い、果てには『アッラーは万物を創造されたが、それでは一体だれがアッラーを創ったのだろう』などという者も出てくるだろう。
しかし、人智の及ばぬアッラーについての疑念が論議される場所では、信者はただ『私はアッラーを信仰しております』と述べるだけでよいのである」
前記と同内容のハディースは、ヒシャーム・ビン・ウルワによっても伝えられるが、それには次の表現も加えられている
アッラーのみ使いはこういわれた
「悪魔（シャイターン）があなた方一人一人の処に来て『一体だれが天を創り、地を創られたのか』という時、人々は『アッラーです』と答えることだろう」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「悪魔があなた方一人一人の処に来て、あれやこれは誰によって創られたかといい、遂には、誰があなたの主を創ったのかとまで質問するだろう。
その時には、アッラーに加護を祈り、そのような無益な問いは無視すべきである」
アブー・フライラがウルワ・ビン・ズバイルに語った前記のハディースは、別の伝承者経路によっても伝えられ、それには「悪魔がアッラーのしもべの処に来て『誰があれやこれを創ったのか』と問うことだろう」という表現がみられる。
アブー・フライラによると、預言者はこういわれた
「人々は絶えずあなた方に（イスラームに関する）知識について問いつづけ、果てには『アッラーは私たちを創造されたが、しかし誰が一体、アッラーをお創りになったのですか』とまでいい

だすに相違ありません」
アブー・フライラはこのハディースを語った時、或る男の手をとらえながら「アッラーとアッラーのみ使いは真実をお告げになった。
すでに二人の人物がこれと同じ質問を私にした。この人は三人目の質問者であった」
（別伝によると、「すでに一人が私に質問し、この人物はその二人目に当る」）といった。
なお、アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路によっても伝えられるが、それには「預言者がこういわれた」という言葉はない。
また、このハディースの最後は「アッラーとそのみ使いは真実をお告げになった」という言葉で終っている。
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「アブー・フライラよ、人々は、あなたに絶えずアッラーについての様々な事柄をたずねることだろう。
そして果てには『それがアッラーだとすると一体誰がアッラーを創造されたのか』というに相違ない」
この話に関連し、アブー・フライラは次のように語っている
「私たちがモスクにいた時、何人かのベトウィンがそこに来て『アブー・フライラよ、それがアッラーだとすると、一体誰がアッラーを創造されたのか』といったので、私は手に小石をつかみ、それを彼らに投げつけながら『立ちなさい！　立って出て行きなさい！　私の友ムハンマド様の言葉は本当だったのだ！』と叫んだ」
ヤズィード・ビン・アサンムは伝えている
私はアッラーのみ使いが次のようにいわれたと、アブー・フライラから聞いた。
「人々はあなた方に必ず全ゆる事柄に関して問い、果てには『アッラーは万物を創造された。しかし一体誰がアッラーを創ったのか』とまでいうことだろう」
アナス・ビン・マーリクはアッラーのみ使いより聞いた次のハディースを伝えている
「アッラーはこういわれた『まことにあなたの（ウンマの）人々は、あれこれについて絶えず質問をし、果てには必ず『万物を創造されたアッラーが実在するとしても、一体誰がアッラーを創ったのか』といいだすに違いない』」
前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられるが、それには「アッラーはこういわれた『まことにあなたの（ウンマの）人々は』」という表現はみられない。

偽誓による権利の横領について

偽誓によりムスリムの権利を横領する者について
1巻　P.101-104

アブー・ウマーマによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「偽わりの誓いを述べて他のムスリムの権利を横領する者に対し、アッラーは地獄の火を彼にふさわしいものとなさり、天国に入ることを禁じられるだろう」
これを聞いた或る男が「み使い様、たとえ、取るに足らない小事であってもですか」と問うたところ、
み使いは「その通りです。たとえ、それがアラーク樹の小枝一本であってもです」といわれた。
アブー・ウマーマによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路によっても伝えられている。
アブドッラー・ビン・ウマルによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「ムスリムの財産を横領しようとして偽誓をし、しかも実際に虚偽行為をした者に対し、アッラーは怒りをもって接するであろう」
たまたまこの時、アシュアス・ビン・カイスがそこにやって来て、人々に「アブー・アブドル・ラフマーン（アブドッラー・ビン・ウマルの呼び名）はどんなことをあなた方に話したのか」とたずねた。
人々がしかじかの内容だったと彼に告げたところ、彼は「アブー・アブドル・ラフマーンの話は正しい。
実はこの言葉は私に関連する問題についていわれたものです。
私は、イエメンに所有する土地の権利に関し或る男と争っていました。
私はその男と一緒に争いを預言者の処に持ち込み解決を願ったのです。
その折アッラーのみ使いが『あなたの主張を支持するための証拠はあるか』といわれたので『なにもありません』と答えたところ、み使いは　『それではこの問題の解決は彼の誓言による以外あるまい』いわれたのです。
私はこれに対し『彼はふたつ返事で誓うことでしょうよ』と述べたのですが、この時み使いはこういわれました
『ムスリムの財産を横領しようとして偽りの誓いをする虚言者に対し、アッラーは怒りをもって接するであろう』この折、次の聖句が下されたのです。
「アッラーの約束と、自分の誓いとを売って僅かな利益を購う者は、来世において得分はないであろう。
復活の日には、アッラーはかれらに御言葉を与えず、また顧みられず、清められることもない。
かれらは痛ましい懲罰を受けるであろう」（クルアーン第3章77節）
アブドッラーは、預言者がこう語るのを聞いたと伝えている
「或る財産が自分の所有であると誓言し、しかもそれが偽りである場合、アッラーはその者に

対し、怒りをもって対するであろう」
なお、アブドッラーにより別の伝承者経路で伝えられるこのハディースの後半は、次の表現を除けば前記と同内容である。
「私と或る男との間で井戸に関する争いが起った。
我々は、アッラーのみ使いの処にこの問題を持ちこんだが、彼はその時私にむかって『あなたの主張を支持する二人の証人を出さなければ、彼の誓言が有効であると認められることになろう』といわれた」
イブン・マスウードは伝えている
私はアッラーのみ使いがこういわれるのを聞いた
「ムスリムの財産に関し、正当な根拠もなく所有権があると誓言する者に対し、アッラーは怒りをもって対するであろう」
そのあとみ使いは、この言葉の証として、前記クルアーン啓示（第3章77節）を最後までお唱えになった。
ワーイルはこう伝えている
ハドラマウトから来た男とキンダから来た男が共に預言者の処にやって来た。
ハドラマウトの男はいった
「アッラーのみ使い様、まことにこの男は、私の父のものだった土地を私から取りあげたのです」
これに対しキンダの男は「これは私の土地です。私が耕作したのです。あの土地に関し彼にはなんの権利もありません」といって反駁した。
そこでみ使いは、ハドラマウトの男に対し「あなたはなにか証拠品を持っていますか」とたずねた。
彼が「ありません」と答えたのでみ使いは「それではこの件は、彼の誓言によって決定されることになります」といわれた。
ハドラマウトの男はこれに対し「み使い様、彼は嘘つきで何でも平気で誓い、しかも、それを守ろうとしない男です」と述べたが、み使いは「それ以外にはいかなる手段もないのです」といわれた。
キンダから来た男は誓言を述べ始めた。
この男が帰って行った後、み使いはいわれた
「もしあの男がハドラマウトの男の財産を横領しようとして誓言を述べたとしたら、アッラーは必ずやあの男を拒否なさるだろう」
ワーイルは、彼の父フジュルが次のように語ったと伝えている
私がアッラーのみ使いの処にいた時、ある土地に関して争っている二人の男がやって来た。
そしてその一人がいった「み使い様、この男がイスラーム以前に、私の土地をのっとってしまったのです」
こう申し立てたのはイムル・カイス・ビン・アービス・キンディーで、その相手はラビーア・ビン・イブダーンという者であった。

み使いはそう申し立てたイムルに対し、主張を立証するための資料が有るかと問い「有りません」との答えに対し「それでは、彼、すなわちラビーアの誓言によって判断する以外にない」といわれた。
イムルは「そうすれば土地は彼のものになってしまいます」といって抗議したが、み使いは「これ以外にあなたにはどうしようもないのです」と述べ、一方のラビーアが誓言するために立ち上った時には次のようにいわれた
「不正な手段で土地を横領する者に対し、アッラーは怒りをもって対するであろう」
なお、イスハークは、訴え人の名をラビーア・ビン・イブダーンではなく、ラビーア・ビン・アイダーンであると記している。

財産を不正に強奪する者について

他人の財産を不正に強奪する者について
1巻　P.104

アブー・フライラは伝えている
或る男がアッラーのみ使いの処に来て「み使い様、もしも私の財産を奪おうとする者が来たら、どうすべきでしょうか」といった。
み使いは「財を取られてはならない」と答えられた。
その男がまた「もし私に戦いをいどんできたらどうすべきですか」とたずねたのに対し、み使いは「その時は戦いなさい」と教え、更に「もし私が殺されたならば、どうなるのですか」との質問に対しては「殉教者となるだろう」とお答えになった。
更にまた「私によって殺された相手はどうなりますか」との問いに対しては「彼は地獄に落ちるだろう」といわれた。
サービトはこう伝えている
アブドッラー・ビン・アムルとアンバサ・ビン・アブー・スフヤーンが互いに戦闘準備をしていた時、ハーリド・ビン・アースが、アブドッラー・ビン・アムルの処に馬で駆けつけ、戦いを中止するよう説得した。
これに対しアブドッラー・ビン・アムルは「あなたは『財産を守るために戦って死ぬ者は殉教者である』とみ使いがいわれたのを知らないのですか」といった。
なお、このハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

不正な支配者に関して

不正な支配者に関して
1巻　P.104-106

ハサンはこう伝えている
ウバイドッラー・ビン・ジャードがマアキル・ビン・ヤサール・ムザンニーの病床を見舞った。
マアキルは後にこの病いで死去したが、この折、次のように語った
「私がアッラーのみ使いからお聞きした中で、もしも私がもっと長生きできるとわかっているなら、決して人にはいいたくない或る話をあなたに伝えておきます。まことに私はみ使いがこういわれるのを聞いたのです『アッラーに託されて支配者となったしもべが、不正に人々を圧迫する者であれば、その死を迎えるに当って天国は彼のため禁じられることになろう』」
ハサンはこう伝えている
ウバイドッラー・ビン・ジャードはマアキル・ビン・ヤサールを見舞ったが、その時マアキルは病に苦しんでいた。
ウバイドッラーは彼の病気の具合についてたずねた。
この折、マアキルはいった
「今、私は過去に話すのを避けてきた或るハディースをあなたに伝えておきたい。まことにアッラーのみ使いはこういわれたのです『アッラーに臣下の状態をみるよう委託されたしもべらが過酷な支配者であった場合、その者が死の時を迎えたとしても天国には入ることは許されないだろう』」
イブン・ジヤードはこの言葉を聞き「どうしてもっと以前にこの言葉を私に語ってくれなかったのですか」といったが、マアキルはこれに対し「私が話さなかったのは、適当な時期でないと考えたからでした」と答えた（注）。
（注）ウバイドッラーはウマイヤ朝始祖ムアーウィヤの義弟ジヤードの子で、自らもアリーの子フサインのカルバラー殉教の折、イラクのウマイヤ朝知事として兵を率いフサイン一行の進路をはばんだ人物である。
マアキルはイスラーム暦60年に死を迎えた故、その一年後すなわち、同61年のムハッラム月10日（西暦680年10月10日）フサインのカルバラー殉教事件は起ったことになる。
ともあれ、このハディースは預言者家系を圧迫するムアーウィヤ一族に対する、マアキルの最後の警告となったものである
ハサンは伝えている
私たちがマアキル・ビン・ヤサールの病気見舞いにいった時、ウバイドッラー・ビン・ジヤードもそこにやって来た。
その後にマアキルはこう語った
「まことに、私はアッラーのみ使いの語った或るハディースをあなたに話したいと思う」
そういって彼は、前記二つと同内容のハディースを語った。

アブー・マリーフは、こう伝えている
ウバイドッラー・ビン・ジヤードがマアキル・ビン・ヤサールの病気を見舞った時、マアキルは彼に次のように語った。
「もしも私がこのような病床に臥してなければ、決して話すこともなかったに相違ない或るハディースをあなたに語ってあげます。私はアッラーのみ使いがこういわれるのを聞いたことがあります。（すなわち）『アッラーによって、ムスリムの面倒をみるよう責任を託された支配者でありながら、彼らの生活をみるためになんらの努力もせず、また、誠意を尽くそうとしない者は、彼らと共に天国に入ることはないだろう』」

信頼や信仰の喪失に関して

信頼や信仰が失われることに関して
1巻　P.106-107

フザイファは伝えている
アッラーのみ使いは私たちに二つのハディースを話して下さったが、私はその中の一つが実現されるのを見ることができた。
私は他の一つも実現されるものを期待している。
（ともあれ）み使いはこういわれた
「誠実性が人間の心に植えこまれた後クルアーンが啓示された。
人々はクルアーンや私の行い（スンナ）からそれについて具体的に学んだのです」
それからみ使いは、誠実性が失われた場合について私たちに次のように話された
「人が眠りに就くと、その誠実さも心の中にかすかな印象を残すだけで消え去ってしまう。
それは丁度木の燃えさしがあなた方の足の皮膚に残す水ぶくれのようなもので、張れ上ったとしても中にはなにもないのと同じです」
み使いは小石をひろい、ご自分の足の方にころがしながら続けてこうもいわれた
「人々は互いに商売をずっと続けてゆくことだろうが、頼りになる誠実な人々の数はだんだん少なくなることだろう。
そうなると『某々の部族に信頼できる人物がいるとか、個人に関していえば、心にからし粒の重さほどの信仰心も持たない人物が『なんと慎重な人であろう！』『なんと上品な人物であろう！』
また『なんと賢明な人物だろう！』などといわれ珍しがられることになるだろう（注）」
これに関連し、フザイファは次のように付言している
「かつて、私は誰と商売をしようと不安は抱かなかった。
なぜならば、相手がムスリムの場合、その信仰が十分信頼の保証となったし、キリスト教徒やユダヤ教徒の場合、彼らの支配者が私に対する商売上の義務を果たさせたからです。
しかしながら、今日、私はあなた方の中、某々など二、三の者以外、誰をも信頼できず商取引をする気になれない有様です」
（注）ずる賢く商売する者らがこれらの言葉でほめられ、正直者が低く評価されるようになるという意味
前記と同内容のハディースは、アアマシュにより別の伝承者経路でも伝えられている。

イスラーム教義の特異性に関して
1巻　P.107-109

フザイファは伝えている
私たちがウマルと一緒にいた時、彼は「あなた方のうち誰か、アッラーのみ使いが災害（フィトナ）について話されるのを聞いた人がいますか」とたずねた。
或る人たちが「我々はその話を聞きました」と答えるとウマルはそれに対し「恐らく、災害の時には、人は家族や隣人を心配することだろう」と述べた。
人々が「その通りです」というと、ウマルは「しかし、そのような不安は、礼拝、断食、喜捨（サダカ）などの行為で解消できるものです。
ところであなた方の中、誰か、み使いが、災害は大洋の波のように続けて襲って来るといわれたのを聞いた人はいますか」とたずねた。
人々はこの言葉に静まりかえった。
この時には私（フザイファ）だけが「聞きました」と答えたが、それに対しウマルは「あなたの父上は敬虔な人でした」と述懐していた。
ともあれ私は続けてこう話した
「み使いはいわれました『もろもろの誘惑への思いが、丁度筵が葦草の一本一本によって編まれるように人々の心に次々と浮かんでくることだろう。
そして、その誘惑を受け入れた者の心には黒い印が付され、それを拒否した者の心には白い印が付されるだろう。
その結果二種の心が生じ、白石のような白い心は、天地が続く限り、いかなる災害や誘惑にも損われることはないだろう。
もう一方のひっくりかえった容器のように黒く汚れた心は、善を判断したり、悪を避けたりすることができず、その時々の気分に支配されるばかりとなるだろう』と」
私（フザイファ）はまた、ウマルに次のようにいった
「あなたとその災害との間の通路は、あなたが防禦なさるために、閉じられているかのようです。しかしそれも今や破られそうです」
これに対しウマルは「破れるだろうか。
あなたは父親を亡くしたが、もしも彼が生きていれば、たとえ通路の戸が開いていても、彼の協力によってもろもろの悪を防ぐためのその戸を再び閉じることができたのであろうに」といった。
私は、これに対し「いや、それは無理かも知れません」と述べ、「通路の戸口が破れるという意味は人が殺されるか、もしくは、死ぬことを指しているのです（注）」といった。
（注）ウマルが後に刺殺されることを予見した言葉とも受け取られる
リビーイ・ビン・ヒラーシュは伝えている

フザイファがウマルの許から帰り、座ってから、次の話を我々に語った
「昨日、私が信者の長ウマルの処にいた時、彼は教友らにこういった『あなた方の中、誰か災害の時についてアッラーのみ使いがいわれたことを記憶している人はいませんか』」
以下は前記と同内容のハディースである。
リビーイ・ビン・ヒラーシュは、フザイファから聞いた次のハディースを伝えている
ウマルはこういった
「アッラーのみ使いが災害についていわれたことを、誰か（もしくは、あなた方の中、誰か）我々に語ってくれますか」
すると彼らの中にいたフザイファが立ち上り「私が述べます」といった。
以下は前記と同内容のハディースである。
なお、これに関連しフザイファは「私が述べたハディースに誤まりはありません」といい「み使いから直接聞いた話です」と語っている。
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「初めイスラームは人々にとって、何か耳新しい教えとして始まった。
イスラームはこれからも新しい教えでありつづけるだろう。
初めての者にとってイスラームはまことによき教えである」
アブドッラー・ビン・ウマルによると、預言者はこういわれた
「イスラームはなにか特異で新鮮な教えとして始まった。
そして再び、始まった時と同様な状況に戻りつつある。
マッカとマディーナの二つのモスクの間に、丁度蛇がその穴に這えずり帰っていくように、戻って力を貯えようとしている」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはいわれた
「まことに信仰は、丁度蛇が穴に這い入るように、マディーナの町に浸透してゆくことだろう」

「最後の時」について

“最後の時（アッサーア）”について
1巻　P.109

アナスによると、アッラーのみ使いはいわれた
「“最後の時”は、地上で人々のアッラーへの祈りが続く限り、来ることはない」
アナスによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「アッラーに祈願を捧げ続ける限り“最後の時”は誰の上にも起こることはない」

恐怖心からの信仰隠しについて

恐怖心からの信仰隠しについて
1巻　P.109-110

フザイファはこう伝えている
私たちがアッラーのみ使いに従っていた時、彼はこういわれた
「イスラームへの入信を告白した者を、数えて知らせなさい」
私たちはこれに対し「み使い様、あなたは私たちについて何か心配しておられるのですか。私たちの人数は600から700名ほどです」と申しあげた。
すると彼は「あなた方には予想もつかないだろうが、今後あなた方は何度かの試練にさらされることだろう」といわれた。
実際、わたしたちは困難な事件（注）に遭遇し、その時には、或る人たちは礼拝すら隠れて行わねばならないほどであった。
（注）カリフ・ウスマーン殺害事件前後の騒動を意味する。この内乱では多くのムスリムが殺された

ムスリムと信仰者に関して

ムスリムと信仰者（ムウミン）に関して
1巻　P.110-111

アーミル・ビン・サアドによると、彼の父、アブー・ワッカスは次のように語った
アッラーのみ使いは教友らに戦利品を分配なさった。
この折私は「み使い様、某々にも分け与えて下さい。彼はまことの信仰者（ムウミン（注））です」と申し上げた。
これに対し、預言者は「単なるムスリムではないのか」といわれた。
私は「彼は、信仰者です」を繰り返したが、預言者はその度に三回も同じように「単なるムスリムではないのか」といわれた。
そして、後に「私はこの分け前を或る男に与え、アッラーがその男を業火の中で額ずかせないよう祈りたいと思う。いうまでもなく私にとってその男より他の人の方がもっと大事なのは十分承知しておるけれども」といわれた。
（注）ムスリムとはイスラーム信仰を告白した者、信仰者（ムウミン）とはイスラームを心底より信ずる者　の意味である。
信仰者は全てムスリムであるか、単に口先でイスラーム信仰を告白しただけでは信仰者（ムウミン）とはいえない。
なお、ムスリムとなっても心の底てはその教えに帰依してない者はムナーフィク（偽信者）と呼ばれる
サアドはこう伝えている
アッラーのみ使いが或るグループの人たちに戦利品を分配しておられた。
私もその中に座っていたが、み使いはそのグループの数名の者には何も与えなかった。
その無視された一人は、見たところ、他の人たちよりもずっと分配を受けるにふさわしいと思える人物だったので、私は「み使い様、どうして某には与えないのですか。私が知る限り彼はまことの信仰者です」といった。
これに対しみ使いは「ただのムスリムではないのか」といわれた。
私は一寸沈黙したが、再び彼について知っていることを述べたくなり「み使い様、どうして某には与えないのですか。私の知る限り彼はまことの信仰者です」といった。
これに対し、み使いはまた「ただのムスリムではないのか」といわれた。
私は一寸沈黙したが、また彼について述べたくなり、結局三度も「み使い様、どうして某には与えないのですか。
私の知る限り、彼はまことの信仰者です」と繰り返していった。
み使いはこれに対し「いや、彼はただのムスリムにすぎない。
ともあれ、時として私は与えないと悪行に走り、その結果地獄の火中で打ち倒されて焼かれると懸念される者に分け前を与えることがある。

分配できなかった他の人々の方がその者に比して、私にとってはもっと大事であることは承知しているのだけれども」といわれた。
サアドは別の伝承者経路でも、こう伝えている
「アッラーのみ使いは、私もその中に座していた或るダループの人々に戦利品を分配なさった」
以下は前記ハディースと同内容であるが、これには次の表現も加えられている。
「私は立上って、み使いの処に行き『どうしてあなたは某に分配品を与えないのですか』と小声でたずねた」
前記と同内容のハディースはムハンマド・ビン・サアドによっても伝えられるが、それには「アッラーのみ使いは私の首と肩の間をたたいてこういわれた『サアドよ、あなたは、私が或る人物に分配品を与えたことを不満に思っているのか』」という言葉がみられる。

証明による気持の安定について

証明によって気持が安定することについて
1巻　P.112

アブー・フライラはこう伝えている
アッラーのみ使いは、預言者アブラハムについての次の啓示「『主よ、あなたは死者をどう甦らせられるのか、わたしに見せて下さい』と（アブラハムが）いった時、主はいわれた。
『あなたは信じないのか』。
かれは申し上げた
『いや、ただわたしの心を安らげたいのであります』」（クルアーン第2章260節）に関連し「私にはアブラハム以上にアッラーにおたずねしたいことがあります」といわれた。
み使いはまたこういわれた
「アッラーよ、ロト（ロート）に慈悲を給わらんことを！　彼は力強い支持を願っていたのです（注1）」
そして更にこうもいわれた
「私がもし預言者ユースフと同じほど長く牢獄に捕らわれていたとしても、私は私を招いた人にユースフと同じ言葉を述べたであろう（注2）」
（注1）クルアーン第2章80節　男色者の手から使徒らを守ろうとしたロトの物語を受ける内容
（注2）無実が証明されるまで牢獄にとどまったであろう　という意味である。
クルアーン（第12章50節）に記される、ユースフが或る貴婦人の誘惑を拒絶したため讒言に会い投獄されるが結局は潔白を証明される話を受けている
アブー・フライラによる前記の同内容のハディースは、マーリクによっても伝えられるが、それには次の言葉が加えられている
「アッラーのみ使いは「ただ私の心を安らげたいのであります」という啓示（クルアーン第2章260節）を終りまでお唱えになった」
前記と同内容のハディースはズフリーによっても伝えられ、それにも「アッラーのみ使いはこの啓示（第2章260節）を全部終りまで唱えられた」と記されている。

預言者ムハンマドへの信仰について

預言者ムハンマドへの啓示に対する信仰について
1巻　P.112-114

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「預言者たちはいずれも過去の預言者らと同類の啓示を与えられており、人々は誰でもそれらを信仰しています。私はアッラーが啓示されたクルアーンを託されています。私は、審判の日に、私の説く教えに従う者が、最も多いことを願っています」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「ムハンマドの生命がその御手に委ねられた御方に誓って。ユダヤ教やキリスト教の社会の者は誰も私の言葉を聞こうとしない。私に啓示された教えを信ずることもなく死を迎える者は地獄の住民となるのみである」
シャービーによると、フラーサーンの住民の一人が彼にこうたずねた
「アブー・アムルよ！　我々の仲間のフラーサーンの或る人たちは、自分が解放した女奴隷と結婚した男は、犠牲に捧げた動物に乗る者に等しいと語っているが本当ですか」
これに対し、シャービーはいった
「アブー・ブルダ・ビン・アブー・ムーサーが彼の父から聞いて私に語ってくれた話によると、アッラーのみ使いはこういわれた『人々の中で二重の報償をアッラーから与えられるのは次の三つに属する人たちである。
啓典の民でその預言者の教えを信じ、しかも預言者ムハンマドの時代まで生きて彼の教えに帰依し、彼に従い、彼の言葉全てを正しいと確信した者、その者には二重の報償が与えられる。
また、アッラーに対する全ての義務を行い、かつ、その主人に対する義務も忠実に果たす奴隷に対しても、二重の報償が約束される。
更に、女奴隷を所有する者が、彼女に十分な食事を与え、よく面倒をみ、教養を身につけさせ、立派な作法を教え、自由の身にしてやり、その女と結婚したならば、その者に対しても二重の報償が下される』」
このハディースを語った後、シャービーはフラーサーン人にむかって「あなたに述べたハディースをそのまま信じなさい。
人はかつて、それよりもっと簡単な内容のハディースをすら求めて、マディーナまでも旅したのです（注）」といった。
（注）それに比べればあなたに語ったハディースは十分真実味のある内容で、棄て去るには惜しいものです　の意
前記と同内容のハディースは、別の二つの伝承者経路でシャービーより聞いたサーリフ・ビン・サーリフによって伝えられている。

イエスの降臨について

イエスの降臨について
1巻　P.114-116

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「私の生命をその御手に握っておられる方に誓って。
マリヤの息子（イエス）はあなた方の処に正しい裁き人として間もなく天下って来るであろう。
そして、彼は十字架を打ち壊し、豚を殺し、ジズヤ（人頭税）を廃止するだろう（注）。
また、富はあふれんばかり豊かとなり、誰もそれを受け取る者はいなくなるだろう」
（注）全人類がイスラームを受け入れるため披保護民（ジンミー）はいなくなり、従って彼らから徴収するためのジズヤ制度も廃止されることになる
前記と同内容のハディースは、ズフリーによっても伝えられている。
なお、この伝承口述者の一人イブン・ウヤイナは「正義の指導者、公正な裁き人として」と記しているが、同ユーヌスは「公正な裁き人として」と記すだけで「正義の指導者として」という言葉は述べていない。
なおまた、同サーリフやライスは「正義の裁き人として」という表現を用いている。
ジヤードの伝えるハディースには「ただ一度の礼拝が全世界よりも尊いものになるだろう」とあり、それに続けて「アブー・フライラは『望むならば、次の聖句「啓典の民の中、イエスをその死の前にしっかりと信じる者は、一人もいなかった」（クルアーン第4章159節）を唱えよ』というのが口ぐせであった」とも記されている。
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはいわれた
「アッラーに誓って。
マリヤの息子（イエス）は必らずや公正な裁き人として天より下り来たり、十字架を打ち壊し、豚を殺し、ジズヤ（人頭税）を撤廃し、若いめすらくだを解き放ってしまうだろう。
そしてまたどこにもそれらを使ってザカートを集めようと努力する者はいなくなるだろう。
恨みや憎しみ、また嫉み合いは消え去り、彼が人々に富を分け与えようと呼びかけても、だれ一人としてそれを受取る者はいない有様となるだろう」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「マリヤの息子（イエス）があなた方の間に来臨し、あなた方の指導者（イマーム）となった時、あなた方の状態はどうなるであろうか（注）」
（注）イエスはムスリムの一人として再臨するので、イスラーム法に従って世を治める指導者となる
なお、このハディースは「イマーム・マフディー（救世主）がすでに存在するところに預言者イエスが再臨した場合、どうなるのか」という意味に解釈される場合もある
別の伝承者経路によると、アブー・フライラはアッラーのみ使いの言葉を次のように伝えている
「マリヤの息子（イエス）があなた方の間に再臨し、あなた方を指導したら、あなた方はどうな

るであろうか」
更に別の伝承者経路によると、アブー・フライラはアッラーのみ使いの言葉を次のように伝えている
「あなた方の間にマリヤの息子（イエス）が再臨し、あなた方の仲間の一人としてあなた方を指導したら、あなた方はどうなるであろうか」
イブン・アブー・ズィーブによると、アブー・フライラは「あなた方の仲間から出た指導者」とも述べたという。
なお、イブン・アブー・ズィーブが「あなた方の仲間の一人としてあなた方を指導する」とはどんなことか説明して欲しいと述べたところ、アブー・フライラは「彼は主の下した啓示と預言者のスンナ（伝承）に従って、あなた方を指導なさるであろう」と答えた　と伝えられている。
ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
私は預言者がこういわれるのを聞いた
（すなわち）「私のウンマ（信仰共同体）の者らは、真理を広めるため努力し戦うことをやめず、それは審判の日まで続けられるだろう。
マリヤの息子イエスが再臨するだろうが、ムスリムたちの指導者が彼を招いて礼拝を指導するよう頼んでも、イエスは『いや（できない）』と言って断わることだろう
（ともあれ）あなた方は他の人々を指導する役目を担うだろうが、それはこのウンマの人々に対するアッラーの恩寵の現われに他ならない」

「信仰が拒否される」時について

アッラーに対する信仰が受け入れられない時について
1巻　P.116-118

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「“最後の時”は、太陽がその没する場所から昇るまで起ることはないであろう。
その没する場所から太陽が昇る日になって、人々全てが一斉に信仰すると誓っても、それ以前から信仰に入りその信仰に従って孝行を積まなかった者にとっては、なんらの役にも立たないだろう」
アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、他に四つの伝承者経路によっても伝えられている。
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「次の三つが現われた時、それ以前から信仰に入って善行を為さなかった者の信仰はなんら役立つことはないだろう。
それらは太陽がその没する所から現われること、ダッジャール（注1）及び大地からの一獣（ダッバトル・アルド（注2））が現われることである」
（注1）ダッジャールはアンチクリスト（偽キリスト）、詐欺師などと同意で、悪をもって真実を覆う者とされ、世の終りの時期策略・奸計をもって人々を惑わすといわれる
（注2）クルアーン　第27章82節には、この一獣についての啓示がみられる。終末の日に現われ人々を破滅に導く動物といわれる
アブー・ザッルはこう伝えている
預言者は或る日、「あなた方は、この太陽がどこに行くのか、知っていますか」といわれた。
人々が「アッラーとそのみ使いが最もよくご存知のはずです」と答えると、預言者はこう説明された。
「まことに太陽は、アッラーの玉座の下の憩いの場所に着くまで進み続けるのです。
そして、額ずいて礼拝し、『起きてお前が出て来た処まで戻りなさい』と命ぜられるまでその状態でここにとどまるのです。
それから太陽は戻って行き、その昇る場所から現われて、玉座の下の休み場所に達するまでまた動き続けるのです。
そして額ずいて礼拝を行い、また『起きてお前がでてきた処まで戻りなさい』といわれるまでその状態でとどまり続けるのです。
このようにしてまた、太陽は元の場所に戻って行き、その昇る処より昇り、そこから定まった軌道を進むわけです。
しかしながら人々はこのように、太陽が玉座の下の休み場所まで辿り着くことについて、何も知らないのです
（ともあれ、このような状態が正常であるのに）或る時、突然太陽は『起きてお前が没した場所

から昇れ』と命ぜられ、その没した場所から昇ることになるのです」
アッラーのみ使いは続けてこうもいわれた
「あなたたちは、それがいつ起るか知っていますか。
それは俄か信者の信仰が役に立たない時、または、その信仰によって、人々がまだなんらの善行もしてない時に起るのです（注）」
（注）その時期になって信仰を持っても善行を為す時間はないという意味である
アブー・ザッルによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。
アブー・ザッルは伝えている
私がモスクに入った時、アッラーのみ使いはそこに座っておられた。
そして、太陽が西空に没した時こういわれた
「アブー・ザッルよ、あなたは太陽がどこへ進むのかを知っていますか」
私が「アッラーとそのみ使いが最も良くご存知でありましょう」と答えると、み使いは「まことに太陽はアッラーに跪拝することへの許可を乞うため進みそれを許されるのです。
そしてある時、太陽は『お前の来た場所に戻りなさい』と命ぜられるのです。
それで太陽は没した場所から、昇ることになるのです」といわれ、
次いでアブドッラーにクルアーンの聖句「また太陽は規則正しく運行する。これも全能全智な御方の摂理である」（第36章38節）を誦ませた後、ご自分でもお唱えになった。
アブー・ザッルは伝えている
私はアッラーのみ使いに、アッラーの言葉「太陽がその定めの休み場所に行く」という意味についてたずねた。
み使いはこれに対し、「定めの場所はアッラーの玉座の下にある」といわれた。

み使いへの啓示の始まりについて

アッラーのみ使いに対する啓示の始まりについて
1巻　P.118-122

預言者の妻の一人アーイシャはこう伝えている
「アッラーのみ使いに下された最初の啓示は、睡眠中に正しく現われたものであった。
彼はその時、夜明けの薄光のように現われたその啓示を見たのです。
その時以来、彼は独居を好まれ、ヒラー山の洞窟にこもってタハンヌス（一神教信心）の行に没頭されました。
この行は何日も続くため、家族の下に戻るまでの必要な食糧を準備せねばなりません。
それが尽きると妻ハディージャの処に帰り、同じように、また数日分の食糧を準備なさったのでした。
こうした状況で彼がヒラー山の洞窟にこもっていた或る日、彼に啓示が下されたのです。
その時、彼の処に天使が現われ、こう命じたのです。
「読みなさい！」
これに対し彼は「私は文字が読めません」と答えたのです。
（み使いはこれに続けて以下のようにお話しになった）
「すると天使は私をとらえ、やっと耐え得るほどきつく押えつけこういわれた
『読みなさい！』
『私は文字が読めません』と答えると天使は、また再び私をとらえ、更に耐え難いほどきつく私を押えつけになり、そうして後『読みなさい！』と繰り返しいわれたのです。
これに対し、私は『文字が読めません』と同じ答えを述べたのです。
すると天使は私をつかみ、三度目もきつく押えつけになった後、私を放し次の聖句をお唱えになったのです。
「読め。
創造なされる御方、あなたの主の御名において。
一凝血から、人間を創られた。
読め。
あなたの主は、最高の尊貴であられ、筆によって書くことを教えられた御方、人間に未知なることを教えられた御方である」（クルアーン第96章1-4節）
アッラーのみ使いは、そのままお帰りになったが、心臓は恐怖のあまり震えつづけた。
ともあれ、彼はハディージャの処に戻りこういった
「私をなにかで覆い隠しておくれ！」
「包み隠しておくれ！」
それで人々は彼をその恐怖が去り気が静まるまで布で包み隠したのでした。
その後彼はハディージャにこういった

「ハディージャよ。一体何が私に起ったのだろうか」
そういって、彼は経験したことを彼女に語り「私は自分が怖くなった」と話した。
これに対し彼女はいった。
「恐れる必要はありません。
むしろお喜びなさい。
アッラーは決してあなたを悲しませることはなさいません。
アッラーに誓って申しますが、あなたは親族を大事になさるし、正直にお話しになる。
それに人の面倒事をひき受け、貧乏人を助け、また客人に親切を尽し、現世の浮沈に苦しむ人々を助けてこられたではありませんか」
ハディージャはこういった後、彼をワラカ・ビン・ナウファル・ビン・アサド・ビン・アブドル・ウッザーの処に連れて行った。
彼はハディージャの伯父の息子であり、その伯父は彼女の父の兄弟であった。
彼（ワラカ）はイスラーム宣教以前（ジャーヒリーヤ時代）にキリスト教に改宗した人物でアラビア語による何冊かの著作があり、その中には神の命ずるままに書いたインジール（福音書）についての著書もあった。
彼は盲目の老人であった。
（ともあれ）ハディージャはワラカにこういった。
「伯父上（長上への尊称）、あなたの兄弟の息子の言葉を聞いて下さい」
これに対しワラカ・ビン・ナウファルは「我が兄弟の息子よ、何を見たのですか」とたずねた。
アッラーのみ使いは、それで経験したこと全てを話した。
するとワラカは、彼に「それこそナームース（天使）です。
神が預言者モーゼに下された天使です。
ああ、もしも私があなたの活動時期に若者であり、またもしも人々があなたを追放する時私が生きておれば、お役に立つであろうに！」と語ったのでした。
み使いが「人々が私を追放するのですか」とたずねると、ワラカは「そうです」と答え「あなたと同様に、これをもたらされた人で敵意に苦しめられなかった方はいませんでした。
もし私があなたの活動する時代に生きておれば、必ずや全力を尽くしてあなたを助けるでありましょうに」といい添えた。
アーイシャによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられる。
ただし「アッラーのみ使いに下された最初の啓示は」に始まる前文と同内容であるが、これにはハディージャの言葉「アッラーに誓って申しますが、アッラーは決してあなたを悲しませることはなさいません」及び「伯父上、あなたの兄弟の息子の言葉を聞いて下さい」という表現はみられない。
アーイシャによる前記と同内容のハディースは、更に別の伝承者経路でも伝えられる。
なお、これには「アッラーのみ使いはハディージャの処に戻ったが、心は震えおののいていた」と記されているが、ハディースの最初の部分、すなわち「アッラーのみ使いに下された最初の啓示は睡眠中に正しく現われたものであった」という表現はみられない。

ただ前記ハディースと同様に「アッラーに誓って申しますが、アッラーは決してあなたを悲しませることはなさいません」
「伯父上よ、あなたの兄弟の息子の言葉を聞いて下さい」などというハディージャの言葉は記されている。
アッラーのみ使いの教友の一人ジャービル・ビン・アブドッラー・アンサーリーは常々こう語っていた
アッラーのみ使いは最初の啓示以後、しばらくそれが中断されたことについて語った後、次のようにいわれた
「私が歩いていた時、天より或る声が聞こえた。
私が頭をあげると、天地間に浮んだ台座に座しながらヒラー山にいる私の処に下って来る天使が見えた。
私はそのため恐怖におびえ、家族の下に帰ってこういった
『私を包み隠してくれ！　私を包み隠してくれ！』
それで彼らは私を布で隠してくれた。
すると恩寵深く至尊なるアッラーは、次の啓示を下された
「大衣に包る者よ。
立ち上って警告しなさい。
あなたの主を讃えなさい。
またあなたの衣を清潔に保ちなさい。
不浄を避けなさい」（クルアーン第74章1-5節）。
ここでいう不浄とはもろもろの偶像のことである。
それから後、啓示は続けて下されるようになったのである」
ジャービル・ビン・アブドッラーによると、彼はアッラーのみ使いがこういわれるのを聞いた
「私に対する啓示（ワヒー）は、しばらくの間中断された。そして私が歩いていた時」
以下は前記と同内容のハディースである。
なおユーヌスの伝えるハディースには「私は恐怖のあまり地上に倒れた」という表現がみられ、また、アブー・サラマのそれには「不浄とは、もろもろの偶像を意味する。
このあと、次々と多くの啓示が下されたのである」と記されている。
ユーヌスによる前記と同内容のハディースは、ズフリーから聞いたマアマルによっても伝えられ、それには「恩寵深く至尊なるアッラーは次の句を啓示された」
「大衣に包る者よ、立ち上って警告しなさい。
あなたの主を讃えなさい。
またあなたの衣を清潔に保ちなさい。
不浄を避けなさい」（クルアーン第74章1-5節）
「礼拝が義務づけられる前であった」。また「私は恐怖におののいた」という記述がみられる。
ヤヒヤーは伝えている
私がアブー・サラマに「クルアーンで最初に啓示されたのは何ですか」とたずねたところ、彼

は「大衣に包る者よ（クルアーン第74章全15節）である」と答えた。
私はこれに対し「読め、創造される御方、あなたの主の御名において（凝血の章）ではありませんか」といった。
私は、また、ジャービル・ビン・アブドッラーにもクルアーンで最初に啓示されたのは何かとたずねたが、彼も「包る者章である」と答えた。
私が「凝血の章ではありませんか」といったところ、ジャービルはこう語った
「私はアッラーのみ使いが私たちにいわれたことを、あなた方に話しているのです。
み使い様はこういわれました
『私はヒラー山に一ヶ月こもった。
私のここでの滞在が終った時、私は山から下り、谷底の方に行った。
その時、私は誰かに呼ばれた。
私は前後左右を見たが誰もいなかった。
私は再び名を呼ばれたので探しまわったが誰もいなかった。
私は更にまた名を呼ばれたので頭を上げた。
すると空中に浮かぶ玉座の上に彼、すなわちジブリールが座しておられたのだった。
私が、恐怖のあまり震え出しハディージャの処に帰って『私を包み隠してくれ』といったので、家族の者らは私を包み隠し、私に水をかけてくれた。
アッラーはこの時「大衣に包む者よ、立ち上って警告しなさい。
あなたの主を讃えなさい。
またあなたの衣を清潔に保ちなさい」（クルアーン第74章1-5節）と啓示なされた（注）」
（注）クルアーン最初の啓示は「凝血の章（第96章）」といわれる。
ここで「包る者章（第74章）」を最初の啓示であると述べているのは、中断後の最初の啓示と理解すべきであろう
ヤヒヤー・ビン・アブー・カシールは前記と同内容のハディースを伝えているが、それには「ジブリールは天地間に浮んだ玉座の上に座っておられた」と記されている。

夜の旅と昇天について

夜の旅（イスラー）と昇天（ミイラージュ）について
1巻　P.122-134

アナス・ビン・マーリクによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「私のブラーク（注1）が連れてこられた。
それは白色で胴体が長く、ろばよりは大きいがらばよりは小さく、それでいてそのひづめを視界の広さまで伸ばすことのできる動物であった。
私はそれに跨がり、エルサレムの聖寺院（バイトル・マクデス）まできた。
そして私は、預言者らが使う輪にブラークをつないでから、モスクに入り二ラカートの礼拝を行った。
そのあと、外に出たところ、天使ジブリールがぶどう酒入りの容器とミルク入りの容器をもってきたので、私はミルクを選んだ。
ジブリールはこれに関し『あなたは良いもの（注2）を選んだ』といった。
その後、彼は私を連れて天に昇り、天の門を開けるよう頼んだが、その折、『誰か』とたずねられると『ジブリールです』と答え、更に、『誰があなたと一緒ですか』と問われると、『ムハンマドです』と答えた。
更にまた『彼はアッラーの使徒であるか』と問われた時ジブリールは『その通りです』と答えた。
その後、天の門は私たちのため開かれたが、なんとそこには預言者アダムがおり、私を歓迎し私のため善かれと祈ってくれた。
その後私たちは、第二層の天界に昇った。
ジブリールはその門を開けるよう頼んだが、その折、『誰か』とたずねられると『ジブリールです』と答えた。
彼はまた『誰と一緒か』と問われ、『ムハンマドと一緒です』と答えた。
それに対し更に『彼は使徒の一人か』とも問われたが、『まことにその通りです』と答えた。
その後天の門は私たちのために開かれた。
そこには、母方の従兄弟に当るイーサー・ビン・マリヤム（マリヤの子イエス）とヤヒヤー・ビン・ザカリヤがおり、私を歓迎し私のため善かれと祈ってくれた。
それからジブリールは私を第三の天界に連れて昇った。
彼は、そこで門を開くよう頼んだ。
そして『誰か』といわれた時、『ジブリールです』と答え、『誰と一緒か』と問われた時、『ムハンマドです』と述べた。
更に『彼は使徒の一人か』とたずねられ、『その通りです』と答えた。
すると門は私たちのために開かれ、なんとそこには、世界の実の半分を与えられたといわれる美しい顔立ちの預言者ユースフがおり、私を歓迎し、私の幸福のため祈ってくれた。

その後、私たちは第四の天界に昇った。
そこでジブリールは門を開けるように頼んだ。
その折『誰か』と問われて『ジブリールです』と答え、また『誰と一緒か』とたずねられ、『ムハンマドと一緒です』と答えた。
更に『使徒の一人か』と問われた時には、『その通りです』と述べた。
私たちのため門が開かれたが、そこにはなんと預言者イドリースがおり、私を歓迎し、私の幸いを祈ってくれた。至高にして尊貴なるアッラーは、このイドリースについて「われは、イドリースを高い地位に挙げた」（クルアーン第19章57節）と啓示しておられる。
そのあと私たちは、第五の天界に昇った。
ジブリールは、ここでも門を開けるよう頼み、『誰か』と問われた時『ジブリールです』と答え、更に『誰と一緒か』との問いには『ムハンマドです』と述べ、また『ムハンマドは使徒の一人か』との質問には『使徒の一人です』と答えた。
門が私たちのために開かれた時、そこには預言者ハールーン（アーロン）がおり、私を歓迎し、私の幸いを祈ってくれた。
その後、私たちは、第六の天界に昇った。
ジブリールが門を開けるよう頼むと『誰か』と問われたが、それには『ジブリールです』と答えた。
更に『誰と一緒か』といわれた時、『ムハンマドです』と述べ、『使徒の一人か』とたずねられると『その通りです』と答えた。
すると門は私たちのために開かれ、そこには預言者ムーサー（モーゼ）がおり、私を歓迎し、私の幸いを祈ってくれた。
その後、ジブリールは私を連れて第七の天界に昇った。
ジブリールは門を開けるよう頼んだが、その折『誰か』といわれ『ジブリールです』と答えた。
『誰と一緒か』と聞かれた時、彼は『ムハンマドと一緒です』と答え、また『ムハンマドは使徒の一人か』とたずねられた時『その通りです』といった。
すると門が私たちのため開かれ、なんとそこには預言者イブラヒーム（アブラハム）がバイトル・マアムール（不断に詣でられる聖殿（注3））に背を寄りかからせながら座っていた。
そしてここではまた、毎日七万人の天使が、それぞれただ一度ずつの機会を与えられた巡拝のため門内に入ってゆく姿も見られた。
その後、私は『遠く涯にあるシドラ木（シドラトル・ムンタハー（注4））』の処に案内されたが、その葉は象の耳に類似し、その実は土つぼのように大きかった。
この木がアッラーの命令によって花で覆われた時の美しさはアッラーの創造物の誰一人として讃え尽すことができないほど素晴らしいものである。
アッラーはこの折啓示を給わり、毎昼夜、50回の礼拝を義務とするよう私に命じられた。
その後、私がムーサー（モーゼ）の処に下りて行った時、彼はこうたずねた
『主はあなたのウンマ（信仰共同体）に何を命ぜられたのですか』
私が『50回の礼拝です』と答えると、

彼は『主の処に戻って礼拝の回数を減らして下さるようお願いしなさい。
なぜならあなたのウンマの者はその負担に耐えられないからです。
私自身イスラエルの民に試み彼らにそれを課したのですが、彼らはそのような重い負担に耐えきれなかったのです』
（アッラーのみ使いはいわれた）
それで私は主の許に戻り『我が主よ、私のウンマのため、負担をもっと軽くして下さい』と頼んだ。
その結果主は私のため五回分だけ礼拝を減らして下さった。
私がムーサーの処に下りて『主は私のため礼拝を五回分だけ減らして下さった』と話したところ、ムーサーはこういった。
『あなたのウンマは、その負担に耐えることはできないだろう。
それ故、主の許に戻り、もっと負担を軽くするようお願いしなさい』
それから私は幾度も、恩寵深く至高なる主とムーサーの間を行き戻り続けた。
主は最後に、こういわれた
『ムハンマドよ、毎日昼夜五回の礼拝が妥当であろう。
その毎回の礼拝を10倍に数えれば、日に50回の礼拝を行うことになろう。
一つの善行を志しながらそれを実行しなかった者に対しては、一つの善行印が記録される。
そしてもし彼がそれを実行した場合には彼のため10倍して記録されるのである。
また一方、一つの悪行を企図しながらそれを実行しなかった者に対しては、なにも記録されることはないし、それを実行したとしても、ただ一回の悪行とのみ記録されるだろう』
その後、私は下ってムーサーの処に行き、このことを彼に話した。
するとムーサーはまた『主の許に戻り、負担をもって軽くするようお願いしなさい』といった。
（これに関し、アッラーのみ使いは次のようにいわれた）
『私はすでに私自身が主に対し恥ずかしくなるほど、たびたび主の許に戻り負担を軽くするようお願いしたのです』」
（注1）ブラーク　天馬の一種。稲妻（バルク）と同類語てある点から動作の迅速なることか想像される
（注2）良いもの（フィトラ）自然性にかなったもの　という意味
（注3）バイトル・マアムール（不断に詣でられる聖殿）クルアーン（第52章4節）にも記される。
創造主アッラーを讃えるため天国において無数の巡拝者が詣でる聖堂。
マッカのカーバ神殿の原型ともいわれ、それぞれが天と地にあってアッラーの唯一性のシンボル、巡礼の中心地とされている
（注4）シドラ木（シドラトル・ムンタハー）クルアーン（53章14節、16節。56章28節）にも天国の至福の象徴として記述されている。
原意は“だれも越えることのてきない涯にあるシドラの木”でその濃い緑蔭はしばしばアッラーの加護の深さにたとえられる。

“象の耳の如き葉”や“土つぼの如き実”は、神の知恵の広大無辺さの表象といわれる
アナス・ビン・マーリクによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「天使たちが、私の処に来て、私をカーバ神殿近くのザムザム井戸に連れていった。
そこで、私の心臓は切り開かれ、ザムザムの聖水で洗浄された。
その後、私は元の場所に置き去りにされた」
アナス・ビン・マーリクはこう伝えている
天使ジブリールが仲間の少年たちと遊んでいたアッラーのみ使いの処にやってきた。
天使は彼をとらえ、地面に寝かせ胸部を切り裂いて心臓を取り出し、そこから血の塊を摘出して後「これはあなたの中に巣くっていた悪魔（シャイターン）の一部です」といった。
その後天使は、ザムザムの聖水の入った黄金製の水盤の中でそれを洗い清め、綴じ合わせてそれを元の場所に戻した。
一緒に遊んでいた仲間の子供たちは、彼の育ての母、つまり、乳母の処に駈けて行き、「ムハンマドが殺された」と叫んだ。
それで人々は急いで彼の処まで行ってみた。
しかし彼は無事でただ顔色のみがいつもと変っているだけだった。
これに関連しアナスは「私自身、ムハンマド様の胸部に、その時の縫い痕を見ました」と語っている。
マーリク・ビン・アナスは、カーバ神殿のある聖モスクからのアッラーのみ使いの夜の旅（イスラー）についてこう伝えている
三人の天使が、カーバのモスクにいるアッラーのみ使いの処にやってきたが、夜の旅と昇天に関する命令が啓示される前まで、彼はその聖なるモスクで眠っておられた。
以下のハディースは前記と同内容であるが、話の順序その他に多少の異同がみられる。
アナス・ビン・マーリクは、アブー・ザッルがアッラーのみ使いの次の言葉をいつも語っていたと伝えている
「私がマッカにいた時、私の家の屋根が裂けて、ジブリールがそこから下りて来た。
そして私の心臓を切り開いてザムザムの水で洗い清めた。
その後知恵と信仰を満たした金色の水盤を持ってきて、それを私の胸の中に注ぎ込んで後、胸を閉じ合せた。
それから、私の手をとって連れ出し天に昇った。
私たちが最も下層の天（サマーウル・ドニア）に着いた時、ジブリールはそこの番人に『開けよ』といった。
そして番人が『どなたですか』と問うた時『ジブリールです』と答えた。
番人が更に『誰かがあなたと一緒ですか』と問うと『はい。ムハンマドが私と一緒です』と答えた。
番人は『ムハンマドは使徒の一人ですか』ともたずねた。
ジブリールはこれに対し『その通りです』と返事した。
その後、番人は門を開いてくれた。

私たちが最下層の天界に入った時、私は一人の人物がそこに座っているのを見た。
その右側、左側には、それぞれ一団の人々がひかえていたが、この人物は右側の人々を見ては笑いかけ、左側の人々を見ては涙を流していた。
その人物は私にむかって『敬虔なる預言者よ、正義の士よ、よくぞこられた』といった。
私がジブリールに『あの方は誰ですか』とたずねたところ、『彼は預言者アダムです。
彼の右側、左側の人々はいずれも彼の子孫の霊魂で、右側の人々は天国の住人、左側の人々は地獄の住人なのです。
それ故、アダムは右側を見る時はほほえみかけ、左側を見る時には泣くのです』と語ってくれた。
それからジブリールは第二層の天界に私を連れて昇り、そこの番人に門を開けるよう頼んだ。
番人は第一天界の番人と同様の質問を繰り返した後、門を開けてくれた」
これに関連し、アナス・ビン・マーリクは、「アッラーのみ使いは天界で、アダム、イドリース、イエス、モーゼそしてアブラハムに会ったといわれたが、第一天界のアダムと第六天界のアブラハム以外にこれら預言者たちの住いの様子について何も語っておられない」と述べている。
（ともあれ）ジブリールとアッラーのみ使いがイドリースの処を通った時、彼は「敬虔なる預言者よ、有徳の兄弟よ、よくぞこられた」といった。
アッラーのみ使いがそこを通りすぎてから「彼はどなたですか」とたずねると、ジブリールは「イドリースです」と教えてくれた。
アッラーのみ使いは更にこういわれた
「その後私はモーゼの処を通りすぎた。
彼は私にむかって『正義の預言者、有徳の兄弟よ、よくぞこられた』といった。
私はジブリールに『彼はどなたですか』とたずね、『モーゼです』と教えられた。
その後私はイエスの処を通った。
その後は『ようこそ！　正義の預言者、有徳の兄弟よ』といった。
私はジブリールに『あの方は誰ですか』とたずね、『マリヤの息子イエスです』と教えられた」
アッラーのみ使いは続けてこういわれた。
「その後私はアブラハムの処に行った。
後は私にむかい『ようこそ！　正義の預言者、有徳の兄弟よ』といった。
私が『彼はどなたですか』とたずねると『アブラハムです』とジブリールは教えてくれた」
これに関連しイブン・シハーブは、イブン・ハズムが、イブン・アッバース及びアブー・ハッバ・アンサーリーらから、たびたび聞いて彼に語ったハディースを、次のように伝えている。
アッラーのみ使いはいわれた
「このあとジブリールは私を連れてペンのきしる音の聞こえる（注1）ほど、高い処まで昇った」
イブン・ハズム及びアナス・ビン・マーリクによると、その後、アッラーのみ使いはこういわれた
「アッラーは、その折、私のウンマに対し日に五〇回の礼拝を義務としてお命じになった。
私がその命令を奉じ帰りにモーゼの処を通りかかった時、彼は私に『主はあなたの民人に何を命

じたのですか』とたずねた。
それで私は『五〇回の礼拝が彼らに義務として課せられました』と答えた。
するとモーゼは『主の許に戻りなきい。なぜならあなたの民人はそのような負担に耐えることができないからです』といった。
それで私は、主の許に戻った。
主は先の命令の幾分かを免じて下さった。
それから、再び私はモーゼの処に行き、そのことを彼に話した。
しかし彼はまた『主の許に戻りなさい。あなたのウンマの人々は、それには耐え得ないでしょう』といった。
それで私は再び主の許に帰ったのであるが、その時主はこういわれた
『日に五回の礼拝を命じる。これは、五〇回の礼拝に相当する数である（注2）。私が一度口にした言葉は、変更されることはない』
私はその後またモーゼの処に行った。
モーゼはまた『主の許に戻りもっと負担を軽くするよう主にお願いしなさい』といったが、これに対し『私は、主に対し恥ずかしいのです』と述べた。
このあとジブリールは、私を誰も越せないほど遠くにあるシドラ木の処に連れて行った。
その木は私の知らない様々な色で覆われていた。
私はまた、天国に入ることを許されたが、そこには真珠のドームがあり、地面にはじゃこうが敷きつめられていた」
（注1）アッラーの命令を書き取る天使らのペンのきしる音が聞こえる処まで近づいた、という意味である
（注2）一回の善行（ここでは礼拝）は一〇倍に数えられ報償されることを示す
アナス・ビン・マーリクは、恐らく彼と同部族のマーリク・ビン・サアサアから聞いて次のように伝えている
アッラーの預言者はこういわれた。
「私は、カーバの神殿近くで夢うつつの状態でいた時、傍らで眠っていた二人、すなわちハムザ及びジャウファル以外の誰か三人目の人が、なにかを話しているのを聞きました。
その後この人物は私の処にきて、私を連れ出しました。
そしてザムザム聖水入りの黄金製水盤を私の処に運び、私の胸をしかじかの部分まで切り開いたのです」
これに関連しカタータは、この話を語った人に「しかじかの部分までとはどんな意味ですか」とたずねたところ、彼は「それはアッラーのみ使いの胸部の下まで切り開いたという意味です」と答えた、と伝えている。
（この後、預言者の言葉が続く）「私の心臓は取り出され、ザムザムの聖水で洗浄された後、元のところに戻されました。
これ以来、私の胸は信仰と知恵で満たされたのです。
その後私の処に、ブラークとよばれる白色の、ろばよりは大きくらばよりは小型の動物が連れて

来られました。
その走り幅は果てしないほどの距離です。
ともあれ、私はそれに乗せられて出発し、最も地上に近い天界に到着したのです。
ジブリールはそこで門を開けるよう頼みました。
そして『誰か』とたずねられた時『ジブリールです』と答え、更に『誰と一緒か』と聞かれた時には『ムハンマドと一緒です』と答え、更にまた『彼は使徒の一人か』とも問われると、『そうです』と答えました。
それで門が私たちのために開かれ、『ようこそ！　到着された方々に神のご加護がありますように！』といわれたのです。
それから私たちは、アダムの処に行きました」
このハディースの後半をアナス・ビン・マーリクは次のように語った。
アッラーのみ使いはこういわれました
「第二の天界で、イエスとヤヒヤーに、また第三の天界でユースフに、第四の天界でイドリースに、第五の天界でハールーンに会ったのです。
それから私たちは天界の旅を続け、第六の天界に至ってモーゼの処に着き、彼に挨拶をしました。
彼は『ようこそ有徳の兄弟、正義の預言者よ』といって歓迎してくれました。
私がモーゼの傍を通りすぎた時、彼は泣きだし、それに対し『どうして泣くのか』という声が聞こえました。
この時モーゼは『主よ、あなた様が、私のあとに預言者として遣わしたこの若い人物の信奉者らは、私の信奉者たちよりも多く天国に入るでありましょう』と嘆いて訴えたのでした。
このあと、私たちは第七の天界まで昇り、アブラハムの処に至ったのです」
アナス・ビン・マーリクは、このハディースの中でアッラーの預言者は「四つの河がシドラ木の根元から流れているが、その中二つの河は、はっきりと見える河であり、他の二つの河は見えない河である」といわれた、と伝えている。
（ともあれ、アッラーの預言者は更に次のようにいわれた）
「私がジブリールに『これらの河は何ですか』とたずねると、彼は『二つの見えない河は天国にある河で、また、はっきり見える二つの河は、ナイル河とユーフラテス河なのです（注）』と答えてくれました。
このあと、バイトル・マアムール（巡拝者の絶えない聖殿）が私の目前に現われたのです。
私が『ジブリールよ、これは何ですか』とたずねると、彼はこういいました
『これはバイトル・マアムールです。日に七万の天使が巡拝のためここに入ります。
そして彼らには出て行った後、再び入ることができない処です』
この後、二つの容器が私の処に運ばれて来ました。
一つにはぶどう酒が、他にはミルクが入っており、二つ共私の前に置かれました。
私はミルク入りを選んだが、それに対し『あなたはよい方を選んだ！　アッラーはあなたを通じ、あなたのウンマを無理なく（自然の理にかなった方法で）導き給うことでしょう！』といわれ

ました。
この後、日に五〇回の礼拝が私に義務として課せられたのでした」
アッラーの預言者は続けてこのハディースの残りの部分を最後までお話になりました。
（注）この両河にはさまれた地域がイスラームの中心領域である、という意味にも解釈されている
マーリク・ビン・サアサアによると、アッラーのみ使いは前述と同内容のハディースを語って後、以下の言葉を付け加えられた
「私の処に、知恵と信仰を満たした黄金の水盤が運ばれた。
それから、胸の上部から腹部下まで真直に切り開かれ、ザムザムの聖水で洗い清められて後、知恵と信仰が注ぎこまれた」
カターダによると、アブー・アーリヤは、預言者の従兄イブン・アッバースから聞いて、彼にこう語った
アッラーのみ使いは、夜の旅（イスラー）について話された時「預言者モーゼはシャヌーア部族の人々のように、背の高い方であり、また預言者イエスは中背でちぢれ毛の方であった」といわれた。
この折彼は地獄の番人マーリクや、ダッジャールについてもお話しになった。
アブー・アーリヤは伝えている
あなた方の預言者の伯父の息子イブン・アッバースは、私たちにアッラーのみ使いがこういわれたと語った
「私はその夜ムーサー・ビン・イムラーン（イムラーンの息子モーゼ）の処を通った。
彼はやや褐色で背が高く、シャヌーア部族の人々のように体格のよい人物だった。
私はマリヤの息子イエスにも会ったが、彼は中背で白皙の顔に赤味がかった色つやをし、頭はちぢれ毛であった。
私はアッラーが私に示されたもろもろのみしるしのなかで、地獄の番人マーリクや、終末期に現われる偽救世主のダッジャールをも見せてもらった」
この話に関連し、アブー・アーリヤは「アッラーのみ使いがモーゼに会われたことに疑う余地はありません」と述べ、またカターダも「アッラーの預言者は確かにモーゼにお会いになった」
と語っている。
アブー・アーリヤは、イブン・アッバースから聞いてこう伝えている
アッラーのみ使いはアズラク谷を通った時「ここは、どの谷か」とおたずねになった。
人々が「アズラク谷（注1）です」と答えると、こういわれた
「私にはモーゼが大声でアッラーへのタルビーヤ（注2）の祈りを唱えながら、山道を降りて来る姿があたかも目に見える思いがする」
それからみ使いはハルシャー（注3）山道に着いた。
み使いは「この山道は何というのか」とおたずねになり、彼らが「ハルシャーの山道です」と答えると、こういわれた「私にはマッターの息子ユーヌス（ヨナ）が骨格のよい赤色のめすらくだに乗り、ウールの外套を着、フルバ（なつめの木の繊維）で作った手綱を持ち、タルビーヤを唱

える姿が目に見えるような気がする」
イブン・ハンバルのハディースによれば、フシャイムはフルバを、なつめの木の繊維であると説明している。
（注1）アズラク谷（ワーディ・アズラク）マッカからマディーナにむかって約一マイルほどの処にある谷。
アズラクという人物に因んで付けられたという
（注2）タルビーヤ（巡礼朗誦）「私はここにおります。アッラーよ、あなたは比肩するものもない唯一の御方です。御前に参りました。私はあなたに従います」と唱える
（注3）ハルシャー山　シリヤとマディーナの間、ジュファの近くにある山の名
アブー・アーリヤによると、イブン・アッバースはこう語った
私たちはアッラーのみ使いに従いマッカとマディーナの間を旅し、或る谷を通りかかった。
その折「これは何という谷か」とみ使いがいわれたので、人々は「アズラク谷です」と答えた。
み使いは「私にはモーゼが目に見える思いです」といわれて、モーゼの顔色や髪などについて（伝承者の一人ダウードがよく記憶できなかった事柄を）お話しになり、更に「モーゼは、指を両耳に当てて大声でアッラーに対してタルビーヤの祈りを唱えをがら、この谷を通って行った」といわれた。
私たちは更に旅して或る山道にさしかかった。
み使いが「これはどの山の道か」といわれたので、人々は「ハルシャー山、もしくは、リフト山です」と答えた。
するとみ使いは「私には、ヨナが羊毛の衣を着、赤いらくだに乗って通る姿が目前に見えるような気がする。らくだの背で彼は、なつめの木の皮から作った手綱を手にし、タルビーヤを唱えながらこの谷を通りすぎて行った」と話された。
ムジャーヒドはこう伝えている
私たちは、イブン・アッバースの処で、ダッジャールについて話し合った。
この折、ある人が「ダッジャールの両眼の間には、カーフィル（不信者）という言葉が書かれている」といった。
イブン・アッバースはこれに対し「私は、アッラーのみ使いからそれについてお聞きしたことはなかった。
しかし彼がこういわれたのを覚えている。
すなわち『アブラハムに関しては、あなた方の教友、つまりムハンマドその人を見ればよい（注）。
モーゼに関して言えば、彼はなつめの木の繊維で作った手綱を手にして、赤いらくだに乗ったやや褐色の顔付きの体格のよい人物である。
私にはその後が、谷を降りながらタルビーヤを唱える姿が目に見えるような思いがする』と」
（注）ムハンマドはアブラハムの生き写しであるという
ジャービルによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「或る時、もろもろの預言者が私の前に現われた。

モーゼもその中におり、彼はあたかもシャヌーア部族の人々のように背が高かった。
私はマリヤの息子イエスを見たが、彼に最もよく似ているのは、ウルワ・ビン・マスウードであろうと思う。
私は、また、アブラハムを見たが、彼はあなた方の教友、すなわちムハンマド自身に最もよく似ていると思う。
私はジブリールをも見たが、彼に最もよく似た人物は、ディフヤ（イブン・ルムフによると、ディフヤ・ビン・ハリーファ）であると思う」
アブー・フライラによると、預言者はこういわれた
「夜の旅に連れ出された時、私は、モーゼに会った」
この後、預言者は次のようにお話しになった
「モーゼはあたかもシャヌーア部族の人々のように背が高く頭髪を長くした人物だった。私はまた、イエスにも会った」
こう語って預言者はイエスに関して「中背であたかも風呂から出てきたばかりのように赤味がかった顔つやの人物だった」と述べた。
預言者はこうもいわれた
「私はアブラハムを見たが、彼の子孫の中で私が彼に最もよく似ている」
預言者はまた、こうも語られた
「私の処に二つの容器が運ばれて来たが、その一つにはミルクが、他の一つにはぶどう酒が入っており、私はそのうちどれでも選ぶようにといわれた。
それ故私はミルク入りの容器を取り、それを飲んだ。
すると天使は『あなたはイスラームの教えに忠順である（もしくは、教えの真髄を会得している）もしあなたがぶどう酒を選んだならば、あなたのウンマは正道をふみはずすことになったであろう』といった」

イエスと偽キリストについて

イエスと偽キリスト（マスィーフル・ダッジャール）について
1巻　P.134-137

アブドッラー・ビン・ウマルによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「或る夜、私はカーバの近くにいた。
その時、私はかつてあなたが見たこともないほど、白く美しい顔立ちの男を見かけた。
彼は巻毛で、それもあなたがかつて見たこともないほど美しい巻毛であった。
彼がそれを櫛ですいたため水がしたたり落ちていた。
後は二人の男（もしくは、二人の男の肩）に寄りかかりながら、カーバ神殿の周りをタワーフ（巡回）していた。
『彼はどなたですか』と私がたずねると、『マリヤの子イエスです』と告げられた。
この折、私はまた別の人物を見た。
その人は頑丈な体格をし、ちぢれ毛であったが右目がつぶれ、ふくれたぶどうのようになっていた。
『彼は誰ですか』と私がたずねると『彼はマスィーフル・ダッジャール（偽キリスト）です』と告げられた」
アブドッラー・ビン・ウマルによると或る日、アッラーのみ使いは人々にマスィーフル・ダッジャールについてこうお話しになった
「まことにアッラーの両眼は健全であられる。
しかるにマスィーフル・ダッジャールの右目は見えず、それもぶどうのように脹れ上っているのです」
つづいてアッラーのみ使いはこういわれた
「私は或る夜、夢でカーバの近くに、美しい顔立ちの男がいるのを示された。
その人は、あなたがかつて見たいかなる人よりもすっきりした顔立ちをしていた。
ほどよくちぢれた巻き毛は彼の両肩にかかり、そして頭からは水のしずくがたれ落ちていた。
彼は両手を二人の男の肩にかけ、その二人にはさまれながらカーバの周りをタワーフしていた。
『彼は誰ですか』と私がたずねると、人々は『マリヤの子メシヤ（キリスト）です』と答えた。
私はまた彼の後に、髪をちぢらした頑丈そうな、右目がつぶれた男を見た。
私がこれまで会った人々の中では、イブン・カタンによく似た顔付きの男だった。
彼は、カーバの周りをタワーフしながら、両手を二人の男の肩にかけていた。
『彼は誰ですか』と私がたずねると、人々は『マスィーフル・ダッジャールです』と教えてくれた」
イブン・ウマルによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「私は、カーバの近くで、頭髪の長いすっきりした白い顔立ちの人物を見かけた。
彼は両手を二人の男の上においていた。

水が彼の頭から流れていた（もしくは、したたり落ちていた）。
私が『彼は誰ですか』とたずねると人々は『彼はマリヤの子イエス、もしくは、マリヤの子メシヤ（キリスト）です』と告げてくれた」
（イブン・ウマルは、どちらの言葉であったか記憶してないと語っている）
アッラーのみ使いは続けてこういわれた
「私は彼の後に、ちぢれ毛で赤ら顔の体格のよい、右目が盲の男を見た。
彼はイブン・カタンによく似た顔付きをしていた。
私が『彼は誰ですか』とたずねた時、人々は『マスィーフル・ダッジャールです』と教えてくれた」
ジャービル・ビン・アブドッラーによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「クライシュ部族の人々が私の言葉を信じなかった時、私は、ヒジュル（カーバ神殿の西側にある半円径の囲い《ハテーム》壁）の処にいた。
この折、アッラーは私のために、バイトル・マクデス（エルサレムの神殿）を天空にあげて下さった。
私はそれを見ながら、クライシュ部族の人々に、そこの様々な特長（アーヤ）について語って聞かせた」
ウマル・ビン・ハッターブによると、アッラーのみ使いは或る時こういわれた
「私は夢の中でカーバをタワーフしている自分自身を見た。
私はまたそこで、柔らかな長い髪をした色白の美しい人物が二人の男にはさまれながら、カーバのタワーフをする姿を見た。
彼の頭からは水がしたたり落ちていた（もしくは、頭から水が流れていた）
『彼は誰ですか』と私がたずねると、人々は『マリヤの息子です』と教えてくれた。
それから私は前方に進み周囲をながめまわした。
その時赤ら顔で頑丈そうな、頭髪がちぢれ、しかも片目が脹れあがってぶどうのようになっている男を見かけた。
私が『彼は誰ですか』とたずねると人々は『彼はダッジャールです』と教えてくれた。
ダッジャールは、イブン・カタンによく似た人物だった」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「私は夢の中でヒジュルの処におり、クライシュ部族の者らに、“夜の旅”について質問されていた。
私はバイトル・マクデスの様子をたずねられたが、それに関してよくは記憶してなかった。
そのため私はかつて経験したことのないほど大変困惑してしまった。
するとその時アッラーは、バイトル・マクデスを私の目の前に浮び上がらせて下さった。
そのお陰で私はようやく彼らの質問に何でも答えることができたのであった。
私はまた、私自身が他の預言者らと一緒にいる夢を見た。
そこではモーゼが立って礼拝をしていた。
彼はあたかもシャヌーア部族出身者のように、立派な体格をした人物だった。

私はまたマリヤの子イエスが立って礼拝している姿をも見かけたが、身近な人々の中で最もよくイエスに似ているのは、ウルワ・ビン・マスウード・サカフィーである。
私はまた、アブラハムが立って礼拝しているのを見たが、彼に最もよく似た人はあなた方の教友、すなわちムハンマド自身であろう。
礼拝の折には、私が彼らのイマーム（導師）となった。私が礼拝を終えた時、或る人がこういった
『ムハンマドよ、ここに地獄の主、マーリクがいる。彼に挨拶なさい』
それで私は彼の方をむいたが、彼の方から先に挨拶してくれた」

シドラトル・ムンタハーについて
1巻　P.137-138

アブドッラー・ビン・ウマルはこう伝えている
アッラーのみ使いは“夜の旅”に連れ出された時、“シドラトル・ムンタハー（遠い涯にあるシドラ木）”まで案内された（注1）。
その木は第六天界にあった。
この天界は地上から昇って来たものの終着点とされ、それらは全てここにとどめられた。
ここはまた、上から下りてきたものの到着点でもあって、それらも全てここにとどめられていた。
これに関連して「覆うものがシドラ木をこんもりと覆う時」（クルアーン第53章16節）とアッラーは啓示されたが、覆うものとは、黄金の蛾の群のことである。
アッラーのみ使いはここで、三つのことを許可された。
それらは日に五回の礼拝を行うこと、クルアーン雌牛の章（第2章）の最後の部分に関連すること（注2）、更にみ使いの信奉者で、アッラーに対し一切同位者を置かない者の罪が許されることなどである。
（注1）シドラトル・ムンタハーは、前出のハディースによれば第七天界にあるとされるが、ここでは第六天界に位置すると記されている。
それ故この木については、第六天界に根を張りながらその枝葉が第七天界まで伸び、繁茂しているものと考えるべきであろう
（注2）雌牛の章の最後286節には、アッラーが各人に能力以上の負担を負わせないこと、過ちを許すことなどについての啓示が記されている
シャイバーニーはこう語っている
私がジッル・ビン・フバイシュにアッラーのみ言葉「凡そ弓二つ、いやそれよりも近い距離にあった」（クルアーン第53章9節）について質問した時、彼は「イブン・マスウードは、その折預言者が六百の翼を持った天使ジブリールをごらんになったと話しておられた」と語った。
アブドッラー・ビン・ウマルはこう伝えている
アッラーのみ言葉「心は自分が見たことを偽らない」（クルアーン第53章11節）とは、アッラーのみ使いが六百の翼を持ったジブリールを確かに見られたことを意味するものである。
アブドッラーはこう伝えている
アッラーのみ言葉「彼は確かに、主の最大のしるしを見たのである」（クルアーン第53章18節）は、アッラーのみ使いが600の翼を持ったジブリールの姿を見たことを示している。

み言葉「彼を見た」に関連して

アッラーのみ言葉「彼を見た」に関連して
1巻　P.138-141

アブー・フライラはこう伝えているアッラーのみ言葉「本当に彼（ムハマンド）は、再度の降下においても、彼を見たのである」（クルアーン第53章13節）は、アッラーのみ使いがジブリールを見たことを示している（注）。
（注）預言者が天使ジブリールの真の姿を拝したのは二回のみで、最初の場合はヒラー山で初めての啓示を受けた時であり、二度目は夜の旅、昇天の折であったといわれるイブン・アッバースはこう伝えている預言者はアッラーを心の中で見られたのである。イブン・アッバースはこう伝えているアッラーのみ言葉「心は自分が見たことを偽らない」（クルアーン第53章11節）及び「本当に彼（ムハンマド）は、再度の降下においても、彼を見たのである」（クルアーン第53章22節）は、アッラーのみ使いが二度も、心の中で彼を見たことを示している。アブー・ジャフマは、前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えている。
マスルークは次のように伝えている私がアーイシャの家で休息していた時、彼女はこういった「アブー・アーイシャよ（マスルークの呼び名）、三つの大切な事柄があります。その中の一つでも口にすれば、アッラーに対し、大きな虚偽を語ったことになります」私が「それらは何ですか」とたずねると、彼女はいった「ムハンマド様が、アッラーを直接目で見たと主張する者は、アッラーに関し最大の嘘を述べたことになります」私はそれまで横になっていたが、この言葉を聞くと起きて座り直しこういった「信者の母よ（預言者の妻の呼び名）、一寸待って下さい。そう話を先に急がないで下さい。アッラーはこのことに関連し「彼は明るい地平線上にはっきりと彼を見た」（クルアーン第81章23節）、及び「本当に彼は、再度の降下において彼を見たのである」（クルアーン第53章22節）といわれなかったですか」彼女はいった「私は信者の中で最初に、この件に関しアッラーのみ使いにおたずねした者です。み使いはこういわれたのです『彼とはまこと、ジブリールのことです。私がアッラーによって造られた彼のお姿を見たのは、クルアーンに示される前記の二度の場合以外にありません。すなわち私は、彼が天から降下して来、天と地の間をその御姿の雄大さで、満たされたのを見たのです』と」彼女は続けていった「アッラーがこう啓示されたみ言葉を聞いたことはありませんか「（こちらの）視覚では、彼を見ることはできない。だが彼はこちらのまなざしまですっかりお見透しになられる。まことに彼は、全てに親切であり、熟知しておられる」（クルアーン第6章103節）それに、アッラーのこのみ言葉も聞いたことはありませんか「アッラーが人間に（直接）語りかけられることはない。啓示によるか、帳の蔭から、または使徒（天使）を遣わし、アッラーが命令を下して、その御望みを明かす。本当にアッラーは、至高にして英明であられる」（クルアーン第42章51節）」アーイシャは続けてこう語った「み使いがアッラーの啓典の教えをなぜか隠していると主張する者は、アッラーに対し大きな虚偽を語ることになります。アッラーはこう啓示されました「使徒よ、主からあなたに啓示されたことを人々に伝達しなさい。さもないと彼の啓示を伝達すべき使命は果せないことに

なるだろう」（クルアーン第5章67節）と」アーイシャは更にこう話した「明日起こることを予知できると主張する者は、アッラーに対し大なる虚偽を語ることになります。アッラーは「いってやるがよい。幽玄界を知るものは天地の間でアッラーの外にはないのである」（クルアーン第27章65節）と啓示なされたのです」ダウードも前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えているが、その中に次の表現が加えられているアーイシャはこう語った「もしムハンマド様がなんらかの啓示を隠されるとしたら、次の啓示を必らずお隠しなされたであろう。（すなわち）「アッラーの恩恵を授かり、またあなたが親切を尽した者（ザイド）にこういった時を思え。"妻をあなたの許に留め、アッラーを畏れなさい"。だがあなたは、アッラーが暴露しようとされた、自分の胸の中に隠していたこと（養子の妻との結婚が人の口の端に上がること）を恐れていた。むしろあなたはアッラーを恐れるのか本当であった（注）」（クルアーン第33章37節）」
（注）預言者は養子ザイドがその妻ザイナブを離婚した時彼女を己れの妻の一人に加えたが、己れの養子の元の妻とのこの結婚が醜聞として人々に噂されるのを恐れたのであるマスルークは伝えている私がアーイシャにムハンマド様が主を本当に見られたかどうかについてたずねた時、彼女はこういった「アッラーを讃美致します！あなたがそのようなことをいうと、私の髪は恐ろしさに逆立つ思いです」このあとマスルークは前記と同内容のハディースを語った。なおダウードの伝えるハディースはこれより長く完全な内容である。マスルークは伝えている私はアーイシャに「アッラーのみ言葉「それから降りて来て、近付いた。凡そ弓二つ、いやそれよりも近い距離であったか。そしてしもべ（ムハンマド）に彼の啓示を告げた」（クルアーン第53章8-10節）についてどう考えますか」と質問した。彼女はこういった「それはジブリールのことです。彼は人間の姿をしていつもアッラーのみ使いの処に来られたのです。しかしこの時には、彼本来の姿で現われ空の涯まで満たされたのです」

「神は光である」に関して

“神は光である”という言葉に関して
1巻　P.141

アブー・ザッルはこう伝えている
私が、アッラーのみ使いに「あなたは主を見たのですか」とおたずねした時、彼は「私が見た主は光であった」といわれた。
アブドッラー・ビン・シャキークはこう伝えている
私がアブー・ザッルにむかって「もし、アッラーのみ使いにお会いできたら、質問したいことがあります」と話したところ、彼は「どんなことについてですか」といった。
私は「み使いが主を見られたかどうか、おたずねしたいのです」と述べた。
これに対し、アブー・ザッルは「実は私はそのことをおたずねしたのです。
その折、み使いは『私は光りを見た』とお答えなされたのです（注）」と語った。
（注）「主は光りであった」「私は光りを見た」という前記両ハディースの表現については「私と主の問に、光りの幕（ベール）があった。それ故見ることができなかった」「私は光りの幕（ベール）を見たのみである」とする解釈もある

「アッラーの覆い」に関して

“アッラーはお眠りにならない”“覆いは光りである”について
1巻　P.141-142

アブー・ムーサーは伝えている
アッラーのみ使いは私たちの問に立ってアッラーに関し、五つの事をこうお話しになった。
すなわち「アッラーはお眠りにならない。
また、眠りを必要とされない方である。
アッラーはしもべらの所行を判定するための秤りを低めたり、高めたりなさる方である。
夜の行為は昼の行為の前に、また、昼の行為は夜の行為の前に、アッラーの許に報告される。
アッラーの覆い（ベール）は光りである《アブー・バクルの伝えるハディースによると、“光り”ではなく“火”となっている》
もしアッラーがその覆い（ベール）をはずすようなことがあれば、お顔の輝きのため、その御目が届く範囲にあるアッラーの創造物は、全て焼き尽されるだろう」
アアマシュは伝えている
「アッラーのみ使いは私たちの間に立ったまま、四つのことを話された」
以下の内容は前述のハディースと同じであるが、“アッラーの創造物”という言葉はない。
ただし“アッラーの覆いは光りである”という表現はみられる。
アブー・ムーサーは伝えている
アッラーのみ使いは私たちの間に立って、四つのことをいわれた
「まことにアッラーは眠ることがなく、また眠りを必要とされる方ではない。
彼は、人の善悪を定める秤りを上げたり、下げたりなさる。
人の昼間の行為は夜に、夜の行為は昼に彼の許に報告される」

審判の日の主への目見えに関して

審判の日に主に目見えることに関して
1巻　P.142-143

アブドッラー・ビン・カイスが、父アブー・ムーサー・アシュアリーから聞いて伝えたところによると、預言者はこういわれた
「天国には、中に銀が詰まった銀製容器のある二つの庭園と金の詰まった金製容器のある二つの庭園とがある。
エデンの園で主を拝そうとする人々の前には、主の玉顔を覆う壮麗な外衣が見られることだろう」
スハイブは、預言者の言葉をこう伝えている
「天国の住民たるにふさわしい者らが（天国に）入って来た時、アッラーは『何かもっと望むものはないか』とおたずねになるだろう。
これに対し彼らは『私たちの顔を喜びで輝やかして下さったではありませんか。
天国に私たちを入らしめ、地獄から私たちを救って下さったではありませんか』といって感謝することだろう。
アッラーはベールをお上げになって人々にそのお姿をお見せになるが、アッラーから与えられるものの中で、そのお姿を拝すること以上に彼らにとって有難いことはないであろう（注）」
（注）信者は天国においてアッラーに目見える機会が得られ、彼らの視覚にはその時アッラーの壮観な御姿を見るにも耐え得る特別な力が与えられるという
ハンマード・ビン・サラマも前記と同内容のハディースを伝えているが、それには次の言葉が加えられている
「アッラーのみ使いはその後、次の聖句をお唱えになった。
「善行をした者には、天国に入るという素晴しい報奨もあり、また追加（注）もある」（クルアーン第10章26節）」
（注）アッラーのお顔を拝し得ること　を意味する

主に目見える方法について

主に目見える方法について
1巻　P.143-151

アブー・フライラは伝えている
人々がアッラーのみ使いに「私たちは、復活の日に主に会えるでしょうか」とたずねた時、彼はこういわれた
「満月の夜、月を見るのは困難ですか」
人々が「いいえ、み使い様」と答えると、彼は更に「雲がかかってない時、太陽を見るのは難しいですか」といわれた。
彼らが「いいえ、み使い様」と答えると次のようにお話しになった。
「丁度それと同じように、あなたたちは主を拝することができるのです。
主は復活の日に人々を集めこういわれるでしょう
『全ての者を、それぞれが崇拝したものに従わしめよ』
それ故太陽を崇めた者らは太陽に従い、月を崇めた者らは月に従い、またもろもろの偶像を崇めた者らはこれらの偶像に従うことになります。
このイスラームの信者のみは後に残されるが、その中には偽信者らも含まれることでしょう。
アッラーは、それから、彼本来の姿とは別の、彼らにも容易に見ることのできるお姿をして彼らの処においでになり『私はあなたたちの主である』といわれるでしょう」
しかし、人々はかれが主であることに気付かず
『アッラーよ、私たちをこの人から守り給え！
私たちはあなたが私たちの処においでになるまでここにおります。
あなたが本当においでになれば、私たちにはすぐあなたを判別することができるのです』
というでありましょう。
その後アッラーは彼らにも十分判別できる本来のお姿で現われ『私はあなたたちの主である』と仰せになるので、ようやく彼らは『あなたこそ私たちの主です』といって彼に従うことでしょう
。
その後地獄の業火の上にかけられた一本の橋の上を、私と私の信徒たちは最初に渡ることになりますが、その日には使徒たち以外には誰も声を発する者はなく、その日の使徒たちの祈りも『アッラーよ、安全をお守り下さい。無事をお願い致します』という言葉のみでありましょう」
地獄には、サアダーン樹のとげのように長い鉄製の鉤がおかれている。
アッラーのみ使いは「サアダーン樹を知っていますか」とおたずねになり、彼らが「はい」と答えるとこういわれた
「まことにこれらの鉄鉤は、サアダーン樹のとげにも似ていますが、アッラー以外にその大きさについて知る方はおられない。
これらの鉤が悪行を犯した者を捕らえるのです。

信者のうち、善行者は捕らえられることはなく、その善行の故に救済され報奨される者さえもいるのです。
アッラーはそのしもべらを裁き終える時、その大いなる慈悲心から思いのままに地獄に苦しむ者らの一部を救い出そうとなさり、そのためアッラーに何ものをも同位者として配さなかった者らを、地獄から連れ出すよう天使たちにお命じになるのです。
これらの者は『アッラー以外に神はいない』と唱えた者らのうち、アッラーが特に慈悲をお与えになった人たちです。
天使らは彼らを業火の中で、脆拝のしるし、すなわち額の黒い痣の有無によって見分けるのです。
なぜなら、業火は人間の身体全てを焼き尽すがその脆拝のしるしのみは残るからであり、アッラーが業火に対し、そのしるしを消滅させることを禁じられたからです。
その後業火の中から焼かれたまま連れ出された彼らは、生命の水を注がれ、丁度洪水によって運ばれた種子が新芽を出すように蘇生させられるのです。
アッラーがしもべらの裁きを終えようとする時、地獄に面した処に取り残された天国に最後に入るはずの男が、『主よ、私の顔を業火から遠ざけて下さい。
地獄の凰か私を毒し、その炎が私を焼き殺します！』と叫び出し、（アッラーがそうすることを許すかぎり）繰り返し訴えつづけることでしょう。
これに対しアッラーは『もし私がお前の願い通りにしたならば、お前は恐らくそれ以上のことをまた頼んでくるに相違あるまい』といわれるが、
その男は『いいえ、私はこれ以外のことは、お願い致しません』といって、アッラーに対し約束し、確言することでしょう。
それで、アッラーはその男の顔を業火から別の方角にお変えになるのであるが、彼がむきを変え天国の方を見た時、彼はしばらく沈黙した後でこう述べるでしょう
『主よ、どうか私を天国の門の処に進ませて下さい』
これに対し、アッラーは『お前は私が与えたもの以外何も頼まないと約束し確言したのではなかったか！
何ということか！　アダムの子孫よ！
何と当てにならないことか！』といわれるが、彼は『主よ』といって訴えつづけるので、遂にはアッラーは、彼にこう仰せになるのです
『もしも私がそれを許すならば、お前は恐らくもっと他のことも頼んでくることだろう』
しかしながら、主に対し彼は『あなたの偉大さに誓って申し上げますが、決してそのようなことは致しません』といって、また約束し確言することでしょう。
アッラーは、それで彼を天国の門まで連れて行かれるが、その門に立って目前一杯に広がる天国の恵みと喜びを見ると彼はしばらく沈黙して後、こういい出すのです
『主よ、私を天国に入れて下さい』
これに対しアッラーは『私がお前に与えたもの以外にお前は何も望まないと約束し、確言したではないか！

何たることか！　おお、アダムの子孫よ！
何と不誠実な男だろう！』といわれるが、
彼は『主よ、私はあなたの創造物の中でもっともあわれな存在にはなりたくないのです』といって、アッラーがお笑いになるまで訴え続けることでありましょう。
そして彼にむかってお笑いになったアッラーは、その時『天国に入りなさい』とお許しなさるのです。
彼が天国に入る時、アッラーは『お前の願いを述べなさい』といわれ、彼は（アッラーが気付かせ給うままに）様々の願いごとを申しあげるが、それが終るとアッラーは直ちに『これはお前のもの、お前の願いと同じものである』と仰せになってそれらをお与え下さるのです」
これに関連し、アター・ビン・ヤジードは次のように述べている
「アブー・サイード・フドリーはアブー・フライラと共におりながら、アブー・フライラの語るこのハディースになんら異議をはさまなかったが、
ただアッラーが、その男に『お前の願いと同じものである』といわれたという表現に対してのみ『お前の願いの10倍におよぶものである』と変え訂正を加えた。
アブー・フライラは、これに対し『これはお前のもの、お前の願いと同じものである』という表現以外覚えていないと語ったが、ともあれアブー・サイード・フドリーは『私はアッラーのみ使いが“これはお前のもの、お前の願いの10倍におよぶものである”といわれたことを証言します』とまで述べていた。
なお、アブー・フライラは『その男は天国の住民として最後に（天国に）入る人物である』と語っていた」
アブー・フライラは伝えている
人々は預言者に対し「アッラーのみ使い様、私たちは復活の日に主に会うことができるでしょうか」とたずねた。
以下の部分は前記と同内容のハディースであるが、別の伝承者経路で伝えられている。
ハンマーム・ビン・ムナッビフは、アブー・フライラがアッラーのみ使いから聞いて語った数多くのハディースの中の一つを次のように伝えている
み使いはこういわれた
「天国で最も末端の席にいるあなた方の仲間の一人はアッラーに『なんでも欲することを願いなさい』といわれ、願いごとや望みを訴えることだろう。
その後『願いを述べたか』と問われ、彼が『はい』と答えるとアッラーは『お前の願いごとやそれと同類の事柄は許される』と仰せになるだろう」
アブー・サイード・フドリーは伝えている
アッラーのみ使いが在世の頃、或る人々がこういった
「み使い様、私たちは復活の日に主に会うことができるでしょうか」
これに対し、み使いは「その通りです」と答え、次の言葉を加えられた
「一片の雲もない日中に太陽を見ることや、また雲のない満月の夜に月を眺めることは困難だと思いますか」

人々か「いいえ、み使い様」と答えると、彼はこういわれた
「復活の日、アッラーに会うことは丁度これらを見るのと同じようになんの困難もないことです
。
復活の日が来ると、ムアッジン（通常は、礼拝時刻を告げる人、ここでは単に、伝達者　の意味
）がこう叫ぶことでしょう
『それぞれの団体の者は各自が崇拝したものに従うようにせよ』。
このあと、アッラー以外に偶像や石物を崇めていた者ら全ては業火の中に落ちゆき、その結果、敬虔なる者や不行跡な者、また啓典の民の一部など、アッラーを信仰する者らが残されるだけとなります。
そのあとユダヤ教徒らが呼びだされて、『何を信仰したのか』と問われ、彼らが『アッラーの息子ウザイルです』と答えると、それに対し『お前たちは虚偽を申している。アッラーには妻子はいない』といわれます。
『何を望むか』と問われた時、彼らが『のどが渇いています。主よ、水をお与え下さい』と述べると、彼は或る方角に彼らを導き『どうしてあそこに行って水を飲もうとしないのか』といいながら、彼らを業火の方へ押し出すので、そのため彼らはあたかも蜃気楼のように高く炎を上げて燃えさかる業火の中に落ちゆくことになるのです。
その後、キリスト教徒らが呼びだされて『何を信仰していたのか』と問われ、彼らが『アッラーの息子イエスです』と答えると、それに対し『お前らは嘘を申している。アッラーには妻子はいない』といわれます。
その後、彼らは、『なにを欲するのか』と問われ、『私たちはのどが渇いています。主よ、渇きをいやして下さい』と述べるが、彼らは或る場所に連れてゆかれて『どうしてあそこに行って水を得ようとしないのか』といわれ、業火の方に押し出されます。
次々と炎をあげて焼き尽す業火は、あたかも蜃気楼のようにも見えることだろうが、こうして彼らはその業火の中に落ちゆき、残るのは善行者であれ悪行者であれ、アッラーを信仰する者だけとなるのです。
その後、宇宙の主アッラーは、彼らの目にも判別し得るお姿で彼らの処においでになり『お前たちは何を待っているのか。
各ウンマはそれぞれ信仰した者に従うのである』といわれるが、
これに対し彼らは『主よ、私たちは前世では貧に苦しみ助けを必要とする時でも他宗教の者らとは離れて暮し、彼らの仲間となることはありませんでした』と口々に訴えだします。
そして、アッラーが『私はあなたたちの主である』といわれると、彼らは『あなた様、アッラーに御加護を願います。私たちはなにものをもアッラーと並べることは致しません』と二度も三度も繰り返し述べたてるのです。
この時、偽信仰者の何人かは背をむけて、その場所を離れようとするに違いありません。
この折にはまた『人間のお姿をした主にはあなた方に判別できるためのみしるしがあるのですか
』と問われ、彼らは『はい』と答えるでしょう。
その後には次のような様々な事柄が見られることになります。

（すなわち）自発的に礼拝する者にはアッラーはそれをお許しになるが、他人の目を気にし、見せ掛けの礼拝をする者に対しては、アッラーはその者らの背中を一枚の平たい板状にして、礼拝するたびに彼らを後にひっくり返らしめなさるのです。
また、礼拝のあと頭をあげるとアッラーは、彼らが初めて見るお姿に変って『私はお前たちの主である』と仰せられ、彼らはこれに対し『あなたは私たちの主です』と述べることになります。
その後、地獄の上に一本の橋がかけられ、執り成し（弁護者）が許されるが、彼らはこの折『主よ、安全を守り給え。ご加護をお願い致します！』と述べることでありましょう」
人々が「それはどんな橋ですか」とたずねると、アッラーのみ使いは「すべりやすい所で、ここには鉤や鉄串、それにナジュド地方でサアダーンと呼ばれているとげの樹のような針などが付いています」といわれ、また次のように話を続けられた
「ともあれ信者らはその橋を雷、または風、或いは鳥、更には駿足の馬やらくだのようにまばたきする間に通ってしまいます。
或る者らは安全に、或る者らは鉤でひっかけられながらも通り抜けるが、捕われて地獄の火中にひとまとめに落される者らもいます。
また信者らの中には更にその業火から救出される者もおります。
ところで、私の命を司る御方に誓って申しますが、人間の中で信者ほど復活の日に、業火から同胞を救い出すようアッラーに強く懇願するものはいないでありましょう。
信者らはこう述べるのです
『主よ、彼らは私たちと共に断食、礼拝、巡礼を行ったものです』
これに対し主は『お前たちが認める者らを地獄から連れ出すように』とお命じになり、それらの者に対し業火は禁じられ、多くの者が連れ出されます。
しかしそれまでには大半の人々は躰の半分か、ひざ半ばほどまで焼かれてしまっているのです。
（ともあれ）その時彼らが『主よ、あなたが救うようお命じになった者は一人としてもう地獄には残っておりません』と述べると、アッラーは『もう一度戻って、心に1ディーナールの重さほどでも善意を持つ者を見付けたならば連れ出すように』といわれます。
それで彼らは再び多くの人々を業火の中から連れ出し『主よ、あなたが命じた者は全部救い出され、一人として残っておりません』と申し上げるのです。
これに対してアッラーは更に『戻って心に半ディーナールの重さほどの善意を持つ者があれば連れ出すように』とお命じになり、それで彼らは更に多くの人々を連れ出し『主よ、お命じになった者らを残らず連れ出しました』とまた申し上げるのです。
アッラーはこれに対しても更に『戻って心に微塵の重さほどでも善意を持つ者があれば連れ出すように』といわれ、彼らはその言葉に従ってなおまた多くの人々を連れだして来『主よ、私たちは軽く僅かでも善意を持つ者があれば一人残らず地獄から連れ出しました』と申し上げることになります」
アブー・サイード・フドリーはこれに関連し次のように語っている
「もしも私の語るこのハディースを信じない者は、次の聖句を誦んでみるがよい。
「まことにアッラーは微塵の重さほども間違えられない。もし一善があれば、彼はこれを倍加な

され、また彼の御許から偉大な報奨を与えられよう」（クルアーン第4章40節）」
「その後、アッラーはこういわれます『天使たちが執り成しをし、預言者たちが執り成しをし、更に篤信者らが執り成しをするため、残されるのはアッラーの深い慈悲にゆだねられた者たちだけとなるだろう』と。
アッラーはそれで業火の中に手を入れ、これまでいかなる善行も為したことのない、もう既に木炭のように変り果てた人々をひとつかみにして取り出され、それらを天国の端にある生命の河と呼ばれる河の中に投げ込まれます。
すると彼らは洪水に運ばれた沈泥から植物の種子が新芽を出すように再生するのです。
あなた方はきっと石や木の傍らで、太陽にさらされ黄色または緑色に、また木蔭では白色に見えるそれらを眺めることでありましょう」
この言葉を聞いた人々は「アッラーのみ使い様、あなたは草原の牧畜者のように何でもよくご存知な方です」といった。
このあとみ使いはまた話をお続けになった。
「彼らは首にしるしをつけられ、真珠のように顔を輝かせながら出て来るのです。
天国の住民たちは彼らを見て『この人たちはアッラーによって解放されたのです。アッラーは過去の行為や善行の有無にも関係なくこれらの人々が天国に入ることをお許しなさったのです』ということでしょう。
それからアッラーはこういわれます
『天国に入りなさい。そこで見るものは全てお前たちのものです』
これに対し、彼らは『主よ、あなたは世界の誰にもお与えにならなかったほどの恩寵を私たちに与えて下さいました』と感謝の言葉を述べます。
しかしアッラーは『まだこれよりも尊いものがお前たちのために配慮されている』と仰せになり、彼らが『主よ、これより善いものとは何でしょうか』と問うと、こうお答えになるのです。
『それは私がお前たちに満足しており、これ以後決してお前たちに怒りを示すことはないということである』と」
アブー・サイード・フドリーによるこのハディースは、別の伝承者経路でも次のように伝えられている。
私たちが「アッラーのみ使い様、私たちに主を見ることができますか」とたずねた時、み使いはこういわれた
「雲のない日、太陽を見るのは困難ですか
」私たちは「いいえ」と答えた。
以下のハディースは前記と同内容であるが、ハフス・ビン・マイサラの伝えるハディースには次の表現が加えられている。
「いかなる事をも為さずに、もしくは、過去にいかなる善行をも為すことなしに」また「アッラーは彼らに『そこで見るものや、そこにあるものは全てお前たちのものです』といわれた」
なお、アブー・サイード・フドリーによるハディースには「私はその橋が髪の毛よりも細く、剣よりも鋭いと聞いた」という言葉がみられる。

なおまた、ライスの伝えるハディースには「主よ、あなたは世界の誰にも与えなかった恩寵を私たちに与えて下さった」という表現はみられない。
ハフス・ビン・マイサラは、別の伝承者経路で前記と同内容のハディースを伝えているが、それにも表現上多少の異同がみられる。

執り成し役と信者の救済について

執り成し役と信者の救済について
1巻　P.151-152

アブー・サイード・フドリーによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「アッラーは天国の住民にふさわしい者らを天国に入れ、また慈悲を懸けるに価する者らを天国に救済なさる。
アッラーは地獄の住民にふさわしい者らを地獄に落される。
それからアッラーはこういわれる
『よく注意せよ！　心にからしの実ほども信仰を持つ者を発見したならば、地獄から連れ出しなさい』
それで身体を焼かれて木炭のようになった人々が連れ出され、生命の河に投げ込まれて、そこで彼らは、あたかも洪水によって運ばれた泥土の中で種子が芽を出すように、生きかえるのである。
あなたたちは種子が黄緑の入りまじった芽を出すのを見たことはありませんか」
アムル・ビン・ヤヒヤーは別の伝承者経路で前記と同内容のハディースを伝えているが、それには次の言葉がみられる
「彼らは生命の河と呼ばれる河中に投げ込まれる」
なお、ハーリドの伝えるハディースには「流れの傍らで種が芽を出すように」と記され、ウハイブによるハディースには「泥土の中で、もしくは、洪水の運んだ泥土で種子が芽を出すように」という表現がみられる。
アブー・サイードによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「地獄に住む者はそこに運命づけられた者である。
そして「その中で彼は死ぬことも生きることもないのである」（クルアーン第20章74節）
しかしながら犯した罪のために、もしくは、悪行のために業火に焼かれる者たちを、主は死なしめて木炭のように変え、そして後に執り成しを許し給い、群ごとに集めて天国のもろもろの河にまき散らさせて後、こう仰せになるだろう
『天国の住民たちよ、彼らの上に水を注ぎかけよ』
それで彼らは、洪水に運ばれた泥土に種が丁度芽を出すように、再生するのである」
なお、この話を聞いた或る男は「み使い様はまるで、草原に住む人のように何でもよくご存知であられる」と述べた。
アブー・ナドラは、アブー・サイード・フドリーから聞いて前記と同内容のハディースを「洪水で運ばれる泥土の中で」という部分まで伝えているが、それ以下については言及していない。

地獄から最後に出る者について

地獄から最後に連れ出される者について
1巻　P.152-155

アブドッラー・ビン・マスウードによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「私は地獄から最後に連れ出され、天国へそこの住民として一番後から入る者を知っている。
業火の中から這い出たその男にアッラーは『行って天国に入れ』とお命じになり、それで彼は天国に入るが、後には天国が一杯で、彼の住む場所はないように思えた。
それで彼は戻って『主よ、私の入る場所はありません』と申し上げるが、主は『行って天国に入れ』と再度いわれる。
それでその男はまた天国に行くのであるが、依然として一杯で入る場所もないように見えた。
それで彼は、再度戻って主に『一杯です』と申し上げるが、アッラーはまた『行って天国に入りなさい。
お前のために、地上にいた時と同じもの、しかもそれと同じものが10倍も用意されている。
もしくは、地上の10倍の物がお前の所有になる』と仰せになる。
これに対しその男は『あなたは私に冗談をいっているのですか。
さもなくば、私を嘲笑なさるのですか。
勿論あなたは王様ですから何でもおできになるでしょうが』というのである」
こう語って後、み使いは奥歯が見えるほど大きく口を開けてお笑いになりながら「その男の地位は天国の住民中でも最下位に属する」といわれた。
アブドッラー・ビン・マスウードによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「私は地獄から最後に連れ出される男を知っている。
その人が這い出て来る時、主はこうお命じになる『行って天国に入りなさい』」
み使いは続けて話された
「それでこの男は天国に入るが、すでに人々が全ての場所を占有しているのを知る。
彼はアッラーに『お前は地獄にいた時いつ出るべきか、適当な時期について考えなかったのか』といわれ『はい』と答えるが、ともあれ『何か望みはないか』と問われ希望を述べる。
それに対し主は『お前は望むものを得られる。それも地上にいた時の10倍のものを』と告げられる。
それに対し、彼は『あなたは私に冗談をいっているのですか。
あなたはまるで王様のような方です』と述べるのである」こう語りながら、み使いは奥歯が見えるほどお笑いになった。
イブン・マスウードによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「最後に天国に入る者は、つまずきながら歩く、かつて業火に焼かれた男である。
地獄を脱した時、彼は後をふりむいて『業火より私を救って下さった方、アッラーを讃えます！
　アッラーは私に、過去未来を通じ誰にも与えなかったほどの恩寵をお与え下さった』と感謝の

言葉を述べることだろう。
その時、一本の木が彼の前に現わされる。
それを見て彼は『主よ、私をこの木の近くに連れて行って下さい。
そうすれば私はその木蔭で休み、その水を飲むことができますから』というだろうが、アッラーはこうお答えになる
『アダムの子孫よ、もし私がお前にそれを許したら、お前は私にもっと別のことを願うだろう』
彼はしかし『いいえ、主よ』といってそれ以外には何も主にお願いしないと約束することだろう。
それでアッラーは彼の願いをお許しになるが、それも彼がそうしてやらぬ限り耐えきれまいと同情なさったからである。
そこでアッラーは彼を木の近くに連れて来られるので彼はその木蔭で休みその水を飲むことだろう。
その後、この最初の木よりももっと美しい一本の木が彼の前に現わされる。
彼は『主よ、私をこの木の傍らに連れて行って下さい。
私はそこで水を飲み、あの木蔭で休みたいのです。
私はそれ以外には何もあなたにお願い致しません』といい、
アッラーはこれに対し『アダムの子孫よ、お前は先にこれ以上何も願わないと私に約束したではないか。
もしも私がお前をその近くまで連れて行けば、お前はまたそれ以外のことも頼んで来るだろう』と仰せになることだろう。
彼がアッラーに、何も他にはお願いしないと約束すると、アッラーは彼のそう願わざるを得ない気持に同情されて、彼の願いをお許しになるだろう。
それでアッラーは彼をその木の近くに連れて行くので、彼はその木の蔭に憩いその水を飲むことであろう。
そのあと、また、天国の門の処に、前の二本よりももっと美しい一本の木が現わされる。
彼はこれを見て『主よ、私をこの木に近づけて下さい。
私はこの木の蔭で休息し、その水を飲みたいのです。
私はこれ以外には何もあなたにお願い致しません』と訴える。
これに対しアッラーは『アダムの子孫よ、お前は先にこれ以外何も願わないと私に約束したではないか』といわれるが、彼は『その通りです。主よ、ですが私はこれ以上何もお願い致しません』と繰り返すので主は、彼のそう願う気持をお察しになり、彼の願いを容れて、彼をその木の近くに運ぶことだろう。
アッラーが彼をその木の近くに運ばれた時、彼は天国の住民たちの声を聞き『主よ私を天国に入れて下さい』とまた訴える。
これに対しアッラーは『アダムの子孫よ、お前の願い事はいつ終るのか。
もし私が、お前に全世界を、もしくは、全世界にも匹敵するものを与えたならば、お前は満足するのか』と仰せになるだろう。

彼はこれに対し『主よ、あなたは私に冗談を言っているのですか。
勿論私は、あなたが全世界の主であり、万能な方であることはわかっておりますが』ということだろう」
イブン・マスウードはこう語りながら笑った。
そして人々にむかい「なぜ私が笑うのか　と、どうしてたずねないのですか」といった。
それで人々が「どうして笑うのですか」と問うたところ、彼は「アッラーのみ使いがこのようにお笑いになられたからです。
教友らがみ使いに『どうして笑うのですか』とおたずねした時、み使いは『全宇宙の主、アッラーは彼（天国に入りたいと願った男）が“あなたは私に冗談をいっているのですか。
勿論あなたは万能の全宇宙の主であられますが”と述べた時、お笑いになるからです。
なお、アッラーはこの折“私はお前に冗談をいっているのではない。
私にはなにごとであれ思いのままに実現することが可能である”といわれる』ともお話しになった」と語った。

天国における最下位者について

天国における最下位者について
1巻　P.155-170

アブー・サイード・フドリーによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「天国の住民のうち最下位にいる者は、アッラーがその者の顔を地獄から天国にむけられた人物である。
アッラーが彼の前に蔭の濃い一本の樹木をお示しになられた時、彼は『我が主よ、木蔭に入れるようあの木の処に私を進ませて下さい。
そうすれば、私はあの木蔭で憩えますから』といった」
この後半は前述のイブン・マスウードのハディースと同内容であるが、ただ「アッラーは、こういわれた『アダムの子孫よ、お前の願い事はいつ終るのか』」
以下の話は伝えられてなく、それに代って次の言葉が加えられている
「アッラーは彼に『しかじかの事を願いなさい』と呼びかけ、彼の願い事がかなえられた時こういわれるだろう
『それはお前のものです。お前の願いより10倍ほどもあります』」
また「彼が自分の家に入る時、黒い大きな瞳をもった二人の妻も彼に従って家に入り、こういうだろう
『わたしたちのためにあなたを創り、またあなたのために私たちをお創りになったアッラーを讃えます』
これに対し彼は『私ほど多くを与えられた者はいない』と述べることだろう」
ムギーラ・ビン・シュウバによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「モーゼが、彼の主に『天国の住民で誰が最下位の人物ですか』とたずねたところ、アッラーは『当然入るに価する人々が天国に入れられた後で、最後に天国にやって来る人物である』といわれた。
そして次のように話された。
彼は『天国に入りなさい』と告げられるが、『主よ、先に来た人々がそれぞれの場所に落着き、取り分も確保しているので、どうして私の入る余地などありましょうか』と答えるだろう。
それに対しアッラーが『お前は世界の諸王らそれぞれが有する王国ほどの広さがあれば満足するのか』と述べると、彼は『その通りです。主よ』と答えることだろう。
アッラーがそのため『あれはお前のもの、これもそれもあれも、またそれもお前のものである』と五つも指示を与えなさると、それでようやく彼は『主よ、私は大変満足です』と述べることだろう。
アッラーはまた『これはお前のもの、これに10倍するものもお前に与えられる。お前が望み、喜ぶものは全てお前のものである』といわれる。
彼はこれに対しても『主よ、私は大変満足です』と述べることだろう。

モーゼは、更に『天国の住民の中で最も上位の者は誰ですか』と問うた。
アッラーはこれに対し『私が自ら選んだ者たちである。私は私自身の手で彼らの名誉を定め、誰の目にも見えず誰の耳にも聞こえず、いかなる人間の心にも判別できないしるしを、その名誉の上に張り付けた』といわれた。
このことは、アッラーの聖典にも次のように証言されている
「かれらはその行ったことの報奨として、喜ばしいものが自分のために、ひそかに用意されているのを知らない」（クルアーン第32章17節）
シャービーは、ムギーラ・ビン・シュウバがミンバル（説教壇）で話すのを聞いて伝えている
「モーゼは、天国の住民の中で最下位の者に対する報奨についてアッラーに質問した」
以下のハディースは前記と同内容である
アブー・ザッルによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「私は天国の住民の中で最後にそこに入った者、地獄に落された者の中で最後にそこから出てきた者を知っている。
その男は、復活の日に主の前に連れ出されこういわれるだろう
『彼の犯した小罪悪を見せてやりなさい。彼の大罪については保留しておきなさい』
それで、彼の小罪悪の数々が彼に示され『しかじかの日にこれこれのことをお前は行った。そしてまた、これこれの日にお前はしかじかのことを行った』といわれ、彼は『その通りです』と答えることだろう。
彼にとって、それらを否定することは不可能で、むしろ彼は自分の犯した大罪こそが目の前に示されることを恐れたのである。
ともあれアッラーはまた彼に『お前の犯したこの悪行記録の場所には（お前がすなおに前非を悔いている様子なので）善行のしるしが付されるだろう』といわれるが、これに対し彼は『私はまことに、ここで示された以外にも多くの悪行を犯しました』と告白するだろう」
こう語りながら使徒様が奥歯が現われるほど大きく口をあけてお笑いになったのを、私（アブー・ザッル）は見ました。
前記と同内容のハディースは、アアマシュによっても別の伝承者経路で伝えられている。
アブー・ズバイルは、ジャービル・ビン・アブドッラーから、復活の日に人々が行く場所に関する話を聞いてこう伝えている
ジャービルは「復活の日に私たちはしかじかの場所に行くことになっている（アブー・ズバイルによると“しかじか”とは“至尊者”の意味であるという）」と述べてから続けて次のように語った
「人々は、それぞれが信仰した偶像共々一人一人呼び出される。
そのあと主が私たちの処においでになり『誰を待っているのか』とおたずねになるが、人々が『私たちの主を待っています』と答えると『私があなたたちの主です』といわれる。
これに対し人々が『あなたをよく見ない限り、なんとも確かめられない』というと、主は笑いながら彼らに、主本来のお姿を明らかに示される。
それで人々は主の後に従って一緒に進み出すのである。
その後、偽信者、篤信者の別なく全ての人々は明りを持たされ、彼に従って地獄の橋の上に行

くが、そこにはアッラーが命ずるものを捕らえるための鉤や大串が用意されている。
ここで偽信者らの明りは消える。
そして篤信者らのみは救済されることになる。
こうして救われた最初の一団は七万人にも及び、彼らの顔は満月の夜の光のように喜びに輝く。
彼らは罪を問われることはないのである。
続いて彼らのあとに従って橋をわたった者らも喜びのため、天空で最も明るい光を放つ星のような顔を見せる。
このような状態が次々と見られた後には、執り成しの行われる場面が続き、執り成し役を許された人々は『アッラー以外に神はない』と証言し、心の中に大麦粒の重さほどの善意を持つ者であれば、それらの者が地獄から出られるよう、アッラーに懇願する。
その結果彼らは天国の庭園に連れ出される。
住民らが彼らの上に水を注ぎかけると、彼らは洪水の中で種が新芽をふきだすように蘇生し、焼けどの跡も消え去ってしまう。
その後、彼らは主に懇願し、この世界の数々の恩恵を共々10倍にして与えられるのである」
ジャービルは、預言者がこういわれるのを聞いたと伝えている
「アッラーは地獄から人々を連れ出し、天国に入れ給う」
ハンマード・ビン・ザイドはこう伝えている
私が、アムル・ビン・ディーナールに「あなたは、ジャービル・ビン・アブドッラーから、アッラーは執り成しの懇願を許し、地獄から人々を連れ出し給うというアッラーのみ使いの言葉を聞きましたか」と問うたところ、彼は「はい、聞きました」と答えた。
ジャービル・ビン・アブドッラーによれば、アッラーのみ使いはこういわれた
「まことに、人々は地獄からさえも救出されるだろう。
彼らは天国に入るまで、顔の表面以外を焼かれることだろう（注）」
（注）主の前で顔を地面に付けて平伏するため、顔の面のみは焼かれないのである
ヤズィード・ファキールはこう伝えている
「大罪を犯した者らは、永遠に地獄で罰せられるというハワーリジュ派の見解を私は信じていた。
私たちはハッジ（巡礼）を行う目的で多数の団体を組んで出発した。
そしてその旅中度々、ハワーリジュ派の見解を宣伝するため人々の処に出掛けた。
私たちはマディーナで、たまたまジャービル・ビン・アブドッラーが、柱の近くに座って人々にアッラーのみ使いのハディースを語っているところを通りかかった。
彼が地獄の住民について語った時、私は彼にこう質問した。
『み使いの教友よ。あなたの説くことと次のアッラーの言葉とはどういう関係がありますか。「本当にあなたは、業火に投げ込まれた者を必ず屈辱でおおわれる」（クルアーン第3章192節）
及び、
「地獄から出ようとする度にかれらはその中にひき戻される」（クルアーン第32章20節）
これらの聖句に関しどんな説明をするのですか』

これに対し彼は、私に『クルアーンを誦んだか』と問い、私が『はい』と答えると、
更に『ムハンマド様の尊い地位、つまりアッラーがお遣しになった使命について知っているか』とたずね、私が『はい』と答えると、
彼は『まことにムハンマド様の地位は光栄あるもの（注1）です。
その光栄の故に、彼の意見を容れて、アッラーはお望みのままに人々を連れ出されるのです』と語った。
彼はこのあと、地獄の上にかけられた橋と、そこを通る人々の状況について話し『私は他のことはあまり記憶してないかも知れないが、ただ、地獄に投げ込まれた人々がそこから出て来るといわれたことだけは、はっきり憶えています。
彼らは地獄から、あたかもごまの木の小枝（注2）のように黒く焼かれて出て来るのです。
そして後、天国にある河の一つに入って沐浴をし、そこから紙のように白い姿になって再度現われるのです』とも語った」
ヤズィードは、更に次のようにも伝えている。
「私たちはその帰り道にこう語り合った
『なんということだろう！
どうしてこのような老人がアッラーのみ使いの言葉について虚偽を語るはずがあろうか！』と。
私たちは巡礼を終え無事に帰った。
そして神に誓って。
ただ独りを除き私たち全員がこのハワーリジュ派の集団から脱退したのであった」
同様のハディースは、アブー・ヌマイルによっても伝えられている。
（注l）クルアーンの聖句「主は、ムハンマドを光栄ある地位に就かせて下さる（第17章79節）」に対応する言葉である
（注2）ごま（サーシム）ではなく、黒たん（サーサム）の誤記ともいわれる
アナス・ビン・マーリクによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「四名の者が地獄から連れ出されアッラーの前に引き出されることだろう。
そして、この中の一人が地獄の方をふりかえりこういうだろう
『我が主よ、あなたは私を地獄から連れ出して下さった。再び、そこに戻さないで下さい』
アッラーは彼を地獄からお救いになることだろう」
アナス・ビン・マーリクによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「復活の目、アッラーは人々を集合せしめるが、人々はその時、不安に駆られることだろう（イブン・ウバイドによれば、彼らは霊感を受け『もし主に対しだれか執り成しをしてくれる人がいれば、私たちは苦境から救われるだろう』と語り合うという）」
み使いは続けていわれた
「そこで彼らは、アダムの処に来てこう述べる
『アダム様、あなたは人類の祖であり、アッラーが自らの御手でお造りになり、神の霊感（ルーフ）を吹き込まれた方です。
アッラーの命令で天使たちは、あなたの前で礼拝しております。

それほどのあなたであります故、どうか主に私たちのため執り成しをなさって下さい。
そうすれば主は私たちをこの苦境から救って下さるでしょう』
これに対しアダムはこう答えるだろう
『私はそれを為し得る立場にはありません』
もしも彼がそうすれば、かつて犯した自らの過失を思い出し、彼はそのため恥じて神を避けるようになったであろう。
ともあれ、彼は『アッラーが遣わした最初の使徒ノアの処に行きなさい』と告げることだろう」
み使いは話を続けていわれた
「それで彼らはノアの処にやって来るが、彼も『私はそれを為し得る立場にありません』と答えるだろう。
もし彼がそうすれば、彼はかつて犯した自らの過失を思い出し、それを恥じて主を敬遠するようになったであろう。
ともあれ、彼は『あなた方は、アッラーの友人、アブラハムの処に行きなさい』と告げるだろう。
そこで披らはアブラハムの処に行くが、彼もまた『私はそれを為し得る立場にありません』と答えることだろう。
もし披がそうすれば、彼はかつて犯した自らの過誤を思い起し、そのため恥じて主を避けるようになったであろう。
ともあれ、彼は『モーゼの処に行きなさい。
彼はアッラーに話しかけられ、トーラ五書を授けられた方です』と告げるだろう。
み使いは続けていわれた
「そこで彼らはモーゼの処に行くが、彼も『私はそれを為し得る立場にありません』と答えることだろう。
もし彼がそうすればかつて犯した自らの過誤を思い出し、そのため主を避けることになったであろう。
ともあれ、彼は彼らに『アッラーの精霊、アッラーのみ言葉、イエスの処に行きなさい』と指示することであろう。
そこで彼らはアッラーの精霊、アッラーのみ言葉、イエスの処に行くが、彼も『私はそれをあなた方のために為し得る立場にありません』と答え『ムハンマドの処に行きなさい。彼は先に犯した罪、後で犯した誤ち全てを許された神のしもべです』と指示することだろう」
み使いは続けてこう話された
「それで彼らは私の許に来るのであるが、私が主にお願いをすると、主はそれをお許し下さるのである。
ともあれ、私が主を拝し平伏すると、主は、お望みのままに私をその状態に置かれた後、こういわれる
『ムハンマドよ、頭を上げよ。いうことがあれば聞き、頼み事があれば与え、執り成しがあれば受け入れるであろう』と。

それで私は頭を上げ、主が私に教えて下さった言葉を述べて主を讃美し、その後執り成しを始めるが、それには一定の条件が付せられている。
ともあれ、こうして私は人々を地獄から連れだして天国に入らしめ、そして後、戻って主の前に平伏する。
主は思いのままに私をそのような状態に置かれた後、こういわれるだろう
『ムハンマドよ、頭を上げよ。
いうことがあれば聞き、望み事があれば与え、執り成しがあれば許されよう』
それで私は顔を上げ、主が私に教えて下さった言葉を述べて主を讃美する。
そして後、私は執り成しを行うが、それには条件が付せられている。
ともあれ、こうしてまた私は、人々を地獄の業火から連れだし天国に入れしめるのである」
アナス・ビン・マーリクはこのハディースに関連し「私はみ使いが、次の言葉、すなわち『主よ、クルアーンの中で業火が永遠の定めと記される者（不信仰者）以外には、もう誰も地獄に残っていません』といわれたのが、三度目か、あるいは四度目の時であったのか憶えていない」と述べている。
なお、イブン・ウバイドによると、カターダは上記の言葉を「永遠に地獄に住むことを命ぜられている者の意味である」と語ったという。
アナスによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「信者たちは、復活の日、呼び集められるが、彼らはそのことで不安におびえる（もしくは、心配しだす）ことだろう」
この後半のハディースは前記と同内容であるが、次の表現が付加されている
「それから、私は四度目も戻って『主よ、クルアーンが定めているもの以外だれも残っておりません』と述べることだろう
アナス・ビン・マーリクによると、預言者はこういわれた
「アッラーは復活の日に信者らを召集なさるが、彼らはそれについて不安を抱くことだろう」
以下は前記二ハディースと同内容であるが、次の言葉が付加されている
「四回目に私（預言者）は『主よ、クルアーンが定めている者、すなわち、永遠に運命づけられている者以外、地獄に残っている者はありません』と述べるであろう」
アナス・ビン・マーリクによると、預言者はこういわれた
「『アッラー以外に神はない』と証言する者は、たとえ心に僅か大麦粒の重さほどの善意を持つ者であっても、業火から連れ出されるだろう。
また『アッラー以外に神はない』と証言する者は、たとえその心に小麦粒の重さほどの善意を持つ者であっても、業火から連れ出されるだろう。
更にまた『アッラー以外に神はない』と証言する者は、たとえその心に微塵（注）の重さほどの善意を持つ者であっても、業火から連れ出されるだろう」
（注）微塵（ザッラ）ではなく、穀粒（ズッラ）と記すハディースもある
マアバド・ビン・ヒラール・アナジーは伝えている
「私たちはサービトに紹介を頼み共々、アナス・ビン・マーリクの処に行った。

私たちが彼の家に着いた時、アナスは朝の礼拝を行っていた。
サービトが私たちを紹介し、私たちは彼の家に入った。
アナスはサービトを彼の寝台に座らせた。
サービトはアナスに「アブー・ハムザ（アナスの呼び名）よ、バスラに住むあなたの信仰上の兄弟たちが、あなたに執り成しについてのハディースを話して下さるよう願っています」といった
。
アナスはこれに答えて次のように語った
「ムハンマド様は私たちにこういわれた
『復活の日が来ると人々はうろたえて走りまわり、あげくにはアダムの処に来て“主にあなたの子孫のための執り成しをして下さい”と頼むことだろう。
しかし、彼はこれに対し“私は適任ではない。アブラハムの処に行きなさい。彼はアッラーの友人ですから”と告げるだろう。
そこで彼らはアブラハムの処に行くが、彼も“私は適任者ではない。モーゼの処に行きなさい。彼はアッラーの対話者です”と答えることだろう。
そこで人々はモーゼの処に行くが、彼もまた“私は適任ではない。イエスの処に行きなさい。彼はアッラーの精霊であり、み言葉です”と答えるだろう。
それで彼らはイエスの処に行くが、彼もまた“私は適任者ではない。ムハンマドの処に行きなさい”と告げることだろう。
それで彼らは私の処に来るのである。
私は彼らに対し“私はそのための最適任者である”と告げ、そのあと主の許に出掛けてお願いし、そのことを許されるのである。
この折私は主の前に立って、今は私にはできないが、主が私に教示された方法で主に対する讃美の言葉を述べることだろう。
私が主にむかって平伏すると、主は“ムハンマドよ。顔を上げよ。いうことがあれば聞きとどけ、願いごとがあればかなえ、執り成すことがあれば受け入れるであろう”と仰せになるだろう。
私が“主よ、私の民（ウンマ）を！　私の民を！”と言うと、主は“行って、心に小麦粒や大麦粒の重さほどでも信仰を持つ者があれば、地獄から連れだすように”とお命じになることだろう。
それで私は、出掛けていわれた通りのことを行い、その後主の許に戻り、主の教えて下さった讃美の言葉をもって主を讃えるのであるが、そのあと私が平伏すると主はまたこう仰せになるだろう
“ムハンマドよ。顔を上げよ。
いうことがあれば聞きとどけ、願いごとがあれば許し、執り成すことがあれば受け入れるであろう”
それで私が“私の民を！　私の民を！”というと、主は“行って、心にからし種の重さほどでも信仰を持つ者があれば、地獄から連れ出すように”と仰せになることだろう。
それで私は出掛けてそれを行い、再び主の許に帰って教えられた讃美の言葉を述べて主を讃えるのであるが、そのあと私が平伏すると主は更に私に“ムハンマドよ。顔を上げよ。

いうことがあれば聞きとどけよう。
願いごとがあれば、それを許そう。
執り成しごとがあればそれも受け入れよう”と仰せになるだろう。
私が、ただ“主よ、私の民を！　私の民を！”というと、主は“行って心の中に極く極く最少のからし種の重さほどでも信仰を持つ者があれば、地獄から連れ出すように”と仰せになり、私は出掛けてその通りに行うことであろう』」
以上は、アナスが私たちに語ったハディースである。
私たちは彼の家を辞去し、ジャッバーン墓地の上部に着いた。
その時、私たちは「アブー・ハリーファの家にウマイヤ朝将軍ハッジャージー・ビン・ユースフの迫害を避け隠れて住む、ハサンに会って挨拶したいものだ」と話し合った。
彼（マアバド・ビン・ヒラール）はこの話を続けてこう語った
「それで私たちは、彼の処に行き、挨拶して後『アブー・サイード（ハサンの呼び名）よ、私たちはあなたの兄弟アブー・ハムザ（アナスの呼び名）の家から帰るところです。私たちは、執り成しについて彼が語ってくれたハディースをかつて聞いたことがなかったのです』といった。
これに対し彼が『その話を語ってみなさい』といったので、私たちは聞いてきたハディースを全て彼に話した。
そして彼が『もっと話すように』といった時、私たちは『彼はこれ以上のことは話してくれませんでした』と告げたのだった。
すると彼は次のように述べた
『アナスは、そのハディースを20年以上も前に私たちに語ってくれたが、その頃彼は気力にあふれていた。
拝聴したところによると、今の彼のハディースには省略が見られる。
私にはあの老人が忘れたのか、もしくは、あなたたちがその話を頼りすぎてそのため善行を放棄することのないように、故意にそれを話すのを避けたのかどうかわからない』
それで私たちが、急き込んでその省略部分を語ってくれるよう頼んだところ、彼は笑ってこういった
『人間は本来せっかちなものらしい！
私は、次のハディースをあなたたちにも知って貰いたいのでお話しします』
そして彼はみ使いの言葉をこう加え足した
『私はその後、四回目に主の処に戻り、教わった讃美の言葉を唱えて主を讃えそのあと平伏するが、
この時主は“ムハンマドよ、頭を上げよ。
いうことがあれば聞きとどけよう。
願いごとがあれば、許すであろう。
執り成しを望むならば受け入れるであろう”といわれる。
それで私が“主よ、アッラー以外に神はない　と告白した者に対する権限を私にお与え下さい”と申しあげると、

主は“心底からそれを告白したかどうかを識別することはお前の役目ではない（もしくは、お前に課せられた仕事ではない）。
ともあれ、私の名誉、栄光、威厳、そして権力にかけて申すが、アッラー以外に神はない、と告白した者を私は必らず地獄から連れ出すであろう”といわれる』」
なお、マアバドは「このハディースは、今から20年前に当時元気だったアナス・ビン・マーリクから聞いたハサンが、私たちに直接語ってくれたものであることを証言します」とも述べている。
アブー・フライラはこう伝えている
或る日、アッラーのみ使いの処に肉が運ばれ、彼の好む前脚部分が提供された。
彼はその肉の一片を前歯でかみ切ってからこう話された
「私は復活の日に人類の先導者となるだろう。
どうしてかわかりますか。
アッラーは復活の日に、過去未来全ての人類を或る高地に召集なさる。
その時宣言者の声が聞こえ、或る視力が彼ら全てを見通すと共に、太陽が近づいて来る。
人々は耐え難く、抵抗できないほどの苦痛と不安に襲われる。
そして互いに『何が一体起こったのかわからないのか』『どんな災害に襲われたのか見当がつかないのか』『主に執り成しをしてくれる人をどうして捜さないのか』などと口々にいい合うことだろう。
その結果或る人が『アダムの処に行け』といい、それで彼らはアダムの許に行ってこう述べるだろう
『アダムよ、あなたは人類の父です。主アッラーはあなたを自らの御手でお造りになり、主の精霊を吹き込まれ、天使たちにはあなたの前で礼拝するようお命じになりました。
どうか私たちのため、主に執り成しして下さい。
あなたは私たちがどんな災難の中にあり、どんな不幸に襲われているか御存知ではありませんか』
これに対しアダムはこう答えるだろう
『まことに、我が主は今日、かつて見たこともないほど私に対し立腹しておられます。
というのは、主が私にあのりんごの木に近づくことを禁じたのに、私はそれに従わなかったからです。
それ故、私は自分のことが心配です。
誰か他の人の処に行きなさい。
ノアの処に行きなさい』
それで彼らはノアの処に来『ノアよ、あなたはアダムのあと、最初に地上に遣わされた使徒です。
アッラーはあなたを“感謝深いしもべ”と呼んでおられます。
どうか私たちのため主に執り成しして下さい。あなたは私たちがどんな災難の中にあり、どんな不幸にみまわれているか御存知ないのですか』と訴えることだろう。

しかしノアは『まことに、我が主は今日、かつて見たことのないほど、私を怒っておられます。
と言うのは私が警告するよう命ぜられた時、それを無視した者らを呪ったからです（注1）。
私自身のことが心配です』と二度繰り返して述べ『アブラハムの処に行くよう』と指示することだろう。
それで彼らはアブラハムの許に行き『あなたはアッラーに遣わされた預言者であり、この地上の人間の中でただ独りのアッラーの友人であります。
どうか私たちのため主に執り成しして下さい。
私たちがどんな災いの中におり、どんな不幸に襲われているか、あなたは知らないのですか』というが、
これに対し、アブラハムは『まことに私の主は、今日かつてなかったほどひどく私に立腹しておられます』と述べて主を立腹せしめた彼の嘘言（注2）について話し、
そのあと『自分のことが心配です』と二度繰り返して述べ、『誰か他の人の処に行きなさい。モーゼの処に行きなさい』と告げるだろう。
そこで彼らはモーゼの許に行き『モーゼよ、あなたはアッラーの使徒であり、アッラーは、あなたを使徒役、対話者として人々の中でも特に恩寵を授けておられます。
どうか私たちのため、主に執り成しして下さい。
あなたは私たちがどんな苦しみ、どんな不幸の中にいるか御存知ないのですか』と訴えるが、
モーゼはこれに対し『まことに我が主は、あとにも先にもないほど、私を怒っておられます。
と言うのは私が、そう命ぜられてもいない者を殺したからです（注3）。
私は自分の不安で一杯なのです』と二度繰り返していい、次いで『イエスの処に行くように』と彼らに示唆するだろう。
そこで彼らはイエスの許に行き『イエスよ、あなたはアッラーの使徒であり、揺り籠（注4）の中で人々とお話しになった方です。
あなたはマリヤに遣わされた主のみ言葉であり、主の精霊です。
どうか私たちのために、主に執り成しして下さい。
私たちがどんな災いの中におり、どんな不幸な思いをしているか御存知ないのですか』と訴えるが、
イエスはこれに対し『まことに我が主は今日、後にも先にもなかったほどひどく私を怒っておられます』と述べるだろう。
イエスはしかし彼の犯した過失については何も語らず『私は自分のことが心配です』と二度繰り返していい、
『他の人の処に行きなさい。ムハンマドの処に行きなさい』と彼らに勧めることだろう。
そこで彼らは私の許に来て『ムハンマド様、あなたはアッラーの使徒であり使徒として最後の方です。
アッラーはあなたの過去、将来にわたる過誤の全てをお許しになりました。
どうか、あなたの主に私たちのため執り成しして下さい。
あなたは私たちの苦しみ、私たちの不幸を御存知ないのですか』と訴えることだろう。

それで私は主の許に出かけ、玉座の下に来て、主の前に平伏するのであるが、この折主は私に、私以前の者には誰にも啓示しなかった主に対する讃美と賞揚の言葉を教えられ
『ムハンマドよ、顔を上げよ。願いごとがあれば許されよう。
執り成すことがあれば、受け入れよう』といわれる。
それで私が頭をあげ『主よ、私の民をお救い下さい！　私の民をお救い下さい！』と申しあげると、
主は『ムハンマドよ。天国のもろもろの門のうち右の門から、お前の民で罪を犯さなかった者を入れなさい。
彼らは、これ以外の他の門から入って来た者らと一緒になることだろう』と仰せになるだろう」
このあとアッラーのみ使いは「わたしの生命をその手に握っておられる御方、アッラーに誓って申しますが、天国の門の両側の支柱間の幅はマッカとバハレーンのハジャル、もしくは、マッカとバスラ間の距離ほどもあるのです」といわれた。
（注1）クルアーン71章1-2節、71章5節、71章21節、71章26節には、ノアが人々を呪うに至った経緯が記されている
（注2）クルアーン6章77節、21章62-63節、37章87-89節が、アブラハムの嘘言に関連する啓示といわれる。
これには、星を“我が主である”といったあとそれを打消した話、“偶像にたずねよ”と語った話、諸星を見て心を痛ましめた話などが記されている。
ただしいずれも二重の意味に解される内容で、いわゆる“嘘”“出任せ”に類する物語ではない　とされる
（注3）クルアーン28章15節には、モーゼが争いにまき込まれ、敵方の者を拳で打殺した話が記される。
相手はエジプト人であったという
（注4）クルアーン19章29-30節には、揺り籠の中の赤子（イエス）が、“アッラーのしもべである”と人々に告げた話が記されている
アブー・フライラはこう伝えている
アッラーのみ使いの前に、バン切れ入りスープの木皿と肉が置かれた。
アッラーのみ使いは、最もお好きな羊の前脚をお取りになり、その一片を食べながらこういわれた
「復活の日、私は人類の先導者となることだろう」
この後、彼はまたその肉をお食べになり、再度「私は復活の日、人類の先導者となるだろう」といわれたが、教友らがこの言葉について彼に何も質問しないのを見て「あなた方は『なぜそうなるのか』と質問しないのですか」といわれた。
それで人々は初めて「み使い様、どうしてそうなるのですか」とたずねたのでした。
ともあれ、これに対しみ使いは、こうお答えになった
「人々はその日、全宇宙の主の前に立たされることになるだろう」
これ以下の話は前記と同内容であるが、アブー・ズルアから聞いて、アブー・ハイヤーンが伝え

たハディースには、アブラハムの物語に関連し、次の説明が加えられている
「（すなわち）それらは、彼が或る星に関して『これは私の主です』また偶像に関して『彼らのうち最も大きい偶像がそれをすることでしょう』更に『本当に私の心は痛みます』などと述べた言葉である」
またこれには次の言葉もみられる
「『ムハンマドの生命を手にしておられる主に誓って申しますが、天国にある門の両側の支柱間の距離はマッカとハジャル、もしくは、ハジャルとマッカ間の距離と同じほどです』」
なお、これに関して彼は「私は、み使いがどちらを先にいわれたか憶えていない」とも述べている。
アブー・フライラ及びフザイファによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「復活の日、アッラーは人々を召集なさるが、信者らは、天国が彼らの処に近づけられるまで立ち続けさせられることだろう。
彼らはアダムの許に行き『我らが父よ。天国を我らのために開けて下さい』と頼むが、彼は『お前たちを天国から遠ざけることになったのは、お前たちの父アダム、すなわち私の犯した罪のためではないか。私はそれを行う立場にはない。アッラーの友で私の子孫にも当るアブラハムの処に行くがよい』と告げるに違いない」
み使いは続けてこういわれた
「アブラハムはしかし『私はその立場にはない。
確かに私はずっとはるかに昔から、アッラーの友ではあるのだが。
お前たちはモーゼの処に行くがよい。
彼はアッラーと対話した人である』と告げることだろう。
それで彼らはモーゼの許に行くが、彼もまた『私はそれを行う立場にはない。
お前たちは、アッラーのみ言葉、その精霊イエスの処に行くがよい』と指示するだろう。
しかしイエスもまた『私はそれを為し得る立場にはない』と述べるに相違ない。
それで人々は結局ムハンマドの処に来ることになり、彼らの願いを聞いたムハンマドは起き上って主の許に出掛ける。
その結果、天国の門を開けることを彼は許される。
こうして、生前信頼されていた者、親族に尽した者、次いで道の右と左の両側に立って待っていた者らは順次天国に送られて行くのであるが、あなたたちのうち、最初に送られる者は、まるで雷光のような速さでそこを通り過ぎることだろう」
この話に関連し、フザイファは次のように伝えている。
「私はこうたずねた
『私の父母よりも尊いお方よ！
“雷光の通りすぎるように”とはどんなことですか』
これに対し、み使いはいわれた
『あなたは雷光が、目ばたきする間にむこうに、またこちらにと走り回り、光る様子を見たことはありませんか。

その後の人々は風が吹き通って行くように、次いでは、鳥たちの飛び去り行くように通り過ぎて行くのです。
人々の通過する速さは、生前の行為のいかんによるのです。
また、あなたたちの預言者（ムハンマド）はその道に立って“主よ、彼らを救い給え、救い給え”と祈り続けるのです。
このようにして、生前の行為のもたらす力の弱いしもべらまで通って行き、遂には、這いずって道を進み行く者さえ現われるのです』」
この話を、アブー・フライラは次のように補足し、説明している。
「その道の両側には鉤がぶらさげられ、主にそうするよう命じられた者を捕らえるが、中にはその鉤にひっかけられながらも、ようやく道をわたって救われる者がおります。
また、鉤にかけられ、地獄に一束に重ねて落される者もいるのです。
アブー・フライラの生命を手に握った方に誓って申しますが、地獄の底に達するには70年も要するのです」

天国での最初の執り成し役について

天国での最初の執り成し役、預言者ムハンマドの言葉について
1巻　P.170-171

アナス・ビン・マーリクによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「私は天国で最初に執り成しをする者となるだろう。
そして使徒たちの中で復活の日に私は最も多くの追随者を持つことだろう」
アナス・ビン・マーリクによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「使徒たちの中で私は、復活の日最大の追随者を持ち、また天国の門を開けるため最初に門をたたく者となるだろう」
アナス・ビン・マーリクによると、預言者はこういわれた
「私は、天国における最初の調停者となるであろう。
また預言者らの中で誰一人、私ほど多くの人々によって、アッラーの預言者であると証言される者はいないだろう。
まことに預言者たちの中には、ただ一人の信者以外に証言者を得られない者もいることだろう」
アナス・ビン・マーリクによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「復活の日、私は天国の門に行きそこを開けるよう頼むが、番人はその時『あなたは誰ですか』とたずね、私が『ムハンマドです』と答えると『私はあなたのため、あなたがおいでになるまで誰にも門を開けてはならない　と命じられていました』ということだろう」

預言者の特別祈願に関して

預言者が特別祈願を執り成しのため残したことに関して
1巻　P.171-173

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「全ての預言者は一度ずつ特別の祈願をすることを許されているが、私はその祈願を復活の日の私のウンマ（信仰共同体）の人々の執り成しのために、残して置きたいと願っている」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「全ての預言者には各一回、特別の祈願が認められている。
もしアッラーが許すならば、私はその祈願の機会を復活の日の私の信者らの執り成しのため取って置くことにしたい」
アムル・ビン・アブー・スフヤーンは、アブー・フライラから聞いた前記と同内容のハディースを伝えている。
カアブ・アフバールはアブー・フライラから聞いて、預言者の言葉をこう伝えている
「全ての預言者は、各一回ずつ主に懇願するための特別な祈りの機会を与えられている。
もしアッラーが許すならば、私はその祈りを復活の日における私の信者らの執り成しのために残して置きたい」
カアブがアブー・フライラに「あなたはこのハディースをアッラーのみ使いから直接聞いたのですか」とたずねたところ、彼は「その通りです」と答えた。
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「全ての預言者には、各一回の懇願のための祈りが認められる機会が与えられている。
他の預言者らはその祈りを急いで行うが、私は復活の日まで私の信者の執り成しを祈願するために残して置くつもりです。
もしアッラーがそう望むならば、アッラーに何ものをも同位者を配することなく死んだ私の信者に対する執り成しは認められるでしょう」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「全ての預言者は、各一回アッラーになに事であれ懇願の祈りを奉げる機会が与えられており、その願いは許されることになっている。
私は、しかし、その祈りを復活の日における私の信者の執り成しのためしまって置いた」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「全ての預言者は、それぞれの信者のため特別に祈る機会を与えられ、それは聞き届けられることになっている。
私は、もしアッラーが許すならば、私のその祈りを、復活の日における私の信者の執り成しのため使うよう残して置くことにしたい」
アナス・ビン・マーリクによると、預言者はこういわれた
「各預言者はそれぞれのウンマ（信仰共同体）のため、アッラーに祈願することを許されている

。
私はその祈願を復活の日の私のウンマのために残して置いた」
このハディースは、カターダによっても別の伝承者経路で伝えられている。
なお、ミスアルもカターダから聞いてこれと同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えているが、それには表現上多少の異同がみられる。
ムウタミルの父は、アナスから聞いて、前述のカターダと同内容のハディースを伝えている。
アブー・ズバイルは、ジャービル・ビン・アブドッラーが預言者から聞いたハディースをこう伝えている
「各預言者は、それぞれのウンマのため一回だけ特別に祈願することを許されている。
私は、復活の日に私のウンマの執り成しのため使うようその祈願の機会を残している」

ウンマのための祈りについて

ウンマのための預言者の祈りについて
1巻　P.173-174

アブドッラー・ビン・アムル・アースはこう伝えている
「預言者は、アッラーの啓示をお誦みになったが、それはアブラハムの言葉「主よ、彼らは人々の多くを迷わせました。わたしの道に従う者は本当に私の身内であります」（クルアーン第14章36節）
及び、イエスの言葉「あなたが、たとえ彼らを罰せられても、まことに彼らはあなたのしもべです。またあなたが、彼らをお赦しなされても、本当にあなたこそは偉力ならびなく英明であられます」（クルアーン第5章118節）に関するものであった。
その後、彼は両手を上にあげて『おお主よ、私のウンマをお赦し下さい。
私のウンマをお赦し下さい』と言ってお泣きになった。
それを見てアッラーは『ジブリールよ、ムハンマドの処に行き、どうして泣くのか、彼にたずねてみよ。
もとより私はその理由を十分知っているのだが』とお命じになった。
それでジブリールはムハンマドの処に行きその理由を問うた。
そこで彼は泣きながら訴えた言葉を（アッラーは勿論十分ご存知であるが）ジブリールに告げた。
これに対し、アッラーはいわれた
『ジブリールよ。
ムハンマドの処に行って告げるがよい“まことにアッラーは、あなたのウンマに関し、あなたを満足させるであろう。
あなたを悲しませることはないだろう”と』」

不信者への執り成しに関して

不信者への執り成しは許されないことに関して
1巻　P.174

アナス・ビン・マーリクはこう伝えている
「或る男が『アッラーのみ使い様、私の父はどこにいるのですか』と質問した。
これに対しみ使いは『彼は業火の中にいます』と答えたが、その男が帰りかけた時、呼びとめてまた、こういわれた
『まことに、私の父もあなたの父同様、業火の中にいるのです』」

近親者への警告に関して

アッラーの啓示、“なんじの近親者に警告せよ”に関して
1巻　P.174-177

アブー・フライラはこう語っている
「次の聖句「あなたの近親者に警告しなさい」（クルアーン第26章214節）が啓示された折、アッラーのみ使いはクライシュ部族の者らを招待された。
それで彼らが集まった時、彼はイスラームに関する基本的な事柄と或る部族を例にした特別な話をなさった。
そして後、こういわれた
『カアブ・ビン・ルワィーの子孫たちよ、業火から自らを救いなさい！
ムッラ・ビン・カアブの子孫よ、業火から自らを救いなさい！
アブド・シャムスの子孫よ、地獄から自らを救いなさい！
アブド・マナーフの子孫よ、地獄から自らを救いなさい！
ハーシム家の子孫たちよ、業火から自らを救いなさい！
アブドル・ムッタリブの子孫よ、業火から自らを救いなさい！
ファーティマよ、業火から自らを救いなさい！
私はあなたたちの親族であるが、アッラーの定めに抗してまで、あなたたちを守る力は私にはありませんから』」
前記と同内容のハディースは、アブドル・マリク・ビン・ウマイルによっても伝えられる。
ただし、ジャリールを伝承口述者の一人とする前記ハディースがより完全で理解しやすい内容である。
アーイシャはこう伝えている
「次の聖句「あなたの近親者に警告しなさい」（クルアーン第26章214節）が啓示された時、アッラーのみ使いはサファーの岩山にお立ちになり、こういわれた
『ムハンマドの娘、ファーティマよ！
アブドル・ムッタリブの娘、サフィーヤよ！
アブドル・ムッタリブの息子たちよ！
私にはアッラーの定めにより、あなたたちに何も役立つことはしてあげられません！
それ故、せめて私の財産にあなた方が欲しい物があれば、何なりと望みをいいなさい』」
アブー・フライラはこう伝えている
「次の聖句「あなたの近親者に警告しなさい」（クルアーン第26章214節）が啓示された時、アッラーのみ使いはこういわれた
『あなた方自身をアッラーから購いなさい（善行を積むことでアッラーの救済を願いなさい）
私にはアッラーの定めに抗してまで、あなた方の役に立つことはできません！
アブドル・ムッタリブの息子たちよ、私にはアッラーの定めに背いてまで、あなたたちのために

尽すことは不可能です！
アッバース・ビン・アブドル・ムッタリブよ、私には、アッラーの定めに反対してまであなたに尽すことはできません！
サフィーヤ（み使いの伯母）よ、私にはアッラーの定めに背いてまであなたに役立つことはできません！
ファーティマよ、ムハンマドの娘よ、なにか望みがあればいいなさい。
ただ私には、お前のためアッラーに特にお願いしてまで、何かしてやることはできないけれども！』」
アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、アーラジュやムアーウィヤなどを含む別の伝承者経路でも伝えられている。
カビーサ・ビン・ムハーリク及びズバイル・ビン・アムルはこう伝えている
「この聖句「あなたの近親者に警告しなさい」（クルアーン第26章214節）が啓示された時、アッラーの預言者は山の大岩の処においでになり、その頂まで登ってこういわれた。
『アブド・マナーフの子孫たちよ、私は警告者です。
私の立場とあなたたちの立場は、いわば、敵が現われた時家族を守るため戦う男がおり、そのため敵はその男を恐れ、攻撃しないこともある　といった類のものです』
このあと預言者は『それぞれが自戒しなさい！』と叫ばれた」
前記と同内容のハディースは、ズヘイル・ビン・アムル及びカビーサ・ビン・ムハーリクらによって別の伝承者経路でも伝えられている。
イブン・アッバースはこう伝えている
「次の聖句「あなたの近親者（と善行者の一団）に警告しなさい」（クルアーン第26章214節）が啓示された時、アッラーのみ使いは家を出てサファーの丘にお登りになり『おのおの自戒しなさい！』と叫んだ。
人々は『誰が叫んでいるのか』『ムハンマドです』などといい合いながら彼の近くに集まった。
彼は『某々の息子たちよ！
かの子孫らよ！
アブド・マナーフの子孫らよ！
アブドル・ムッタリブの子孫らよ！』と呼びかけた。
彼らが周りに集まった時み使いは『もしも私が、敵の騎馬兵らがこの山の麓に現われたと知らせたならば、あなたたちは私の言葉を信じますか』といわれた。
彼らが『私たちはあなたが嘘をいうのを聞いたことがありません』と答えると、み使いは『私はあなた方に対する厳しい懲罰についての警告者です』といわれた。
この時、アブー・ラハブは『消えてしまえ！　こんなことのためにお前は我々を集めたのか！』といって怒った。
それでみ使いは立ち上ったが、その時、次の聖句「アブー・ラハブの両手は滅び、かれも滅びてしまえ」（クルアーン第111章1節）が啓示された。
アブー・ラハブは実際その言葉通り滅んでしまった。

ともあれ、アアマシュはこの聖句を続けて、「彼の富も儲けた金も、彼のために役立ちはしない
。やがて彼は、燃え盛る炎の業火の中で焼かれよう。彼の妻はその薪を運ぶ、首に椋櫚の荒縄を
かけて」（クルアーン第111章2-5節）と終りまで唱えた」
前記と同内容のハディースは、アアマシュによっても伝えられ、それには「或る日、アッラーの
み使いはサファー山に登り、『自戒せよ』と叫ばれた」とある。
以下の部分は前記と変らないが「近親者に警告しなさい」という啓示についての言及はない。

アブー・ターリブに関して

アブー・ターリブに関する預言者の執り成しについて
1巻　P.177

アッバース・ビン・アブドル・ムッタリブによると彼はこういった
「アッラーのみ使い様、あなたを保護し守ってくれたアブー・ターリブが有利になるよう、あなたは何かなさいましたか」
これに対しみ使いは「はい、それゆえ彼は地獄の最も浅い処にいます。
もし私がそう取計らわなければ、彼は地獄の最も深い底にいることになったでしょう」といわれた。
アブドッラー・ビン・ハーリスは、アッバースがこう語ったと伝えている
アッバースは「アッラーのみ使い様、まことにアブー・ターリブはあなたを保護し、また助けた方です。
そのことが彼の役に立っていますか」と質問した。
み使いは「その通りです。
私は彼を地獄の底で見付け、最も浅い処に連れ出したのです」といわれた。
前記ハディースは、アブー・アワナーによっても別の伝承者経路で伝えられている。
アブー・サイード・フドリーはこう伝えている
アッラーのみ使いは、伯父アブー・ターリブについてたずねられた時、次のようにいわれた。
「復活の日の私の執り成しは、彼のため役立つことだろう。
彼の頭は熱さに茹だるが、業火が彼の両足首まで達するだけの浅い処に移されることだろう」

地獄での最も軽い罰について

地獄での最も軽い罰について
1巻　P.177-178

アブー・サイード・フドリーによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「地獄の住民で最も罰の軽い者は、業火の燃えついた二つの靴をはかされるが、その靴の熱さのため彼の脳は茹でたぎることだろう」
イブン・アッバースによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「地獄の住民の中でアブー・ターリブは最も罰の軽い者であるが、彼は火のついた二つの靴をはかされ、そのため脳を茹でたぎらせることだろう」
ヌアマーン・ビン・バシールは説教を行い、その中でこう語った
「私はアッラーのみ使いが次のようにいわれるのを聞いたことがある。
『復活の日、地獄の住民のうち最も罰の軽い者は足の裏に二つの燃えさしを置かれ、そのため脳を茹でたぎらせている男であろう』」
ヌアマーン・ビン・バシールによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「地獄の住民のうち、最も罰の軽い者は火のついた二本のひもを着けた（二つの）靴をはかされる。
このため、彼の頭脳は料理なべがわき立つように沸騰することだろう。
その時彼は、自分以上にひどい罰を受ける者は誰もいないと思うだろうが、実際には、彼は最も軽い罰を課せられているのである」

不信仰者の行為に関して

不信仰のまま死んだ者の行為に関して
1巻　P.178-179

アーイシャは伝えている
私はこうたずねた
「アッラーのみ使い様、私の親族のジュドアーンの息子はイスラーム以前（ジャーヒリーヤ時代）親族を大事にし、貧者に食を与えました。
それらの善行が彼のため役立ちますか」
これに対しみ使いは「彼のためには何ら役に立たない。
なぜなら彼は『主よ、復活の日に私の罪を赦し給え』とかつて祈ったことがないからです」といわれた。

「信者のみが友人である」について

信者のみが友人であることについて
1巻　P.179

アムル・ビン・アースは伝えている
「私はアッラーのみ使いが、公然と明確にこういわれるのを聞いた
『見なさい！　私の父の一族の者たち、某々を！
彼らは私にとって親しい者たちではない。
まことにアッラーと敬虔な信者らのみが私と親しい方々なのです』」

天国に入るムスリムについて

天国に受け入れられるムスリムについて
1巻　P.179-182

アブー・フライラによると、預言者はこういわれた
「私の仲間の信者七万人は、何ら咎を受けることなく天国に入るだろう」
或る男がいった
「アッラーのみ使い様、私もその一人に加えるようアッラーに祈って下さい」
次いで別の男が立ち上って「アッラーのみ使い様、私もその一人に加えるようアッラーに祈って下さい」というと、それに対しみ使いは「このことではウッカーシャがあなたより先です」といわれた。
ムハンマド・ジヤードは、アブー・フライラから聞き前記と同内容のハディースを伝えている。
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「喜びで満月の明るさのように顔を輝かせながら、七万人からなる私のウンマの集団が天国に入ることだろう」
この言葉に関連し、アブー・フライラは次のように語っている
「この時ウッカーシャ・ビン・ミフサン・アサディーが毛織りの外套をまとったまま立ち上りこういった。
『み使い様、私をその一人に加えるようアッラーに祈って下さい』
それでみ使いは『アッラーよ、どうか彼をその中に入れて下さい』と祈った。
すると、アンサール（マディーナ在来のムスリム）の一人が立ち上っていった
『み使い様、私もその一員に加えるようアッラーに祈って下さい』
み使いはこれに対し『ウッカーシャがこの件ではあなたより先です』といわれた」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「七万人の人々が一つの集団となって天国に入ることだろうが、その中には顔を月光のように輝かせている人々が見られるだろう」
イムラーンによると、アッラーの預言者はこういわれた
「私のウンマの者七万人はなんの咎めを受けることなく、天国に入ることを許される。
人々が『アッラーのみ使い様それはどんな人たちですか』とたずねると、預言者は『人を幻覚させたり、魔法を掛けたりせず、ひたすら主におすがりする者たちです』といわれた。
この時、ウッカーシャは立ち上って『私をその中の一人に加えるようアッラーに祈って下さい』と述べたが、預言者は彼にむかって『あなたはすでにその中の一人です』といわれた。
このあと一人の男が立ち上って『アッラーのみ使い様、私も彼らの中に入れるようアッラーに祈って下さい』と頼んだが、これに対し預言者は『ウッカーシャがこのことではあなたより先です』といわれた」
イムラーン・ビン・フサインによると、アッラーのみ使いはこういわれた

「私のウンマの者七万人はなんら審理されることなく天国に入るだろう」
これに対し彼らが「どんな人たちですか、み使い様」とたずねたところ、彼は「人を魔術にかけたり、不吉な予言をしたり、幻覚させたりすることなく、ひたすら主におすがりする人たちです」とお答えになった。
アブー・ハーズィムは、サフル・ビン・サアドから聞いてアッラーのみ使いの言葉をこう伝えている
「七万人、もしくは、70万人の者（アブー・ハーズィムはどちらが正確な数であったか記憶してないが）は互いに手を取り、支え合いながら天国に入る。
この時には、最初に天国に着いた者も、最後の者が到着するまで待ち、共々同時に入って行くことだろう。
彼らの顔は、喜びで満月の夜のように輝くことだろう」
フサイン・ビン・アブドル・ラフマーンはこう伝えている
私はサイード・ビン・ジュバイルと一緒だったが、その時彼が「昨夜、誰か流れ星を見た人がいますか」とたずねたので「私が見ました」と答え「私は実は礼拝していたわけではなく、さそりに噛まれたので起きて流れ星を見たのです」といい添えた。
彼が「それで何をしたのですか」とたずねたので、私は「呪文を唱えました」と答えた。
「どうしてそのようなことをしたのですか」と彼が聞いたので、私はこう答えた
「私はシャウビーの語ったハディースに従ってその通りに行ったのです」
すると彼は「シャウビーは何をあなたに語ったのですか」といった。
私はこれに対し「彼はブライダ・ビン・フサイブ・アスラミーから聞いて、凶眼に魅入られた時や、また、さそりに刺された場合などの呪文には効果があると私たちに話してくれたのです」と答えた。
すると彼は、次のように話した
「アッラーの預言者の教えに従って行動することは正しいことです。
イブン・アッバースは預言者の言葉を私たちにこう語っています
『多くの人々が私の前に連れて来られる。
私はその中に小さな集団を率いる預言者、また一人か二人の信奉者と共にいる預言者、まただれも従う者のいない預言者などの姿を見かけることだろう。
非常に大きな集団が私の処に連れて来られる時私は、私のウンマの者だと錯覚する、その時“これはモーゼと彼の民です。地平線の方を見なさい”と告げられる。
そちらを眺めるとそこには大集団が見える。
私は更に地平線の別の方角を見るようにといわれて目を転じるが、そこにも大集団が見られ“これがあなたのウンマです。彼らのうち、七万人はなんら審理されることも罰を受けることもなく天国に入れるのです”と告げられるのである』
こう話して後、み使いは立ち上り、ご自分の家に入って行かれた。
そのあと彼らは『一体どんな人たちが審理されることも、罰を受けることもなく天国に入ることを許されるのか』と、熱心に論じ始めた。

或る人は『それは多分、み使いの教友として一緒に過した人々であろう』といい、また別の者は『生まれながらのムスリムで、アッラーに何ものをも比肩しなかった人々のことであろう』といった。
これら以外にも様々な意見を人々は述べ合った。
その時み使いが、また、彼らの処に出て来られ『あなたたちは何について論じているのですか』とおたずねになった。
彼らがそれらの話題について述べると、み使いはこういわれた
『彼らとは、呪文を自分で唱えたり、他人にそれを頼んだり、また、予言を信じたりせず、一途に主におすがりする人々のことです』
この時、ウッカーシャ・ビン・ミフサンが立ち上っていった
『私を是非彼らの一人として下さるようアッラーに祈って下さい』
み使いは彼に『あなたはすでに、彼らの中の一人です』といわれた。
この時、また別の男も立って『アッラーが私を彼らの中の一人に加えるよう祈って下さい』と頼んだが、み使いは『ウッカーシャがあなたより先です』といわれた」
イブン・アッバースによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「復活の日に、人々が私の処に連れて来られる」
以下の話は前記ハディースと同内容であるが、この話の前の部分についての記述はみられない。

天国でのムスリムの数について

ムスリムが天国の住民の半分を占めることに関して
1巻　P.182-184

アブドッラー・ビン・マスウードは伝えている
アッラーのみ使いは、私たちにこういわれた。
「あなたたちは、天国の住民の四分の一をムスリムが占めるのを喜ばしいことと思いませんか」
それに対し、私たちは「アッラーフ・アクバル！（アッラーは偉大なり！）」と叫んで主を讃えた。
み使いは次いでこういわれた
「あなたたちは、ムスリムの数が天国の住民の三分の一にも達するのを喜ばしいことと思いませんか！」
私たちはまた「アッラーフ・アクバル！」と叫んで主を讃美した。
み使いは更にこういわれた
「私はあなたたちの数が天国の住民の総数の半分にも達することを願っています。
その理由は、不信者らの中の信仰者の数は、黒雄牛の躰にある白毛、もしくは、白い雄午の躰に生える黒い毛よりも多くはないからです（注）」
（注）篤信者の数は不信者の数に比較すべくもないほど少ないこと、及び、信者、不信者の行動は、白と黒のように対照的で、両者間には大きな差があることを示す
アブドッラー・ビン・マスウードはこう伝えている
私たち凡そ40名の者がアッラーのみ使いと共に天幕の中にいた時、み使いはこういわれた
「もしも、天国の住民の四分の一をあなたたちで占めるとすれば喜ばしいことではありませんか」
私たちは「はい、喜ばしいです」と答えた。
み使いはまた「あなたたちが天国の住民の三分の一を占めるとすれば嬉しくありませんか」といわれた。
それに対しても私たちは「その通りです」と答えた。
み使いは次いでこういわれた
「私の生命を司る御方、アッラーに誓って。
私はあなたたちの数が天国の住民の半数を占めることを願っています。
その理由は、信者以外には天国に入ることを許されないからです。
不信者らの中のあなたたち信者の数は、黒い雄牛の皮に生える白い毛、もしくは、赤い雄牛の皮の黒い毛の数よりも多くはないからです」
アブドッラー・ビン・マスウードはこう伝えている
アッラーのみ使いは私たちに説教なさったあと、皮天幕に背をもたらせながらこういわれた
「見なさい！　イスラームを信じている者以外には誰も天国に入ることはないのです！

おお、アッラーよ！　私はあなたのみ教えを人々に伝え得たでしょうか！
おおアッラーよ！　私がそれを伝え得たと証言して下さい！」
み使いは、この後、教友たちにむかって「あなたたちの数が天国の住民の四分の一にも達すればと願いませんか」といわれた。
私たちが「はい、み使い様」と答えると、み使いはまた「あなたたちの数が天国の住民の三分の一ほども占めればと思いませんか」といわれた。
人々がこれに対しても「はい、み使い様」と答えると、こういわれた
「私はあなた方が、天国の住民の半数を占めるようになることを願っています。
あなた方は人類の中で、たとえば白雄牛の躰に生える黒い毛、もしくは、黒雄牛の躰の白い毛にも類するほど数少ない存在なのです」

地獄に送られる人々について

地獄に送られる人々について
1巻　P.184-185

アブー・サイードによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「アッラーが『アダムよ！』と呼びかけられると、アダムは『私はここにおります。御意のままに！　主よ！　幸いはあなたの御手次第です！』と答えることだろう。
アッラーはこの折彼にむかい『地獄の住民の一団を引き出せ』とお命じになるが、アダムは『地獄の住民とは誰のことですか』とたずねるに相違ない。
これに対しアッラーは『彼らは、1000名の人間につき、999名にも及ぶ者たちである』といわれることだろう」
み使いは続けてこうお話になった
「この言葉を聞くと恐怖のあまり全ての子供らの髪の毛は白くなり、全ての妊婦は流産することだろう。
また、あなたたちはこの時、錯乱状態の人々を見るだろうが、彼らは実際は酔っているのではなく、アッラーの厳しい罰を恐れるあまりそうなるのである
」（アブー・サイードは「これは人々にとってあまりに厳しすぎる言葉であった」と述べている）
人々は「み使い様、私たちの中で、だれが地獄に落とされるのですか」とたずねた。
それに対しみ使いは「あなた方にとっては良い知らせです！
マグとマゴグ（注）に率いられた人々が、地獄の住民となるこれら数千の者たちなのです。
天国に入るのは、あなた方の中から選ばれる人々なのです」といわれた。
み使いは、また、こうもいわれた
「私の生命を司る御方に誓って。
私はあなたたちの数が天国の住民の四分の一を占めるよう願っています」
私たちはそのお言葉を聞き「アルハムド・リッラー！」と叫んでアッラーを讃え、また「アッラーフ・アクバル！」と叫んでアッラーを讃美した。
み使いはその後、こうもいわれた
「私の生命を司る御方に誓って。
私はあなた方が天国の住民の三分の一を占めることを願っています」
私たちはそれに対してもアッラーを賞揚し、讃美する言葉を叫んだ。
み使いは更にこういわれた
「私の生命を手になさる御方に誓って。
私はあなた方の数が天国の住民の半数に達することを願っています。
あなた方は、たとえていえば、黒雄牛の皮にみえる白い毛、もしくは、ろばの前脚にある一本の縞筋ほどにも数少ない存在なのです」

（注）マグとマゴグ（ヤージュージュ・ワ・マージュージュ）聖書やクルアーンにも説かれる終末期に現われる二部族の名前。
黒海の北部、または、東北部より現われ、多くの王国を侵略し災害をもたらす　といわれる
前記と同内容のハディースは、アアマシュによっても伝えられるが、それには次の表現、すなわち「あなた方は復活の日、あまたの人々の中で、丁度黒雄牛の躰の白い毛、もしくは、白雄牛の躰の黒い毛のような存在となることだろう」がみられる。
ただし「ろばの前脚にある一本の縞筋」という言葉は記されてない。

ウドゥー（小浄）の功徳について

ウドゥー（小浄）の功徳について
1巻　P.187

アブー・マーリク・アシュアリーによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「清浄であることは信仰の半ばを満たすことです。
アルハムド・リッラー（アッラーに称讃あれ）！　と唱することは（善悪の）秤りを善行側に傾けます。
スブハーナッラー（アッラーの栄光を称え奉る）！　やアルハムド・リッラー！　と唱えて、アッラーを崇拝することは、天と地の間を満たすことです。
礼拝は灯明です。施しは信仰の証しです。
そして忍耐はアッラーへの服従を示す光です。
更にまた、クルアーンはあなたの善行を立証するもの、もしくは、あなたの悪行に対する反証となるものです。
人は全て、朝毎に出掛け自分を売り歩く商人の如き存在で、その行為のいかんによって、来世に救われる者、破滅される者が生ずるのです」

清浄さについて

清浄さが礼拝の基本たることについて
1巻　P.187-188

ムサアブ・ビン・サアドはこう伝えている
アブドッラー・ビン・ウマルは、病床にあったイブン・アーミルを見舞った。
この折「イブン・ウマルよ、私のためアッラーに祈ってくれませんか」と頼まれた彼は次のように答えた
「私はアッラーのみ使いが『アッラーは清浄でない者の礼拝は受け入れないし、不正手段で得た富による施しもお認めにならない』といわれるのを聞いたことがあります。まして、あなたはかつてバスラの知事ではなかったですか（注）」
（注）イブン・アーミルは、バスラの知事時代、人々を苦しめ悪評の高い人物だった。
そのような人物のための祈りにはなんの効果も期待できない故、自ら深く反省し懺悔すべきことが肝要である　とたしなめたのである
前記と同内容のハディースは、シュウバやシマーク・ビン・ハルブなどによっても伝えられている。
ハンマーム・ビン・ムナッビフは、アブー・フライラから聞いて次のハディースを伝えている
アッラーのみ使いはこういわれた
「不浄者の礼拝は、彼がウドゥーを行わない限り受け入れられないだろう」

ウドゥー（小浄）の方法に関して
1巻　P.188-189

ウスマーンの元奴隷フムラーンは、こう伝えている
ウスマーン・ビン・アッファーンは、水を運ばせて後、ウドゥーを次の順序で行った。
先ず両手を三度洗い、口をすすぎ、次いで鼻孔を清めた後、顔を三度洗った。
その後、右腕を肘まで三度、次いで左腕を同様に三度洗った。
それから頭部をぬぐい、その後、右足をくるぶしまで三度、次いで左足を同様に三度洗った。
ウドゥーを終えた後、彼は次のように語った。
「私はアッラーのみ使いがウドゥーを、私が今行ったのと同様になさるのを見たことがある。
その時、み使いは『私のやり方に従ってウドゥーを行い、その後、立ち起って二ラカートの礼拝に専念する者は、過去に犯した罪全てを許される』といわれた」
イブン・シハーブは、このハディースに関連して「我々の学者たち（ウラマー）は、これこそ、礼拝のための最も完全なウドゥーの方法であると評した」と述べている。
ウスマーンの元奴隷フムラーンは、こう伝えている
「私はウスマーンが、水容器を運ばせ、ウドゥーを行うのを見た。
彼は三回水を両手に注いで両手を洗い、そのあと、右手を容器に入れて口をすすぎ鼻孔を清めた。
更にまた顔を三度、次いで両手を肘まで三度洗ってから頭を手でぬぐい、その後両足をそれぞれ三度ずつ洗った。
彼はこの折『私と同様にウドゥーを行い、雑念なく二ラカートの礼拝を捧げる者の過去の罪をアッラーは全てお許しになろう』というアッラーのみ使いの言葉を語ってくれた」

ウドゥー後の礼拝の功徳について
1巻　P.189-192

ウスマーンの元奴隷フムラーンは、ウスマーンの話をこう伝えている
礼拝時刻を告げる役目の者（ムアッジン）が、アスル（日没前）の礼拝時間にやってきた時、ウスマーンはモスクの中庭にいた。
ウスマーンは水を運ばせ、ウドゥーを行ってからこう語った
「アッラーに誓って。もしアッラーの啓典に『神兆や正しい導きを隠してはならない』との言葉がなければ、私が話すこともなかった或るハディースを伝えておきたい。アッラーのみ使いはこういわれたのです
『ウドゥーを正しく行ってから礼拝を捧げるムスリムの、各礼拝時刻の間に犯した罪全ては、アッラーによって許される』と」
前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路によっても伝えられる。
なお、アブー・ウサーマによるハディースには「ウドゥーを丁寧に行い、その後定めの礼拝をする者は」という表現がみられる。
フムラーンによると、ウスマーンは、ウドゥーを行った時こう語った
「アッラーに誓って。私はあなたたちに或るハディースを伝えたい。アッラーの聖典にそうせよという意味の言葉がなければ、私はこの話をあなたたちに語ることはなかったに相違ない。（ともあれ）アッラーのみ使いは『ウドゥーを正しく行った後礼拝をする者は、その礼拝と次の礼拝までの間に犯した罪を全て許される』といわれたのです」
これに関連しウルワは、聖典の言葉とは「われらがすでに聖典の中で人々に明示してあるのに、われらが下した明証と導きとを隠す者は必ずアッラーの怒りに触れ、呪う人々（即ち、天使たち及び全人類）の呪いをも受けることだろう」（クルアーン第2章159節）であると述べている。
アムル・ビン・サイード・ビン・アースは伝えている
私がウスマーンの処にいた時、彼はウドゥー用の水を持って来るよう命じてからこう語った
「私はアッラーのみ使いから次の言葉を聞いた
（すなわち）『定めの礼拝の時刻が来た時、ウドゥーを丁寧に行い、ひたすら謙虚に礼拝を捧げるムスリムであれば、彼の過去の数々の罪は、それが大罪でない限り、いつも許されることだろう』」
ウスマーンの元奴隷フムラーンは、伝えている
私はウスマーン・ビン・アッファーンのため、ウドゥー用の水を運んだ。
彼はウドゥーを済ませてから「まことに人々は、アッラーのみ使いに関する多くのハディースを語り合っているが、私はそれがどんな内容であるか知らない。
ただ、私はみ使いがウドゥーを丁度私が今行ったやり方でなさるのを見たし『この通りにウドゥーを行う者は、過去の全ての罪を許され、この後の礼拝やモスク参りに対しても余分の報奨が約

束される』といわれたのを覚えている」と語った。
なお、これと同内容のイブン・アブダによるハディースには「私がウスマーンの処に寄った時、彼はウドゥーを行っていた」という表現がみられる。
アブー・アナスは、次のように伝えている
ウスマーンはマカーイド（注）の処でウドゥーを行って後、「アッラーのみ使いのウドゥーのなさり方を、私はあなたたちにこれまでやってみせなかったですか」といって、躰の各部分を三回ずつ洗った。
このハディースに関連しクタイバは「この時ウスマーンと一緒に、み使いの教友らがいた」と付言している。
（注）マカーイドに関しては二説あり、カリフ・ウスマーンが自らの邸宅の前に建てた店舗、もしくは、彼が友人らと過ごすためモスク近くに造らせた座り台の名称　といわれる
フムラーン・ビン・アバーンは、こう伝えている
私はいつも沐浴用の水をウスマーンの処に置いた。
少量の水を躰にかけて、彼は毎日沐浴をする習慣だった。
或る時彼は次のように語った
「アッラーのみ使いは私たちが礼拝から戻る時間に、或る話をなさった（これに関連し、マイサルは『アスル（日没前）の礼拝の時だったと思います』と述べている）
その折、み使いは『私にはこの事をあなたたちに話すべきか、黙っているべきか、わからない』といわれたので私たちは、『み使い様、もしも善い事でしたら話して下さい。それ以外の場合は、どうすべきかアッラーとそのみ使いが最もよく御存知でありましょう』といってお願いした。
それでみ使いは『自ら身を清めてアッラーの定めた通りに沐浴を行い、その後、日に五回の礼拝を捧げるムスリムは、これらの各礼拝時刻の間に犯したもろもろの罪を許されることだろう』と話されたのであった」
ジャーミウ・ビン・シャッダードは、こう伝えている
ビシュルが知事だった時代、フムラーン・ビン・アバーンがこのモスクでアブー・ブルダにウスマーン・ビン・アッファーンの言葉を語るのを私は聞いたことがある。
それによると「アッラーのみ使いは『アッラーが命じた通りにウドゥーを完了し、義務として定められた（五回の）礼拝を行う者はそれぞれの礼拝と礼拝の間に犯した様々な小罪を許されるであろう』と述べられた」という。
このハディースは、イブン・ムアーズの口述から採録された。
なお、グンダルの伝えるハディースには同内容ながら、「ビシュルが知事だった時代」や「定められた」という言葉はみられない。
ウスマーンの元奴隷フムラーンは、こう伝えている
或る日、ウスマーン・ビン・アッファーンは丁寧にウドゥーを行ってから次のように語った
「私はアッラーのみ使いが非常に丁寧にウドゥーをなさるのを見たが、その折み使いは『私のやり方に準じてウドゥーを行った後、礼拝することだけをひたすら願ってモスクに出掛ける者は、過去に犯した罪全てを許されるだろう』といわれた」

フムラーンはウスマーンから聞いたアッラーのみ使いの言葉を、こう伝えている
「礼拝のためのウドゥーを正しく行ってから出掛けて、人々と共に、もしくは、団体で、または、モスクで、定めの礼拝を捧げる者に対し、アッラーは、彼のもろもろの罪をお許しになるだろう」

礼拝の効験について

日々の礼拝、金曜礼拝、ラマダーン月の礼拝について
1巻　P.192

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「一日五回の礼拝と金曜から次の金曜に至るまでの礼拝は、大罪を犯してない限り、その間に行ったもろもろの罪の償いとなることだろう」
アブー・フライラによると、預言者はこういわれた
「一日五度の礼拝と金曜日毎の礼拝は、その間に犯した罪を償うことだろう」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「日に五度の礼拝、金曜礼拝から次の金曜礼拝、また、ラマダーン月から、次のラマダーン月までに行われる礼拝は、それが大罪（注）でない限り、この間に犯したもろもろの罪行の償いとなるだろう」
（注）殺人、強盗、窃盗、姦通、中傷、飲酒などの犯罪、いわゆる、フドゥード（固定）罪を意味する

ウドゥーの効用に関して
1巻　P.192-193

ウクバ・ビン・アーミルはこう伝えている
私たちはらくだの世話をまかせられていた。
私の番に当り、私がらくだの放牧から夕方帰って来た時、アッラーのみ使いは立ったまま人々に説教しておられた。
その時私は「ウドゥーをきまり通り行い、その後、立ち上って、二ラカートの礼拝を真筆に心をこめて行うムスリムに対し天国は約束されるだろう」というみ使いの言葉を聞いた。
「なんと素晴らしいことだろう！」と私が思わず口走ると、私の前にいた人は「先に話された言葉はこれよりもっと素晴らしかった」といった。
私がふと見ると、その人物はなんとウマルだった。
そして続けて「私は、あなたがこの少し前に放牧から帰って来たのを知っている」と彼はいい、み使いが先に説教された言葉を私に次のように語ってくれた。
「あなた方のうちだれでもウドゥーをきちんと終えてから『アッラーの他に神はなく、ムハンマドはアッラーのしもべであり、み使いである』と証言する者に対して天国の八つの門は開かれ、どれでも好きな門からそこに入ることができるだろう」
ウクバ・ビン・アーミルは伝えている
「まことにアッラーのみ使いは、こういわれた」
以下のハディースは前記と同内容である。
ただし「ウドゥーを行ってから『私は唯一なるアッラーの他に神はなく、アッラーに比肩すべきものもないことを証言致します。
私はまた、ムハンマドがアッラーのしもべであり、使徒であることを証言致します』という者に対して」と記され、表現上に多少の差がみられる。

預言者のウドゥーに関して

預言者のウドゥーに関して
1巻　P.193-194

アッラーのみ使いの教友の一人、アブドッラー・ビン・サイド・ビン・アーシム・アンサーリーは伝えている
「私は人々にこう頼まれた『私たちにみ使いが行った通りのウドゥーの仕方を示して下さい』」
それで彼は水の入った容器を持って来させ、水を注いで両手を三度洗って後、口をゆすぎ、一方の手の平で軽く押さえながら鼻をふんふんさせてすすいだ。
これらは三度ずつ行われた。彼は更に水で手を濡らし、両腕をそれぞれ肘まで二度ずつ洗った。
そのあと更にまた、水で手を濡らし、頭部を前から後に両手で拭った。
このあと、彼は両脚をくるぶしまで洗った。
そして「このようにみ使いはウドゥーをなさったのです」と語った。
前記と同内容のハディースは、アムル・ビン・ヤヒヤーによっても伝えられるが、それには「両くるぶし」という言葉はない。
マーリク・ビン・アナスは、アムル・ビン・ヤヒヤーから聞いて前記と同内容のハディースを伝えている。
ただし、表現上に多少の差がみられる。
たとえば彼は「口をゆすぎ、水を鼻孔に入れて三度すすぐ」とは述べているが「一方の手の平で」とはいってない。
また、次の言葉「彼は両手で顔の前部から首筋まで拭った後、またそこから前部まで拭い戻した。
その後、彼は両足を洗ったのである」が追加されている。
バフズは、ウハイブがアムル・ビン・ヤヒヤーから聞いた前記と同内容のハディースを伝えているが、それには次の表現がみられる
「彼は口をゆすぎ、その後三回手の平で水を掬って鼻孔に吸い込み、鼻をすすいだ。
それから手で頭の前部から後部にかけて一回拭った」
これに関連しバフズは「このハディースを私に語ったのはウハイブであるが、彼は『アムル・ビン・ヤヒヤーが二度もこう話してくれた』と述べていた」と語っている。
アブドッラー・ビン・ザイド・ビン・アーシム・マージニーはこう伝えている
私はアッラーのみ使いがウドゥーをなさるのを見た。
その折、み使いは口をゆすぎ、鼻孔を清め、そのあと、三度顔をお洗いになった。
それから右手を三度、左手を三度洗われた。
そして後、汲みかえた新しい水を使って頭をなでつけ、その後両足をきれいになるまでお洗いになった。

鼻孔とトイレ後の洗浄に関して

鼻孔の清め及びトイレ後の始末に関して
1巻　P.194-195

アブー・フライラによると、預言者はこういわれた
「用便後、小石でふきとる時には、一つずつ取って使うようにしなさい。
また、ウドゥーを行う時には、鼻孔に水を吸い込んで、それを吹き出すようにしなさい」
ハンマーム・ビン・ムナッビフはこう伝えている
「アブー・フライラは、アッラーのみ使い、ムハンマド様のハディースの多くを私たちに語ったが、これもその一つです。
み使いは『あなた方がウドゥーを行う時には、鼻孔に水を吸い込んでからそれを吹き出すようにしなさい』といわれた」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「ウドゥーをする者は、鼻をきれいにすすぎなさい。
用便後の始末に小石を用いる者は、それを一つずつ取って使いなさい」
アブー・フライラ及びアブー・サイード・フドリーは、前記と同内容のアッラーのみ使いの言葉を伝えている。
アブー・フライラによると、預言者はこういわれた
「あなた方は、眠りから覚めた時、ウドゥーを行い、鼻を三回すすがねばなりません。
なぜならば、悪魔は夜を鼻孔の中で過ごすからです」
ジャービル・ビン・アブドッラーによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「用便後、小石を用いる者は、それを一つずつ使って何度も拭きなさい」

両足の洗浄について
1巻　P.195-197

シャッダード・ビン・ハードの元奴隷、サーリムはこう伝えている
私は預言者の妻アーイシャの処に、サアド・ビン・アブー・ワッカースが死んだその日に行った。
アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクルもまたそこに来て、彼女の処でウドゥーを行った。
この折、彼女は「アブドル・ラフマーンよ、ウドゥーを丁寧に行いなさい。
アッラーのみ使いは『業火に焼かれる両踵は災いなるかな！』といっておられましたよ（注）」と語った。
（注）ウドゥーの際両脚の洗浄は、ともすれば、なおざりにされがち故こういわれたのである
シャッダードの元奴隷、アブドッラーは、アーイシャの処に来て彼女から聞いた前記と同内容の預言者のハディースを伝えている。
マフリーの元奴隷、サーリムはこう伝えている
「私とアブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクルは、サアド・ビン・アブー・ワッカースの葬式に加わるためやって来、アーイシャの住居の門の傍らを通った。
その時彼はアーイシャが語った前記と同内容の預言者の言葉を語ってくれた」
シャッダード・ビン・ハードの元奴隷サーリムは「私はアーイシャの処にいた」と語って後、前記と同内容のハディースを伝えた。
アブドッラー・ビン・アムルは伝えている
私たちはアッラーのみ使いと一緒にマッカからマディーナに帰った。
その途中、水場に近づいた時、或る人々は先を急ぎ、アスル（日没前）の礼拝時刻でもあり、あわただしくウドゥーを行った。
私たちが彼らの処に着いた時、すでに乾ききった彼らの足には水気が全くみられなかった。
それを見て、み使いは「業火に焼かれる両踵は災いなるかな！」といわれ「ウドゥーをきちんと行いなさい！」と注意なさった。
シュウバも前記と同内容のハディースを伝えているが、それには「ウドゥーをきちんと行え！」という表現はみられない。
アブドッラー・ビン・アムルはこう伝えている
預言者は、旅中、遅れて私たちよりずっと後を来られた。
そのため私たちは、後方に戻って彼と一緒になった。
丁度、アスル（日没前）の礼拝の時刻となったので、私たちは両足のウドゥーを簡単にこするだけで済まそうとした。
この時、み使いは「災いは両踵より来る。業火の元であるぞ！」といわれた。

アブー・フライラはこう伝えている
預言者は、踵を洗わない男を見て「両踵は業火のもと故、気をつけよ」といわれた。
アブー・フライラはこう伝えている
彼は人々が水つぼを使ってウドゥーをしているのを見た時「ウドゥーをきちんとやりなさい。
私はアブー・カーシム（ムハンマドの呼び名）が『膝の腱は、業火に焼かれる元になる』といわれたのを聞いたことがある」と告げた。
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「業火の元たる両踵は災いなるかな！」

ウドゥー規定を守ることについて

ウドゥーを規則通りに行うことについて
1巻　P.197

ジャービルによると、ウマル・ビン・ハッターブはこう語った
或る人はウドゥーを行ったが、足の爪の部分を洗わなかった。
預言者はそれを見て「戻って、ウドゥーをきちんとやり直しなさい」といわれた。
その人は一旦家に戻り、ウドゥーをやり直してから礼拝を行った。

ウドゥー用水の効験に関して

ウドゥーの水が罪を洗浄することについて
1巻　P.197-198

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「ムスリムであれ、信者であれ、しもべがウドゥーの規則に従って顔を洗う時、彼が日頃気にしているあらゆる罪は、彼の顔から水と共に、もしくは、水の最後の一滴と共に洗い流される。
また彼が両手を洗う時、その両手が犯したあらゆる罪は、水と共に、もしくは、水の最後の一滴と共に洗い落とされる。
更にまた、彼が両足を洗う時、彼の両足の歩みが犯したあらゆる罪は、その水と共に、もしくは、水の最後の一滴と共に流し去られる。
その結果として、彼は全く罪汚れのない人となるのである」
ウスマーン・ビン・アッファーンによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「ウドゥーを完全に行う者のもろもろの罪業は、躰から、はたまた、爪の下からさえも、流れ落ちることだろう」

額と足首のウドゥーについて

ウドゥーで額と足首を洗うことについて
1巻　P.198-201

ヌアイム・ビン・アブドッラー・ムジミルはこう伝えている 私はアブー・フライラがウドゥーを行うのを見た。彼は顔を丁寧に洗って後、右手を腕の部分まで洗い、次いで左手も腕の部分まで洗った。 そして後、頭を拭い、次いで右足を脛まで洗い、続いて左足も脛まで洗った。 この後彼は「これが私の見たアッラーのみ使いのウドゥーのなさり方でした」といった。 彼はまたこの時、み使いの言葉をこう伝えた 「あなた方はウドゥーの完全さ故に、復活の日、顔や両足首を輝かせることだろう。あなた方のうちできる者は、額や両足首の輝きをもっと強くしなさい」ヌアイム・ビン・アブドッラーは、伝えている 私はアブー・フライラがウドゥーを行うのを見た。彼は顔を洗ってから、両手をそれぞれ腕まで洗い、そして後、両足をそれぞれ脛まで洗った。 その後彼は次のように語った 「私は、アッラーのみ使いがこういわれるのを聞いたことがある。『私のウンマ（信仰共同体）の者はウドゥーのしるし故に、顔、両手、両足共々きらきら輝かしながらやって来ることだろう。それ故、額の輝きをもっと強めることのできる者はそうしなさい』」アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた 「私の水槽は（シリヤの海岸町）アイラと、（イエメンの海辺の町）アデンとの間の距離よりも大きい。そして、その水は氷よりも白く、牛乳入りの蜂蜜よりも甘い。また、ここで使う容器は星の数よりも多い。私は、丁度水場の所有者が他人のらくだに水を与えるのを禁ずるように、信仰なき人がそこに来ることを許さないであろう」人々が「み使い様、あなたにはその日、私たちが誰であるか、わかりますか」と問うたところ、彼は「はい、わかります。あなたたちは他の人にない明らかなしるしを持っているからです。それは、ウドゥーの証跡で、額、両手、両足をきらきらと輝かせながら私の処にやって来るからです」とお答えになった。アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた 「私が支配した人々が、私の貯水場にやって来るだろうが、私は、信者以外の者たちを、丁度、或る人が他人のらくだを自分のらくだから追い立ててひき離すように、追い出すことだろう」 人々は「アッラーの預言者様、その時、私たちを識別できますか」とたずねた。 これに対し彼は「できます。あなたたちは他の人々にはないしるしを持っているからです。あなたたちは、ウドゥーを行った証拠として、額に白い流星じるしや両足に白い斑点を付けて、私の処にやって来るからです。ただし、あなたたちの或る集団は、私の処に来ることを阻まれ到着することができないであろう。そのため私は『主よ、彼らは私の教友たちです』といって訴えるが、これに対して天使が主に代わって『あなたは、これらの人々があなたの歿後、何をしたか知っていますか』（注）ということだろう」と話された。
（注）ムハンマド歿後、カリフ・アブー・バクルの時代に、イスラームの信仰から離れていった部族の者らを指すフザイファによると、アッラーのみ使いはこういわれた 「私の貯水場はアイラとアデン間の広さより大きい。私の生命の主に誓って。私は信者以外の人々を、丁度、見知らぬらくだを水場の所有者が追い出すように、そこから追い払うことだろう」 教友たちは「み使い様

、その場合私たちを識別できますか」と問うた。 み使いは「はい。あなたたちはウドゥーのしるしを顔、両手、両足に白く輝かせながら私の処に来るからです。あなたたち以外にだれもこのしるしを持つ者はないからです」とお答えになった。アブー・フライラは次のように伝えている アッラーのみ使いは、墓地に来てこうお唱えになった 「あなた方に平安がありますように！信者の館の方々よ。私たちも、アッラーの御心によって、あなた方の処に参るでありましょう！私は、まことに、私の同胞の方々とお会いしたく願っています」 このお言葉を聞いた人々は「み使い様、私たちはあなたの同胞ではありませんか」といった。 彼はこれに対し「あなたたちは、私の友人です。私たちの同胞とは、まだこの世に生まれてない人たちのことです」と答えた。 これを聞いて人々は「み使い様、まだ生まれてもないあなたのウンマの人々を、どうやって識別なさるのですか」と質問した。 み使いはこういわれた 「或る人が、全身真黒の馬群の中に額と両足のところに白い星型の斑点を持った何頭かの馬を所有している場合を想像してみなさい。その人には、自分の馬たちを識別できないでしょうか」 これに対し人々は「確かにできます」と答えた。 み使いは続けてこう話された 「彼らはウドゥーを行ったため、顔、両手、両足を白く輝かせながらやって来るのです。私は彼らより先に私の水場に到着していますが、丁度迷ったらくだが追い出されるように、或る人たちは私の水場から追い出されるでしょう。私が大声で『来なさい！』と呼びかけようとする時『彼らはあなたの歿後、信仰を変えてしまった者たちです』と天使から告げられ、それで、私は『行きなさい。去りなさい』というからです」アブー・フライラは、別の伝承者経路でこう伝えている アッラーのみ使いは、墓地に行きこういわれた 「信仰者の館にいる人々よ、あなた方に平安がありますように！アッラーの御意志があれば、私たちもあなた方の処に参ることでしょう」 以下は「或る人々は私の水場から追い払われるだろう」という表現を除き、前記ハディースと同内容である。

審判の日の光とウドゥーに関して

審判の日の光とウドゥーの輝きに関して
1巻　P.201

アブー・ハーズィムは伝えている
「私はアブー・フライラの背後に立って、彼が礼拝のためのウドゥーを行うのを見た。
彼は手をのばして腋の下まで洗った。
それで私は「アブー・フライラよ、そのようなウドゥーの方法がありますか」といった。
彼はそれに対し「おお、ファッルーフ部族の者よ、あなたはここにいたのか。
もし、そうとわかっておれば、私はこのような仕方でウドゥーを行わなかったろうに」と述べ、
更に「私の教友ムハンマド様は『審判の日の光はウドゥーによって生じた輝きが及ぶ処まで達する』といわれた」と話してくれた

状況が困難な時のウドゥーに関して

状況が困難な場合にもウドゥーを行うことについて
1巻　P.201-202

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「アッラーが、どうすればもろもろの罪を消し去り来世での地位を高くなさるかについて、私はあなたたちに話しませんでしたか」
人々がこれに対し「はい、まだです。み使い様」と答えると、彼は「たとえ状況が困難な場合でも、ウドゥーを丁寧に行うこと、モスクにしばしば足を運ぶこと、礼拝後には次の礼拝時刻を心して待つこと、これらが留意すべきことなのです」といわれた。
前記と同内容のハディースは、アラー・ビン・アブドル・ラフマーンによっても伝えられる。
なお、伝承者の一人シュウバによるハディースには「留意すべきこと（リバート）」という言葉はないが、同じ伝承者の一人マーリクのハディースには「これはあなた方にとって留意すべきこと（リバート）です」という表現が二度繰り返されている。

爪楊枝（シワーク）使用について

爪楊枝（シワーク）の使用について
1巻　P.202-203

アブー・フライラによると、預言者はこういわれた
「もし、信者ら（ズバイルによると『私のウンマ』）に負担でないならば、私は彼らに礼拝の度毎に爪楊枝を使うよう命じたいと思う」
ミクダーム・ビン・シュライフは、彼の父がこう語ったと伝えている
私はアーイシャに「預言者が家に帰って最初になさることは何でしたか」とたずねた。
すると、彼女は「預言者は先ず爪楊杖をお使いになった」と答えた。
アーイシャはこう伝えている
預言者は家に入ると、先ず第一に爪楊枝をお使いになった。
アブー・ムーサーはこう伝えている
私が預言者の処に行った時、彼の舌の上に爪楊枝の端が見えた。
フザイファは伝えている
アッラーのみ使いは深夜の礼拝（タハッジュド）のため起きる度に、爪楊技で口中を掃除なさった。
フザイファによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。
ただ、これには「アッラーのみ使いは、夜起き出す度に」とはあるが、「深夜の礼拝（タハッジュド）のために」という言葉はない。
フザイファはこう伝えている
アッラーのみ使いは、夜起きる毎に、いつも爪暢枝を使って口中を清潔になさった。
イブン・アッバースは、こう伝えている
彼はある夜、預言者の家に泊った。
アッラーの預言者は深夜礼拝のため起き、外に出て空を眺め、その後聖典の「イムラーン家章」の中から次の聖句をお誦みになった。
「本当に天と地の創造、また夜と昼の交替の中には、思慮ある者へのしるしがある。
または立ち、または座り、または横たわって（不断に）、アッラーを唱念し天と地の創造について考える者は言う。
『主よ、あなたは、徒らにこれを御創りになったのではないのです。
あなたの栄光を讃えます。
火の懲罰から私たちを救って下さい』」（クルアーン第3章190-192節）
それから彼は家の中に戻り、爪楊枝を使ってからウドゥーをなさり、その後立ち上って礼拝を行った。
そしてこのあと床に就かれた。
そうして後、しばらくしてからまた起きだし、外に出て空を眺め、先程の聖句を再びお誦みにな

ってから家に入った。

そして、爪楊枝を使ってからウドゥーを行い、その後立ち上って礼拝をなさった。

使徒たちのスンナについて

使徒たちのスンナ（フィトラ）について
1巻　P.203-205

アブー・フライラは、預言者から聞いてこう語っている
預言者らのスンナ（フィトラ（注））は次の五つである（もしくは、次の五つがフィトラに近い行為である）
それらは割札すること、陰毛を剃ること、爪を切ること、腋毛を抜くこと、口髭をそろえること　である」
（注）フィトラとは本来、性癖、気質、傾向を意味する言葉であるか、宗教的感覚と訳す場合もある。ここでは、使徒らのスンナ（慣行）と同意義に用いられている
アブー・フライラは、アッラーのみ使いから聞いてこう伝えている
フィトラには次の五つがあり、それらは、割礼すること、恥毛を剃ること、口髭を切りそろえること、爪を切ること、腋毛を抜くこと　である。
アナスはこう伝えている
期日をきめて口髭を整え、爪を切り、腋毛を抜き、恥毛を剃るよう心掛け、それらを40日以上怠ることのないようにすべきである。
イブン・ウマルによると、預言者はこういわれた
「口髭をきれいに整え、顎髭を蓄えなさい」
イブン・ウマルは、別の伝承者経路でこう伝えている
預言者は私たちに、口髭をきちんと切りそろえ、顎髭を蓄えるようお命じになった。
イブン・ウマルによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「多神教徒らに同調してはならない。
彼らと弁別するためにも口髭をきれいに手入れし、顎髭を伸ばしなさい」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「口髭を撃乙、顎髭を伸ばしなさい。拝火教徒（マジュース）らに同調してはならない！」
アーイシャによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「次の十種がフィトラ（預言者のスンナ）に相当する行為で、それらは口髭を整えること、顎髭を伸ばすこと、爪楊枝を使うこと、水で鼻孔を洗うこと、爪を切ること、指の関節を洗うこと、腋毛を抜くこと、恥毛を剃ること、陰部を水で清潔にすること　である」
このハディースの伝承者の一人ムスアブは「私は十番目を忘れたが、多分、口をゆすぐことであろう」と述べている。
前記と同内容のハディースは、ムスアブ・ビン．シャイバにまっても伝えられるが、それには「『私は十番目を忘れた』と彼の父がいった」と記されている。

用便後の処理について

用便後の処理について
1巻　P.205-206

サルマーンはこう伝えている
彼は（異教徒から）「あなたたちの預言者は、排便関係のことまで全て教えるのですか」と質問された。
彼はこれに対し「その通りです。預言者は排便、または、排尿の時キブラ（マッカの方角）に面すること、右手を使うこと、三箇以下の小石や動物の糞、または骨などを使って用便後の処理することなどを禁じております」と答えた。
サルマーンによると、多神教徒の一人が彼にこう述べた
「あなたたちの友人が、排便関係のことまで教えているのを私は見ました」
これに対し、サルマーンは「その通りです。
彼は実際、用便の折、私たちが右手を使ったり、キブラの方角に面したりするのを禁じています。
彼はまた、動物の糞や骨などを使うことも禁じ、更に三箇以下の小石を使って簡単に処理を済ませないようにとも教えています」といった。
ジャービルはこう伝えている
アッラーのみ使いは、骨やらくだの糞などを排泄後の拭き取りに使うことを禁じられた。
アブー・アイユーブによると、預言者はこういわれた
「野原に出て用を足す時、顔や背をキブラの方角にむけぬよう、東か西にむけるようにしなさい」
アブー・アイユーブはこれに関連し「私たちがシリヤに行った時、以前からあった便所はキブラの方角に面していました。
それで私たちは、それらを見ないようにしながら、アッラーへの祈りをささげたのです」と述べた。
預言者はこれに対し「それでよろしい」といわれた。
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「あなたたちが用便する時には、顔や背がキブラの方角に面しないように注意しなさい」
ワーシウ・ビン・ハッバーンはこう伝えている
私がモスクで礼拝を行っていた時、アブドッラー・ビン・ウマルは背中をキブラの方角にむけて座っていた。
私は礼拝を終えた後、混雑していたが彼の近くに構から割り込んでいった。
アブドッラーはこの時「人々は用便中、顔をキブラやバイトル・マクデス（エルサレム）の方角にむけてはならないと話しているが、私は或る家の屋上に登った時、アッラーのみ使いがバイトル・マクデスの方角に顔をむけ、二枚の煉瓦の上にしゃがんで用を足しておられるのを見掛け

たことがあります（注）」と話していた。
（注）野原や砂漠など広い場所では、キブラやバイトル・マクデスの方角を配慮すべきであるが、建物内や囲いの中など狭い処ではその必要がないことを示している
アブドッラー・ビン・ウマルは、こう伝えている
私は、私の姉妹ハフサの家の屋根に登った時、アッラーのみ使いがお顔をシリヤ、背中をキブラの方角にむけながら、用便しておられるのを見掛けた。

右手の使用禁止に関して

右手の使用を禁ずる場合に関して
1巻　P.206-207

アブー・カターダの父によると、アッラーのみ使いはこういわれた
小用を足す時右手で陰茎をつかんだり、用便の折、右手を使って処理したりしてはならない。
また汚れるため、水を入れた容器に息を吹きかけてはならない。
アブー・カターダの父によると、アッラーのみ使いはこういわれた
「トイレに入った時、右手で陰茎に触れてはならない」
アブー・カターダはこう伝えている
預言者は私たちに、容器に息を吹きかけること、右手で陰茎にさわること、用便後右手で拭き取ることを禁じられた。

ウドゥーの際の右側優先に関して

ウドゥーを右側から始めることについて
1巻　P.207

アーイシャはこう伝えている
アッラーのみ使いは、ウドゥーを行う時、髪を梳く時、また、靴をはく時、右側から始めるのを好まれた。
アーイシャはこう伝えている
アッラーのみ使いは、靴をはく時、髪を梳く時、また、ウドゥーをなさる時など万事を右側から始めるのを好まれた。

道路や日蔭での用便禁止について

道路や日蔭での用便を禁ずることについて
1巻　P.207

アブー・フライフによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「呪いをひき起す二つの事柄に気をつけなさい」
人々が「み使い様、呪いをひき起すとはどんなことですか」とたずねると、彼は「人々の通る路上、または、休息のための日蔭で用便することです」とお答えになった。

用便後の手洗いに関して

用便後の手洗いに関して
1巻　P.207-208

アナス・ビン・マーリクはこう伝えている
アッラーのみ使いが囲いの中にお入りになると、私たちの中で最年少の召使いが、水つぼを持って彼のあとについて行き、それをロートス木（シドラ（注））の傍らに置いた。
み使いは用便後囲いから出て、その水で両手をお洗いになった。
（注）ロートス木（シドラ）は、なつめの木の一種
アナス・ビン・マーリクはこう伝えている
アッラーのみ使いがトイレに入られた時には、私と召使いが、水の入った皮袋と先のとがった杖を運んだ。
み使いはその水で両手をお洗いになった。
アナス・ビン・マーリクはこう伝えている
アッラーのみ使いは、いつも人の目に触れない遠くへ行き、用便なさった。
その時には私が水を運び、み使いはそれで両手をお洗いになった。

靴下の上を拭くことについて
1巻　P.208-211

ハンマームはこう伝えている
ジャリールは小尿をしてからウドゥーを行い、その後両靴下を拭いた
「あなたはそのようなことをするのか」といわれた時、彼は「はい、アッラーのみ使いが放尿後
、ウドゥーをなさり、それから両靴下の上をお拭きになるのを私は見たからです」と答えた。
これに関連しアアマシュは、次のように述べている
「イブラヒームは、このハディースが人々を驚かせたと語っているが、なぜならばジャリールが
イスラームに改宗したのは、クルアーンの『アル・マーイダ（食卓）章、第6節』が啓示された後
であるからだった（注）」
（注）クルアーン『アル・マーイダ（食卓）章、第6節』には、ウドゥーに際し「両足をくるぶし
まで洗え」との啓示が記されている。
なお、神意の具現者使徒ムハンマドが、靴下の上を拭くだけで両足のウドゥーを済ませたという
事実は、この方法も許されることを示すものである。
スンニー系各学派では、このハディースに基づき靴下の条件について、皮製靴下の場合（イマ
ーム・マーリク）、靴をはいている場合（イマーム・シャーフィー）、また、厚手の靴下の場
合（イマーム・アブー・ユースフ及びイマーム・ムハンマド）のみ可能であるという見解をそれ
ぞれ述べている
前記と同内容のハディースは、アアマシュによっても伝えられる。
なお、伝承者イーサー及びスフヤーンによる記録には「このハディースは、アブドッラーの友人
たちを驚かせた。
なぜならジャリールは、アル・マーイダ章の啓示後、イスラームに改宗したからである」という
言葉がみられる。
フザイファはこう伝えている
「私は預言者と共に、或る部族のトイレ場（汚物棄て場）に行った。
その折、預言者は立ったまま小便をなさった。
私はその傍らにいたが預言者が「もっと側に来るように」といわれたの近づいて彼の真後ろに立
った。
その後、預言者はウドゥーをなさり、靴下の上を手でお拭いになった（注）。
（注）預言者ムハンマドは、座ったまま放尿するのが常だったといわれる。
この場合は汚物場に適当な場所がなかったため、立ったままで放尿したものと思われる。
一説では、背中の痛みのため座ることかできなかったともいわれる。
フザイファに近くへ寄るよう命じたのは、用便中の姿を他人の目から隠すためであろう
アブー・ワーイルはこう伝えている

アブー・ムーサーは、（長首状の）つぼの中に注意深く排尿する習慣だった。
そして彼は常々「イスラエル人はだれでも陰茎の皮膚を小尿で汚すようなことがあれば、その部分を鋏で切り取った」と語っていた。
この話を聞いたフザイファは「私はあなた方の教友（ムハンマド）がそのような厳しさを強制なさらないことを願っています。
（ともあれ）私がアッラーのみ使いと一緒に壁の後方にある汚物棄て場に行った時、彼はあなた方と同じように立ったまま放尿なさいました。
私は彼から離れようとしたが、合図されたので彼の処に行き、すぐ後ろに彼の放尿が終るまで立っていました」と語った。
ムギーラ・ビン・シュウバの息子は、こう伝えている
アッラーのみ使いが用便のため外に出られたので、ムギーラは水入りのつぼを持って付いて行き、み使いが戻られた時水を両手に注ぎかけた。
み使いは、その折、ウドゥーをなさリ、靴下の上をお拭いになった。
ヤヒヤー・ビン・サイードは、前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えている。
それには「彼は顔と両手を洗って後、頭部を拭い、それから両靴下をお拭きになった」という言葉が追加されている。
ムギーラ・ビン・シュウバは伝えている
或る夜、私はアッラーのみ使いと一緒だった。
み使いが馬から下り、用便を済ませて戻って来られた時、私は持っていたつぼから水を注いであげた。
み使いはその水でウドゥーを行い、その後、両靴下を拭ってお清めになった。
ムギーラ・ビン・シュウバは伝えている
私が旅行にお供した折、預言者はこういわれた
「ムギーラよ、この水つぼを持ちなさい」
それで私はそのつぼを持ち、後を付いて行った。
私は途中で立ち止まったが、アッラーのみ使いは見えなくなるほど先に行かれ、用便を済ましてから戻って来られた。
当時、み使いは両袖のきついシリヤ風の上衣を着ておられたが袖口が狭いため両腕を出すことができず、結局上衣を脱いで両手を自由になさった。
私はその両手に水を注いだが、み使いはこの時礼拝のためのウドゥーをなさり、次いで両靴下の上を拭いてから礼拝をお始めになった。
ムギーラ・ビン・シュウバはこう伝えている
アッラーのみ使いは、用便のため外に出て行かれた。
彼がお戻りになった時、私は水つぼを持って行き彼の両手に水を注いであげた。
彼は顔を洗って後、両腕も洗おうとされたが、両袖がきつかったため上衣を脱いで両腕を出された。
そして両手を洗い、頭部をなでつけ、両靴下をお拭きになって後、礼拝をなさった。

ウルワ・ビン・ムギーラは、彼の父の言葉をこう伝えている
私は或る晩、預言者と一緒に旅をしていた。
この折、彼は私に「水を持っているか」といわれた。
私が「はい」と答えると彼は馬から下り、夜の闇にお姿が見えなくなるほど遠くまで行かれた。
しばらくしてから戻って来られたので私はつぼの水を注いであげたが、彼はそれで両手と顔をお洗いになった。
この折、彼は羊毛製の上衣を着ておられたが、袖口がきつく両腕を出すことができなかった。
結局、上衣を脱いでお出しになってから、その両腕を洗い頭部をお拭いになった。
そのあとは、靴下を脱ぐためかがまれたが「このままにしよう。
私が靴下をはいた時両足共きれいだった」といわれ、靴下の上をお拭いになっただけだった。
ウルワ・ビン・ムギーラは、彼の父から聞いてこう伝えている
私の父ムギーラは預言者がウドゥーをなさるのを手伝ったが、預言者はこのウドゥーの折、両靴下の上をお拭いになるだけだった。
それでムギーラは両足の洗浄についてたずねてみた。
預言者はこの時「私は、両足を洗ってから、靴下をはいたのです」とお答えになった。

額とターバンを拭うことについて
1巻　P.211-212

ウルワ・ビン・ムギーラ・ビン・シュウバは、彼の父から聞いてこう伝えている
アッラーのみ使いが、旅行中遅れて進まれたので、私もそれに従い遅れた。
み使いが用便を済まされて後「水はあるか」といわれたので、私は水つぼを持って行った。
み使いはそれで両手の平と額をお洗いになった。
しかし袖の部分がきつく両腕を出すことができなかったため、その上衣の下から手を出して（すなわち、上衣を脱いで）両肩にそれをお掛けになり、両腕を洗い、それから額とターバンと、両靴下をお拭きになった。
そして後、乗馬されたので私も乗馬し、仲間の処に追い付いた。
私たちが着いた時、彼らはアブドル・ラフマーン・ビン・アウフを導師としてすでに礼拝を始め、一ラカートを終えていた。
アブドル・ラフマーンは、預言者が到着されたのを知ると後列に下がろうとしたが、預言者はそのまま導師をつづけるよう合図をされ、彼らと一緒に礼拝をなさった。
アブドル・ラフマーンが「アッサラーム・アライクム！（あなた方に平安を！）」と挨拶のことばを唱えた時、預言者は立ち上り私もそれに従った。
そして私たちが、到着する前に終っていたラカート分の礼拝を完了した。
イブン・ムギーラは、彼の父から聞いてこう伝えている
預言者は、両靴下、額、ターバンの上をお拭いになった。
イブン・ムギーラの語った前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路によっても伝えられている。
バクル・ビン・アブドッラーは、イブン・ムギーラから聞いてこう伝えている
預言者は、ウドゥーをなさった折、額を拭われ、その後ターバンと両靴下の上をお拭きになった。
ビラールはこう伝えている
アッラーのみ使いは、両靴下とターバンの上をお拭きになった。
なお、これに関連し、イーサー・ビン・ユーヌスの伝えるハディースには「ビラールが私にこういった」と記されている。
このハディースはまた、アアマシュによっても別の伝承者経路で伝えられ、それには「私はアッラーのみ使いがこうなさるのを見た」という言葉が付されている。

靴の上からのウドゥーに関して

靴の上からのウドゥーの有効期限について
1巻　P.212-213

シュライフ・ビン・ハーニーはこう伝えている
私は靴の上からの清めについて質問するためアーイシャの処に行ったが、彼女は「アブー・ターリブの息子アリーの処に行くがよい。
彼はいつもアッラーのみ使いと共に旅行していたから」といった。
それで私たちはアリーに質問した。
彼は「アッラーのみ使いは、（靴の上からのウドゥーの有効期限は）旅行者には三日三晩、居住者には一日一晩であると規定された」と語ってくれた。
前記と同内容のハディースは、ウバイドッラー・ビン・アムル及びサイド・ビン・アブー・ウナイサらによっても伝えられている。
シュライフ・ビン・ハーニーはこう伝えている
私はアーイシャに靴をはいたままの清めについてたずねた。
彼女は「この件は、私よりアリーがよく知っている故、彼の処に行くように」といった。
それで私は、アリーの処に行った。彼は預言者の述べた前記と同内容の話を語ってくれた。

ウドゥーの効用度数に関して

ただ一回のウドゥーで五回の礼拝を行うことに関して
1巻　P.213

スライマーン・ビン・ブライダは、彼の父から聞いてこう伝えている
預言者はマッカ征服の日、ただ一回ウドゥーをなさり、しかも両靴下の上から足を清められただけで五回の礼拝を済まされた。
ウマルはこれを見て「あなたは今日、以前にはなさらなかった事を初めておやりになりました」といった。
預言者はこれに対し「ウマルよ、私は故意にそうやったのです」と答えられた。

水容器の中に手を入れぬことについて

水容器の中に手を入れないことについて
1巻　P.213-214

アブー・フライラによると、預言者はこういわれた
「あなた方は眠りから覚めた時、三度洗わない限り、水容器の中に手を入れてはなりません。
なぜなら、夜の間に手が何に触れたかわからないからです」
アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。
アブー・サラマ及びイブン・ムサイヤブは、アブー・フライラから聞いて前記と同内容のハディースをそれぞれ別の伝承者経路で伝えている。
アブー・フライラによると、預言者はこういわれた
「あなたたちは眠りから覚めた時、両手を容器に入れる前に三回洗わねばなりません。
誰でも夜の間に手が何に触れたかわからないからです」
アブー・フライラによる前記と同内容のハディースは、別にも数多くの伝承者経路で伝えられている。
いずれも「手を洗うことについての話であるが、その回数を「三度」と特別明示してないものもある。

犬の舐めずりについて

犬の舐めずりについて
1巻　P.214-215

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「もしも犬が誰かの食器具を舐めた場合、中味を棄て、その容器を七度も繰り返し洗わねばならない」
前記と同内容のハディースは、アアマシュによっても別の伝承者経路で伝えられるが、それには「中味を棄てよ」とは記されていない。
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いは「もしも犬があなた方の食器から水を飲んだ時には、その食器を七回も繰り返し洗いなさい」
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「あなた方誰かの容器を犬が舐めた場合には、最初、砂を用いて清め、七回洗いなさい」
ハンマーム・ビン・ムナッビフは、アブー・フライラから聞いたアッラーのみ使い、ムハンマド様のハディースの一つを次のように伝えている
アッラーのみ使いはこういわれた「犬に舐められたあなた方の食器は、七度繰り返して洗浄されねばならない」
イブン・ムガッファルはこう伝えている
アッラーのみ使いが、或る種の犬を殺すことをお命じになった時「あれら、つまり、他の種類の犬についてはどうか」といわれた。
そして、結局、狩猟犬や番犬は飼うことをお許しになった。
み使いはこの折、「犬が食器類を舐めた場合、七回水洗いをし、砂で八回こすりなさい」といわれた。
これと同内容の、ハディースはハーリド・ヤヒヤー・ビン・サイード及びシュウバらによっても、それぞれ別の伝承者経路で伝えられている。
なお、ヤヒヤーのハディースには「家畜の番犬、狩猟犬、農場の番犬については飼うことをお認めになった」と記されているが、農場の番犬に言及しているのは、ヤヒヤーの伝えるこのハディースのみである。

淀みでの放尿禁止について

淀みでの放尿を禁ずることについて
1巻　P.215

ジャビールはこう伝えている
アッラーのみ使いは、流れのない水場に放尿することを禁じられた。
アブー・フライラによると、預言者はこういわれた
「あなた方は淀み水に小便してはならない。また、そこで洗い物をしてはならない」
ハンマーム・ビン・ムナッビフは、アッラーのみ使い、ムハンマド様より聞いてアブー・フライラが語ったハディースの一つをこう伝えている
アッラーのみ使いはいわれた
「あなた方は、流れのない淀み水にむかって排尿してはならない。
また、その中で洗い物をしてはならない」

淀みでの洗浄禁止について

淀みでの洗浄を禁ずることについて
1巻　P.215

アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「性行為のあとであっても、淀み水で躰を洗ってはならない」
これに関連し「どうすればよいのですか」と人々から意見を求められたアブー・フライラは「少量であれば用いても構わない」と答えた。

モスク内での排尿跡洗浄について

モスク内での排尿跡を清めることについて
1巻　P.216

アナス・ビン・マーリクは伝えている
或るベドウィンがモスク内で放尿をした。
人々が立って彼を叱責しようとした時、アッラーのみ使いは「ほっておきなさい。
止めてはいけない」といわれた。
そして、この男が放尿を終えた時、水入り容器を運ばせ、その跡を洗い流させた。
アナス・ビン・マーリクは、こう伝えている
砂漠の民ベドウィンの一人が、モスクの片隅に立って放尿を始めた。
人々は「止めよ！」と口々に叫んだが、アッラーのみ使いは「ほっておきなさい」といわれ、彼が放尿を終えた時、水入り容器を運んで来るようお命じになり、その場所を洗い流させた。
アナス・ビン・マーリクは、別の伝承者経路でこう伝えている。
私たちがアッラーのみ使いと一緒にモスクにいた時、一人のベドウィンが来て、立ったままモスクの片隅で小便を始めた。
み使いの教友らは初め「止めよ！　止めよ！」と口々に叫んだが、み使いが「止めてはいけない。そっとしておきなさい」といわれたのでそのままにしておいた。
放尿を終えた時、み使いはその男をお呼びになりこういわれた
「これらのモスクは、放尿や排泄の場所ではない。ただ、アッラーを念じ、礼拝を行い、クルアーンを朗唱するための場所なのです」（他にもみ使いはこれと類似のことをいわれた）
ともあれ、この後、み使いはそこにいた人々の中の一人に水入りの容器を運ばせ、小便跡を洗い流すようにお命じになった。

乳児の排尿に関して
1巻　P.216-217

預言者の妻アーイシャはこう語った
「乳幼児らがアッラーのみ使いの処に連れて来られたので、み使いは彼らのため神の恩寵を祈られ、その後、噛んで軟らかくしたなつめの実を彼らの口に含ませておやりになった。この折、み使いは一人の乳児をお抱きになったが、その児はみ使いの上衣に放尿してしまった。み使いはこの時水を持って来るように頼み、小便跡にその水をふりかけただけで、特に上衣を洗うことはなさらなかった」
アーイシャはこう伝えている
一人の乳児がアッラーのみ使いの処に連れて来られたが、彼はみ使いの膝の上に放尿してしまった。
み使いはこの折水を運ばせ、小便跡にそれをおかけになるだけだった。
ヒシャームは、前記と同内容のハディースを別の伝承者経路で伝えている。
ミフサンの娘ウンム・カイスはこう伝えている
彼女はアッラーのみ使いの処にまだ乳触れしていない彼女の児を連れて来、み使いの膝の上に座らせた。
その折、この児は放尿してしまったがこれに対し、み使いは膝の上に水を少しばかりかけただけで、それ以上はなにもなさらなかった。
前記と同内容のハディースは、ズフリーによっても別の伝承者経路で伝えられるが、それには「アッラーのみ使いは水を求められ、膝の上にふりかけられた」と記されている。
更に、同内容のハディースは、ウバイドッラー・ビン・アブドッラー・ビン・ウトバ・ビン・マスウードによっても次のように伝えられている。
ミフサンの娘、ウンム・カイスは、アッラーのみ使いに忠誠を誓ったイスラーム初期の（マッカからの）女性移住者の一人であり、アサド・ビン・フザイマ部族員の一人、ウッカーシャ・ビン・ミフサンの姉妹であった。
その彼女が語ったところによると、彼女は、まだ食物が噛める年齢にも達していない彼女の息子を連れてアッラーのみ使いの処に行ったが、その折、この子供は、み使いの膝の上に放尿してしまった。
この時、み使いは水を持って来るようお命じになり、尿をかけられた上衣の上にその水を少々ふりかけただけで、丁寧に洗い流すことはなさらなかった。

精液を洗い落すことについて

精液を洗い落すことについて
1巻　P.218-219

アルカマ及びアスワドは、こう伝えている
アーイシャの家に泊まった或る男が朝になって、衣服を洗い始めた。
それを見てアーイシャは次のようにいった
「精液が衣服に付着している場合は、その個所だけを洗い落せばよいのです。
また、それが付着してない場合は、汚した個所の回りだけに水をふりかければ十分です。
私は、アッラーのみ使いの衣服にそれを見付け、ただこすり落しただけでしたが、み使いはその衣服を着たまま礼拝なさいました」
アスワド及びハンマームは、アーイシャの言葉をこう伝えている
私はアッラーのみ使いの衣服から、精液の付着物をいつもこすり落しました。
アーイシャの語った前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路で伝えられている。
ハンマームは、前記と同内容のハディースをアーイシャから聞いて伝えている。
アムル・ビン・マイムーンは、こう伝えている
私はスライマーン・ビン・ヤサールに、衣服に付着した精液は洗い落されるべきか否かについてたずねた。
それに対し、彼は次のように答えた
「アーイシャは私に『アッラーのみ使いは精液を洗い落した後、その衣服を着て礼拝に行かれた。私はその洗った跡を見ました』と語ってくれた」
アムル・ビン・マイムーンによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。
なお、伝承者イブン・ムバーラク及びアブドル・ワーヒドによるハディースには「アーイシャは『私はアッラーのみ使いの衣服からいつもそれを洗い落した』と語っていた」という言葉がみられる。
アブドッラー・ビン・シハーブ・ハウラーニーは、こう伝えている
私はアーイシャの家に泊ったが、夢精をし、その痕跡で衣服の上下を汚した。
それで、翌朝、肌着上着共々水に付けたが、これを女中が見てアーイシャに告げた。
そのためアーイシャは「どうして、そのように衣服を洗うのか」と使いを寄越して私にたずねた。
それで私は「眠る人がよく見る夢を私も見たのです」と答えた。
すると彼女は「何か衣服に付着していますか」といった。
私が「いいえ」と答えると、彼女は「なにか付着している場合は洗い落すべきです。
私はアッラーのみ使いの衣服に、乾いた精液の跡を見付ける度に爪でかき落しました」と語ってくれた。

生理による汚れについて
1巻　P.219

ヒシャーム・ビン・ウルワによると、アブー・バクルの娘アスマーウはこう伝えている
或る女性が預言者の処に来て「生理の血痕が、私たちの衣服にしみついた場合どうすべきでしょうか」とたずねた。
預言者はこれに対し「それを爪でかき落としてから水でもみ洗い、更にきれいな水でゆすぎなさい。
それからその衣服を着て礼拝すればよい」とお答えになった。
ヒシャーム・ビン・ウルワによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。

尿水の汚れについて

尿水の汚れについて
1巻　P.219-220

イブン・アッバースによると、アッラーのみ使いは、たまたま二つの墓の横をお通りになった時こういわれた
「これらの墓の者らは懲罰を受けているが、それは重罪を犯したためではない。
彼らのうちの一人は他人を中傷したためであり、他の一人は排尿による汚れに気を使わなかったためである」
み使いはこの後、なつめの木の生きのよい小枝を持って来させ、それを二つに裂いて、墓に別々にお植えになってからいわれ「これらの小枝が枯れずに育つ限り、彼らへの罰は恐らく軽減されることだろう」
これと同内容のハディースは、スライマーン・アアマシュによっても別の伝承者経路で伝えられているが、それには「他の一人は、排尿に対する、もしくは、排尿からの、汚れに注意しなかった者である」という言葉がみられる。

生理中腰巻をまとうことについて

生理中腰巻をまとうことについて
1巻　P.221

アーイシャは、こう伝えている
私たち（預言者の妻ら）の誰かが月経の折には、アッラーのみ使いは腰巻をまとうよう命じ、それから抱擁なさった。
アーイシャは、こう伝えている
アッラーのみ使いは、私たちの誰かが生理の時には、その期間ずっと腰巻をまとうようお命じになり、それから抱擁なさった。
アーイシャはまた次のようにも語っている。
「あなた方の一体誰が、み使いほどに（欲望を）自制できるでしょうか」
預言者の妻の一人マイムーナは、こう伝えている
アッラーのみ使いは月経中の妻たちに対しては、彼女らの腰巻の上から抱擁された。

生理中の女性との同床に関して

生理中の女性との同床に関して
1巻　P.221-222

イブン・アッバースの元奴隷クライブは、預言者の妻の一人マイムーナの言葉を、こう伝えている
アッラーのみ使いは、生理中の私の横に臥される時には、私との間に一枚の布を置かれるのが常だった。
ウンム・サラマは、こう伝えている
私がアッラーのみ使いと柔らかなビロウドの敷物の上に臥していた時、私の生理が始まった。
それで私は寝床を抜け出、生理中にいつも着る衣類をまとった。
み使いがこれを見て「生理が始まったのか」とおたずねになったので、私は「はい」と答えた。
そのあと、私をお呼びになったので私はまたみ使いの傍らで横になった。
み使いは、通常は、交接後私と同じたらいで躯をお洗いになったものでした。

生理中の女性の行為に関して

生理中の女性に許されることについて
1巻　P.222-225

アーイシャはこう伝えている
預言者がイウテカーフ（注）の折、私の方に頭を傾けたので、私は髪を梳いてあげた。
その期間中彼はトイレに行く以外、家の中にはお入りにならなかった。
（注）モスクに数日間籠ること、特にラマダーン月の最後の十日問、モスクに籠って祈願することをいう
アブドル・ラフマーンの娘アムラによると、預言者の妻アーイシャはこう語った
「私はイウテカーフの行に入ると、トイレに行く時だけ家に入り、通りがかりに家族の安否についてたずねるという風であった。
なお、アッラーのみ使いがモスクにお籠りになった或る時、頭を私の方に突き出されたので私は髪を梳いてさし上げた。
彼はイウテカーフ中には、トイレに行く用事以外に家に入ることはなかった」
これに関連するイブン・ルムフによるハディースには「アッラーのみ使いとその夫人たちのイウテカーフ中には」という表現がみられる。
預言者の妻アーイシャはこう伝えている
アッラーのみ使いがイウテカーフでお籠りの折、頭をモスクから私の方に出されたので、私は生理期間中ではあったがその頭を洗ってさし上げた。
ウルワによると、アーイシャはこう語った
「わたしが部屋にいた時、アッラーのみ使いがモスクから私の方に頭をお傾けになったので、私は生理中であったが、彼の頭の髪を杭いてさし上げました」
アスワドによると、アーイシャはこう語った
「私は生理の期間中でも、アッラーのみ使いの頭を洗ってあげました」
カーシム・ビン・ムハンマドによるとアーイシャは、こう伝えている
アッラーのみ使いが私に「モスクから筵を持って来るように」といわれたので「私は今、月経中です」と申し上げた。
これに対し、み使いは「あなたの月経は手には関係ないのです」といわれた。
カーシム・ビン・ムハンマドによると、アーイシャはこう伝えている
アッラーのみ使いは、私に「モスクからマットを持って来るように」とお命じになった。
そこで「私は今、月経中です」と申し上げたのですが、み使いは「マットを取って来なさい。生理はあなたの手の中に起っているわけではないのですから」といわれた。
アブー・フライラはこう伝えている
アッラーのみ使いがモスクにおられた時、「アーイシャよ、衣服を取って来なさい」といわれた。

彼女が「私は生理中です」と答えるとみ使いは「あなたの生理は、手には関係無いのです」といわれた。
それで彼女はみ使いの衣服を取って来たのでした。
ミリダーム・ビン・シュライハの父によると、アーイシャはこう伝えている
月経中、水を飲むために私が使っていた容器を預言者にお渡しすると、預言者は、私が口を触れたところに御自分の口を当てて水をお飲みになった。
私が月経の折、骨つき肉を食べ、残りを預言者にお渡しすると、預言者は、私の口が触れたところに御自分の口を当ててその残りをお食べになった。
なお、このハディースの伝承老の一人、ズハイルは、「預言者も水をお飲みになった」ことに関しては言及していない。
マンスールの母によると、アーイシャはこう伝えている
アッラーのみ使いは生理中の私の膝にもたれながら、クルアーンをお誦みになった。
サービトによると、アナスはこう伝えている
ユダヤ人の中には、生理の始まった女性と食事を共にしなかったり、家の中で一緒に生活しない者たちがいる。
それで、教友たちはこの件について預言者に質問した。
この時、アッラーは次の啓示を下された「かれらは月経について、あなたに問うだろう。いってやるがいい。『それは不浄である。だから月経時には、妻から遠ざかり、清まるまで近付いてはならない。それで清まった時には、アッラーが命じられるところに従って、かの女らの所に赴け。まことにアッラーは悔悟する者を愛でられ、また純潔の者を愛される』」（クルアーン第2章222節）
（ともあれ）質問に対しアッラーのみ使いは「性行為以外は何をやっても構わない」とお答えになった。
この言葉を聞いたユダヤ人たちは互いに「この人物は、私たちが反対していることを禁じようとしない」といい合った。
それで、ウサイド・ビン・フダイル及びアッバード・ビン・ビシュルがやって来て「み使い様、ユダヤ人たちはしかじか申しております。それ故、月経中の女性に接するべきではないと思います」と述べた。
この折、み使いは顔色をお変えになった（注）。
そのため私たちは、み使いがこの二人に対し大変立腹されたのだと思った。
しかし、彼らが出て行こうとした時、たまたま、み使いの処に牛乳が送られて来たのであるが、み使いは彼らをすぐ呼び返され、彼らにもその牛乳をお与えになった。
それで私たちは、み使いが彼らに対して立腹していないことを知ったのだった。
（注）み使いが顔色を変えたのは、この二人の言葉にユダヤ人の慣習に同調する風がみえたためであろう。
イスラームには、月経中の女性に対して性行為その他に若干の制約を付すだけで、隔離するなどの慣習はない

精液について
1巻　P.225

アリー・ビン・アブー・タリーブはこう伝えている
私はよく精液を漏らす質であるが、預言者にそれについてたずねることは、彼の娘婿の立場上恥ずかしいのでミクダード・ビン・アスワドに頼んで質問してもらった。
預言者はこういわれた「その場合、陰茎を洗ってから、ウドゥーを行いなさい」
アリーはこう伝えている
私は預言者が私の妻ファーティマの父に当り、私が娘婿でもある関係上、精液について質問するのを恥ずかしく思っていた。
それで、ミクダードに、私に代わってたずねてくれるよう頼んだ。
ミクダードの質問に対して預言者は「そのような場合には、ウドゥーを行うように」といわれた。
イブン・アッバースは、アリーより聞いてこう伝えている
私たちはミクダード・ビン・アスワドをアッラーのみ使いの処に遣って「精液が陰茎から漏れ出た場合、どうすべきですか」とたずねさせた。
み使いはこれに対し「ウドゥーを行い、性器を洗いなさい」といわれた。

夜半の洗浄に関して

夜半の洗浄に関して
1巻　P.225

イブン・アッバースはこう伝えている
預言者は、夜半起き出して用便を済まされて後、顔や両手をお洗いになり、それからまた、就寝なさった。

交接後の就寝に関して
1巻　P.225-227

アーイシャは伝えている
アッラーのみ使いは、交接後であっても就寝なさる前には、いつも礼拝用のウドゥーをおこなわれた。
アーイシャは伝えている
アッラーのみ使いは、交接の後、食事したり就寝なさろうとする時には、必ず礼拝のための
ウドゥーを行われた。
前記と同内容のハディースは、シュウバによっても別の伝承者経路で伝えられている。
イブン・ウマルはこう伝えている
私の父ウマルは「アッラーのみ使い様、交接の後そのまま眠ってもよいでしょうか」と質問
した。
これに対しみ使いは「ウドゥー後であれば眠ってもよい」といわれた。
イブン・ウマルはこう伝えている
私の父ウマルは預言者に、法律（シャリーア）上の問題として「私たちは、性交後そのまま眠ってもよいのでしょうか」とたずねた。
これに対し預言者は「交接の後にはウドゥーを行ってから眠るべきです。
また、望むならば沐浴すべきです」といわれた。
イブン・ウマルはこう伝えている
ウマル・ビン・ハッターブが、アッラーのみ使いに昨夜性交を行ったと話したところ、み使いは彼に「ウドゥーをし、性器を洗ってから、眠るように」といわれた。
アブドッラー・ビン・アブー・カイスはこう伝えている
私はアーイシャに、アッラーのみ使いのウィトル（深更時の礼拝）に関して質問し、或るハディースに言及して後
「交接を終えたあと、み使いはどうなされたのですか。
就寝前に躯を洗われたのですか。
それとも躯を洗わずに眠られたのですか」とたずねた。
これに対し、アーイシャは
「み使いはこれら全てをおやりになりました。
時には躯を洗った後おやすみになり、また時にはウドゥーを済まされただけで就寝なさったのです」と答えた。
この言葉を聞いて私は「万事を行いやすいようにお定めになったアッラーを讃美致します！」
といった。
前記と同内容のハディースは、ムアーウィア・ビン・サーリハによっても別の伝承者経路で伝え

られている。
アブー・サイード・フドリーによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「あなたたちの誰でも妻と性交を行って後、更にもう一度それを繰リ返そうとする場合には、ウドウーをしなければなりません」
アブー・バクルの伝えるハディースには、「二度の交合の間には一度ウドゥーを行うべきです」「ウドゥー後、望むならばまた性行為を繰り返えせばよい」と記されている。
アナス・ビン・マーリクはこう伝えている
預言者は夫人たちと交接を繰り返した後でも、ただ一回沐浴されるだけでした（注）。
（注）預言者は、交接の度に必ずウドゥーを行ったが、沐浴に関してはその限りではなかった

女性の夢精について
1巻　P.227-229

アナス・ビン・マーリクは伝えている
イスハークの祖母ウンム・スライムは、アーイシャと共にいるアッラーのみ使いの処に来て「み使い様、女性が男性の見る夢をみ、男性の経験すること（夢精）を経験した場合、どうすればよいのですか」といった。
アーイシャは「ウンム・スライムよ、あなたは女性を辱めることを口になさる！
あなたの右手が土砂で覆われますように！（そんなことを口にしてはいけません！）」とたしなめたが、
み使いはアーイシャに「あなたの右手こそ、土砂に覆われるように！」といい「さて、ウンム・スライムよ、その場合、女性は沐浴すべきです」とお答えになった。
アナス・ビン・マーリクは、ウンム・スライムの話をこう伝えている
彼女が、男が見るような夢をみた（すなわち、夢精をした）女性について質問した時、アッラーのみ使いは「その場合、女性は沐浴すべきです」といわれた。
これに関しウンム・スライムは次のように語っている
「こんな質問をすることは恥ずかしかったが、私はまた『そのようなことが起こるでしょうか』とたずねた。
預言者はこれに対し『その通りです。
さもなければ、どうして母親に似た子供が生れるのですか。
男の精子は淡い白色ですが、女性の精液は薄い黄色です。
これらの精子の強さ、もしくは、優勢さによって男女どちらかに似た子供が生れるのです』といわれた」
アナス・ビン・マーリクはこう伝えている
或る女性が、アッラーのみ使いに、男性と同じような夢精を体験した女性について質問したところ、み使いは「そのような場合、沐浴すべきです」といわれた。
ウンム・サラマはこう伝えている
ウンム・スライムが、預言者の処に行き「アッラーのみ使い様、まことにアッラーは秘め事に関する真理をも明示なさる方です。
夢精した女性は沐浴すべきでしょうか」とたずねた。
これに対し、み使いは「その通りです。もしも女性が膣水を漏らした場合には」といわれた。
ウンム・サラマはこの折「み使い様、女性も夢精しますか」とたずねた。
するとみ使いは「あなたの両手に土砂をかぶせるがよい！
女性が膣水を出さなければ、どうして子供がその母親に似ることがありますか」といわれた。
前記と同内容のハディースは、ヒシャーム・ビン・ウルワによっても伝えられるが、それには「

ウンム・サラマはこの折、ウンム・スライムに『あなたは女性の恥じらうことを口になさる』
といった」という言葉が追加されている。
預言者の妻アーイシャは、こう語っている
「バニー・アブー・タルハの母ウンム・スライムがアッラーのみ使いの処に来た」
以下は前記ヒシャームによるハディースと同内容であるが、これには次の言葉が追加されている
「アーイシャは『女性が性行為の夢を見るだろうか、といって彼女を非難した』と語った」
アーイシャは、こう伝えている
或る女性がアッラーのみ使いの処に来てこう質問した
「女性が性交の夢をみ、その結果膣水を漏らした場合、沐浴すべきでしょうか」
み使いはこれに対し「その通りです」といわれた。
アーイシャはこの時彼女にむかい「あなたの両手に土がかけられ、傷つけられますように！」
といったが、み使いは「そのようなことを口にしてはいけない！」と彼女をたしなめて後
「子供が母親に似るのは、女性の精液が男性のそれより優っている場合で、この折子供は母方に
類似します。
男性の精液が優っている場合は、子供が父方に類似するのです」といわれた。

男女の精液について
1巻　P.229-231

アッラーのみ使いの元奴隷、サウバーンは次のように伝えている
私がアッラーのみ使いの横に立っていた時、ユダヤ人のラビ（聖職者）の一人が来てこういった
「あなたに平安がありますように！　ムハンマドよ」
これを聞いた私は彼を突き押したので、彼は倒れそうになった
「なぜ私を押すのか」と彼がいうので、私は「なぜアッラーのみ使いよ！　といわないのか」といい返した。
すると彼は「我々は、彼の家族が付けた名前で彼を呼んでいるにすぎない」といった。
み使いはこれに対し「確かに私の名はムハンマドで、私の家族が名付けてくれたものです」といわれた。
そのユダヤ人は「私はあなたに聞きたいことがあって来たのです」といった。
それに対しみ使いが「それは、あなたに役に立つことですか」といわれると、彼は「是非お聞きしたいのです」と答えた。
み使いは手にした杖で地面に線を引かれた（気持を整えるための動作）
そして後「さあ、なんでも質問しなさい」といわれた。
それで、このユダヤ人は「大地が他の大地に変わり、天もまた同様に変わる世の終りの日、人間はどこに留まるのですか」と質問した。
み使いが「彼らは、真暗闇の中で天国に通ずる橋の近くに留まることでしょう」と答えると、そのユダヤ人はまた「その橋を最初に渡るのはどんな人たちですか」とたずねた。
するとみ使いは「彼らはイスラームに改宗し、マディーナにやって来た移住者の中の貧者たちです」とお答えになった。
ユダヤ人は更に「天国に入った時の彼らの朝食はなんですか」とたずねた。
み使いはこれに対し「魚の肝です」と答えられた。
ユダヤ人はまた「そのあとの食物は何ですか」とも問うたが、み使いはこれには「天国の各地で飼育された雄牛が彼らのため屠殺されます」と述べ、「飲みものは何ですか」との質問には「サルサビールと呼ばれる泉の水が与えられます」とお答えになった。
そのユダヤ人は、「よくわかりました」といってから更に「私はこの地上の人々の中で、ただ一人の預言者、もしくは、彼以外、僅かに一人が二人の者しか知らない事柄についてあなたにおたずねしたくてここに来たのです」といった。
み使いが「もし私がそれについて話せば、あなたの役に立ちますか」とおたずねになると、彼は「真剣に伺います」といい「私がここに来たのは子供に関して質問するためです」と述べた。
これに対し、み使いは次のようにいわれた。
「男性の精子は白く、女性のそれは黄色です。

男女が性行為をした時、男性の精子が女性のそれに優る場合、アッラーの定めにより、男児が生まれるのです。
そして、また、女性の精子が男性のそれに優っている場合、アッラーの定めにより、女児が創られるのです」
この言葉を聞いたユダヤ人は「あなたのいわれたことは真実です。
まことにあなたは預言者です」といい、その後帰って行った。
み使いは「彼は私の知らない幾つかの事柄についてもたずねたが、アッラーがその答えのための知識を私にお与え下さったのです」といわれた。
前記と同内容のハディースは、ムアーウィア・ビン・サラームによっても伝えられるが、それには「私はアッラーのみ使いの横に立っていた」という言葉はない。
この他にも二、三表現上に異同がみられる。

交接後の沐浴について
1巻　P.231-232

アーイシャは伝えている
交接のあと、アッラーのみ使いが沐浴をなさる時には、先ず両手を洗い、次いで右手で水を左手の上に注ぎ、陰茎部分をお洗いになった。
そして後、礼拝の時と同様のウドゥーを行われた。
その後、水の中に指を入れ濡らしてから、髪の根元をその指でかき回し、髪が適当に湿ったところで、手一杯の水を三度頭におかけになった。
それから躯全体に水を注ぎ、次いで両足をお洗いになった。
前記と同内容のハディースは、ヒシャームによっても別の伝承者経路で伝えられているが、それには「両足を洗った」という言葉はない。
ヒシャームの父は、アーイシャから聞いてこう伝えている
預言者は、交接のあと沐浴されたが、その時には、先ず、両手の平を三度お洗いになった。
以下のハディースは、前記と同内容であるが、これには両足の洗浄についての記述はない。
ウルワは、アーイシャから聞いてこう伝えている
アッラーのみ使いは、性行為の後沐浴をなさったが、たらいに手を入れる前に、先ず両手をお洗いになった。
そして後、礼拝前になさるようなウドゥーを行われた。
イブン・アッバースは、母方の伯母マイムーナの言葉をこう伝えている
私は、アッラーのみ使いの近くに、性行為後の沐浴のための水を置いた。
彼は手の平を二度、もしくは、三度洗い、その後片手をたらいに入れて汲んだ水を注ぎながら、左手で陰部を洗浄なさった。
それからその左手で地面をたたき、手の乎を強くこすった。
この後、礼拝の時と同様のウドゥーを行ってから、水を三杯頭にかぶって、全身をお洗いになった。
そして後、この場所から離れ、両足を洗浄なさった。
私はタオルをお渡ししたが、それを使うことなくそのままお返しになった（注）。
（注）タオルの使用が禁じられているわけではない。
ただ、暑さをしのぐため水気を拭き取らなかっただけであろう
前記と同内容のハディースは、アアマシュによっても伝えられるが、伝承者ヤヒヤー・ビン・ヤヒヤー及びアブー・クライブによるハディースには「水を三度頭にかぶった」という表現はない。
なお、伝承者ワキーウのハディースには、口すすぎ、鼻孔の洗浄など、ウドゥーの全過程が記されている。

なおまた、アブー・ムアーウィアのハディースには、タオルについての記述はみられない。
イブン・アッバースは、マイムーナから聞いてこう伝えている
預言者はタオルを渡されたが、それで躯をお拭きにはならなかった。
水に濡れたままでおられ、自然に乾くのを好まれたのである。
アーイシャはこう伝えている
アッラーのみ使いは、性行為の後、沐浴をなさったが、その折にはたらいを運ばせ、手一杯の水を取って最初に右手、次いで左手の表面を洗浄されてからまた一杯の水を取り、頭におかけになった。

沐浴のための水の量について
1巻　P.232-235

アーイシャはこう伝えている
アッラーのみ使いは、交接の後、水が1ファラク（注）（約8リットル）ほど入ったたらいで沐浴をなさった。
（注）ファラクはマディーナ地方の計量単位。時代によって多少の増減があるが、略7-8リットルに当る
アーイシャはこう伝えている
「アッラーのみ使いは、約8リットルほど水の入ったたらいで沐浴された。
私もみ使いと同じたらいの水を使って沐浴したのです」 伝承者の一人スフヤーンは「一つのたらいで」と記している。
なお、クタイバは、1ファラクを、3サーア（注）（約8リットル）に相当すると説明している。
（注）サーアとは、アラブの計量単位で約2.5リットルに当る
アブー・サラマ・ビン・アブドル・ラフマーンはこう伝えている
私はアーイシャの乳兄弟と共に彼女の処に行き、彼女に性行為後の預言者の沐浴について幾つか質問した。
その折彼女は、1サーア（約2.5リットル）入りほどの容器を運ばせ、カーテンで仕切られた奥の部屋で沐浴を始め、水を頭から三度かぶった。
当時、預言者の夫人たちは皆、髪を両耳のあたりまで伸ばしていた（注）。
（注）「ワフラ」という言葉か使われているが、これには、髪を頭にたばねるとか、耳たぶまでたらすなどの意味がある
サラマ・ビン・アブドル・ラフマーンは、アーイシャから聞いてこう伝えている
アッラーのみ使いが沐浴なさる時には、先ず右手に水をかけて洗ってから始められた。
その後、その右手で不浄部分に水を注ぎ、左手を使って洗い流してから、頭に水をおかけになった。
アーイシャは「私とみ使いは、交接の後、同じたらいの水で沐浴をしました」と語っている。
アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・バクルの娘ハフサは、アーイシャから聞いた話をこう伝えている
アーイシャと預言者は、およそ3ムッド（注）（約6リットル）ほどの水の入った同じたらいで沐浴をなさった。
（注）ムッドはアラブの計量単位であるか、地方によって基準が異なる。
「サーアより少ない」と注釈される故、ここでは2リットル程度に計算した
アーイシャはこう伝えている
私とアッラーのみ使いは交接の後、同じたらいで沐浴をしたが、その折、私たちの手はたらいの

中でよくぶつかった。
アーイシャはこう語っている
「私とアッラーのみ使いは、二人の間に置かれた同じたらいで沐浴をしたが、み使いは私より早く沐浴を済ませるので、私はいつも『水を私のため残しておいて下さい。水を残しておいて下さい』といったものです」
なお、彼女は「性行為の後には、きまって沐浴しました」と語っている。
イブン・アッバースによると、預言者の妻マイムーナはこう語っている
「私と預言者は同じたらいで沐浴をしました」
イブン・アッバースはこう伝えている
アッラーのみ使いは、妻マイムーナが使い残した水で沐浴をなさった。
ウンム・サラマの娘のザイナブはこう伝えている
ウンム・サラマとアッラーのみ使いは、性行為の後、同じたらいで沐浴をしました。
アナスによると、アッラーのみ使いは五マッククーク（注）（約10リットル）の水を使って沐浴され、一マッククーク（2リットル程度）の水でウドゥーをなさった。
なお、イブン・ムサンナーは5マッククークの代りに5マカーキーヤという言葉を使っている。
（注）マッククーク（マカーキーヤはこの複数形）は計量単位で、1ムッド（約2リットル）に相当するという
アナスはこう伝えている
預言者は、ウドゥーに1ムッド（約2リットル）の水を使い、沐浴の時には、1サーア（2.5リットル）から5ムッド（約10リットル）の水をお使いになった。
サフィーナはこう伝えている
アッラーのみ使いは性行為のあと1サーア（約2.5リットル）の水で沐浴され、1ムッド（約2リットル）の水を用いてウドゥーをなさった。
サフィーナはこう伝えている
み使いは、1サーアの水を用いて沐浴され、1ムッドの水でウドゥーをなさった。
イブン・フジュルはこれに関連し「み使いのウドゥーには、1ムッドの水で十分足りた」と語っているが、このハディースの伝承者の一人イスマイールの高齢さ故に、本文内容の信頼度にはいささか疑念がもたれるとも述べている。

水を三回かぶることに関して
1巻　P.235-236

ジュバイル・ビン・ムトゥイムは、こう伝えている
人々はアッラーのみ使いの前で沐浴の仕方について論争し、或る人たちは「私は、頭をこれこのようにして洗う」などといい立てた。
これに対しみ使いは「私に関していえば、水を三杯頭にかけるだけです」と話された
ジュバイル・ビン・ムトゥイムによると、預言者は、彼に交接後の沐浴について話し「私は水を頭に三度かぶります」といわれた。
ジャービル・ビン・アブドッラーは、こう伝えている
サキーフ族の使節団が来て預言者に「私たちの国は寒い所です。
そのような地域での、沐浴はどうすればよいのですか」と質問した。
預言者はこれに対し「私は頭に水を三度かけるだけです」といって、寒い時期には簡単に沐浴を済ますよう教示なさった。
なおこのハディースに関連し、アブー・ビシュルは、「サキーフ族の使節たちは。アッラーのみ使い様』と呼んだ」と伝えている。
ジャービル・ビン・アブドッラーはこう伝えている
アッラーのみ使いは、交接の後沐浴をされたが、その折にはいつも、水を三杯だけ頭におかけになった。
ハサン・ビン・ムハンマドは、このハディースに関連し、ジャービルに「私の髪は濃いのです（三杯の水では足りませんの意味）」と述べたが、ジャービルは「私の兄弟の息子よ、み使いの髪の毛は、あなたの毛よりももっと濃く、しかも、もっと美しかった」と語った。

女性の編み毛について
1巻　P.236-237

ウンム・サラマはこう伝えている
私はアッラーのみ使いにむかって「私はきつく頭髪を編んでいます。
交接後、沐浴のため髪をほどかなくてもよいでしょうか」とたずねた。
これに対しみ使いは「解きほどく必要はありません。ただ頭に三杯の水をかけ、その後躯に水をあびるだけで十分です。そうすればあなたは清浄になります」とお答えになった。
前記と同内容のハディースは、アイユーブ・ビン・ムーサーにより別の伝承者経路でも伝えられる。
なお、伝承者の一人、アブドル・ラッサークによるハディースには、月経及び交接に関する言及もみられる。
なお、アイユーブ・ビン・ムーサーによるハディースは、更に別の伝承者経路でも伝えられ、それには「交接のあと、私は編み毛をほどいて洗うべきでしょうか」と記されるが、月経について言及はみられない。
ウバイド・ビン・ウマイルはこう伝えている
アブドッラー・ビン・アムルが女性たちに頭の編み毛をほどくよう命じたことが、アーイシャに伝えられた。
アーイシャはこれに関し「イブン・アムルが、女性たちに沐浴時、編み毛を解くよう命ずる（注）とは奇妙なことです。
それほどにいうならばどうして彼は、彼女らに頭髪を剃ってしまうよう命じないのだろう！
私とアッラーのみ使いは一つのたらいで沐浴したが、私はただ、頭に三杯水をかけるだけで、それ以上なにもしなくてよかったのです」と語った。
（注）アブドッラー・ビン・アムルのこの命令については、
（1）水が髪の根元まで浸透してない場合に限っての処置であった
（2）彼はウンム・サラマやアーイシャの語ったハディースを知らなかった
（3）洗浄に関し彼は特に厳しい見解を持っていた
など三つの場合が考えられる

麝香で清めることについて
1巻　P.237-238

マンスール・ビン・サフィーヤの母によると、アーイシャはこう伝えている
或る女性が預言者に、月経のあとどのように沐浴すべきかについて質問した。
彼女の語るところによると、預言者はこれに対し沐浴の仕方を教え、その後麝香を焚き込めた綿布で拭き清めるようにと彼女に告げた。
彼女が「それをどのように使って身を清めるのですか」とたずねたところ、預言者は「先ず、スブハーナッラー！（アッラーを讃えまつる）と唱えてから、その綿布で拭いて身を清めればよいのです」といいながら顔を覆われた。
このハディースを伝えるスフヤーン・ビン・ウヤイナも、預言者がなさったように私たちの前で顔を覆う仕草を示した。
これに関しアーイシャは「私は預言者がなにをお考えになったかを理解したので、彼女を私の方にひっぱり『この麝香入りの綿布を流血した隠部に当てなさい』と教えた」と語った。
マンスールの母によると、アーイシャは次のように伝えている
或る女性が預言者に、月経期間中、どのように洗浄すべきかについて質問した。
預言者はこれに対し「麝香入りの綿布で躯を拭き清めなさい」と教えた。
以下は、前記ハディースと同内容である。
サフィーヤによると、アーイシャはこう伝えている
アスマーが預言者に、生理期の不浄について質問した。
これに対し彼は「あなたたち女性は、シドラ木（なつめの一種）の葉を浸した水を使って躯を洗い、その後水を頭にかけ、水が髪の根元まで達するよう強くこすってから、また水をかぶりなさい。
それが済んだならば、麝香を焚き込んだ綿布を使って躯を拭き清めなさい」と述べた。
これに対し、アスマーウは「それをどのように使って躯を清めるのですか」と言った。
預言者は「スブハーナッラー！（アッラーを讃えまつる）と唱えながらそれを使って、躯を拭き清めればよいのです」と教えた。
この時、アーイシャは低い声で彼女に「それを流血部分に当てるように」といい添えた。
アスマーウは次いで、交接後の沐浴についても質問した。
これに対し、預言者は「水で躯をよく拭くか、もしくは、洗い流して清めた後、頭から水をかぶりなさい。そして、髪の根元までその水が浸透するよう強くこすり、そのあと、もう一度水をかぶりなさい」と教示なさった。
この話に関連し、アーイシャは「女性たちにご加護がありますように！
アンサール（マディーナ在来のムスリム）の女性たちは、信仰を学ぶためにはなんら恥じらうことのない人たちです！」といった。

前記と同内容のハディースは、シュウバによっても伝えられるが、これには「預言者は『それを使って躯を清めなさい』といってからはにかみ、顔をお覆いになった」と記されている。
サフィーヤ・ビント・ジャイバによると、アーイシャはこう伝えている
アスマー・ビント・シャカルは、アッラーのみ使いの処に来てこう言った
「み使い様私たちは生理のあと、どのように沐浴をすべきでしょうか」
以下は前記ハディースと同内容であるが、交接後の沐浴についての言及はない。

ムスタハーダについて

ムスタハーダ（注）について
（注）ムスタハーダとは、月経、または、分娩以外の理由で血流（下り物）が続く女性を称する
1巻　P.238-240

ヒシャーム・ビン・ウルワの母によると、アーイシャはこう伝えている
アブー・フバイシュの娘、ファーティマが預言者の処に来て「私の躯は、生理が過ぎても下り物が止まらず、躯を清めることができない状態です。
それ故、私には礼拝は許されないでしょうか」とたずねた。
これに対し預言者は「いや、それは単に血管によるもので、生理のためではない。
それ故、生理期間中だけ礼拝を避け、それが過ぎたならば、躯に付いた血痕を洗い落してから礼拝しなさい」といわれた。
前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。
なお、ジャリールによるハディースには「ファーティマ・ビント・アブー・フバイシュ・ビン・アブドル・ムッタリブ・ビン・アサドが預言者の処に来た。彼女は我々の仲間の一人だった」と記されている。
ウルワによると、アーイシャはこう伝えている
ウンム・ハビーバ・ビント・ジャフシュは、アッラーのみ使いに「私の躯は、生理期間が終っても下り物が止まらない状態です」といって意見を求めた。
これに対しみ使いは「それはただ、血管によるもの故、沐浴してから礼拝するように」といわれた。
それで彼女は礼拝時毎にいつも沐浴したのである。
これに関連し、ライス・ビン・サアードは「み使いは彼女に、礼拝の度毎に沐浴するよう命じたのではないが、彼女は自発的にそれを行ったのである」と述べている。
なお、イブン・ルムフの伝えるハディースには「ウンム・ハビーバ」という言葉はなく「ビント・ジャフシュ」とのみ記されている。
預言者の妻、アーイシャはこう伝えている
アッラーのみ使いの義妹で、アブドル・ラフマーン・ビン・アウフの妻ウンム・ハビーバ・ビント・ジャフシュは、七年間もムスタハーダの状態であった。
それ故彼女は、み使いにこれに関する意見を求めた。
み使いは「それは生理によるものではなく、血管からの流血であるから、沐浴したあと礼拝すればよい」と答えられた。
なお、これに関連しアーイシャは「彼女は、彼女の妹ザイナブ・ビント・ジャフシュの部屋にある洗濯だらいで沐浴をしたが、水が流血で真赤に染まるほどであった」と語っている。
更にこれに関連し、イブン・シハーブは次のように述べている
「私は、アブー・バクル・ビン・アブドル・ラフマーン・ビン・ハーリス・ビン・ヒシャームに

このことを話した。
すると彼は『アッラーよ、ヒンダに慈悲を与えたまえ！
もしも彼女がこのことを知ったならば、必ずや、彼女は（ムスタハーダのため）礼拝しなかったことを悲しみ嘆くことだろう』といった」
アーイシャによるこれと同内容のハディースは、別の伝承者経路でも次のように伝えられている。
「ウンム・ハビーバ・ビント・ジャフシュがアッラーのみ使いの処に来たが、彼女には七年間もムスタハーダの状態が続いていた」
以下の話は前記と同内容であるが、ただ「水が血で真赤に染まるほどであった」と記されるだけで、それ以上のことには言及されていない。
アーイシャによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられ、それには「ジャウシュの娘は七年間ムスタハーダであった」と記されている。
アーイシャによれば、ウンム・ハビーバはアッラーのみ使いに、生理期間以後の流血について質問した
これに関連しアーイシャは「私は彼女の洗濯だらいが血で一杯に染まるのをみた」と述べ、「この折、み使いは彼女に『生理期間に相当する日数の礼拝をひかえ、その後は沐浴してから礼拝をしなさい』といわれた」と語っている。
預言者の妻アーイシャは、こう伝えている
アブドル・ラフマーン・ビン・アウフの連れ合い、ウンム・ハビーバ・ビント・ジャフシュは、アッラーのみ使いに、生理以外の下り物に関しての悩みを訴えた。
これに対し彼は「あなたの通常の生理期間日数分だけの礼拝を省き、それが過ぎたら、沐浴して礼拝を行いなさい」といわれた。
それで彼女は礼拝する前、必ず沐浴を行った。

生理中の断食、礼拝に関して
1巻　P.241-242

ムアーザはこう伝えている
或る女性がアーイシャに「私たちは、生理期間中割愛した礼拝分を補足すべきでしょうか」と聞いた。
アーイシャはこれに対し「あなたは、ハワーリジュ派信奉者（注）ですか。
アッラーのみ使いの時代には、生理中の礼拝を禁じられても、その分を後で補足完了することは命じられませんでした」と答えた。
（注）原文は『ハルーリーヤ』　クーファ近くのハルーラ部落に因んだ呼び名で、ハワーリジュ派は最初にここに本拠を置いた。
彼らは女性が生理中免ぜられた礼拝やラマダーン月の断食は、生理か終ったあと補足完了されるべきであるとした。
ただ、これは彼ら独特の見解でイスラームの法原則には関係しない
ムアーザは次のように伝えている
彼女がアーイシャに「生理中の女性は、その間の礼拝を生理が終わった後で補充すべきでしょうか」と質問した時、
アーイシャは「あなたはハワーリジュ派ですか。
夫人たちが月々の生理のために行わなかった礼拝の埋め合わせなど、アッラーのみ使いはお命じになったでしょうか」といった。
ムハンマド・ビン・ジャウハルは「『埋め合わせ』とは補足完了することを意味する」と説明している。
ムアーザはこう語っている
私はアーイシャに「生理中だった女性には、断食の埋め合わせを命じ、礼拝にはそれが命じられないのはどうしてですか（注）」と質問した。
彼女はこれに対し「あなたはハルーリーヤ（ハワーリジュ派信奉者）ですか」といったが、私は「いいえ、違います。ただ、おたずねしただけです」と答えた
（ともあれ）彼女は「私たちは生理を終えた後で断食日数の完遂を命じられましたが、礼拝の埋め合わせについてはなにも指示されませんでした」と語ってくれた。
（注）断食日数の埋め合わせは、一年以内に行えはよいだけに、それほど困難ではないが、礼拝は回数が多いだけに欠分の補充は難しい。
無理を強いないイスラームの基本姿勢かここにはうかがわれる

沐浴時のカーテンの使用について

沐浴時のカーテンの使用について
1巻　P.242

アブー・ターリブの娘、ウンム・ハーニーはこう伝えている
私は、マッカ征服当時の或る日、アッラーのみ使いの処に行った。
その時、彼は沐浴中で、娘のファーティマが彼の周りにカーテンをめぐらせていた。
アブー・ターリブの娘、ウンム・ハーニーはこう伝えている
マッカが征服された年の或る日、彼女は町の高台に住んでいたアッラーのみ使いの家を訪ねた。
彼はこの時沐浴中で、ファーティマが、彼の周りにカーテンを張って外から見えぬようさえぎっていた。
その後み使いは衣服を取って身にまとい、午後の礼拝を8ラカートなさった（注）。
（注）ラカートとは、イスラームの礼拝単位で、直立、拝礼、跪拝とつづく一連の動作をいう。
なお、午後の礼拝は通常四ラカート行われる
前記と同内容のハディースは、サイード・ビン・アブー・ヒンドによっても伝えられる。
なお、これには「預言者の娘ファーティマが、彼の衣服を用いてカーテンを張った。沐浴が終ると、彼は衣服を取って身にまとい、立ち上がって午後の礼拝を8ラカート行った」と記されている。
マイムーナはこう伝えている
私は預言者のため水を用意し、カーテンを張った。彼は、その内側で沐浴をなさった。

他人の局部を見ないことについて

他人の局部を見ないことについて
1巻　P.242-243

アブドル・ラフマーンの父、アブー・サイード・フドリーによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「男子は、他の男の局部を見てはならない。
女子も同じく、他の女の局部を見てはならない。
また男子は、他の男と一枚の布で臥してはならない。
同様に女子も他の女と共に一枚の布に臥してはならない」
前記と同内容のハディースは、イブン・アブー・フダイク及びダッハーク・ビン・ウスマーンによっても伝えられる。
彼らは共々「男女の裸体の局部は陰蔽されるべきである」と述べている。

モーゼの沐浴に関して

モーゼの沐浴に関して
1巻　P.243

アブー・フライラは、アッラーのみ使い、ムハンマドが語ったハディースの一つをこう伝えている
イスラエルの民は真裸で沐浴をする慣習があり、その折、お互いの局部を見る機会があった。
しかし、モーゼだけは独りで沐浴したので、人々は「神に誓っていうが、モーゼが我々と一緒に沐浴しないのは、彼が陰嚢ヘルニアだからである」といって彼をあざけった。
或る日のこと、モーゼが沐浴に行き、衣服を岩の上に置いた時、その岩は、彼の衣服を乗せたまま転がり出した。
モーゼは「岩よ、私の衣服を返せ！　岩よ、私の衣服を返せ！」と叫びながら、その跡を走って追いかけた。
この折イスラエルの人々は、モーゼの局部を見ることができ、口々に「神に誓って。モーゼはなんの病気にも冒されていないではないか！」といい合った。
（ともあれ）岩はその後停止したが、この間にモーゼは、裸体を人々に見られてしまったのである。
彼は衣服を着けてからその岩を打ちたたいた。
この話に関連し、アブー・フライラは「アッラーに誓って話すが、その岩にはモーゼが6〜7回打った痕跡が残っている」と語った。

局部の陰蔽に関して
1巻　P.243-244

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
カーバ神殿が再建された時、預言者と伯父のアッバースは、共々石運びを手伝った。
この時、アッバースは預言者に「あなたの腰巻（イザール）を脱いで肩にかけ、その上で石をかつぐように」といった。
預言者はその通りにしたが、すべってしまい、両眼を天にむけて地面にひっくり返ってしまった。
そのあと立ち上がった預言者は「私の腰巻は！　私の腰巻は！」といってお捜しになった。
それ以後み使いは、腰巻をきつくお締めになった。
なお、イブン・ラーフィーによるハディースには、「首の上に」とあり、「肩に」とは記されていない。
ジャービル・ビン・アブドッラーは、こう語っている
アッラーのみ使いは、人々と一緒にカーバ神殿構築のため石材を運んだ。
その時彼は腰巻を付けていた。
伯父のアッバースが「私の甥よ！　腰巻をはずして肩にかけ、それに石を乗せれば楽になる」といったので、彼は腰巻をほどき肩にかけたが、すべって倒れ気を失ってしまった。
ジャービルはこの話に関連し「み使いはその日以後、決して裸体を人にお見せになることはなかった」と語っている。
ミスワル・ビン・マフラマはこう語っている
「私は重い石を運搬していたが、腰巻がゆるかったため、たやすくずり落ちた。
そのため、持って行った石を積んだり、適当な場所に運んだりすることが容易にできなかった。
これを見たアッラーのみ使いは『腰巻を付け直して腰にしっかりと締め、落ちないようにしなさい。裸で歩いてはならない』といわれた」

用便の折身を隠すことについて

用便の折身を隠すことについて
1巻　P.244-245

アブドッラー・ビン・ジャウファルは、こう伝えている
「アッラーのみ使いは或る日、私をらくだの後に乗せ、私がまだ誰にも話したことのない、ある秘密話を私に語って下さった。
（ともあれ）み使いは、用便の折にはよく、岡のくぼみ、もしくは、なつめの木の房の蔭に、躯を隠された」
イブン・アスマーは「なつめの木」に関連し、「それは、なつめの木による囲いを意味する」と説明している。

精液を洗い流すことに関して

精液を洗い流すことに関して
1巻　P.245-246

サイード・フドリーによると彼の父は次のように伝えている
私はアッラーのみ使いと一緒に、月曜にクバーへ行き、サーリム部族の住居地に着いた。
み使いはイトバーンの家の戸口に立ち、大声で彼の名をお呼びになった。
それでイトバーンは、腰巻をひきずりながら出て来た。
み使いはその様子を見て、「我々はこの人（イトバーン）をあわてさせてしまった」といわれた。
イトバーンはこの折「み使い様、もし、男が射精前に突然彼の妻から引き離された場合、沐浴に関してはどうすればよいのですか」とたずねた。
これに対しみ使いは「射精した場合にのみ、沐浴は義務となるのです」とお答えになった。
アブー・アラー・ビン・シッヒールはこう語った
アッラーのみ使いは、教令の幾つかを別の教令で廃棄なされた。
それは丁度、クルアーンの或る部分が、別の啓示によって廃棄されたのと同じである。
アブー・サイード・フドリーは、次のように伝えている
アッラーのみ使いは、アンサールの或る男の家の近くを通りかかり、彼に使いを出した。
彼はすぐ出て来たが、水を頭からしたたらせていた。
その様子を見たみ使いが「我々はあなたを急がせてしまったようです」といわれると、彼は「その通りです。み使い様」と答えた。
この時、み使いは「あなたが急いでいる時、もしくは、射精しなかった時、沐浴は義務とはならない。ウドゥーが必須とされるだけです」と教示なさった。
ウバイー・ビン・カアブは、こう伝えている
私はアッラーのみ使いに、妻と交接した男が射精前に彼女を離れた場合について質問した。
み使いはこれに対し「男はその場合、妻からの分泌液を洗い落すべきです。
その後ウドゥーを行って礼拝すればよいのです」といわれた。
ウバイー・ビン・カアブは、アッラーのみ使いの言葉を次のように伝えている
「妻と交接しても射精しなかった男は、陰茎をよく洗い、そのあとウドゥーを行うべきです」
アブー・サイード・フドリーによると、預言者はこういわれた
「射精した場合、沐浴は必須の義務である」
ザイド・ビン・ハーリド・ジュハニーは、こう伝えている
彼はウスマーン・ビン・アッファーンに「妻と交接しながら、射精しなかった男についてのあなたの意見をお聞きしたい」といった。
ウスマーンはこれに対し「彼は礼拝の時と同様にウドゥーを行い、陰茎を洗うべきです」と答え、更に「私は、み使いからこのことを聞いたのです」と語った。

前記と同内容のハディースは、アブー・アイユーブによっても、別の伝承者経路で伝えられている。

沐浴が義務とされる場合について
1巻　P.246-247

アブー・フライラによると、預言者はこういわれた
「交接のあとの沐浴は、男女それぞれにとって義務である」
なお、マタルの伝えるハディースには「たとえ射精しなかったとしても」と記されている。
前記ハディースは、カターダによっても別の伝承者経路で伝えられるが、表現上に多少の相違がみられる。
なお、「射精しなくても」という言葉は省かれている。
アブー・ムーサーはこう伝えている
ムハージル（マッカからの移住ムスリム）とアンサール（マディーナ在来のムスリム）の両グループ間で意見の相違が生じた。
アンサール・グループは「性交後、沐浴が必須とされるのは、射精、もしくは、分泌液がみられる場合に限る」と主張し、これに対しムハージル・グループは「性交が行われた場合、沐浴は、射精の有無に関わらず必須である」と述べた。
これに関しアブー・ムーサーは「ムハージル・グループの見解に同意する」と述べ、次のように話した
「私はある日、起き上がってアーイシャの処に行き質問の許可を求め、それが許されたのでこういった『母よ！（もしくは、信者の母よ！）、私は少々恥ずかしいことをおたずねしたい』これに対し彼女は『あなたを生んだ母親に質問できることを私にたずねるのは、何も恥ずかしいことではありません！　なぜなら、私もまたあなたの母親ではありませんか』といった。
それで私は『どんな場合、沐浴が必須なのですか』とたずねた。
すると彼女は『あなたは、その件に関し最適任者に質問しています！
アッラーのみ使いは、女性の四肢の上に臥し、割礼部分を互いに触れ合わせた者に対し、沐浴は義務となります　といわれたのです』と語ってくれた」
預言者の妻アーイシャはこう伝えている
或る人がアッラーのみ使いに、妻と交接しても射精することなく離れた場合の沐浴の是非について質問した。
アーイシャはその時横に座っていた。
み使いは「私と彼女は、交接の後、いつも沐浴している」とお答えになった。

火を使った料理に関して

火を使った料理に関して
1巻　P.247-248

ザイド・ビン・サービトによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「火を通した料理を食べた者には、ウドゥーが義務として課せられる」
アブドッラー・ビン・イブラヒーム・ビン・カーリズは、モスクでウドゥーを行っているアブー・フライラがこう語るのを聞いた。
私はチーズ（注）を食べたのでウドゥーをしているのです。
アッラーのみ使いは、火を使って料理した食物を食べた後には、ウドゥーをするようにと言われたのです。
ウルワは、預言者の妻アーイシャの言葉をこう伝えている。
アッラーのみ使いは「火を使って料理した食物を食べた後には、ウドゥーをして清めよ」といわれた。
（注）原文は「アキト」カテジチーズの一種

前項ハディースの廃棄に関して

火を使った料理に関するハディースの廃棄に関して
1巻　P.248-249

イブン・アッバースはこう伝えている
アッラーのみ使いは焼いた羊の肩肉をお食べになったあと、ウドゥーもなさらず、そのまま礼拝を行われた（注）。
（注）これらのハディースにより、前章の「火を通した料理を食した場合、ウドゥーは必須とされる」という規定は廃稟されたことになる
イブン・アッバースはこう伝えている
預言者は、骨付き肉、または、肉片をお食べになってから、すぐ礼拝を行われた。
その折、ウドゥーをなさらず、水にもお触れにならなかった。
ジャウファル・ビン・アムル・ビン・ウマイヤ・ダムリーは、彼の父がこう語るのを聞いた
私はアッラーのみ使いが羊の肩肉を切り取ってお食べになるのを見た。
その後礼拝されたが、ウドゥーはなさらなかった。
ジャウファル・ビン・アムル・ビン・ウマイヤ・ダムリーは、彼の父の言葉を次のように伝えている
私は、アッラーのみ使いが羊の肩肉を切り取ってお食べになるのを見た。
礼拝の時刻を知らされた時、彼はナイフをそこに置いたままお立ちになり礼拝されたが、その折ウドゥーはなさらなかった。
クレイブは、預言者の妻マイナームから聞いてこう伝えている
預言者は、彼女の処で羊の肩肉をお食べになった。
そして後、礼拝を行ったが、ウドゥーをなさらなかった。
預言者の妻マイムーナから聞いたクレイブが伝えた前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられている。
アブー・ラーフィはこう述べている。
私は以下のことを証言致します
（すなわち）私はいつも羊のレバーをアッラーのみ使いのため焼いてさし上げましたが、み使いはそれをお食べになった後、ウドゥーをなさることなく、礼拝されました。
イブン・アッバースはこう伝えている
預言者はミルクを飲んだ後、水を求め、口をゆすがれた。
そして「これには脂肪が含まれている」といわれた。
前記と同内容のハディースは、ズフリーによっても別の伝承者経路で伝えられている。
イブン・アッバースはこう伝えている
アッラーのみ使いは、衣服を着替えてから礼拝にお出掛けになったが、その折パンと肉を贈られた。

み使いはそれを三口ほどお食べになってから、他の人々と一緒に礼拝をなさった。
この時、水には手をお触れにならなかった。
前記と同内容のハティースは、ムハンマド・ビン・アムル・ビン・アターによっても伝えられ、これには「私はイブン・アッバースと一緒だった。彼は預言者が前記のようになさるのを見た。預言者は礼拝をなさった」と記されている。
なお、これには「人々と一緒に」という表現はみられない。

らくだ肉食後のウドウーに関して

らくだ肉を食べた後のウドウーについて
1巻　P.249-250

ジャービル・ビン・サムラはこう伝えている
或る人がアッラーのみ使いに、羊肉を食べた後ウドゥーをすべきかどうかについて質問した。
み使いは「そう願うなら行い、したくないならば行わなくてもよい」といわれた。
その人は更に、らくだ肉を食べた後ウドゥーを為すべきかどうかについても質問した。
み使いは「為すべきです。らくだ肉を食べた後にはウドゥーを行うように（注1）」といわれた。
その人は、また「羊囲いの中で礼拝してもよいかどうか」についてたずねたが、み使いは、それに対し「よろしい」といわれた。
しかし「らくだの休む場所で礼拝してもよいだろうか」との質問に対しては、み使いは「いや、いけない（注2）」とお答えになった。
（注1）らくだ肉の場合のみウドゥーが必須とされる理由としては、
（1）らくだ肉が、特に不快な臭いを発するため、
（2）ユダヤ教などで禁食とされるらくだ肉をムスリムが特に許されることに対する感謝の表現として、などか挙げられる
（注2）らくだ囲いでの礼拝を禁じたのは、らくだが時として危険な行動に走る動物であるためであろう
前記と同内容のハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。

礼拝中の悪臭に関して

礼拝中の悪臭に関して
1巻　P.250

アッバード・ビン・タミームは、彼の父方の伯父から聞いてこう伝えている
或る人物が預言者に、礼拝中にせっかくのウドゥーを無効にしかねない不快な経験をしたと訴えた。
預言者はこれに対し「下痢による腹音を耳にしたり、放屁の臭いを鼻にした場合を除き、再ウドゥーのため礼拝場所を離れる必要はない」といわれた。
これに関連し、アブー・バクル及びズハイル・ビン・ハルブは「或る人物とは、アブドッラー・ビン・ザイドのことである」と語っている。
アブー・フライラによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「もし、あなた方の誰かに腹具合の悪い人がいても、誰が悪臭を放ったか疑わしい場合、モスクからその人を外に出て行かせる必要はない。ただし放屁の音や臭いから当人が明らかである場合はこの限りではない」

皮を鞣すことについて
1巻　P.251-253

イブン・アッバースは、次のように語っている
マイムーナの元女奴隷に喜捨として贈られた羊が死んだ。
アッラーのみ使いは、たまたま、その羊の屍体の近くを通りかかり「どうして皮を剥がないのか、鞣して使えば役に立つのに！」といわれた。
教友らが「死んでいるのです」と述べると、み使いは「動物の屍体を食することが禁じられるだけです」といわれた。
これに関連し、アブー・バクル及びイブン・アブー・ウマルは「この話はマイムーナによって語られた」と伝えている。
イブン・アッバースは、別の伝承者経路でこう伝えている
アッラーのみ使いは、マイムーナの元女奴隷に喜捨として贈られた羊の死骸をごらんになった。
この折み使いは「どうして羊の皮を役立てようとしないのか」といわれた。
人々が「死骸だからです」と答えると、み使いは「（死んだ動物の肉を）食することが禁じられるだけです」といわれた。
前記と同内容のハディースは、イブン・シハーブによっても伝えられている。
アターはイブン・アッバースより聞いて、こう伝えている
アッラーのみ使いは、マイムーナの元女奴隷に喜捨として与えられた羊の死骸が、投げ棄てられている場所をお通りになった。
預言者はこれを見て「どうして皮を剥がないのか、鞣して使えば役に立つのに」といわれた。
イブン・アッバースは、マイムーナから聞いてこう伝えている
アッラーのみ使いの妻たちの一人が家畜を飼っていた。
それが死んだ時、み使いは「どうして、その皮を剥いで利用しないのか」といわれた。
アターによると、イブン・アッバースはこう伝えている
預言者は、マイムーナの元女奴隷が飼っていた羊の死骸の傍らを通りかかった折「どうして皮を剥いで利用しないのか」といわれた。
アブドッラー・ビン・アッバースによると、アッラーのみ使いはこういわれた
「皮は鞣されると、清浄になる（注）」
（注）宗教上禁忌（ハラーム）とされる犬や豚の皮は、勿論、これには該当しない
イブン・アッバースによる前記と同内容のハディースは、他にも幾つかの伝承者経路で伝、そられている。
アブー・ハイルはこう伝えている
私は、イブン・ワアラ・サバーイーが毛皮を着ているので、それに触ってみた。
彼は「どうして触るのですか」といってから次のように話した。

「私は、かつて、イブン・アッバースにこう質問したことがあります
『私たちはマグリブ（北アフリカ西部）に住んでいます。そこにはバーバリ人やゾロアスター（拝火教）教徒らも住んでいます。彼らは雄羊を飼い屠殺しますが、私たちは、彼らの殺した動物の肉は食べません。彼らはまた脂肪が一杯つまった皮袋を私たちの処に持って来ます』
これに対し、イブン・アッバースは『私たちはかつてアッラーのみ使いにそれについて質問したが、その折み使いは"皮は鞣されることによって浄化される（たとえ非イスラーム教徒の手で、鞣された皮であっても）"といわれた』と語ってくれた」
イブン・ワアラ・サバーイーは、こう伝えている
私はアブドッラー・ビン・アッバースに「私たちはマグリブ地方の住民です。ゾロアスター教徒らが、水と脂肪の入った皮袋を持って私たちの処に来て『飲め』といいます。あなたは飲むことに同意しますか」とたずねた。
これに対しイブン・アッバースは「私はアッラーのみ使いが『鞣すことで、皮は清浄になる』といわれたのを聞いたことかある」と語ってくれた。

タヤンムムに関して

タヤンムム（砂ウドゥー）に関して
1巻　P.253-256

アーイシャはこう伝えている
「私たちがアッラーのみ使いにお伴した或る旅の途中、バイダー、もしくは、ザートル・ジャイシュと呼ばれる場所に着いた時、私の首飾りが壊れどこかに落ちてしまった。
アッラーのみ使いはそれを捜すため、他の人々と一緒にここに停止なさった。
この地域には水場はなく、また、誰も水を持っている者はなかった。
それで、或る人たちは私の父、アブー・バクルの処に行き『アーイシャが何をしたか知っていますか。
彼女はみ使いと彼に従っている人たちを引き止めているのです。
ここには水もないし、誰も水を持っていないのです』といった。
そのためアブー・バクルはここにやって来たのですが、その時み使いは私の腿に頭を乗せて眠っておられました。
アブー・バクルはこの折『お前はみ使いや他の人々を引き止めてしまった。
ここには水場はないし、誰も水を持っていないというのに！』といいました」
アーイシャは続けてこう語った。
「アブー・バクルは（アッラーがそういわしめ給うままに）私を非難し、そして私の腰を彼の手でつついたのです。
しかし私は、み使いが私の腿を枕にして眠っておられたため、身動きすることもできなかったのです。
（ともあれ）み使いはこの水のない場所で朝までお休みになりました。
そしてこの折、アッラーはタヤンムムに関する啓示を下されたのでした（クルアーン第4章43節）。
それでみ使いや教友らはタヤンムムを行ったのです（注）」
この折、指導者格の一人、ウサイド・ビン・フダイルは「アブー・バクルの家族の人々よ！
これまでもみられたことだが、あなた方はまことに数々の恩寵に恵まれておられる！」といった。
アーイシャは「その後、私のらくだを立たせたところ、その下に首飾りは落ちていました」とも語った。
（注）タヤンムムとは、きれいな土、または、壁面に触れて顔や手を清める水のない場所での特別のウドゥーを意味する。
クルアーン第4章43節、第5章6節などにこれに関する啓示がみられる
ヒシャームの父はアーイシャについてこう伝えている
彼女は姉妹のアスマーウから首飾りを借りたが、それを落してしまった。

アッラーのみ使いは人々を遣ってその首飾りを探させた。
彼らは定めの時刻には、水のない処故、ウドゥーもせずに礼拝を行ったが、預言者の処に戻った時、そのことについて不満を述べた。
その折、タヤンムムに関する聖句が啓示されたのであった。
この話に関連して、ウサイド・ビン・フダイルはアーイシャに対し「アッラーがあなたによき報償を給わらんことを！
あなたが困難に会われ、アッラーがあなたの紛失物を発見せしめなかったのは、この機会にムスリムたちに恩寵を与えようとなさったからです」と述べた。
シャキークは次のように伝えている
私はアブドッラー・ビン・マスウード及びアブー・ムーサーと共に座っていたが、この時、アブー・ムーサーはこういった
「アブドル・ラフマーン（アブドッラーの呼び名）よ！
一ヵ月も十分な水がない場合、交接した男は礼拝の時どうすればよいのですか」
アブドッラーはこれに対し「たとえ一ヵ月間も十分な水がない場合であっても、タヤンムムをしてはならない」といった。
アブー・ムーサーは「それでは、クルアーンの食卓の章（アル・マーイダ）の聖句「女と交わった者で水を見つけられない場合は、清浄な土に触れ、あなたがたの顔と両手を撫でなさい」（クルアーン第5章6節）についてどう考えますか」とたずねた。
これに対し、アブドッラーは「もしこの聖句を理由にして、譲歩が認められるとしたら、人々は水があってもそれが非常に冷たい場合、土を手にしてタヤンムムを行うようになることだろう」といった。
アブー・ムーサーは、この時アブドッラーに次のように語った
「あなたは、アンマールがこう話したのを聞きませんでしたか
（すなわち）『アッラーのみ使いは用あって私に使いを寄越されました。
私はその時交接後であったが水がなかったので、丁度、動物が砂の上を転がるように私も砂上を転がって清め、その後み使いの処に行き、そのことを申し上げたのです。
するとみ使いは“このように行えばよい”といいながら、両手で地面を一回たたき、次いで右手を左手でこすってから、続けて手の平と顔を同様にこすられたのです』」
この話を聞いたアブドッラーは「あなたは、ウマルがこのアンマールの言葉だけでは納得しないだろうと思いませんか（注）」といった。
（注）カリフ・ウマルとアブドッラー・ビン・マスウードは、交接後の汚れはタヤンムムでは浄化できないとの見解だった。
しかし、アンマールその他のハディースによって、後には、水のない処でのタヤンムムに、通常のウドゥーや沐浴同様の効能を認める見解に変った
シャキークによる前記と同内容のハディースは、別の伝承者経路でも伝えられ、それには次の言葉がみられる
「アッラーのみ使いは両手で土の上をたたき、そのあと（両手の）土をふるい落してから、顔と

手の平をこすられた」
アブドル・ラフマーン・ビン・アブザーは、彼の父から聞いてこう伝えている
或る男がウマルの処に来て「私は時々精液を漏しますが、清めるための水がありません」といったところ、ウマルは「そのような場合礼拝してはならない」と述べた。
この話を聞いたアンマールは、次のようにいった。
「信者の長よ、あなたは、私とあなたが襲撃隊に加わった時のことを憶えていますか。
その折、精液を漏したが沐浴すべき水がなかったため、あなたは礼拝をなさらなかった。
私に関して言えば、私は砂の上を転がってから礼拝を行ったのでした。
そして、このことを預言者に申し上げたところ、彼は『地面を両手でたたいた後、土を吹き落とし、顔と両手をこすれば十分である』といわれました」
これに対しウマルは「アンマールよ！　アッラーを恐れなさい！（言葉を慎みなさい！）」といった。
アンマールは「あなたがそう願うなら、私はこの話をだれにも致しません」と述べた。
このハディースは、別の伝承者経路でも伝えられるが、それには「ウマルは『あなたが述べたことを私たちも信用します』といった」との言葉がみられる。
アブドル・ラフマーン・ビン・アブザーは彼の父から聞いてこう伝えている
或る男がウマルの処に来て「私は性行為をしましたが、沐浴すべき水がありません」といった。
これ以下の部分は、次の言葉の追加以外、前記と同内容である。
「アンマールは『信者の長よ、アッラーは私よりあなたにより多くの権限をお与えになられた故、私は、もしあなたがそう望むならば、このハディースを誰にも話さないつもりです』といった」
イブン・アッバースの元奴隷ウマイルはこう伝えている。
私と預言者の妻マイムーナの元奴隷アブドル・ラフマーン・ビン・ヤサールは、アブール・ジャフム・ビン・ハーリス・シンマ・アンサーリーの家に行った。
この時、アブール・ジャフムはこう語った
「ある人が、ビイル・ジャマルの方角から来られたアッラーのみ使いに道路上で出会った。
この時、その人は挨拶したがみ使いはなにも返事をなさらず、そのまま、壁の所まで行って顔と両手をこすられた。
そして、そのあと初めて挨拶をお返しになった」
イブン・ウマルはこう伝えている
アッラーのみ使いが放尿なさっている時、或る人が挨拶したが、み使いはそれにはお答えにならなかった。

ムスリムの清浄さについて

ムスリムの清浄さについて
1巻　P.256-257

アブー・フライラについてこう伝えられている
彼は、マディーナに通ずる道路上で預言者に会ったが、交接後の汚れの状態だったため、こっそり立ち去り沐浴を行った。
預言者は彼をお捜しになり、彼が戻った時「アブー・フライラよ、どこにいたのか」といわれた。
アブー・フライラは「アッラーのみ使い様、お会いした時私は汚れていたため、沐浴して身を清めるまであなたのお側に座りたくなかったのです」といった。
み使いはこの言葉を聞いて「アッラーに讃えあれ！　まことに、信者は汚れなく清浄な人々です！」といわれた。
フザイファはこう伝えている
アッラーのみ使いが彼に会われた時、彼は交接後で汚れていた。
それで彼はこっそり立ち去って沐浴を行い、その後戻って「私は、清浄でなかったのです」と告げた。
み使いは、これを聞いて「まことに、ムスリムには汚れがない」といわれた。

アッラーを常念することについて

アッラーを常に念ずることについて
1巻　P.257

アーイシャはこう伝えている
預言者は、どんな時にもアッラーを念じておられた。

食前のウドゥーに関して

食前のウドゥーは不要であることについて
1巻　P.257-258

イブン・アッバースはこう伝えている
預言者がトイレから出て来られた時、食事を提供された。
その折人々は「ウドウーをなさるのですか」とおたずねした。
これに対し預言者は「ウドゥーをして礼拝せねばなりませんか」といわれた（注）。
（注）食事前には手を洗うだけでよく、ウドゥーを行う必要はない
イブン・アッバースはこう伝えている
私たちが預言者の処にいたある時、トイレから出て来られた預言者の前に食事が運ばれた。
この折「ウドゥーをなさいませんか」とたずねられたが、預言者は「なぜ私が今、礼拝のためのウドゥーを行うのですか」といわれた。
アブドッラー・ビン・アッバースは、こう伝えている
アッラーのみ使いはトイレに行かれた。
戻って来た時食事を出されたが、この折「み使い様、ウドゥーをなさらないのですか」とたずねられた。
み使いはこれに対し「どうしてですか。
礼拝をせねばなりませんか」といわれた。
イブン・アッバースは、次のように語っている
預言者は、用便後トイレから出て来られた。
そのあと食事が出され、彼はそれをお食べになったが、水にはお触れにならなかった。
サイード・ビン・フワイリスの伝えるハディースには、これに関連し、次のように記されている
「教友の一人が預言者にむかって『あなたはウドゥーをなさいませんでした』といった時、預言者は『私は今ウドゥーをして、礼拝を行うつもりはありません』といわれた」

トイレで唱えられる言葉について

トイレで唱えられる言葉について
1巻　P.258

アナスはこう伝えている アッラーのみ使いはトイレ（ハラー）に入った時（フシャイムの伝える
ハディースによれば、み使いは憚り（カニーフ）に入った時）、いつも、こうお唱えにな
った 「アッラーよ、私を邪悪と忌わしき事々からお護り下さい！」前記と同内容のハディースは
、アブドル・アズィーズによっても伝えられ、それには「私はアッラーに、邪悪と忌わしき事々
からお護り下さるよう祈願致します」と記されている。

居眠り後のウドゥーに関して

居眠り後のウドゥーに関して
1巻　P.258-259

アナスはこう伝えている
人々は礼拝のため立ち上がったが、アッラーのみ使いは、或る男と小声で話を続けておられた（アブドル・ワーリスの表現によると、アッラーのみ使いは或る男と内密の話をなさっておられた）
そのため、礼拝がいつまでも始まらず、人々の中には居眠りをする者もいたほどだった。
アナス・ビン・マーリクはこう伝えている
人々は礼拝のため立ち上ったが、預言者は或る男と小声で話し込んでおられ、教友たちが居眠りを始める頃まで、話し合いを中断なさらなかった。
預言者は、その後ようやく出ておいでになり、人々と一緒に礼拝をなさった。
カターダはこう伝えている
私はアナスから、アッラーのみ使いの教友たちが居眠りをした後礼拝を行い、その際、ウドゥーを省いたことを聞いた。
これに関連し、カターダは「アナスから直接その話を聞いたのですか」と人にたずねられた折「アッラーに誓って。その通りです」と答えた。
アナスはこう伝えている
人々が夜（イシャー）の礼拝のため立ち上った時、或る男が来て「お話ししたいことがあります」といい出した。
それで、預言者は彼と内密の話を長々となさった。
人々は（もしくは、一部の人々は）そのため居眠りを始めたほどであったが、その後ようやく礼拝が行われた

アザーンの由来について

アザーン（礼拝時刻告知の詠唱）の由来
1巻　P.261

イブン・ウマル（アブドッラー）は次のように伝えている
ムスリム達（マッカの信徒ら）がマディーナにやって来た時（西暦622年のヒジュラ）彼等は皆集まって礼拝時刻到来の告知を待っていた。
しかし誰もその時刻の到来を知らせる者はいなかった。
そこで某日、人々はこのことについて話しあうことになったが或る者はキリスト教徒が用いている鐘のようなものではどうかといい、また或る者はユダヤ教徒が用いる角笛のようなものではどうかといいだした。
するとウマル（後に第二代カリフに就任）はこう云った。
「誰かに皆さんが委任してその者に礼拝時刻の到来を肉声で呼び掛けてもらうべきではないのでしょうか」
かくしてアッラーの使徒はこう仰せられた。
「ビラール（注）よ、立って人々に礼拝への呼び掛けをせよ」
（注）美声で知られたエチオピア系元奴隷出身の黒人ムスリム

アザーンの言葉について

アザーンの言葉は二回、イカーマのそれは一回唱えること
1巻　P.261-262

アナスは次のように伝えている
ビラールはアッラーの使徒からアザーンの言葉は各二回ずつ繰り返し（注1）イカーマ（礼拝直前の小声で早口の小アザーン）（注2）の言葉は各一回だけ唱えるよう命じられた。
ところで伝承者の一人は“イカーマを除いて”という語句を最後につけ加えた（注3）。
（注1）一息の詠誦を二度繰り返すという意味でたとえば次の①②の例はどちらも正しい
①「アッラーは偉大なり」「アッラーは偉大なり」
②「アッラーは偉大なり、アッラーは偉大なり」「アッラーは偉大なり、アッラーは偉大なり」
（注2）二つの意味があり小アザーンそのものの意味の他に（注3）のように“礼拝はまさに始まらんとす”という一節だけをも意味している
（注3）それは“礼拝はまさに始まろうとしている”という一句を除いて小アザーンの全ての文言を二回繰り返すよう命じられた意
アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている
彼等（教友達）は礼拝時刻の到来を誰にでもよく解る何らかの方法によって知らせるべきであるとしてそのことで議論していた。
或る者は火をともすべきだといい、また或る者は鐘を鳴らすべきだといった。
そこでビラールが肉声でもってアザーンの言葉を各二回繰り返し“イカーマ”は一回だけ唱えるように命じられた。
このハディースは前記ハディースと別の伝承者経路を経てカーリド・ハッザーウによって次のように伝えられている。
多くの人々がこのことで議論を始めた時、彼等は前記のハディースの如くに礼拝時刻を告知すべきであるとした。
しかしここでは“彼等は火をおこすべきである”といった表現を用いている。
アナスは次のように伝えている
ビラールはアザーンの言葉を各二回ずつ繰り返し“イカーマ”の言葉は一度だけ唱えるよう命じられた。

アザーンの詠唱法について

アザーンの詠唱法
1巻　P.262-263

アブー・マフズーラは次のように伝えている
アッラーの預言者は彼に以下のアザーン詠唱法を教えてくれた。
「アッラーは偉大なり。アッラーは偉大なり。
私はアッラーの他に神なしと証言する。
私はアッラーの他に神なしと証言する。
私はムハンマドがアッラーの使徒であることを証言する。
私はムハンマドがアッラーの使徒であることを証言する」
それから彼（アブー・マフズーラ）は前記の言葉をさらに繰り返してこう言った（注）。
「私はアッラーの他に神なしと証言する。
私はアッラーの他に神なしと証言する。
私はムハンマドがアッラーの使徒であることを証言する。
私はムハンマドがアッラーの使徒であることを証言する」
それからさらにつづけて「礼拝のために来たれ」（これを二回）「成功のために来たれ」（これを二回）
以上にひきつづいて伝承者の一人イスハークは以下の言葉を加えている。
「アッラーは偉大なり。アッラーは偉大なり。アッラーの他に神なし」
（注）以下の繰り返しはアブー・マフズーラ独自のスタイルである。
結局アザーンの言葉の繰り返し回数には決定的な決まりはない

ムアッジンについて

一つのモスクに二人のムアッジン（アザーンの詠唱者）がいることは好ましいことである
1巻　P.263

イブン・ウマルは次のように伝えている
アッラーの使徒には二人のムアッジンがいた、それはビラールと後に失明したアブドッラー・ビン・ウンム・マクトームである。
このハディースはアーイシャ（預言者の妻のうちの一人）を起点とした別の伝承者経路によっても伝えられている。

失明者によるアザーンについて

明敏さを具えていれば失明者によるアザーンも可能であること
1巻　P.263-264

アーイシャは次のように伝えている
イブン・ウンム・マクトームはアッラーの使徒に仕えてアザーンの詠唱をしていたが、その時彼は失明していた。
同様のハディースが別の伝承者経路を経由して伝えられている。

異教の地で聞くアザーンについて

預言者が異教徒の地（ダールル・クフル）に住んでいる人々の間でアザーンの詠唱を聞いた時には彼等に対する攻撃を止めたこと
1巻　P.264

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている
アッラーの使徒は夜明けとともに敵を攻撃することを常としていた。
その際に彼はアザーン詠唱の有無に聞き耳をたてたものでした。
それでアザーンの詠唱を耳にしたばあいには攻撃を止め、聞かなかった場合にはそのまま攻撃を続行した。
こうした或る時或る者が「アッラーは偉大なり、アッラーは偉大なり」と詠唱していた。
これを聞いたアッラーの使徒は「彼（或る者）は本然の姿（イスラーム）に従っている」といった。
それからその男が「アッラー以外に神なしと私は証言する。
アッラー以外に神なしと私は証言する」といった。
これを聞いてアッラーの使徒は「あなたは地獄の業火から逃れることができました」といった。
そこで人々はその男を注目してよく見たが（驚いたことに）彼はただの山羊飼でした。

アザーンへの唱和について

アザーンを聞いた者は（誰でも）それと同じ言葉を唱和すべきこと。
その後預言者を祝福し、それから彼のためにワスィーラ（神の座に最も近い楽園最高位の座）をアッラーに請うべきであること
1巻　P.264-266

アブー・サイード・フドリーはアッラーの使徒が次のよう語ったとして伝えている
「あなたたちは礼拝への呼びかけ（アザーン）を聞いたならアザーンの詠唱者が唱えていることを同じように繰り返しなさい」
アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースは預言者が次のようにいったことを聞いたとして伝えている
「あなたたちはムアッジンの詠唱を耳にした時には彼のいっていることを同じように繰り返しなさい。
それから私（預言者）を祝福しなさい。
私を祝福した者は誰でもアッラーより10倍の祝福をうけるだろう。
それから私のためにワスィーラをアッラーに請いなさい。
ワスィーラとはアッラーの下僕（信徒）達の中でただ一人のために用意された天国での特別席ですが、私はそのただ一人になることを望んで止みません。
私のためにこのワスィーラをアッラーに請うた者は誰でも最後の審判の際には私からの執り成しが保証されるでしょう」
ウマル（後に第二代カリフ）はアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
ムアッジンが「アッラーは偉大なり、アッラーは偉大なり」と詠唱したら、少くともあなたたちの一人がそれに答えて、「アッラーは偉大なり、アッラーは偉大なり」と唱和すべきである。
それからムアッジンが「アッラー以外に神なしと私は証言する」と詠唱した時にはその者は答えて「アッラー以外に神なしと私は証言する」と唱和すべきである。
それからムアッジンが「ムハンマドはアッラーの使徒であると私は証言する」と詠唱したならその者は答えて「ムハンマドはアッラーの使徒であると私は証言する」と唱和すべきである。
それからムアッジンが「礼拝のために来たれ」と詠唱した時にはその者は答えて「アッラーによることなしにはいかなる権能も力も存在せず」と唱えるべきである。
その後ムアッジンが「成功のために来たれ」と詠唱した時にもまたその者は答えて「アッラーによることなしにはいかなる権能も力も存在せず」と唱えるべきである。
それからムアッジンが「アッラーは偉大なり、アッラーは偉大なり」と詠唱した時はその者は答えて「アッラーは偉大なり、アッラーは偉大なり」と繰り返し、最後にムアッジンが「アッラー以外に神なし」と唱えた時はその者はそれに答えて「アッラー以外に神なし」と心から娼念すべきである。
こうすればその者は天国に入るであろう。

サアド・ビン・アブー・ワッカース（カーデシイヤの戦の総指令官として知られている）はアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
ムアッジンの声を聞いた時に「アッラー以外に神なし、アッラーは唯一者にして同位者なし、またムハンマドはアッラーの下僕であり使徒であると私は証言する。
私は我が主としてアッラーを心から信じ、使徒としてムハンマドを心から信じ、宗教（生活律法）としてイスラームを心から受け入れました」といった者は誰でもその者の宗教上の罪は許されるであろう。
ところでイブン・ルムフによる別の伝承によれば「そして余人はともかくこの私は……と証言する」とあるがクタイバの伝承では単に「私は……と証言する」となっている。

アザーンの美徳に関して

アザーンの美徳、またアザーンを聞くと悪魔は逃げ去るということ
1巻　P.266-268

タルハ・ビン・ヤヒヤーは彼の叔父から聞いた話として次のように伝えている
私はムアーウィヤ・ビン・アブー・スフヤーン（ウマイヤ朝の創始者）の所にいた。
すると彼のもとにムアッジンが礼拝時刻の到来を知らせにやって来た。
その時ムアーウィヤはアッラーの使徒がかつて次のように語ったことを耳にしたといった。
「復活の日にはムアッジン達が最も首の長い人達（傑出した人物に対する比喩）です（注）」
イーサー・ビン・タルハもまたムアーウィヤから前記と同じアッラーの使徒のハディースを聞いたと伝えている。
（注）復活の日には彼等が実際長い首をした姿で現われるとも考えられている
ジャービルからの伝聞としてアブー・スフヤーンは次のように伝えている
私はかつて預言者が次のように語った言葉を耳にしました。
「悪魔は礼拝への呼びかけを聞くとラウハーのあたりまで遠くに逃げ去る」
さてスライマーンはこう言った「そこで私はラウハーとはどこですかと彼（預言者）に尋ねた」
すると彼は答えて言った「それはマディーナから36マイル程離れたところにあります」
このハディースは別の伝承者経路によっても伝えられている。
アブー・フライラは預言者の次のような言葉を伝えている
「悪魔は礼拝の呼びかけを聞くとその声が聞こえないように背を向けて放屁する。
しかしその呼びかけが終わり静かになるとまた舞い戻り礼拝に集まった人々の心を惑わそうとする。
その後イカーマ（礼拝直前の小アザーン）を聞くとその声が届かぬところまで再び逃げて、イカーマが終り静かになるとまた舞い戻ってきて惑わそうとする」
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「ムアッジンがアザーンを詠唱すると悪魔は踵を返して一目散に駈け去る」
スハイルは次のように伝えている
私の父は私をバニー・ハーリサ族のもとへ使いにさし向けた。
その時私は、少年だったか成人だったか（よく覚えていないが）ともかく一人の随行者と一緒だった。
そして誰かが壁の向こう側から私の随行者の名前を呼んだので彼は壁の方を注意深く見ました。
しかしそこには人影は見当らなかった。
そこで私はこの出来事を父に話したところ父は次のように語った。
もしお前がそのような状況に置かれると前もって解っていたならばそのような所へお前を使いに出さなかっただろう。
それにしてももしいま一度そのような悪魔の呼び声（ハーテフといってイスラーム以前から恐れ

られていた）を聞いたならばアザーンを唱えなさい。
なぜならば私はアッラーの使徒が次のように語ったとアブー・フライラから聞いています。
「そもそも悪魔はアザーンの詠唱を聞けばただちに一目散に退参するであろう」
アブー・フライラは預言者が次のように語ったとして伝えている
「悪魔は礼拝への呼びかけの声を聞くとその声が聞えなくなるように背を向けて放屁する。
しかしアザーンの詠唱が終ると悪魔はまた戻り近づいてくる。
それからイカーマが唱えられると悪魔は再び踵を返して逃げ去り、イカーマが終るとまた戻り礼拝者に近付いて『しかじかのことを思い起せ！　しかじかのことを思い起こせ！』とささやいてその男が以前には考えたこともないことを思い起させては彼を惑わす。
その結果、礼拝者は何回礼拝したかも自分でも分らなくなってしまう」
前記と同様のハディースが別の伝承者経路を経てアブー・フライラにより伝えられているがそれは次の一節の一部が違っているだけである。
「彼はどのようにして礼拝したのか自分でもわけが分からなくなってしまう」

礼拝開始のタクビールに関して

礼拝開始のタクビール（アッラーは偉大なりと唱えること）を唱える際に、
またルクーウ（屈身礼）に移る際とルクーウから直立礼（キヤーム）の姿勢に戻る際に両手を両肩のところまで上げることは好ましいこと、
しかしスジュード（平伏礼）から上半身を起こす際には両手を上げない
1巻　P.268-269

サーリムは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
私はアッラーの使徒の次のような動作を目撃した。
彼は礼拝開始の際とルクーウ（屈身礼）に移る直前と、屈身礼から身を起した直後にもまた彼の両手を両肩の位置まで上げました。
しかし二回のサジダ（平伏礼）の間で（上半身を起す際に）は両手を上げませんでした。
イブン・ウマルは次のように伝えている
アッラーの使徒は礼拝のために立ち上った際に両手を両肩の位置まで上げ、それからタクビール（アッラーは偉大なりという言葉を唱えること）を唱えたものでした。
また彼が屈身礼に移る際にも両手を上げ、彼が屈身礼から身を起した時にも同様に両手を上げました。
しかし平伏礼の姿勢から頭を起した際にはそのような動作をしませんでした。
前記同様のハディース前半が別の伝承者経路を経て伝えられている。
アブー・キラーバは次のように伝えている
彼はマーリク・ビン・フワイリスの礼拝動作をみたが、それによるとマーリクはタクビールを唱えそれから両手を上げ、また屈身礼に移る際にも両手を上げ、屈身礼から頭を起した際にもまた両手を上げた。
そして彼はアッラーの使徒がいつもそのような作法に従って礼拝したと語った。
マーリク・ビン・フワイリスは次のように伝えている
アッラーの使徒はタクビールを唱える際に両手を両耳の位置まで上げ、屈身礼に移る際にも両手を両耳の位置まで上げた。
そして屈身礼から身を起す際に彼は「アッラーは彼を讃美する者の声を聞きたもう」と唱えつつ再び同じように両手を両耳の位置まで上げた。
このハディースは別の伝承者経路を経てカターダによって次のように伝えられている
彼（マーリク）は「アッラーの使徒が両耳たぶの位置まで両手を上げる動作を見た」と語った。

礼拝中のタクビールに関して

礼拝動作の中で屈身したり、上体を起したりする際にはタクビールを唱えるべきこと、
ただし屈身礼から上体を起こして直立の姿勢に移る際は別で、この時は「アッラーは彼を讃美する者の声を聞きたもう」と唱えるぺきこと
1巻　P.269-272

アブー・サラマ・ビン・アブドル・ラフマーンは次のように伝えている
アブー・フライラは皆のために礼拝の先導をするイマーム（教導師）の役を勤めたものだった。
その際彼は身を屈めたり身を起したりするごとにタクビールを唱えた。
そして礼拝を終えた時彼は次のようにいった。
「アッラーに誓って私は皆さんの誰よりもアッラーの使徒の礼拝に最も近い礼拝の言葉を唱えています」
アブー・フライラは次のように伝えている
アッラーの使徒は礼拝のために立ち上がった際に、直立の姿勢でタクビールを唱え、それから屈身礼に移る際に再びタクビールを唱え、屈身礼から身を起す時には「アッラーは彼を讃美する者の声を聞きたもう」と唱えた。
それから彼は立ったままの姿勢で「おお我等が主よ、称讃はあなたにのみ」と唱え、ついで身を沈めて平伏礼に移る際にタクビールを唱え、それから平伏礼の姿勢から頭を起す時にもまたタクビールを唱え、もう一度つづけて平伏礼に移る際にもタクビールを唱え、頭を起こす時にもタクビールを唱えた。
そして預言者は残りのラカート（一回の屈身札と二回の平伏礼よりなる礼拝構成単位）についても同様の作法でタクビールを唱え、ニラカート（最小限の完結した礼拝単位）を終えて正座の姿勢から立ち上る際（第三回目のラカートに移るため）にもタクビールを唱えた。
それからアブー・フライラは次のようにいった
「私の礼拝はあなた方のうちでも最もアッラーの使徒の礼拝によく似ています」
イブン・ハーリス（アブドル・ラフマーン）はアブー・フライラが次のように語ったとして伝えている
アッラーの使徒は礼拝のために立ち上った時タクビールを唱えたものだった。
残りのハディースは前記のハディースと同様である。
しかし彼はアブー・フライラが語ったとされている「私の礼拝はあなた方のうちでも最もアッラーの使徒の礼拝に似ています」という（最後の）一文には言及しなかった。
アブー・サラマ・ビン・アブドル・ラフマーンは次のように伝えている
マルワーン（ウマイヤ朝のカリフ）がアブー・フライラをマディーナにおける彼の代理統治者に任命した時だったがアブー・フライラは義務の礼拝のために立ち上がる時はいつでもタクビールを唱えたものだった。
残りのハディースは前記のハティースと同じであるが最後のところで次の一文がつけ加えられて

いた。
アブー・フライラは礼拝を終えて「皆さんの上に平安とアッラーの慈悲と祝福がありますように！」という所定の挨拶を唱えた後にモスクに居並んだ人々に向き直ってこう言った。
「私の魂がその手中にあるお方（アッラー）に誓って申します。
私の礼拝はあなた方のうちでも最もアッラーの使徒の礼拝によく似ています」
アブー・サラマは次のように伝えている
アブー・フライラは礼拝において身を起したり、身を屈めたりするたびごとにタクビールを唱えたものだった。
そこで私達は彼にこう尋ねた
「アブー・フライラよ、このタクビールは何のために唱えるのですか？」
するとアブー・フライラは答えていった。
「これがまさしくアッラーの使徒の礼拝に他ならないからです」
スハイルは父からの伝聞として次のように伝えている
アブー・フライラは礼拝において身を屈めたり身を起したりするたびごとにタクビールを唱えたものだった。
そして彼はアッラーの使徒がいつもそのように唱えたものだったと語っていた。
ムタッリフは次のように伝えている
私とイムラーン・ビン・フサインはアリー・ビン・アブー・ターリブ（後に第四代カリフ、預言者のいとこで娘婿）の後について礼拝した。
するとアリーは平伏礼をした際にタクビールを唱え、上半身を起して頭をあげる時もタクビールを唱えた。
また彼は二回のラカートを終えていったん正座しその姿勢から立ち上がる際にもまたタクビールを唱えた。
そして我々が礼拝を終えた時イムラーンは私の手をとってこう言った。
「まさしく彼（アリー）はムハンマドの礼拝の作法に従って我々とともに礼拝しました。換言すれば彼は私にムハンマド様の礼拝をしばし思い起こさせたのだ」

礼拝中のファーティハ読誦に関して

礼拝の各ラカート毎にファーティハ（開扉章、クルアーンの第1章）を唱えることは義務であること
1巻　P.272-275

アッラーの使徒から聞いたとしてウバーダ・ビン・サーミトは次のように伝えている
「クルアーンのファーティハ（第1章の開扉章（注））を誦まない者にはいかなる礼拝もない」
（注）様々な異名を持つ、「開扉章」の他、「繰り返す7節」「クルアーンの母（精髄）」「アルカーフィ（充足章）」「アルカンズ（宝蔵章）」「クルアーンの基石章」
ウバーダ・ビン・サーミトはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
「クルアーンの母（第1章の開扉章でクルアーンの精髄の意）を誦まない者の礼拝は無効である」
かつてアッラーの使徒から井戸水を顔に注がれたことのあるマフムード・ビン・ラビーウ（注）はウバーダ・ビン・サーミトから聞きおよんだアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
「クルアーンの母を誦まない者の礼拝は無効である」
（注）その時マフムードは5才の子供だった。
預言者は子供を喜ばせるために口に水を含んでピュッとその子の顔に水をかけたという
このハディースは別の伝承者経路を経て伝えられているがそれによれば次の語句が加えられている
「（ファーティハ）とその他の若干の章節（を誦まない……）」
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「クルアーンの開扉章を誦まずに礼拝したとしてもその者の礼拝は不完全である」と預言者は三度繰り返して語った。
そこで人々はアブー・フライラに「我々はしばしばイマームの後について、ただ彼の先導に従って礼拝するだけではないか」と質問した。
するとアブー・フライラは「それ（開扉章）をただ心の中で唱えなさい」と答えて、さらにこういった。
「なぜならば私はアッラーの使徒の次のような言葉を聞いているからです。
『至高なるアッラーは申された。われ（アッラー）は礼拝の言葉をわれとわが下僕（ムハンマド）の間で二部に分けた。かくしてわが下僕には彼が求めるものがよく叶えられるであろう。
さて下僕が「万世の主アッラーに讃あれ」と言えば至高なるアッラーは“わが下僕われを讃えたり”という。
下僕が「慈悲深く慈愛あまねく」といえば至高なるアッラーは“わが下僕われを讃美したり”という。
「最後の審判の日の主催者」といえば“わが下僕われを称讃せり”という。
また時には“わが下僕われに全てを委ねたり”という。

「あなたをのみ崇拝しあなたにのみ助けを請い願う」といえば“これこそわれとわが下僕の間の関係なり。
わが下僕には求めるものが叶えられん”という。
「我等を直き道に導きたまえ、あなたが祝福した人々の道に、あなたのお怒りをこうむった人々や迷える人々の道でなく」といえば“これこそわが下僕のため、彼が求めるものは叶えられん”という』」
伝承者の一人スフヤーンは次のように語った。
アラーウ・ビン・アブドル・ラフマーンはそれ（前述のハディースの内容）について私に語ってくれた。
その時私は彼を訪問中でしたが彼は病気で家にいました。
そこで私はそれについて彼に自ら尋ねたのでした。
アブー・フライラは伝えている
アッラーの使徒は「クルアーン開扉章を誦まないで礼拝を済ます者は……」と述べたが残りのハディースはスフヤーンの伝えたものと同一である。
そしてこの二人のハディースの中には次の言葉がある。
『至高なるアッラーはいった“われは礼拝の言葉をわれとわが下僕の間で二分せり、一方はわがため他方はわが下僕のためのもの”』
アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として、次のように伝えている
「開扉章を誦まず礼拝したとしてもその礼拝は不完全である」と三回繰り返して申された。
アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
「（クルアーン開扉章の）読誦なしにはいかなる礼拝も成立しない」
これについてアブー・フライラはさらに次のように述べた。
それで皆さんのために私はアッラーの使徒が声高に読誦した言葉（注1）については私も声高に読誦し、アッラーの使徒が小声で唱えた言葉（注2）については私も小声で唱えました。
（注1）一日五回の礼拝のうち日の出前の礼拝、日没後の礼拝、夜間の礼拝がこれに相当する
（注2）昼過ぎの礼拝と午後の礼拝がこれに相当する
アブー・フライラの言葉としてアターは次のように伝えている
礼拝に際して皆さんは各ラカートごとにクルアーンの開扉章を誦むべきである。
私はアッラーの使徒が皆さんにお聞かせした言葉についてはそれを聞きとれる声でお聞かせした。
またアッラーの使徒が小声で唱えた言葉については皆さんにも小声で唱えた。
すると一人の男がこう尋ねた。
「もし開扉章以外の章句の文言を何ら加えなかったとしたらその礼拝は不完全でしょうか」
そこでアブー・フライラは答えて言った。
「開扉章の外に他の章句を加えて誦む方がよい。
しかし開扉章の読誦だけで礼拝を終えたとしてもそれでも充分です」
アブー・フライラの言葉としてアターは次のように伝えている

礼拝に際して各ラカートごとにクルアーン第1章を誦むことは不可欠である。
私はアッラーの使徒が我々に聞き取れる声で聞かせた言葉については、皆さんにもその言葉を声高にお聞かせした。
そして彼が小声で唱えた言葉については私もそのように小声で誦んだ。
また開扉章を誦んだ者はそれで礼拝を済ませたことになります。
開扉章に加えて別な章句をよむならばさらに良いことです。
アブー・フライラは次のように伝えている
アッラーの使徒がモスクに入った。
つづいて一人の男がそこに入り礼拝した。
それから彼はアッラーの使徒の所にやってきて挨拶をした。
使徒は彼に挨拶をかえしてからこういった。
「もう一度戻って礼拝しなさい。あなたは礼拝していないのだから」
そこで男は戻り前のように礼拝した。
それから彼は使徒のところにやってきて再び挨拶をした。
使徒は彼に「あなたの上にこそ平安を」と挨拶をかえしてから「もう一度戻って礼拝しなさい、あなたは礼拝していないのだから」と今度は後段の文句を（強調して）三度繰り返した。
するとその男はこう言った。
「真実をたずさえてあなたを使わしたお方（アッラー）にかけて、私はこれ以上よくしようがありません。どうか私にお教え下さい」
使徒はこれに答えて次のように言った。
「あなたが礼拝のために立ち上った時はタクビールを唱えなさい。それからあなたが覚えている適切なクルアーンの章句をよみなさい。それから充分に頭を下げて屈身しなさい。それから上体を起して直立の姿勢に戻りその後しっかりと平伏しなさい。そして残りの礼拝作法もこのようにおやりなさい」
アブー・フライラは次のように伝えている
或る男がモスクに入り礼拝した。
この後につづくハディースは前記のハディースと同じだが以下の言葉だけが追加されている。
「あなたが礼拝のために立ち上る時はウドゥー（小浄）を完全に済ませなさい。それからキブラ（マッカの方向）に向って“アッラーは偉大なり”と唱えなさい」

イマームの背後の礼拝者に関して

イマーム以外は彼の背後で礼拝の言葉を大声で唱えることは禁じられていること
1巻　P.275-276

イムラーン・ビン・フサインは次のように伝えている
アッラーの使徒がズフル（昼過ぎ）の礼拝かまたはアスル（午後）の礼拝で我々を先導なされた時だった。
それが終ると彼は誰が彼の背後で「いと高き汝（ムハンマド）の主の名を讃美せよ」（注）という言葉を声高によんだのかと尋ねた。
すると或る男がこう言った。
「私です　私は良かれと思ってそうしました」
そこでムハンマド様はこういった。
「私はあなたたちの誰かが故意に私の言葉尻をとらえようとしたと感じた（つまり声を出してよむべきではない）」
（注）クルアーン第87章第1節
イムラーン・ビン・フサインは次のように伝えている
アッラーの使徒はズフルの礼拝を先導していました。
すると彼の背後で誰かが「いと高き汝の主の名を讃美せよ」という言葉を声を出してよみ始めた。
礼拝が終るとムハンマド様は「あなたたちのうちの誰が（例の言葉を声高に）よんだのか」と尋ねた。
すると一人の男が「私です」と答えた。
それで預言者は「あなたたちの誰かが（私がよんでいた文章の）言葉尻をとらえようとしたと思いました」と語った。
このハディースは別の伝承者経路を経て次のように伝えられている
アッラーの使徒はズフルの礼拝を先導した後で「あなたたちのうちで誰かが（私がよんでいた言葉の）言葉尻をとらえようとしていたと感じた」と語った。

礼拝中の無声のバスマラに関して

預言者が、慈悲深く慈愛あまねきアッラーのみ名において（バスマラ）という言葉を声を出して誦まなかったとする人々の根拠
1巻　P.276-277

アナスは次のように伝えている
私はアッラーの使徒およびアブー・バクル（後に第一代カリフ）、ウマル（後に第二代カリフ）、ウスマーン（後に第三代カリフ）とともに礼拝したが彼等の誰一人からも「慈悲深く慈愛あまねきアッラーのみ名において」という言葉をよむ声を聞かなかった。
伝承者の一人シュウバは前記ハディースを次のような追加の言葉とともに伝えている
私はカターダに「あなたはそれをアナスから聞いたのか」と尋ねた。
すると彼は答えて「そうです、我々はそれについてアナスに尋ねた」と言った。
アブダはウマル・ビン・ハッターブが次の言葉を声を出して詠誦していたと伝えている
「あなたに栄光あれ、おおアッラー、称讃はあなたのもの、あなたの名前は神聖にして、あなたの尊厳はいと高し、あなた以外にはいかなる神もなし」
カターダは書面でアナス・ビン・マーリクが彼（カターダ）に次のように語ったとしてアブダに伝えている。
私（アナス）はアッラーの使徒とアブー・バクル、ウマル、ウスマーン等の背後で礼拝しました。
彼等はいきなり「称讃はアッラーにのみ、万世の主」（開扉章）…」と声を出して詠唱し始めたがこの詠唱の後でも前でも「慈悲深く慈愛あまねきアッラーのみ名において」という言葉を声を出して唱えることはなかった。
イスハーク・ビン・アブドッラーは彼がアナス・ビン・マーリクから前記と同じハディースを聞いたと伝えている。

バスマラは聖典の一部、に関して

バスマラ（アッラーのみ名において…）はクルアーン第9章「改俊の章」を除いては各章の一部分であると主張する者の根拠
1巻　P.277-279

アナスは次のように伝えている
或る日アッラーの使徒は我々と一緒に座っていた。
彼はほんの一時居眠りをしてそれからほほえみつつ頭を上げた。
そこで我々は「アッラーの使徒よ、何故あなたは笑ったのですか」と尋ねた。
すると彼は答えて「今丁度私に1章の啓示が下ったところです」と言ってそれを詠唱した。
「アッラーのみ名において、慈悲深く慈愛あまねき御方、われ（アッラー）は汝（預言者）にカウサルを与えたり、されば汝の主のために礼拝し、犠牲を奉納せよ、まこと汝の敵は恩恵に見放されたる者よ」（クルアーン第108章）
それから預言者は「あなたたちは“カウサル”とは何か知っているか」と尋ねた。
我々は「アッラーとその使徒のみがそれを知っている」と答えた。
ムハマンド様はそれを説明して次のように語った。
「“カウサル”とは至高にして尊厳に満ちたアッラーが私に約束された（天国の）川の名前でそこには恵みがたくさんある。
それは一種の巨大な貯水槽で審判の日には信徒達が水を飲みにやってくる。
またそこには大型コップが星の数程もある。
一人の信徒がそこに集まっている人々の群から引き離されようとしている（注）。
そこで私（ムハンマド）は『我が主よ、彼は私の信徒のうちの一人です』というと、主は答えて『汝はあの者が汝のなき後（かってに）イスラームに附加物を加えたことを知らないのだ』と仰せられる」
ところでイブン・フジュルはこのハディースについて次のような補足表現を加えている。
「預言者は我々とともにモスクの中に座っていた、主は『汝は汝なき後その者が捏造したところのもの（ビドア）を知らないのだ』と仰せられた」
（注）未来の出来ごとであろうがそれをあたかも眼前で起こっている如く描いてみせる独特な手法
ムフタール・ビン・フルフルはアナス・ビン・マーリクより聞いたとして次のように伝えている
「アッラーの使徒は一時まどろんだ」
その後につづく残りのハディースは以下の表現上の相違を除いて前記ハディースと同じである。
「それ（カウサル）とは至高にして尊厳に満ちた我が主が天国において私のために約束された川でそれに面して貯水槽がある」
だが彼（アナス）は「そこに大型のカップが星の数程もある」ことについては言及していな

礼拝中の両手の配置について

礼拝最初のタクビール（イヘラームのタクビール）の後は胸とおへそとの間の位置で左手首の上に右手首を軽く載せる姿勢をとること
また平伏の際には両手を両肩の位置のところで地面につけること
1巻　P.279

ワーイル・ビン・フジュルは預言者の次の動作を目撃したと伝えている
アッラーの使徒は礼拝に入る際に両手を上げタクビールを唱え（その時の手の位置はハンマームの伝えるところによれば両耳の高さまでである）それから彼（預言者）は両手を自分の着物で包み、左手首の上に右手首を載せた。
また彼は屈身礼に入る際には両手を着物の中から出し、両手を上げそれからタクビールを唱えて屈身礼をした。
それから直立の姿勢に戻る時に「アッラーは彼を讃美した者の声を聞き給う」と唱えて両手を上げ、その後平伏した際には広げた両手のひらの間で額ずき平伏礼をした。

タシャッフドの言葉について

礼拝におけるタシャッフド（証言儀礼）の言葉について（注）
（注）この言葉は二ラカートの礼拝を終えた後に座ったまま唱えられる。または最後の正座礼の際にも唱えられる
1巻　P.279-283

アブドッラー・ビン・マスウードは次のように伝えている
我々がアッラーの使徒の背後で礼拝していた時、我々は次の言葉を唱えたものでした。
「アッラーに平安を！　誰々に平安を！」
すると或る日のことアッラーの使徒は我々に「アッラーこそ平安そのものではないのか！」と仰せられ、あなた達の誰でも礼拝の際に正座の姿勢に移った時には次のように唱えるべきであると指示された。
「全ての勤言と勤行と良きものはアッラーのもの、預言者よ、平安とアッラーの慈悲と祝福があなたの上に、平安はまた我々とアッラーの誠実な下僕達（信徒）の上にもありますように！」
ここで預言者は「もし誰かがこれ（前記末尾の言葉）を唱えればそれは天地の真正な各信徒への祈りとして聞き届けられるであろう」と仰せられたがさらにつづけて次の言葉を唱えるべきであるとして指示した。
「私はアッラーを除いていかなる神も存在しえないことを証言する、そしてまたムハンマドがアッラーの下僕であり使徒であることを証言する」
そしてその後は礼拝者が自ら好む祈願の言葉を選んでそれを唱えればよいと預言者は指示された。
伝承者の一人シュウバはマンスールから伝聞したとして前記と同様のハディースを伝えている。ただし彼は“その後は礼拝者が自ら好む祈願の言葉を選んでそれを唱えればよい”という最後の一文には言及していない。
このハディースはマンスールからの伝聞として別の伝承者経路を経て前記二つのハディースと同様に伝えられている。
しかしマンスールはこのハディースの末尾で“その後は礼拝者に自ら好み欲する祈願文の言葉を選ばしめよ”として末段の一文に言及している。
アブドッラー・ビン・マスウードは次のように伝えている
「我々は礼拝中で預言者と一緒に座っていた」
残りのハディースについては先の（マンスールの伝えた）ハディースと同一である。
ただしアブドッラーはこのハディースの末段では"それから礼拝者は自分の好きなドアー（祈願文）を捧げてよい"としている。
イブン・マスウードは次のように伝えている
アッラーの使徒は丁度クルアーンの1章を教える時のように彼の両手のひらで私の手を握りしめながらタシャッフドの言葉を私に教えて下さった。

そしてイブン・マスウードはタシャッフドの言葉を前記のハディースの中で皆が語ったように語った。
イブン・アッバースは次のように伝えている
アッラーの使徒は丁度我々にクルアーンの一章を教えるようにタシャッフドの言葉を次のように教えたものだった。
「全ての祝福に満ちた勤言と勤行と良きものはアッラーのもの、おお預言者よ、平安とアッラーの慈悲と祝福があなたの上に、平安はまた我々とアッラーの誠実な下僕達の上にも、私はアッラーの他にいかなる神も存在しないと証言する、また私はムハンマドがアッラーの使徒であることを証言する」
ところで伝承者の一人イブン・ルムフの伝えるところでは単に“クルアーンを我々に教えたように…”と表現されている。
イブン・アッバースは次のように伝えている
かつてアッラーの使徒はクルアーンの一章を教えるようにタシャッフドを教えてくれたものです。
ハッターン・ビン・アブドッラー・ラカーシーは次のように伝えている
私はアブー・ムーサー・アシュアリーと一緒に礼拝していました。
そして彼（イマームとしてのアシュアリー）がキアダ（正座礼）に移った時、人々のうちの誰かが「礼拝は敬虔さとザカート（喜捨）との組合わせで命じられたものだ」といった。
さてアブー・ムーサーは左右のタスリーム（礼拝最後の挨拶儀礼）を終えて礼拝を済ませると人々の方に向き直ってこういった。
「あなた達のうちの誰が一体かくかくしかじかの言葉を口にしたのか」
ところが人々は沈黙したままだったので彼は重ねて「あなた達のうち誰が一体かくかくしかじかの言葉を口にしたのか」と尋ねた。
しかし人々は押し黙ったままだった。
そこで彼は「やー、ハッターン、ひょっとしたらあなたがいったのではないのか」と尋ねた。
ハッターンはこれに対して「いいえ私はいっていません、このことであなたが私を非難するのではないかと秘かに恐れていたところです」と答えた。
すると一人の男が「私がいいました、良かれと思って私がいいました」といった。
そこでアブー・ムーサーは次のように語った。
あなたたちは礼拝の際にどういうべきか知らないのですか、まことにアッラーの使徒は我々に説教されて我々のとるべき道を明らかにし我々に礼拝の仕方を教えて下さったはずだ。
それによれば預言者は次のようにいっている。
「礼拝に際しては、まずあなた達の人列をまっすぐにしなさい。
それからあなた達の内の一人をあなた達を先導するイマームとしなさい。
そして彼がタクビールを唱えたらあなた達もタクビールを唱えなさい。
彼が「……あなたのお怒りをこうむった人々のそれでなくまた迷える人々のそれでもなく（注）」といったら、あなた達は『アーミーン』と唱えなさい。

そうすればアッラーはあなた達にお答えになるだろう。
そして彼がタクビールを唱えて屈身礼をした時にはあなた達もタクビールを唱えて屈身礼をしなさい。
その際にイマームはあなた達より先に屈身してまた頭を上げます。
またイマームのそれぞれの動作の間の取り方と後につづくあなた達の間の取り方は時間的に等しくなければならない。
さらに彼が『アッラーは彼を讃美する者の声を聞き届け給う』といった時はあなた達は『おおアッラー、我等が主にこそ称讃が』と唱えなさい。
きっとアッラーはあなた達の声を聞いているでしょう。
なぜならば自ら至福にして至高なるアッラーは自らの預言者（ムハンマド）の口を借りて『アッラーは彼を讃美する者の声を聞き届け給う』といったからである。
それから彼（イマーム）がタクビールを唱えて平伏した時にはあなた達もそれにつづいてタクビールを唱えて平伏しなさい。
その際イマームはあなた達より先に平伏しそして頭を上げる。
また先行するイマームの動作の間の取り具合と彼につづくあなた達の間の取り具合は時間的に等しいことは当然である。
それからイマームがタシャッフドを唱えるために正座の姿勢になった時、あなた達の誰もが最初に唱えるべき言葉は次の通りである。
『全ての勤言と勤行と良きものはアッラーに属します。
おお預言者よ、あなたの上に平安が、そしてアッラーの慈悲と祝福がありますように。
我々の上にもそしてまたアッラーの誠実な下僕達の上にも平安がありますように、私はアッラーを除いていかなる神も存在しないことを証言します。
またムハンマドがアッラーの下僕でかつ彼の使徒であることを証言します』」
（注）クルアーン第1章の最後の言葉
カターダは同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。
スライマーンからの伝聞としてジャリールが伝えたハディースの中でカターダは次のような追加表現を加えている。
「もしイマームがクルアーンを誦んでいる時はあなた達はただ黙って聞いていなさい」
また次の言葉はアブー・アワーナから聞いたというアブー・カーミルの伝承を除いて他の誰のハディースにもみられない。
それは「なぜなら自ら至福にして至高なるアッラーは預言者の口を借りて"アッラーは彼を讃美する者の声を聞き届け給う"といったのだから」という一文である。
ところでアブー・イスハーク（イマーム・ムスリムの弟子）はアブー・ナドルの姉妹の息子のアブー・バクルがこのハディースについて批判的に議論したと語っている。
その時イマーム・ムスリムは「あなたはスライマーンよりも信頼に足るハディース伝承者が他に儲かいると思いますか」と尋ねたしするとアブー・バクルはイマーム・ムスリムに「アブー・フライラによって伝承されたハディースはどうでしょうか、つまり真正とされている“クルアーンが

礼拝中に誦まれている時はあなた達はただ黙って聞き入りなさい”という一文はどうか」と逆に質問した。
そこでイマーム・ムスリムは「それは私の見解でも真正ハディースである」と答えた。
するとアブー・バクルは「ではあなたは何故それを正伝集の中におさめなかったのか」と再び質問した。
するとイマーム・ムスリムはそれに答えて次のように語った。
「私は自分の見解で真正とするハディースの全てをこの正伝集におさめたわけではありません。私は真偽の程は問わずハディース学者達が真正であろうと合意を見たハディースのみを選んで集成したのです」
このハディースは別の伝承者経路を経てカターダにより次のように伝えられたものである
まこと崇高にして栄光に満ちたアッラーは預言者の口を借りて“アッラーは彼を讃美した者の声を聞き届け給う”といえと命じた。

預言者への祝福に関して

タシャッフドの後で預言者に対し祝福すること
1巻　P.284-285

礼拝への呼びかけを夢で教えられたとされているアブドッラー・ビン・ザイドはマスウード・アンサーリーからの伝聞として次のように伝えている
アッラーの使徒が我々の所にやって来た時我々はサアド・ビン・ウバーダを囲んで座っていました。
それでバシール・ビン・サアドが預言者に尋ねました。
「アッラーの使徒よ、至高なるアッラーはあなたを祝福するように我々に命じました（クルアーン第13章56節）がさてどのようにしてあなたを祝福したらよいのでしょうか」
するとアッラーの使徒はしばらく黙り込んでしまった。
それで我々は尋ねなければよかったと思った程でしたがやがてアッラーの使徒は次のように唱えなさいといった。
「おおアッラー、ムハンマドとムハンマドの一族（誠実な彼の追随者も含む）を祝福したまえ、ちょうどあなたがイブラヒーム（アブラハム）の一族を祝福した如く、ムハンマドとムハンマドの一族に恵みを垂れたまえ、ちょうどあなたが万世においてイブラヒームの一族の者に恵みを垂れたもうた如く、まことにあなたは称讃に値し栄光に満ちたお方です」
これにつづいて預言者は次のようにいった。
「その後は皆さんも知っている左右の挨拶（タスリーム）が来ます」
イブン・アブー・ライラは次のように伝えている
カアブ・ビン・ウジュラは私に会い「あなたにちょっとした贈物（注）をさしあげましょうか」と言って次のように語った。
アッラーの使徒が我々の所にやって来た。
そこで我々は彼に次のように尋ねた。
「あなたの上に平安をいかに祈願するかは既に承知していますが、あなたを祝福するにはどうしたらよいのでしょうか」
すると預言者は次のように唱えなさいといった。
「おおアッラー、ムハンマドとムハンマドの一族を祝福したまえ、ちょうどあなたがイブラヒームの一族に祝福された如く、まことにあなたは称讃に値し、栄光に満ちたお方であります。おおアッラー、ムハンマドとムハンマドの一族に恵みを垂れたまえ、ちょうどあなたがイブラヒームの一族に恵みを垂れたもうた如く、まことにあなたは称讃に値し、栄光に満ちたお方です」
（注）物質的なプレゼントではない。ここでは貴重な以下のハディースのこと、つまり知識
同様のハディースがハカムからの伝聞としてミスアルによって伝えられている。
しかしミスアルのハディースには「あなたにちょっとした贈物をさしあげましょうか」の一文はない。

同様のハディースがハカムによっても伝えられている。
しかしここでは彼は"ムハンマドに祝福あれ"とは語ったが"おおアッラー"という句をはぶいている
。
アブー・フマイド・サーイディーは次のように伝えている
彼等（教友達）はアッラーの使徒に彼をいかようにして祝福すべきかを尋ねました。
それに答えて使徒は次のように唱えよといった。
「おおアッラー、ムハンマドと彼の妻達及び子孫達を祝福したまえ、以前あなたがイブラヒームの一族を祝福した如くに、またムハンマドと彼の妻達及び彼の子孫達に恩賜を与えたまえ、以前にあなたがイブラヒームの一族に恩賜を与えた如く、まことにあなたは称讃に値し栄光に満ちたお方です」
アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
私に対して一回祝福した者にはアッラーがその者に十回祝福されよう。

タスミーウとタフミードに関して

タスミーウ（アッラーは彼を誇える者の声を聞き届けたもうと唱える言葉）と
タフミード（おお我等が主よ、称讃はあなたにのみと唱える言葉）と
ターミーン（アーミーンと唱えること）について
1巻　P.285-287

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉を次のように伝えている
イマームが「アッラーは彼を讃える者の声を聞き届けたもう」といったならば皆さんは「おお我等が主よ、称讃はあなたにのみ」といいなさい。
なぜならば彼の発声が天使達の発声に同調する時、その者の過去の罪は許されるからです。
同様のハディースがアブー・フライラによって別の伝承者経路を経て伝えられている。
アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉を次のように伝えている
イマームが「アーミーン（注）」と唱えたならばあなたたちも「アーミーン」と唱えなさい。
なぜならば彼のターミーン（アーミーンと唱えること）が天使達のターミーンと同時に唱和する時、その者の過去の罪は許されるからである。
（注）キリスト教ではアーメンという。「本当に、確かに」の意で、礼拝用語として言葉の末につける
前記ハディースはアブー・フライラから別の伝承者経路を経ても伝えられている。
アブー・フライラはアッラーの使徒から次の言葉を聞いたとして伝えている
礼拝の際にあなた達の誰かが「アーミーン」と言い、天上の天使達もまた「アーミーン」と言えば一方が他方に同調します。
こうした場合その者の過去の罪は許されるでしょう。
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
あなた達の誰かが「アーミーン」といい、天上の天使達もまた「アーミーン」といえば一方が他方に同調します。
こうした場合その者の過去の罪は許されます。
また別の伝承者経路で同様のハディースが伝えられている。
アブー・フライラは次のようなアッラーの使徒の言葉を伝えている
読誦者（イマーム）が「あなたのお怒りをこうむった人々のそれではなく、また迷える人々のそれでもなく」（クルアーン第1章末尾の言葉）といったならば彼の背後の参列者は「アーミーン」と唱えます。
すると彼の発声は天の住民の発声に同調することになり、彼の過去の罪は許されるでしょう。

礼拝者はイマームに従う、について

礼拝者はイマームの作法に厳格に従うことべき
1巻　P.287-289

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている
預言者が落馬して彼の右半身にかすり傷を負った時だった。
我々は彼の所に見舞に行ったがその時礼拝の時刻となった。
それで彼は座ったままの姿勢で我々の礼拝を先導したので我々もまた座ったまま彼の背後で礼拝を済ませた。
礼拝が終ると彼は次のように語った。
「イマームがタクビールを唱えたらあなた達もタクビールを唱えなさい。
イマームが平伏したらあなた達も平伏しなさい。
イマームが頭を上げたならばあなた達も頭を上げなさい。
『アッラーは彼（アッラー）を讃美する者の声を聞き届け給う』とイマームがいったならばあなた達は『我等が主よ、称讃はあなたにのみ』と唱えなさい。そしてイマームが座って礼拝する時はあなた達も皆座って礼拝しなさい」
アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーの使徒が落馬してかすり傷を負った。
それで彼は座ったまま我々の礼拝を先導された。
以下は前記ハディースと同じである。
アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーの使徒は落馬して右半身にかすり傷を負った。
残りのハディースは前記の二つのハディースと同じである。
ただし次のこの節が加えられている。
“彼（イマーム）が立った姿勢で礼拝した時にはあなた達も立った姿勢で礼拝しなさい”
アナスは伝えている
アッラーの使徒は乗馬したが落馬して右半身にかすり傷を負った。
以下は前記ハディースと同じである。
また次のような前記の一節もみられる。
"彼（イマーム）が立った姿勢で礼拝した時にはあなた達も立った姿勢で礼拝しなさい"
アナスは伝えている
アッラーの使徒は落馬して右半身にかすり傷を負った。
残りのハディースは前記のハディースと同じであるがここでは（ユーヌス及びマーリクによって伝えられた）前記の追加語句はみられない。
アーイシャは次のように伝えている
アッラーの使徒が病気で苦痛を訴えていた。

そこで教友達の一部が見舞にやって来た。
その時アッラーの使徒は座ったまま礼拝の言葉を唱えられたが彼等は彼の背後で立って礼拝の言葉を唱えていた。
すると預言者は彼等に座るように指示したので彼等は座りました。
礼拝が終ると彼は次のように語りました。
「礼拝中のイマームには従わねばなりません。
彼が屈身した時はあなた達も屈身しなさい。
彼が頭を上げた時にはあなた達も頭を上げなさい。
そして彼が座ったまま礼拝する時はあなた達も座ったままましなければならない」
このハディースは前記ハディースの内容と同じであるが別の伝承者経路を経て伝えられている。
ジャービルは次のように伝えている
アッラーの使徒は病気で苦痛を訴えていた。
そこで彼は座ったままで、また我々は彼の背後で礼拝することになった。
そしてアブー・バクルは彼（預言者）のタクビールを後方の人々に伝える役目をした。
すると預言者は我々の方を振り返り我々が立って礼拝している姿をみたので彼は我々に座るように手振りで指示した。
そこで我々は彼の礼拝に合わせて座ったまま礼拝した。
それから彼はタスリームを唱えて礼拝を終えた時に次のようにいった。
「あなた達は先ほどはペルシャ人やビザンチン人の行動をとるところでした。
彼等は王達の座っている前で立っていますがそのような行動をとってはなりません。
あなた達のイマームの行動に従いなさい。
もしイマームが立って礼拝する時はあなた達もそうすべきだしまたイマームが座って礼拝する時はあなた達も座ったまま礼拝の言葉を唱えるべきです」
ジャービルは次のように伝えている
アッラーの使徒は礼拝を先導された。
この時アブー・バクルは預言者のすぐ後にいて彼がタクビールを唱えるとそれを後方の我々に聞こえるように伝える役目をつとめた。
この後の残りのハディースは前記ハディースと同じものである。
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
あなた達はイマームの礼拝作法に従うべきである。
彼と違った行動をとってはならない。
彼がタクビールを唱えた時はあなた達もタクビールを唱えなさい。
彼が屈身した時にはあなた達も屈身しなさい。
彼が「アッラーは彼を讃美する者の声を聞きとどけ給う」といえばあなた達は「おおアッラー、我等が主、あなたにこそ称讃が」と唱えなさい。
そして彼が平伏する時はあなたたちも平伏しなさい。
彼が座ったまま礼拝する時はあなた達も全員座ったまま礼拝しなさい。

同様のハディースが別の伝承者経路によって伝えられている。

イマームに先行せぬことに関して

タクビールその他の礼拝作法でイマームに先行してはならないこと
1巻　P.289-290

アブー・フライラはアッラーの使徒が教えた言葉として次のように伝えている
イマームに先行してはならない。
彼がタクビールを唱えた後につづいてあなた達もタクビールを唱えなさい。
また彼が「……踏み迷える人々のそれ（道）でなく」（注）と誦んだ後につづいてあなたたちは「アーミーン」と唱えなさい。
彼が屈身した後につづいてあなたたちも屈身しなさい。
彼が「アッラーは彼を讃美する者の声を聞きとどけ給う」と唱えた後につづいてあなたたちもこう唱えなさい
「おおアッラー、我等が主、あなたにこそ称讃が」
（注）クルアーン第1章の最後
アブー・フライラは預言者の言葉として同様のハディースを別に伝えている。
ただしここではイマームの「踏み迷える人々のそれ（道）でなく」という言葉につづいてあなたたちは「アーミーン」といいなさいという一節の後に"また彼（イマーム）より先に決して頭を上げてはならない"という一文を加えている。
アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
まことイマームは盾のようなもの（背後の礼拝者の過失を守る意）。
彼が座ったまま礼拝する時はあなた達も座ったまま礼拝しなさい。
彼が「アッラーは彼を讃美する者の声を聞きとどけ給う」と唱えたらあなたたちは「おおアッラー、我等が主、あなたにこそ称讃が」と唱えなさい。
なぜならば地上の住人の言葉が天上の住人（天使）の言葉に同調するならば地上の住人の過去の罪は消滅するからです。
アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
まことイマームには従わねばならぬ。彼がタクビールを唱えたならあなた達もタクビールを唱えなさい。
彼が屈身したらあなたたちも屈身しなさい。
彼が「アッラーは彼を讃美する者の声を聞きとどけ給う」と唱えたらあなた達は「おおアッラー、我等が主、あなたにこそ称讃が」と唱えなさい。
また彼が立って礼拝するならばあなた達も立って礼拝しなさい。
彼が座って礼拝するならばあなた達も皆座って礼拝しなさい。

イマームの代行者に関して

病気、旅行その他の正当な理由によりイマームは彼の代行者を指定できること、
立つことが不能なためイマームが座って礼拝する場合に一般信徒は不能でない限り立って礼拝すべきこと、
座ったままのイマームの背後ではたとえ立つことが出来る者であっても座ったまま礼拝すべしとする規定は後に別のハディースによって破棄されたこと
1巻　P.290-298

ウバイドッラー・ビン・アブドッラーは次のように伝えている
私はアーイシャを訪ねて、彼女にアッラーの使徒の病状について尋ねた。
彼女は預言者の病状は重体であると答えた。
ところで預言者が人々は礼拝を済ませたかどうかを尋ねたので我々は次のように答えた。
「アッラーの使徒様、人々は皆あなたを待っています」
すると彼は風呂桶に水を用意するよう命じたのでそれを用意すると彼は全身沐浴した。
それから苦しそうに動きだそうとしたがそこで彼は（高熱のため）失神してしまった。
その後しばらくして意識をとりもどした時彼は人々が礼拝を済ませたかどうかまた尋ねた。
そこで我々は次のように答えた
「いいえ、アッラーの使徒様、人々は皆あなたを待っています」
すると彼は再び風呂桶に水を用意するよう命じた（注1）。
我々がそれを用意すると彼は再びそれで全身沐浴した。
それから苦しそうに動き出そうとしたがそこでまた彼は気を失ってしまった。
しばらくして意識をとり戻すと彼は人々が礼拝を済ませたかどうか再び尋ねた。
そこで我々は「彼等は皆あなたを待っています」と答えた。
すると彼はもう一度風呂桶に水を用意するよう命じたので我々はそれを用意した。
それで彼は全身沐浴をしてそれから苦しそうに動き出そうとしたがまたまた失神してしまった。
しばらくして意識をとり戻すと彼は人々が礼拝を済ませたかどうか再度尋ねたので我々は「皆あなたを待っています」と答えた。
アーイシャはつづけて次のように語りました。
人々はアッラーの使徒が最後のイシャーの礼拝（夜間の礼拝）を先導されるものとモスクに詰めて待っていました。
そこでアッラーの使徒は使者を遣わしてアブー・バクル（アーイシャの実父でもある）に礼拝の先導を命じた（注2）。
使者が彼（アブー・バクル）にアッラーの使徒が人々を率いて彼に代って礼拝の先導をつとめるよう命じたことを口上するとアブー・バクルは繊細な神経の持主でしたので「ウマル（後に第二代カリフ）よ、あなたが人々を率いて礼拝を先導して下さい」と言った。
するとウマルはこう答えた。

「いいえ、あなたこそそれにふさわしい人です」
アーイシャはさらにつづけて次のように伝えている。
そこでアブー・バクルはそれらの日々（預言者が重病に伏した日々）の間、人々を率いて礼拝を先導することになった。
それからアッラーの使徒は少し気分が良くなったのでアッバースともう一人の男に支えられながらズフル（正午過ぎ）の礼拝に赴いた。
その時アブー・バクルが人々を率いて礼拝を先導している最中でした。
それからアブー・バクルは預言者に気が付いて後方に引き下がりはじめた。
すると預言者は身振りでアブー・バクルに引き下がらないよう合図してお付の二人には「私をアブー・バクルの脇に座らせてくれ」といった。
そこで二人は預言者をアブー・バクルの脇に座らせた。
その時アブー・バクルは立ったままだったが預言者の礼拝（イマームとしての）の言葉に従って礼拝していた。
一方人々はアブー・バクルの礼拝（イマームとしての）の言葉に従ってやはり立ったまま礼拝していた。
預言者はその間座ったままでした。
さらにウバイドッラーは次のように伝えている。
私がアブドッラー・ビン・アッバースを訪ねた時に私は彼にこういいました。
「アーイシャが私に預言者の病気について話してくれたことをあなたにお伝えしましょうか」
すると彼（アブドッラー）は「（話を）つづけてくれ」といったので私はアーイシャのハディースを彼に伝えた。
彼はこのハディースについて何も否定的な言葉をはさまなかったが、ただ彼は次のような質問をした。
「アッバースと一緒にいたもう一人の男の名前をアーイシャはあなたにいわなかったか」
そこで私が「はい、いいませんでした」と答えると彼はこういった。
「それはアリーです（注3）」
（注1）失神すると礼拝に臨んで不可欠な清浄状態が無効になり全身沐浴をやりなおさなければならない。戻
（注2）初期イスラームにおけるイマームは単に宗教儀礼上のリーダーであるばかりか同時にまた世俗上のリーダーでもあるので預言者はイスラーム信仰共同体の聖俗両面の未来のリーダーとしての資質をアブー・バクルの中に認めていたことを意味する。戻
（注3）アーイシャは彼女の名誉にかかわる或る過去の事件に関連してアリーを極端に嫌っていたといわれている。
或いはアッバースが預言者の一方の身体を支え他方はアリー及びウスマーン・ビン・ザイド及びファドル・ビン・アッバースの三人が支えたので敢えてアリーの名前に言及しなかったという解説もある
アーイシャは次のように伝えている

アッラーの使徒が病気で最初に倒れたところはマイムーナ（預言者がめとった最後の妻）の家でした。
その時彼は「病気の間はアーイシャの家で療養をつづけたい」として他の妻達に了解を求めたので彼女達は彼にそうすることを許可した。
アーイシャはなおつづけて次のように伝えている。
それから預言者は一方の腕をファドル・ビン・アッバースの上にかけ他方の腕をもう一人の男の上にかけて礼拝のために家の外に出たが彼は衰弱していて両足を地面に引きずっていた。
この話に関してウバイドッラーは次のように語っている。
私はこのハディースをイブン・アッバース（アブドッラー）に語った。
すると彼は次のよう語った。
「アーイシャが名前をいわなかった男は誰だかわかりますか。実はそれはアリーなのです」
預言者の妻アーイシャは次のように伝えている
アッラーの使徒が病気で倒れ病が重くなった時彼は妻達に病気の問は私（アーイシャ）の家にとどまって療養してもよいかどうかの了解を求めた。
それで彼女達は彼にその許可を与えた。
それから彼は二人の男に支えられながら礼拝のために（アーイシャの部屋を）出たが衰弱しきって両足を地面に引きずっていた。
その時彼はアッバース・ビン・アブドル・ムッタリブともう一人の男によって支えられていた。
ウバイドッラーはこれについて次のように伝えている。
私はアーイシャが語ったハディースをアブドッラーに語った。
すると彼は「アーイシャがその名前を特定しなかった男とは誰か知っているか」と尋ねたので私は「知らない」と答えた。
するとイブン・アッバースは「それはアリーでした」と語った。
預言者の妻アーイシャは次のように伝えている
私はアッラーの使徒にそのこと（アブー・バクルを病気中の預言者のイマーム代行として指名すること）について思い止まるよう説得を試みた（注）。
私が何度も預言者を説得して思い止まらせようとした理由は（その時）人々が預言者なき後に彼を代行する人物を望んでいるなどとは決して思いもよらなかったからであり、またもし誰かが代行すれば人々は必ずそのことで（預言者の死期が近いことを感じとって）不吉に思うだろうと私が考えたからです。
だから私はアッラーの使徒がアブー・バクルを彼のイマーム代行に指名することを思い止まって欲しかったのです。
（注）アーイシャは実父アブー・バクルが預言者の代理人になればイスラーム教団国家の元首としての重責にともないさまざまな心労と困難が予想されるので親を思う娘心から前もってかかる重圧から免責してもらおうと考えた
アーイシャは次のように伝えている
アッラーの使徒が病気で倒れて私の家に来た時、彼はまわりの人々に次のように命じた。

「アブー・バクルに人々の礼拝を先導するように頼みなさい」
私はそこで次のように申し上げた。
「アッラーの使徒様、アブー・バクル（彼女の実父）は繊細な神経の持主でクルアーンを誦む時に涙が止まらない程です。だから（荷が重過ぎるので）他の誰かを任命された方がよろしゅうございます」
私（アーイシャ）は最初にアッラーの使徒の地位を代行する者を人々がきっと不吉に思うと考え（実父の）アブー・バクルがそうした立場に立つことをアッラーに誓って心から嫌っていたので二回も三回も預言者にアブー・バクルの任命を思い止まるよう説得した。
すると預言者は次のように申されてお叱りになった。
「アブー・バクルに人々の礼拝の先導をさせなさい。
まことにお前達女は預言者ユースフをとり囲んだ女達のようだ（注）」
（注）アブー・バクルに対する代理任命は原理原則の問題であるにもかかわらず、このことで女性が口出しをして男の心を意のままにしようとしているのはいけませんの意か
アーイシャは次のように伝えている
アッラーの使徒の容体が重くなった時ビラールがやって来て彼に礼拝時刻の到来を知らせた。
すると預言者はまわりの人々に向って彼に代わって人々の礼拝を先導するようアブー・バクルに命じなさいといった。
そこで私（アーイシャ）は次のようにいいました。
「アッラーの使徒様、アブー・バクルは繊細な神経の持ち主ですのであなたの代行をするとなるとあまりのことで（蚊細い声になり）人々は彼の声を聞きとれなくなるでしょう。
ですからウマルに命じた方がよろしゅうございます」
すると預言者は再びアブー・バクルが代って礼拝を先導するよう人々に命じた。
そこで私はハフサ（ウマルの娘で預言者の妻の一人）に私の意向としてアッラーの使徒に次のように進言するように頼んだ。
「アブー・バクルは繊細な神経の持主なのであなた（預言者）の代行をするとなるとあまりのことで萎縮してしまい人々は彼の声を聞きとれなくなるでしょう。
ですからウマル（ハフサの実父）にお命じになった方がよろしゅうございます」
するとアッラーの使徒は次のようにいってお叱りになった。
「お前達女性はまこと預言者ユースフのとりまきの女達と同じようなことをする。
アブー・バクルに礼拝の先導をさせなさい」
そこでアブー・バクルは遂に礼拝の先導を引き受けさせられることになった。
こうして礼拝が始まるとアッラーの使徒は少し気分が良くなった。
そこで彼は起き上がり二人の男に支えられながら礼拝に向かったが衰弱のために大地に両足を引きずっていた。
彼がモスクの中に入って行くとアブー・バクルはその気配を感じて席をゆずって後方に引きさがろうとした。
しかしアッラーの使徒は“そのままでよい”と手で合図しつつアブー・バクルの左側にやって来てそ

こに座った。
こうして預言者は座ったまま礼拝を先導しアブー・バクルは立った姿勢で預言者の礼拝に従い、そして後方の人々はアブー・バクルの礼拝に従った。
アアマシュは別の伝承者経路によって同様なハディースを伝えている。
ところでアッラーの使徒がそれがもとで他界することになった病気で倒れた時伝承者の一人、イブン・ムスヒルの語る所によれば次のようになる
「預言者は彼（アブー・バクル）の脇に連れてこられてそこに座らせられた。
そして預言者は人々を先導して礼拝したが、その際アブー・バクルは後方の人々に聞こえるようにタクビールを伝えた」
またイーサーの語るところによれば次のようであった。
「そして預言者は座り人々を先導して礼拝した。
その際にアブー・バクルは彼の脇にいて後方の人々にタクビールを聞こえるように伝えた（注）」
（注）以上のハディースは前出の礼拝者はイマームの作法に従うべきことというハディースにみられる規定のうちでイマームが座って礼拝する場合は一般信徒も座って礼拝すべしとする規定を廃棄している
アーイシャは次のように伝えている
アッラーの使徒は彼が病気の間アブー・バクルに人々の礼拝を先導するように命じた。
そこでアブー・バクルは人々を先導して礼拝した。
さらにその後の出来事はウルワが次のように伝えている。
アッラーの使徒は少し気分が良くなったので床を離れてモスクに出かけた。
その時アブー・バクルは人々を導いて礼拝中でしたが預言者の姿を見て後方に引きさがりはじめた。
するとアッラーの使徒はもとの位置に戻ってよいと手振りで合図した。
それからアッラーの使徒はアブー・バクルの脇に並んで座りました。
こうしてアブー・バクルはアッラーの使徒の礼拝に従って礼拝し、人々はアブー・バクルの礼拝に従って礼拝したのでした。
アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている
アブー・バクルはアッラーの使徒が病床にある間人々を導いて礼拝していた。
預言者が他界した月曜日もそうでした。
人々は礼拝のために整列していました。
その時アッラーの使徒はアーイシャの部屋のカーテンを開けて私達の方を見ました。
彼はそこに立っていましたが顔はクルアーンの一頁のように光り輝いていました。
それからアッラーの使徒は楽しそうに微笑された。
私達は礼拝の途中でしたが、アッラーの使徒が我々の所に出てこられたことで喜ぶあまり混乱しました。
アブー・バクルはアッラーの使徒が礼拝のために出てこられると思って、人々と同列に引きさが

って礼拝すべく踵を用いて後ずさりをした。
しかしアッラーの使徒は人々に向って“あなた達の礼拝を最後までつづけよ”と手振りで合図した。
それからアッラーの使徒は部屋に入りカーテンをおろされた。
そしてその日のうちにアッラーの使徒は他界された。
ところでアナスは次にように伝えている。
私がアッラーの使徒を最後に見たのは月曜日で彼がカーテンを開けた日でした。
ところで前記のハディースの方がより完璧で完結していることは明らかである。
同様のハディースが別の伝承者経路を経てアナス・ビン・マーリクからの伝聞として伝えられている。
ただしここでは「それは月曜日だったが…」とある。
アナスは次のように伝えている
アッラーの預言者は三日間我々の前に顔を出さなかった。
礼拝がまさに始まろうとしていた時アブー・バクルは礼拝を先導するために一歩前に進み出ようとしていた。
その時アッラーの預言者がカーテンを上げた。
我々にはアッラーの預言者の顔がはっきりと見えたがそれは今までに我々が見たこともない程お慕わしいご尊顔でした。
さて預言者はアブー・バクルにそのまま一歩前に進み出るよう手振りで指示し、それからカーテンをおろした。
その後我々は彼が他界するまでそのお姿を見ることはなかった。
アブー・ムーサーは次のように伝えている
アッラーの使徒は病気になり容体が重くなった時こう言った。
「アブー・バクルに命じて人々の礼拝を先導せしめなさい」
するとアーイシャはこう言った。
「アッラーの使徒様、アブー・バクルは感じやすい男です。
あなたの立つべき場所に立ったとしても（あまりの悲しみのあまり）彼は人々を先導して礼拝をすることができないでしょう」
すると預言者は次のように仰せられた。
「アブー・バクルに命じて人々の礼拝を先導せしめよ。
まことにお前達女性は預言者ユースフをとりまいた女達のようだ」
かくしてアブー・バクルはアッラーの使徒の存命中に人々の礼拝を先導したわけである。

イマームが遅れたときに関して

もしイマームが遅れた場合、人々は別のイマームを立てることができる、
ただしそのことによって何かもめごとが起る恐れがある場合は別である
1巻　P.298-300

サハル・ビン・サアド・サーイディーは次のように伝えている
アッラーの使徒はアムル・ビン・アウフ一族のもとに彼等の間のもめごとの調停を計るべく出かけて留守だったが丁度礼拝の時刻となった。
そこでムアッジン（礼拝告知人）がアブー・バクルの所にやって来て次のようにいった。
「あなたが人々の礼拝を先導なさいますか。
先導するのであれば私はイカーマ（礼拝直前の小アザーン）を詠唱します」
そこでアブー・バクルは「先導する」と答えそれから礼拝を始めた。
ところが人々がこうして礼拝している最中にアッラーの使徒がそこへ戻って来て人々の列に加わった。
人々はこのことをアブー・バクルに知らせるために手をたたいた。
しかしアブー・バクルは礼拝中でそれに気付きませんでした。
そして人々がなおも激しく手をたたいた時、ようやく彼は振り向いて、そこにアッラーの使徒を見ました。
するとアッラーの使徒は彼に手振りで“その場にとどまりなさい”と合図しました。
アブー・バクルはこのようを場合にどうすべきか以前にアッラーの使徒によって命ぜられていた作法に従って両手を高々と上げアッラーを讃えた。
それからアブー・バクルは人々の列に並ぶまで自ら後退し、そしてアッラーの使徒が一歩前に踏み出して人々の礼拝を先導した。
礼拝が終了すると預言者はこう尋ねた。
「アブー・バクルよ、なぜ私が命じたようにそのまま留まらなかったのか」
アブー・バクルは次のように答えた。
「アブー・クハーファの息子（つまり自分自身のこと）（注）にはアッラーの使徒の面前で人々の礼拝を先導する権利などありません」
それからアッラーの使徒はまわりの人々に向かってこういった。
「私はあなた達が激しく手を打って音をたてる姿を見ましたが、あれは一体何ですか、もし礼拝中の誰かに何かが起こってそれを知らせる時は“偉大なる我が主に讃あれ”と声を出して言いなさい。
なぜならばそれを口にすればその者は必ず人々の注意を引くことになるでしょう。
言葉でなく手を打って伝達することは女性だけに限ります」
（注）アブー・バクルはクライシュ族のタイム家に属し父の名をアブー・クハーファと称した
このハディースは別の伝承者経路を経て同様に伝えられているが次の言葉に表現上の相違が

ある。
“アブー・バクルは彼の両手を上げてアッラーを讃え、背後の列におさまるまで後ずさりした”
サハル・ビン・サアド・サーイディーは次のように伝えている
アッラーの使徒はもめごとを仲裁するためにアムル・ビン・アウフ一族の所に出向いた。
残りのハディースは次の追加表現を除いて同じである。
“それからアッラーの使徒がそこへやってきた。
そして彼は列を分けながら（礼拝の）最前列まで進んだ。
そしてアブー・バクルが後ずさりをして最前列の線まで後退した”
ムギーラ・ビン・シュウバは彼がアッラーの使徒に同行してタブークの戦いに出かけた時の出来事として次のように伝えている
アッラーの使徒がファジュル（日の出前）の礼拝の前に“用たし”に出られたので私は水の入った壷を持って途中まで彼について行きました。
それからアッラーの使徒が私の所にもどって来た時、私は彼の両手に壷の水を注ぎました。
彼はこれで両手を三回洗いその後で顔を洗いました。
その後彼は外套の袖口をたぐって腕まくりをしようとしたが袖口がきつかったので一端外套の内側に両手を入れて（両腕を袖から抜いて）両腕を外套の下から出して肘の所まで水洗した。
その後彼はクッフ（皮製の靴下）の上から清浄行為の儀式（ぬらした手でつま先から足の甲にかけてなでる）を行った。
それから彼は礼拝に出向いた。
そこで私も彼とともに移動した。
しかし人々は既にアブドル・ラフマーン・ビン・アウフをイマームに立てて礼拝を始めていました。
アッラーの使徒は二ラカートのうちの後半のラカートに間に合ったので人々とともに最後のラカート（日の出前の礼拝は二ラカートで完結する）の礼拝をした。
そしてアブドル・ラフマーンが左右のタスリーム（挨拶儀礼）を唱えて礼拝を終えた時アッラーの使徒は彼に残されたラカートをそのままつづけて礼拝を完結させるために立ち上がった。
このことはその場に居合わせた信徒達をいたく狼狽させ彼等はその間に、ただ口々に“アッラーに称讃あれ”という言葉を繰り返した。
それから預言者は彼の礼拝を済ませた後で人々に向かって次のようにいった。
「あなた達はよくやりました」
或いは彼等が決められた時間に礼拝を済ませたことを喜んで「あなた達のとった行為は正しい」ともいった。
同様のハディースが別な伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは次の言葉が追加されている
私（ムギーラ）はアブドル・ラフマーン・ビン・アウフを後方に下がらせようと思った。
しかし預言者は「彼にそのままつづけさせなさい」と仰せられた。

礼拝中の注意喚起の手打ちに関して

もし礼拝中に何かが起こった場合に男性は声高にタスビーフ（偉大なる我が主に讃えあれと唱えること）を唱え、
女性は手を打って知らせるべきであること
1巻　P.300-301

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
（礼拝中に何か起った場合）タスビーフは男性のため、手打ちは女性のための伝達法である。
伝承者の一人ハルマラはイブン・シハーブが彼に語ったとして次の言葉を加えている。
私（イブン・シハーブ）は多くの（後代の）律法学者がタスビーフを唱えかつ身振りで合図している現場をみた。
このハディースはアブー・フライラからの伝聞として別の伝承者経路によっても伝えられている。
同様なハディースが別の伝承者経路によっても伝えられている。
しかしここでは“礼拝中に（タスビーフは男性のため）”という言葉が加えられている。

礼拝は完璧にすることに関して

礼拝はきちんと完璧にうやうやしく捧げること
1巻　P.301-302

アブー・フライラは次のように伝えている
或る日アッラーの使徒は礼拝を先導しそれが終ると私達の方に向き直りこういった。
「やー　そこの誰々さん、なぜあなたは礼拝をバランス良く上手に捧げないのですか、礼拝者はただ自分自身のため礼拝しているというだけで自分がいかに礼拝しているかをなぜ見ようとはしないのですか。
私はアッラーに誓って（礼拝中に）あたかも眼前にいる人を見るように自分の後方（つまりあなた達）をも見ています」
アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉を次のように伝えている
「あなた達は私（預言者）がキブラ（マッカのカーバ神殿の方角）ばかり見ていると思いますか。
アッラーに誓ってあなた達の屈身礼も平伏礼も私には隠し通せません。
ほんとうに私には背後にいるあなた達が見えるのです」
アナス・ビン・マーリクは預言者が次のようにいったとして伝えている
「屈身札も平伏札もしっかりとやりなさい。
アッラーに誓って、たとえあなた達は私の背後にいても私は見ています」
或いは彼はこういったかも知れない。
「あなた達が屈身したり平伏した時にも私は背中越しに見ています」
アナスは預言者が次のように語ったとして伝えている
「屈身礼と平伏礼をきちんとやりなさい。
アッラーに誓って私は背中越しにいかにあなた達が屈身し、いかにあなた達が平伏したかをちゃんと見ています」
或いはサイードの伝承では「あなたたちが屈身し、あなた達が平伏した時（あなたたちを見ている）」とある

イマームより先行を禁止すること

イマームに先んじて屈身したり平伏したりすること及びこれらに類する行為は禁じられている
1巻　P.302-303

アナスは次のように伝えている
或る日アッラーの使徒は我々の礼拝を先導していました。
そして彼が礼拝を終えると彼は我々の方に向き直ってこういった。
「人々よ、私はあなた達のイマームです。
だから私より先に屈身したり平伏したり立ち上がったり、顔を左右に向けたりしてはなりません。
なぜならば私はあなた達を眼前に見ているのです。
また、私の背後にいる者も見ています」
それから彼はさらにこう言った。
「ムハンマドの命がそのみ手にあるお方（アッラー）に誓って、もし万一あなた達が私が見たものを見ることが出来るならばあなた達はきっとほんの少ししか笑わずたくさん泣くことになるでしょう」
そこで人々は尋ねた。
「アッラーの使徒よあなたは何をみたのですか」
これに答えて彼はこういった。
「私は楽園と火獄を見ました」
このハディースは別の伝承者経路を経て前記ハディースと同様にアナスによって伝えられている。
しかし伝承者の一人ジャリールの伝えたハディースには"顔を左右に向ける…"という一節はない。
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「（平伏礼の際に）イマームよりも先に頭を上げる者はアッラーがその者の首をろばの頭に変えてしまわれることを恐れないのか」
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったと伝えている
「礼拝中にイマームより先に頭を上げる者はアッラーが彼の姿をろばの姿に変えてしまわれないという保証はないのだ」
このハディースは別な伝承者経路を経て前記のハディース同様にアブー・フライラによって伝えられているが、伝承者の一人ラビーウ・ビン・ムスリムによって伝えられた部分だけが違っている。
それは"アッラーが彼の顔をろばの顔にしてしまわれる"という部分である。

礼拝中の静粛さと整列について

礼拝中は静粛さを守ることが命じられており、手で合図したり、タスリーム（左右の挨拶礼）を唱える際に手を上げること等は禁じられている、
また礼拝の人列は前の方から先に順々に列を整え隙間を空けないこと
及び礼拝は集団で行うべきこと
1巻　P.303-305

ジャービル・ビン・サムラは伝えている
アッラーの使徒は私達のところにやって来て次のように言った。
「（タスリームの際）私はあたかも落ち着きのない馬の尾のようにあなた達が手を上げる姿（注
）を見かけたが、これは一体どうしたというのだ、礼拝中は静粛にしなさい」
さらにジャービルは次のように語った。
その後預言者は再び我々の所にやって来た。
その時我々が車座になってあちこちに座っているところを見て彼は次のように言った。
「あなた達はそのようにばらばらに散らばっているがこれは一体どうしたことですか」
ジャービルはさらに次のように語っている。
それからその後また預言者が我々の所にやって来てこう言った。
「なぜあなた達は天使達が主のお側近くで隊列を組むように整列しないのですか」
そこで我々はこう尋ねた。
「アッラーの使徒様、天使達は主のお側近くでどのように隊列を整えるのでしょうか」
すると預言者は答えてこういった。
「前の方の列から先に順次整えてゆき、かつ列には隙間を空けないように詰めて並びます」
（注）恐らく通常の日常の挨拶をするように左右に座っている者に対して敬礼をしたのではないかと思われる
同様なハディースが別の伝承者経路を経てアアマシュによって伝えられている。
ジャービル・ビン・サルマは次のように伝えている
我々はアッラーの使徒とともに礼拝中でしたが礼拝の終わりにあたって“あなた方の上に平安とアッラーの慈悲がありますように”、
“あなた方の上に平安とアッラーの慈悲がありますように”と左右に挨拶儀礼（タスリーム）を唱えたがその際に或る者が手を上げて両脇の者に向かって手振りで（実際に）挨拶した。
するとアッラーの使徒はこういった。
「あなた達は落着きのない馬の尾のように手を上げたがその手で一体何を指し示そうというのか。
誰であれ（両手は）太股の膝の上に置いて左右の者に向かって挨拶するだけで充分なのです」
ジャービル・ビン・サムラは次のように伝えている
私はアッラーの使徒と一緒に礼拝しました。

我々は礼拝最後の挨拶儀礼を唱える際に"あなた方の上に平安がありますように。
あなた方の上に平安がありますように"と左右に唱えながら手振りを交えて挨拶をした。
するとアッラーの使徒は我々の方を見て次のように申された。
「なぜあなた達は高々と上った落着きのない馬の尻尾のようにあなた達の手を上げて指し示すのですか。
あなた達は誰でも挨拶儀礼を唱える際には顔だけを左右に両脇の同胞に向ければそれでよい。
決して手振りなどを交えてはならない」

集団礼拝での整列に関して

集団礼拝においては人列を一直線に揃えること、
その際に最前列が最もよいが順次それにつづく前の列が好ましいこと、
最前列への割込み競争のこと、
また徳のある者を前列に使先すること、
及び彼等をイマームのそばに近づけること
1巻　P.305-308

アブー・マスウードは次のように伝えている
アッラーの使徒は礼拝中我々と肩を接して並んだものでした。
そして次のようにいっていた。
「列をまっすぐにしなさい。
でこぼこではいけません。
なぜならばあなた達の心の中に不和が生じるからです。
あなた達のうちで最も落ち着きがあり分別のある人々を私のそばに近づけなさい。
それから順次彼等につぐ人々を後方に配置しなさい」
さらにアブー・マスウードはこういっています。
“（預言者の時代と比べると）今日では皆さんはひどく不揃いに並んでいます”
同様なハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。
アブドッラー・ビン・マスウードはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「落ち着きがあって思慮深い人々を私のそばに近づけなさい。
その後方には彼等につぐ人々を順次配置しなさい（と三回繰り返された）。
また市場の喧嘩を（モスク内に）持ち込む者に気をつけなさい」
アナス・ビン・マーリクはアッラーの使徒が次のように仰せられたとして伝えている
「あなた達の人列を一直線に揃えなさい。
なぜならば人列を整えることは完璧な礼拝のための一つの条件であるからです」
アナス・ビン・マーリクはアッラーの使徒が次のように仰せられたとして伝えている
「人列を揃えなさい。私は自分の背後からあなた達を見通すことができるのですよ」
ハンマーム・ビン・ムナッビフは次のように伝えている
このハディースはアブー・フライラがアッラーの使徒の言葉として伝えたものであるが彼が述べたいくつかのハディースの中で次のような言葉を伝えている。
「礼拝では人列を整えなさい。
なぜならば人列を一直線に揃えることは立派な礼拝の一条件であるからです」
ヌウマーン・ビン・バシールはアッラーの使徒から次のような言葉を聞いたとして伝えている
「あなた達の人列を一直線に揃えなさい。さもなくばアッラーはあなた達の間に不和を生じせしめるでしょう」

ヌウマーン・ビン・バシールは次のように伝えている
アッラーの使徒は我々の人列を一直線に整えることを常としていた。
あたかもそれらの人列をもって矢の歪みをも調整できる程に（独特の誇張表現）一直線に揃えたものだった。
こうした訓練は我々が彼から完全に学びとったと彼が確認するまでつづいた。
そんな或る日のこと預言者が礼拝のためのに出て来て先頭に立ちまさにタクビールを唱えて礼拝を開始しようとした時一人の男の胸元が列から突び出していることに気付いた時に次のように仰せられた。
「アッラーの下僕（信徒）達よ、あなた達の人列を整えなければなりません、さもなくばアッラーはきっとあなた達の間に不和を起こさせるでしょう」
同様なハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「もし人々がどんなに卓越した美徳が礼拝への呼びかけの中にあり、また礼拝の最前列に立つことの中にあるかを知るならば、たとえ最前列に並ぶチャンスがくじ引きでしか決められないとしても彼等は断然そうしたであろう。
またもし彼等が最初のタクビールから礼拝に加わる美徳を知るならば、彼等はきっと先を競って（遅れることなく）最初から礼拝に加わろうとするだろう。
またもし彼等が夜間の礼拝と日の出前の礼拝の美徳を知るならば、彼等は必ずそれらの礼拝にやってくるだろう。
たとえずってでも這ってでも参加するだろう」
アブー・サイード・フドリーは次のように伝えている
アッラーの使徒は何人かの教友達の間に礼拝のお勤めに気乗りしないかのごとく後方にさがる者をみてとって次のように仰せられた。
「前の方に出てきて私の先導に従いなさい。
また後から来る者にはあなた達の先導に従わせなさい。
勤行に尻込みしつづける民はアッラーが最後に彼等からみ恵みを剥奪されるであろう」
また同様なハディースを別な伝承者経路を経てアブー・サイード・フドリーは次のように伝えている
アッラーの使徒はモスクの後方にいる人々を見てから前記のハディースを語られた。
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「あなた達か、または彼等が最前列における礼拝の優れた美徳を知るならば、（先を争う）混雑のためにきっとくじ引きということになるだろう」
またイブン・ハルブの表現では次のように伝えている。
「最前列を占めるためにはくじ引きで決める外はないだろう」
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「男性にとって最も良い列は最前列であり、最も悪い列は最後列である。
また女性にとって最も好ましい列は最後列（男女が一緒に礼拝する場合）であり、最も悪い列は

最前列である」

同様のハディースが別の伝承者経路を経てスハイルによって伝えられている。

礼拝での男女の整列順について

女性は男性の後方で礼拝すべきこと、
また平伏の姿勢から頭を上げる際には女性は男性より先に上げないこと
1巻　P.308

サハル・ビン・サアドは次のように伝えている
貧困のために充分な大きさの布地を所持することができないため丁度子供達がよくやるように腰巻の端と端とを貫頭衣風に首の所で結んだだけの姿で礼拝している男達を預言者の後方で私は目撃しました。
すると誰かが次のように叫びました。
「女のかたがたよ、男のかたがたが頭を上げてしまうまで頭を上げてはならぬ（注）」
（注）着物の丈が短かすぎて男性が頭を下げている間はややもすると大腿など元来被覆されるべき身体部分が露出したためである。
このハディースは多くのムスリムが未だ貪しかったイスラーム布教初期の話と言われている

女性のモスク礼拝に関して

不道徳なことを引き起す恐れがない限り女性がモスクに行くことは許されるが
決して香水をつけてモスクにでかけてはならないこと
1巻　P.308-311

サーリムは父（アブドッラー・ビン・ウマル）から聞いた預言者の言葉として次のように伝えている
女性（妻や娘など）があなた達にモスクに出かけることで許可を求めた時は、それを拒否してはならない。
サーリムはアブドッラー・ビン・ウマル（父）から聞いたアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
「あなた達の身内の女性がモスクに出かける許可を求めたらそれを拒むことなかれ」
このイブン・ウマル（サーリムの父）の伝承を聞いてビラール・ビン・アブドッラー（イブン・ウマルの息子）は
「わたしらはアッラーに誓って許しません」
といったのでイブン・ウマルはビラール（息子）に向き直ってこれまで私（サーリムが一度も聞いたこともない程の悪口雑言を彼にあびせかけてこういった。
「私はお前にアッラーの使徒の言葉を伝えただけなのに、お前は“アッラーに誓ってわたしらは許しません”とは一体何事ですか（注）」
（注）治安の悪い時には女性は家で礼拝すべきであるという預言者の別の勧告がビラールの頭にはあり、一方イブン・ウマルの方は治安は良好という認識の上に立っており、
ややもするとイスラーム以前の部族慣習に基づいて女性の外出が不当に制限されることを心配していた
イブン・ウマルはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
「アッラーの下女達（女性信徒）がアッラーの礼拝所（モスク）に出かけることを拒んではならない」
イブン・ウマルはアッラーの使徒から伝聞したとして次のように伝えている
「あなた達の身内の女性がモスクへ出かける許しを請うたならばそれを許可しなさい」
イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「女性が夜間にモスクに出向くことを禁じてはならない」
するとアブドッラー・ビン・ウマルの息子の一人（つまり自分の息子）がこう言った。
「我々は決して彼女達を外出させない、なぜならば彼女達は夜間のモスクへの外出を口実にして堕落の道に染るかも知れないからです」
するとイブン・ウマルは彼（息子）を激しく叱ってこう言った。
「私はアッラーの使徒がかくいったとして伝えているのにお前は、我々は彼女達の外出を許さない、とは何事ですか」

同様のハディースがアアマシュによって別の伝承者経路を経て伝えられている。
イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「夜間にモスクに出かけることを女達に許可しなさい」
するとその名をワーキドという彼（イブン・ウマル）の息子がこういった。
「それなら彼女達は間違いを犯すでしょう」
そこで彼（イブン・ウマル）は彼（息子）の胸をたたき次のようにいった。
「私はお前にアッラーの使徒のハディースを伝えているのにお前がそれを否認するとは何事ですか」
イブン・ウマルは父からの伝聞としてアッラーの使徒の言葉を次のように伝えている
「女性がモスクに出かける許可を求めて来たら彼女達のチャンスを奪ってはならない」
するとビラール（イブン・ウマルの息子）は次のようにいった。
「アッラーに誓って我々は断固として彼女達の外出を阻止する」
そこでアブドッラー（イブン・ウマル）はこう言った。
「私はアッラーの使徒がかくいったとして伝えているのにお前は“我々は断じて阻止する”と言い張るのか」
ザイナブ・サカフィヤはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「あなた達女性信徒は誰でもイシャー（夜間）の礼拝に参加する際にはその夜の香水を控えなさい」
アブドッラー・ビン・ウマルの妻ザイナブはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「あなた達女性信徒は誰でもモスクに赴く時は香水をつけてはなりません」
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「香をたきしめた女性は誰であれ、イシャー（夜間）の礼拝に我々男性と一緒に参加すべきではない」
アブドル・ラフマーンの娘アムラは預言者の妻のアーイシャが語ったとして次のように伝えている
もしアッラーの使徒が（今日）女性達が生活の中に取り入れた新しいもの（アクセサリーや香水など）を見たならばきっと彼女達がモスクに赴くことを禁じたであろう。
あたかもそれはイスラエルの民の間でも女達が礼拝所に赴くことを禁じられた事情と同じようだ。
そこで私（アムラからこのハディースを聞いた伝承者）はアムラに“イスラエルの女達は礼拝所に赴くことを禁じられたのですか”と尋ねた。
すると彼女は“そうです”と答えた。
同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。

有声礼拝の読誦の強弱について

有声礼拝において声高に誦むゆえに何か騒乱のもとになる恐れがある時は
中位の声でクルアーンを誦むこと
1巻　P.311-312

イブン・アッバースは次のように伝えている
至高なるアッラーの次の言葉「汝（ムハンマド）の祈りを声高に唱えることなかれ、さりとてあまり低く唱えてはならぬ」（クルアーン第17章20節）はアッラーの使徒がマッカで身を隠していた時に下ったものでした。
かつて預言者が礼拝で教友達を先導していた時クルアーンを声高に誦んだ。
それで多神教徒達がこれを聞いた時彼等はクルアーンとそれを啓示した者と啓示された者とをののしった。
そこで至高なるアッラーは預言者に次のように命じた。
「礼拝において多神教徒にも聞えるほど声高にクルアーンをよむことなかれ、さりとてまた教友達が聞き取れないほどに声をひそめてもいけない。
教友達にクルアーンを読んで聞かせなさい。
しかしそれを声高に唱えるのではなく高くもなく低くもない中間の声で唱えなさい」
アーイシャは次のように伝えている
荘厳にして至高なるアッラーの啓示「汝の祈りを声高に唱えることなかれ、さりとてあまり低く唱えてはならぬ」（クルアーン第17章20節）の一節は礼拝ではなくドアー（祈願）に関連して啓示されたものである。
同様のハディースが別の伝承者経路を経てヒシャームによって伝えられている。

クルアーン読誦の拝聴について

クルアーン読誦の拝聴
1巻　P.312-313

「汝（ムハンマド）の舌を動かさなくともよい………」（第75章16節以下）というアッラーの言葉に関してイブン・アッバースは次のように伝えている
かつて天使ジブリールが預言者にアッラーの啓示を伝えた時、彼（預言者）はその言葉を即座に覚えこもうとして彼の舌と口びるを（もぐもぐ）動かしたものだった。
これは彼にとって負担のかかるものでその様子は彼の顔付にありありと認められた。
そこで至高なるアッラーは次のような趣旨の啓示を下した。
「あせって汝の舌を動かさなくともよい」とは“啓示を覚えこもうとしてあせって”の意味である。
また「それを集めそれを誦み聞かせるのはまさにわれ（アッラー）の任務である」とは“それを汝（ムハンマド）の胸中に集めそれを誦み聞かせる任務はまさにアッラーの側にあるのだから汝はただそれを（受動的に）誦めばよい”の意味である。
また「さればわれがそれを誦んだ時、汝はそれにつづいて誦め」の意味は自明だがさらにアッラーは（別な所で）次のように述べている。
「われはそれを啓示したり、されば汝はそれに注意して聞き入るべし」
そこで最後に「それを解き明かすのもまさにわれの任務なり」とは"汝の言語によってそれを解き明かす"の意味である。
このようにして預言者は天使ジブリールが彼のもとに降りて来た時には沈黙を守り、ジブリールが立ち去った後になってから（アッラーが彼に約束されたように）それを誦むようになった。
「あせって汝（ムハンマド）の舌を動かさなくともよい」というアッラーの言葉（注1）についてイブン・アッバースは次のように伝えている
かつて預言者は啓示を受けとめる際に、それを記憶しようとして負担を感じあせってもぐもぐと両口びるを動かしていた。
そしてイブン・アッバースは私（サイード・ビン・ジュバイル）に「アッラーの使徒が両口びるを動かしたように私も動かしてみます」といった。
それからサイードも「イブン・アッバースが動かしたように私も動かしてみます」といって彼は実際に両口びるを動かした（注2）。
さて至高なるアッラーは以下の啓示を下した。「あせって汝の舌を動かさくともよい、それを集めそれを誦み聞かせるのはまさにわれ（アッラー）の任務である」
つまり“汝の胸中にそれを集めそれから汝がそれを誦む”の意であるとイブン・アッバースはいった。
「さればわれがそれを誦んだ時汝はそれにつづいて誦め」とは“ただ黙って注意深く聞きなさい、その後で汝がそれを誦めるように計らうのはわれの側の任務である”という意味であるとイブン・アッバースはいった。

こうして天使ジブリールがアッラーのもとに天下った時アッラーの使徒は黙って天使の伝える啓示に注意深く聞き入りジブリールが立ち去った後で天使が誦んだごとくにそれを誦んだ。
（注1）クルアーン第75章16-19節
（注2）サイードはムーサー・ビン・アブー・アーイシャに対して動かしてみせた

日の出前の礼拝に関して

日の出前の礼拝ではクルアーンを声を出して誦むこととジンに対するクルアーンの読誦
1巻　P.314-316

イブン・アッバースは次のように伝えている
アッラーの使徒は自らすすんでジンに対してクルアーンを誦んで聞かせたわけではなかったし、またそれまでそれらを見ることもなかった（注1）。
さてアッラーの使徒は数人の教友を伴ってウカーズの定期市（マッカとターイフの間にある場所で巡礼の直前に年一回の定期市が開かれた）を目ざして出かけた。
その時悪魔達と天の情報との間には既に障害があり（注2）（その情報をさぐろうとする）悪魔達の上には流れ星が投げつけられた。
そこで悪魔達は止むなく仲間の所に戻って行ったが仲間達はこういった。
「一体君達はどうしたのだ」
そこで例の悪魔の一団は次のように語った。
「おれ達と天の情報との間はへだてられていてそれを聞きたくとも流れ星が投げつけられて近づけないのだ」
すると仲間達はこういった。
「それは何か重大なことが起ったからにちがいない。大地の東から西のすみずみまで旅して我々と天の情報との間になぜ防害があるのか調べよう」
こうして彼等は大地の東から西のすみずみまで旅するために出発した。
ティハーマ（紅海沿岸地域）に向かった一団がウカーズの市場をめざしてナフルという所を通った時、そこで預言者が教友達を先導してファジュル（日の出前）の礼拝をしていた。
そこで悪魔達はクルアーンの読誦を聞き、じっとそれに耳を傾けていたがこういった。
「これこそ我々と天の情報とをへだてていた原因だ（注3）」
そして彼等は仲間の所に帰りこういった。
「おい皆の衆、我々は本当に驚くべきクルアーンを聞いた。それは我々を正しい道に導いてくれるものだ。
だから我々はそれを信じ、我々の主には何ものも配すまいぞ」
この時崇高にして偉大なるアッラーは預言者ムハンマドに次の啓示を下された。
「いってやるがいい、私にこう啓示されたと。ジンの一団が（クルアーンに）聞き耳を立てた」（第72章1節）
（注1）次の話の筋では預言者が明らかにジンのためにクルアーンを誦んで聞かせたりジンと出会っているところからみてこのハディースは極めて初期のものであろう
（注2）預言者出現以前に人々はジンの力を借りた占星術師や巫言者などを通じて神託を受けているものと信じていた。
ところがイスラームの出現によって神託は全てクルアーンを通じて行われるようになりこのため

古い神託者達は皆黙ってしまった。
こうした事情を説明しようとしている
（注3）つまり天の啓示は全てクルアーン一本にしぼられてしまったというわけ
ダウードはアーミルからの伝聞として次のように伝えている
私（アーミル）はアルカマにイブン・マスウードがジンの夜（預言者がジンに会った夜）にアッラーの使徒と一緒だったかどうか尋ねました。
するとアルカマは次のようにいった。
私はイブン・マスウードに「あなたたちのうちで誰がジンの夜にアッラーの使徒と一緒でしたか」と尋ねた。
するとイブン・マスウードはいった。
いいえ誰も、しかし私達は或る夜（その夜）アッラーの使徒と一緒でしたが彼を見失ってしまいました。
それで私達はワジ（涸谷）や山道などを捜しまわりました。
その時我々はこういったものでした。
「彼はジンによって連れ去られたか或いは密かに殺されてしまったにちがいない」
それで我々はこれまで人が過した夜の中でも最悪の夜を過しました。
ところが夜が明けた時どうでしょう彼はヒラー山の方からやって来るではありませんか。
そこで我々は次のようにいいました。
「アッラーの使徒様、私達はあなたを見失ってしまい、ずっと捜していましたがついに見つけだすことができませんでした。
それでこれまでにない最悪の夜を過しましたよ」
すると預言者はこういった。
「私のところにジンの使いが呼びにやって来たので彼と一緒に出かけジンの仲間にクルアーンを誦んで聞かせました」
それから彼（ムハンマド）は我々を連れて出かけジンの仲間が残した跡と彼等が使った火の跡を我々に見せた。
ところで彼等ジンの仲間達は預言者に彼等の食料について尋ねた（という）。
彼はそれに答えてこういった。
「アッラーの名が唱えられた全ての骨があなた達（ジン）の食糧である。
それがあなた達の手に落ちた時、それは肉で被われることでしょう。
またらくだの糞はあなた達の家畜のえさである」
そんなわけでアッラーの使徒は我々にこういった。
「これらの骨と糞を（あなた方の）大小便の後始末のために使ってはならない。
なぜならばそれらはあなた方の兄弟（ジン）と彼等の家畜の食料なのだから」
ダウードは前記ハディースを別の伝承者経路を経て“彼等の使った火の跡を見せた”までを伝えている。
またシャアビーは“彼らジン達は彼等の食糧について預言者に尋ねたが彼等はアラビア半島のジン

であった”とし、以下は前記ハディースを最後まで伝えている。
またシャアビーの言葉はアブドッラーのハディースから直接伝えられたものである。
アブドッラーは前記の預言者のハディースのうちで“彼らの使った火の跡を見せた”まで伝えたが残りのハディースについては何も言及していない。
アブドッラー・ビン・マスウードは次のようにいった
「私はジンの夜、アッラーの使徒と一緒にいなかった。
しかし私はあの時彼と一緒にいたならなあと願った次第です」
マアヌは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
私（マアヌの父）はマスルークに「ジン達がクルアーンを聞いた夜、誰が預言者に（使いとして）知らせたのですか」と尋ねました。
するとマスルークは「あなたのお父さんのイブン・マスウードが私に語ったところによれば一本の木が預言者に知らせたとのことです」と答えた。

ズフルとアスルの礼拝に関して

ズフル（昼過ぎ）とアスル（午後）の礼拝中のクルアーン読誦について
1巻　P.316-319

アブー・カターダは次のように伝えている
アッラーの使徒は私達を導いて礼拝する時ズフルとアスルの礼拝の最初の二つのラカート（屈身礼を一回含んだ礼拝構成単位）ではクルアーンの開扉章（第1章）と他の二つの章を誦みました。そしてその時私達に時々クルアーンの一節を声を出して聞かせました（注）。
またズフルの礼拝では最初のラカートを二番目のラカートより長くするのが常でした。
また彼は日の出前の礼拝でも同じように礼拝しました。
（注）ズフルとアスルは各自が低音で礼拝の言葉を唱えるべき礼拝であるが、ここでは礼拝の言葉を信徒に教えるために預言者はあえて声高に誦んだのであろう
アブー・カターダは父からの伝聞として次のように伝えている
預言者はズフルとアスルの礼拝において最初の二ラカートで開扉章と他の一章を誦み、時々我々にその一節を声を出して聞かせ残りの二ラカートでは開扉章のみを誦みました。
アブー・サイード・フドリーは次のように伝えている
我々はアッラーの使徒がズフルとアスルの礼拝でどれだけ長くキヤーム（直立礼）をするか計りました。
ズフルの最初の二ラカートでは「アリフ・ラーム・ミーム・タンズイール」で始まるクルアーン第32章（全30節）を誦む長さであり、後半の二ラカートではその半分の長さでした。
またアスルの礼拝の最初の二ラカートではズフルの後半の二ラカートの長さに相当し、アスルの後半の二ラカートではそのまた半分の長さてした。
しかしこのハディース伝承者の一人アブー・バクルは「アリフ・ラーム・ミーム・タンズイール」（で始まるクルアーン）と述べるかわりに単に“30節を読む長さ”であるといった。
アブー・サイード・フドリーは次のように伝えている
預言者はズフルの礼拝の最初の二ラカートのうちの各ラカートをクルアーンの30節を読む長さで誦み、後半の二ラカートの各ラカートでは15節を誦む長さもしくは最初の半分の長さで誦んだ。
またアスルの礼拝では最初のニラカートの各ラカートで15節、後半の二ラカートの各ラカートではその半分の長さで誦んだ。
ジャービル・ビン・サムラは次のように伝えている
クーファの住民が司令官のサアドのことでカリフのウマル・ビン・ハッターブに訴えた。
彼等はサアドの礼拝の仕方のことで訴えたのだがそのためウマルはサアドに使者を送ったのでサアドはウマルの所にやって来た。
そこでウマルは人々が彼（サアド）の礼拝のことで非難している点を彼に説明した。
するとサアドはこういった。
「私は彼等を先導して（注1）アッラーの使徒が礼拝した通りに礼拝しています。

省略したりはしていません。
私は彼等を先導して最初の二ラカートは長く後半の二ラカートを短くしただけです。」
そこでウマルはこう言った。
「アブー・イスハーク（サアドの綽名）よ、それこそ私があなたについて考えていたことです（注2）」
（注1）初期イスラームにおいては礼拝でのイマームが即信徒集団の政治的軍事的リーダーであった
（注2）つまりあなたは私が考えていた通りのお人ですの意
同様のハディースが別の伝承者経路を経てアブドル・マリク・ビン・ウマィルによって伝えられている。
ジャービル・ビン・サムラはウマルがサアドに次のように言ったとして伝えている
「人々が礼拝のことをはじめとして全てのことについてあなたに不平をいっている」
するとサアドは次のように答えた。
「私は最初の二ラカートを長くし次の二ラカートを短くして、アッラーの使徒が捧げた礼拝を（どこも）省略することなく忠実に守っているだけです」
そこでウマルはこう言った。
「それこそいかにもあなたらしい、またはそれこそあなたについて私が考えていた通りです」
ジャービル・ビン・サムラは前記と同様のハディースを伝えているが彼はそれに加えてサアドが次のようにいったとして伝えている
「それらのベドウィン（遊牧民）達が厚かましくもこの私に礼拝の仕方を教えようとしているのです（注）」
（注）不平を申し立てたのはベドウィンであり彼等はラカートの長さはどれも皆等しくなければならないと考えていた
アブー・サイード・フドリーは次のように伝えている
ズフルの礼拝が始まると或る者が用をたすためにバキーウ（マディーナのモスクの隣接地）に行き、ウドゥー（小浄）した後に戻ってきた。
その時アッラーの使徒はまだ最初のラカートを礼拝中だった。
これは彼（アッラーの使徒）が最初のラカートをかなり長く引きのばしたためであった。
カズアは次のように伝えている
私はアブー・サイード・フドリーの所にやって来たが彼は多数の人々に囲まれていた。
それで人々が彼のもとを退参した時になって、私はこういった。
「私もあの人々が尋ねたことをあなたにお開きしたい、アッラーの使徒が行った礼拝についてお開きしたい」
すると彼（アブー・サイード）はこう言った。
「そうしたとしても君には役立たないよ」
しかしカズアは同じ要求を繰り返した。それで彼は次のようにいった。
「かつてズフルの礼拝が始まると、私達の中の一人がバキーウに行って用をたし、そして彼の家

に帰ってウドゥー（小浄）を済ませそれからモスクに戻って来るとアッラーの使徒はいぜんとして最初のラカートを礼拝中でした」

スブフ礼拝の聖典読誦に関して

スブフ（注）（日の出前）の礼拝中の読誦について
（注）ファジュルともガダートともいう
1巻　P.319-322

アブドッラー・ビン・サーイブは次のように伝えている
預言者がマッカで私達を導いて日の出前の礼拝をした時でした。
信者達の章（第23章）を読誦し始め同章45節のモーゼとアロンの所まで、または50節のイエスについて語った所（後者についてはムハンマド・ビン・アッバードは疑問視している、また人々はこれについては意見を異にしている）まで諦んだ時彼はせきこんで残りの読誦を中断して腰をかがめてルクーウ（屈身礼）に移った。
この時勿論アブドッラー・ビン・サーイブはそこに居合せていましたがアブドル・ラッザークの伝えたハディースでは"預言者は残りの節の読誦を省略して腰をかがめて屈身礼に移った"とあります。
アムル・ビン・フライスは次のように伝えている
私は預言者が日の出前の礼拝（ファジュル）で「暗闇を迎える夜にかけて」（第81章全17節）を声高に誦む声を聞きました（注）。
（注）ファジュルの礼拝では声を出してよむべしとする根拠となる
クトバ・ビン・マーリクは次のように伝えている
私はアッラーの使徒の指導のもとで礼拝しました。
その時彼は「カーフ。栄光に満ちたクルアーンにかけて誓う」（第50章1節）から「そして丈の高いナツメヤシの木を」（同章10節）まで誦んだ。
私はそれをもう一度復誦しようと思いましたが彼の誦んだ意味について行けませんでした。
クトバ・ビン・マーリクは次のように伝えている
私は預言者が日の出前の礼拝で「そしてびっしりと実を付けた丈の高いナツメヤシの木を」（第50章10節）と誦む声を聞いた。
ズィヤード・ビン・イラーカは彼の叔父が次のように語ったとして伝えている
彼（叔父）は預言者と一緒に日の出前の礼拝を捧げたがその時預言者は最初のラカートで「そしてびっしりと実を付けた丈の高いナツメヤシの木を」（第50章10節）まで誦んだ。
或いはおそらくカーフ章（第50章全45節）の全部をよんだだろう。
ジャービル・ビン・サムラは次のように伝えている
確かに預言者は日の出前の礼拝で「カーフ。栄光に満ちたクルアーンにかけて誓う」で始まる第50章を誦むことが常でしたがその後の彼の礼拝は短かかった。
シマークがジャービル・ビン・サムラに預言者が行った礼拝について尋ねたところ彼は次のように語った
預言者は礼拝を短くするのが常でした（注）。

彼は決してこれらの人々が行うように礼拝しませんでした。
それからジャービルは私にこうもいいました。
アッラーの使徒は日の出前の礼拝ではカーフ章（第50章）かそれと同じくらいの長さのクルアーンをよむことを常としていた。
（注）ムスリムの数の少なかった初期には長かったが後にムスリムの数が増えると短くなった。これは身体の弱い人々や女性が集団礼拝に加わってきたことを考慮したもの
ジャービル・ビン・サムラは次のように伝えている
かつて預言者はズフルの礼拝では「覆われる夜にかけて…」で始まる夜の章（第92章全21節）をまたアスルの礼拝ではそれと同じくらいの長さの章をよむことを常としていたが日の出前の礼拝ではそれよりも長いクルアーンをよみました。
ジャービル・ビン・サムラは次のように伝えている
確かに預言者はズフルの礼拝では「至高のお方、汝の主の御名を讃える」に始まる至高者の章（第87章全19節）をよみ、日の出前の礼拝ではそれよりも長い章をよみました。
アブー・バルザは次のように伝えている
確かにアッラーの使徒は日の出前（ガダート）の礼拝で60-100節の長さのクルアーンを誦むことを常とした。
またアブー・バルザ・アスラミーは次のようにも伝えている
アッラーの使徒は日の出前（ファジュル）の礼拝で60-100節ほどの長さのクルアーンをよむことが常でした。
イブン・アッバースは次のように伝えている
ハーリスの娘のウンム・ファドルは（義理の息子の）イブン・アッバースが「次々と送られる風に誓って」に始まる送られるもの章（第77章）をよむ声を開いてこういった。
「息子よ、あなたのよんだその章の読誦はアッラーの使徒がマグリブ（日没後）の礼拝で誦んだあの最後の一章であったことを私に思い起こさせました」
同様のハディースが別の伝承者経路を経てズフリーにより伝えられている。しかし伝承者の一人サーリフは次のようにつけ加えている
その後（前記のマグリブの礼拝の後）預言者はアッラーが彼をお召しになるまで人々を導いて礼拝することはなかった（注）。
（注）アーイシャは預言者の最後の礼拝は昼過ぎの礼拝であったと伝えている。
しかしここでは日没後の礼拝として伝えられている。
この矛盾は前者はモスクでの最後の礼拝であり後者は家での最後の礼拝であったと説明されている
ムハンマド・ビン・ジュバイル・ビン・ムトイムは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
私はアッラーの使徒がトール山の章（第52章）を日没後の礼拝に誦む声を聞きました。
同様のハディースが別の伝承者経路を経てズフリーによって伝えられている

イシャーの礼拝の読誦について

イシャー（夜）の礼拝中の読誦
1巻　P.323-325

アディーはバラーウが預言者について次のように語った話を聞いたとして伝えている
預言者は旅行中イシャーの礼拝を行う時二回のラカート中の一つで「無花果とオリーブの樹にかけて」章（第95章全8節）をよむことが常でした。
バラーウ・ビン・アーズィブは次のように伝えている
私はアッラーの使徒と一緒にイシャーの礼拝をしました。
その時彼は「無花果とオリーブの樹にかけて」（第95章全8節）をよみました。
バラーウ・ビン・アーズィブは次のように伝えている
私は預言者がイシャーの礼拝で「無花果とオリーブの樹にかけて」（第95章）を誦む声をききましたが彼の声に勝る美声を聞いたことがありませんでした。
ジャービルは次のように伝えている
かつてムアーズ・ビン・ジャバルは預言者と一緒に礼拝しその後一族のもとに戻って彼等を導いて礼拝したものでした（注）。
或る夜、いつものようにイシャーの礼拝を預言者と一緒に行いそれから一族の所に戻ってイマームとして彼等を先導して礼拝した。
その時彼が雌牛章（第2章）を読み始めたところ一人の男が列から離れてタスリーム（最後の挨拶儀礼）を左右に行い、それから彼は一人で礼拝して立ち去った。
そこで人々は彼にこう言った。
「誰それよ、あなたは偽善者になったのか」すると彼はこう言った。
「いいえ、アッラーに誓って、きっと私はアッラーの使徒の所に行ってこのことについて話します」
こうしてその者はアッラーの使徒の所にやって来て次のように語った。
「アッラーの使徒よ、私達は断えず水を与えなければならないらくだの群れを持っています。
また一日中働きづめです。
しかしムアーズはあなたとイシャーの礼拝をした後に私達の所に来て雌牛章（最も長い章）を礼拝で誦み始めました」
そこでアッラーの使徒はムアーズにこういった。
「ムアーズよ、あなたはあちらで人々を試練に落とし入れるつもりですか、礼拝にはしかじかの章を誦みなさい」
伝承者の一人スフヤーンはその時ジャービルのいったことをさらに次のように詳しく伝えている。
「預言者は「太陽と朝の輝にかけて」（第91章全15節）か「明けはなつ朝にかけて」（第93章全11節）か、「闇迫る夜にかけて」（第92章全21節）か「讃えよ、いと高き汝の主のみ名を」（

第87章全19節）等を誦みなさいと語った」
ところでアムルは“～など（の短い章をよめ）”の一語を追加している。
（注）彼の部族のモスクで礼拝した意、またこの場合ムアーズの二回の礼拝のうちどちらかが義務の礼拝で残りの礼拝はナフル（随意）の礼拝でなければならない
ジャービルは次のように伝えている
ムアーズ・ビン・ジャバルは彼の仲間を先導してイシャーの礼拝をした。
その時彼が礼拝を長々と行ったために一人の男が私達の列から離れて一人で礼拝してしまった。
ムアーズがそのことを聞かされた時「彼はえせ信者だ」と断じた。
そしてそのことがその男の耳に入った時彼はアッラーの使徒の所に行きムアーズのいった事を話した。
すると預言者はムアーズにこういった。
「あなたは人を惑わす人間になりたいのか、ムアーズよ、もしイマームになって人々を先導して礼拝する時には「太陽と朝の輝にかけて」（第93章）か「讃え、よいと高き汝の主のみ名を」（第87章）か「汝の主のみ名にかけて誦め」（第96章）か「闇迫る夜にかけて」（第92章）など（の短い章）を誦みなさい」
ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている
ムアーズ・ビン・ジャバルはイシャーの礼拝をアッラーの使徒と一緒に行った後に彼の一族のもとに帰り彼等を先導して再びイシャーの礼拝を行ったものでした。
ジャービル・ビン・アブドッラーは次のように伝えている
かつてムアーズはアッラーの使徒とイシャーの礼拝した後で彼の一族のモスクに戻り彼等を先導して再び礼拝することが常でした。

イマームは礼拝を短く、について

イマームは礼拝を短く、過不足なく行う義務があること
1巻　P.325-327

アブー・マスウード・アンサーリーは次のように伝えている
或る男がアッラーの使徒の所にやって来ていった。
「私は絶対に日の出前の礼拝を皆とは一緒に行わないで遅らせて行います。
なぜならばイマームの誰それは長々と礼拝を行いそれで私達を釘付けにするからです」
私は預言者が説教の中でその日ほど激しく怒った姿を一度も見たことがありませんでした。
それで預言者はこういいました。
「皆さん、あなた方の中には人を脅して追い払うような人がいるようだ。
イマームとして人々を導いて礼拝する人に警告する。
礼拝を短くしなさい。
なぜならばイマームの後に従う人々の中には年寄もいれば身体の弱い人や用事のある人もいるのだから」
このハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。
アブー・フライラは次のように預言者の言葉を伝えている
「あなた方のうちの一人が人々を導いて礼拝する時にはその礼拝を短くしなさい。
なぜならば人々の中には子供もいれば老人もいます。
身体の弱い人もいれば病人もいるからです。
もし一人で礼拝する場合はその者の望むだけ長くてもかまいません」
ハンマーム・ビン・ムナッビフは伝えている
これはアブー・フライラがアッラーの使徒について語ったいくつかのハディースの中の一つである。
それによればアッラーの使徒は次のように語った。
「あなた方のうちの一人がイマームとして人々を先導して礼拝する時はその礼拝を短くすべきである、
なぜならば人々の中には老人もいれば身体の弱い人もいるからだ、
しかし一人で礼拝する場合ならば好きなだけ長く礼拝してもかまわない」
アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
「あなた達のうちの一人が人々を導いて礼拝する時にはそれを手短に終らせなさい。
なぜならば人々の中には身体が弱い人や病人や用事のある忙しい人などがいるからです」
アブー・バクル・ビン・アブドル・ラフマーンはアブー・フライラから聞いたとして次のように伝えている
アッラーの使徒は前記ハディースと同じことをいった、しかし彼は"病人"のかわりに"老人"と言った。

ウスマーン・ビン・アブー・アース・サカフィー（注）は次のように伝えている
預言者は私（ウスマーン）にこう言った。
「あなたの一族を導いて礼拝しなさい」
そこで私はこう答えた。
「アッラーの使徒様、私は心に何か不安を感じます」
すると預言者は私に彼のそばに近づくようにいって、私を彼の前に座らせ、それから彼の手のひらを私の二つの乳首の間の胸の上に置いた。
それから再び「後を向いて」といい今度は私の両肩の間の背中に手のひらを置いた。
それから彼は次のように言った。
「あなたの一族のイマームになりなさい、人々を導いて礼拝する時には手短にそれを終らせなさい。
なぜならば彼等の中にはきっと老人がいます。
また病人もいます、また身体の弱い人や用事があって忙しい人もいるからです。
しかし一人で礼拝する時は好きなだけ長く伸ばしてもかまいません」
（注）彼は預言者によってターイフの知事に任命された
ウスマーン・ビン・アブー・アースは次のように伝えている
アッラーの使徒が最後に私に訓令したことは、もし人々を導いて礼拝する時には彼等のために礼拝を短くすべきだ、ということでした。
アナスは伝えている
アッラーの使徒はいつも礼拝を短くかつ完全に行っていました。
アナスは伝えている
アッラーの使徒は礼拝を最も短くしかも完全に行う一人でした。
アナス・ビン・マーリクは伝えている
私はアッラーの使徒以上に礼拝を短く、しかも完全に行うイマームに従って礼拝したことは一度もありませんでした。
アナスは伝えている
アッラーの使徒は礼拝中に母親と一緒にいる子供の泣声を開くと簡結な章や短い章を誦んだものでした。
アナスはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
私は礼拝を始めた時それを長くしようと思っていました。
しかし、子供の泣き声を開いたのでその子に対する母親の深い悲しみや気遣いを思い礼拝を短くしました。

礼拝基本動作のバランスに関して

礼拝基本動作のバランスと完結礼拝の短縮について
1巻　P.327-328

バラーウ・ビン・アーズィブは伝えている
私はムハンマド様の礼拝をよく見て、彼のキヤーム（直立礼）、彼のルクーウ（屈身礼）、それから屈身から元に戻って身を起したイアテダール（起立状態）そしてサジダ（平伏礼）、ついで二回の平伏礼の間のジャルサ（座礼）、そして二度目のサジダ、タスリーム（最後の左右の挨拶儀礼）と退参との間の二度目のジャルサこれら全ての間の間隔はほぼ等しいことに気付きました。
ハカムは次のように伝えている
ザマン・ビン・アシュアスという男（本名はマタル・ビン・ナージャ）がクーファの町を支配した。
そこで彼はアブー・ウバイダ・ビン・アブドッラーに人々を導いて礼拝するように命じた。
ところで彼（アブー・ウバイダ）はいつも礼拝の時にルクーウ（屈身礼）から頭を上げ元のキヤーム（直立礼）の状態になると、私（ハカヤム）が唱える以下のドアー（祈願）の言葉をいい終えるまでの間そのまま立っていました。
その私のドアーとはこうである。
「おおアッラー、我等が主よ、称讃はあなたに、天を満たし、大地を満たし、あなたの望まれるものを満たすお方、称讃と栄光に値するお方、あなたが与えたものは誰もそれを阻止しえないお方、あなたが禁じたものは誰もそれを与えることができないお方、富者の財産もあなたの元では何の役にもたたない」
ハカムはついで次のように語った。
私はこのことをアブドル・ラフマーン・ビン・アブー・ライラーに話しました。
すると彼は“私はバラーウ・ビン・アーズィブがいった次のような言葉を聞いた”と語った。
「アッラーの使徒の礼拝でその屈身礼、屈身から頭を上げた時、平伏礼、二回の平伏礼の間（の座礼）などいつもだいたい均衡していました」
またシュウバはこのことをアムル・ビン・ムッラに話した所、彼はこういった。
「私はイブン・アブー・ライラーを見て知っているが彼の礼拝はそのようでは無かった」
ハカムは次のようにも伝えている
マタル・ビン・ナージャがクーファの町を支配した時彼はアブー・ウバイダに人々を導いて礼拝するよう命じた。
以下は前記のハディースを伝えた。
アナスからの伝聞としてサービトは次のように伝えている
私（アナス）はあなた達を導いて礼拝する時にはアッラーの使徒が私達を導いて礼拝した通りに決して短縮することなしに礼拝します。

ところでサービトはこう言っている。
あなた達がそうしている姿をこの私（が一度）でも見たこともないような仕草をアナスはいつもしていました。
それは彼（アナス）が屈身礼から頭を上げた時に、いう人にいわせれば彼は次の動作を忘れたのではあるまいかと思わせる程長く直立不動で立ちつづけたこと、また平伏礼から頭を上げた時にも、いう人にいわせれば次の平伏動作を忘れたのではあるまいかと思わせるほど長々と座り込んでいたことです。
サービトはアナスからの伝聞として次のように伝えている
私はアッラーの使徒が行った礼拝より短くて完璧な礼拝を体験したことはありません。
アッラーの使徒の礼拝はほどよい長さでしたしまたアブー・バクルの礼拝もそうでした。
ウマル・ビン・ハッターブの時代になると彼は日の出前の礼拝を長くしました。
またアッラーの使徒は“アッラーは彼を称讃する者の声を聞き届け給う”といって直立の姿勢に戻った時彼は次の動作を忘れてしまったのかもしれないと私達が思うほど長い間立ったままでした。
それから彼は平伏礼を行い、次の平伏礼との間を長くとり、次の動作を忘れたのではあるまいかと思うほど長い間座っていました（注）。
（注）礼拝動作の間の取り方には結局鉄則がないことを示している

イマームの動作に従う、に関して

イマームの動作に従うべきことそして彼の後に行動すべきこと
1巻　P.329-330

嘘をついたことのないバラーウは次のように伝えている
かつて彼等はアッラーの使徒の背後で礼拝したものですがその時預言者が屈身礼から頭を上げて、つづいて彼が地面に額をつけるまでは誰一人として背を曲げて平伏礼に移る者を私は見ませんでした。
こうして彼の背後にいる人々は彼につづいて平伏礼をしました。
嘘をついたことのないバラーウが次のように伝えている
アッラーの使徒が「アッラーは彼を称讃する者の声を聞き届け給う」と唱えた後に彼が平伏礼に移り身を沈めるまでは我々の内で誰一人として背を曲げる者はいなかった。
その後我々は彼につづいて平伏礼をしました。
バラーウは次のように伝えている
彼等教友達はアッラーの使徒と一緒に礼拝していました。
そして彼が屈身すれば彼等もつづいて屈身しました。
預言者は屈身礼から頭を上げた時「アッラーは彼を称著する者の声を聞き届け給う」と唱えた。
そして我々は彼が顔を地面につけるまでは立礼の状態をつづけそれから彼につづいて平伏礼に移った。
バラーウは次のように伝えている
私達は預言者と一緒に礼拝していた。
我々は彼が確かに平伏した姿を見るまでは誰も背を曲げて平伏礼に移ろうとしなかった。
ところでズハイルはクーファの人々が伝えるところとして“彼が平伏している姿を我々が見るまでは…”という表現に言及している。
アムル・ビン・フライスは次のように伝えている
私は預言者の背後で日の出前の礼拝をしました。
その時私は彼が「いやいや、私は運行し沈みゆく諸星にかけて誓う」（第81章15-16節）と誦む声を聞いた。
また私達の内で誰一人として彼が完全に平伏礼に移行し終るまでは背を曲げて平伏礼に移ろうとする者はいなかった。

屈身礼からの動作と言葉について

屈身礼から頭を上げる際に唱える言葉
1巻　P.331-332

アブドッラー・ビン・アブー・アウファーは次のように伝えている
アッラーの使徒は屈身礼から背を起す時いつも次のように唱えていました。
「アッラーは彼を称讃する者の声を聞き届け給う、おおアッラー、我等が主よ、称讃はあなたにのみ、天と地を満たし、その後お望みのままに何でも満たされるお方」
アブドッラー・ビン・アブー・アウファーは次のように伝えている
アッラーの使徒は次のようなドアー（祈願）の言葉を唱えたものでした。
「おおアッラー、我等が主よ、称讃はあなたのもの、天と地を満たし、その後お望みのままに何でも満たされるお方」
アブドッラー・ビン・アブー・アウファーは次のように伝えている
預言者はいつも次のようにいっていました。
「おおアッラー、称讃はあなたのもの、天と地を満たし、その後お望みのままに何でも満たすお方、おおアッラー、私を雪や雹や冷水（注1）でお浄め下さい、おおアッラー、白衣の汚れが落されるように数々の罪や過ちから私をお浄め下さい（注2）」
（注1）いずれも地獄の業火を消し止める効果があるという比喩
（注2）この祈願の言葉は預言者が信徒にいかに祈願を捧げるかを教えたものでこれによって預言者が罪深かったという根拠にはならない
前記ハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。
その中で伝承者の一人ムアーズの伝えた言葉には“白衣のしみが浄められるように”とあり別伝承者のヤジードのそれは“白衣の汚点が”とある。
アブー・サイード・フドリーは次のように伝えている
アッラーの使徒は屈身礼から頭を上げた時次のように唱えた。
「我等が主よ、称讃はあなたのもの、天と地を満たし、その後お望みのままに何でも満たすお方、称讃と栄光に値するお方、下僕が語る最も価値あるお方、我々はことごとくあなたの下僕です。
おおアッラー、あなたが与えたものを禁じ得る者はなくまたあなたが禁じたものを与え得る者はないお方、また富者の財もあなたの元ではまるで役に立たない」
イブン・アッバースは伝えている
預言者は屈身礼から頭を上げる時に次のように唱えたものでした。
「おおアッラー、我等の主、称讃はあなたのもの、天と地を満たしまたそれら二つの間の空間を満たし、その後お望みのままに何でも満たされるお方、称讃と栄光に値するお方、あなたが与えたものを禁じ得る者はなくまたあなたが禁じたものを与え得る者はない、また富者の財もあなたの元ではまるで役に立たない」

別の伝承者経路で伝わる前記のハディースでは、イブン・アッバースは“その後お望みのままに何でも満たす”まで述べ残りのハディースは伝えていない。

礼拝中の読誦禁止の場合について

屈身礼と平伏礼のあいだはクルアーンの読誦が禁じられていること
1巻　P.332-334

イブン・アッバースは次のように伝えている
人々がアブー・バクルに従って彼の背後で整列しているとアッラーの使徒が彼の部屋のカーテンを上げてこういった。
「皆さん（善良な）ムスリムが見る正夢かまたは見せられる正夢以外にもはや預言者による福音は無くなりました。
さて私は屈身礼と平伏礼の際にクルアーンを誦むことを禁じられました（注）。
だから屈身の際には偉大で栄光に満ちた主を讃美し平伏の際には祈りに専念しなさい、そうすればアッラーはきっとあなた達に応えてくれるでしょう」
ところでアブドッラー・ビン・アッバースはこう伝えている。
アッラーの使徒がカーテンを開けた時、彼の頭はそれがもとで死んだ病気のために包帯されていました。
そして彼は次の言葉を三回繰り返した。
「おおアッラー、私は啓示を伝えてしまったでしょうか」
その後彼は次のように伝えた。
「敬虔な下僕がみる正夢かまたは見せられる正夢以外はもはや預言による福音は残っていません」
それから彼は前記のハディースと同じハディースを伝えた。
（注）この二つの動作はアッラーに対する人間の絶対服従の姿を示したものであるからアッラーを讃えアッラーに祈ることは当然である。
従ってクルアーンの読誦は立礼の際に限って唱えるべきこともまた当然である
アリー・ビン・アブー・ターリブは次のように伝えている
アッラーの使徒は私が屈身礼または平伏礼を捧げる際にクルアーンを誦むことを禁じた。
アリー・ビン・アブー・ターリブは次のように伝えている
アッラーの使徒は私が屈身礼または平伏礼にある間はクルアーンを誦むことを禁じました。
アリー・ビン・アブー・ターリブは次のように伝えている
アッラーの使徒は私が屈身礼または平伏礼を捧げる間はクルアーンを誦むことを禁じた。
しかし私は彼があなた方にも禁じたとはいいません。
アリーは次のように伝えています
私の敬愛する預言者は私が屈身礼と平伏礼を行っている間はクルアーンの読誦を禁じました。
アリーは次のように伝えている
預言者は私が屈身礼を行う際にその間にクルアーンを誦むことを禁じました。
しかしこのハディースでは前記三つのハディースが伝えているような平伏礼中の禁止を伝えてい

ない。

同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。

イブン・アッバースは伝えている

私は屈身礼中にクルアーンを誦むことを禁じられた。

しかしここではアリーの名が伝承者中に述べられていない。

屈身礼と平伏礼中の言葉について

屈身礼と平伏礼の際に唱える言葉
1巻　P.334-337

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
下僕が己れの主に一番近い時は平伏している時である。だからその時はドアー（祈願）をより多く唱えよ。
アブー・フライラは伝えている
アッラーの使徒は平伏礼の際に次のように祈るのが常でした。
「おおアッラー、小さいものから大きいものまで、最初のものから最後のものまで、顕かなものから隠れたものまで私の罪の一切をどうかお赦し下さい」
アーイシャが次のように伝えている
アッラーの使徒は屈身礼と平伏札の際に次のように何度も祈ったものでした。
「あなたに讃えあれおおアッラー、我等が主、どうか私をお赦し下さい」
このようにして彼はクルアーンに命じられた（第110章3節など）通りに行動した。
アーイシャが伝えている
アッラーの使徒は彼の死の前に次のように何度も祈っていた。
「あなた（アッラー）に栄光あれ、また私はあなたへの称讃、により（あなたを念じます）、あなたにお赦しを請い願い改悛致します」
ついでアーイシャが次のように尋ねた。
「アッラーの使徒よ、あなたが唱えているそれらの言葉は何ですか」
すると彼は次のように言った。
「我がウンマ（イスラームの信仰共同体）に対するみしるしが私に与えられた。
私はそれを見た時それ（前述の祈願の言葉）を口にしたのです。
そのみしるしとは「アッラーのお助けと勝利が来た時…」以下の一章（第110章全3節）全部です（注）」
（注）勝利とはマッカ征服などのイスラームの大勝利、この章は短いのでマッカ啓示と間違いやすいが預言者によるマッカ征服の後に下ったつまりマディーナ啓示である
アーイシャは次のように伝えている
私は預言者に「アッラーのお助けと勝利が来て…」（第110章）の一章が啓示されて以来、常に彼が礼拝中にドアー（祈願）を唱えるか或いは次のような祈りの言葉を唱えずに礼拝を捧げる彼の姿を見たことはありませんでした。
その祈りの言葉とは“あなたに栄光あれ、我が主よ、あなたへの称讃により（あなたを念じます）、おおアッラーどうか私の罪をお赦し下さい”という言葉です。
アーイシャは次のように伝えている
かつてアッラーの使徒は次の祈りの言葉を何度も繰り返したものでした。

“アッラーに栄光あれ、彼への称讃により、私はアッラーにお赦しを請い願う、私はアッラーの元に立ち返り改悛致します”
さてそこで私（アーイシャ）はこういった。
「アッラーの使徒よ、あなたは“アッラーに栄光あれ、彼への称讃により、私はアッラーにお赦しを請い願う、私はアッラーの元に立ち返り改悛致します”という祈りの言葉を断えず繰り返していますね」
すると預言者は次のように仰せられた。
「主は我がウンマにみしるしを見るだろうと私に告げた。
そして私はそれを見たのでこの祈りの言葉“アッラーに栄光あれ、彼への称讃により、私はアッラーにお赦しを請い願う、私はアッラーの元に立ち返り改悛致します”を多く唱えるようにしたのです。
なぜならそのみしるしとは「アッラーのお助けと勝利（マッカ征服のこと）が来て、人々が大挙してアッラーの教えに入信するのを見たら、汝の主の栄光を讃美し、主のお赦しを請い願え、主はまことによくお赦しなさるお方」（第110章）の一章のことであると私は考えているからです」
イブン・ジュライジュが伝えている
私がアターに屈身礼の際に何と唱えるか尋ねたところ彼は次のように語った。
“あなた（アッラー）に栄光あれ、あなたへ、の称讃により、あなた以外に神はなし”と唱えます。
なぜならイブン・アブー・ムライカがアーイシャからの伝聞として次の話を私（アター）に伝えてくれたからです。
私（アーイシャ）は或る夜のこと預言者を見失いました。
その時私は彼が他の妻の所に行ったのだろうと思って捜しに出かけた後戻ってみると彼は屈身礼かまたは平伏礼の最中でした。
そのとき彼は、“あなたに栄光あれ、あなたへの称讃により、あなた以外に神はない”と唱えていました。
それで私はこう言いました。
「あなたは私の父母にもかえがたいお方、私はあることを考えていました。
ところがあなたは別なことに専念していました（注）」
（注）アーイシャは預言者が他の妻の所に行ってしまったと考えた。
ところが彼は勤行中であったの意
アーイシャは次のように伝えている
私は或る夜アッラーの使徒が寝床からいなくなっていることを知りました。
そこで手探りで彼を捜した所私の手が彼の足の裏に触れました。
その時彼は平伏礼の最中で二つの足の裏は立っていました。
そして次のように祈っていました。
「おおアッラー、私はあなたの怒りを逃れてあなたのご満悦を請い願う、そしてあなたの罰より逃れてあなたのお赦しを請い願う
（つまりあなたのお怒りから逃れてあなたのお助けを請い願う）

あなたが自らご自身を称讃するように私はあなたを数えきれない位称讃致します」
アーイシャは次のように伝えている
アッラーの使徒はかつて屈身礼と平伏礼の際には次のように唱えたものでした。
「栄光の極み、神聖の極み、天使と霊魂の主よ」
前記同様のハディースが別の伝承者経路を経てアーイシャからの伝聞として伝えられている。

平伏礼の美徳について

平伏礼の美徳とそのすすめ
1巻　P.337

マアダーン・ビン・タルハ・ヤアマリーが次のように伝えている
私はアッラーの使徒の解放奴隷のサウバーンに出会った。
そこで私は彼にアッラーが天国に入れて下さる行為或いはアッラーが最も好ましいとする行為は何かと尋ねた。
しかし彼は黙っていた。
そこで私は再び尋ねたがやはり彼は黙っていた。
私が三度目に尋ねると彼は次のようにいった。
私（サウバーン）はアッラーの使徒にそのことを尋ねました。
すると使徒はこういった
「アッラーにたくさん平伏礼をしなさい、あなたがアッラーに一度平伏すればアッラーはそれでもってあなたの天国での地位を一段と高く上げてくれあなたの過ちを一つ消してくれます」
さらにマアダーンは次のように付け加えた。
その後私（マアダーン）はアブー・ダルダーウに会ってそのことを聞きました。
すると彼はサウバーンが私に話したことと同じことを語った。
ラビーア・ビン・カアブ・アスラミーは次のように伝えている
私はアッラーの使徒と一緒に夜を過しました。
私が浄めの水と彼の必要とする物（注）をもって行くと彼は私に「何でも尋ねなさい」といいました。
それで私はこういった。
「天国でのあなたの仲間について聞きたい」すると彼は「その他何かありませんか」といった。
私は「それが全てです」と答えた。
そこで彼はこういった。
「それならあなた自身のためにもどうかたくさん平伏しなさい」
（注）歯ブラシ（ミスワーク）、礼拝用敷物など

平伏礼中の動作に関して

平伏礼の際の四肢の動作と礼拝中に服や髪を捉むことや
髪を編むこと等は禁止されていること
1巻　P.338-339

イブン・アッバースは伝えている
預言者は平伏礼をする際に身体の七ヶ所を地面につけるよう命じられました。
また預言者はその際に髪や服を捉むことも禁じられた。
以上はヤヒヤーの伝承ですがアブー・ラビーウによるハディースでは“七つの骨は地面につけても、髪と服を捉むことは禁じられた”とあり、七つの骨とは両手の掌、両膝、両爪先と額のことです。
イブン・アッバースは預言者が次のようにいったとして伝えている
「私（預言者）は七つの骨を地面に付けて平伏礼をするように命じられました。
また服や髪を捉まないよう命じられました」
イブン・アッバースは伝えている
預言者は（身体の）七ヶ所を地面に付けて平伏するようにまた髪や服を捉まないよう命じられました。
イブン・アッバースはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「私は七つの骨、つまり額?この時彼は指で自分の鼻を指した?と両手と両足と両爪先を地面に付けて平伏するように命じられました。
また我々は髪や服をたぐることも禁じられました」
イブン・アッバースはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「私は身体の七ヶ所を地面に付けて平伏するよう、また髪や服をたぐらないよう命じられました。
その七ヶ所とは額と鼻、両手、両膝、両爪先です」
アッバースはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「神の下僕が平伏する際には身体の七ヶ所を地面に付けて平伏します。
それらは顔と両手の掌と両膝と両爪先です」
アブドッラー・ビン・アッバースは次のように伝えている
彼（イブン・アッバース）はアブドッラー・ビン・ハーリスが礼拝している姿を見たがその時イブン・ハーリスの頭髪は編まれて後方に束ねられていた。
そこで彼（イブン・アッバース）は立ち上がってそれを解いてやった。
礼拝が終わってイブン・ハーリスが退参しようとした時イブン・アッバースに出会ったのでこう言った。
「どうして私の頭に触れたのですか」
するとイブン・アッバースはアッラーの使徒から次のような言葉を聞いたといった。

「このような者（髪を頭の後方に束ねて礼拝する人）は両手を後に縛られたまま礼拝する人のようなものだ」

平伏礼中の手の配置に関して

平伏は適当な長さに、その時両手の掌を地面につけ、
両肘を適度に脇腹から離し、腹は両膝から離すこと
1巻　P.339

アナスはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えた
「平伏礼はバランスよくしなさい、犬のように前腕を地面に付けて伸ばしてはならない（注）」
（注）この姿勢は礼拝を軽視した態度とみられる
同様のハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。
また別の伝承者の一人イブン・ジャアファルのハディースでは“誰でも犬が前腕を伸ばすように前腕を伸ばしてはいけない”と伝えている。
バラーウはアッラーの使徒がいったとして次のように伝えている
あなたが平伏する時は両手の掌を地面に付けて両肘を上げなさい。

礼拝の仕方の総括に関して

礼拝の仕方の総括、
礼拝の開始、礼拝の終了、
屈身礼とその標準的動作、平伏礼とその標準的動作、
各ニラカート終了後の証言儀礼、
二回の平伏礼の間の座礼、
最初の証言儀礼中の座礼等について
1巻　P.340-341

アブドッラー・ビン・マーリク・ビン・ブハイナは次のように伝えた
アッラーの使徒は礼拝をする時、彼の両脇の下の白さが見えるくらいまで両腕の間を広げました（注）。
（注）つまり日焼けしていない白い部分
前記同様のハディースが別の伝承者経路を経てジャアファル・ビン・ラビーアによって伝えられている。
またアムル・ビン・ハーリスの伝える所では“かつてアッラーの使徒は平伏をする際に白い両脇の下が見えるまで両肘を広げました”とある。
ライスの伝えるハディースでは“アッラーの使徒は平伏する際に彼の白い脇の下がはっきりと見えるまで両手を広げました”とある
マイムーナ（預言者の妻の一人）は次のように伝えている
かつて預言者は平伏する時には雌の仔やぎが彼の両手の間を通ろうとすれば通れる位広げました。
マイムーナは次のように伝えている
かつてアッラーの使徒は平伏する時両手を広げ、つまり（両腕を）かなり離したので彼の後方から白い脇の下が見えるくらいでした。
そして座礼に移った際には左の太股に体重をかけて座ったものでした。
ハーリスの娘マイムーナは伝えている
アッラーの使徒が平伏した際には彼の背後にいる者から彼の両脇の下の白さが見えるまで両手を大きく広げたものでした。
ワキーウはこれを解説してこういった。
“つまり両脇の下の白い部分が見えるまで”
アーイシャは次のように伝えている
かつてアッラーの使徒は礼拝をタクビールを唱えて開始したがそれにつづくクルアーンの読誦は開扉章から始めたものでした。
そして屈身礼をした際には頭を下げ過ぎることもなく上げ過ぎることもなく中間位置まで下げました。

そして屈身姿勢から頭を上げた際にはまっすぐに直立するまでは次の平伏礼の動作に移りませんでした。
そして平伏姿勢から頭を上げる際にはきちんと正座に戻るまでは次の平伏の動作に移りませんでした。
そして各二ラカートの終り毎にタヒイーヤ（証言儀礼）の言葉を唱えました。
その際彼の左足の甲は地面に伸ばされ右足の甲は立てられていました。
また彼は両踵を立てたままその上に座る悪魔の座り方を禁じ、獣がする肘を地面に付けて伸ばす仕草（平伏礼の際）も禁じました。
そして礼拝の終りはタスリーム（左右への挨拶儀礼）をもって完了しました。

礼拝者のストラについて

礼拝者のストラ（遮蔽物（注））について
（注）礼拝者が眼前の地面に置いて礼拝場所と一般の通行人の往来とを観念の上で仕切る目印となる物
1巻　P.341-345

ムーサー・ビン・タルハは彼の父からの伝聞としてアッラーの使徒の言葉を次のように伝えている
「あなた達の誰でも自分の前に鞍の後部のような物を置いて礼拝するならばその向う側を歩いている人を気にする必要はありません」
ムーサー・ビン・タルハは彼の父の話として伝えている
私達が礼拝しているとよくその前を家畜が通るのでアッラーの使徒にそのことを話しました。
すると彼は次のようにいった。
「鞍の後部のような物をあなた達の前に置けばその前を通るものは何も害になりません」
イブン・ヌマイルが伝えたところによれば"そうすればその前を通る者があっても害になりません"とある。
アーイシャは伝えている
アッラーの使徒は礼拝者のストラについて尋ねられた。
そこで彼は“鞍の後部のような物”と答えた。
アーイシャは伝えている
アッラーの使徒はタブークの戦いの時礼拝者のストラについて尋ねられた。
それで彼は“それは鞍の後部のようなもの”と答えた。
イブン・ウマルは次のように伝えている
アッラーの使徒はイード（大祭）の礼拝に出かける時に槍をもって行くよう命じた（注）。
そしてそれは彼の前にしっかりと据えられた。
それから彼は槍に向かって礼拝し人々は彼の背後で礼拝した。
また彼は旅行中でもこのように礼拝した。
こうして後にアミール達が（旅に出る際に）槍を持って出かけるようになった。
（注）多分イードの礼拝は当時はモスクではなくマディーナの郊外の砂漠て行っていたためか
イブン・ウマルが伝えている
預言者はストラを地面に突き立てたものでした。
アブー・バクルは（預言者が）“短い槍を地面に突きさしそれに向かって礼拝した”といった。
イブン・アブー・シャイバはそれに加えて“ウバイドッラーがそれは長槍だったといった”と伝えた。
イブン・ウマルは伝えている
預言者は彼のらくだをマッカの方向に横にして座らせそれに向かって礼拝した。

イブン・ウマルが伝えている
預言者は彼のらくだに向かって礼拝しました。 イブン・ヌマイルの伝えるところでは“預言者はらくだに向かって礼拝した”
アブー・ジュハイファは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
私（父）はマッカの預言者の所にやって来ました。
その時彼はアブタフ（バトハーとも言う）という所の赤い皮製のテントの中に居ました。
やがてビラールが預言者のための浄めの水を持って出てきました。
残りの水は一部の者がなにがしかそれを受け、また他の者はさらにそれを別の人々に振りまいていた。
そして預言者も赤い上衣を着用して出て来ました。
その時私はちらっと彼の白い脛を見ました。
彼は浄めを行いビラールがアザーンを詠唱した。
そこで私は彼の口の動きに合わせて彼が右を向いて唱える時には右を、左を向いて唱える時には左を向いて次のように唱えた。
「礼拝に来たれ、成功のために来たれ」
その後預言者の短い槍が地面に突き立てられると彼は前に進み出てズフルの礼拝を二ラカート行った。
その時彼の前を一匹のろばと犬が通り過ぎて行きましたが彼は気にしませんでした。
それから彼はアスルの礼拝を二ラカート行いそれからマディーナに帰るまで二ラカートの礼拝を続けました（注）。
（注）旅行中の礼拝規定によって短い
アブー・ジュハイファは父からの伝聞として次のように伝えている
私（父）はアッラーの使徒を赤い皮製のテントの中で見ました。
そしてビラールが預言者が残したウドゥー（浄め）の水を持ち出すところを見ました。
そこで人々が競ってその浄めの水を得ようとしている光景を見ました。
それをいくらか手に入れた者はそれで拭うようにして浄め、またその水を手に入れられなかった者は手に入れた者の手から雫をもらっていました。
それからビラールが短い槍を取り出して来てそれを地面に突きさしたところを私は見ました。
それからアッラーの使徒が赤い上衣を着て急いで出て来てそれ（槍）に向かって二ラカートの礼拝を人々を導いて行ったがその時私はその槍の前を人間や家畜の群が通り過ぎていった光景を見ました。
アウヌ・ビン・アブー・ジュハイファは彼の父親からの伝聞として前記のハディースが伝えたように預言者について伝えている。
ところでウマル・ビン・アブー・サーイダはそれに付け加えて“（人々は）相互に先を競って”と伝えた。
またマーリク・ビン・ミグワルのハディースでは“正午になった時、ビラールが出てきてズフルの礼拝の呼びかけをした”とある。

アブー・ジュハイファは次のように伝えている
アッラーの使徒は正午にバトハーに出て行き、浄めをしてズフルの礼拝を二ラカート行いそれからアスルの礼拝を二ラカート行った。
その時彼の手前の所には短い槍がささっていた。
ところでシュウバはアウヌが彼の父アブー・ジュハイファからの伝聞として次のように付け加えたとして伝えている。
“その槍の向こう側を女やろばが通り過ぎていった”
シュウバは別の二つの伝承者経路によって前記と同じハディースを伝えているが、ハカムのハディースはそれに加えて“そこで人々は預言者の浄めに使った水の残りをとり始めた”とある。
イブン・アッバースは次のように伝えている
私は雌ろばに乗ってやって来ました。
その時私は成人になる少し手前の年頃でした。
アッラーの使徒はミナーの谷で人々を導いて礼拝をしていました。
私はその礼拝列のまん前を横切りそれからろばから降り、草を食べさせるためにそれを解き放ちました。
そして私は礼拝の列に加わったのですが誰もそのことで私を責める者はいませんでした。
アブドッラー・ビン・アッバースは次のように伝えている
彼（アブドッラー・ビン・アッバース）はろばに乗ってやって来た。
それは離別の巡礼の年のことでアッラーの使徒はミナーの谷で人々を導いて礼拝していました。
ところでろばはその礼拝列の前を通り過ぎました。
それから彼（イブン・アッバース）はろばから降りて人々と一緒に礼拝列に加わりました。
同様のハディースが同一伝承者経路を経てズフリーからの伝聞としてイブン・ウヤイナによって伝えられている。
しかし彼は“その時預言者はアラファの谷で礼拝していた”と伝えている。
同様のハディースをマアマルがズフリーからの伝聞として同一伝承者経路を経て伝えているがそこではミナーの谷ともアラファの谷ともいっていない。
しかし彼は“離別の巡礼かまたはマッカ開城の日かのどちらかの日に”と伝えている。

礼拝者の面前歩行に関して

礼拝者の手前を歩く通行人は阻止されるべきこと
1巻　P.345-346

アブー・サイード・フドリーはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
「もし誰かが礼拝していたら誰も彼の手前を通させるべきではない。
通行人は出来るだけ遠ざけるべきである。
もし彼が拒否するならば力ずくでも遠ざけるべきである。
なぜならば彼はシャイターン（悪魔）だからである」
アブー・サーリフ・サンマーンは次のように伝えている
私はアブー・サイード・フドリーから聞いたことまた彼について私が見たことを話しましょう。
或る日それは金曜日だったが私はアブー・サイードと一緒でした。
彼は人々から彼を遮蔽する物（ストラ）に向かって礼拝していた。
そこにアブー・ムアイト族の若者が来て彼の面前を通り過ぎようとした。
そこで彼はその若者の胸元を押しやった。
しかしその若者はアブー・サイードの前しか通り道を見つけられず再び通り過ぎようとしたので、彼は初回よりもっと強く彼の胸元を打って押しもどした。
すると若者は立ちはだかりアブー・サイードに捉みかかった。
それから人々が集まってきてごった返したのでその若者はそこを抜け出しマルワーン（ウマイヤ朝のカリフ）の所に行き己れがうけた仕打ちを彼に訴えた。
一方アブー・サイードもまたマルワーンの所に行ったのでマルワーンは彼にこういった。
「一体どうしたというんだ。
あなたの兄弟の息子（同じ宗門の信徒）が来てあなたのことを非難していた」
するとアブー・サイードはアッラーの使徒から次のような言葉を聞いたとしてこういった。
「誰かがストラに向かって礼拝している時彼の（面）前を通ろうとする者がいたらその者の胸元を打って押し戻しなさい。
もし彼が抵抗するならば力ずくでも阻止すべきだ。
なぜなら彼は悪魔だからだ」
アブドッラー・ビン・ウマルはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている
「誰かが礼拝中の時は彼の面前を誰も通させてはならない。
もし拒むようならば力ずくでも止めさせなさい。
なぜならその者には悪魔がついているからです」
イブン・ウマルは前記ハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。
ブスル・ビン・サイードは次のように伝えている
ザイド・ビン・ハーリド・ジュハニーはアブー・ジュハィムの所にアッラーの使徒が礼拝者の面前を通る者について何といったかを聞くために彼（ブスル）を使いとして送った。

それでアブー・ジュハイムはアッラーの使徒が次のようにいったとして語った。
「通行人が礼拝者の面前を通る時、己れがどんな罪を犯しているかを知るならば立ち止まるべきである。
礼拝者の面前を通るよりも立ち止まって40（年）でも待つべきだ」
ところでブスル・ビン・サイードからこのハディースを伝えられた伝承者の一人アブー・ナドルはこういっている。
「私は彼がその時40日といったか10ヶ月といったのか或いは40年といったのかは知りません」
アブー・ジュハイム・アンサーリーは前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

礼拝地点とストラの間隔に関して

礼拝地点とストラの間の間隔をつめること
1巻　P.347

サハル・ビン・サアド・サーイディーは次のように伝えている
アッラーの使徒の礼拝地点と壁との間には羊が一頭通れるだけの空間があった。
サラマ・ビン・アクワウは伝えている
彼（サラマ）はアッラーを讃えるための場としてクルアーンが置かれている場所を捜したものでしたが彼はこう言った。
アッラーの使徒もまたいつもそうした場所を捜すのが常でした。
またミンバル（説教台）とキブラ（マッカの方角を示すモスク内の壁面）の間は羊が一頭通れる空間がありました。
ヤジィードは次のように伝えている
かつてサラマは礼拝の場所としてクルアーンが保管してある柱のそばを捜し求めたものでした。
そこで私は彼にこういった。
「アブー・ムスリム（サラマ）よ、あなたは礼拝する場所としてこの円柱を捜していたようですね」
すると彼はこう言った。
「私は礼拝の際この場所を捜していた預言者を見ました」

ストラの効力に関して

礼拝者を遮蔽するもの（ストラ）の効力
1巻　P.347-348

アブー・ザッルはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「誰でも彼の前に鞍の後部のような物を置いて礼拝する時それは彼を隠していることになる。
もし彼の前に鞍の後部のような物が無くろばや女性や黒犬が通過した場合には彼の礼拝は無効になる（注）」
そこでアブー・ザッルからこのハディースを聞いた伝承者の一人はこう尋ねた。
「なぜ赤犬や黄色犬でなく黒犬なのですか」
すると彼（アブー・ザッル）はこう答えた。
「私の兄弟の息子よ、私はアッラーの使徒にちょうどあなたが私に尋ねたように質問しました。
すると預言者はこういった。
『黒犬は悪魔だからです』」
（注）一時的に礼拝者の気が散る意味であり、やり直しを要求するほど完全に無効になる意味ではない。
気が散る理由はろばの声は耳ざわりで黒犬の姿は醜く女性の姿は魅力的だからであると考えられている
同様のハディースがユーヌスからの伝聞として別の伝承者経路で伝えられている。
アブー・フライラはアッラーの使徒がいったとして次のように伝えている
「女性とろばと犬（が礼拝者の面前を通過した場合）はその礼拝を無効にする。
しかし鞍の後部のような物はそれを防ぎ礼拝を有効にする」

礼拝者の面前横臥について

礼拝者の面前に横たわること
1巻　P.348-350

アーイシャは次のように伝えている
預言者は夜中に礼拝したものでしたが、その時私は彼とキブラの間に寝ており、ちょうど葬儀礼拝の時のように私はキブラとイマームの間に安置された死体のようでした（注）。
（注）このハディースは女性が礼拝者の前を通りかかっても礼拝は無効にならない証左
アーイシャは次のように伝えている
預言者は夜通し礼拝したものでしたがその時私は彼とキブラの間で寝ていました。
そして彼がウイトル（一または三の奇数ラカートの礼拝）の礼拝をする時には私を起こしたので私もウイトルの礼拝をしました。
ウルワ・ビン・ズバイルは次のように伝えている
アーイシャが礼拝を無効にするものは何かといったので私たちは“女性とろばです”といった。
すると彼女はこういった。
「女性が動物のように悪いのですか、私はアッラーの使徒の面前で葬儀礼拝の時の棺中の死体のように横たわって寝ていました。
それでも彼は礼拝しました」
マスルークは次のように伝えている
アーイシャのいる所で“礼拝を無効にするものは犬とろばと女性である”ということが語られた。
ところが彼女はこういった。
「あなた達は私たちをろばや犬にたとえましたね。
アッラーに誓って、アッラーの使徒は私が彼とキブラの間の寝台に横たわっているにもかかわらず彼は礼拝しました。
私は（生理的欲求など）何か必要を感じた時はアッラーの使徒の面前で起きて座ることになり彼を邪魔することになるのでその時は（そうなることを避けて）ベッドの脚の間からそっとすり抜けて出ました」
アスワドはアーイシャがいったとして次のように伝えている
「あなた達は私達女性を犬やろばと同じだとしてたとえました。
ところで私がベッドに寝ているとアッラーの使徒がそこへやって来てベッドの真中あたりを前にして礼拝を始めました。
このような中で私は掛け布団を取り去ることを好まなかったので静かにベッドの前の方の脚の所からすり抜けて掛け布団から抜け出ました」
アーイシャは次のように伝えている
「私がアッラーの使徒の前に寝ていると丁度私の足が彼とキブラの間にありました。
それで彼が平伏礼をする時には私を締めつけることになり私は足を引っ込めました。

そして彼が平伏を終えて立ち上がると私は両足を伸ばしました」
そして彼女はこう付け加えた
「その当時はどこの家にもランプがありませんでした」
預言者の妻マイムーナが伝えています
「預言者は礼拝中でした。
その時私は生理中でしたので彼とは反対側に寝ていましたが彼が平伏するとしばしば私の上に彼の服がかかりました」
アーイシャは次のように伝えている
「アッラーの預言者は夜中に礼拝していた。
その時私は生理中で彼の脇にいて布をかぶっていましたがその一部は彼の方にもかかっていました」

礼拝者の面前横臥について

礼拝者の面前に横たわること
1巻　P.348-350

アーイシャは次のように伝えている
預言者は夜中に礼拝したものでしたが、その時私は彼とキブラの間に寝ており、ちょうど葬儀礼拝の時のように私はキブラとイマームの間に安置された死体のようでした（注）。
（注）このハディースは女性が礼拝者の前を通りかかっても礼拝は無効にならない証左
アーイシャは次のように伝えている
預言者は夜通し礼拝したものでしたがその時私は彼とキブラの間で寝ていました。
そして彼がウイトル（一または三の奇数ラカートの礼拝）の礼拝をする時には私を起こしたので私もウイトルの礼拝をしました。
ウルワ・ビン・ズバイルは次のように伝えている
アーイシャが礼拝を無効にするものは何かといったので私たちは“女性とろばです”といった。
すると彼女はこういった。
「女性が動物のように悪いのですか、私はアッラーの使徒の面前で葬儀礼拝の時の棺中の死体のように横たわって寝ていました。
それでも彼は礼拝しました」
マスルークは次のように伝えている
アーイシャのいる所で“礼拝を無効にするものは犬とろばと女性である”ということが語られた。
ところが彼女はこういった。
「あなた達は私たちをろばや犬にたとえましたね。
アッラーに誓って、アッラーの使徒は私が彼とキブラの間の寝台に横たわっているにもかかわらず彼は礼拝しました。
私は（生理的欲求など）何か必要を感じた時はアッラーの使徒の面前で起きて座ることになり彼を邪魔することになるのでその時は（そうなることを避けて）ベッドの脚の間からそっとすり抜けて出ました」
アスワドはアーイシャがいったとして次のように伝えている
「あなた達は私達女性を犬やろばと同じだとしてたとえました。
ところで私がベッドに寝ているとアッラーの使徒がそこへやって来てベッドの真中あたりを前にして礼拝を始めました。
このような中で私は掛け布団を取り去ることを好まなかったので静かにベッドの前の方の脚の所からすり抜けて掛け布団から抜け出ました」
アーイシャは次のように伝えている
「私がアッラーの使徒の前に寝ていると丁度私の足が彼とキブラの間にありました。
それで彼が平伏礼をする時には私を締めつけることになり私は足を引っ込めました。

そして彼が平伏を終えて立ち上がると私は両足を伸ばしました」
そして彼女はこう付け加えた
「その当時はどこの家にもランプがありませんでした」
預言者の妻マイムーナが伝えています
「預言者は礼拝中でした。
その時私は生理中でしたので彼とは反対側に寝ていましたが彼が平伏するとしばしば私の上に彼の服がかかりました」
アーイシャは次のように伝えている
「アッラーの預言者は夜中に礼拝していた。
その時私は生理中で彼の脇にいて布をかぶっていましたがその一部は彼の方にもかかっていました」

礼拝時の着衣に関して

一枚の衣（布地）で礼拝することとその着用の仕方について（注）
（注）通常は一枚は腰巻風にもう一枚は上半身を被うため二枚は必要であったと思われる
1巻　P.350-352

アブー・フライラは伝えている
或る質問者が一枚の衣（布）で礼拝することについて預言者に尋ねた所、彼はこういった。
「あなた達は誰でも皆二枚の衣を持っているではありませんか（注）」
（注）一枚の布では上半身を被うことができない恐れがあるので出来るだけ二枚で身体を包みなさいという意
同様のハディースが別の伝承者経路を経てアブー・フライラによって伝えられている。
或る男が預言者に呼びかけてこういった。
「誰でも一枚の衣で礼拝してもいいですか」
これに対して預言者はこう答えた。
「皆さんの誰でも二枚の衣位は、お待ちではありませんか」
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「両肩がかくれない一枚の衣で礼拝してはなりません」
ウマル・ビン・アブー・サラマは伝えている
私はウンム・サラマの家でアッラーの使徒が両端が肩にかかる一枚の衣に身を包んで礼拝しているところを目撃しました。
また同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられているがそれには"包んで"という言葉のかわりに“纏って（注）”という言葉で伝えている。
（注）元の意味は一枚の布を左肩の上で袈裟掛けにしてまとうこと
ウマル・ビン・アブー・サラマは伝えている
私はウンム・サラマの家でアッラーの使徒が両端が交差する一枚の衣で礼拝するところを目撃した。
ウマル・ビン・アブー・サラマは伝えている
私はアッラーの使徒が両端が互いに交差する一枚の衣に身を包んで礼拝するところを目撃した。
ところでこのハディース伝承者のある者はこれに加えて“彼の両肩の上で（両端が）”として伝えている。
ジャービルは次のように伝えている
私は預言者が両端が交差した一枚の衣を身に纏って礼拝する姿を見ました。
スフヤーンは前記のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。
また伝承者のある者は“私はアッラーの使徒を訪問した”と記している。
アブー・ズバイル・マッキーは次のように伝えている
彼（アブー・ズバイル）はジャービル・ビン・アブドッラーが両端が交差している一枚の衣で礼

拝しているところを見た。
ところで彼（ジャービル）にはまだたくさん着物があったが（注）彼はこう言った。
「アッラーの使徒がこうするところを見た」
（注）ジャービルがこのような行動をとったのは止むを得ない場合には一枚の衣で礼拝してもよいことを単に示したかったから
アブー・サイード・フドリーは伝えている
彼は預言者を訪ねたがそこで彼はこう伝えている。
私は預言者が葦で編んだ敷物の上で平伏している姿を見た。
また私は彼が両端の交差した衣を身に纏って礼拝しているところを見た。
前記のハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。
ところで伝承者の一人アブー・クライブは“両肩の上にその両端を置いて”として伝えている。
またアブー・バクルとスワイドの伝承には“両端を交差させて”とある。

タイトルなし
1巻　P.353-356

アブー・ザッルは次のように伝えている
私は（預言者に）こう尋ねた。
「アッラーの使徒よ、この地上で最初に定められたモスクはどれですか」
すると彼はこういった。
「マッカの聖モスクです」
そこで私はさらにこう尋ねた。
「その次はどれですか」
すると彼はいった。
「エルサレムのアクサー・モスクです」
そこで私はさらに尋ねてこういった。
「二つの間には何年の開きがありますか」
すると彼は次のように語った。
「40年です（注）。しかしどこで礼拝の時刻が来ようとも、あなたはその場で礼拝しなさい。そこがモスクなのです」
またアブー・カーミルが伝えたハディースでは次のようになっている。
「それから礼拝時刻になったらあなたはその場で礼拝しなさい。なぜならそこがモスクだからです」
（注）議論のある所である。
第一の説はどちらのモスクも最初にアダムが建設してその間は40年の開きがあったという主張。
第二の説はエルサレムのモスクは最初にソロモンが建立したのではなく預言者ヤコブが建設したとし預言者イスマイールが父アブラハムとともに建立したカーバ神殿との開きが丁度40年になるというもの
イブラヒーム・ビン・ヤジィードは伝えている
私はモスクの中庭で父にクルアーンを読んで聞かせていました。
私がサジダ（平伏）と書いてある一節を読んだ時、父は実際にその場で平伏した。
そこで私は彼にこういった。
「お父さん、道路であなたは平伏するのですか」
すると父はこういった。
「私はアブー・ザッルが次のようにいったことを聞いています」
「私（アブー・ザッル）がアッラーの使徒にこの地上で最初に定められたモスクについて尋ねたら、彼は『マッカの聖モスクだ』といいました。
そしてさらに私が『その次はどれですか』と尋ねると彼は『エルサレムのアクサー・モスクだ』

といいました。
それで私は『二つの間には何年の開きがあるのですか』と尋ねると彼は次のように答えていった。
『40年です。その後大地はあなたにとってモスクになりました。だから礼拝の時刻になったらその場で礼拝しなさい』」
ジャービル・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が語ったとして次のように伝えている
「私は以前には誰一人として与えられなかった五つ（の特典）を授けられた。
即ち、かつての預言者達はそれぞれ彼の属する特定民族のために特に遣わされました。
しかし私は全ての赤い人（注1）や黒人のために遣わされました。
また私には私以前には許されなかった戦利品の分け前を手に入れることが許された。
また私のためにこの大地は豊かで清浄なものとされ大地をモスクとすることが許された。
だから誰でも礼拝の時刻になったらその場で礼拝すべきです。
また私は人が歩いて一ヵ月もかかるほど遠くにいる敵をも飲み込んでしまう（敵の）恐怖心によって助けられた（注2）」
また私はシャファーア（来世におけるアッラーへの執り成し）の特権を与えられた（注3）。
（注1）黒人に対する白人系人種のこと
（注2）しばしば戦わずして勝利をおさめた初期イスラームの歴史を暗示している
（注3）執り成しの特権は多くの預言者に与えられたがここでは他の預言者には与えられなかった最後の審判の日の執り成し特権について語られている
ジャービル・ビン・アブドッラーの伝えた同様のハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。
フザイファはアッラーの使徒が語ったとして次のように伝えている
「我々（イスラーム教徒）は三つの点で他の人々に卓越するように定められた。
私達の礼拝時の人列は（天上の）天使の隊列と同じである。また大地は全てモスクとされその土は水のない時でもそれでもって浄められることとされた（注）」
フザイファはさらにこう伝えた。
それから彼（預言者）はもう一つの卓越した点を述べた。
（注）水の無い場合は砂による清浄行為（タヤンムム）が許されている
同様のハディースがフザイファから別の伝承者経路を経てつたえられている。
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「私は他の預言者達より六つの点で卓越性を授けられた。
私は少ない言葉で豊かな意味を持つクルアーンを与えられた。
また敵の恐怖心によって私は助けられた。
また戦利品の分け前を受けとることが許された。
また大地が清浄なものとされ礼拝所とされた。
また私は全ての被造物（全人類）に使徒として遣わされた。
また私をもって預言者の系譜は封印された」

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「私は少ない言葉で豊かな意味を持つクルアーンを携えて遣わされた。
また私は敵の心に起った恐怖心によって助けられた。
また私は眠っている間に大地の資源を開く鍵（注）を与えられそれらは私の手の中に納められた」
アブー・フライラはさらに次のように伝えている。
かくてアッラーの使徒は昇天されたがあなた達は今それを手に入れることに忙しい。
（注）栄誉とか力とか勝利など精神的なものと解釈する場合と征服に伴う諸王朝の宝物の入手を想定した富や物質と解釈する場合がある
アブー・フライラからの同様なハディースが別の伝承者経路で伝えられている。
このハディースはアブー・フライラから別の伝承者経路を経ても伝えられている。
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「私は敵の心に湧き起った恐怖心によって助けられた。
また少ない言葉で豊かな意味をもつクルアーンを与えられた。
また寝ている間に大地の蔵の鍵を与えられそれが私の手中に置かれた」
ハンマーム・ビン・ムナッビフは次のように伝えている
これはアブー・フライラがアッラーの使徒について語ったいくつかのハディースのうちの一つである。
「私は敵の心に起った恐怖心で助けられました。そして少ない言葉で多くの意味をもつクルアーンを与えられました」

預言者モスクの建設に関して

預言者モスクの建設
1巻　P.356-357

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている
アッラーの使徒がマディーナにやって来た時彼はまず山の手にあるアムル・ビン・アウフ族の居留地と呼ばれるところにとどまり、十四夜の間彼等一族の間で過しました。
それから彼はバヌー・ナッジャール一族（注1）の長老達のもとに使者を送った。
すると長老達は剣を肩にかけてやって来た（注2）。
私（アナス）はアッラーの使徒が彼のらくだに乗りその後ろにアブー・バクルを乗せ、バヌー・ナッジャールの長老達が彼の廻りを囲みアブー・アイユーブの屋敷の空地まで来て（彼のらくだの行進が）ぴたりと止まった光景を目の当りにみる思いがします。
さてアッラーの使徒は礼拝の時刻になるとその場で礼拝したがしばしばやぎと羊の囲い地でも礼拝した。
その後彼はモスクの建設を命じた。
そのため彼は、バヌー・ナッジャール一族の長老達に使いを送った。
それで彼等がやって来た時彼はこういった。
「バヌー・ナッジャール一族よ、あなた達のこの土地を私にいくらで売ってくれますか」
すると彼等はこういいました。
「いいえ、私達はアッラーに誓ってその値としてアッラーからいただきたい報酬以外には何も求めません（注3）」
さてアナスはさらに次のようにつづけて語っています。
そこにはナツメヤシや多神教徒の墓や廃墟がありました。
アッラーの使徒はナツメヤシは切るように多神教徒の墓は掘り起すように、また廃墟は平らにならすよう命じました。
そしてナツメヤシの木はキブラの方角に整然と並べられそして石が戸口の両脇の柱として置かれた。
なお彼等はアッラーの使徒とともにラジャズの歌謡（勤労歌）を歌いながらモスク建設の仕事にはげみました。
その時彼等はこう歌っていました。
「おおアッラー、来世の至福以外に良きものなどありません。
どうか支援者達（注4）と移住者達（注5）をお助け下さい」
（注1）預言者の母アーミナの兄弟達つまり母方の叔父達の一族
（注2）新参者としての預言者の身の安全を守る決意を示す。特にユダヤ教徒を恐れていたという
（注3）実際には10ディーナールで買い取ったともいわれている
（注4）アンサール、マッカからのムスリムを受け入れて支援したマディーナのムスリム達

（注5）ムハージルーン、マッカからマディーナに移住したムスリム達
アナスは伝えている
アッラーの使徒はモスクが建てられる前はやぎや羊の囲い柵の中で礼拝した。
同様なハディースが別伝承者経路を経て伝えられている。

キブラの変更に関して

エルサレムからマッカのカーバ神殿へキブラ（礼拝の方向）を変更したこと
1巻　P.357-359

バラーウ・ビン・アーズィブは次のように伝えている
私は預言者とともに雌牛章の「そしてあなたがたがどこにいようとも、あなた方の顔をそこ（マッカ）に向けなさい」（第2章144節）の節が下るまでエルサレムに向かって16ヶ月間礼拝していました。
ちょうどこの節が啓示された時預言者はすでに礼拝を終った後でした。
そこで彼らの中の一人の男が（新しい啓示をふれ廻るために）出かけたが彼は礼拝中のアンサール（マディーナ在来の信徒）の人々のそばを通りかかり彼等に（アッラーのこの新しい命令を）話したので彼等は顔をカーバ神殿にくるりと向き直しました（注）。
（注）当時マディーナには真のムスリムの他に偽善ムスリムやユダヤ教徒が共同生活をしていたのでキブラの変更というこの事件はそれぞれのグループにそれぞれの反応を引き起した（クルアーン第2章143節参照）。
結局この事件は不安定だったイスラームの信仰共同体（ウンマ）の結束を強固にする分水嶺となった（イスラーム独自の民族的郷土を持つ契機となった）
アブー・イスハークはバラーウから次の言葉を聞いたとして伝えている
私たちはアッラーの使徒と一緒にエルサレムに向かって16ヶ月か17ヶ月の間礼拝していました。
それから私たちの礼拝はカーバ神殿の方向に変えられました。
イブン・ウマルは次のように伝えている
人々がクバーで日の出前の礼拝を行っていると一人の男がやって来てこう伝えました。
「アッラーの使徒は昨夜啓示を受けました。
そしてカーバ神殿に向かって礼拝するよう命じられました。
だからそうするように」
その時彼等はシリアの方向に向いていましたがカーバ神殿の方角にぐるっと向きを変えました。
イブン・ウマルは次のように伝えている
人々が日の出前の礼拝をしている時、一人の男がやって来て………。 前記のハディースと同じことを伝えている。
アナスは次のように伝えた
かつてアッラーの使徒はエルサレムの方角に向かって礼拝していました。
すると次の一節が啓示された
「われ（アッラー）は空をきょろきょろ見廻している汝（ムハンマド）をみた。それならば汝に満足の行く方角を決めてやろう。汝の顔をマッカのカーバ神殿の方角に向けよ」（第2章144節）
さてバヌー・サラマ族の一人の男が歩いていたが彼は途中で日の出前の礼拝で立礼している人々を見た。

その時彼等はーラカートを終えていたが彼は彼等に次のように大声で呼びかけた。
「キブラは既に変更されました」
すると彼等は即座に新しいキブラに向き直った。

モスクの建設場所に関して

モスクを基の上に建てること、そこに絵をかかげること、
また霊廟をモスクとして使用すること等は禁じられていること
1巻　P.359-361

アーイシャは次のように伝えている
ウンム・ハビーバとウンム・サラマがエチオピアで見た教会とその中にあった宗教画についてアッラーの使徒に話した。
すると彼はこういった。
「それらの人々はかつて彼らの間に信心深い男がいてその男が死んだ時、彼の塞の上に礼拝堂を建てその中に彼の肖像画を描いたのだ。
それらの人々は審判の日、アッラーのみもとでもっとも悪しき人々となろう（注）」
（注）偶像崇拝に落ち入り神の唯一性を汚したから
アーイシャは伝えている
彼等（教友達）はアッラーの使徒のもとで彼の病気について互に話しあっていた。
その時ウンム・サラマとウンム・ハビーバは例の教会について語った。
その後は前記ハディースと同様なものが伝えられている。
アーイシャは次のように伝えている
預言者の妻達はエチオピアで見た教会について話し合っていた。
その教会の名前はマリヤといった。
以下は前記ハディースと同じである。
アーイシャは伝えている
アッラーの使徒は彼が二度と再び回復することがなかった最後の病気にかかっている時こういった。
「アッラーはユダヤ教徒とキリスト教徒を呪われた。彼等が彼等の預言者達の墓を礼拝堂としたからです」
ところで彼女（アーイシャ）は（この話に関連して）こうつけ加えた。
「もし万一そうした恐れがなかったなら、彼（預言者ムハンマド）の墓もまた公開の場所に造営されただろう（注）。
だがしかし彼の墓はモスクにされる恐れがあったのです」
（注）預言者の墓は彼がそこで他界したアーイシャの小部屋の中につくられた
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「預言者達の墓を礼拝堂にしたユダヤ教徒をアッラーが滅ぼすように！」
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「預言者の墓を礼拝堂にしたキリスト教徒やユダヤ教徒にアッラーの呪あれ」
アーイシャとアブドッラー・ビン・アッバースは次のように伝えている

アッラーの使徒がまさに息を引き取ろうとしていた時、彼は布を顔の上に引き上げた。
それから苦しくなってそれを顔からとり払いそしてこういった。
「預言者達の墓を礼拝堂にしたユダヤ教徒やキリスト教徒にアッラーの呪あれ」
さて実際の所、彼は彼等異教徒が行った行為を例にとって信徒に警告したのです。
ジュンダブは次のように伝えている
私は預言者が死の五日前に次のようにいった言葉を聞きました。
「私があなた達の中からハリール（親友）を選んだとしてもアッラーの前で潔白です。
なぜならアッラーはイブラヒームをハリールにしたと同じように私をハリールにしました。
もし私が私の信徒集団の中からハリールを選ぶとしたら、きっとアブー・バクルを選ぶでしょう
。
かつてあなた達以前の人々は彼等の預言者の墓や信心深い人の墓を礼拝所にしましたがあなた達は決して墓を礼拝所にしてはならない。
私はそのことをあなた達にしかと禁じましたよ」

モスク建設の美徳に関して

モスク建設の美徳とそのすすめ
1巻　P.361

ウバイドッラー・ハウラーニーが伝えている
ウスマーン・ビン・アッファーンは彼がアッラーの使徒のモスクを建てなおした時、まず人々の意見を聞いたが彼等の意見は好意的ではなかった。
そこで彼はこういった。
あなた達は公正でない、なぜなら私はアッラーの使徒の次のような言葉を聞いています。
「至高なるアッラーのためにモスクを建てた人はアッラーが彼のために天国で家を建ててくださる」
ところでブカイルによれば預言者は次のようにいったと思うとしている。
「彼がモスクを建てることによってただひたすらアッラーの喜びを求めているなら……」
またイブン・イーサーの伝承では「……モスクと同じような家を天国で……」となっている。
マフムード・ビン・ラビードは伝えている
ウスマーン・ビン・アッファーンはモスクの再建築をしたいと思った。
しかし人々はそれを嫌った。
彼等はそれがそのままの状態にあることをむしろ望んでいた。
そこでウスマーンはアッラーの使徒から次のような言葉を聞いたとして語った。
「アッラーのためにモスクを建てた人にはアッラーはそれと同じものを天国に建てて下さるだろう」

屈身礼中の手の配置に関して

屈身礼の際は手を膝の上に置くべきこと、
またタトビーク（両手の掌を合わせそれを両太股の間に置くこと）の破棄
1巻　P.361-364

アスワドとアルカマは次のように伝えている
私達がアブドッラー・ビン・マスウードの家にやって来た時、彼はこういった。
「豊裕で高官のあの人達はあなた達の背後で礼拝しましたか」
そこで我々は「いいえ、まだです」というと彼は「それならあなた達は立ち上がって礼拝しなさい」といった。
さてその際に彼は私たちにアザーンとイカーマの詠唱を命じませんでした（注1）。
そこで私達は彼（アブドッラー）の背後に立つために彼について行きました。
すると彼は私達の手を取り一人を彼の右手の側に立たせもう一人を左側に立たせた。
そして彼が屈身礼をした時私達は手を膝の上に置きました。
すると彼は私達の手を打ち両手の掌を合わせそれからそれを彼の両太股の間に入れた（これは後に破棄された）。
それから礼拝を終えた時彼はこういった。
「あなた達の所にまもなくアミール（大守、豊裕な高官達）たちがやって来るでしょうが彼等は礼拝を決められた時刻より遅らせています。
つまり日没の時間ぎりぎりのところまで遅らせています。
それで彼らがそのようにするとわかったならあなた達は礼拝を決められた時刻に行ってしまいなさい。
そしてその後の彼等との礼拝は任意の礼拝として行えばよいでしょう。
さてもしあなた達が三人ならば一列に並んで一緒に礼拝しなさい（これは後に破棄される（注2））
もしそれよりも多ければあなた達のうちの一人がイマームになりなさい。
そして屈身礼をする時には両前腕を両膝の上に置いてから身をかがめそれから両手の掌を合わせ両脇の内側に置きなさい。
この仕草についてはあたかも私（アブドッラー）はアッラーの使徒の（それぞれの）指の違いを今眼前に見ている思いです（それ程はっきり記憶している）」
（注1）個人宅で礼拝する場合は許される
（注2）現行の規定では二人の場合は一列に並んで礼拝し三人以上の場合はそのうちの一人がイマームとなり先頭に立ち残りの者は背後に整列することになっている
アルカマとアスワドによる前記のハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。
ところで別伝承のハディースには「あたかも私は屈身礼中のアッラーの使徒の指の違いを眼前にながめている思いです」とある。

アルカマとアスワドは次のように伝えている
彼ら二人がアブドッラーを訪ねた時、彼はこういった。
「あなた達の後ろにいる人々（豊裕で高官のアミール達）は礼拝をしましたか」
それで二人は「はい」と答えた。
するとアブドッラーは二人の間に割り込んで立ち一人を彼の右側に他の一人を左側に立たせた。
それから私たちは屈身礼をしました。
その時私達は両手を膝の上に置いたところ、彼は（そうではないと）私達の手をたたいた。
それから彼は両手の掌を合わせそれを両股の間に置きました（注）。
そして礼拝が終わった時「このようにアッラーの使徒は行った」と彼はいいました。
（注）この仕草は次に続く複数のハディースによって後に破棄された
ムスアブ・ビン・サアドは次のように伝えている
私は父の脇で礼拝しました。
その時私は両手を両膝の間に置きました。
すると父はこういいました。
「両手の掌を両膝の上に置きなさい」
それから私が再び最初の動作を繰り返すと彼は私の手を打ってこういった。
「我々はそうすることを禁じられたのだ、我々は手の掌は膝の上に置くよう命じられた」
アブー・ヤアフールは同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えているが彼は「我々はそうすることを禁じられた」とだけ伝えその後は何も言及していない。
ムスアブ・ビン・サアドは伝えている
私は屈身礼をした際に"手はこうするのだ"といって両手の掌を合わせそれを両股の間に置いた。
すると私の父がこういった。
「かつて我々もそうしたものでした。
しかしその後我々は両手を膝の上に置くように命じられた」
ムスアブ・ビン・サアド・ビン・アブー・ワッカースは伝えている
私は父の脇で礼拝しました。
そして屈身した際に両手の指を交互に交差させ組み合わせて両膝の間に置きました。
すると彼は私の手をたたいて警告した。
そして礼拝が終わると彼はこういった。
「かつて我々もそうしていた、それから我々は膝の上にそれをあげるよう命じられました」

礼拝中の座り方について

かかとの上に（体重をかけて）座ることは許されている
1巻　P.364

ターウスは次のように伝えている
私達はイブン・アッバースに両足のかかとの上に体重をかけて座ることについて聞きました。
すると彼は「それはスンナ（注）です」といった。
そこで私達は彼にこういった。
「それは足に酷なことだと思います」
するとイブン・アッバースはこういった。
「しかしそれはあなたの預言者のスンナです」
（注）慣習、ここでは預言者の慣習の意味、ファルド（義務行為）の対語で、それをすれば来世にて報償を得るがしなくても罰を受けない行為

礼拝中の私語に関して

礼拝中の私語の禁止と以前には許されていた行為の破棄
1巻　P.364-368

ムアーウィヤ・ビン・ハカムは伝えている
私がアッラーの使徒と一緒に礼拝した時、一人の男がクシャミをした。
そこで私は「あなたにアッラーの慈悲が（注1）」といいました。
すると周囲の礼拝者達がいっせいに私をにらんだ（注2）。
それで私はこういった。
「災いなるかな、なぜあなた達は私をそんな眼でみるんですか」
すると彼等は膝の上で手を打ち始めた。
そして私は彼等が私を黙らせようとしていたことを知りむっとしたが私は黙っていました。
そしてアッラーの使徒が礼拝を終えた時ーまことに彼は父母にも代え難いお方で、私は後にも先にも彼より優れた教師を見たことがありませんがーアッラーに誓って彼は私に強制したり、私を打ったりまた侮辱したりするようなことなく次のようにいいました。
「礼拝中は人間への会話はゆるされていませんし許されているのはタスビーフ（アッラーへの讃美の言葉）とタクビールとクルアーンの読誦あるいはアッラーの使徒が語った言葉だけです」
そこで私はこういいました。
「アッラーの使徒よ、私は最近までジャーヒリーヤ時代（イスラーム以前の無道時代）に生きていました。
しかしアッラーはイスラームを私達にもたらされました。
それでも私達の中にはまだカーヒン（占師）に頼る者がいます」
すると彼はこういった。
「彼等に頼ってはならない」
私はつづけて「なかには鳥を使って吉凶を占う者がいます（注3）」
すると彼はこういった。
「それらのことは彼等の胸中にあることで彼等を止めさせることはできない」
ところでイブン・サバーフは“あなた達を止めさせることはできない”と伝えた。
さて私はさらにこういった。
「私達の中には線を引いて占う者がいます」
すると彼（預言者）は次のようにいいました。
「以前預言者のうちの一人（イドリースかダニエル）が線を引いて予言したが、もし彼等がそれと同じことをするのであれば許されることです（注4）」
ムアーウィヤはさらに次のように語った。
私にはウフド山とジャワーニヤ（マディーナの北の地点）の近くで私のために羊を飼う女奴隷がいました。

或る日私はそこを見廻ったところ狼が羊の群からその一頭を奪ってしまっていたことがわかりました。
私も人の子ですから誰もが残念に思うように私も残念に思いました。
それで私は彼女の顔面に平手打ちを喰わしました。
それから私はアッラーの使徒の所にやってきましたが彼は私が行ったことを重大なことのように私に思わせました。
そこで私はこういいました。
「アッラーの使徒様、私は彼女を（奴隷）解放すべきではないでしょうか」
すると彼は「彼女を連れてきなさい」といった。
そこで私は彼女を連れてきました。
すると彼は彼女に「アッラーはどこにいますか」と尋ねた。
すると彼女は答えて「天にいます」といった。
彼はさらに「私は誰ですか」と尋ねた。
すると彼女はいった。
「あなたはアッラーの使徒です」
そこで彼はこういいました。
「彼女を自由の身にしてやりなさい。彼女は信者です」
（注1）クシャミをした本人は“アッラーに称讃あれ！”といい、それを聞いた人が前記の“あなたにアッラーの慈悲が”と唱えるべしと日常的には慣習化されているがここでは礼拝中に関係のない言葉を発したとして非難をうけている
（注2）礼拝中に人間同志の会話つまり余計なことを口にしたから
（注3）鳥を放ってそれが右方向に飛ぶか左に飛ぶかで吉凶を占った
（注4）しかし預言者ムハンマドは最後の預言者であるから結局は彼以後は許されないことになる
同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。
アブドッラー・ビン・マスウードは次のように伝えている
かつて私達はアッラーの使徒が礼拝中に彼に挨拶をしたが彼は私達にちゃんと挨拶を返しました。
ところが私達がナジャーシーの所（エチオピア）から帰ってみると（注）私達が預言者に挨拶してもこんどは挨拶を返しませんでした。
そこで私達は次のように尋ねた。
「アッラーの使徒様、あなたはかつて礼拝中に私たちが挨拶した時には挨拶を返して下さいました」
すると彼は次のように答えただけだった。
「礼拝は全注意力の集中を要求している」
（注）マッカでの迫害時代に一部の信徒集団がエチオピアに避難した。
この集団はその後マディーナ時代に帰国した
前記同様なハディースが別伝承者経路を経て伝えられている。

ザイド・ビン・アルカムは伝えている
かつて私達は礼拝中によく話をしていました。
一人の男が礼拝中の隣りの友人に話しかけましたがそこで次の一節が啓示されました。
「清浄な心でアッラーの前に立ちなさい」（第2章22節）
こうして私達は礼拝中沈黙を守るよう命じられ私語することを禁じられました。
前記同様なハディースが別の伝承者桂路を経て伝えられている。
ジャービルは次のように伝えている
アッラーの使徒はかつて私を使い走りに送りました。
それから私は用向きを済ませて彼のもとに戻りましたがその時彼は（らくだに乗って）行進中でした。
（クタイバは行進中に預言者は礼拝していたのだと伝えているが）。
私（ジャービル）はそこで彼に挨拶をしたところ彼は私に身振りで返礼した。
そして彼が礼拝を終えた時私を呼んでこういった。
「あなたは先程私が礼拝中に挨拶しましたね」
ところで預言者はその時東方に向かって行進中でした（注）。
（注）預言者は当然らくだに乗って行進中にナフル（随意）の礼拝を行ったと考えられるからこのような場合は必ずしもマッカのカーバ神殿に向かって礼拝しなくてもよいことになる
ジャービルは次のように伝えている
アッラーの使徒はバヌー・ムスタリク族攻略に向かう途中私を使い走りに送った。
それで私が彼のもとに戻った時彼はらくだに乗ったまま礼拝している所でした。
私は彼に話しかけましたが彼は私にこんなふうに手振りで答えました。
（伝承者の一人ズハイルもまたこの時の状況をこんな手振りで伝えている）
そこで私はもう一度話しかけましたところ彼は再び手振りでこんなふうに答えました。
（ズハイルもまた地面を指差す身振りを交えて伝えている）
私の方はその時預言者がクルアーンを誦んでいる声を聞きとりましたが彼は頭を動かし（屈身礼と平伏礼のため）彼が礼拝中であることを私に知らせようとしていた。
そして彼が礼拝を終えた時こういった。
「私が送った用向きのことであなたはどうしましたか、（今まで）私があなたに話しかけられなかったのは礼拝中だったからです」
ところでズハイルはこう伝えている。
このハディースをアブー・ズバイルが伝えた時、彼（アブー・ズバイル）は丁度カーバ神殿に向かって座っていました。
そして彼はバヌー・ムスタリク族の居留地の方角を指差したのだがしかしその方角はカーバ神殿の方角ではなかった。
ジャービルは次のように伝えている
私達は預言者と一緒にいました。
彼はある用向きで私を使者として送りました。

それから私が戻ってきた時、彼はらくだに乗ったまま礼拝中でしたがその時彼はキブラ以外の方角を向いていました。
そこで私は彼に挨拶しました。
しかし彼は返礼しませんでした。
そして彼が礼拝を終えた時こういいました。
「私は礼拝をしていたのであなたに返事ができなかったのです」
同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。

礼拝中のタアウィーズに関して

礼拝中に悪魔を呪うことまたタアウィーズ（悪魔から逃れてアッラーに助けを請う呪文）を唱えること、
またその他の些細な行為は許されること
1巻　P.368-369

アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉を次のように伝えている
「ジンの仲間のアフリート（性悪のジンで悪魔の一種）が昨夜私の礼拝を中断するため私を襲い始めました。
しかしアッラーはこれに対抗する力を私に与えてくれました。
それで私はアフリートを捉えてあなた達全てがその姿を見ることができるようにそれをモスクの一本の円柱にあわや縛り付けようと思いました。
しかし私は預言者系列では兄にあたるスライマーン（ソロモン）の次のような祈りの言葉を思い出しました。
「主よ私をお赦し下さい。そして私に後世の誰も持ち得ない王国をお与え下さい」（クルアーン第38章35節）（注）
かくてアッラーはそれ（アフリート）を追い払うにとどめられた」
（注）ジンの取締りの権限については形式上はソロモンに与えられていることになっている。
そのことを思い起したのであろう。
またソロモンは預言者と王権双方の家柄に生まれたので彼が預言者としての奇跡を示すためにはまず巨大な王国を望んだとしても当然であろうといった文脈で理解されている
前記同様のハディースは別の伝承者経路を経て伝えられている。
ただしここでは“対抗する（力）”の代わりに“踏みつける（力）”となっている。
アブー・ダルダーウは伝えている
アッラーの使徒が礼拝のために立ち上がった。
そして私達は彼が“私はお前（悪魔）から逃れてアッラーの助けを請い願う”と唱え、ついで“アッラーの呪がお前にあれ！”と三回繰り返す声を聞きました。
それから彼は何かを捉むように手を空中に伸ばしました。
そして礼拝を終えた時私達はこういって尋ねた。
「アッラーの使徒よ、私達はあなたが礼拝中に以前に聞いたこともない言葉を聞きました。またあなたが手を伸ばす姿を見ました」
すると彼はこういいました。
「アッラーの敵のイブリースが燃える炎を持ってきてそれを私の顔に当てようとしたので私は“お前から逃れてアッラーのお助けを請い願う”と三回いいました。
そしてまた“アッラーの完璧な呪がお前にあれ”といいました。
しかしそれでもイブリースは三回とも一歩もしりぞきませんでした。

そこで私はそれを捉まえようと思いました。
アッラーに誓って、もし私達預言者系列上の兄スライマーンの祈りが無かったならきっとそれは縛りあげられマディーナの子供達の遊び道具にされたことでしょう」

礼拝中に子供を抱くことについて

礼拝中に子供を片手で抱きかかえることは許されている
1巻　P.369-370

アブー・カターダは次のように伝えている
アッラーの使徒は彼の娘のザイナブの娘でありアブー・アースの娘でもある孫娘のウマーマを抱きながら礼拝しました。
直立礼の時は彼女を片手で抱きかかえ（注）平伏する時には彼女を下に置きました。
ところでヤヒヤーはそのことでマーリクが"その通りだった"として肯定したと伝えている。
（注）両手で抱きかかえた場合には礼拝そのものが無効になる
アブー・カターダは伝えている
私は預言者がアブー・アースの娘ウマーマを連れてイマームとして礼拝する姿を見ました。
その子は預言者の娘ザイナブの娘でした。
彼は彼女を肩にのせて（注）おり屈身する時には彼女を下におろし平伏礼から立ち上がる時には彼女をまた肩に戻しました。
（注）両肩でなく片方の肩にまたがせて乗せた意
アブー・カターダは伝えている
私はアッラーの使徒がアブー・アースの娘のウマーマを首に乗せてイマームとして礼拝する姿を見ました。
そして平伏する時には彼女を下に降ろしました。
アブー・カターダは別の伝承者経路を経て次のように伝えている
私達がモスクに座っているとアッラーの使徒が私達の所にやってきた。
以下は前記のハディースを伝えたがただしここでは預言者がその礼拝でイマームを勤めたとはいっていない。

礼拝中の前後移動について

礼拝中に一歩か二歩動くことは許されている
1巻　P.370-371

アブドル・アズィーズ・ビン・アブー・ハーズィムは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
一団の人々がサハル・ビン・サアドの所にやって来た。
そして預言者のミンバル（説教台）がどんな木で出来ているのかについて口論を始めた。
そこで彼（サハル）はこう語った。
「アッラーに誓って、私はそれがどんな木で作られているのか、また誰がそれを作ったのかちゃんと知っています。
私はアッラーの使徒がその上に最初に座った日の姿を目撃しています」
そこで私（アブー・ハーズィム）はこういった。
「アブー・アッバース（サハルの通称）よ、そのことを我々に話してくれ」
すると彼は次のように語った。
「アッラーの使徒は彼の使いをある女性のもとに送りました（アブー・ハーズィムはサハルがその時彼女の名前を特定したと語ったが）
それは彼女に依頼して彼女が所有する奴隷の大工に預言者の説教台を作らせるためでした。
こうしてその奴隷がこの三段の説教台を作ったのです。
それからアッラーの使徒はそれを今あるこの場所に置くよう命じたのです。
それはアル・ガーバ（マディーナから8.9マイルの高地）産のタマリスクの木から作られました。
さて私は彼が説教台の上に立ちタクビールを唱え、人々が彼に続いてタクビールをする光景を見ました。
それから預言者は屈身礼から頭を上げてから後ずさりするようにして説教台を降りて説教台の基底部の所で平伏した。
それから再び説教台の上にもどったがこうして彼はその礼拝が終わるまで上下の（二・三歩の）移動を繰り返した（注1）。
その後預言者は人々に向かってこう語りました。
「皆さん、私がこのように行動したのは私に従ってあなた達が私から礼拝の仕方を学ぶためです（注2）」
（注1）くるりと向き直らない限り礼拝中の一・二歩の移動は必要な限り許される
（注2）高い所で礼拝の仕方のデモンストレイションを行ってみせたとも考えられる
アブー・ハーズィムは伝えている
人々がサハル・ビン・サアドの所に来て彼に預言者の説教台が何で作られているのか尋ねた。
以下は前記ハディースと同じである。

礼拝中に腰元に手は置かぬ、について

礼拝中に手を腰元に置くことはすすめられないこと
1巻　P.371-372

アブー・フライラは伝えている
預言者は礼拝中に手を腰元に置くことを禁じた。
またアブー・バクルの伝える所でも“アッラーの使徒はそうすることを禁じた”とある。

礼拝中小石を動かすことについて

礼拝中小石を動かしたり、地面を平らにならしたりすることはすすめられないこと
1巻　P.372

ムアイキブは次のように伝えている
預言者はモスクで（礼拝中）小石を動かす（取り除く）ことの是非について言及しこういった。
「あなたがどうしてもそうしなければならない時は一回だけにしなさい」
ムアイキブは次のように伝えている
彼等は預言者に礼拝中に小石を取り除く行為について尋ねた。
すると彼は“一度だけ”といった。
また、ムアイキブは次のように伝えている。
アッラーの使徒は（礼拝中に）平伏場所の地面を平らにしている男に次のようにいった。
「もしあなたがどうしてもしなければならないのなら一回だけにしておきなさい」

モスクで唾を吐くことのに関して

礼拝中モスクの中やその他の場所でも唾を吐くことは禁止されている
1巻　P.372-374

アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている
アッラーの使徒はキブラ方向の壁の上に（誰かが）唾を吐いた跡を見つけそれを引っ掻いて取り去った。
それから人々に向かってこういった。
「誰でも礼拝している時は前方に唾を吐いてはならない。
なぜならアッラーは礼拝する時彼の顔の前にいるからです」
イブン・ウマルは伝えている
預言者はモスクのキブラの壁に付着した痰を見つけた。
以下は前記のハディースを伝えたが伝承者の一人ドッハークは単に“キブラの壁に付着した痰を……”と伝えている
アブー・サイード・フドリーは伝えている
預言者はモスクのキブラの壁面に付着している痰を見つけた。
そこで彼は小石でそれを掻きとった。
それから彼は右側と前方に唾を吐くことを禁じた。
しかし左側と左足元に吐くことは許された。
アブー・フライラとアブー・サイードが伝えている別の伝承者経路によるハディースでは「アッラーの使徒は痰を見た」以下は同じものが伝えられている。
アーイシャは次のように伝えている
預言者は唾か鼻汁か痰かこのうちのどれかがキブラの壁面に付着している所を見つけてそれを引っ掻いて取り去った。
アブー・フライラは伝えている
アッラーの使徒はモスクのキブラ壁面に痰が付着している所を見つけ人々に向かって次のようにいった。
「あなた達の中には主の前に立って主の面前に唾を吐く者がいるが一体どういうつもりなのですか、あなた達のうちで人の前に立って人の顔に唾を好んで吐く者がいるでしょうか。
誰でも唾を吐く時には左側の自分の足元にすべきです。
しかしもし彼が（唾を吐く場所を）見つけられないのならその時彼はこうすべきです」
伝承者の一人カーシムはそれを説明して彼の服に唾を吐きそれからそれを包み込み交互にこすり合わせた。
アブー・フライラから別の伝承者経路を経て次のようにも伝えられている
私はアッラーの使徒が彼の服の一部（に唾を吐きそれ）をたたみ込んでいる姿をまるで今眼前に見ている感じです。

アナス・ビン・マーリクはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「誰でも礼拝する者は主と親しく対話しているのであるから己れの眼前や右側に唾を吐いてはならない。
彼は自分の左側の足元に吐くべきである」
アナス・ビン・マーリクはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「モスクで唾を吐くことは罪である。その償いはそれを土中に埋めることです」
シュウバは次のように伝えている
私はカターダにモスク内で唾を吐くことに関して尋ねました。
すると彼は「私はアナス・ビン・マーリクが次のような預言者の言葉を語った話を聞いた」といった。
「モスクで唾を吐くことは罪である。その償いはそれを埋めることです」
アブー・ザッルは次のような預言者の言葉を伝えている
「私の信仰共同体において善行と悪行が何たるかが私に明らかにされた。
私は良い行いとしては道路から障害物が取り除かれることであり、また悪い行いとしては痰がモスク内で吐かれてそれが埋められないことだと知りました」
ヤジード・ビン・アブドッラー・ビン・シッヒールは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
私（ヤジードの父）はアッラーの使徒と一緒に礼拝していました。
その時彼（預言者）は唾を吐いたがそれをサンダルで拭い取りました。
ヤジード・ビン・アブドッラー・ビン・シッヒールは彼の父からの伝聞として次のように語っている
私（ヤジードの父）は預言者と一緒に礼拝した。
すると彼（預言者）は唾を吐きそれからそれを左足のサンダルで拭い取りました。

サンダル履きの礼拝について

サンダルを履いたまま礼拝することは許される
1巻　P.374-375

サイード・ビン・ヤジードは伝えている
私はアナス・ビン・マーリクに「アッラーの使徒はサンダルを履いたまま礼拝しましたか」と尋ねた。
すると彼は「はいそうです」と答えた。
同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。

図柄入り衣服での礼拝に関して

図案やマークが描かれた服装で礼拝することは適切ではないこと
1巻　P.375

アーイシャは次のように伝えている
預言者は図案が描かれた外套（アブー・ジャハムからの贈物だった）を着て礼拝しましたがこう言いました。
「この図案は私の気をそらします。
だからこれを持ってアブー・ジャハムの所に行き代りに彼の所から無地の外套をもらって来なさい」
アーイシャは次のように伝えている
アッラーの使徒は図案の描かれた外套を着て礼拝に立った。
そして彼はその図案をよくながめた。
それから礼拝を終えた時彼はこういった。
「この外套を持ってアブー・ジャハム・ビン・フサイファ（外套の贈り主）の所に行き代りに無地の外套を持ってきなさい。
なぜならこれは先ほどの礼拝中に私の気をそらせたからです」
アーイシャは伝えている
預言者はかつて図案の描かれている外套を持っていました。
そしてそれは礼拝中に彼の気をそらせた。
そこで彼はそれをアブー・ジャハム（贈り主）に返し代りに無地の外套を受けとった。

食前や用便直前の礼拝に関して

今すぐにも食べたいと思う食物を前にして礼拝することは禁物、
また大小の用たしを我慢しながら礼拝することも好ましくない
1巻　P.375-377

アナス・ビン・マーリクは預言者が次のようにいったとして伝えている
「夕食が用意された時に礼拝が始まったら夕食をまずとってから礼拝しなさい」
また別の伝承者経路によってアナス・ビン・マーリクはアッラーの使徒がいったとして次のように伝えている
「夕食が近づいて同時にまた礼拝の時刻になったなら、日没後の礼拝の前に夕食を始めなさい。
夕食をおあずけにして礼拝を急いではならない」
アナスの前記ハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。
イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「誰でも夕食が用意されてその時礼拝が始まったら夕食から先に始めなさい。
そしてそれがすむまで決して礼拝を急いではなりません」
同様な前記ハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。
イブン・アブー・アティークは伝えている
私とカーシム（注1）はアーイシャの所でハディースの話をしていました。
カーシムの言葉には解放奴隷の彼の母親（注2）が持っていた訛がありそれがひどかった。
そこで彼女は彼に向かってこういった。
「一体どうしてあなたはこの私の兄弟の息子（イブン・アブー・アティーク）のようにハディースをきちんと言えないのですか、私にはあなたがその訛をどこから獲得したかちゃんと解っています。
彼（イブン・アブー・アティーク）は彼の母親がよく仕つけたのですしあなたの場合はあなたのお母さんが仕つけた結果です」
するとカーシムは怒り彼女を睨みつけた。
そして彼はアーイシャの食卓が用意されるのを見た時すっと立ち上がった。
そこで彼女は「どこへ行くのですか」といった。
すると彼は「礼拝です」と答えた。
そこで彼女は「座りなさい不忠者よ（注3）」といった。
すると彼は「私は礼拝を捧げに行くんですよ」といった。
すると彼女はこういった。
「私はアッラーの使徒が次のようにいった言葉を聞いています。
『食事の用意が出来ている時と大小の用たしを我慢している時には礼拝はありません』」
（注1）アーイシャの兄弟の息子で甥にあたる。
母は多分非アラブ系の解放奴隷であった。

そのため幼児期にアラビア語の語法を充分に身につけることができなかった
（注2）カーシムを生んだことによって奴隷身分から解放された母親
（注3）アーイシャはカーシムの父の死後カーシムを引きとって育てたのでカーシムの仕つけの責任かあったのでこのような強い言葉で叱った
アブドッラー・ビン・アブー・アティークはアーイシャからの伝聞として前記同様の預言者の言葉を別の伝承者経路を経て伝えているがしかしここではカーシムの話には言及していない。

不快感を与える食べ物に関して

モスクに赴く時はニンニク、玉ネギ、ニラなど
他人に不快感を与える食べ物を口にすることは禁じられている
1巻　P.377-381

イブン・ウマルは次のように伝えている
アッラーの使徒はハイバルの戦に出陣中にこういった。
「この野菜（つまりニンニク）を食べた者は絶対にモスクに来てはならない」
ところでズハイルは"ある戦場で"といいハイバルの戦とはいわなかった。
イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「この野菜（つまりニンニク）を食べた者はその臭が消えるまでは我々のモスクに近づいてはならない」
イブン・スハイブは伝えている
アナスがニンニクについて尋ねられた時、彼はアッラーの使徒は次のように語ったと伝えた。
「この野菜（ニンニク）を食べた者は私達に決して近づいてはならないしまた私達と一緒に礼拝をしてはならない」
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「この野菜（ニンニク）を食べた者は私達のモスクに近づいてはならないしその臭いで私達を不快にしてはならない」
ジャービルは次のように伝えている
アッラーの使徒は玉ネギやニラを食べることを禁じた。
しかし私達はどうしてもそれを食べたくなって食べてしまった。
すると彼はいった。
「この嫌な臭を放つ木（野菜）を食べた者は私達のモスクに近づいてはならない。
なぜなら天使もまた人間が害されるものによって傷つけられるからです」
ジャービルはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「ニンニクや玉ネギを食べた者は私達から離れているべきであり、また私達のモスクから離れて自分の家にとどまるべきである」
或る日預言者のもとに色々な野菜が料理された鍋が届けられた。
彼はその臭をかぎそこに悪臭があることに気付いた。
そこで彼は何が料理されているのか尋ねた。
そして料理に使われた野菜について知らされた。
そこで彼は何人かの教友達に「それ（料理）を近づけてみなさい」といった。
一人の教友はそれを見た時彼もまた食べたがらなかった。
すると預言者は次のように言った。
「あなたは食べてもかまいません。

でも私はあなたが（話すことを）許されていない者（天使）と話さねばなりませんので食べられませんが」
ジャービル・ビン・アブドッラーは預言者の言葉として次のように伝えている
「この臭いを出す野菜（ニンニク）を食べた者は（また或る時はこういった。
玉ネギやニンニクやニラを食べた者は）私達のモスクに近づいてはならない。
なぜならば天使達もまたアダムの子孫が害されるものによって同様に害されるからです」
イアン・ジュライジュは同一伝承者経路を経て次のように伝えている
「この野菜（ニンニク）を食べた者はモスクにいる私達の所に来てはならない」
だが彼は玉ネギやニラについては言及しなかった。
アブー・サイードは次のように伝えている
まもなく私達はハイバルを征服した。
そして私達はその野菜（ニンニク）に群がった。
なぜならその時人々は腹ぺこだったからです。
それで私達はそれを貪り食った次第です。
その後私達はモスクに出向いた。
だがアッラーの使徒はその臭を嗅ぎつけてこう言った。
「このいまわしい植物を少しでも食べた者はモスクに決して近づいてはならない」
そこで人々は「（ニンニクが）禁じられた、禁じられた」と口々に叫んだ。
さてそのことが預言者の耳にまで届いたので彼はこういった。
「皆さん、アッラーが許したものを私があなた達に禁じる力はありません。
しかしそれは私がその臭いを嫌う植物です（注）」
（注）他人に迷惑をかけることなくニンニクや玉ネギやニラを　たべること自体は勿論禁じられていない
アブー・サイード・フドリーは伝えている
アッラーの使徒と教友達が玉ネギ畑のそばを通りかかった。
すると一部の者がそこで立ち止まって玉ネギを取って食べた。
しかし他の者達は食べなかった。
それから私達は預言者の所に行った。
すると彼は最初玉ネギを食べなかった者を呼び集め他の者（玉ネギを食べた者）はその臭が消えるまでその場で待たせた。
マアダーン・ビン・アブー・タラハは次のように伝えている
ウマル・ビン・ハッターブはジュムア（金曜日の合同礼拝）で説教をしていた時彼はまず預言者のこと、ついでアブー・バクルのことに言及し、それからさらにこういった。
私は雄鶏が私を三回つつく夢を見ました。
それで私は自分の死期が近いと思っています。
また何人もの人々が私に次のカリフ（後継者）を任命するよう提議しています。
しかしアッラーは決して彼の教え（イスラーム）とそれを伝えるカリフ制を反故にすることはな

いだろうし、またそのために預言者に授けたもの（クルアーン）を反故にすることはありません
。
もしそのこと（死期）が私にとって急を要することであるならば次のカリフはアッラーの使徒が逝く時まで良しとされたこれら六人（注）の中から合議制で決めるべきでしょう。
また私はいったんイスラームを表明した者をこの手にかけて殺したことに対して一部の人々が非難していることも十分承知しています。
しかしもし彼等が私を非難するならば彼等はアッラーの敵であり不信仰者であり、路に迷ってしまった者達です。
それから私はカラーラ（父親と子供を除いた相続人、その判定議論）よりも重要であると私に思えることは何事も死期以後にやり残さないつもりです。
私はカラーラについてこれほどしばしばアッラーの使徒に聞きに行ったことはありません。
そして預言者はこの問題についてこれ程私に荒々しく語ったことは他にありません。
そして彼はその時狼狽のあまり指で私の胸をつついてこういいました。
「ウマルよ、（カラーラについては）クルアーン女性章の最後の段の暑い夏に下された一節（4章177節）でそれで十分ではないのかね、私がもっと長生きするとすれば、私はこの問題について極めて明解な決定を下そう、そうしたら、クルアーンを読む人も読まない人もそれに照して正しい裁定を下すことが出来よう」
ウマルはさらにつづけてこういった。
アッラーよ、私はあなたに各地の統治者について次のように証言します。
私は彼等統治者をそれぞれの土地に以下の諸条件でその役割を果たすために派遣しました。
それは各地の住民に対して公平に扱うこと、また彼等にイスラームと預言者のスンナを教えること、また戦利品を規定通りに分配すること、また住民が困っていることを私のもとに伝えることです。
それから皆さん、皆さんは玉ネギとニンニクを食べていますが私はそれらを忌わしいものだと思います。
私はアッラーの使徒がモスクでその臭を放った者を見つけるとただちにバキーウ（モスクの隣の空地で現在は墓になっている）へ出て行くようお命じなった現場を目撃しました。
だからそれらを食べたい人は調理によりその臭をよく消さなければならない。
（注）①ウスマーン②アリー③ズバイル④タルハ⑤アブドル・ラフマーン・ビン・アウフ⑥サアド・ビン・アブー・ワッカースの六人
またカターダは同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。

モスクでの大声に関して

紛失物を捜すためにモスクで大声を上げることは禁じられている、
また大声を聞いた者は声の主に何というべきか
1巻　P.381-382

アブー・フライラはアッラーの使徒が、次のようにいったとして伝えている
もし誰かが紛失物を捜すためにモスクで大声を上げたならその者には次のようにいいなさい。
「アッラーがそれを君にお戻しになりませんように、なぜならばモスクはそのために建てられたのではありませんから」
また同様なハディースを別の伝承者経路を経てアブー・フライラは伝えている。
スライマーン・ビン・ブライダは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
或る男がモスク内で「誰が私の赤らくだを呼び集めたのだ」と大声で人々に呼びかけた。
すると預言者は次のようにいった。
「それはあなたのもとに戻るまいぞ、なぜならモスクは（そもそも）その（元来の）建立目的（礼拝沈思瞑想など）にそって建てられているのだから」
スライマーン・ビン・ブライダは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
預言者が礼拝を終えた時一人の男が立ち上がり「誰が私の赤らくだを呼び集めたのだ」といった。
すると預言者は次のようにいった。
「それはあなたのもとに戻るまいぞ、というのはモスクは（そもそも）その（元来の）建立目的にそって建てられたのだから」
イアン・ブライダは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
預言者が日の出前の礼拝を終えた時に一人のベドウィン（遊牧民）がやって来て頭をモスクの戸口から差し入れ先に述べた二つのハディースと同様の言葉を放った。

不注意償いの平伏礼について

礼拝中の注意不足による忘却とその価いのための平伏礼
1巻　P.382-391

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「あなた達の誰かが礼拝に立った時、悪魔が彼のもとにやってきて彼が何回礼拝したか分らなくなる程に惑わしたとする。
仮にあなた達の誰かがそのような状態になったならば、償いの意味で（最後の）座礼状態のまま（さらに）平伏礼を二回行いなさい」
同様のハディースが別の伝承者経路を経てズフリーに上って伝えられている。
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「アザーンの詠唱を聞くと悪魔はそれを聞くまいとして後を向き放屁しながら遁走する。
しかしアザーンの詠唱が終るとすぐまた戻り近付いてくる。
ついでイカーマの詠唱がはじまると後を向き再び遁走する。
そしてイカーマの詠唱が終るとまた近付いてきて次のように礼拝者の心に私語して惑わす。
『しかじかのことを思い起せ、しかじかのことを思い出せ』
しかしそのようなことは礼拝者には思いも及ばぬことなので遂に彼は自分でも何回礼拝したか忘れてしまう。
そのような時即ち自分が何回礼拝したか分らなくなった時は座礼状態のまま二回平伏しなさい」
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「悪魔は礼拝が始まると顔をそむけて放屁しながら逃げ出す」
ついで預言者は前記ハディースと同じことを語ったが以下のことがそれに加えられた。
「悪魔は礼拝者に（突然）楽しいことを思い起させたり、欲しいものを思い起させたり彼が忘れていた必要なもののいくつかを思い起させたりする」
アブドッラー・ビン・ブハイナは伝えている
アッラーの使徒は或る義務の礼拝で私達を先導して二ラカートの礼拝を行いそのまま立ち上がり座らなかった。
それで人々も彼に習って立ち上がった。
彼が礼拝を終えた時私達は彼がタスリーム（最後の挨拶儀礼）を唱えるものと思ったが座ったままで彼はアッラーは偉大なりと唱えつつタスリームの前に（償いのために）二回平伏礼を行い、その後タスリームを行った。
アブドッラー・ビン・ブハイナ・アスデーは伝えている
アッラーの使徒は昼過ぎの礼拝に立ち上がり二ラカートの後に正座礼に入るべきところをそのまま三ラカートへと立ち上がった。
そこで彼は礼拝を終えた時最後の挨拶礼をする前に座礼状態のままでアッラーは偉大なりと唱えつつ償いの意味で二回平伏礼をした。

そこで人々は彼に習って二回の平伏を行った。
それは二ラカートの後に預言者が座ることを忘れてしまったことに対する償いの行為であった。
アブドッラー・ビン・マーリク・ビン・ブハイナ・アズデーは伝えている
アッラーの使徒は礼拝の際に二ラカートを終えてそのまま正座礼に入るべきところを立ち上がった。
しかし彼は礼拝を続行した。
そして彼は礼拝の最後の左右の挨拶礼をする前に償いの平伏礼を行いその後礼拝をしめくくる挨拶礼を行った。
アブー・サイード・フドリーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「誰でも自分の礼拝に疑いをもち、何ラカート礼拝したか分らなくなったならば疑わしいラカート（第四ラカートなど）は切り捨ててとりあえず確信のもてるラカートに基づいて礼拝をつづけなさい。
その後挨拶儀礼に入る前に二回の平伏を行いなさい。
もし彼が五ラカートの礼拝に気が付いたならばその償いとしての二回の平伏礼は彼の礼拝を偶数ラカートに揃えてからにしなさい。
また彼が事実丁度四ラカートの礼拝をしていたのであれば、償いの二回の平伏礼は（余分になるがしかしそれは）悪魔を辱めることになるでしょう（注）」
（注）つまり悪魔は人間の誘惑に失敗したことになるから
同様なハディースが別の伝承者経路を経てザイド・ビン・アスラマによって伝えられている。
ところでここでは「左右の挨拶儀礼の前に二回の平伏礼を行うべし」と彼（ザイド）は述べている。
アルカマはアブドッラー・ビン・マスウードが語ったとして次のように伝えている
アッラーの使徒が礼拝を行った。
さて伝承者の一人イブラヒームは以下の伝承を加えているがそれによると預言者は礼拝中の動作で新しい動作を加えたりもしくは省いたりした。
そして彼が最後に挨拶儀礼を行った時彼は次のように尋ねられた。
「アッラーの使徒よ。礼拝中に新しい動作がありました」
すると使徒は「それは何ですか」といった。
そこで彼らは「かくかくしかじかにあなたは礼拝しました」といった。
伝承者はつづけてこう伝えている。
そこで彼は両脚を曲げて正座の姿勢をとり、キブラの方向に向き直り二回の平伏礼を行いそれから挨拶儀礼を行った。
そして預言者は私達の方に向き直り次のようにいった。
「もし礼拝の中で何か新しいことがアッラーより命じられた場合には私は必ずそのことをあなた達に伝達するでしょう。
しかし私は人間でありあなた方が忘れるように私も忘れることがあります。
そこでもし私が忘れていたならば私に思い起させるよう注意して下さい。

そして誰でも礼拝に疑念を抱いた時には彼に正しい礼拝を求めさせなさい。
ひとまず礼拝を終えさせて後に代償としての（二回の）平伏礼を行わしめなさい」
同様のハディースがマンスールによって別の伝承者経路を経て伝えられているが以下の点で表現上にわずかな違いがある。
イブン・ビシュルの伝承では“彼（自ら礼拝に疑念を抱いた者）をして正しい礼拝によりふさわしいものを求めせしめよ”とあり、ワキーウの伝承においては“彼をして正しい礼拝を求めせしめよ”と伝えている。
同様のハディースがマンスールによって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここではマンスールは次のようにいっている。
“彼をして礼拝にとって一番ふさわしいものを求めせしめよ”
同様なハディースがマンスールによって別の伝承者経路を経て伝えられている。
マンスールはここでは次のようにいっている。
“彼をして正しい礼拝を求めせしめよ”
同様のハディースがマンスールによって別の伝承者経路を経て伝えられている。
ただしマンスールはここでは次のように伝えている。
“彼をして正しい礼拝に一番近いものを求めせしめよ”
同様のハディースがマンスールによって別の伝承者経路を経て伝えられている。
ただしマンスールはここでは次のように伝えている。
“彼をしてそれが正しい礼拝であると考えられるものを求めせしめよ”
また同様のハディースがマンスールによって別の伝承者経路を経て伝えられている。
ただしマンスールはここでは次のように伝えている。
“彼をして正しい礼拝を求めせしめよ”
アブドッラー・ビン・マスウードは次のように伝えている
預言者は昼過ぎの礼拝で五ラカートの礼拝を捧げた。
そして最後に挨拶儀礼を行った時、彼は「礼拝でラカート数が増えたのですか」と尋ねられた。
すると預言者は「それはどういうことですか」といった。
そこで彼等は「あなたは五ラカート礼拝しました」と答えた。
そこで預言者は償いの二回の平伏礼を捧げた。
アルカマは伝えている
彼（預言者）は彼らを先導して五ラカートの礼拝を捧げた（注）。
（注）原文にはこれしか書いてない、ここでは預言者でも四ラカートの所を忘れて五ラカート捧げたことがあるとつたえているだけ
イブラヒーム・ビン・スワイドは伝えている
アルカマは私達を先導して昼過ぎの礼拝に五ラカートを捧げた。
そして彼が礼拝の最後の挨拶儀礼を終えた時に人々は次のようにいった。
「アブー・シブル（アルカマの別称）よ、確かにあなたは五ラカートの礼拝を捧げました」
ところが彼は「いいえそんなはずはありません」と主張した。だが人々は「いやあなたはそう

した」といった。
その時私（伝承者）は未だ少年でしたが人々の中にまじってその場に居合わせていた。
そこで私も「いや確かに五ラカート捧げた」といった。
すると彼（アルカマ）は私に「やー、独眼者よあなたもそういい張るのか」といった。
そこで私は「はい」と答えました。
すると彼はただちにくるりと顔の向きを変えて二回の平伏礼を捧げその後で最後の挨拶礼を行った。
それから彼（アルカマ）はアブドッラーがいっていることとして次のように伝えた。
アッラーの使徒は私達を先導して五ラカートの礼拝を捧げた。
そして彼（アッラーの使徒）が人々の方に向き直った時人々はざわざわと相互にささやきあっていた。
そこで彼はこう尋ねた。
「あなた達の間に何があったのですか」
すると彼等は次のようにいった。
「アッラーの使徒よ、礼拝の規定ラカートの数が増えたのでしょうか」
彼は「いいえ」と答えたので彼等はいった。
「あなたは五ラカートの礼拝を確かに捧げました」
すると彼はキブラの方角に向き直り二回の平伏礼を捧げその後で最後の挨拶礼を行った。
それから彼（預言者）は次のようにいった。
「私はあなた方と同じく人間でありあなた方が忘れるように私も忘れます」
イブン・ヌマイルは彼のハディースの中で次のように付け加えている。
“もしあなた方の誰かが（捧げたラカート数を）忘れた時は償いとして彼をして二回の平伏礼をさせなさい”
アブドッラー・ビン・マスウードは次のように伝えている
アッラーの使徒は私達を先導して五ラカートの礼拝を捧げました。
そこで私達は「アッラーの使徒よ、礼拝の規定ラカート数が増えたのでしょうか」と尋ねた。
すると彼は「それはどういうことですか」と尋ねた。
そこで私達はこういいました。
「あなたは確かに五ラカートの礼拝をささげました」
するとアッラーの使徒は次のようにいった。
「私はあなた方と同じく人間であり、あなた方が覚えているように私も覚えていますし、またあなた方が忘れるように私も忘れます」
それから彼は不注意の償いとして二回平伏した。
アブドッラー・ビン・マスウードは次のように伝えている
アッラーの使徒は礼拝を行ったがその時彼は礼拝に何かを付け加えたかまたは省略した。
伝承者の一人イブラヒームは（それについて）彼自身疑念が残ったという。
それで預言者は人々から次のように尋ねられた。

「アッラーの使徒よ礼拝に何か新たに付け加えられましたか」
すると彼は次のようにいった。
「まことに私はあなた方と同じ人間でありあなた方が忘れるように私も忘れます。
さて誰でも忘れた時は二回の平伏礼を償いとして行わねばならぬ」
その時彼は座ったままであったが顔をキブラの方角に向け二回の平伏を行った。
アブドッラー・ビン・マスウードは伝えている
預言者は礼拝の最後の挨拶礼とお話（注）の後で不注意な忘却を償う二回の平伏礼を行った。
（注）イスラーム初期には礼拝中のおしゃべりが許されていた
アブドッラーは次のように伝えている
私達はアッラーの使徒と一緒に礼拝した。
その時彼は礼拝に何かを付け加えたかもしくは省略した。
伝承者の一人イブラヒームは“アッラーに誓ってそのような疑念は私個人の立場以外のものではありませんが”といっているがさらに次のように伝えている。
そこで私達はこういった。
「アッラーの使徒よ礼拝に何か新しいことが加えられましたか」
すると預言者は「いいえ」と答えた。
そこで私達は彼（預言者）がどのように行ったかを彼に語りました。
すると預言者は次のようにいいました。
「もし誰かが礼拝して何かを付け加えたり省略したりした時は償いのために二回の平伏をしなさい」
それから彼自身二回の平伏礼を行った。
アブー・フライラは次のように伝えている
アッラーの使徒は私達を導いて昼過ぎの礼拝だったか午後の礼拝だったかともかく午後の二つの礼拝のうちの一つを行ったがその時彼は二ラカートの礼拝の後で（ただちに）最後の挨拶礼を行い、それからモスクのキブラの方角にあった材木のところ（注）にやって来てそれにもたれかかってしまった。
その時彼は怒っているようにも見えた。
人々の中にはアブー・バクルもウマルも居りましたが、二人はこのことで彼に話しかけるのは恐れ多いことと思っていた。
一方人々は“礼拝は短縮されたのだ”といいながらあわただしく出ていった。
しかしズル・ヤダイニ（手の長い奴）の綽名で知られている男が立ち上がって次のようにいった。
「アッラーの使徒よ、礼拝は短縮されたのですか、それともあなた様はお忘れになったのですか」
すると預言者は左右を見廻しながらいった。
「ズル・ヤダイニは何をいっているのですか」
そこで人々はこういった。

「彼のいう通りでございます。あなた様は二ラカートしか礼拝しませんでした」
そこで預言者はさらに二ラカートの礼拝を行い最後の挨拶礼を行った。
それからタクビールを唱えて平伏しそしてタクビールを唱えて頭を上げそれからタクビールを唱えて平伏し、それからまたタクビールを唱えて頭を上げた。
さらに伝承者は“私はイムラーン・ビン・フサインから彼が次のようにいったと知らされた”と伝えている。
「そして彼（預言者）は最後の挨拶礼をした」
（注）当時のマディーナのモスクは実に簡素なものだった
アブー・フライラは次のように伝えている
アッラーの使徒は私達を先導して午後の二つの礼拝のうちの一つを礼拝した。
以下のハディースは前記のハディースと同一である。
アブー・フライラは次のように伝えている
アッラーの使徒は私達を先導して午後の礼拝を行い二ラカートの後に最後の挨拶礼を行った。
そこでズル・ヤダイニが立ち上がりこういった。
「アッラーの使徒よ、礼拝は短縮されたのでしょうか。それとも忘れたのでしょうか」
するとアッラーの使徒は「そのどちらでもない」といった。
そこでズル・ヤダイニはこういった。
「アッラーの使徒よ、確かにどこかおかしかった」
するとアッラーの使徒は人々の方に向き直ってこういった。
「ズル・ヤダイニのいっている通りだろうか」
すると人々は答えて「はい、アッラーの使徒様、彼のいう通りです」といった。
そこでアッラーの使徒は礼拝の残りを済ませてから挨拶礼の後に座礼の状態で償いのため二回の平伏礼を行った（注）。
（注）償いの二回の平伏礼は挨拶礼の前に行うべきかまたは後に行うべきか法学派によって見解を異にしている
アブー・フライラは別の伝承者経路を経て次のように伝えている
アッラーの使徒は昼過ぎの礼拝の際に二ラカートだけ行ってそれからただちに最後の挨拶礼をしたことがあった。
するとバヌー・スライム族出身の小人の男が彼のもとにやって来てこういった。
「アッラーの使徒よ礼拝は短縮されたのですか、それともあなた様が忘れたのですか」
以下残りのハディースは前述のハディースと同じである。
アブー・フライラは伝えている
私が預言者と一緒に昼過ぎの礼拝を行っている時に、アッラーの使徒は二ラカートの後に最後の挨拶礼を行った。
そこでバヌー・スライム族出身の一人の男が立ち上がった。
この後の残りのハディースは前記のものと同じである。
イムラーン・ビン・フサインは次のように伝えている

アッラーの使徒は午後の礼拝を行ったが三ラカートの後に最後の挨拶礼を行った。
それから彼は自分の家（モスクに隣接していた）に入ってしまった。
そこでヒルバークと呼ばれる両手の長い男が立ち上がり彼のところに行き「アッラーの使
徒よ……」といって預言者が礼拝で行ったことを語った。
すると預言者は怒って外套を引きずりながら人々が集まっている所に行き「この男は真実を語っていますか」と尋ねた。
人々は「はい」と答えた。
そこで預言者は一ラカートを追加しそして最後の挨拶礼を行いそれから償いの二回の平伏礼を行いそれからまた最後の挨拶礼を行った。
イムラーン・ビン・フサインは次のように伝えている
アッラーの使徒は午後の礼拝のうちの三ラカートの後に最後の挨拶礼を行いそれから立ち上がり自分の部屋に入ってしまった。
そこで両手の長い男が立ち上がって「アッラーの使徒よ、礼拝は短縮されたのですか」といった。
すると預言者は怒りながら部屋から出て来て残りの一ラカートを行って最後の挨拶礼をしてそれから償いの二回の平伏礼を行ってそれから最後の挨拶礼を行った。

聖典読誦中の平伏礼について

クルアーン読誦中の平伏礼
1巻　P.391-393

イブン・ウマルは次のように伝えている
預言者はクルアーンを読誦していた。
彼は文中に“サジダ（平伏）”という単語をふくんだ章を誦んでいたがその“サジダ”の所までくると実際に平伏した。
そこで私も彼にならって平伏した。
しかしその時私達は込み合っていて幾人かの人々は額を付ける場所さえない状態でした。
イブン・ウマルは次のように伝えている
アッラーの使徒がクルアーンを読誦している際に“サジダ”という語に出会う時があり、その時は私達と一緒に実際に平伏しました。
しかし私達は彼の近くにいて大変込み合っていたので誰一人として平伏できるだけのスペースを見いだせない状態でした。
アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている
預言者は「沈み行く星にかけて」章（第53章）を誦みその読誦中に平伏礼を行った。
そして彼と一緒にその場に居合わせた者も一斉に平伏した。
しかし一人の老人だけは手の掌一杯に小石または土をつかみそれを彼の額のところまで上げて"これで私には充分です"といった。
ところでアブドッラーは彼についてこういった。
「確かに私は後に彼（老人）が無信仰者の徒輩として殺されたところを見ました」
アターウ・ビン・ヤサールは伝えている
彼はザイド・ビン・サービトに（礼拝中に）イマームと一緒に（クルアーンを）読誦することの是非について尋ねた。
するとザイドは、「どうあっても礼拝中にイマームと一緒の読誦はあり得ない（注）」といった。
また彼（ザイド）は彼がアッラーの使徒の前で「沈み行く星にかけて」章（第53章）をよんだ際に彼（預言者）は平伏しなかったと主張した。
（注）イマームだけが読誦し一般の信徒はただ黙って礼拝せよの意
アブー・サラマ・ビン・アブドル・ラフマーンは次のように伝えている
アブー・フライラは人々の前で「天空が裂けて割れる時」章（第84章）をよんだがその読誦中に平伏した。
そして（礼拝が）完了した時彼は人々に向かってアッラーの使徒がこの章を読誦中に平伏したと伝えた。
同様のハディースがアブー・フライラからの伝聞としてアブー・サラマを経て別の伝承者経路で

伝えられている。
アブー・フライラは次のように伝えている
我々は預言者が「天空が裂けて割れる時」章（第84章）と「汝の主のみ名において誦め」章（第96章）をよんだ時彼と一緒に平伏した。
アブー・フライラは次のように伝えている
アッラーの使徒は「天空が裂けて割れる時」章（第84章）と「汝の主のみ名において誦め」章（第96章）をよんだ時、平伏礼を行った。
同様のハディースが別の伝承者経路を経てアブー・フライラからの伝聞としてアブドル・ラフマーン・アアラジによって伝えられている。
アブー・ラーフィウは次のように伝えている
私はアブー・フライラと一緒に夜の礼拝を行った。
その時彼は「大空が裂けて割れる時」章をよみ、その読誦中に平伏した。
そこで私は彼に「この平伏礼は一体何ですか」と尋ねた。
すると彼はこういった。
「その章の読誦中アブー・カーシム（預言者の別名）の背後で私は平伏礼を行いました。
よってこの章をよむ際には来世で彼に出会うまで私は平伏しつづけることでしょう」
また別伝承では「私もその際には平伏礼を続けます」と伝えられている。
このハディースはタイミーによっても別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは“アブー・カーシムの背後で……”の一節は言及されてはいない。
アブー・ラーフィウは次のように伝えている
私は「大空が裂けて割れる時」章を読誦中にアブー・フライラが平伏礼をする所を見た。
そこで私は彼に「あなたはその章の読誦中に平伏礼をするのですか」と尋ねた。
すると彼は次のように語った。
「はい、私は最高の友がこの章を読誦中に平伏する所を見ました。
だから私は来世で彼に出会うまでこの章の読誦中は平伏礼をし続けます」
ところで伝承者の一人シュウバは“最高の友とは預言者のことですか”と尋ねた。
すると彼（シュウバにこのハディースを伝えた伝承者）は“はい、そうです”と答えた。

礼拝中の正座礼の姿勢に関して

礼拝中の正座礼の姿勢と両手を両太股の上にいかに置くかについて
1巻　P.393-394

アブドッラー・ビン・ズバイルは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
アッラーの使徒は礼拝で座りの姿勢をとった時左足先を（右の）太股と脛の間におき、右の足先を伸ばして横座りした。
そして左手を左膝の上に置き右手を右の太股の上に置き、右手の人差し指を上げた。
アブドッラー・ビン・ズバイルは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
アッラーの使徒は祈りのため座りの姿勢をとった時右手を右の太股の上に置き左手を左の太股の上に置いた。
そして（右の）人差し指を上げ親指を中指の上に置き、左手の掌で膝を覆った。
イブン・ウマルは次のように伝えている
預言者は礼拝中の証言礼のために座った時両手を両膝の上に置き、親指に続く右の人差し指を上げた姿勢（神の唯一性を象徴）で祈った。
そして左手は左膝の上に伸ばしていた。
イブン・ウマルは伝えている
アッラーの使徒は証言礼のために座った時左手を左膝の上に右手を右膝の上に置き、53の形（注）に指で輪を作り、人差し指は上げていた。
（注）よくわからないが次のような解釈も考えられる。
アラブは指で数を数える時に古くは開いた指を一本一本倒していったという。
この論法でゆくと左手は握りしめているから五十となり右手は人差し指を立てると親指も自然と立つので三となり、計53となる
アリー・ビン・アブドル・ラフマーン・ムアーウィーは次のように伝えている
アブドッラー・ビン・ウマルは私が礼拝中に小石で遊んでいる姿をみたが、礼拝が終わった時に彼は私がしていることを禁じて次のようにいった。
「アッラーの使徒が常日頃行っていたようにしなさい」
そこで私は尋ねた。
「アッラーの使徒はどのようにしていたのでしょうか」
すると彼はこういった。
「彼は礼拝中の証言礼のために座った時、右手の掌を右膝の上に置き、指を握りしめ、親指につづく人差し指だけは上げ、一方左手の掌は左膝の上に置いていた」
同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。

タスリーム礼について

礼拝を終える際のタスリーム（左右の挨拶儀礼（注））とその方法
（注）この時次のように唱える“貴方の上に平安がそしてアッラーの慈悲がありますように”
1巻　P.394-395

アブー・マアマルは次のように伝えている マッカの或るアミールが（左右の）二回の挨拶礼を行った。そこでアブドッラー・ビン・マスウードが尋ねた。「どこでそのスンナ（預言者の慣行）を得ましたか」すると彼はハカムが彼のハディースの中で次のように語っていると答えた。「アッラーの使徒はかつてそのように行っていた」アブドッラー・ビン・マスウードは次のように伝えている 或る時シュウバが次のように彼にいった。「アミールもしくは或る男が二回挨拶礼を行った」するとアブドッラーはこういった。「彼（その男）はどこでそのスンナを得たのだろうか」アーミル・ビン・サアドは彼の父からの伝聞として次のように伝えている 私はアッラーの使徒が彼の頬の白さが見える程度に右を向いて挨拶礼を行いついで左を向いて挨拶礼を行ったところを見た。

礼拝後のズィクルについて

礼拝後のズィクル（神のみ名を反復する唱念）について
1巻　P.395-396

イブン・アッバースは次のように伝えている
私達はアッラーの使徒が礼拝を完了したことをタクビール（アッラーは偉大なりと唱えること）によって知ったものでした。
イブン・アッバースは次のように伝えている
私達はアッラーの使徒が礼拝を完了したことをタクビール以外によっては知り得なかった。
ところでアムル・ビン・ディーナールはこういった。
私がアブー・マアバドに向かってそのことについて言及した時彼はそれを否定して“私はあなたにそれを伝えていない”といった。
しかしアムルは"以前に彼（アブー・マアバド）が確かにそのことを私（アムル）に伝えた"といった（注）。
（注）アムル・ビン・ディーナールの方がアブー・マアバドより信頼に足るとハディース学者によって考えられている
イブン・アッバースは次のように伝えている
義務の礼拝の後にズィクルの声を一段と高くすることが預言者の生涯の習わしでした。
それで私はその声を聞く時に人々が礼拝を完了したことを知ったものでした。

墓中の責苦からの加護について

墓中の責苦からの加護を求めることが望ましいこと
1巻　P.396-397

アーイシャは次のように伝えている
アッラーの使徒が私の部屋に入ってきたがその時私と一緒に一人のユダヤの女がいて「あなた方はお墓の中で試練を受けることに気がついていますか」といった。
それを聞いたアッラーの使徒は体を震わせながらこういった。
「確かにユダヤ人のみが試練を受けるだろう」
さてアーイシャはさらにつづけて次のように語った。
それから私達は数夜を過した。
そしてアッラーの使徒は私に次のようにいった。
「あなた達（ムスリム）も墓中で試練を受けるだろうということが私に啓示されたが、お前はそのことに気が付いているか」
アーイシャはさらにこう伝えている。
"その後私はアッラーの使徒が墓中の責苦からの加護を求めて祈る声を聞きました"
アブー・フライラは伝えている
その啓示のあった後私はアッラーの使徒が墓中の苦痛からの加護を求めて祈る声を聞いた。
アーイシャは次のように伝えている
マディーナに住むユダヤ人の二人の老女が私の家に入ってきて「真の中にいる人々（死者）は墓中でも責苦に会うだろう」といった。
しかし私は彼女等二人の言葉を信じなかった。
私は二人が正しいことをいっているとは思いたくなかった。
さて二人は出て行ったがアッラーの使徒が代って私の部屋に入って来た。
そこで私は彼にいった。
「アッラーの使徒様、マディーナに住むユダヤ人の二人の老女が私の所にやって来て墓の中にいる人々は己れの墓の中で責苦を負うだろうと主張しました」
すると預言者はこういった。
「その二人は真実を語ったのだ、彼等墓中の人々は責苦を負い動物でさえその（うめき）声を耳にする程です」
後にアーイシャは次のように語った。
「私はその後預言者が礼拝中に墓中の責苦からの加護を求めて祈る姿を必ず見ました」
このハディースはアーイシャからの伝聞としてマスルークによって語られている。
その中で彼女はこう語っている。
「彼（預言者）はその後礼拝中に墓中の責苦からの加護を必ず求めていました」

その他礼拝中に加護を求めることについて

その他礼拝中に加護を求めるべきこと
1巻　P.397-399

アーイシャは次のように伝えている
私はアッラーの使徒が礼拝中にダッジャール（偽救世主（注））の試練からの加護を求める声を聞きました。
（注）宗教的詐欺師で30人現われるとされている。
キリスト教ではアンティクリストに相当する。
最大の偽救世主は終末に現われる最後の詐欺師とされている
アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉を次のように伝えている
誰でも礼拝において証言礼を唱える時はアッラーに以下の四つの苦難からの加護を求めて次のようにいいなさい。
「おおアッラー、げに私はあなたに地獄の責苦から、また墓中の責苦から、また生と死の試練から、また偽救世主の試練の邪悪からのご加護を求めます」
預言者の妻のアーイシャは伝えている
預言者は礼拝において常に次のように祈願していた。
「おおアッラー、げに私はあなたに墓中の責苦から、偽救世主の試練からのご加護を求めます。
また生と死の試練からのご加護を求めます。
おおアッラー、宗教上の罪と負債からのご加護を求めます」
さらにアーイシャは次のように伝えている。
ある男が預言者にこう尋ねた。
「アッラーの使徒よ、どうしてあなたはそうしばしば負債からのご加護を求めるのですか」
すると預言者はこう答えた。
「もし人が負債を負うと、応々にして話をすれば嘘をつかざるを得なくなり約束をしても破らざるを得なくなるからです」
アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉を次のように伝えている
「誰でも最後の証言礼を終えた時には次の四つの救済をアッラーに求めなさい。
それらは地獄の責苦と墓中の責苦と生と死の試練と偽救世主の邪悪です」
このハディースは同一伝承者経路を経てアウザーウィーによって伝えられている。
しかし彼は“誰でも証言礼を終えた時”と伝え“最後の（証言礼）”とは伝えていない。
アブー・フライラは伝えている
アッラーの使徒は次のようにいった。
「おおアッラー、げに私は墓中の責苦、地獄の業火の責苦、生と死の試練、偽救世主の邪悪からのご加護を請い願います」
アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉として次のように伝えている

「アッラーの（地獄の）処罰からアッラーにご加護を求めなさい。
墓中の責苦からアッラーにご加護を求めよ、偽救世主の試練からアッラーのご加護を求めよ、生と死の試練からアッラーにご加護を求めなさい」
同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。
同様のハディースが別伝承でも伝えられている。
アブー・フライラは次のように伝えている
預言者は墓中の責苦からまた地獄での責苦からまた偽救世主の試練からの加護を求めることを常としていた。
イブン・アッバースは次のように伝えている
アッラーの使徒はクルアーンの一章を教えるように以下のドアー（祈願の言葉）を彼等に教えたものでした。
そこで彼は次のように唱えなさいといっています。
「おおアッラー、私達は地獄の責苦からあなたにご加護を求めます。
また私は墓中の責苦からあなたにご加護を求めます。
また私は偽救世主の試練からあなたにご加護を求めます。
また私は生と死の試練からあなたにご加護を求めます」
ムスリム・ビン・ハッジャージュは次の話を聞いたとして伝えている。
ターウースは彼の息子に“おまえは礼拝中にこの祈願文（ドアー）を唱えたか”と尋ねた。
すると息子は“いいえ”と答えた。
するとターウースは“おまえの礼拝をやりなおしなさい（注）”といった。
さてターウースはこのハディースもしくは同一内容のハディースを三人もしくは四人の伝承者を通じて伝えている。
（注）このドアーを唱えることは決して義務ではないがその重要性に鑑みて教育的立場からやり直しを命じた

礼拝後のズィクルの仕方について

礼拝後のズィクル（神のみ名を反復する唱念）が好ましいこと、
及びズィクルの仕方について
1巻　P.399-405

サウバーンは次のように伝えている
アッラーの使徒は礼拝を終えた時アッラーに三回赦しを請い、そして次のようにいった。
「おおアッラー、あなたは平安であり、平安はあなたからやってくる、あなたは栄光と栄誉の主として自ら尊くおわします」
ところでワリードは次のように伝えている。
私はアウザーウィーに“どのようにして赦しを請うのですか”と尋ねた。
すると彼は“あなたは次のように唱えます”とこう云った。
“私はアッラーに赦しを請います。私はアッラーに赦しを請います”
アーイシャは次のように伝えている
預言者は挨拶礼を終えるとただちに座ったまま次の祈願文を唱えた。
「おおアッラー、あなたは平安であり、平安はあなたからやってくる。
あなたは自ら尊くあり栄光と栄誉の主である」
ところでイブン・ヌマイルの伝承では“おお栄光と栄誉の主よ”とある。
同様のハディースは別の伝承者経路を経て伝えらている。
ただしここでは“おお栄光と名誉の主よ”と伝えている。
同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは預言者は“おお栄光と栄誉の主よ”といっていたとある。
ムギーラ・ビン・シュウバ（注）はムアーウィヤ（ウマイヤ朝のカリフ）に次のように書いた
アッラーの使徒は挨拶礼を終え礼拝を終えた時次のように唱えた。
「アッラー以外に神はなし、アッラーは独一者であり、彼にはいかなる同位者もなし、大権は彼のみにあり、讃辞は彼にのみ帰され、彼は全てのことに全能である。
おおアッラー、あなたの与えたものを禁じる者はなく、またあなたが禁じたものを与える者はない。
そして、あなたの元では資産家の富も何の役にもたたない」
（注）彼はムアーウィヤによってクーファの知事に任命されていた
同様のハディースがムギーラ・ビン・シュウバによって別の伝承者経路を経て伝えられている。
ただしアブー・バクルとアブー・クライブは二人の伝承の中でワッラード（ムギーラの解放奴隷）が次のように報告したと語っている。
ムギーラは私（ワッラード）にこのハディースの原文を口述筆記させ、私はそれをムアーウィヤに宛てて書いた。
ムギーラ・ビン・シュウバの解放奴隷ワッラードは次のように伝えている

ムギーラはムアーウィヤに次のように書いた（ワッラードがムギーラに代ってその手紙を書いたのだが）。
私はアッラーの使徒が挨拶礼を終えた時、前述の二人が伝えたハディースと同様のハディースを聞いた。
しかしここでは彼は“彼（アッラー）は全てのことに全能である”という一節には言及しなかった。
ムギーラ・ビン・シュウバの書記ワッラードは次のように伝えている
ムアーウィヤは前述のハディースと同内容のハディースをムギーラに書いた。
ムギーラ・ビン・シュウバは、次のように伝えている
ムアーウィヤはムギーラに“アッラーの使徒からあなたが聞いたことは何でも私に書きなさい”と書き送った。
そこでムギーラはムアーウィヤに次のように書いた。
私はアッラーの使徒が礼拝を終えた時次のように唱えていた言葉を聞いた。
「アッラー以外に神はなし、アッラーは独一者であり、彼にはいかなる同位者もなし、大権は彼にのみあり、讃辞は彼にのみ帰され、彼は全てのことに全能である。
おおアッラー、あなたが与えたものを禁じる者はなく、あなたが禁じたものを与える者もない。
そしてあなたのもとでは資産家の富も何の役にも立たない」
アブー・ズバイルは次のように伝えている
イブン・ズバイルは各礼拝の挨拶礼の後で次のような言葉を唱えていた（注）。
「アッラー以外に神はなし、アッラーは独一者であり、彼にはいかなる同位者もなし、大権は彼にのみあり、讃辞は彼にのみ帰され、彼は全てのことに全能である。
いかなる権能も力もアッラーによることなしには存在せず、アッラー以外に神はなし、われらはアッラーのみを崇拝し、み恵みは彼のみが持つ、美徳は彼にのみ帰す、またすばらしき讃辞は彼にのみある。
アッラー以外に神はなし、われらは彼にのみ信心の誠をつくす、たとえ無信仰者たちが（どんなに）そのことを嫌ったとしても」
さて伝承者（アブー・ズバイル）はさらに次のように伝えた。
アッラーの使徒は各義務の礼拝の直後に前記の言葉を声高に唱えたものでした。
（注）アブー・ズバイルとイブン・ズバイル（アブドッラー）との間には特に親子関係はない。
前者は解放奴隷の出身
解放奴隷のアブー・ズバイルは次のように伝えている
アブドッラー・ビン・ズバイルはイブン・ヌマイルが伝えたハディースの如く各礼拝の直後に“アッラーの他に神なし”と唱えていた。
彼はそれをハディースの最後の段で伝えた。
それからまたイブン・ズバイルは次のように語っている。
アッラーの使徒は各礼拝の直後に“アッラーの他に神なし”と声高に唱えていた。
アブー・ズバイルは次のように伝えている
私はアブドッラー・ビン・ズバイル（注）が説教壇上で人々に向かって説教して次のように語っ

ている言葉を聞いた。
アッラーの使徒は義務の礼拝もしくはその他の礼拝の最後の挨拶礼を終えた後前記ハディースを述べたものでした。
（注）彼の母は預言者の妻アーイシャの姉アスマーウである。
また彼はマディーナへの移住者達の間で最初に生れた子供だった
アブー・ズバイル・マッキー（解放奴隷）は次のように伝えている
彼はアブドッラー・ビン・ズバイルが礼拝の最後の挨拶礼を終えた後に前記の二人のハディースの如き文言を唱えている声を聞いた。
しかし彼はまたアッラーの使徒からそれを直接聞き及んで伝えているとも語った。
アブー・フライラは次のように伝えている（これはクタイバの伝えたハディースでもある）
移住者達の中で貧しい人達がアッラーの使徒のもとへやって来てこういった。
「資産家達は既に最高の地位と天国での久遠の至福とを占めてしまっている」
すると預言者は尋ねていった。
「それはどういう意味ですか」
そこで彼らは次のように説明した。
「彼ら資産家達は私達が礼拝するごとく礼拝し、私達が断食するごとく断食しています。
その上彼らは施しをします。然し私達は施す余裕がありません。
彼らは奴隷を解放しますが私達は奴隷を解放しません」
そこでアッラーの使徒はこういった。
「私はあなた方に対してあなた方に先行した人達に追いつき、あなた方の後から来る者には先んじることができるすべを教えたではありませんか。
あなた方が行った行為と同じ行為を行った者を除いてあなた方に優る者は誰一人としていないではありませんか」
そこで彼等は「はい、確かに、アッラーの使徒様」といったがさらに預言者はこういった。
「あなた方は各礼拝の直後にアッラーの栄光をたたえ、アッラーは偉大なりと唱え、33回アッラーを讃美しなさい」
ところでアブー・サーリフは次のように伝えている。
移住者達の中で貧しい者達がアッラーの使徒のもとに戻って来てこういった。
「私達の兄弟の資産家の人々は私達が行ったことを聞きそれと同じ行為をしました」
そこでアッラーの使徒はこういった。
「これはアッラーの恩寵であり、アッラーはそれをみ心のままに嘉し給える者に与え給う」
ところでスマイヤは次のように語った。
「私は家族の何人かにこのハディースを伝えた」
すると家族の一人が“あなたは思いちがいしている”といって預言者の言葉を次のように伝えた。
「あなたは33回アッラーの栄光をたたえ33回アッラーを讃美しそしてアッラーは偉大なりと33回唱えなさい」
そこで私はアブー・サーリフのところへ戻り彼に事の次第を伝えた。

すると彼は私の手をとり次のように云った。
「アッラーは偉大なり、アッラーの栄光にたたえあれ、称讃はアッラーにのみ、アッラーは偉大なり、アッラーの栄光にたたえあれ、称讃はアッラーにのみ……」
こうして彼はそれらすべてを33回唱えつづけた。
ところでイブン・アジュラーンは次のように語っている。
私はこのハディースをラジャーウ・ビン・ハイワに語った。
すると彼はそれと同様のハディースを預言者、アブー・フライラ、アブー・サーリフの伝承順序で私に伝えた。
アブー・フライラはアッラーの使徒から聞いたとして次のように伝えている
人々（移住者のうち貧しい人々）はこういった。
「アッラーの使徒よ、資産家達は最高の地位と天国での久遠の至福を占めています」
さて残りのハディースはライスからの伝聞としてクタイバが伝えたものと同じである。
しかし彼はアブー・フライラの伝えるハディースの末尾にアブー・サーリフの言葉を挿入した。
それは“それから移住者達のうちの貧しい人々は戻ってきた”以下の一節である。
また彼は次の部分を付加した。
「スハイルはいっている、11回ずつ唱えて全てを合わせると33回になる（注）」
（注）例えば“アッラーは偉大なり、アッラーの栄光に讃えあれ、称讃はアッラーにのみ”という一連の言葉を11回唱えれば計33回アッラーを讃えたことになる意
カアブ・ビン・ウジュラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「礼拝の直後に唱える言葉がある。
それを唱える者または行う者は決して失望することはない。
その言葉は“アッラーに栄光あれ”を33回、“アッラーに讃えあれ”を33回、“アッラーは偉大なり”を34回唱えることである」
カアブ・ビン・ウジュラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「礼拝の直後に唱える言葉（ムアッキバート）がある。
それをいう者またはそれを行う者は決して失望することはない。
それは“アッラーに栄光あれ”を33回、“アッラーに讃えあれ”を33回、“アッラーは偉大なり”を34回各礼拝の後につづいて唱えることである」
同様のハディースが別の伝承者経路を経てハカムによって伝えられている。
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「各礼拝の最後に“アッラーに栄光あれ”と33回唱え、また“アッラーに讃えあれ”と33回唱え、“アッラーは偉大なり”と33回唱えて全て合わせて99回を唱え、その上“アッラーの他に神なし、アッラーは独一者なり、彼に同位者なく、大権は彼にのみあり、讃辞は彼のみに帰され、彼は全てに全能である”という言葉を加えて100回となす者は誰であれ、その者の宗教上の罪は、たとえそれが波立つ海の泡のように多くとも全て赦されるだろう（注）」
（注）これらの赦される罪は当然大罪でなく小罪である
このハディースは別の伝承者経路を経てアブー・フライラによって伝えられている。

タクビール直後の言葉について

礼拝開始のタクビールとそれにつづくクルアーン読誦との間に唱えられる言葉
1巻　P.405-407

アブー・フライラは次のように伝えている
アッラーの使徒は礼拝を始めるにあたってタクビールを唱え次のクルアーンの朗誦に入る前にしばらく間をとって沈黙していたものだった。
そこで私は彼に次のように尋ねた。
「アッラーの使徒よ、私の父母にも代え難いお方よ、タクビールとクルアーン朗誦の間の沈黙時にあなたは何をいっているのか私にお教え下さい」
すると彼は次のように念じていると答えた。
「おおアッラー、あなたが西と東を隔てたように、私と私の数々の罪をお隔て下さい。
おおアッラー、白い布が汚れから清められるように私を数々の罪からお浄め下さい。
おおアッラー、水と氷と雹（注）でもって私から数々の罪を洗い落して下さい」
（注）アラビアでは雪は降らないが雹は時々降ることがある
同様のハディースが別の伝承者経路を経ても伝えられている。
アブー・フライラは次のように伝えている
アッラーの使徒は第二回目の屈身礼から身を起す際にただちに「アッラーに讃えあれ、万世の主……」（開扉章）を朗唱しその間に沈黙することはなかった。
アナスは次のように伝えている
一人の男が息せき切ってやってきて礼拝の列に加わり、次のようにいった。
「アッラーに称讃あれ、多くの称讃が、み恵みと祝福があれかし」
それからアッラーの使徒が礼拝を終えた時彼は次のように尋ねた。
「そのような言葉を誰がいったのですか」
ところが人々は黙ったままでしたので彼は再び尋ねてこういった。
「誰がいったのですか。その者は決して悪いことを口にしたわけではありません」
そこで一人の男が次のようにいった。
「私は遅れてやって参りましたが息が苦しくてついそのようにいいました」
すると預言者はこう申された。
「私は12人の天使達がその言葉を誰がアッラーのみもとに伝えるかで相互に競っている様子を見ました」
イブン・ウマルは次のように伝えている
私達がアッラーの使徒と一緒に礼拝を捧げている最中に誰かが次のようにいった。
「アッラーは真に偉大なり、アッラーに絶大なる称讃あれ、朝な夕なにアッラーに讃美あれかし」
そこでアッラーの使徒はこういった。

「しかじかの言葉を唱えた者は誰ですか」
すると人々の中の叫人がこういいましたい
「私です。アッラーの使徒様」
そこでアッラーの使徒はこう申されました。
「私は驚きました。天国の門がそのために開かれたのですから」さてイブン・ウマルは次のように語った。
「私はアッラーの使徒の口からこの言葉を聞いた時以来（前述の）讃美の言葉を唱えつづけています」

礼拝は厳粛にすることに関して

礼拝は厳粛に平静に行うことが好ましいこと、
あわただしく行うことは禁じられていること
1巻　P.407-408

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「礼拝開始直前の呼びかけ（イカーマ）が詠唱された時でもあなたは礼拝に急いで走って来てはいけません。
平静に歩いて来なさい。
そして間に合った部分をまず礼拝し、やり過した部分は後で完了させなさい」
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったと伝えている
「礼拝開始直前の呼びかけが詠誦された時でも礼拝に急いで走って来てはいけません。
平静に歩いて来なさい。
そして間に合った部分をまず礼拝し、やり過した部分は後で完了させなさい。
なぜならば誰でも礼拝に赴こうと決めた時その時から彼は実質的に礼拝中であるのだからです」
アブー・フライラはアッラーの使徒から聞いたたくさんのハディースのうちその一つを次のように伝えている
「礼拝の呼びかけがあった時、あなた方は礼拝に急いで走って来てはいけません。
平静に歩いて来なさい。
そして間に合った部分をまず礼拝しやり過した部分は後で完了させなさい」
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「礼拝開始直前の呼びかけが詠唱された時、誰でも礼拝に走って来てはいけません。
静かに落ち着いて来なさい。
そして間に合った部分を礼拝し、追いついた時点でイマームがあなたに先行していた部分は後で完了させなさい」
アブドッラー・ビン・アブー・カターダは彼の父親からの伝聞として次のように伝えている
私達がアッラーの使徒と一緒に礼拝している最中に預言者は（後方で起こった）騒ぎを耳にしました。
そこで彼は礼拝が終った時「何事ですか」と尋ねた。
すると彼等は次のようにいいました。
「私達は礼拝へ急いでかけつけたもので」
すると預言者はこういいました。
「そのようなことをしてはいけません。
礼拝に来る時は静かに来るものです。
そして間に合った部分をまず礼拝し、間に合わなかった部分は後で完了すればよいのです」
同様のハディースが同一伝承者経路を経てシャイバーンによって伝えられている。

礼拝に立ち上がるときについて

いつ人々は礼拝のために立ち上がるべきか
1巻　P.408-409

アブー・カターダはアッラーの使徒がいったとして次のように伝えている
「礼拝直前の呼びかけが詠唱された時、あなた方は私を見るまでは立ち上がってはなりません」
ところで伝承者の一人イブン・ハーテムは“礼拝直前の呼びかけが詠唱された時”か、或いは“礼拝への呼びかけがあった時”かのどちらかの表現であると伝えている。
アブー・カターダが父からの伝聞として伝えた別の伝承ではそれは“確かに私（預言者）が出て来たところを見るまでは”とある。
アブー・フライラは次のように伝えている
礼拝直前の呼び掛けが詠唱され、そこで私達は立ち上がりアッラーの使徒が私達のところへやって来る前に列を整え（待ってい）た。
そこへアッラーの使徒がやって来た。
そして最初のタクビールを唱える前に彼のイマームとしての礼拝の場所に立った時彼は（急に）何かを思い出した、そこで彼は“あなた方はその場にそのままに”といいながら立ち去った。
それで私達は立ったまま彼がやってくるまでそのまま待ちつづけた。
その間彼は確かに身体を洗っていたが（出て来た時には）彼の頭からはしずくが垂れていた。
それから彼はタクビールを行い私達を先導して礼拝した。
アブー・サラマはアブー・フライラからの伝聞として次のように伝えている
礼拝直前の呼びかけが詠唱され、人々は列を整えて並んだ。
そしてアッラーの使徒が出てきてイマームとしての彼の礼拝の場所に立った。
それから彼は手で“あなた方の場所にそのままいるように”と彼等に合図をした。
そして彼は出ていったがその間確かに身体を洗っていたので（戻って来た時には）彼の頭からはしずくが垂れていた。
それから彼は私達を先導して礼拝を行った。
アブー・サラマはアブー・フライラからの伝聞として次のように伝えている
礼拝直前の呼びかけがアッラーの使徒のために詠唱された時、預言者が彼の場所に立つ以前に人々は列を整えて並んだ。
ジャービル・ビン・サムラは伝えている
ビラールは太陽が西に傾いた時、アザーンを詠唱したが預言者が出てくるまでは礼拝直前の呼びかけは詠唱しなかった（注）。
（注）つまりビラールは預言者が出て来て彼の姿を見た時はじめて礼拝直前の呼びかけを詠唱した

屈身礼中の礼拝参加について

礼拝中の屈身礼に間に合った者は確かにその礼拝に間に合ったことになる
1巻　P.409-411

アブー・フライラは預言者が次のようにいったとして伝えている
「礼拝中の屈身礼に間に合った者は確かにその集団礼拝に間に合ったことになる」
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「イマームと一緒に行われる礼拝中の屈身礼に間に合った者は確かにその礼拝に間に合ったことになる」
アブー・フライラは別の伝承者経路を経て同様のハディースを伝えている。
しかしここでは“イマームと一緒に”という語句は伝えていない。
また伝承者の一人ウバイドッラーが伝えたハディースでは“彼は確かに礼拝の全てに間に合った”とある。
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「太陽が昇る前（に行う）、日の出前の礼拝で、その屈身礼の一つに間に合った者は、確かに日の出前の礼拝に間に合ったことになる（注）
また太陽が沈む前の午後の礼拝で、その屈身礼の一つに間に合った者は、確かに午後の礼拝に間に合ったことになる」
（注）日の出、天中、日没時の太陽運行に伴う三時点における礼拝は太陽崇拝に通じるとして禁じられたが、これはそれ以前のハディースだろう
同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。
アーイシャはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「太陽が沈む前（に行う）、午後の礼拝で、その平伏礼の一つに間に合った者、もしくは太陽が昇る前（に行う）、日の出前の礼拝で、その平伏礼の一つに間に合った者は、確かにそれらの礼拝に間に合ったことになる」
ところで平伏礼とはここでは屈身礼を暗に意味している。
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「太陽が沈む前に、午後の礼拝の屈身礼の一つに間に合ったものは、確かに間に合ったことになる。
太陽が昇る前に、日の出前の礼拝の屈身礼の一つに間に合った者は、確かに間に合ったことになる」
同様のハディースがマアマルによって別の伝承者経路を経て伝えられている。

五回の義務礼拝の時刻について

五つの義務の礼拝の時刻
1巻　P.411-417

イブン・シハーブは次のように伝えている
ウマル・ビン・アブドル・アズィーズはいくぶん午後の礼拝を遅らせた。
そこでウルワ・ビン・ズハイルは彼にいった。
「天使ジブリールは確かに天下って来てアッラーの使徒を先導して礼拝を行ったのではないですか（注）」
そこでウマルは彼にこういった。
「ウルワよ、あなたは自分が何をいっているか解っているのですか」
そこで彼はこう語った。
私（ウルワ）はバシール・ビン・アブー・マスウードが次のように語った言葉を聞いています。
私（バシール）は父（アブー・マスウード）がアッラーの使徒から次のような言葉を耳にしたということを伝聞した。
「天使ジブリールが降りて来て私（預言者）を先導した。
そこで私は彼と一緒に礼拝した。
それから私は彼と一緒に礼拝した、それから私は彼と一緒に礼拝した。
それから私は彼と一緒に礼拝した、それから私は彼と一緒に礼拝した」
と彼（預言者）は指で五回の礼拝を数えながらいった。
さてイブン・シハーブはまた次のように伝えている。
ウマル・ビン・アブドル・アズィーズが或る日礼拝を遅らせた。
そこへウルワ・ビン・ズバイルが入って来て彼（ウマル）に次のように語った。
ムギーラ・ビン・シュウバがクーファ在任中の或る日のこと礼拝を遅らせたことがある。
するとアブー・マスウード・アンサーリーが彼（ムギーラ）の所にやって来て次のようにいった。
ムギーラよ、これは一体どうしたことですか、あなたは次のことを知らないのですか。
天使ジブリールが降りてきて礼拝した。
それでアッラーの使徒も彼とともに礼拝した。
それからまたジブリールが礼拝しそれで預言者が礼拝し、それからまたジブリールが礼拝し、それで預言者が礼拝し、それからまたジブリールが礼拝しそれで預言者が礼拝し、それからまたジブリールが礼拝しそれで預言者が礼拝した。 それから預言者は“このように私は命じられました（注）”といった。
さてウマルはウルワにこういった。
「ウルワよあなたが語っていることをよく考えてみなさい。
実に天使ジブリールがアッラーの使徒に礼拝の時刻を教えたのではないか」

そこでウルワは“そのようにバンール・ビン・アブー・マスウードも父からの伝聞として伝えた”といった。
ウルワは預言者の妻アーイシャが彼に次のように語ったとして伝えている。
アッラーの使徒は彼女の部屋に日がかげる前の未だ太陽の光がそこに射し込んでいるうちに午後の礼拝を捧げたものでした。
（注）礼拝の時刻もまた神の意思によって決められた、礼拝はその指定された時刻も含めてアッラーの意思により命じられたものの意か
同様のハディースが別の伝承者経路を経て次のように伝えられている
預言者は太陽の光が私の部屋に射し込んでいる内に午後の礼拝を行ったものでしたがその時はまだ午後の日影が長く延びて部屋を覆う前であった。
また伝承者の一人アブー・バクル（イブン・アブー・シャイバ）も午後の日影が長く延びて未だ部屋に射し込む前であったと証言している。
預言者の妻アーイシャは次のように伝えている
アッラーの使徒は太陽が彼女の部屋を明るく照している内に午後の礼拝を行っていた。
その時はまだ午後の日影がはっきりと彼女の部屋にまで長く延びる前であった。
アーイシャは次のように伝えている。
アッラーの使徒は太陽の光が私の部屋にまだある内に午後の礼拝を捧げていた。
アブドッラー・ビン・アムルはアッラーの預言者が次のようにいったとして伝えている
「あなた方が日の出前の礼拝を行う時間帯は、太陽の初光が現れるまでの時刻である。
それから昼過ぎの礼拝を行う時間帯は、午後の礼拝の時刻に入るまでの間である。
また午後の礼拝を行う時間帯は、太陽が黄昏色に染まる時刻までである。
また日没後の礼拝を行う時間帯は、黄昏の光が消えうせてし辛つまでの間である。
そして夜の礼拝を行う時間帯は、夜半に至るまでの間である」
アブドッラー・ビン・アムルは預言者が次のように語ったとして伝えている
「昼過ぎの礼拝の時間帯は、午後の礼拝の時刻になる前までの間である。
また午後の礼拝の時間帯は、太陽が黄昏色になる前までの間である。
また日没後の礼拝の時間帯は、日没後の夕焼けが消え去るまでの間である。
また夜の礼拝の時間帯は、夜半に到る前までの間である。
そして日の出前の礼拝の時間帯は、太陽が昇る前までの間である」
アブー・バクル・ビン・アブー・シャイバとヤヒヤー・ビン・アブー・ブカイルは別の伝承者経路を経て同様のハディースを伝えている。
二人ともシュウバからの伝聞として伝えているがシュウバはこのハディースの伝承経路を一度だけさかのぼって検討したが二度までは調べていないといっている。
アブドッラー・ビン・アムルはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「昼過ぎの礼拝の時間帯は、太陽が天中を過ぎた時から始まり、人の影が身長と同じ長さになる時刻まで、つまり午後の礼拝の時刻に到る前まで、の間である。
午後の礼拝の時間帯は、太陽が黄昏色になる前までであり、日没後の礼拝の時間帯は、日没後の

夕焼けが消える間までであり、夜の礼拝の時間帯は、真夜中までである。
日の出前の礼拝の時間帯は、暁が現れた時から太陽が昇る前までの間である。
しかしもし太陽が昇ってしまったならば礼拝を控えなさい。なぜならばそれは悪魔の双角の間から昇るからです（注）」
（注）太陽崇拝の禁止と関係があるだろう
アブドッラー・ビン・アムル・ビン・アースは次のように伝えている
アッラーの使徒は各礼拝の時刻について尋ねられた。
そこで彼は次のように答えた。
「日の出前の礼拝の最後の時刻は、日の出の初光が現れる前までである。
そして昼過ぎの礼拝の始まりの時刻は、太陽が．天頂から傾いた時からであり、その最後の時刻は、午後の礼拝に到る前までである。
そして午後の礼拝の最後の時刻は、太陽が黄昏色となりその初光が沈む前までである。
そして日没後の礼拝の時間帯は、太陽が沈んだ時から始まり、日没後の残光が消え去る前までである。
そして夜の礼拝の時間帯は、夜半に到るまでの間である」
アブドッラー・ビン・ヤヒヤーは父から次の言葉を聞いたとして伝えている
人は労せずして知識を得ることはできない（注）。
（注）突然前後のハディースと関係がないハディースがここにある、せいぜい礼拝時刻に関するハディースを集めて伝承する労苦に関係しているのだろうか
スライマーン・ビン・ブライダは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
或る男がアッラーの預言者に礼拝の時刻について尋ねた。
そこで預言者はこういった。
「私達と一緒にこの二日間礼拝を共にしなさい」
かくて太陽が天頂から傾いた時、預言者はビラールにアザーンを命じた。
ついで預言者はビラールに昼過ぎの礼拝直前の呼びかけ（イカーマ）を命じた。
それからまた預言者が命じ、それでビラールは午後の礼拝直前の呼びかけを詠唱した。
その時日は高く、白く澄んでいた。
それから太陽が沈んだ時、また命じたのでビラールは日没後の礼拝直前の呼びかけを詠唱した。
それから日没後の薄明りが消えた時、また命じたのでビラールは夜の礼拝直前の呼びかけを詠唱した。
それから暁が現れた時、また命じたのでビラールは日の出前の礼拝直前の呼びかけを詠唱した。
二日目になった時、預言者はビラールに灼熱の時間帯が過ぎるまで、昼過ぎの礼拝を遅らせるように命じ、彼はそのようにした。
かくして預言者は（一日のうちで）最も暑い時間帯が過ぎ去るまで礼拝を遅らせることを許した。
また預言者は日はまだ高かったが、午後の礼拝を前日に礼拝した時刻よりも一層遅らせて行った。

それから日没後の薄明りが消え去る直前に、日没後の礼拝を行い、夜の三分の一が過ぎた頃に夜の礼拝を捧げた。
また預言者ははっきりと夜が明けた時に、日の出前の礼拝を行った。
それから預言者は「礼拝の時刻を尋ねた者は誰だったか」と尋ねた。
そこでその男（質問者）が「私です、アッラーの使徒様」というと彼は次のようにいった。
「あなた方の礼拝の時刻は、あなた方がこれまで見てきた範囲内にあります（注）」
（注）五つの義務の礼拝のそれぞれの時刻について第一日日は最も早い例で第二日目は最も遅い例で示した
スライマーン・ビン・ブライダは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
一人の男が預言者の所にやって来て各礼拝のそれぞれの時間帯について尋ねた。
そこで預言者は「私達と一緒に礼拝をしなさい」と彼にいった。
そして預言者はビラールに命じ、ビラールは夜明け間近の闇の中でアザーンを詠唱した。
そして彼は暁が現れた時に日の出前の礼拝を行った。
それから預言者は太陽が天頂を過ぎて傾いた
時に、昼過ぎの礼拝のアザーンを命じた。
それから預言者はまだ日が高いうちに午後の礼拝のアザーンを命じた。
それから彼は太陽が沈んだ時に日没後の礼拝のアザーンを命じた。
それから日没後の薄明りが消え去った時に夜の礼拝のアザーンを命じた。
翌日預言者は、あたりが夜明けの光で満たされた時に、ビラールにアザーンを命じた。
それから彼は一番暑い時が過ぎた時に、昼過ぎの礼拝のアザーンを命じた。
それから太陽が未だ白く澄みきっていて黄色味を帯びる前に、午後の礼拝のアザーンを命じた。
それから日没後の薄明りが消える前に、日没後の礼拝のアザーンを命じた。
それから彼は夜の三分の一もしくはそれより少し前頃に、夜の礼拝のアサーンを命じた。
ところで、伝承者の一人であるハラミーは夜間のいつ頃であったのかその特定については疑念を抱いていた。
朝がやって釆た時、預言者は次のように申された。
「礼拝の時間帯について尋ねた者はどこにいますか。
二日間であなたが見た各礼拝の早晩の差の間それがそれぞれの礼拝の時間帯です」
アブー・ムーサーは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
アッラーの使徒のもとに或る男がやって来て礼拝の時間帯について尋ねたが、預言者は彼に何も答えなかった（注）。
そして預言者は夜明けが始まった時、日の出前の礼拝を行った。
しかしこの時は人々はお互の顔をほとんど識別不能な程の闇でした。
それから預言者は太陽が天頂から傾いた時に、昼過ぎの礼拝直前の呼びかけを命じた。
或る者達はその時はきっかり正午だったというかも知れない。
しかしもともと預言者は彼らよりもはるかにご存知のはずであった。
それから太陽が未だ高い内に、午後の礼拝直前の呼びかけを命じた。

それから太陽が沈んだ時、日没後の礼拝直前の呼びかけを命じた。
それから日没後の薄明りが消えた時、夜の礼拝直前の呼びかけを命じた。
翌日になって預言者は日の出前の礼拝をかなり遅らせたので礼拝から戻った者はその時確かに太陽は昇り切っていた、もしくはまさに太陽は昇り切らんとしていたという程でした。
それから彼は昼過ぎの礼拝を昨日の午後の礼拝の時間の間近になるまで遅らせた。
それから午後の礼拝を遅らせたがその日の礼拝から戻った者は、確かに太陽が赤くなっていたという程でした。
それから彼は日没後の礼拝を日没後の薄明りが消えゆく頃まで遅らせた。
それから夜の礼拝は夜間の最初の三分の一が過ぎる頃まで遅らせた。
それから朝がやって来た時預言者は（最初に彼に）尋ねた男を呼んで次のようにいった。
「礼拝の時間はこれら対応する礼拝時刻の間の時間帯にある」
（注）預言者は尋ねた男と礼拝を共にすることによって体験的に礼拝の時間帯を教えるつもりであったから
アブー・ムーサーは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
或る男が預言者のところへやってきて各礼拝の時刻について尋ねた。
以下の部分を除いては前記ハディースと同じである。
〃第二日日に預言者は日没後の礼拝を日没後の薄明りが消え去る前に行った〃

灼熱時の昼過ぎの礼拝に関して

集団礼拝に参集する者が途中で、灼熱の太陽のもとにさらされることを避けるためにも、
灼熱時間帯が過ぎるまで、昼過ぎの礼拝を遅らせることは好ましいことである
1巻　P.417-419

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「昼の暑さが一段と激しくなった時は、最も暑い時が過ぎてから、昼過ぎの礼拝をしなさい。
なぜならば、この酷暑の厳しさはまさに地獄の業火の吐息のようなものだからである」
同様のハディースが別の伝承者経路を経てアブー・フライラによって伝えられている。
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「酷暑の日には最も暑い時が過ぎてから、昼過ぎの礼拝をしなさい。
なぜならば、この酷暑の厳しさは地獄の業火の吐出のようなものだから」
アブー・フライラによる別の伝承では“最も暑い時をやり過してから昼過ぎの礼拝をしなさい。
なぜならこの酷暑の厳しさは地獄の業火の吐出のようなものだから”とある。
アブー・フライラは前記と同様のハディースを別の伝承者経路を経て伝えている。
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「確かに酷暑は地鉄の業火の吐出である。
されば涼しくなる時まで礼拝時刻を遅らせなさい」
ハンマーム・ビン・ムナッビフはアブー・フライラが預言者から聞いたものとしていくつかの
ハディースを伝えている。
そのうちの一つが次のハディースであり、そこではアッラーの使徒は次のようにいっている
「酷暑をさけて涼しくなるまで礼拝時刻を遅らせよ。
なぜならこの酷暑の厳しさは地獄の業火の吐出であるから」
アブー・ザッルは次のように伝えている
アッラーの使徒のムアッジン（アザーン詠唱者）が昼過ぎの礼拝のアザーンを詠唱した。
すると預言者は「涼しくなるまで遅らせなさい。涼しくなるまで遅らせなさい」もしくは「待ち
なさい、待ちなさい」といった。
そして彼は続けてこういいました。
「この酷暑の厳しさは地秩の業火の吐出のようなものだから著さが厳しい時は、礼拝を涼しくな
るまで遅らせなさい」
アブー・ザッルはさらに次のように伝えている。
「私達は砂丘の影を見るまで待った（注）」
（注）つまり日が傾き涼しくなるまでの意
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「地獄の業火が主（アッラー）に次のような苦情を申し立てた。
『おお主よ、混雑のあまり私の一部が別の一部を焼きつくして困ります』

そこで主は業火に二つの吐息をお許しになった。
一息は冬の吐息、もう一息は夏の吐息であった。
それがあなた方が体験する夏の酷暑であり、また冬の酷寒（注）である」
（注）この言葉の原語は外来語起源の卑語である。
元来地獄の特性は極寒と極熱であることを暗示している
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「暑い時には涼しくなるまで礼拝を遅らせなさい。
なぜなら確かにその酷暑の厳しさは地獄からの吐息なのだから」
そしてさらに預言者は次のようにいった。
「地獄の業火が主（アッラー）に苦情を述べた。
そこで主は毎年二回の吐息を吐くことを許した。
その一息は冬に、もう一息は夏である」
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「地獄の業火は主にこういった。
『私の一部が別の一部分を焼きつくしています。
だから吐息を吐くことをお許し下さい』
そこで主は火に二回の吐息を許した。
その一つは冬にもう一つは夏の吐息である。
ゆえににあなた方が体験した酷寒それは地獄からの吐息であり、酷暑もまた地獄からの吐息である」

酷暑時以外の礼拝について

酷暑以外では定まった時間の初めのうちに昼過ぎの礼拝を行うことが好ましい
1巻　P.419-420

ジャービル・ビン・サムラは次のように伝えている
預言者は太陽が少し西に傾いた時に昼過ぎの礼拝をしていた。
ハッバーブは次のように伝えている
私達はアッラーの使徒に熱砂の上での昼過ぎの礼拝の歯難を訴えた。
しかし預言者は私達の苦情に注意を払わなかった（注）。
（注）明かに前出のハディースの内容と矛盾するが、ハッバーブ達の訴えが遅らせることの出来る時間の限度を越えていたものであったためと解釈されている
ハッバーブは次のように伝えている
私達はアッラーの使徒のもとにやって来て非常に熱くなった地面もしくは砂の上での礼拝の困難さを訴えた。
しかし彼は私達の苦情に耳を傾けなかった。
ところで伝承者の一人ズハイルは次のように伝えている。
私はアブー・イスハークに「それは昼過ぎの礼拝に関することですか」と尋ねた。
すると彼は「そうです」と答えた。
そこで私は再び「礼拝を早めに行うことについてですか」と尋ねた。
すると彼は「そうです」と答えた。
アナス・ビン・マーリクは伝えている
私達は非常に暑いなかでアッラーの使徒と一緒に礼拝していた。
そして私達のうちの一人が彼の額を地面につけることができなかった時、彼は彼の衣服を広げその上で平伏礼をした。

午後の礼拝時刻について

午後の礼拝は早めに行うことが好ましい
1巻　P.420-422

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている
アッラーの使徒は太陽が高くそして輝いている時に午後の礼拝を行った。
それから或る男がマディーナからアワーリー村（マディーナの近くの高地の村）へ出かけやがてそのアワーリー村へやって来たが未だ太陽が高い内に到着した。
伝承者の一人イブン・クタイバの伝えたところによれば“アワーリー村にやってきた”という一節は述べられていない。
前記のようにアッラーの使徒が午後の礼拝を捧げていたというこのハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。
アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている
私達が午後の礼拝を行いそれから（私達のうちの）誰かがクバーウ（マディーナから3マイル程の村）に出かけたとしてもまだ日が高いうちにそこに着いたものでした。
アナス・ビン・マーリクは伝えている
私達は午後の礼拝を早々と済ませた。
それから一人の者がアムル・ビン・アウフ部族の人々の居留地　（マディーナから二マイルの所）に出かけそこに着いてみると彼等は午後の礼拝を行っている最中でした。
アラー・ビン・アブドル・ラフマーンは次のように伝えている
彼は昼過ぎの礼拝を終えた後にバスラにあるアナス・ビン・マーリクの家を訪れた。
彼の家はモスクの脇にあったが私達が彼を訪れた時彼はこういった。
「あなた方は午後の礼拝を行いましたか」
そこで私達は彼にこう答えました。
「私達は丁度少し前に昼過ぎの礼拝を終えたばかりです」
すると彼はこういった。
「午後の礼拝をしなさい」
そこで私達は立ち上がり礼拝を行った。
私達が礼拝を終えた時彼はアッラーの使徒が次のように語ったといった。
『さて偽善者の礼拝の仕方はこうです。
偽善者は太陽が悪魔の両角の間にある時（太陽の光が黄味を帯びてくる時）になるまで座っていて、それから立ち上がりいやいやながら急いで大地を四回つつく（四ラカートのこと）、その間彼はほんの少ししかアッラーのみ名を唱念しません』
アブー・ウマーマ・ビン・サハルは伝えている
私達はウマル・ビン・アブドル・アズィーズと一緒に昼過ぎの礼拝をしました。
それから私達はモスクから出て行き、アナス・ビン・マーリクを訪ねた。そこで私達は彼が午後

の礼拝をしている姿を見ました。
そこで私はいった。
「やー、おじさん、あなたが行ったこの礼拝は何の礼拝ですか」
すると彼はこう答えた。
「午後の礼拝です、これこそ私達がアッラーの使徒と一緒に行った預言者の礼拝です」
アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーの使徒は私達を先導して午後の礼拝をしたが彼がそれを終えた時バヌー・サリマ族の者が使徒のもとにやって来てこういった。
「我々はらくだを一頭屠殺（注）したく思っています。
そこでこの際あなた様がこれに出席して欲しいと思っています」
そこで預言者は「わかりました」と答えたのでその男は出ていった。
そして私達も彼と一緒に出かけることになった。
ところで私達はあちらでまだ屠殺されていないらくだを見ましたがやがてそれが屠殺され細かく切られ料理された。
そして私達は太陽が沈む前にそれを食べることができました。
ところでこのハディースは別の伝承者経路によっても伝えられている。
（注）会食パーティーを催す意
ラーフィウ・ビン・ハディージュは伝えている
私達はアッラーの使徒と一緒に午後の礼拝をした。
それかららくだが屠殺され十分に解体されそれから料理された。
そして私達は太陽が沈むまでにその料理された肉を食べた。
このハディースの別伝承も伝えられている。
しかし次の部分だけが前記ハディースと違っている。
“私達はアッラーの使徒の時代に午後の礼拝の後らくだを屠殺した”と表現し、“私達は預言者と一緒に礼拝した”とは述べていない。

やり過ごした午後の礼拝に関して

午後の礼拝時間をやり過すあやまち
1巻　P.422-423

イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「午後の礼拝（の機会）をやり過した者はあたかも彼の家族と財産を失ったようなものだ」
同様のハディースが別の伝承者経路を経て預言者にまでさかのぼる伝承（マルフーウ）として伝えられている。
サーリム・ビン・アブドッラーは父からの伝聞としてアッラーの使徒が次のように語ったと伝えている
「午後の礼拝を失った者はあたかも彼の家族と財産を失ったようなものである」
アリーは次のように伝えている
アフザーブ（塹壕）の戦の時、アッラーの使徒は次のようにいった。
「アッラーよ、彼ら（敵）の墓や家々を火で満たしたまえ、彼らは太陽が沈むまで我々を引き止め中間の礼拝（午後の礼拝）から我々をそらせてしまったのですから」
同様のハディースが別の伝承者経路を経てヒシャームによって伝えられている。

中間の礼拝とは、に関して

中間の礼拝それは午後の礼拝のことであると主張する人々の根拠
1巻　P.423-426

アリーはアフザーブの戦の日にアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「彼ら（敵）は太陽が沈むまで我々の気を中間の礼拝（午後の礼拝）からそらせてしまったので、アッラーよ、彼らの墓もしくは彼らの家もしくは彼らの腹（胃袋）を火で満たしたまえ」
ところで伝承者の一人シュウバは“家”“腹”の二語については（言及したかどうか）疑問視している。
同様のハディースが別の伝承者経路を経てカターダによって伝えられている。
しかし彼は“彼らの家と墓を…”と述べたが“家”と“墓”の両語について疑いをもたなかった。
アリーはアフザーブの戦の日に整壕の入口のひとつに座っていたアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「彼ら（敵）は私達の気を太陽が沈むまで中間の礼拝からそらせてしまった。アッラーよ、彼らの墓と彼等の家とを業火で満たし給え」もしくは「彼らの墓と彼らの腹を…」
アリーはアフザーブの戦の日にアッラーの使徒が次のようにいったと伝えている
「彼ら（敵）は私達の気を中間の礼拝つまり午後の礼拝からそらした。
アッラーよ、彼らの家と彼らの墓を業火で満たし給え」
それから預言者は日没後の礼拝と夜の礼拝の間にそれ（午後の礼拝）を（償いとして）行った。
アブドッラー・ビン・マスウードは次のように伝えている
多神教徒達はアッラーの使徒を太陽が赤くなるまでもしくは黄色くなるまで午後の礼拝から引きとめていた。
そこで預言者はこういった。
「彼ら（敵）は私達の気を中間の礼拝からそらした。アッラーよ、彼らの腹と彼らの墓を業火で満たし給え」
もしくは次のようにいった「アッラーよ、彼らの腹と彼らの墓に業火を詰め込み給え」
アブー・ユーヌス（アーイシャの解放奴隷）は次のように伝えている
アーイシャは私に彼女のためにクルアーンの写本を書き写すよう命じた。
そして彼女は私にこういった。
「あなたが「各礼拝を守れ、特に中間の礼拝を建厳に守れ」（第2章238節）の一節の前まで書き写したらその旨を私に知らせなさい」
それでその一節の手前まで達した時私はその旨を彼女に知らせた。
すると彼女は私に次のように書き取らせた。
『各礼拝を守れ、特に中間の礼拝と午後の礼拝を謹厳に守れ（注）、そして敬虔にアッラーの御前に立て』
そしてアーイシャは次のようにいった。

「私はアッラーの使徒からそのように聞いた」
（注）ここでは中間の礼拝と午後の礼拝とは同一ではないようだが中間の礼拝の中味を不明確にしておくことによって却って午後の礼拝前後における信徒の勤行を一層促がそうとしたためか。いずれにせよアーイシャはこの時点ではこの一節に取消し部分が後にあったということを知らなかった
バラーウ・ビン・アーズィブは次のように伝えている
クルアーンの一節「各礼拝を守れ、特に午後の礼拝を尊厳に守れ」が下りた。
そこで私達はアッラーがお望みのままにこの一節をその通りに読んだ。
それからアッラーはこの一節をお取り消しになり「各礼拝を守れ、特に中間の礼拝を建厳に守れ」（第2章第238節）と変えられた。
ところでシャキーク（伝承者の一人）と一緒に座っていた男が「それではそれは午後の礼拝を意味しているだろう」といった。
するとバラーウはこういった。
「私はあなたにこの一節がどのようにして下ったのかまたどのようにしてアッラーがそれをお取り消しになったかを確かに伝えましたよ。
いずれにせよそれはアッラーが最も良く御存知のことです」
さてイマーム・ムスリムは次のように述べた。
アシュジャイーはそれをスフヤーン・サウリーから伝え聞き、スフヤーンはそれをアスワド・ビン・カイスより伝え聞き、アスワドはそれをシャキーク・ビン・ウクバから伝え聞き、シャキークはそれをバラーウ・ビン・アーズィブから伝え聞いたがそのバラーウは次のようにいった。
私達はフダイル・ビン・アルズークの伝えるハディースと同様に、取り消し以前の最初の一節をしばらくの間預言者とともによんでいました。
ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
ウマル・ビン・ハッターブがハンダク（塹壕）の戦いの日にクライシュ族の無信仰者達に向かって悪口を浴びせていた。
そして彼は預言者のところに来てこういった。
「アッラーの使徒よ、アッラーに誓って、午後の礼拝ができないままもう日が沈んでしまいました」
するとアッラーの使徒はこういった。
「アッラーに誓って私もまたその礼拝をしなかった」
それで私達は谷間へと降りて行き、アッラーの使徒は浄め（ウドゥー）を行い私達もまた浄めを行った。
かくしてアッラーの使徒は太陽が沈んだ後に（償いの）午後の礼拝を行いそれに引きつづいて日没後の礼拝を行った。
同様のハディースが別の伝承者経路を経てヤヒヤー・ビン・アブー・カスィールによって伝えられている。

日の出前と午後の礼拝について

日の出前の礼拝と午後の礼拝の特典とそれら二つの礼拝の遵守
1巻　P.426-428

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
天使達は夜に昼にあなた方の間に次から次へと天下り、日の出前の礼拝と午後の礼拝に参集する
。
それからあなた方の間で夜を過した天使達は昇天して行く。
もちろん主は彼等のことを最もよくご存知ですが主は彼らに次のようにお尋ねになる。
「どのように、あなた方は私の下僕達（人間）のもとを立ち去ってきたか」
そこで彼等天使達はこう答えます。
「私達は彼等が礼拝をしている間に彼等のもとを立ち去り、彼等が礼拝している間に彼等のところへ天下りました（注）」
（注）アッラーは天使達に地上の人間についての情報を求めている訳ではない。
かつて天使達はアッラーが人間を創造することに反対したことがあるがここでは人間がアッラーの地上の代理人としての役割を果していることを、確認することによって、天使達に対する人間の優越性を単に示そうとしただけ
同様のハディースが別な伝承者経路を経て伝えられている。
ただしここでは「天使達はあなた方の間に次から次へと天下りやってくる」と表現されている。
ジャリール・ビン・アブドッラーは次のように伝えている
私達はアッラーの使徒と一緒に座っていた。
その時は満月の夜であり、彼は月を見ていた。
そしてこういった。
「あなた方はこの月を見る如くあなた方の主にまみえるであろう。だが（その際に）あなた方は主を見るため（の混雑）に悩まされることはないでしょう。
さればあなた方は太陽が昇る前と沈む前の礼拝、つまり日の出前の礼拝と午後の礼拝とに圧倒されないようにそれらをよく守り、出来れば主にまみえるよう努力しなさい」
それからジャリールは次の一節を誦んだ。
「太陽が昇る前と太陽が沈む前に主の栄光を誉め讃えなさい」（クルアーン第20章130節）
伝承者ワキーウが伝えているものでは、預言者は次のようにいっている。
「あなた方はまもなく主の前に立ちこの月を見るかの如く主を見るであろう」
それから彼は前記のクルアーンの一節を誦んだ。
しかしこのハディースではその他のジャリールの伝承は伝えられていない。
ウマーラ・ビン・ルアイバは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
私はアッラーの使徒が次のように語った言葉を聞いた。
「太陽が昇る前と太陽が沈む前の礼拝（つまり日の出前の礼拝と午後の礼拝）を行う者は火獄に

落ちることはないであろう」
するとバスラから来た者が彼（ウマーラの父）にこういった。
「あなたはそれをアッラーの使徒から自身で聞いたのか」
そこで彼（ウマーラの父）は「はい、そうです」と答えた。
するとバスラから来た者はこういった。
「私もまたそれをアッラーの使徒から聞いたことを証言します。
私の両耳がそれを聞き、私の心が覚えていたことを証言します」
ウマーラ・ビン・ルアイバは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
アッラーの使徒は次のようにいった。
「太陽が昇る前と太陽が沈む前に礼拝を行った者は火獄に落ちることはないだろう」
その時彼（ウマーラの父）の脇にはバスラから来た一人の男が居たがその男はこういった。
「あなたはそれをあなた自身が自らアッラーの使徒から聞いたのですか」
すると彼（ウマーラの父）は「はい、私はそうであることを証言します」といった。
そこでバスラから来た男はこういった。
「私もまたあなたがそれを開いた場所で預言者がそのようにいったことを聞いたことを証言します」
アブー・バクルは父からの伝聞としてアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「涼しい時間帯の二つの礼拝（日の出前と午後の礼拝）を行った者は天国に入るだろう」
前述のハディースは別の伝承者経路を経てハンマームによって伝えられている。
そしてアブー・バクルについては彼がアブー・ムーサの息子であるといっている。

日没後の礼拝時刻について

日没後の礼拝の始まりは日没直後であること
1巻　P.428

サラマ・ビン・アクワウは次のように伝えている
アッラーの使徒は太陽が沈み、地平線の彼方に見えなくなった時に日没後の礼拝をしたものでした。
ラーフィウ・ビン・ハディージュは伝えている
私達はアッラーの使徒とともに日没後の礼拝を行っていた。
それから私達の一人が出て行ったが彼は自分が射かけた矢が落ちる場所まで見通すことが出来た。
その時それ程あたりは未だ明るかった。
同様のハディースがラーフィウ・ビン・ハディージュによって別の伝承者経路を経て伝えられている。

夜の礼拝の時間とその遅延について

夜の礼拝の時間とその遅延
1巻　P.428-434

預言者の妻アーイシャは次のように伝えている
アッラーの使徒は或る夜のこと夜（イシャー）の礼拝（アタマの礼拝ともいうが）を遅らせた。
アッラーの使徒はウマル・ビン・ハッターブが女、子供が寝静まったと伝えるまでは礼拝に出て来なかった。
アッラーの使徒が出て来た時彼はモスクに居並ぶ人々に向かってこういった。
「この地上であなた方以外に誰一人としてそれ（遅くなった夜の礼拝）を待つ者はいない（注1）」
さてこの出来事はイスラームが人々の間にあまねく広がる以前のことであった。
ところでイブン・シハーブによって伝えられた伝承ではアッラーの使徒は次のように語ったとされている。
「あなた方がアッラーの使徒に礼拝を促して強制してもよいということはない」
さてこの言葉はウマル・ビン・ハッターブが大声で預言者を呼んだ時にいったものである（注2）。
（注1）つまりムスリムの教団以外はの意であり、他の宗教の信徒はこれ程夜遅くまで勤行に励んでいないの意
（注2）預言者は夜の礼拝の最も遅い刻限について、体験を通して信徒に示そうとして故意に遅らせたのである。
預言者はアッラーによって導びかれているのだから、一般信者が宗教上のことでは口出しをするなの意
同様のハディースが別の伝承者経路を経てイブン・シハーブによって伝えられている。
アーイシャは次のように伝えている
預言者は或る夜のこと、夜の大部分が過ぎてモスクに起居する人々が寝静まってしまうまで、夜の礼拝を遅らせた。
そしておもむろにモスクに出て行って礼拝を済ませてからこういった。
「これこそ適切な礼拝時刻である、もし万一、私が我が信仰共同体に重荷を負わせることにならないならば、私は通常この時刻に礼拝するでしょう」
ところである伝承者が伝えるハディースには「もし万「この時刻が我が信仰共同体に重荷を負わせることにならないならば」とある。
アブドッラー・ビン・ウマルは次のように伝えている
或る夜、私達は最後の夜の礼拝のために、アッラーの使徒の出現を、ずっと待ちつづけていました。
夜の三分の一もしくはそれも過ぎた頃、彼は私達のところに出てきました。

その時預言者が家族のことか、或いはまた他の事で多忙であったのかどうか私達には知る由もなかった。
いずれにせよ預言者は礼拝に出て来た時にこういった。
「あなた方以外の他の宗教の民は、礼拝を待つことはないが、あなた方は確かに礼拝を（遅くまで）待っている。
もし万一、これが我が信仰共同体にとって負担とならないのであるならば、私はこの時刻に彼らを先導して夜の礼拝をするでしょう」
それから預言者はムアッジンにアザーンの詠唱を命じた。
それから礼拝のために立ち上がり、礼拝を行った。
アブドッラー・ビン・ウマルは次のように伝えている
アッラーの使徒は或る夜、何事かで多忙になり夜の礼拝を遅らせた。
それで我々は彼を待ってモスクで居眠りをしてしまい、それから私達は目を覚しましたがやがてまた居眠りをした後で再び目を覚しました。
それからアッラーの使徒は私達のところに来て次のようにいった。
「この地上の人々の中で、あなた方を除いては誰一人として夜間に礼拝を待つ者はいない」
サービトは次のように伝えている
彼等（信徒）はアナスにアッラーの使徒の指輪について尋ねた。
するとアナスは次のように答えていった。
アッラーの使徒は或る夜のこと、夜の礼拝を真夜中もしくは夜半が過ぎる頃まで遅らせた。
それから我々の所にやって来て彼はこういった。
「（他の）人々は礼拝をすでに行って寝てしまった。
しかしあなた方は礼拝のために待ちつづけたが、その限りにおいてあなた達はその間礼拝中であったことと同じである」
これを伝えたアナスは「私は銀製の彼（預言者）の指輪の光沢を、今眼前に見ているかの如く感ずる」といっていかに預言者が、指輪のはまっている左の小指をその時高々と上げたかを示すために左の小指を上げた。
アナス・ビン・マーリクは伝えている
私達は或る夜、アッラーの使徒を真夜中近くまで待っていた。
それから使徒がやってきて礼拝を行った。
その後彼は顔を私達の方に向けたが「私（アナス）はあたかも彼の指にはまっている銀製の指輪の光沢を、今眼前にながめている思いがする」と語った。
同様のハディースがクッラによって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは「それから彼は私達の方に顔を向けた」の部分には言及されていない。
アブー・ムーサーは次のように伝えている
私は一緒に船出した仲間達（注）とともにブタハーの谷間に住んでいましたがその時アッラーの使徒は（既に）マディーナにおりました。
さて彼等のうちの幾人かが毎夜、夜の礼拝の時刻にアッラーの使徒のもとに次々と交互に行きま

した。
アブー・ムーサーはさらに次のようにつづけていった。
ある夜私達はアッラーの使徒のところに行ったが彼は何かの用事に忙殺されて真夜中になるまで礼拝を遅らせた。
それからアッラーの使徒は出て来て彼等集って（待って）いる人々を先導して礼拝を行った。
そして彼が礼拝を終えた時集っている人々に向かってこういった。
「心配することはない私はあなた方に以下の福音を知らせようとしているのです。
人々の間であなた方以外に誰一人としてこの時刻に礼拝する者はいないということは、あなた方に対するアッラーの恩恵なのです」もしくは「この遅い時刻にあなた方以外には礼拝しなかったということは、あなた方に対するアッラーの恩恵です」（どちらの文句を云ったか我々にはわからない）
さらにアブー・ムーサーはつづけてこういった。
「そこで我々はアッラーの使徒から開いたお言葉に喜び勇んで帰りました」
（注）アブー・ムーサーはイエメン人でマディーナに向けて出航したが暴風のため仲間とともに対岸のエチオピアに漂流しここで七年間滞在して後カイバルの戦いの起きる前に彼等とともにマディーナにやって来た
イブン・ジュライジュは次のように伝えている
私はアターウに次のように尋ねた。「人々がアタマと呼んでいる夜の礼拝をイマームとして、または一人だけで私が礼拝する場合にどんな時刻が適切であるとあなたは考えますか」
すると彼は「私はイブン・アッバースが次のようにいった」言葉を聞いたと答えた。
アッラーの預言者はある夜のこと、夜の礼拝を人々が居眠りをする時刻まで遅らせた。
それから人々は目を覚し、また居眠りをし、そして再び目を覚しました。
そこでウマル・ビン・ハッターブが立ち上がり「礼拝だ」と叫んだ。
アターウはイブン・アッバースがさらに次のように語ったとして伝えている。
アッラーの預言者が出て来た時、彼の頭からは水が滴り落ちんばかりであり（注1）それで彼は頭の片側半分の上に手を置いている姿を今でも目前に見る思いですが、その時預言者はこういいました。
「もし私の信仰共同体にとって負担でなければ、私はこの遅い時刻に礼拝をするよう命じるだろう」
さて私（イブン・ジュライジュ）はイブン・アッバースが伝えた話の中で預言者がどのように彼の手を頭に載せたか、アターウに尋ねた。
するとアターウは彼の指の間を少し拡げ、それから彼の指の先端を頭の側部に置き、それからそれらを頭の上でこんな具合に、次のように動かした。
即ち、彼の親指が顔の側に近い耳の端に触れるようにし、それからこめかみにかかる髪と顎髭の一部を触るまで動かした。
その動きはゆっくりでも早くもなかった（注2）、私はアターウに再び次のように尋ねた。
「その夜、預言者が礼拝をどれ位遅らせたかについて、あなたはどのようにイブン・アッバース

によって伝えられましたか」
すると彼は「私は知りません」と答え、アターウはさらにこういった。
「私はイマームとしてもまた一人で礼拝する時でもその夜、預言者が礼拝を遅らせたように夜の礼拝を遅らせることが私には好ましく思えます、しかし遅らせることがあなたにとって（一人の場合にせよ、あなたがイマームを勤める集団礼拝においても）また人々にとっても負担となり厳しいものであるならば、早くもなく遅くもないそれらの中間の時刻に、夜の礼拝をしなさい」
（注1）礼拝前の浄めを行ったことを物語っている
（注2）以上は頭髪から水をきる仕草、またアラブ人が言葉の記憶力に加えていかに状況イメージの記憶にも優れているかを思わせる一文である
ジャービル・ビン・サムラは伝えている
アッラーの使徒は（最後の）夜の礼拝を遅らせたものでした。
ジャービル・ビン・サムラは次のように伝えている
アッラーの使徒はあなた方の礼拝と同じようにそれぞれの礼拝を行った。
しかし彼はアタマの礼拝（夜の礼拝）はあなた方が普段行う礼拝時刻より少し遅らせて捧げた。
そしてその礼拝を短くしました。
アブドッラー・ビン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「遊牧民があなた方の礼拝の名前に関してあなた方を圧倒することがあってはならぬ、夜の礼拝の名前は『イシャー』であるべきではないか、ところで遊牧民はそれを“アタマ（注）”と呼んでいます。
なぜならば彼等はこの言葉によってラクダの夜間の乳搾りを遅らせることを意味しているからです」
（注）ここでは単に遅らせることの意味だが、その他に夜間の三分の一位の時刻の意味もある
イブン・ウマルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「遊牧民があなた方の礼拝の名前、すなわちイシャー（夜の礼拝）に関して、あなた方を圧倒するようなことがあってはならない。
その（夜の礼拝）の名前はアッラーの聖典（クルアーン）にイシャーとある（注）。
遊牧民はそれをアタマと呼んでいるがそれは単に彼等が夜間のラクダの乳搾りを遅らせることに由来しているに過ぎない」
（注）クルアーン第24章58節にその名がある

日の出前の礼拝時刻について

日の出前の礼拝をその時間帯の初めに早めに行うことが好ましいこと、
その時刻は夜明け前であること、またその間の読誦の長さについて
1巻　P.434-436

アーイシャは次のように伝えている
女性の信徒達が預言者と一緒に日の出前の礼拝を行った。
それから彼女達はマントで身を包み帰っていった。
その時は夜明け前だったが、あたりは未だ薄暗く誰一人として彼女達の顔を確認したものはいなかった。
預言者の妻アーイシャは次のように伝えている
マントに身を包んだ女性の信徒達が預言者と一緒に日の出前の礼拝を行った。
それから彼女達は家に戻っていったが、アッラーの使徒が夜明け前の未だあたりが薄暗いうちに礼拝を行ったために、彼女達は誰にも顔を知られることはなかった。
アーイシャは次のように伝えている
アッラーの使徒は日の出前の礼拝を行った。
そして出席した女性達はマントに身を包んで戻っていった。
その時は夜明け前であたりは未だ薄暗かったので彼女達は顔を知られることはなかった。
ところでイスハーク・ビン・ムーサー・アンサーリーは彼の伝承の中で「（マントに身を）巻きつけて」として伝えている。
ムハンマド・ビン・アムル・ビン・ハサン・ビン・アリーは次のように伝えている
ハッジャージュがマディーナに来た時だったが私達はジャービル・ビン・アブドッラーに預言者の礼拝時刻について尋ねた所彼はこういった。
アッラーの使徒は昼過ぎの礼拝を日中の暑い時間に、午後の礼拝を（未だ）太陽が輝いている時に、日没後の礼拝は太陽が完全に沈んだ時に、夜の礼拝は、時にはそれを遅らせ時にはそれを早めて行っていた。
つまり預言者は、教友達が既に集まっていた時には早めに、また彼等が遅れて集まった時には遅らせた。
日の出前の礼拝についていえば、預言者は夜明け前の薄暗いうちに礼拝をした。
ムハンマド・ビン・アムル・ビン・ハサン・ビン・アリーは次のように伝えている
ハッジャージュ（注）は諸礼拝をいつも遅らせていた。
そこで私達はジャービル・ビン・アブドッラーに預言者の礼拝時刻について尋ねた。
残りのハディースは前記ハディースと同じである。
（注）ウマイヤ朝の猛将ハッジャージュ・ビン・ユースフのこと。
この頃よりムスリムの統治者達は宗教的献身に欠けているとみられていた
シュウバは次のように伝えている

サイヤール・ビン・サラーマは私に次のように伝えた。
「私（サイヤール）は私の父がアブー・バルザにアッラーの使徒の礼拝について尋ねている対話を聞いた」
そこで私（シュウバ）はこういった。
「あなたはそれをアブー・バルザより直接聞いたのですか。
私はあなたが丁度その時にそれを聞いていたように聞こえます」
するとサイヤールは「私は私の父がアッラーの使徒の礼拝についてアブー・バルザに尋ねている所を耳にしたのです」といったがさてその中でアブー・バルザは答えて次のようにいっている。
預言者は礼拝によってはそれを遅らせることについて気にしていなかった。
例えば、夜の礼拝は夜半まで遅らせたが、彼はそれを行う前に眠ることや、またそれを終えた後でお喋りなどすることを好まなかった。
さてシュウバはまた次のように伝えている。
それから私はその後また、彼（サイヤール）に会って預言者の礼拝について尋ねた。
すると彼は次のように伝えた。
彼（預言者）は昼過ぎの礼拝を太陽が天中から傾いた頃に行った。
そして午後の礼拝は、それを終えてマディーナの郊外に出かけて当地に着いてもまだ太陽が輝いている程の時刻に、それを行った。
そして日没後の礼拝は、その時刻については彼が何といったか覚えていない。
それからその後私（シュウバ）は再び彼（サイヤール）に会い、預言者の礼拝について彼に尋ねた。すると彼はこういった。
日の出前の礼拝は、その礼拝を終えて家に戻った者が、彼の隣人の顔を一目ちらっとみてようやくそれと認識できる位の早い時刻に、預言者は礼拝した。
また彼はその礼拝において六十から百節ぐらいのクルアーンを読誦したものだった。
サイヤール・ビン・サラーマは伝えている
私はアブー・バルサが次のように語ったところを聞きました。
かつてアッラーの使徒は時により、夜の礼拝を真夜中まで遅らせることを気にかけませんでした。
またその礼拝の前に寝ることと、その礼拝の後にお喋りをすることを嫌いました。
ところでシュウバは次のようにいった。
それから私は彼（サイヤール）にもう一度会いましたがその時彼は「真夜中かあるいは夜の三分の一」といっていました。
アブー・バルザ・アスラミーは伝えている
かつてアッラーの使徒は夜の礼拝を夜の三分の一が過ぎる頃まで遅らせることが常でした。
そしてその前に眠ることと、その後にお喋りすることを嫌っていました。
また日の出前の礼拝では、クルアーンの中から百節から六十節の長さの言葉を誦み、私達の顔がお互いに判別出来る位に明るくなった時に、礼拝を終了したものでした。

礼拝を遅らせることに関して

指定された礼拝時間より礼拝を遅らせることは好ましくないこと、
イマームが礼拝時刻を遅らせた場合イマームに従って礼拝する人々（マームーン）は何をなすべきか
1巻　P.436-439

アブー・ザッルは次のように伝えている
アッラーの使徒は私にこういった。
「もしあなたの統治者達が礼拝を所定の時間より遅らせた場合、あなたはどうしますか」
そこで私は逆にこう尋ねました。
「あなたは私にどうしろと命じますか」
それで彼は次のように答えました。
「あなたは所定の時間内に礼拝しなさい、それからあなたが遅れた彼等の礼拝に間に合ったなら、それも一緒に合同で礼拝しなさい。
なぜならば、それはあなたにとって随意の礼拝（ナーフィラ）（注）になるからです」
ところでハラフ（この伝承者の一人）は「所定の時間より」という言葉を伝えていない。
（注）この礼拝は日の出前の礼拝の際にも午後の礼拝の際にも日没後の礼拝の際にも許されていない。
従ってここては多分昼過ぎの礼拝か夜の礼拝の際について語られているのであろう
アブー・ザッルはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「アブー・ザッルよ、私なき後に礼拝を死なせる（遅らせる）統治者達が出現しよう。
しかしあなたは礼拝を所定の時間内に済ませなさい。
そうすれば次の集団礼拝はあなたにとって随意の礼拝になります。
またもしその集団礼拝をしなくとも、あなたはあなたの義務の礼拝をきちんと守ったことになります」
アブー・ザッルは次のように伝えている
私の親友（預言者）は、私が統治者達に良く耳を傾けて従うように、いい残しました。
たとえその統治者が手足を切断された奴隷であったとしても従うよう、いい残しました。
また彼は、私に礼拝は所定の時間に済ませるようにと、いい残しました。
そして預言者は次のようにもいいました。
「もし人々が（遅れた）礼拝をし終えたことがわかったとしても、その時までにあなたは既に義務の礼拝を果してしまっており、またもしそうでなかったとしても（人々の遅れた礼拝が完了しておらずその礼拝に加わった意）その礼拝はあなたにとって随意の礼拝ということになるでしょう」
アブー・ザッルは次のように伝えている
アッラーの使徒は私の太股をたたきながら次のようにいった。

「もしあなたが所定の礼拝の時刻を遅らせる人々のもとにいたとしたらどうしますか」
そこでアブー・ザッルはこういった。
「あなたは何を命じますか」
すると彼はこういった。
「まず礼拝を所定の時刻に済ませ、その後あなたの用事を済ませなさい。
もし次の（遅れた）礼拝が始まった時にあなたがモスクに居合わせたなら、その時は彼らと一緒に（もう一度）礼拝し なさい」
アブー・アーリヤ・バッラーウは伝えている
イブン・ジャードが礼拝を遅らせた。
ところでアブドッラー・ビン・サーミトが私の所にやって来たので、私は彼に椅子をすすめ彼がその上に座ったところで、私は彼にイブン・ジヤードのしたことを話した。
すると彼は口唇を咬み私の股を打ちながらこういった。
私はアブー・ザッルに丁度あなたが尋ねたことを尋ねました。
すると彼は私の股を丁度私があなたの股を打ったように打ちこういった。
私（アブー・ザッル）は預言者に丁度あなた（アブドッラー）が尋ねたように尋ねた。
すると彼は丁度私があなたの股を打ったように私の股を打ってこういった。
「礼拝は（一人でも）決められた所定の時間内に済ませなさい。
もし彼等がその後に礼拝するようなら彼等と一緒に集団で礼拝しなさい。
その時あなたは“私はもう礼拝を済ませたから礼拝はしません”といってはいけません」
アブー・ザッルは預言者が次のようにいったとして伝えている
「もしあなた達が或いはあなたが、いつも礼拝を遅らせる人々のもとに居たとしたらどうしますか。
そういう時には、あなた達はまず礼拝の時間になったら所定の礼拝を済ませなさい。
その後集団で礼拝が始まったら彼等と一緒に（再び）礼拝しなさい。
そうすればそれでさらに良い事を重ねたことになります」
アブー･アーリヤ・バッラーウは伝えている
私はアブドッラー・ビン・サーミトに「我々は礼拝をいつも遅らせる統治者達の背後でジュムアの礼拝（金曜日の合同礼拝）をしています」といったところ、彼は私の股を痛いほど打ってこういった。
私（アブドッラー）がアブー・ザッルにそのことを尋ねた所、彼は私の股を打ってこういった。
私（アブー・ザッル）はアッラーの使徒にそのことを尋ねました。
すると彼はこういった。
「礼拝を所定の時刻に行いなさい、そして彼等との再度の礼拝は随意の礼拝として行いなさい」
ところでアブドッラーは「預言者がアブー・ザッルの股を打った」として彼に伝えられたと語った。

集団礼拝の特典に関して

集団礼拝の特典とそれへの参加を避けることに対する厳しい警告（注）
（注）一日五回の義務の礼拝は元来全て集団の礼拝であるべきもの、金曜の昼過ぎの集団合同礼拝（ジュムア）だけに限ったものではなかった
1巻　P.439-441

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「集団の礼拝はあなた達が一人で行う礼拝より二十五倍の徳がある」
アブー・フライラは預言者の言葉として次のように伝えている
「集団の礼拝は一人で行う個人礼拝より二十五倍優れている。また夜と昼の天使達（注）は日の出前の礼拝に参集します」
ところでアブー・フライラはこういった。もし皆さんがお望みならば次の一節を誦みなさい。
「確かに日の出前のクルアーン読誦には立会人（天使達）がいる」（第17章78節）
（注）一人の人間に四人の天使がついて昼夜交替でその者の行動を記録しているといわれている
同様のハディースはアブー・フライラによって別の伝承者経路を経て伝えられている。しかしここでは「二十五倍の徳」と表現されている。
アブー・フライラはアッラーの使徒がいったとして次のように伝えている
「集団礼拝は個人の礼拝の二十五倍の価値に相当する」
アブー・フライラはアッラーの使徒がいったとして次のように伝えている
「イマームと一緒に行う集団礼拝は個人で行う二十五回の礼拝よりも優っている」
イブン・ウマルはアッラーの使徒がいったとして次のように伝えている
「集団礼拝は個人で行う礼拝より二十七倍も優っている」
イブン・ウマルは預言者が次のようにいったとして伝えている
「集団礼拝は一人で行う礼拝の二十七倍よりも勝る」
同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられているが、それらによれば「二十数倍」とも「二十七倍の価値」とも表現されている。
また別伝承では「二十数倍」とも伝えられている。
アブー・フライラは次のように語っている
アッラーの使徒は一部の人々（多分偽信者達か（注1））が何回か礼拝に参加しないことを知った。
そこで彼は次のようにいった。
「私はいっそのこと人々を導いて礼拝することを誰かに命じておいて（その）集団礼拝に参加しなかった人々の所に出向いていき、彼等の家をまきで焼き払ってしまうよう命じようかと思いました。
その結果として肉のたっぷり付いた骨（焼死体）を彼等がみることになるとはじめから解っていたならば、彼等はきっと夜の礼拝に参加することになるでしょう（注2）」

（注1）マディーナにおける偽信者達は信者集団に対する最も面倒な政治的敵対集団であったので
ここでは以下でみる如く彼等に対する敵意をむきだしにした表現がみられる
（注2）集団礼拝に加わらなかったからといって焼討をかけてもよいという法的根拠とはならない
。
なぜならば預言者はただそう思っただけで実際にはそうしなかったのだから
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「偽信者にとって一番重荷に感ずる礼拝は、夜の礼拝と日の出前の礼拝である。
もし彼等がそれら二つの礼拝の重要性を知るならば、彼等はきっとはってでもやって来たこと
でしょう。
さて私は礼拝の開始を命じ、或る男に人々を導いて礼拝するように命じておいて、自らは礼拝に
加わらない人々の家を火で焼き払うためにまきを持った数人の男達を連れて本気で出動しようか
と思った程です」
ハンマーム・ビン・ムナッビフは伝えている
これはアブー・フライラがアッラーの使徒について語ったいくつかのハディースのうちの一つで
ある。
さてアッラーの使徒はこういった。
「私は若者達にまきの束を準備するよう命じそれから誰かに人々を導いて礼拝するように命じて
おいて、その後礼拝に加わらない人々の家をその中に居る人間も含めて（注）全て焼き払ってし
まおうかと考えた程でした」
（注）その時礼拝に敢て参加していないで家の中にいる人々
同様のハディースが別の伝承者経路を経ても伝えられている。
アブドッラーは次のように伝えている
預言者は金曜日の合同礼拝に参加しない人々に向かって次のようにいった。
「私は或る男に人々を先導して礼拝するように命じておいてその後（礼拝に）参加しなかった者
達を、彼等の家もろとも焼き払ってしまおうかと本気で考えた程でした」

アザーンを聞く者の義務について

礼拝への呼び掛けを聞いた者は、モスクに赴いて礼拝することが義務である
1巻　P.441-442

アブー・フライラは次のように伝えている
預言者の所に日の不自由な男（イブン・ウンム・マクトームか）がやって来てこういった。
「私にはモスクに連れていってくれる者がいません」
そして、彼はアッラーの使徒に彼だけ特別に家で礼拝してもよいという許可を求めた。
そこで預言者は特例として許可を与えた。
さてその者が立ち去ろうとした時預言者は彼を呼びとめてこういった。
「あなたは礼拝への呼びかけが聞こえますか」
そこで彼は「はい」と答えた。すると預言者はすかさずこういった。
「それならそれに答えるべきだ（注）」
（注）原則的には理由が明らかなので集団礼拝に参加しなくてもよい。
しかしその男がイブン・ウンム・マタトームとすれば例外中の例外となる。
なぜならば、彼は教友の中でも長老格の人物で、かつて預言者がマディーナ不在中は、しばしばイマームを勤めたことがある。
このような理由で、預言者は彼の集団礼拝参加を強く望んだ

スンナ・フダーについて

集団礼拝はスンナ・フダー（預言者の導きの慣習（注））である
（注）スンナ（預言者の慣習には二種ある、一つはスンナ・フダー（導びきの慣習）で他はスンナ・ザワーイド（附加的な慣習）である。
前者は集団礼拝のようにムスリムが従わないと非難されるもので後者は預言者の歩き方とか座り方等で従わなくとも非難に値しない慣習である
1巻　P.442-443

アブドッラー・ビン・マスウードは伝えている
私は我々の中ではっきりと偽信者として知られている者か、或いは病人を除いて、礼拝に参集しない者は他にいなかったことを、ずっと見て参りました。
しかもその病人ですら左右の二人の男に支えられてどうにか歩ける者は、礼拝にやって来ました。
またアッラーの使徒は私達に様々な導びきの慣習（スナ・フダー）を教えてくれました。
そしてアザーンの詠唱によって始まるモスクでの礼拝こそは、導びきの慣習の一例です。
アブドッラーは次のように伝えている
明日（来世で）ムスリムとしてアッラーにまみえたいと思う者は礼拝への呼びかけがあった時には、それに答えて遵守すべきである。
なぜならばアッラーはあなた達の預言者に様々な導びきの方法を定めました。
そして礼拝はその中の一つです。
だからたとえあなた達が自分の家で礼拝したとしても、それはモスクでの礼拝を拒否して家で一人で礼拝する者と同様であり、あなた達は預言者の慣行を無視し捨てたことになります。
そしてあなた達が預言者の慣行を捨てるということは、あなた達が正しい道を見失い迷ったことを意味します。
浄めを十分に行い、それからモスクに向かう者には、誰であれアッラーは彼が一歩歩く毎にその報償を記録に留め、また彼の来世の地位を引き上げてくれると同時に、また彼の罪を取り去ってくれます。
私は我々の中で礼拝に参集しない者は、その偽信者振りがよく知られている者以外の何者でないことを見て参りました。
またその一方で、自らは歩けないために礼拝の列に加わるまで二人の男の肩に捉まって連れてこられた者がいました。

アザーンとモスク内の人に関して

ムアッジン（アザーンの詠唱者）がアザーンを詠唱し、それをモスクの中で聞いた者は、
その後礼拝が終るまでそこから出ることは禁じられている
1巻　P.443-444

アブー・シャアサーウは次のように伝えている
私達がアブー・フライラと一緒に座っているとムアッジンがアザーンの詠唱を行った。
すると一人の男が立ち上がりモスクから出ようと歩き出した。
その時アブー・フライラの視線はその男の行く手を追ったが、とうとう彼はモスクの外に出てしまった。
そこでアブー・フライラはこういった。
「あの男はアブー・カーシム（預言者ムハンマドの別名）を裏切ってしまった」
イブン・アブー・シャアサーウは彼の父からの伝聞として次のように伝えている
私（アブー・シャアサーウ）はアブー・フライラがアザーンの後に一人の男がモスクから出て行く姿を見て次の様にいったことを耳にしました。
「彼はアブー・カーシム（預言者ムハンマドの別名）を裏切ってしまった」

夜と日没の集団礼拝について

夜の礼拝と日没の礼拝を集同で行うことは美徳であること
1巻　P.444-445

アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・アムラが次のように伝えている
日没後の礼拝の後にウスマーン・ビン・アッファーン（後に第三代カリフ）がモスクに入り一人で座ったので私は彼のそばに座った。
すると彼はこういった。
「私の兄弟の息子よ、私はアッラーの使徒が次のようにいった言葉を耳にしました。
『夜の礼拝を集団で行った者は彼が夜の半分を一人で祈りに費したと同じ価値がある。
また日の出前の礼拝を集団で行った者は彼が夜通しお祈りに要したと同じ価値がある（注）』」
同様なハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。
（注）朝早く起きることは夜遅くまで起きていることより一層困難を伴うのでアッラーの報償にも差がある
ジュンダブ・ビン・アブドッラーはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「日の出前の礼拝を集団で行った者はアッラーの庇護のもとに居る。
アッラーはこの庇護と引き替えにあなた方に対してこの他に何も求めはしない。
もしアッラーの庇護のもとにある者に害を加えればアッラーはその者を地獄の業火に投げ込んでしまわれるだろう」
一方アッラーの使徒が次のように語ったとジュンダブ・カスリーが伝えている。
「日の出前の礼拝を集団で行った者はアッラーの庇護のもとにいる。
しかもアッラーはその庇護と引き替えにこの他に何も要求し給わぬ。
なぜならもし誰かがアッラーの庇護と引き替えに何かを求めたとしても（この場合は日の出前の集団礼拝をしないことになるが）アッラーは全て御存知である（皮肉な表現か）。
そしてアッラーは彼を地獄の業火にさっさと投げ込んでしまわれるだろう」
ジュンダブ・ビン・スフヤーンの前記のハディースは別の伝承者経路を経て伝えられているが、しかしここでは「アッラーは彼を地鉄の業火に投げ込んでしまわれるだろう」という一節には言及していない。

集団礼拝への不参加について

何らかの正当な理由によっては集団礼拝への不参加も許されること
1巻　P.445-448

マフムード・ビン・ラビーウは伝えている
イトバーン・ビン・マーリク（彼は預言者の教友の一人でありバドルの戦に参加したマディーナ出身の信者（注1）の一人である）がアッラーの使徒の所にやって来てこういった。
「アッラーの使徒よ、私は一族を先導して礼拝する立場にありますが視力を失ってしまいました。
ところでもし雨が降ると私と彼等の間にあるワジ（渦谷）に洪水が流れだし、それで私が彼等のモスクに行って彼等を導いて礼拝することは出来なくなります。
そこでアッラーの使徒よ、どうかあなたが私の家に来て礼拝する場所を私の家の中で選んで礼拝して下さい。
そうすれば私はその場所を以後礼拝所にすることができます」
するとアッラーの使徒はこういった。
「アッラーが望まれるならそのようにしましょう」
さてイトバーンはさらにつづけてこう語った。
翌日アッラーの使徒とアブー・バクルが日もだいぶ高くなった頃に私の所にやって来た。
そしてアッラーの使徒は家に入る許可を求め私は当然彼に許可を与えたが彼は家に入っても座ろうとしなかった。
そして彼はこういった。
「さて私があなたの家のどこで礼拝して欲しいのですか」
そこで私は家の片隅を指した。
するとアッラーの使徒はその場所に礼拝のために立ちタクビールを唱えた。
そして私達も彼の背後に立って二ラカートの礼拝を捧げた。
それから預言者はタスリームを唱えてその礼拝を終えた。
その時私達は彼のために用意した肉カレーを食べてもらうべく彼を引き留めました。
そこへ近所の男達がやって来たのでかなりの人数が私の家に集まりました。
その時彼らの中の一人がこういった。
「マーリク・ビン・ドフシュンはどこにいる」
それに答えて一部の人々がこういった。
「あいつは偽信者だ、アッラーもその使徒も好きではないのだろうよ」
するとアッラーの使徒は次のようにいった。
「彼のことをそのようにいってはいけない。
彼が『アッラー以外に神は無い』といったことをあなた達は知っているでしょう。
こうして彼もまたアッラーのご尊顔を拝すること（つまりアッラーのお喜び）を願っていること

になるのですから」
これを聞いて彼等はこういった。
「アッラーとその使徒のみが最も良く御存知である」
すると聴衆の一人がこういった。
「私達は彼（マーリク）の顔と彼の忠告が（なにかと）偽信者達に傾斜していることを知っているだけです（注2）」
ここでアッラーの使徒は次のようにいった。
「アッラーはアッラー以外に神は無いと唱えてアッラーのお喜びを望む者には地獄の業火を禁じられた」
ところでこのハディースの伝承者の一人イブン・シハーブはこう伝えている。
それから私（イブン・シハーブ）はサーリム族のリーダーの一人であるフサイン・ビン・ムハンマド・アンサーリーにこのハディースについて尋ねました。すると彼はそれを正しいと認めた。
（注1）イスラームの信仰共同体が未だ数の上でも物質的にも劣勢だった初期のバドルの決戦に生命と財産を投げうってこれに参加した人々はムスリム社会の中で尊敬を集め高い地位が与えられている
（注2）預言者の証言の如くマーリクは真のムスリムてあった。だが何かのどうにもならない事情があって偽信者達に傾斜した行動がみられたのであろうと考えられている
イトバーン・ビン・マーリクは伝えている
「私はアッラーの使徒の所にやって来た」
以下は前記ハディースと同じことを伝えている。
しかし下記の部分は違っている。
一人の男がこういった
「マーリク・ビン・ドフシュン（またはドハイシュン）はどこにいる」
また次のような追加表現がみられる。
マフムードは次のように語った。
そこで私はこのハディースを一団の人々に話しました。
その中にはアブー・アィユーブ・アンサーリーがいてこういいました。
「あなたが語ったことは私にはアッラーの使徒が語ったとは思われないのだが」
するとマフムードは次のようにこう語った。
「そこで私はもう一度イトバーンのところに出向いてその件に関して彼に問い正してみることを誓った。
こうして私は彼（イトバーン）の所に再びいったのですが彼は大変年老いていて視力を全く失っていました。
しかし彼は一族のイマームを務めており、私は彼の隣りに座り込んでこのハディースについて尋ねました。
その時彼は最初に私に話してくれたものと同じハディースを語りました」
ところでズフリーは次のように伝えている。

その後幾多の義務行為やまた私達がもはや変ることはあるまいと思われるいくつかの命令が啓示された（注1）。
それで崩されまいとする者はもはや騙されないようになった（注2）。
（注1）このハディースのもとは極めて初期のものであることを物語っている
（注2）後になってしてよいことといけないことが明示されるようになり、信者と偽信者の間にはっきりした線が引かれるようになったので、その気になりさえすれば信者が迷う危険がなくなったの意
マフムード・ビン・ラビーウは伝えている
アッラーの使徒が私達の家の手桶から水を汲み口に含んでいまだ小さかった（五才）私の顔にピューと水をかけた（私を笑わせるために）ことを私は今でも良く覚えている。
さらにマフムードはこういった。
イトバーン・ビン・マーリクは私に次のように語った。
私は「アッラーの使徒よ、私の目はすっかり悪くなってしまいました」といった。
ついでイトバーンは以下のハディースを伝えた。
「彼（預言者）は私達を導いてニラカートの礼拝を行った。
そして私達は彼のために用意したプディング（注）を食べてもらうために彼を引き留めました」
しかしそれ以下の前出のハディース（の追加分）については何も言及しなかった。
（注）小麦粉と肉とナツメヤシの実でつくった料理

随意の合同礼拝に関して

随意の礼拝を合同で礼拝してもよいこと、
礼拝において敷物と冠り物、着る物その他のものは清潔であること
1巻　P.448-450

アナス・ビン・マーリクは次のように伝えている
彼の祖母ムライカ（実は母とも云われている）は、彼女がつくった料理にアッラーの使徒を招いた。
それで預言者はそれを食べてからこういった。
「さあお立ちなさい。私はあなた方ご一家の祝福のために礼拝をします（注）」
アナス・ビン・マーリクはさらにつづけてこういった。
そこで私は敷物の上に立ち上った。
だがその敷物は長い間使ったために黒くなっていた。
そこで私はそれを柔くするためにその上に水をふりまいた。
そしてアッラーの使徒はその上に立ち上った。
それから私と孤児（ダミール・ビン・サアドのこと）は彼の背後に並んだが年寄り（アナスの（祖）母のこと）はさらに私達の後に並んだ。
こうしてアッラーの使徒は私達を導いて祝福の二ラカートの礼拝を行いそれから戻って行った。
（注）特にこの家の女性達にとっては預言者による礼拝のデモンストレインションに接する良いチャンスとなった
アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーの使徒は人々の中で最も性格の優れたお人柄であった。
彼が私達の家に居る間に礼拝の時間がやってくると、彼は彼の足元に敷物を敷くことを命じた。
そのためその敷物は掃除され、その上に水がまかれた。
それからアッラーの使徒はイマームとして立ち上がり、私達は彼の後方に並んで立った。
それから彼は私達を先導して礼拝をした。
ところで彼らの敷物はナツメヤシの枝葉からつくられていた。
アナスは次のように伝えている
預言者が私達の家を訪れた。その時家には私と母と母の叔母のウンム・ハラームしかおりませんでした。
そして預言者はこういった。 「立ちなさい、私は（礼拝時間以外の時間に）あなたがたを導いて礼拝します」
こうして彼は私等を先導して礼拝しました。
ところで或る男がサービト（アナスから最初に直接聞いた伝承者）にこう尋ねた。
「その時預言者はアナスを彼のどの位置に立たせましたか」
するとサービトは答えてこういった。

「預言者は彼を彼の右側に立たせました」
さてそれから預言者は私達家族（アナスの家族）のために現世と来世のすべての良きものがありますようにと祈った。
そこで私の母はいった。
「アッラーの使徒様、ここにあなたの小さな召使（アナスのこと）がいます。彼のためにアッラーに祈って下さいまし」
こうして預言者は私のために良きものすべてがありますようにと祈った（注）。
彼は私のために祈った最後にこういった。
「おおアッラー、彼の富と子供を増し給え、彼を祝福し給え」
（注）アナスは以後預言者が他界するまで預言者のもとで仕えた。
アナスは百才以上になるまで生き、多くのハディースを保持し人々に伝えた
アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーの使徒は彼（アナス）と彼の母または彼の叔母を導いて礼拝を行った。
その時預言者は私（アナス）を彼の右に立たせ、女性達は私達の背後に立たせました。
同様のハディースはまた別の伝承者経路を経て伝えられている。
預言者の妻マイムーナは伝えている
アッラーの使徒は礼拝を行っていた。
その時私は彼のそばにいた。
そして彼が平伏礼を行うと時々彼の服が私に触れた（注）がその時彼は小さな敷物の上で礼拝していた。
（注）イスラームでは女性を汚らわしいと考えていない証拠
アブー・サイード・フドリーは伝えている
彼がアッラーの使徒のところに入っていった時彼は預言者が敷物の上で礼拝しており、平伏礼をしているお姿を目撃した。

義務の集団礼拝の特典について

義務の集団礼拝の特典とその礼拝を待つ美徳
1巻　P.450-451

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「集団で行う礼拝は家で行う礼拝や市場（職場）で行う礼拝に比べて二十数倍勝っている。
そのわけは集団礼拝に参加する者は浄めをする際にはしっかりとした浄めを行い、それからモスクまで出向いて行き、その時の彼の行為にはただ集団礼拝に参加したい一心でそれ以外には何の強制もなく、また彼は礼拝を除いて他のいかなる目的も抱かないからてある。
彼はモスクに向かって一歩進むごとに一段とアッラーからの得点を上げ、罪の方は一つ一つ消滅してゆくうちにモスクに入ることになります。
そして彼がモスクに入った時彼は礼拝一筋に没頭しているがその際彼が自分の礼拝の場にいる限り天使達は彼のために次のように祈りつづけます。
『おおアッラー、彼に慈悲を与え給え、おおアッラー、彼の罪を赦し給え、おおアッラー、彼の悔悟をうけ入れ給え』
こうして天使達はこの祈りを彼が自ら害をなさぬ限りまた彼の浄めの状態が解消するまで祈りつづけるでしょう」
同様なハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「天使達はあなた方が礼拝の場にいる限り礼拝者のために次のように祈りつづけるでしょう。
『おおアッラー、彼の罪を赦し給え、おおアッラー、彼に慈悲をかけ給え』
かくて浄めの状態か仙聯消されず、彼が礼拝中で、それに没頭している限り天使達はこのように祈りつづけます」
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「アッラーの下僕（信徒）が集団礼拝中で彼が己れの礼拝場にいる限り、たとえ礼拝時間を待っている間でも天使達は次のようにいい続けている。
『おおアッラー、彼の罪を赦し給え、おおアッラー、彼に慈悲をかけ給え』
この天使達の祈りは彼が礼拝所を出て行くかまたは彼の浄めの状態が解消するまでつづきます」
そこで私はこう尋ねました。
「浄めの状態が解消するとはどんなことですか」
すると預言者は次のように答えた。
「有声無声の放屁によって解消する」
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「あなた方の誰についてもいえることだが、礼拝だけが彼を引き留めていて、礼拝以外に彼が家族のもとに戻ることを防げていない限りその者はその間ずっと礼拝をつづけていることになります」

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「あなた方の誰でも、集団礼拝の場で礼拝を待ちながら座っており、かつ彼の浄めの状態が解消しない限り天使達は彼のために次のように祈りつづけています。
『おおアッラー、彼の罪を赦し給え、おおアッラー、彼に慈悲をかけ給え』」
前記同様なハディースが別の伝承者経路を経て伝えられている。

モスクへの歩みについて

モスクまでの歩数の多さは美徳のうち
1巻　P.451-454

アブー・ムーサーはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
「集団礼拝で最大の報酬を受ける者は人々のうちで（モスクから）より遠くに住んでいる人であり、その遠い道程を歩いてくる人である。
またイマームと一緒に礼拝するまでそれを待っている者は一人で礼拝をしてそれから寝てしまう者よりも報酬を受ける者として一層優れている」
さてある伝承者のハディースでは次のように語られている。
「イマームと一緒に集団で礼拝するまで（待っている）」
ウバィユ・ビン・カアブは次のように伝えている
或る男がいたが私は彼よりもモスクから遠くに住んでいる者を他に知らない。
だが彼は決して集団での礼拝に遅れたことはなかった。
それで彼は次のようにいわれた。
或いは私が彼にこういった。
「もしあなたがろばを一頭買ったならば、あなたは真暗闇の中でも、また焼けつく熱砂の中でもそれに乗ることができるでしょうに」
すると彼は次のようにいった。
「私は私の家がモスクのそばにあれば嬉しいとは思わない。
私はモスクに歩いてゆくことにより、また自分の家族のもとに歩いて帰ることにより報酬が私に定められることを望みます」
そこでアッラーの使徒はこういった。
「確かにアッラーはそのような全ての報酬をあなたにお集め下さった」
同様のハディースが同一伝承者経路を経てタイミーによって伝えられている。
ウバィユ・ビン・カアブは次のように伝えている
アンサールのある男の家はマディーナの中で最も遠く離れた所にあった。
しかし彼はアッラーの使徒と一緒に行う礼拝に決して遅れたことはなかった。
私達は彼に同情していたので私は彼にこういいました。
「誰々さん、もしあなたがろばを一頭買ったならばそれは焼け付いた熱砂からあなたを救ってくれるでしょう。
また地面の害虫からもあなたを守ってくれるでしょう」
すると彼は次のようにいった。
「聞いて下さい、私はアッラーに誓って、私の家がムハンマド　（預言者）の家の隣りにあることを欲しません」
それで私は彼の言葉を聞き捨てにできない非常に不快なものに感じたのでアッラーの使徒のもと

に行きそのことを告げ口しました。
すると預言者は彼（その男）を呼びよせたが、彼は預言者を前にして私にいったことと全く同じことをいった。
そして彼は彼の歩み（モスクと家の間の）の報酬を望むことを告げた。
そこで預言者は彼にこういった。
「確かにあなたにはあなたが期待するものがあります」
同様のハディースが別の伝承者経路を経てアースィムにより伝えられている。
ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
私達の家はモスクから遠く離れていた。
そこで私達はモスクに近付くためにその家を売りたいと思っていました。
しかしアッラーの使徒は私達がそうすることを禁じました。
そして次のように仰せられた。
「モスクへ向かうあなたたちの一歩一歩にはアッラーの報償があります」
ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
モスクのまわりの土地が空地になっていました。
そこでバヌー・サリマの一族がモスクの近くに移り住みたいと欲した。
そしてそのことがアッラーの使徒の耳に入った。それで彼は彼等にこういった。
「あなた方がモスクの近くに移り住もうとしていることが私の耳に入りました」
すると彼等はこういった。
「はい、その通りですアッラーの使徒様、確かに私達はそのように望みました」
そこで預言者は二回線り返して次のように仰せられた。
「バヌー・サリマ一族よ、あなた方の今の家に住みなさい。
そうすればあなた方のモスクへの歩みは精進として記録されるでしょう」
ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
バヌー・サリマ一族はモスクの近くに移り住むことを望んでいた。
その時丁度モスクのまわりの土地が空いていた。
そしてそのことが預言者の耳に入った。
そこで預言者はこういった。
「バヌー・サリマ一族よ、あなた方の家にそのまま住みなさい。
そうすればあなた方のモスクへの歩みは精進として記録されよう」
これを聞いて彼等は次のようにいった。
「我々がモスクの近くに移り住む喜びなぞ預言者からこのお言葉を聞いた喜びに比べれば物の数ではない」

罪を消す礼拝への歩みについて

礼拝に出向く歩行は罪を消し天国での報価の階段を登らしめること
1巻　P.454-455

アブー・フライラはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
家で身体を浄め、それからアッラーに対する義務の礼拝の一つを果すためにアッラーの家（モスク）の一つに出向く者その者の歩みには二歩ある。
その一つは彼の罪を消しもう一歩は天国でのアッラーからの報酬の階段を登らしめる。
アブー・フライラはアッラーの使徒の言葉を次のように伝えている。
またアブー・バクルの伝承においても預言者による同様のハディースが語られている
「あなた方は次の事を考えたことがありますか。
もし、あなた方の誰か一人の家の戸口の近くに川が流れており、毎日五回そこで身体を洗うならば何か不浄なものが残りますか」
すると彼等はこういった。
「いいえ、不浄なものは何も残りません」
そこで預言者はこういった。
「それはあたかも一日五回の礼拝のようなものです。
アッラーはその五回の礼拝によって罪を消して下さるのです（注）」
（注）罪を消すといっても様々な小罪を消す意味で大罪（殺人、姦通など）は礼拝によって消えることはない
使徒が次のようにいったとして伝えている
「一日五回の礼拝はあたかもあをた方の家のそばに満々と水をたたえて流れている川がありそこで毎日五回身体を洗い流すようなものである」
ところがハサンは次のように付け加えている。
「こうすれば汚れは何も残らない」
アブー・フライラは預言者が次のようにいったとして伝えている
「モスクに早朝もしくは夕方に、出向いた者にはアッラーは彼のために天国において早朝もしくは夕方に、宴を用意して下さるでしょう」

日の出前の礼拝後の正座について

日の出前の礼拝の後そのままそこに正座することは美徳であること、及びモスクの美徳
1巻　P.455-456

スィマーク・ビン・ハルブは次のようにいった
私（スィマーク）はジャービル・ビン・サムラに次のようにいった。
「あなたはアッラーの使徒のおそばに座っていたことがありますか」
すると彼は「はい何度も」と答えて次のようにいった。
預言者は日の出前の礼拝または早朝の礼拝（ガダート）を行った後、太陽が昇るまでその場にそのまま座っていて立ち上がらなかった。
そして彼は太陽が昇った時ようやく立ち上がったがその間教友達はジャーヒリーヤ（イスラーム以前の無明無道時代）に関する話をしては大声で笑っていた（注）。
その間預言者はただほほえんでいるだけでした。
（注）教友達は皆ジャーヒリーヤからイスラーム時代にかけて生きた人々である。
彼等がイスラームからそれ以前の時代を眺めた時、その大きな違いに気付き大声で話し、かつ笑っていたのだろうがこの彼等の姿を預言者は満足そうにかたわらで見ていたということ
ジャービル・ビン・サムラは次のように伝えている
預言者は日の出前の礼拝を行った後、太陽が充分高く昇るまでそのままそこに正座していた。
同様のハディースがスィマークによって別の伝承者経路を経て伝えられている。
しかしここでは「充分に高く…」とは伝えていない。
アブー・フライラはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
アッラーにとって最も愛すべき場所柄はその地にあるモスクであり最も嫌いな所はその地にある市場である。

イマームの資格に関して

イマームとして誰が適格か
1巻　P.456-458

アブー・サイード・フドリーはアッラーの使徒が次のようにいったとして伝えている
人が三人集まったとすればそのうちの一人がイマームとなりなさい。
そしてイマームとしての適任者は彼等のなかで最もクルアーンを上手によむ者である。
同様のハディースが別の伝承者経路を経てカターダにより伝えられている。
このハディースは別の伝承者経路を経てアブー・サイードによっても伝えられている。
アブー・マスウード・アンサーリーはアッラーの使徒が次のように語ったとして伝えている
「クルアーンをよむことに最も熟達した者がまず人々のイマームとなる。
もし彼等がクルアーンの読誦において同じであればスンナ（預言者の慣行）を最もよく知っている者がイマームとなる。
もし彼等がスンナにおいても同じ知識であるならば最も早くヒジュラ（マッカからマディーナへの移住）をした者がイマームとなる（注1）。
もし彼等がヒジュラにおいて同時ならばより早くイスラームに改宗した者がイマームになる。
また誰も権力の座にある人（領主、統治者など）を従えて礼拝を先導することは許されない（注2）。
また誰でもその家の主人の許しなくして上座に座ってはいけない」
ところでアシャッジュは彼の伝承の中で“より早くイスラームに改宗した”という部分を“より年をした”と伝えている。
（注1）マディーナの信徒（アンサール）はヒジュラすることはなかったので彼等は除外されているのではないかという疑問が持たれるが、これはマッカ出身の初期の信徒の間でイマームを誰に決めるかという特定ケースと考えられる
（注2）イスラーム初期では政治的リーダーと宗教上のリーダーは同一人物であることが多かった。
勿論この際に領主や統治者に人々の礼拝を導くだけの宗教的知識と権威が充分に具わっていることが前提になる。
またリーダーには既に現在、イマームの座にある人という解釈もある。
そういう人の許可なしにおしのけて先導することをも戒めている
同様のハディースが別の伝承者経路を経てアアマシュにより伝えられている。
アブー・マスウードはアッラーの使徒が次のように彼等に語ったとして伝えている
「まずクルアーンを最も熟知しその読誦において最も熟達した者が人々のイマームとなる。
もし彼等が読誦において同じレベルであれば最も早い時期にヒジュラをした者がイマームとなる。
もし彼等がヒジュラにおいて同時であるならばより年をした年配者がイマームとなる。

またあなたは他人の家の中で、または相手が権力者である場合には決して彼を導いてイマームとなってはならない。
また他人の家において彼があなたに前もって許可を与えない限り、もしくはあなたの方から彼の許可を得ない限り彼がすわる席にすわってはならない」
マーリク・ビン・フワイリスは伝えている
私達はアッラーの使徒の所にやって来ました。
その時私達は皆同年代の若者でした。
そして私達は預言者とともに二十夜を過しました。
アッラーの使徒は大変優しく思いやりのあるお方であり私達が家族を恋しがっているのではないかと心配されて私達が残してきた家族のことについてお尋ねになりました。
そこで私達は家族のことを彼に話しました。
すると預言者は次のように申された。
「あなた方は家族のもとに戻りなさい。
そして彼等と一緒に暮しなさい。
そして彼等に信仰とイスラームに関することを教えなさい。
また彼等には善いことを説き勧めなさい。
そして礼拝の時刻が来たならばあなた方のうちの一人がアザーンを詠唱しなさい。
それからあなた方の中で一番の年配者がイマームをつとめなさい」
同様のハディースが別の伝承者経路を経てアイユーブにより伝えられている。
アブー・スライマーン（マーリク・ビン・フワイリス）の別の伝承では次のように伝えている
私は人々と一緒にいるアッラーの使徒のもとにやって来ました。
その時私達は皆同年代の若者であった。
このハディースの残りの部分は前述のハディースと同じである。
マーリク・ビン・フワイリスは伝えている
私は私の友人の一人と一緒に預言者のもとにやって来ました。
そして私達二人が彼のもとから帰ろうとした時彼はこういった。
「礼拝の時刻が来た時は、まずアザーンを詠唱しそれからイカーマを唱えなさい。
そしてあなた方のうち年配の方がイマームとなりなさい」
同様のハディースが別の伝承者経路を経て伝えられているがそれには次の言葉が付け加えられている。
“彼等一人はクルアーンの読誦において同じであった”

礼拝中のクヌートについて

ムスリム達に災難が降りかかってきた時には全ての礼拝においてクヌート（祈願と呪い）を唱えることが好ましいこと
1巻　P.458-463

アブー・フライラは次のように伝えている
アッラーの使徒は日の出前の礼拝の際にクルアーンの読誦を終えて屈身礼に入りその後タクビールを唱えて頭を上げた時次のように唱えた。
「アッラーは讃美する者の声を聞き届け給う、われらの主よ、称讃はあなたにのみ」
それから彼は立ったままで続けて次のようにいった。
「おおアッラー、ワリード・ビン・ワリード（注1）を救い給え、サラマ・ビン・ヒシャーム（注2）を救い給え、アィヤーシュ・ビン・アブー・ラビーア（注3）を救い給え、またムスリムの内でも弱い立場にあり無力な人々（ムスタダアフィーン）を救い給え。
おおアッラー、厳しくムダル族（注4）の者を踏みつけ給え、また彼等には預言者ユースフの時代の飢饉を与え給え、おおアッラー、リフヤーヌ族（注5）とリウル族（注6）とザクワーヌ族（注6）とウサイヤ族（注6）のそれぞれに呪いをかけ給え、げに彼等はアッラーとその使徒に背いたのです」
それから預言者は次のクルアーンの一節が啓示された時から前述のクヌート（祈願と呪い）を止めたという知らせが私達の耳に入りました。
「アッラーが彼等に哀みをかけるのかそれとも懲罰を下すのかは汝（預言者）に関わることではない。もっとも彼等は罪深い者達であることは確かであるが」（クルアーン第3章128節）
（注1）バドルの戦で捕虜となる。
その後マッカに帰ってイスラームに改宗そのため投獄され様々な拷問をうける。
イスラームの剣ハーリドの兄弟
（注2）イスラーム初期の敵マッカのクライシュ族の頭目アブー・ジャハルの兄弟、イスラームには極く初期に改宗するがマッカの多神教徒によって様々な残虐行為をこうむる
（注3）アブー・ジャハルの義理の兄弟、初期の改宗者で様々な試練をうける
（注4）最も激しくイスラームに敵対した部族
（注5）ヒジュラ四年に預言者が流通した六人のクルアーン読誦者を死に至らしめた部族
（注6）これらの部族は彼等の要請をうけて預言者が通わした七十人のクルアーン読誦者を裏切って殺害した
同様のハディースが別の伝承者経路を経てアブー・フライラによって伝えられているがそれは次の一節までである。
「また彼等には預言者ユースフの時代の飢饉を与え給え」
アブー・サラマはアブー・フライラが次のように語ったとして伝えている
預言者は屈身礼の後に祈願と呪いを一ヶ月間つづけて行った。

彼は「アッラーは讃美する者の声を聞き届け給う」と唱えた後で次のようにいった。
「おおアッラー、ワリード・ビン・ワリードを救い給え、おおアッラー、サラマ・ビン・ヒシャームを救い給え、おおアッラー、アイヤーシュ・ビン・アブー・ラビーアを救い給え。
おおアッラー、信仰深き者達のうち無力で非力な弱い立場にある者達（ムスタダアフィーン）を救い給え。
おおアッラー、ムダル族の者を厳しく踏みつけ給え、また彼等には預言者ユースフの時代の飢饉を与え給え」
またアブー・フライラはさらに次のように伝えている。
それから私はアッラーの使徒がその後この祈願と呪い（クヌート）をやめたことを知りこういいました。
「私はアッラーの使徒が確かに彼等（非力な人々）のために祈願することを止めたところを見た」
そのようなわけでアブー・フライラは（人々によって）次のようにいわれることになった。
「あなたは預言者によって祈願を受けた人々が（迫害を逃れて）やって来た（実際に救われた）ところを見なかったか（見たでしょう）」
伝承者アブー・サラマはアブー・フライラが彼に次のように知らせたとして伝えている
アッラーの使徒は夜の礼拝中に「アッラーは彼を讃美する者の声を聞き届け給う」と唱えそれから平伏礼に入る前に次のようにいった。
「おおアッラー、アイヤーシュ・ビン・アブー・ラビーアを救い給え」
それからこのハディースの残りの部分は“ユースフの時代のような”という一節までは前述のハディースと同じであるがその後の部分は何も伝えていない。
アブー・サラマ・ビン・アブドル・ラフマーンはアブー・フライラが次のように語ったとして伝えている
「アッラーに誓って、あなた方とともに私はアッラーの使徒の礼拝に最も近付きたい」
そしてアブー・フライラは昼過ぎの礼拝と夜の礼拝と日の出前の礼拝において祈願と呪いを唱えた。
信者のためには祈願し無信仰者に対しては呪いをかけた。
アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーの使徒は日の出前の礼拝においてマウーナの泉（の戦）で教友達を殺した者達を三十日間呪い、アッラーとその使徒に背いたリウル族とザクワーヌ族とリフヤーヌ族とオサイヤ族を（三十日間）呪った。
さらにアナスはつづけてこういった。
アッラーはマウーナの泉で殺された人々のためにクルアーンの一節を下し給うた。
私達はそれがその後取消しをうけるまでそれを読誦していました。
さてその一節とは次のような言葉でした。
「人々に次の便りを伝えなさい。
確かに私達はわれらの主にお会いした。

そして主は私達に満足され、私達は主に満足しました（注）」
（注）この意味に相当するクルアーンの節は5章122節、9章101節、…などである
ムハンマドは次のように伝えている
私はアナスにアッラーの使徒が日の出前の礼拝において祈願と呪いを唱えたかどうか尋ねた。
すると彼は「はい屈身礼の後しばらくの間」と答えた。
アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーの使徒は日の出前の礼拝で屈身礼の後、祈願と呪いの言葉を一ヶ月間唱えていた。
彼はリウル族とザクワーヌ族を呪い「オサイヤ族はアッラーとその使徒に背いた」といっていた
。
アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーの使徒は日の出前の礼拝の屈身礼の後に祈願と呪いの言葉を一ヶ月間唱えていた。
そして彼はオサイヤ族を呪っていました。
アースィムは次のように伝えている
私はアナスに祈願と呪い（クヌート）は屈身礼の前に唱えられたのかそれともその後に唱えられたのかを尋ねた。
すると彼は「屈身礼の前だった」と答えた。
そこで私は彼に「人々はアッラーの使徒が屈身礼の後に祈願と呪いを唱えた」と主張しているといった。
すると彼は「アッラーの使徒が一ヶ月間祈願と呪いを唱えていた」とし「彼の教友達のうちでクッラー（クルアーン読誦者）と呼ばれる人々の多くを殺した者達を呪っていた」といった（注）
。
（注）つまり屈身礼の前に呪っていたことになる。
この立場はハナフィー法学派が支持している見解である
アースィムはアナスが次のようにいったとして伝えている
私（アナス）はマウーナの泉の戦で戦死した七十名のクッラー（クルアーン読誦者）と呼ばれた者達に対する、アッラーの使徒の悲しみようは、これまでのいかなる小隊の壊滅でも一度も見たことがありませんでした。
それで預言者は一ヶ月間彼等を殺した人々を呪い続けた程でした。
同様のハディースが別の伝承者経路を経てアナスによって伝えられている。
しかしここでは部分的には多少の省略と付加された部分がみられる。
アナス・ビン・マーリクは伝えている
預言者は一ヶ月間祈願と呪いの言葉を唱えつづけリウル族とザクワーヌ族とオサイヤ族を呪っていた。
同様のハディースが別の伝承者経路を経てアナスによって伝えられている。
アナスは次のように伝えている
アッラーの使徒は一ヶ月間祈願と呪いをつづけアラブ部族のうちのいくつかの部族を呪っていた
。

しかしその後彼は呪いを中止した。
バラーウ・ビン・アーズィブは伝えている
アッラーの使徒は日の出前の礼拝と日没後の礼拝中に祈願と呪いの言葉を唱えていた。
バラーウは次のように伝えている
アッラーの使徒は日の出前の礼拝と日没後の礼拝において祈願と呪いを唱えていた。
クファーフ・ビン・イーマーウ・ギファーリーは次のように伝えている
アッラーの使徒は礼拝中に次のようにいった。
「おおアッラー、リフヤーヌ族とリウル族とザクワーヌ族とオサイヤ族を呪い給え、彼等はアッラーとその使徒に背きました。
ギファール族（注）についてはアッラーは彼等を許しました。
アスラム族についてはアッラーは彼等をお守り下さった」
（注）彼等はイスラームに改宗する以前は巡礼者をねらって追剥をしていた
クファーフ・ビン・イーマーウは伝えている
アッラーの使徒は屈身礼を行いそれから頭を上げてこういった。
「ギファール族についてはアッラーよ、彼等を許し給え。
またアスラム族についてはアッラーよ、彼等をお守り下さい。
そしてウサイヤ族については彼等はアッラーとその使徒に背きました。
おおアッラー、リフヤーヌ族を呪い給え、またリウル族を呪い給え、またザクワーヌ族を呪い給え」
そして預言者は平伏礼に移りました。
さてクファーフはさらにつづけてこう伝えた。
こうしてその後、無信仰者達への呪いが是認されるに到った。
同様のハディースが別の伝承者経路を経てクファーフ・ビン・イーマーウによって伝えられている。
しかしここでは“かくして無信仰者達への呪いが是認されるに到った”という一節は伝えなかった。

礼拝を失した時について

礼拝の機会を失した時の償い。また、それに気付いた時、速やかに礼拝を挙行すべきこと
1巻　P.463-470

アブー・フライラは伝えている アッラーのみ使いはハイバルの遠征から帰る時、一晩中旅を続けられた。そして彼が眠気をもようされた時、休息のため乗り物から降りて（従者の）ビラールに「今夜われわれのために監視に立て」と言われた。ビラールはアッラーのみ使いと彼の親友たちが眠っている間に（安全を確認しつつ）出来るだけ礼拝を行った。夜明けが近くなった時、彼は太陽が昇る方向をむき彼のらくだに寄り掛かった。彼はそうしているうちに何時しか眠ってしまった。そして、太陽が彼等の上を明るく照すまで、預言者もビラールもまた他の教友たちも誰一人目を覚まさなかった。彼等の中で最初に起きたのはアッラーのみ使いであった。み使いは（日の出に）気がつくとお立ちになって「ビラールは何処か」と言われた。ビラールは「おおアッラー...、たとえ私の父母を身代りとしようとも、どうかアッラーのみ使いをお護り下さいますよう...（と祈った後）、あなたは眠気をもようされて眠られました。私もそれに勝てず眠ってしまいました」と言った。み使いは「らくだを引いてまいれ」とお命じになった。それから人々は少し離れた位置に移動した（注1）。そこでアッラーのみ使いは沐浴され、ビラールに礼拝の挙行を告げさせた。そして人々の先に立って朝の礼拝を挙行された。礼拝終了後、み使いは「誰でも礼拝の機会を失した者は、それに気付いた時に礼拝せよ。アッラーは「われを心に抱いて礼拝の務めを守れ」（クルアーン第20章14節）（注2）」と申された。ユーヌスは「イブン・シハーブはその一節を“記憶して（礼拝の務めを守れ）”のように常々読唱していた」と言った。
（注1）多数の人々が休息した場所は排泄物等で不浄になるため礼拝の場所は他に選ぶべきである（注2）礼拝を忘れずに務め守るのは常にアッラーを心に抱いているということでもあるアブー・フライラは伝えている われわれはアッラーのみ使いと（ある場所で）休息した。（そしてそこで眠ってしまい）太陽が昇るまで目が覚めなかった。み使いは、めいめい乗り物の手綱を取って（この場所を出るよう）申された。この場所には既に悪魔が訪れてわれわれにつきまとっているからである（注）。一同その言葉に従った。それからみ使いは水を要求し沐浴されてから二ラカートの礼拝を行われた。ヤークーブは「それから彼は二回叩頭された。その後“アッラーは偉大なり”という言葉が唱えられ、朝の礼拝の始まりが告げられた。み使いは（人々を先導されて）朝の礼拝を済まされた」と言った。
（注）そこは皆が眠りこんで礼拝を失ってしまった場所であると同時に、前述同様、不浄の場と化したのを意味するアブー・カターダは伝えている アッラーのみ使いは「あなた方は夕刻から夜にかけて旅行し、朝、水のある所に到着するようにするがよい」と説教された。そこで人々は他の者にかまうことなく旅をした。時に、アッラーのみ使いが深夜、乗り物に乗って旅をされたことがあった。私がみ使いの側におりました時、彼は居眠りをされらくだの上で片側に傾かれた。私は近寄って彼がねむりを覚まさないよう気を配って支え、らくだの背に安定させた。彼は旅を続けられ、夜も大分ふけた頃に（再び）乗り物の上で傾かれた。私はお側に寄って彼を目覚めさ

せないようそっと支えてその背に安定させた。彼はなおも旅を続けられた。明け方近くになって、（今度は）前の二回より更に大きく片側に傾かれ、らくだから落ちそうになった。私はかけ寄って彼を支え頭を起して差し上げた。彼は「誰ですか」と申された。私は「アブー・カターダです」と言った。み使いは「あなたはどのくらいの間私と一緒に歩いているのですか」と言われた。「私は一晩中歩き続けております」と言った。彼は「あなたが彼（アッラー）のみ使いを守ったように、アッラーがあなたをお守り下さるように…」と私のことを祈って下された。そして再び「あなたはわれわれが人々からはぐれてしまったと思いますか」と言われ、続いて「あなたは誰かを見ましたか」と申された。私は「ここにらくだに乗った者がおります」と言った。私は再び「そこにもらくだに乗った者がおります」と言った。われわれが集って見るとらくだに乗った者七人だけであった。それからアッラーのみ使いは幹線道路を少しはずした所で休息のために横たわられて「諸君、礼拝を守らねばならぬ」と申された。（だが人々は皆眠ってしまった。そして）最初に目を覚まされたのはアッラーのみ使いであった。その時、太陽は既に昇り始め彼の背を照らしていた。われわれは驚いて起き上った。彼は「乗れ」と言われた。一同らくだに乗って進んだ。そして太陽が（完全に）昇りきった時、み使いは乗り物から降り、私が携帯していた水差しを要求された。それにはいくらかの量の水が入っていた。彼は通常の沐浴と比べると、それは比較にならない程少量の水でそれを済まされた。その水差しの中にはなお若干の量の水が残っていた。み使いはアブー・カターダに「その水差しの水をとっておくように、それには（それをめぐって）一つの話が生まれるであろう」と言われた。その後、ビラールがアザーン（礼拝の時刻を告げること）を唱えた。アッラーのみ使いはまず二ラカートを行われ、それから彼が毎日されるように朝の礼拝を挙行された。み使いが乗り物に乗られるとわれわれも（めいめいの乗り物に）乗った。一同の中の幾人かは彼等の不注意で礼拝を失し、不敬をはたらいてしまったことについて互いに（後悔の）つぶやきを交していた。すると、アッラーのみ使いは「あなた方は私の日常生活の中から規範を得てはいないのですか」と言われた。そして、「眠ってしまった場合は怠慢ではない。（まことの）怠慢は今挙行すべき礼拝を別の礼拝の時刻まで意図的に延ばすことである。（眠り、あるいは避け難い理由で）礼拝を失した者はそれに気付いた時に行うが良い。それが翌日になってしまった場合には定められた礼拝の時に挙行せよ」と申された。それからみ使いはのろのろしている人々を引き離してしまわれて、「あなた方は彼等（後れた人々）が私達のことをどのように言っていると思いますか」と言われた。（一方）後れた人々は預言者が彼等の間にいないのに気付き始めた。アブー・バクルとウマルは「アッラーのみ使いはあなた方の後に居られるに違いない。み使いはあなた方を置き去りにはなさらない」と言った。しかし人々は「アッラーのみ使いはあなた方の前に居られます。それで、もし後れた人々がアブー・バクルとウマルに従って行けば道を誤ることはないであろう」と言った。われわれは（その二人に従って）道を急ぎ、前の人々に追いついたがその時は既に太陽が昇ってからかなりの時間が経過していて、すべての物は（太陽の熱で）熱くなっていた。彼等（教友たち）は「アッラーのみ使いよ…、われわれは喉が乾いて死にそうです」と言った。彼は「あなた方は死にはせぬ」と申され、更に「私の小コップを持って来なさい」と言われた。それから彼は例の水差しを要求され、アブー・カターダに、一同に飲ませるようにと言ってその小コップに水を注

がれた。人々は水差しに水があるのを知ると押し合って（われ先に飲もうとした。）アッラーのみ使いは「一同、節度を保つがよい。水は皆に与えられるのだ」と言われた。人々は彼の言葉を謹聴し従った。み使いは小コップに水を満たして与え続け、残るは私とみ使い二人だけであった。彼はコップに水を注ぐと私に「飲みなさい」と言われた。私は「アッラーのみ使いよ、私はあなたがお飲みになるまでは飲みません」と言った。み使いは「人々の奉仕者は一番最後に飲む」と申された。私は飲んだ。アッラーのみ使いもまたお飲みになった。こうして一同は気力を回復し水のある場所に無事到達出来た。アブドッラー・ビン・ラバーフは「私はこのハディースを（クーファの）偉大なモスクで話すであろう」と言った。その時、イムラーン・ビン・フサインが「おお若者よ…、どうして君が（それを）話すのか。実は、私はその夜、一行に加わっていた一人だ」と言った。私は「それでは、あなたはこのハディースを良く御存知に違いない」と言った。彼は「君はどういう者か」と尋ねた。私は「アンサール（マディーナ出身でみ使いに協力した信者）の一人です」と答えた。この時彼は「では君が話し給え。あなた方のハディースについては、あなた方がより良く御存知であろうから」と言った。そこで私は人々にそれに関して話した。イムラーンは「私はその夜現場にいた。しかし、君のようにそれを記憶している者は一人も無いということを感じとったのだ」と言った。イムラーン・ビン・フサインは伝えている 私は預言者と一緒にある旅をした。われわれは夜どおし旅を続けた。明け方になって、われわれは休息のため横になった。すると一同眠ってしまい（気が付いた時は）太陽が昇っていた。われわれの中で最初に目を覚ましたのはアブー・バクルであった。われわれは預言者が眠られると御自分で目覚めるまで起こさないようにしていた（注1）。次に起きたのはウマルであった。彼は預言者の側に立ち、大声で“アッラーフ・アクバル（アッラーは偉大なり）”と唱えた。アッラーのみ使いは目を覚まされた。彼が頭をお上げにをった時、太陽は昇ってしまっていた。み使いは「一同、移動せよ」と言われた。われわれは彼と一緒に進んだ。太陽が（赤い色から）白日色になった時、彼は乗り物を降りて一同を導き朝の礼拝を挙行された。その時、われわれから離れ、一緒に礼拝を行おうとしなかった男が一人いた。アッラーのみ使いは礼拝終了後その男に「某よ、あをたは何故われわれと一緒に礼拝しないのか」と尋ねられた。彼は「預言者よ…、（水が無くて）私は沐浴しなかったのです」と言った。み使いは彼にタヤンムム（注2）をお命じになった。その男はそれを行い礼拝を済ませた。それからみ使いは水を見つけるため私にらくだに乗った一行の前に急いで進むようお命じになった。その時われわれの喉は既に乾きでひっ付きそうであった。一同道を進んで行くと、突然（らくだの）両側に大きな皮の水袋を置きその間に座るようにして乗っていた女性に出合った。彼女は顔にベールを掛けていた。われわれは「水は何処にありますか」と彼女に尋ねた。彼女は「遠く、遠く、とっても速くです。あなた方には水は得られません」と答えた。われわれは再び「あなたの家から水のある所までどのくらいの道のりですか」と尋ねた。「一昼夜かかります」と彼女は言った。われわれは「あなた、アッラーのみ使いのところに行きなさい」と言うと、彼女は「アッラーのみ使いとはどのような方ですか」と言った。われわれはこの問題を放置することは出来なかった。そこで直ちに彼女をみ使いの所に連れて行った。み使いは彼女に合いいろいろと尋ねられた。彼女はそこでもわれわれに話した事と同様の話をした。そして彼女が孤児をかかえている寡婦であるとも告げた。み使いは水を積んだらくだをす

わらせるよう命じられた。それから、その水袋の口を開いてうがいをされた。そして再びすわっていたらくだを立ち上がらせた。この時、われわれ喉の乾ききっていた四十人は（袋の下部についている水口から）十分に飲んだ。そして、われわれが持っていた携帯用の水袋にも水を満たし、友人達と沐浴のため水を与え合った。それでもらくだには水を与える必要が無かったので、一同の水袋はなおかなりの水で満ちていた。この後、アッラーのみ使いは一同に「あなた方が所持している物は何でもここへ持って来なさい」と言われた。われわれは彼女のためにパンの部分、干したなつめ椰子の実等を集めて布切れに包み「これを持って行きなさい。これはあなたのお子達に上げるのです。それで、われわれがあなたの水を奪ったのではないことを知って欲しいのです」とことわった。彼女は家に着くと「私は人間の中で最も偉大な魔術師、それとも昔からよく言われている預言者であろうか、そのような人に出合った」と言った。その後、アッラーはその婦人やその家族の人々をイスラームに導かれ、彼等は皆ムスリムになった。
（注1）これはアッラーからの啓示かあるかもしれないというためである（注2）タヤンムム（水のない場合の小浄）場所によって水が得られなかったり、病気などで水が使えないとき、清い土や砂または壁に手をふれて行う浄めの方法をいう。ウドゥー（水で行う小浄）と同じく一定の順序で行うイムラーン・ビン・フサインは伝えている われわれは預言者とある旅に出た。われわれは夜通し旅を続け夜明け少し前に（休息のため）横たわった。それは旅行者にとってこの上なく甘美なものなのだ。それで一同（寝込んでしまい）太陽の熱気を感じて始めて目を覚ました。残りのハディースは前述のものと同様だが、ここでは次の追加がある。ウマル・ビン・ハッターブが目を覚ました時、人々は皆眠り込んでいるのがわかった。彼は太鼓腹の立派な体格をした人であった。その彼が大声を上げて“アッラーフ・アクバル”と唱えた。アッラーのみ使いはその“アッラーは偉大なり”の強力な音声で目を覚まされた。み使いが目を覚ました時人々は眠りを覚まされたことに対する不平を訴えた。するとみ使いは「何も悪いことはない。旅を進めよ」と申された。残余のハディースは既述した。アブー・カターダは伝えている アッラーのみ使いは旅中には、夜、休息のため乗り物から降りると右側を下にして横たわられるのが常であった。そして、彼が明け方近く乗り物から降りて憩われる時は（腰を下ろして）両腕を立て、手の平に顔をうずめて休息されていた。アブー・カターダはアナス・ビン・マーリクからの話として次のように伝えている アッラーのみ使いは「礼拝の挙行を忘れた者はそれに気付いた時に行うが良い。それ以外にそれを償う方法はない」と言われた。カターダは「アッラーは「われを心に抱いて礼拝の務めを守れ」（クルアーン第20章14節）と仰せられた」と言った。このハディースはアブー・カターダによって口述された。しかし「それ以外にそれを償う方法はない」という言葉はこれには述べられていなかった。
カターダはアナス・ビン・マーリクを根拠として口述している 預言者は「礼拝を忘れた者、あるいは眠ってそれを失した者の償いは、それを思い出した時に挙行することだけである」と申された。カターダはアナス・ビン・マーリクを根拠として伝えている アッラーのみ使いは「誰でも眠り、または忘れて礼拝を失した者はそれを思い出した時挙行せよ。アッラーは「われを心に抱いて礼拝の務めを守れ」と仰せられた」と申された。

「洞窟章」と「雌牛章」に関して

洞窟章（クルアーン第18章）全110節と雌牛章（クルアーン第2章）第255節（注）の徳点
（注）“玉座の節（アーヤトル・クルシー）”として有名な啓示
1巻　P.550-551

アブー・ダルダーウは伝えている
アッラーのみ使いは「洞窟章の最初からの十節を暗記した者は誘惑（の手）から庇護される」と言われた。
このハディースは同一の伝承者経路を経て、カターダによって伝えられた。
しかし、シュウバ（伝承者の一人）は「洞窟章の最後の節」と言った。
またハンマームは「洞窟章の最初の節」と言った
ウバイユ・ビン・カアブは言った
アッラーのみ使いは「アブー・ムンズィルよ、あなたはクルアーンの中のどの節が最も偉大であるか知っていますか」と聞かれた。
私は「アッラーとそのみ使いが最も良く御存知です」と言った。
み使いは再び「アブー・ムンズィルよ、あなたはクルアーンの中のどの節が最も偉大であるか知っていますか」と言われた。
私は「「アッラー、彼の外に神はなく、永生に自在される御方」（クルアーン第2章255節）」と言った。
するとみ使いは、私の胸をお打ちになり「アブー・ムンズィルよ、その知識があなたに有益なものであるように」と申された（注）。
（注）これはアブー・ムンズィルが正しい答えをしたのに対する祝福である

旅行者の礼拝とそれの短縮について

旅行者の礼拝とそれの短縮
1巻　P.471-475

預言者の妻アーイシャは伝えている
礼拝は居住地に在っても旅中においてもそれぞれ二ラカートが義務づけられました。
それから旅中の礼拝は規定通り行われることになりましたが、居住地での礼拝は増加されました（注）。
（注）イスラーム法学者シャーフィー、マーリク・ビン・アナスその他多くの学者が、旅中は短縮礼拝も完全な礼拝も、いずれも許されると述べている。
アブー・ハニーファは短縮が義務づけられると言っている。
ナワウィーは、旅中は短縮礼拝の挙行がふさわしいと述べている
預言者の妻アーイシャは伝えている
アッラーは礼拝を義務づけられましたが、最初義務として定められた時は二ラカートでした。
それから居住地に在っては（四ラカートを行って）完全とされました。
しかし、旅での礼拝は最初に義務として定められたことが認められました。
アーイシャは伝えている
最初義務として定められた礼拝は二ラカートでした。
旅中の礼拝は（最初の）規定通りですが、居住地での礼拝は完全なものが行われました。
このハディースに関連し、伝承者（ズフリー）はアーイシャの話を聞いた伝承者（ウルワ）に「どうしてアーイシャは旅中での完全な礼拝形式について話したのであろう」と尋ねた。
彼は「彼女はウスマーンが解釈したように彼女自身が解釈したのです」と答えた。
ヤアラー・ビン・ウマイヤは述べた
私はウマル・ビン・ハッターブに「アッラーは「もし信仰のない者たちに害を加えられる恐れのある時は、礼拝を短縮しても罪はない」（クルアーン第4章101節）と仰せられた。
しかし、今、人々は全く安全です。それでも...」と（いぶかって）言った。
ウマルは「あなたが不思議に思った事を私も不思議に思ったのだ。
そこで、それについてアッラーのみ使いに尋ねた。
すると彼は『それはアッラーがあなた方におかけになった御慈悲ゆえ、慎んでそれを受け入れよ』と申された」と言った。
前記ハディースは別の伝承者経路でも伝わっている。
イブン・アッバースは伝えている
アッラーはあなた方の預言者を通して、居住地では四ラカート、旅中は二ラカート、危険（状態）にあった場合は一ラカート（の礼拝）を義務として定められた。
イブン・アッバースは伝えている
アッラーはあなた方の預言者の言葉によって、旅行者には二ラカート、滞在者には四ラカート危

険な状態にある者には一ラカートの礼拝を義務として定められた。
ムーサー・ビン・フザリーは述べている
私はイブン・アッバースに「私がマッカに居てイマーム（指導者）と一緒に礼拝しない場合、どのようにそれを行えばよいのか」と尋ねた。
すると彼は　「二ラカートの礼拝がアブー・カーシム（預言者の別称）のスンナ（聖行）である」と答えた。
これと類似のハディースは同一の伝承者経路を経てアブー・カターダによってもたらされている。
ハフス・ビン・アースィム（ウマルの孫）は述べている。
私はマッカへの道をイブン・ウマルと歩いた。
彼は正午に、われわれを先導して二ラカートの礼拝を行った。
それから彼は先に進んだ。
われわれも彼に従って行き、彼の宿場に到着した。
彼が座るとわれわれも一緒に座った。
その時、彼は先程礼拝を行った場所の方向に目を転じた。
するとそこに立っている人々のいるのが見えた。
彼は「彼等は何をしているのか」と言った。
私は「彼等はアッラーの栄光を讃美しております」と言った。
彼は「私の甥よ、もし私が完全な礼拝を行うのであればそのようにしたであろう。
私はアッラーのみ使いの旅の伴をしたが、み使いは亡くなられるまで（旅中は）二ラカート以上の礼拝はされなかった。
私はアブー・バクルの伴もした。
彼も亡くなるまで（旅中の礼拝は）二ラカートを越えなかった。
そして（父）ウマルにも同伴したが彼も亡くなるまで二ラカートを越えなかった。
また、私はウスマーンにも同伴したが、彼も亡くなるまで二ラカートを越えることはなかった。
アッラーは「本当にアッラーのみ使いはお前達にとって立派な模範であった」（クルアーン第33章21節）と仰せられた」
ハフス・ビン・アースィムは伝えている
私は重い病気になった。
するとウマルの息子が見舞に訪れた。
その時、私は旅中においての“アッラーの讃美”について尋ねた。
彼は「私はアッラーのみ使いの旅の伴をした。その間、み使いがそれを行うことはなかった。
それで、もし私がそれを行うとすれば、それは礼拝を完全に行う場合であろう。
アッラーは「本当にアッラーのみ使いはお前達にとって立派な模範であった」（クルアーン第33章21節）と仰せられた」と言った。
アナスは伝えている
アッラーのみ使いはマディーナで正午の礼拝に四ラカート行われた。

そして、ズール・フライファ（注）でのアスル（夕方の礼拝）は二ラカートであった。
（注）マディーナより六マイルの地点
アナス・ビン・マーリクは次のように言ったと伝えられている
私はアッラーのみ使いとマディーナで正午の礼拝を四ラカート行った。
そして、ズール・フライファではアスルの礼拝をみ使いと二ラカート行った。
ヤヒヤー・ビン・ヤズィード・フナーイは伝えている
私はアナス・ビン・マーリクに礼拝の短縮について尋ねた。
彼は「アッラーのみ使いは三マイル、あるいは三パラサング（注1）離れた地に行かれれば二ラカート挙行されていた」と言った。
シュウバ（伝承者の一人）はそれについて疑っている（注2）。
（注1）三パラサングは九マイル
（注2）ハナフィー派は、礼拝短縮の可能な旅の最短距離は18マイルであるとしている
ジュバイル・ビン・ヌファイルは伝えている
私はシュラフビール・ビン・スィムトと17マイルか18マイル遠隔の地にある村に行った。
そこで彼は二ラカートの礼拝を行った。
私は（それについて）彼に尋ねた。
彼は「私はウマルがズール・フライファで二ラカートの礼拝を行うのを見た。
私は（それについてウマルに）尋ねたことがある。
（その時）彼は『私はアッラーのみ使いがそうなされるのを見て、私もそのようにするだけである』と言った」と答えた。
このハディースは同一の伝承者経路でシュウバによってもたらされた。
シュウバはこれをスィムトの息子から聞いたと言った。
彼はシュラフビールとは名づけられていなかったともいわれる。
彼（スィムトの息子）は18マイル遠隔地にあるドーミーンと呼ばれていた地に行った、と述べている。
アナス・ビン・マーリクは伝えている
私はアッラーのみ使いとマディーナを出てマッカに行った。
み使いはわれわれとマディーナに、帰られるまで、礼拝は、その都度二ラカートを行われていた。
私が「何日マッカに滞在されましたか」と尋ねると、「10日です」と言われた。
これに類似するハディースは別の伝承者経路てもアナスによって伝えられている。
ヤヒヤー・ビン・アブー・イスハークは伝えている
私はアナス・ビン・マーリクが（次のように言ったのを）聞いた。
「われわれはマディーナからハッジに出かけた」
その後の話は前述と同様である。

ミナーでの短縮礼拝について

ミナーでの短縮礼拝
1巻　P.475-477

サーリム・ビン・アブドッラー（ウマルの孫）は彼の父を根拠として伝えている
アッラーのみ使いはミナーやその他の場所で、旅の礼拝として二ラカート挙行された。
アブー・バクル、ウマル、そしてウスマーンもカリフの地位についた初期の頃までは二ラカートを挙行していた。
しかし、ウスマーンは（その後マッカで）四ラカートの完全礼拝を行った（注）。
（注）ウスマーンが二ラカートから四ラカートに変更した理由として次のように言われる
1、時の推移につれて多くの部族がイスラームに帰依した。
それらの人々がカリフの二ラカートの礼拝を見て、礼拝は二ラカートによって成るものだと考えるのを懸念した。
そこで彼は四ラカートによる完全な礼拝を行い、居住地での礼拝についての範をたれた
2、ウスマーンはマッカの女性と結婚した。
こうして出来た親戚の住居はその人自身の住居として扱われるためである。
つまり旅行者でも親戚の住居地に行った場合は旅行者の資格は失われる。
これについて人々から異議の声が上がったか、彼は四ラカートの礼拝を断行し彼の正当性を主張した
3、イマーム・アフマド・アブドッラー・ビン・ズバイル、そしてフマルディによって伝えられたハディースによると、アッラーのみ使いは「人が都会で結婚する時は、その者は居住者としての礼拝を挙行しなければならない」と言われた。
これこそウスマーンがマッカで完全な礼拝を行った最も確かな理由とされている
これに類するハディースは同一の伝承者経路を経てズハリーによってもたらされた。それには
ミナーだけについて話されており、他の場所については述べられてはいない。
イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いはミナーで二ラカートを（行うよう）言われた。
そして、アブー・バクルはみ使いの後に、ウマルはアブー・バクルの後に、そしてウスマーンはカリフの地位についてその初期の頃には（それぞれ前者の）行為に倣った。
その後、ウスマーンは四ラカートを行った。イブン・ウマルはイマーム（ここではウスマーンのこと）と一緒に礼拝する時は四ラカート行い、彼一人で礼拝する場合は二ラカート行っていた（注）。
（注）これはその地の居住地をイマームとして礼拝を行う場合は、たとえ旅行者であっても、
イマームに従うことを明らかにしたものである
これに類似のハディースは同一の伝承者経路を経て伝えられた。
イブン・ウマルは伝えている

アッラーのみ使いはミナーで旅行者の礼拝について話された。
アブー･バクルとウマルは同じように行った。ウスマーンはそれを八年あるいは六年行った。
ハフスは、イブン・ウマルは常々ミナーで二ラカートの礼拝を行った後就寝していた。
私は彼に「おじさん、もしあなたがもう二ラカート行ったとすれば、それはどういう礼拝になるのでしょう」と言うと、「もし私が（それを）行えば、私は完全な礼拝を行ったことになるであろう」と言った。
このハディースは同一の伝承者経路を経てシュウバによってもたらされたが、これにはミナーでの旅の礼拝についてだけで、その他の事は述べられてはいない。
イブラヒームは伝えている
私はアブドル・ラフマーン・ビン・ヤズィードが（次のように）言っているのを聞いた。
われわれはウスマーンをイマームとして、ミナーで四ラカートの礼拝を行った。
この事がアブドッラー・ビン・マスウードに話された。
すると彼は「げにわれらはアッラーのもの、その御許にわれらは帰り行くものなり」（クルアーン第2章156節）を読唱し、私はみ使いとミナーで二ラカートの礼拝を行った。
私はアブー・バクル・スィッディークに従ってミナーで二ラカートの礼拝を行った。
同じく、私はウマル・ビン・ハッターブとも一緒にミナーで二ラカートの礼拝を行った。
「どうか、四ラカートの中の、私の行った二ラカートがアッラーに受け入れられるものであってくれますように」と祈った。
これに類似するハディースは同一の伝承者経路を経てアアマシュによってもたらされた。
ハーリサ・ビン・ワハブは伝えている
私はアッラーのみ傾いとミナーで二ラカートの礼拝を行った。
ほとんどの人々がそこでは二ラカートの礼拝を行って満足していた。
ハーリサ・ビン・ワハブ・フザーイーは伝えている
私はミナーで、アッラーのみ使いの後に立って礼拝した。そこには非常に多数の人々がいた。
み使いは離別の巡礼に二ラカートの礼拝を行われた。
ムスリムは　「ハーリサ・ビン・ワハブ・フサーイーはウマル・ビン・ハッターブの息子ウバイドッラーの異母兄弟である」と言った。

雨の日の礼拝について

雨天の日は住居で礼拝を行って良い
1巻　P.477-479

イブン・ウマルは寒くて風の吹く夜、アザーンを唱えた。
そしてなお「諸君の家で礼拝を行うが良い」と（大声で）言った。
更に「アッラーのみ使いはムアッジン（注1）に『雨の降る寒い夜はそれぞれの住居で礼拝するよう呼びかけよ』とお命じになっていた」と言った（注2）。
（注1）礼拝の時刻をアザーン詠唱で告げたり、モスクの雑事を行う者
（注2）このハディースに関連して“はき物がぬれる時は住居で礼拝を行う”というのがある
イブン・ウマルは伝えている
彼は寒くて風雨の夜、人々に礼拝を呼びかけた。
その呼びかけの最後に「諸君の居所で礼拝せよ、諸君の居所で礼拝せよ」と大声で告げた。
それから「アッラーのみ使いは、旅中、寒い夜や雨の日は居所での礼拝を呼びかけるよう、常々お命じになっていた」と言った。
イブン・ウマルは伝えている
彼はダジュナーン（マッカ近郊の山）で礼拝の呼びかけを行った。
その後のハディースは前述のものと同様である。
しかし彼は「諸君の居所で礼拝せよ」とは言ったが、それを繰り返えすことはなかった、と言っている。
ジャービルは伝えている
私はアッラーのみ使いと旅に出た時、雨に降られた。
その時み使いは「諸君の中で礼拝の挙行を望む者はその居所で行うが良い」と言われた。
アブドッラー･ビン･アッバースは伝えている
彼は雨天の日ムアッジンに
「あなたは“アッラー以外に神はないと証言し、ムハンマドはアッラーのみ使であると証言します”と言った後続けて“礼拝に急いで集れっ”と言ってはならぬ。
（その代りに）“あなた方の家で礼拝を挙行せよっ”と言え」と言った。
彼（伝承者）は「人々はそれに対して不満の意を表明した」と言った。
イブン・アッバースは
「諸君はそれに驚いているのですか。
アッラーのみ使い、その方は私よりはるかに立派な方ですが、その方がそのようにされたのです。
金曜日の礼拝は確かに義務ではあるが、私はあなた方に強いて家を出てすべりやすいぬかるんだ道を歩かせるのを好まないのです」と言った。
アブドル・ハミードは伝えている。

私はアブドッラー・ビン・ハーリスが「アブドッラー・ビン・アッバースは雨降りの目について私達に説教した」と言ったのを聞いた。
残余のハディースは前述と同じであるが、彼は金曜の礼拝には言及しなかった。
そして、「それは私よりはるかに立派な方が既になされたことである」という言葉をつけ加えた。
アブドッラー・ビン・ハーリスは伝えている
イブン・アッバースは雨天の金曜日、彼のムアッジンに礼拝への呼びかけを行わせた後、人々にそれぞれの家で礼拝を行うよう告げさせた。
彼は「私はあなた方にすべりやすいぬかるんだ道を歩かせるのは好まない」と言った。
残余のハディースは他と同様である。
アブドッラー・ビン・ハーリスは伝えている
イブン・アッバースは彼のムアッジンに金曜の礼拝の呼びかけを行わせたが、その日は雨天であったのでめいめいが家で礼拝するよう告げさせた。
これはマアマルその他の者によってもたらされた。
このハディースには「私（イブン・アッバース）よりはるかに立派なお方がそうされた」という言葉が述べられていた。
このようなハディースはアブドッラー・ビン・ハーリスによって伝えられた。
ウハイブ（このハディースをもたらした伝承者の一人）は「イブン・アッバースが雨天の金曜日、彼のムアッジンに（これこれのことを）告げさせた、という話は彼（アブドッラー）から聞かなかった」と言った。

旅行中ナフル礼拝の方向について

旅中、乗り物の上にあって、それがどの方向をむいていようとナフル（随意の礼拝）はゆるされる
1巻　P.479-481

イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いはらくだに乗って出かけるどのような場所でもナフルの礼拝を行っておられた（注）。
（注）ハディースの権威の中には、汽車や飛行機の中で礼拝を義務づけるのは間違いであると結論する。
しかし法学者達は義務の礼拝は小舟の中でも実行されるべきものである、という意見で一致している。
故に、それは汽車、飛行機その他の乗り物でも行われるのが論理的だとしている
イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いはどこに行かれてもらくだの背で礼拝されていた。
イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いはらくだに乗ってマッカに向かわれる時、御顔が向いている方向（前進方向）に対して礼拝を行っておられた。
これは、あなた方が向く方向はどちらでもアッラーの御前である、ということを示したものである。
このハディースはもう一つの伝承者経路によっても伝えられている。
それはイブン・ムバーラクとイブン・アブー・ザーイダによって伝えられているが、その中に次のような箇所がある。 その時、イブン・ウマルは「あなた方がどの方向に向いてもアッラーの御前にある」（クルアーン第2章115節）を読唱していた。
イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いはハイバルに向かわれる間、ろばの背で礼拝しておられた。
サイード・ビン・ヤサールは伝えている
私はイブン・ウマルに従ってマッカに向かっていた。
途中、私は夜明けを懸念し、乗り物から下りて単独で礼拝を行った。
その後で急ぎ、彼に追いついた。
イブン・ウマルは私に「あなたはどこにいたのか」と尋ねた。
私は「夜明けが心配でしたので乗り物を下りて一人で礼拝してきました」と答えた。
するとアブドッラーが「あなたはアッラーのみ使いが良い例を示されているのを知らないのですか」と言った。
私は「はい、アッラーに誓って、全く知りません」と答えた。
彼は「み使いはらくだの上でウィトル（注）を行っておられた」と言った。

（注）ウィトルの礼拝は夜の礼拝の一部として行われる。
それ　はイシャー（夜の礼拝）またはタハッジュド（深夜に行う礼拝）のいずれかと一緒に行われるべきものである
アブドッラー・ビン・ディーナールはイブン・ウマルを根拠として伝えている
アッラーのみ使いは乗り物の背で、彼の向かわれる方向にむかって礼拝されていた。
アブドッラー・ビン・ディーナールは「イブン・ウマルはみ使いと同じようにしていた」と言った。
アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いはウィトルの礼拝を彼の乗り物の上で行っておられた。
サリーム・ビン・アブドッラーは彼の父を根拠として伝えている
アッラーのみ使いは向かわれる方向がどちらであっても（その方向に関係なく）乗り物が向かう方向に対してアッラーを讃え、ウィトルの礼拝を行っておられた。
しかし、彼は乗り物の上で義務の礼拝を挙行されたのではなかった。
アブドッラー・ビン・アーミル・ビン・ラビーアは彼の父を根拠として伝えている
彼（アブドッラーの父、アーミル）は夜旅をされていたみ使いが、彼の乗り物の上で、お向きになっている方向にナフルの礼拝を挙行されるのを見た。
アナス・ビン・スィーリーンは伝えている
われわれはアナス・ビン・マーリクかシリアに来た時、アイニッタムル（注）で彼に会った。
その時、私は彼がろばの上で彼の顔が向いている方向に対して礼拝しているのを見た。
ハンマーム（伝承者の一人）はそれがキブラ（礼拝の際に向かう方向）より左に寄った方向であることをしめした。
そこで私は彼に「あなたはキブラではない方角に対して礼拝しております」と言った。
彼は「私はアッラーのみ使いがそうなさるのを見なかったなら、私もそうはしなかったでありましょう」　と言った。
（注）シリアからイラクへの道筋にある村

旅行中の併合礼拝について

旅中は二つの礼拝を同時に行って差し支えない
1巻　P.481-482

イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは道をお急ぎの場合にはマグリブとイシャーの二つの礼拝を合わせて行っていた。
ナーフィウは伝えている
イブン・ウマルは旅で道を急いでいる場合にはマグリブとイシャーの礼拝を夕暮れの明りが消えた後に合わせて行っていた。
彼は「アッラーのみ使いはお急ぎの時はマグリブとイシャーの礼拝を合わせて行っていた」と言っていた。
サーリムは彼の父が「私はアッラーのみ使いが道をお急ぎの時はマグリブとイシャーの礼拝を合わせてなさるのを見た」という話をしていたと伝えている。
サーリム・ビン・アブドッラーは彼の父が「私はアッラーのみ使いが旅で道を急いでおられる場合には、マグリブの礼拝をイシャーの礼拝時に合わせて行われるために、その時刻まで遅らせておられたのを見た」と言ったと伝えている。
アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーのみ使いは太陽が頂点に達する前に出立された時はズフルの礼拝をアスルの刻まで遅らせになった。
そしてその刻には乗り物から降りられて（ズフルとアスルの礼拝を）合わせて挙行されていた。
しかし、もし太陽が、出立の前に頂点より西に傾いていれば、ズフルを済ましてから乗り物に乗られた。
アナスは伝えている
アッラーのみ使いは旅で二つの礼拝を同時に挙行されたい場合は、アスルの刻までズフルの礼拝を遅らせになった。
そして、その刻に入るとほどなくその二つの礼拝を合わせて行っておられた。
アナスは伝えている
アッラーのみ使いは旅をお急ぎの時はズフルの礼拝をアスルの刻まで遅らせ、その刻に入ると間もなくその二つの礼拝を合わせてされていた。
また、彼はマグリブの礼拝を遅らせ、夕暮れの明りが消えた後でイシャーの礼拝と合わせて行っておられた。

定住者の併合礼拝について

定住者の併合礼拝について
1巻　P.483-485

イブン・アッバースは伝えている
アッラーのみ使いはズフルとアスルの礼拝を、また、マグリブとイシャーの礼拝を危険な状態でも旅中でもない時に合わせて行っておられた。
イブン・アッバースは伝えている
アッラーのみ使いはマディーナで危険な状態でも旅中でもない時に、ズフルとアスルの礼拝を合わせて行っておられた。
アブー・ズハイルはサイード（伝承者の一人）に「どうして彼はそうされたのですか」と尋ねた。
すると彼は「私はイブン・アッバースにあなたが私に尋ねたように尋ねました。彼は『み使いは彼のウンマ（イスラーム信仰共同体）の中の誰一人として礼拝のことで難儀しないよう望まれたのです』と答えた」と言った。
イブン・アッバースは伝えている
アッラーのみ使いはタブーク（注）の遠征のために旅をした時併合礼拝を行われた。
（その時）彼はズフルとアスル、また、マグリブとイシャーの礼拝をそれぞれ合わせて行われた。
サイード（伝承者の一人）はイブン・アッバースに「どうしてみ使いはそのようにされたのですか」と尋ねた。
彼は「み使いは彼のウンマに難儀なことを望まれなかったのです」と答えた。
（注）ダマスカスからマディーナへの巡礼道路にある町
ムアーズは伝えている
われわれはアッラーのみ使いとタブークの遠征に出た。
（その時）み使いはズフルとアスルの礼拝を合わせて行われ、また、マグリブとイシャーの礼拝を合わせて行っておられた。
ムアーズ・ビン・ジャバルは伝えている
アッラーのみ使いはタブークの遠征でズフルとアスルの礼拝と、マグリブとイシャーの礼拝を（それぞれ）合わせて行っておられた。
彼（伝承者の一人）が「どうしてみ使いはそのようになさるのですか」と尋ねた。
彼（ムアーズ）は「あの御方は彼のウンマに難儀をかけるのを望まれなかったのです」と答えた。
イブン・アッバースは伝えている
アッラーのみ使いはマディーナで危険な状態でも雨天でもない時、ズフルとアスルの礼拝を、
また、マグリブとイシャーの礼拝を合わせて行っておられた。

ワーキウによって伝えられたハディースには「私はイブン・アッバースに、どうしてみ使いはそのようになさるのか、と尋ねた。
すると彼は『それは彼のウンマが難儀をしないためです』と答えた」と述べられている。
これに関してムアーウィヤによって伝えられたハディースもある。
その事でイブン・アッバースは「み使いはどうしてそのようになさるのですか」と尋ねられた。
すると彼は「み使いは彼のウンマに不必要な難儀をかけたくないのです」と答えた、と述べられている。
イブン・アッバースは伝えている
私はアッラーのみ使いと八ラカートの併合礼拝を行った。
そしてまた、（時をおいて）七ラカートの併合礼拝を行った。
私（伝承者の一人）は「おお、アブー・アッシャアサーウよ、それはみ使いがズフルの礼拝を遅らせてアスルの礼拝と合わせて、また、マグリブの礼拝を遅らせてイシャーの礼拝と合わせたのだと思います」と言った。
彼は「私もそのように思う」と言った（注）。
（注）ズフル礼拝は四ラカート、アスルは四ラカート、マグリブは三ラカート、イシャーは四ラカートである
イブン・アッバースは伝えている
アッラーのみ使いはマディーナで七ラカートと八ラカートの礼拝をされた。
すなわち、（み使いは）ズフルとアスルの礼拝（八ラカート）とマグリブとイシャーの礼拝（七ラカート）を合わせて行われた。
アブドッラー・ビン・シャキークは伝えている
イブン・アッバースはある日、アスルの礼拝の後、日没までわれわれに説教をした。
やがて星が輝き始めた。
人々は「礼拝、礼拝」と言い始めた。その時タミーム族の男が彼の所に近付いて執ように「礼拝、礼拝」（と叫び続けた）イブン・アッバースは「拾われた奴め（注1）！　お前は私にスンナ（注2）を教えるのか」と言った。
それから彼は「私はアッラーのみ使いがズフルとアスルの礼拝を、そして、マグリブとイシャーの礼拝を合わせてなさるのを見たのだ」と言った。
アブドッラー・ビン・シャキークは、これについて私の心に若干の疑問が生じた。
そこで私はアブー・フライラの所に行って（それについて）尋ねた。
すると彼は「彼（イブン・アッバース）の言葉は真実である」と証言した。
（注1）麻義は「母を知らない者」という意で非難、ののしりの言葉
（注2）み使いの聖行
アブドッラー・ビン・シャキークは伝えている
ある男がイブン・アッバースに（彼が礼拝を遅らせた時）「礼拝」と言った。
彼は黙っていた。
彼は再び「礼拝」と言った。彼はなお黙ったままであった。

すると彼は再び「礼拝」と叫んだ。
彼はなお沈獣州したままであったが、しばらくの時をおいて「お前の母が奪われよっ、お前は私に礼拝について教えるのか。私はアッラーのみ使いの時代に、しばしば二つの礼拝を合わせて行ったものだ」と言った（注）。
（注）居住者、危険な状態、あるいは雨天のいずれでもない場合の併合礼拝には多くの説明があるが、それはどうしてもそれが必要な場合、例えば病気のような、に限られると結論される。
これは規則ではなく、あくまで例外だということを記憶しなければならない。
預言者は平和時や居住者としての状況ではほとんど併合礼拝は行わなかったという。
併合礼拝は異常な状況や例外的なケースにのみ行われるものである

礼拝後の退出について

礼拝終了後、左右いずれの方向を向いて行動を起こしても良い
1巻　P.485-486

アブドッラーは伝えている
あなた方誰一人たりと、サタンにはあなたの側に場所を与えてはならない。
礼拝者は（礼拝後）右方向にのみ行動を起こすのが正しいと考えてはならない。
私はアッラーのみ使いがしばしば左方向に向かって行動をおこされるのを見た（注）。
（注）イスラームでは左側を嫌う傾向がある。
シャーム（シリア）は左の国の意で、アラブの敵国ビザンティン帝国の方向であったからだと言われる。
一方ヤマン（イエメン）は右の国の意で、良い事が多い地と考えられていた
このようなハディースは同一の伝承者経路を経てアアマシュによってもたらされている。
スッディーは伝えている
私はアナスに「礼拝終了後は、右方向に行動するのでしょうか、それとも左方向でしょうか」と尋ねた。
彼は「私はアッラーのみ使いが右方向に多く行動されるのを見た」と言った。
アナスは伝えている
アッラーのみ使いは常々（礼拝終了後は）右方向に行動されておられた。

イマームの右に座ることについて

イマームの右側に位置することが好まれる
1巻　P.486

バラーウは伝えている
われわれはアッラーのみ使いの後に立って礼拝を行った時、彼の右側に位置するのを好んだ。
それは（礼拝の終りに）み使いの御顔がわれわれの方に向くと思われるからであった。
また（礼拝の折われわれは）み使いが「おゝ、わが主よ、あなたが復活させ給う日、または、あなたを畏敬する者達をお集めになられる日、あなたの懲罰より救われますように」とお祈りになる言葉を聞きました。
同一の伝承者経路を経てミスアルによってもたらされたものには「アッラーのみ使いがわれわれの方に向くと思われる」ということは述べられてはいない。

アザーン中のナフル礼拝に関して

ムアッジンがアザーンを唱え始めた時には、ナフルの礼拝挙行は好ましくない
1巻　P.487-488

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは「（イカーマが唱えられて）礼拝が始まった時は、義務としての礼拝以外はない」と言っておられた。
このハディースは同一の伝承者経路を経てワルカーウによってもたらされた。
アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは「イカーマが唱えられた時、そこには義務の礼拝を除いてはない」と申された。
このようなハディースは同一の伝承者経路を経てイスハークによってもたらされた。
アブー・フライラによって伝えられたこのハディースは別の伝承者経路でも伝わっている。
ハンマード（伝承者の一人）は「私はアムル（伝承者の一人）に会った。彼はそれについて私に話したが、それはアッラーのみ使いから直接伝えられたものではなかった」と言った。
アブドッラー・ビン・マーリク・ビン・ブハイナは伝えている
アッラーのみ使いは夜明けの礼拝が始まった時、礼拝を行っていた一人の男の側を通られた。
み使いはその男に何か申されたが、それがどのようなことであったかわからなかった。
み使いがそこを去られた時、われわれはその男の周囲に集まって「み使いはあなたに何を言われたのですか」と尋ねた。
彼は「み使いは『あなた方の中の一人が早朝礼拝に、まさに四ラカート行おうとしている』と申された」と言った（注）。
カアナビーは「アブドッラー・ビン・マーリク・ビン・ブハイナはこれを彼の父を根拠として話した」と言った。
アブー・フサイン・ムスリムは「このハディースについて彼の父を根拠としたという彼の言葉は間違いである」（と言った）
（注）早朝の礼拝は二ラカートである
イブン・ブハイナは伝えている
アッラーのみ使いはムアッジンがイカーマを唱えていた時、一人の男が礼拝しているのを御覧になった。
み使いはその男に「あなたは早朝の礼拝に四ラカート行うのですか」と言われた。
アブドッラー・ビン・サルジスは伝えている
アッラーのみ使いが早朝の礼拝を挙行されている時、一人の男がモスクに入って来た。
彼はそのモスクの一隅で二ラカートの礼拝を行った。
それから彼はみ使いと一緒に礼拝した。
み使いが“あなた方に平安を”の挨拶を終えられた時、「おお某よ！　二回の礼拝の中のどちらを（

義務の礼拝として）行ったのですか。あなたが一人で行ったもの、それとも、わたし達と一緒に行ったものですか」といわれた。

モスクに入った時の言葉について

モスクに入った時に言う言葉
1巻　P.488

アブー・フマイドは伝えている
アッラーのみ使いは「あなた方の誰でもモスクに入った時は“おおアッラー、私にあなたの御慈悲の扉をお開き下さい”と言うように、そして（そこから）出る時は“おおアッラー、私はあなたの御仁慈を請い願います”と言うように」と申された。
アッラーのみ使いから語られたこのハディースは別の伝承者経路によっても伝えられている。

モスクに入った時の礼拝について

モスクに入った時、そこへの挨拶として二ラカートの礼拝挙行が好ましく、
それを行う前に座るのは好ましくない
1巻　P.488-489

アブー・カターダは伝えている
アッラーのみ使いは「あなた方の誰でもモスクに入った時は、座る前に二ラカートのナフルを挙行しなさい」と申された（注）。
（注）ナフル（随意の礼拝）は信者のアッラーへの限りない愛の象徴である。
モスクに入った際のその礼拝は、その人の精神を現実界から天地を支配する宗教界への意識へと高揚させるものである
教友の一人、アブー・カターダは言った
私はアッラーのみ使いが人々の間に座っておられた時モスクに入った。
私も人々の中に入って座った。
その時み使いは私に「あなたはどうして座る前に二ラカートの礼拝を行わないのですか」と言われた。
私は「アッラーのみ使いよ、私はあなたが座っておられるのや、人々が座っているのを見ました（ので座ってしまいました）」と言った。
するとみ使いは「あなた方の誰でもモスクに入った時は、二ラカートの礼拝を行うまで座ってはなりません」と言われた。
ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
アッラーのみ使いは私に負債（注）があった。
彼はそれを返して下さり、その上に余分のものまで下された。
私がモスクに入ると私は「二ラカートの礼拝をしなさい」と言われた。
（注）らくだの代金

旅から帰った後の礼拝について

旅から帰った者はモスクに入ってニラカートの礼拝挙行が好ましい
1巻　P.489-490

ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
アッラーのみ使いは私かららくだをお買いになった。
彼がマディーナからお帰りになった時、私にモスクに来るようお命じになった。
私がそこへ行くとみ使いは私にニラカートの礼拝を行うよう言われた（注）。
（注）預言者は彼をモスクに呼んで、ムスリムのあらゆる活動の基礎となるアッラーに対する意識、それへの恭敬、献身を促された
ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
私はアッラーのみ使いと遠征に出た。
私のらくだは足がのろくてすっかり遅れてしまった。
私は疲れ切った。
このようなわけでアッラーのみ使いは私より早くお帰りになった。
私が帰ったのは翌日であった。
私がモスクに行くと彼はその入り口の所に居られた。
み使いは「あなたは今着いたのですか」と言われた。
私は「はい、そうです」と言った。
彼は「あなたのらくだを置いて（モスクに）入りなさい。そして、ニラカートの礼拝を挙行しなさい」と言われた。
彼（語り手）は「そこで私は（モスクに）入り（ニラカートの礼拝を）行って帰りました」と言った。
カアブ・ビン・マーリクは伝えている
アッラーのみ使いが旅からお帰りになる時はいつも正午前であった。
彼はお帰りになると最初にモスクに入ってニラカートの礼拝をし、それからそこに座られた。

午前の礼拝について

午前の礼拝は好ましい。
それの最も短いのはニラカート、最も長いのは八ラカートで、四ないし六ラカートの場合もある
1巻　P.490-494

アブドッラー・ビン・シャキークは伝えている
私はアーイシャに「アッラーのみ使いはドハー（八〜九時頃から正午までの刻）の礼拝をされておりましたか」と尋ねた。
彼女は「いいえ、み使いは旅からお帰りになった時以外は（されておりませんでした）」と答えた。
アブドッラー・ビン・シャキークは伝えている
私はアーイシャに「アッラーのみ使いはドハーの礼拝をされておりましたか」と尋ねた。
彼女は「いいえ、み使いは旅からお帰りになった時以外は（しておりませんでした）」と答えた（注）。
（注）アブドッラー・ビン・シャキークのこの二つのハディースは全く同一であるが、これは預言者がドハーの礼拝をモスクでは行わなかったことを明瞭にするためであるとしている
ウルワは伝えている
アーイシャは「私はアッラーのみ使いが午前の礼拝で規定されたものより多く行われているのを見たことはございません。
そして、私も同じように行いました。
もしみ使いが、実際は挙行されることをお望みの何かの行為を放棄されたような場合は、人々かそれに倣って行っているうちにそれを義務と思ってしまうのではないか、ということを心配されるためです」と言った（注）。
（注）預言者はドハーを行ったが、そのほとんどは人々の目のとどかない家の中であった。
また、彼が時々それを放棄したのは、それが義務的行為と受け取られないようにであった。
もし、彼か規則的にそれを行えば人々がそれに徴つて義務的な行為と見なされかねないと考えたのである。
預言者は人々に不必要な負担をかけるのを望まれなかったし、また、人々かいかなるプレッシャーも感ずることなく、それぞれに合う宗教的献身を推進することを望まれたのである
ムアーザは「アッラーのみ使いは午前の礼拝には何ラカートをされておりましたか」とアーイシャに尋ねた。
彼女は「四ラカートです。でも、み使いが好んだ時はもっと多く（されておりました）」と答えた。
これに類似のハディースは同一の伝承者経路を経て伝えられた。
しかし「アッラーが喜ばれるから」と伝承者が言ったという言葉の付加がある。
ムアーザ・アダウィーヤは伝えている

アーイシャは「み使いは四ラカートされるのが習慣でしたが、アッラーが喜ばれるので時にはそれより多くの（ラカート）をされておりました」と言いました。
このようなハディースは同一の伝承者経路を経てカターダによってもたらされた。
アブドル・ラフマーン・ビン・アブー・ライラーは伝えている
ウンム・ハーニーを除いては、誰も私にアッラーのみ使いが午前の礼拝を行っているのを見たと告げた者は無い。
彼女は「アッラーのみ使いはマッカ征服の日、彼女の家に入り八ラカートの礼拝をされました。
そのとき、み使いはルクー（立礼）とサジダ（叩頭）を完全に行われましたが、み使いがあのように軽い礼拝（注）をされるのをけっして見たことがありませんでした」と言った。
イブン・バッシャール（伝承者の一人）は彼の話の中では“けっして”という言葉は言わなかった。
（注）クルアーンの長い章句や、アッラーの讃美を多く唱えることを放棄した礼拝
アブドッラー・ビン・ハーリス・ビン・ヌーファルは伝えている
私はアッラーのみ使いが午前の礼拝を行われたかどうかについて告げてくれる人を熱心に探した。
しかし、私はアブー・ターリブの娘ウンム・ハーニー（注）以外は誰も見付けられなかった。
彼女は「み使いはマッカ征服の日、日が高くなってから（私の家に）来られました。
そして、衣服が運ばれて、それでその御方のために人目がとどがない場所がつくられました。
彼は沐浴されてからお立ちになり、八ラカートの礼拝をされました。
私は（彼の礼拝中）その御方の立った姿勢がいちばん長かったのか、それともお辞儀か、あるいは叩頭か、またはそれらすべてが同程度の長さだったのかは存知ません。
私はこの時以外み使いが感謝の言葉を唱えているナフルの礼拝をされているのを見ませんでした」と言った。
ムラーディーはユーヌスを根拠として伝えているが「彼（ユーヌス）がそれを私に告げた」とは言ってはいない。
（注）ウンム・ハーニーはアリー（預言者の娘ファーティマの夫で四代正統カリフ）の実の兄弟である
アブー・ターリブの娘、ウンム・ハーニーのマウラー（奴隷の身分から解放された自由民）
アブー・ムッラは伝えている
ウンム・ハーニーは「私はマッカ征服の年、アッラーのみ使いの所に行きました。
その時、み使いは身体を清められ、彼の息女ファーティマが彼を衣服で人目のとどかぬよう手助けしているのを見ました（注1）。
私はみ使いに挨拶しました。
彼は「どなたですか」（注2）と申しました。
私は「アブー・ターリブの娘、ウンム・ハーニーです」と申しました。
彼は「ようこそ、ウンム・ハーニー」と申されました。
彼は沐浴を完全に終えられると、一枚布の衣服をまとわれてお立ちになり、八ラカートの礼拝をされました。

み使いが礼拝を終えられた時、私は「アッラーのみ使いよ、私の母の息子アリー・ビン・ターリブは私が保護したフラーヌ・ビン・フバイラ（注3）を殺害に行きました」と申しますと彼は「ウンム・ハーニーよ、わたし達もまた、あなたが保護した人物を保護しました」と申されました。
「それは午前の礼拝の時でした」と彼女は申しました。
（注1）沐浴の時も体の下部を布で覆うのが預言者の慣行であった。
彼は身体の上部も人目にさらさないよう気配りしていたという。
娘のファーティマはアリーに嫁ぐ前は、家庭で預言者の世話をする一人でもあった
（注2）沐浴を行っている間でも挨拶に対する返答は許される
（注3）彼の名前はハーリス・ビン・ヒシャーム・マハズーミーであった。
しかし、幾人かの学者は、その者はアブトッラー・ビン・ラビーアであると主張している
アブー・ムッラはウンム・ハーニーを根拠として述べている
マッカ征服の日、アッラーのみ使いは彼女の家で一枚布の衣服（注）をまとわれて八ラカートの礼拝をされたが、その衣服の両端は交差して肩にかけられていた。
（注）この衣服は白色の幅の広い布を体に巻くようにして身につけるものと考えると良い
アブー・ザッルは伝えている
アッラーのみ使いは「午前中に、あなた方各々の身体の骨一つ一つに慈善行為が課せられている（注1）。
アッラーの栄光を讃える言葉の一つ一つが慈善行為である。
アッラーを讃美する一つ一つの言葉が慈善行為である。
アッラーの唯一性を告白する言葉の一つ一つが慈善行為である。
“アッラーは偉大なり”と唱える言葉の一つ一つが慈善行為である。
善行を命ずることも慈善行為である。
アッラーが否認されたことを禁止するのも慈善行為である。
故に、それらの言葉を唱えて二ラカートを行えば（午前の礼拝としては）十分であろう。
（つまり、礼拝は身体のすべての器官を使用して行われるからである（注2））
（注1）ここには午前の礼拝の意義か示されている。
その実践があって、人間の骨の一つ一つは病気を免れて十分に機能し形態も保たれるとされる
（注2）イスラームの慈善行為とは財貨の消費のみを意味するものではない。
それは、人のアッラーへの強い恭敬や献身であるし、悪い行為を憎むのもイスラームでは慈善行為となる
アブー・フライラは伝えている
私の親友（アッラーのみ使い）は私に三つの事を行うよう勧められた。
（それは）毎月三日間の断食、午前中に二ラカートの礼拝の挙行、夜、寝る前にウィトルの礼拝の励行である。
このようなハディースはアブー・フライラによって、別の伝承者経路でも伝えられている。
アブー・フライラは伝えている
私の親友アブー・カーシム（預言者の別称）は私に三つの事を行うよう勧められた。それは前述

のハディースと同様である。
ウンム・ハーニーのマウラー、アブー・ムッラはアブー・デルターウを根拠として伝えている
私の親友（預言者）は三つの行為を勧められた。
私は生涯、けっしてそれを放棄しないであろう。
それは毎月三日間の断食、午前の礼拝、そしてウィトルの礼拝を済ませるまで就寝しないことである。

早朝のスンナ礼拝について

早朝の礼拝でスンナとしてのニラカートは好ましい。
その中での読唱が好まれるクルアーンの章句について（注）
（注）早朝の礼拝でスンナとしての二ラカートは大へん強調されている。
これは義務としての礼拝に加えたものの中、最も重視されるものである
1巻　P.494-497

イブン・ウマルは伝えている
信者達の母、ハフサは「ムアッジンが早朝の礼拝のアザーンを唱え終って静まると、アッラーのみ使いは義務としての礼拝が開始される前に短い礼拝を挙行されました」と話した。
このハディースは同一の伝承者経路を経てナーフィウによってもたらされた。
ハフサは伝えている
早朝の礼拝に、み使いは短い二ラカートの礼拝以外は行われませんでした。
このようなハディースは同一の伝承者経路を経てシュウバによってもたらされた。
ハフサは伝えている
早朝の礼拝に、アッラーのみ使いは二ラカートの礼拝をされました。
アーイシャは伝えている
み使いはアザーンをお聞きになると、短い礼拝でしたが、二ラカートによる早朝の礼拝をされておりました。
このハディースは同一の伝承者経路で伝えられた。
なお、アブー・ウサーマによって話されたハディースの中には“夜が明けた時”という言葉が入っている。
アーイシャは述べている
み使いは（早朝の）アザーンとその礼拝が開始される間に、（義務ではない）二ラカートの礼拝をされておりました。
アーイシャは述べている
み使いは二ラカートの早朝礼拝をされておりましたが、私が「み使いはファーティハ（開端章）を読唱されたのかしら（注）」と言う程に（礼拝を）短くされておりました。
（注）「み使いはファーティハを読唱されたのかしら」という表現は、預言者のその時の礼拝が大へん短いものであったのを意味している。
なお、ファーティハ（開端章）はクルアーンの章の中でも極めて短い章の一つである
アーイシャは伝えている
アッラーのみ使いはファジュルの刻になりますと、二ラカートの礼拝をされておりました。
私は（それがあまり短いので）「あの御方はその礼拝でファーティハを読唱されるのかしら」と申しておりました。
アーイシャは伝えている

み使いはナフルの礼拝に関しましては、早朝の二ラカートの礼拝ほど気づかわれるのは他にはありませんでした。
アーイシャは述べている
私はみ使いがナフルとしての礼拝の中で、早朝の（義務の）礼拝の前の二ラカート程、（気づかわれて）お急ぎになる（注）のを見ませんでした。
（注）それを行おうとして熱心になる
アーイシャは述べている
み使いは「早朝の二ラカートは現世、あるいはそれに存在する何にも増してすばらしい」と申されました。
アーイシャは述べている
み使いは早朝の義務としてではない二ラカートの礼拝について「それは私にとって全世界以上に好ましいものである」と申されました。
アブー・フライラは述べている
アッラーのみ使いは早朝の礼拝の二ラカートで「言ってやるがよい。『おお、不信者たちよ…』」（クルアーン109章）と「言ってやるがよい。彼はアッラー、唯一なる御方であられる」（クルアーン112章）を読唱されていた。
イブン・アッバースは述べている
アッラーのみ使いは早朝の礼拝の二ラカートで、最初の一ラカートには「（ムスリムよ祈って）言うがよい。『わたしたちは、アッラーとわたしたちに啓示されたものを信じます』」（クルアーン第2章136節）ともう一つには「わたしたちは信じます。あなたは、わたしたちがムスリムであることを立証して下さい」（クルアーン第3章52節）を読唱されていた。
イブン・アッバースは伝えている
アッラーのみ使いは早朝の二ラカートで「（ムスリムよ祈って）言うがよい。『わたしたちは、アッラーとわたしたちに啓示されたものを信じます』と『わたしたちとあなた方との間の共通のことば（の下）に来なさい』」（クルアーン第3章64節）を読唱されていた。
別の伝承者経路でも同じハディースが伝わっている。

スンナの礼拝の徳点について

義務としての礼拝の前後に行うスンナの礼拝にそなわる徳点（注）
（注）スンナとしての礼拝は二類型にわかれる。スナン（スンナの複数）・ラーティバ、または、ムワッカダ（大へん強調されるもの）とガイル・ラーティバまたは、ガイル・ムワッカダ（それ程強調されないもの）である。
これらスンナの礼拝は重要であり、義務としての礼拝における不十分な点を補うものとされている。
重要さでの序列を述べれば、
一）夜明け（早朝）の義務としての礼拝の前の二ラカート。
二）夕刻の二ラカート。
三）正午の二ラカート。
四）イシャーの二ラカートである。
二）三）四）は義務の礼拝の後で行われる。五）は正午の義務の礼拝の前の四ラカートである
1巻　P.497-498

ウンム・ハビーバ（預言者の妻）は伝えている
み使いは「昼と夜に（ナフルの）十二ラカート（注）を行った者には、天上の楽園に家が建てられるであろう」と申されておりました。
更に彼女は「私はそれをお聞きしてからは、けっしてそれを怠ってはおりません」と言った。
伝承者の幾人かは「私はそれを（誰々からまた誰々から）開いて以来（その礼拝を怠ってはいない」と一様に言っている。
（注）この十二ラカートは、スナン・ムワッカダのことである
ヌアマーン・ビン・サーリムは「一日に（ナフルの）十二ラカートを行った者は、彼の為に天国に家が建てられるであろう」（というハディースを）同一の伝承者経路で伝えている。
預言者の妻、ウンム・ハビーバは伝えている
み使いは「アッラーの下僕たるムスリムは誰でもアッラーへの一途な心で（義務の礼拝以外に）毎日十二ラカートを捧げれば、アッラーは彼の為に天国に家をお建て下さるであろう。または、彼の為に天国に家が建てられるであろう」と申されておりました。
それで私はそれを聞きましてから、その礼拝を続けております。
（アムルとヌアマーンもまた、それと同様のことを言った）
ウンム・ハビーバは言った
み使いは「アッラーの下僕たるムスリムは誰でも毎日沐浴をし、それを完全に行った後、礼拝を行う」と申されました。
残余のハディースは前述のものと同一である。
イブン・ウマルは伝えている
私はアッラーのみ使いと共に正午の（義務の礼拝の）前に二ラカート、後に二ラカート、マグリ

ブの礼拝の後に二ラカート、イシャーの礼拝の後に二ラカート、そして、金曜の礼拝の後金曜のそれは、アッラーのみ傾いと一緒に彼の家で行った（注1）、（注2）。
（注1）イマーム・シャーフィーはこのハディースを根拠として、正午の礼拝の前のスンナの礼拝は二ラカートであることに賛成している。
一方、ハナフィー派の人々は、アリー、アーイシャ、ウンム・ハビーバによって伝えられたハディースを根拠として四ラカートに賛成している。
他の法学者達も四ラカートに賛成している者が多い
（注2）イブン・ウマルは預言者の妻、ハフサの実の兄弟である。
それ故、彼は預言者が家で行ったスンナの礼拝を見ている

ナフルの礼拝について

ナフルの礼拝は立って行っても座って行っても良い。
また正当な理由があれば挙行中の一部のラカートは、
その時在った姿勢から直ちに座る、あるいは立つに変えることが許される
1巻　P.498-502

アブドッラー・ビン・シャキークは述べている
私はアーイシャにアッラーのみ使いのナフルの礼拝について尋ねた。
ラカートを行ってから出て行かれ、そして、人々を礼拝に先導されておりました。
それから家に帰られて二ラカート挙行されておりました。
み使いはまた、マグリブの礼拝を人々と共にされた後、家で二ラカートされておりました。
イシャーの場合も人々と共にされた後、家で二ラカート行っておられました。
夜間にはウィトルを含む九ラカートを行っておられました。
み使いは夜、長い間お立ちのまゝ、あるいは長い間座ったまゝ礼拝されておりました。
あのかたがお立ちのままクルアーンを読唱された時は、その姿勢で先ず立礼され、それから叩頭されました。
そのかたが座ったまゝクルアーンを読唱された時は、座った姿勢で腰を曲げて礼を行い、それから叩頭されました。
そしてファジュル（未明の刻）が参りますと二ラカートを行われました」
アーイシャは伝えている
み使いは夜、長い間礼拝されておりました。
そのかたが立って礼拝された時は立った姿勢で立礼し、座って礼拝された時は座った姿勢で腰を曲げて礼をされました（注）
（注）ナフルの礼拝は立ったまゝ、あるいは座ったままのいずれの姿勢で行っても良い。
もしそれが座った姿勢で行われるなら、礼拝者はその姿勢を保って礼拝を遂行し特別の事情がない限り立ち上がってはならない
アブドッラー・ビン・シャキークは伝えている
私はペルシアで病気になった。
そこで私は座った姿勢で礼拝を行った。
私はこれについてアーイシャに尋ねた。
彼女は「み使いは夜間、長い間座って礼拝されておりました」と答えた。
アブドッラー・ビン・シャキーク・ウカイリーは伝えている
私はアッラーのみ使いの夜間の礼拝についてアーイシャに尋ねた。
彼女は「み使いは夜間、長い間お立ちのまま、あるいは長い間お座りになったまま礼拝されておりました。そして、あのかたが立ってクルアーンを読唱された時は立った姿勢で礼をされ、座ってクルアーンを読唱された時は座った姿勢で腰を曲げて礼をされておりました」と言った。

アブドッラー・ビン・シャキーク・ウカイリーは伝えている
私はアーイシャにアッラーのみ使いの礼拝について尋ねた。
彼女は「み使いはお立ちになって礼拝されるのと同じくらい、お座りになってもそれをなさいました。そして、もしあのかたが立って礼拝を始められた時は立った姿勢で礼をされ、座ってそれを始められた時は座った姿勢で腰を曲げて礼をされておりました」と言った。
アーイシャは伝えている
私はみ使いが（結婚して最初の頃は）夜の礼拝に座ってクルアーンを読唱されるのを見たことがありませんでした。
しかし、み使いが年を召されてからはお座りになって読唱されておりました。
そして、（読唱される）スーラ（クルアーンの章）の中、あと三十乃至四十節になりますと立たれて残りのスーラを読唱されました。
それから立礼されておりました（注）。
（注）礼拝者は立った姿勢での礼拝に耐えられない場合は座って行っても良い。
また、正当な理由があれば礼拝の途中でも、立つ、またはすわる姿勢の変化が許される
アーイシャは伝えている
み使いは（お年を召されてからは）座って礼拝されておりました。
あのかたがそうするようになられてからクルアーンを読唱します時、残りの節が三十乃至四十節程になりますとお立ちになってそれを読唱されました。
それが終ると立礼され、次に叩頭されました。
み使いは二回目のラカートでも同じようになさいました。
アーイシャは伝えている
み使いは（深夜の礼拝の間）よく座って（クルアーンを）読唱されておりました。
そして、あのかたが立礼を望まれるとお立ちになって、一般の人がクルアーンの四十節を読唱するくらい（の間）お立ちになっておりました。
アルカマ・ビン・ワッカースは伝えている
私はアーイシャに、アッラーのみ使いがどのようにニラカートを座って行われたかを尋ねた。
彼女は「み使いはニラカートでクルアーンを読唱されておりましたが、立礼を望まれるとお立ちになってそれをなさいました」と言った（注）。
（注）このような方法でのナフルの礼拝も許されている。
この場合、立った後で若干の節を読み、その後、ルクー（立礼）するのか好ましいとされている
アブドッラー・ビン・シャキークは伝えている
私はアーイシャに「アッラーのみ使いは座って礼拝されましたか」と尋ねました。
彼女は「はい、人々があのかたを破壊してしまった後で（注）」と言った。
（注）「人々があのかたを破壊してしまった後で」は直訳で、これは“人々の仕合せの為の労苦が重荷となって老い込んでしまった後で”の意
アブドッラー・ビン・シャキークは伝えている
私はアーイシャに尋ねた。

すると彼女はアッラーのみ使いについて（上記同様の話を）した。
アーイシャは伝えている
み使いは亡くなられる少し前にはほとんど座って礼拝をされていました。
アーイシャは伝えている
み使いはお年を召し体力がお弱りになってからは、ほとんどの礼拝を座ってされました。
ハフサは伝えている
私はみ使いがお亡くなりになる一年前までは、その御方がナフルの礼拝を座ってなさるのを見たことがありませんでした。
み使いはクルアーンのスーラを読唱されておりましたが、それがより長く長くあるように、ゆっくりした調子のふしをつけて読唱されておりました。
前記のハディースは別の伝承者経路で伝えられているが、それには“一年あるいは二年”の言葉が入っている。
ジャービル・ビン・サムラは伝えている
アッラーのみ使いは亡くなられる少し前は座って礼拝しておられた。
アブドッラー・ビン・アムルは伝えている
アッラーのみ使いは「（ナフルの礼拝で）男子の座っての礼拝は半分のものでしかない（注1）」と言われたとの事を私は聞いた。
私がみ使いの許に行くと彼は座って礼拝しておられた。
私は私の手をみ使いの頭に置いた（注2）。
彼は「おおアブドッラー・ビン・アムルか、どうしたのか」と言われた。
私は「アッラーのみ使いよ、あなたは『男子の座っての礼拝は半分のものでしかない』と申された、と伺いました。
でもあなたは座って礼拝をされておられます」と言った。
み使いは「その通りである。だが、私はあなた方と同じではない（注3）」と申された。
（注1）正当の理由なく座って行われた礼拝には半分の報償しか得られぬ
（注2）手をみ使いの頭に置いた時は彼が礼拝を終えた後のことである。
人々が預言者と対面しようとする際にそのようにしたか、それは決して礼を失する行為ではないとされる
（注3）これには二つの考え方がある
一）これを預言者の特典とするものである。
彼は多くの時間を瞑想と礼拝についやしたこと。
またアッラーのみ使いとしての重大な責任を負ったことで、たとえ座ってそれを行ったとしても立って行った場合と同じ特別の扱いとなる、という考え方である
二）この時彼は既に老齢に達していたとする考え方であるが、前者の考え方に多くの学者は賛成している
このようなハディースは同一の伝承者経路を経てアブー・ヤヒヤー・アアラジュによって伝えられた。

夜の礼拝の数について

夜の礼拝と預言者がその時行ったラカートの数、そして一ラカートのウィトルの遵守（注）
（注）夜の礼拝はタハッジュドとキヤームル・ライルとされるが、一般にそれらは同一のものとみなされている。
しかし、厳密には若干の相違がある。
タハッジュドは就寝後、夜も大分ふけた頃に行われる“深夜の礼拝”である。
キヤームル・ライルはサラートル･ライルとも呼ばれ、眠ったら容易に目覚めぬ者、早朝の起床が困難な者、疲労からタハッジュドが行えぬ者のために、それらの代りとして推奨される夜間礼拝である
ウィトルの礼拝は奇数のラカートによるもので通常は三ラカートである
1巻　P.502-507

アーイシャは伝えている
み使いは夜、十一ラカートの礼拝をされておりましたが、その中には一ラカートによるウィトルが含まれました。
それが終りますと、彼はムアッジンが参りますまで体の右を下にして横たわられました。
それから（ムアッジンが参りますと）短い二ラカートをされました（注）。
（注）前述のようにウィトルは奇数のラカートによる礼拝で通常は三ラカートである。
しかし、このハディースにもあるように、それは一ラカートの場合もあり、時には五、七、九のラカートの時もある
預言者の妻アーイシャは述べている
み使いは人々が“アル・アタマ”と呼んでいるイシャーの礼拝から早朝の礼拝の間、一ラカートによるウィトルを含む、十一ラカートの礼拝をされておりました。
そして二ラカート終了する度に“汝の上に平安あれ”の挨拶を唱えておられました。
（夜明け近くになって）ムアッジンが早朝の礼拝への呼び掛けを唱え終りますと、御自身でも早朝の刻になったかどうかを確かめられました。
そして、ムアッジンが御側に参りますとお立ちになって短い二ラカートによる礼拝をされました
。
その後、ムアッジンがイカーマ（義務礼拝開始呼びかけ）の為に再び彼の所に参りますまで体の右側を下にして横たわっておられました。
同一の伝承者経路を経てイブン・シハーブによってもたらされたこの種のハディースにはイカーマについては述べられてはいない。
アーイシャは伝えている
アッラーのみ使いは夜間礼拝に十三ラカートを行っておられました。
それらの中の五ラカートはウィトルとしてのものです。
なお、み使いは最後の挨拶までお座りになりませんでした（注）。

（注）預言者の慣行の多くは二ラカート終了の度に挨拶を行うものであった。
しかし、このハディースでは二ラカート毎に挨拶を行わず、最後にそれを行ったことを示している。
なお、このハディースに預言者が十三ラカートの夜間礼拝を行ったとあるが、その中にはスンナの早朝礼拝二ラカートが含まれている
このハデイースは同一の伝承者経路を経てヒシャームによってもたらされた。
アーイシャは伝えている
み使いは夜間（スンナとしての）早朝礼拝二ラカートを含む十三ラカートの礼拝をされておりました（注）。
（注）早朝の二ラカートを除いた十一ラカートが夜の礼拝である。
さらにその中より、ウィトルが三ラカート、残りの八ラカートがナフルの礼拝となる
アブー・サラーマ・ビン・アブドル・ラフマーンはラマダーンの間、アッラーのみ使いの夜の礼拝がどのようであったかについてアーイシャに尋ねた
彼女は「み使いはラマダーンでも、また他の月でも十一ラカートより多くはなさいませんでした。
あのかたは（最初）四ラカート行われました。
その完璧さ長さなどについてはお尋ね下さいますな（注1）。
あのかたは再度四ラカート行われましたがその完璧さ長さなどについてはお尋ねにならないで下さい。
それからあのかたは三ラカート行われました」と言った。
続けてアーイシャは「私はあのかたに『み使い様、あなたはウィトルをなさいます前にお寝みになりますか』と申しました。
すると『アーイシャよ、私の両眼は眠っても私の心は眠らない（注2）』と申されました」
（注1）預言者の礼拝の完全無欠さは説明が困難ということ
（注2）アッラーのみ使いのような人の心は、たとえ眠っていても、心の認識は弱まることはないという。
ムハンマド以前の預言者達の心も皆同様であった
アブー・サラマはアッラーのみ使いの礼拝についてアーイシャに尋ねた
彼女は言った「み使いは（夜間）十三ラカート行っておられました。
あの御方は八ラカート行われてからウィトルをされ、それから二ラカートを座って行われました（注）。
あの御方が立礼を望まれるとお立ちになってそれを行われました。
そして、夜明けの礼拝への呼びかけと、（義務としての）早朝の礼拝開始を告げるイカーマとの間に二ラカートによる礼拝をされました」
（注）これは規則的な夜間礼拝ではないようである。
これを預言者が行ったのは稀であった。
つまり、この礼拝はウィトルの後にナフルを行っても良いということを人々に教える為である

アブー・サラマは伝えている
私はアッラーのみ使いの（夜間の）礼拝についてアーイシャに尋ねた。
このハディースは、“アッラーのみ使いがウィトルを含む九ラカートを行った”ということが今までのハディースと異なっている。
アブー・サラマは（次のように言ったと）伝えられている
私はアーイシャの所に行き「信者達の母よ、アッラーのみ使いの（夜間の）礼拝について告げて下さい」と言った。
彼女は「み使いのラマダーンとその他の月における（夜間の）礼拝は、早朝の（スンナの）二ラカートを含む十三ラカートでした」と言った。
アーイシャは伝えている
み使いの夜間の礼拝は十ラカートでした。
あの御方は一ラカートのウィトルと早朝のスンナの二ラカートもされましたので、全部で十三ラカートです。
アーイシャはアッラーのみ使い（の夜間の礼拝に）ついて（次のように）伝えている
み使いは夜は早くお寝みになり、夜も大分深まってから目を覚まされました。
そして、もし妻との交りを望まれたならば、それを終えられて（再び）眠られました。
そして、最初の祈りへの呼びかけを耳にすると、あの御方は飛び起きられました。
（アッラーに誓って、彼女は「あの御方は起床されました」とは言わなかった）そしてあの御方は水を御自身の上に（溢れるように）注がれました（注）。
（アッラーに誓って、彼女は「あの御方は身体を清められました」とは言わなかった。私は彼女の意味することを理解した）
そして、み使いが交りをされない場合は男性としてのウドゥー（小浄）だけで二ラカートの礼拝をされました。
（注）ここでは大浄（全身を洗い清めること）を意味する、これに対し一般のウドゥーを「小浄」と言っている
アーイシャは伝えている
み使いは夜間の礼拝を行われると、その最後にウィトルを行っておられました。
マスルークは伝えている
私はアーイシャにアッラーのみ使いが（最も喜ばれる）行為について尋ねた。
彼女は「み使いは継続的になされる（行為を）お好みでした」と言った。
私が「み使いは夜間、何時礼拝されましたか」と尋ねますと、「み使いは鶏が鳴くのを開かれると起床して、礼拝されました」と彼女は答えた。
私は夜明けの直前にみ使いが私の家の中、または私の近くで、必ず、お寝みになっているのを見ております（注）。
（注）預言者は深夜に礼拝を含む信仰の務めに多くの時間をついやしていた。
故にその疲労から早朝の礼拝に起床する前、つまり明け方近くはいつも眠っていたという
アーイシャは伝えている

み使いは夜明けの礼拝二ラカートを終えられた時、もし私が目覚めていれば私に話しかけられましたが、そうでない時はお体を横たえられておりました。
このハディースはアーイシャによって伝えられたが、他の伝承者経路でも伝わっている。
アーイシャは伝えている
み使いは常々、夜間礼拝をされておりましたが、あの御方がウィトルを行われる時、私に、「アーイシャよ起きなさい。そして、ウィトルを捧げなさい」と申されました（注）。
（注）このハディースはウィトルの礼拝がタハッジュドのような随意のものではなく、強制的なものである事を示すものとされている
アーイシャは伝えている
み使いは常々、夜間礼拝されておりましたが、その前で私は寝ておりました。
そして、ウィトルの礼拝が未だ済まないうちにあの御方は私を起されました。
こうして私はウィトルを済ませました。
アーイシャは伝えている
み使いは毎晩ウィトルをされておりました。
そして、あの御方のウィトルは早朝までには終りました。
マスルークはアーイシャを根拠として伝えている
彼女は「み使いは毎晩、宵の口、真夜中、夜明け方の（いずれの時間にも）ウィトルをされました。
そして、あの御方のウィトルは早朝までには終りました」と言った（注）。
（注）ハディースにあるようにウィトルは夜の何時に行われてもよいが、必ず実行されねばならない。
なお、ここでの早朝とは、早朝の礼拝の前を意図する
アーイシャは伝えている
み使いは毎晩ウィトルを行われておりましたが、それは早朝までには終りました。

病人などの夜の礼拝について

夜の礼拝と眠ったら容易に覚めぬ者、病人の場合についての包括的な事柄
1巻　P.507-512

サアド（注1）・ビン・ヒシャーム・アーミルはアッラーへの御奉公のために遠征に参加することを望んだ。
そこで彼はマディーナに来て、そこにあった彼の所有地を売却し、それで武具や馬を購入し、一命を投げうってローマ（ビザンティン帝国）と戦うことを決意した。
マディーナに着くと、彼はその地の人々に会って（いろいろと尋ねた）。
人々は彼に（一度決めた）決心をひるがえすよう忠告した。
そして、彼に「六人の男達のグループが預言者の在世中に（あなたと同様のことを）決心したが、み使いは彼等がそうするのを止められ、『あなた方は私の（これまでの生き方の）中に手本とするものがないのですか』と申された（注2）」と告げた。
この話を聞いたサアド・ビン・ヒシャームは彼の妻の許に帰って行った。
（これより先）彼は（アッラーへの御奉公のため命を捧げる決心をした際）離婚してしまっていたが、復縁を願って（人々を）証人に立てた。
その後、彼はイブン・アッバースの許に来てアッラーのみ使いのウィトルについて尋ねた。
イブン・アッバースは「アッラーのみ使いのウィトルについてこの世で最もくわしいお方を、是非あなたにおしえよう」と言った。
サアドは「それは誰ですか」と言った。
イブン・アッバースは「それはアーイシャである」と言った。
そして、「そういうわけで彼女の所に行ってお尋ねなさい。その後で再び私の所に来て彼女があなたに話した事を告げなさい」と言った。
私は先ずハキーム・ビン・アフラフの許に行って私を彼女の所に連れて行くよう頼んだ。
すると、彼は「私は彼女の所へは行きたくないのだ。というのも私は彼女に二グループ（かたやアリー、かたやムアーウィヤを支持するそれぞれのグループ）の間の（闘争について）口を出さないよう求めたのに、彼女は（私の忠告を）拒否して（その争いに）加わったのだ」と言った。
私は彼に「後生だから」と彼女の許に案内するよう懇願した。
（彼は私の願いを聞いてくれて）連れだってアーイシャの所に行き彼女に面会を求めた。
彼女はそれに応じてくれた。
そこで、われわれは彼女の居所に入って行った。
彼女は彼に「あなたはハキームですね」と申しました。
（彼女は彼が誰であるかわかったのです）
彼は「はい、そうです」と言った。
彼女は「あなたと御一緒の方はどなたですか」と申しました。
彼が「サアド・ビン・ヒシャームです」と言うと、「どちらのヒシャームですか」と彼女は申し

ました。
彼が「イブン・アーミルです」と言うと（彼女は理解した）。
そして、彼女は「彼（私の祖父アーミル）に、“アッラーのお恵みあれ”」と祈りました。
それから彼女は私の祖父の立派な業蹟を話しました。
（カターダは、彼はウフドの戦で殉教したと言った）
私は「信者達の母よ、私にアッラーのみ使いの徳性について話して下さい」と言った。
彼女は「あなたはクルアーンをお読みにならないのですか」と申しました。
私は「確かに読んでおります」と言った。
彼女は「み使いの徳性はクルアーンに明らかにされております」と申しました。
サアドは「私は、その時、そこを立って、生涯、もう誰にも何も尋ねまい、というような気持であった。
しかし、私は考えなおして「アッラーのみ使いの（夜間の）礼拝についてお話し下さい」と言った（注3）。
彼女は「あなたは『衣を纏う者章』（クルアーン第73章）をお読みになってはいないのですか」と申しました。
私は「読みました」と言った。
彼女は「アッラーはこの章の初めに夜の礼拝の励行を（義務として）お命じになりました。
それで、み使いやその御方の親友達は一年間（夜の礼拝を）実行なさいました。
その時、アッラーは天界にて十二ヶ月間、その章の終結の啓示を遅らせになられたのです。
そして、その章の終結時にそれを緩和されて夜の礼拝は義務から随意のものに変ったのです」と申された。
私は「信者達の母よ、私に、アッラーのみ使いのウィトルについてお話し下さい」と言った。
彼女は「私はみ使いのためにスィワーク（歯を磨くための芳香をもつ植物の小枝）と沐浴の水を常々用意致しました。
アッラーがみ使いの起床を望まれた刻にあの御方は起床されました。
そして、スィワークを使用され、沐浴もすまされてから、九ラカートの礼拝をされましたが八番目のラカート以外にはお座りになりませんでした。
その時、み使いはアッラーの御名を唱えられ、讃美され、そして祈願されておりました。
それから（礼拝の最後に唱える）挨拶の言葉を唱えずにお立ちになって、九番目のラカートをされました。
その後、再び座られてアッラーの御名を唱えられ、讃美され、祈願されてから私達に聞える（礼拝終了後の）挨拶をされました。
その挨拶の後、み使いは座って二ラカート行われました。
それで、その礼拝は十一ラカートになります。
おお、わが息子よ（サアドに対して）、しかしながら、み使いがお年を召され（お体に）肉もお付きになった時、あのかたは七ラカートのウィトルをされました。
その後、以前もそうであったように二ラカートを行われました。

（すなわち）それは九ラカートになります。
おお、わが息子よ、み使いは（夜の）礼拝をされる時は、それが継続的に行われるのを好まれました。
彼が眠ってしまったり、体のどこか痛んで夜の礼拝がお出来にならなかった時は、昼の間に十二ラカートを行っておられました（注4）。
なお、私はみ使いが一晩にクルアーンを全部お読みになったこと、また、早朝まで夜を通して礼拝されたこと、そして、ラマダーン以外の一ヶ月を完全に断食されたこと等については承知しておりません」と申しました。
彼（サアド）は「私は、それからイブン・アッバースの所に行って（彼女から聞いた）そのハディースを伝えた。
すると彼は『彼女は真実を話した。もし私が彼女の近くに居たか、あるいは彼女の所へ行っていたら、彼女から直接に聞けたであろうに』と言った」と述べた。
なおサアドは「もし私が、あなたが彼女の所に行かないのを知っていたなら、彼女の話をあなたには伝えなかったのに（注5）」と言った。
（注1）ハディースにも述べられているように、彼（サアド）はウフドの戦で殉教した教友の孫である。
彼は最も信頼のおける伝承者の一人として知られている。
彼が伝えたハディースにはアーイシャやイブン・ウマルからのものが多い
（注2）預言者の生活は一途な宗教的献身ではあったが、健全な社会活動にも忙殺されることが多かった。
彼は教友達に生活の楽しみを放棄するようなことは決して勧めなかった。
もちろん、それは道徳上のけじめをもった健全な楽しみ方である
（注3）ここではクルアーンの十分な理解にハディースの必要性を暗示している。
クルアーンは人々を正道に導くための教えを包括的かつ簡潔に述べた聖なる教典である。
しかるにわれわれがクルアーンの教えの詳細な実践を知るにはハディースを研究しなければならない。
ここにこのハディースの伝承者が考えを変えた理由がある
（注4）これはタハッジュドの償いについての指針を示している。
タハッジュドを常に行っている者がそれをしなかった時大へんな損失として受け取る。
その償いのため、日中、義務以外の礼拝として十二ラカートを行うことが認められている。
これを行うのは正午の礼拝の後である
（注5）イブン・アッバースも有名な伝承者の一人であるが、ここでは彼が進んでアーイシャの許に行って彼女から有益な話を聞こうとしない態度を非難している
ズラーラ・ビン・アウファーは、サアド・ビン・ヒシャームは彼の妻を離婚し彼の所有地を売るためにマディーナに赴いた、と言った。
この後のハディースについては前述と同様である。
サアド・ビン・ヒシャームは伝えている

私はアブドッラー・ビン・アッバースの許に行き、彼にウィトルの礼拝について尋ねた。
そこで起った出来事は前述の通りであるが、アーイシャの所に行くと彼女は私に「どちらの
ヒシャームですか」と申しました。
私が「アーミルの息子です」と言いますと「アーミルは何とすばらしい人だったのでしょう。彼はウフドの戦で殉教致しました」と彼女は申しました、という部分に相違がある。
ズラーラ・ビン・アウファーは伝えている
サアド・ビン・ヒシャームは彼の隣人であった。
そしてサアドは妻を離婚したことをズラーラに告げた。
ズラーラはサアドの話を伝えている。
その中に、彼女（アーイシャ）は「どちらのヒシャームですか」と申しました。
彼は「アーミルの息子です」と言った。
彼女は「彼は何とすばらしい人だったのでしょう。彼はウフドの戦にみ使いに従って出陣し殉教しました」
また、ハキーム・ビン・アフラフは（サアドの言葉として）「もし私（サアド）が、あなたがアーイシャの許に行って（進んで尋ねないのを）知っていたなら、彼女の話をあなたに告げるのではなかったのに」と言っていた事を伝えている。
アーイシャは伝えている
み使いは（肉体的）苦痛その他で夜の礼拝をしなかった時は昼の問に十二ラカートの礼拝をされておりました。
アーイシャは伝えている
み使いはどんな事でも行うことを決められた以上はそれを継続してされました。
そして、彼が夜眠ってしまわれたか、または病気になられた時は、昼の間に十二ラカートの礼拝をされておりました。
私はみ使いが朝まで夜通し祈られていたこと、また、ラマダーン以外の一ヶ月を通して断食されたことは知りません。
ウマル・ビン・ハッターブは伝えている
アッラーのみ使いは「眠ってしまってクルアーンの章、またはその一部の読唱をしなかった者が、早朝の礼拝と正午の礼拝の間にそれを読めば、それはちょうど彼が夜それを読んだのと同様に（アッラーの許に）記録されるであろう」と申された。

熱暑の時刻の礼拝について

強い罪悪感で苦悩する人達は、子らくだの脚が砂の熱で焼きつくような熱さを感ずる刻に礼拝する
1巻　P.512

ザイド・ビン・アルカムは人々が午前（の暑くなってしまった刻に）礼拝しているのを見て
「彼等は、礼拝はこのような刻を外した方が良いのを知っているであろうに。
アッラーのみ使いは『強い罪悪感で苦悩する人達は子らくだの仰が焼きつくような熱を感ずる刻に行う（注）』と言われた」と言った。
（注）子らくだの脚が焼きつくような熱さというのは日も高くなって一日のほぼ四分の一が過ぎた頃で、人々は休息に入る頃である
ザイド・ビン・アルカムは伝えている
アッラーのみ使いはクバーウの人々が礼拝している所へ行かれた。
そして「強い罪悪感で苦悩している人達は、らくだの子の脚が砂の熱で焼きつくような熱さを感ずる刻に行う」と言われた。

夜の礼拝とウィトルについて

夜の随意の礼拝は対（ニラカートずつ）で行われる。
そして、ウィトルはその礼拝の最後の一ラカートである。
1巻　P.512-516

イブン・ウマルは伝えている
一人の男がアッラーのみ使いに夜の随意の礼拝について尋ねた。
み使いは「夜の随意の礼拝は対（ニラカートずつ）で行われる。
だが、もしあなた方の誰かが早朝の近いことを心配する時（注）は奇数の一ラカートを行うべきである」と言われた。
（注）早朝の義務の礼拝の時間に入ってしまうのを懸念する場合
サーリム・ビン・アブドッラー（ウマル・ビン・ハッターブの孫）は彼の父を根拠とし伝えている
一人の男がアッラーのみ使いに夜の随意の礼拝について尋ねた。
み使いは「それは対（二ラカートずつ）で行われる。しかし、礼拝者が朝になってしまうのを心配する時は一ラカートの奇数の礼拝を行うべきである」と言われた。
アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている
一人の男が立って「アッラーのみ使いよ、夜の（随意の）礼拝はどのように行えばよいのですか」と尋ねた。
み使いは「夜の（随意の）礼拝は対（二ラカートずつ）で行われる。しかし、もしあなたが夜明けになるのを懸念した時は一ラカートによる奇数で行うべきである」と言われた。
アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている
一人の男がアッラーのみ使いに尋ねた時、私はみ使いとその男の間にいた。
彼は「アッラーのみ使いよ、夜の礼拝はどのように行えばよいのですか」と尋ねた。
み使いは「それは対（二ラカートずつ）のものである。
しかし、もしあなたが夜明けになるのを懸念した時は一ラカートを行い、あなたの最後の礼拝をウィトルのように（注）しなさい」と言われた。
それから（しばらくの後）、み使いのごくお側にいた一人の男がみ使いに尋ねた。
私は（その時も）み使いの近くにいたが、その男が前に尋ねた人物と同一人であったかどうかについては知らない。
その時もアッラのみ使いは同様の答をしておられた。
（注）これはウィトルの礼拝ではない。
明け方近くになって礼拝の時間がなくなることを懸念して二ラカートであるべきものを一ラカートに短縮したためウィトルのような形となったと考えるべきものである
このハディースはイブン・ウマルによって別の伝承者経路でも伝わっている。
しかし、次の言葉“それから一人の男がアッラーのみ使いに尋ねた”云々については述べられてはい

ない。
イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは「早朝（の礼拝）前はウィトルを急ぐがよい」と申された。
イブン・ウマルは「夜の随意の礼拝を行った者は、最後の礼拝をウィトルのようにすべきである
。
アッラーのみ使いはこれを命じておられた」と言った。
イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは「あなた方の夜の礼拝の最後はウィトルとするがよい」と申された。
ナーフィウは伝えている
イブン・ウマルは
「夜の礼拝を行った者は、早朝前には最後の礼拝をウィトルとすべきである。
アッラーのみ使いはそのように命じておられた」と言っていた。
イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは「ウィトルは夜の（随意の）礼拝の最後の一ラカートである」と申され
た（注）。
（注）ウィトルのラカートの数は前述したように奇数で三ラカートが一般的である。
しかし、それはそれだけで行われるものではなく夜の随意礼拝の最後の二ラカートの礼拝と一緒
に行われる
イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは「ウィトルは夜の礼拝の最後の一ラカートである」と申された。
アブー・ミジュラズは伝えている
私はイブン・アッバースにウィトルの礼拝について尋ねた。
彼は「私はアッラーのみ使いが『それは夜の礼拝の最後の一ラカートである』と言われるのを聞
いた」と言った。
また、イブン・ウマルに尋ねた。
するとアッラーのみ使いが「それは夜の礼拝の最後の一ラカートである」と言われるのを聞いた
とイブン・ウマルは答えた。
イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いがモスクに居られた時、一人の男がみ使いに大きな声で「アッラーのみ使いよ
、私が夜の礼拝のラカートを奇数にするにはどうすればよいのでしょう」と言った。
み使いは「（夜の）礼拝を行う者はそれを対（二ラカートずつ）で行わねばならぬ。
しかし、もしその者が早朝の刻が来てしまうと懸念したなら、彼は一ラカートを行うべきである
。
そうすればその者のラカートの数は奇数となる」と言われた。
伝承者の一人はこのハディースはウバイドッラー・ビン・アブドッラーが言ったものでイブン・
ウマルが言ったものではないと伝えている。
アナス・ビン・シーリーンは伝えている

私はイブン・ウマルに早朝の義務の礼拝の前に行う二ラカートの中では、クルアーンの読唱を長く行うのかどうか、預言者の慣行について話してくれるよう求めた。
彼は「アッラーのみ使いは夜の礼拝を対で行っておられた。そして最後に一ラカートを行われてその数を奇数にされていた」と言った。
私は「私があなたにお尋ねしているのはそういう事ではない」と言った。
彼は「あなたはまことに巨大なお方（注1）である。
あなたは私があなたにそのハディースを完全にお話ししようとしているのに辛抱出来ないのですか。
アッラーのみ使いは夜の礼拝を対で行われていた。
それから一ラカートを行われてその数を奇数にされていた。
それからみ使いは早朝の義務の礼拝が開始されるほんの少し前にスンナとしての二ラカートを行っておられた（注2）」
（ハラフの伝承には“その礼拝”と言及していない）。
（注1）“あなたはまことに巨大なお方である”は相手の愚鈍さ、無礼さを暗に知らしめる表現であり、人の話を最後まで聞かずに途中で口をはさむ人に多く言われる
（注2）預言者はスンナとしての夜明けの礼拝を早朝の義務の礼拝が始まる数分前に行っていた。従ってそれはかなり短いものであったと考えられる
アナス・ビン・シーリーンは伝えている
私はイブン・ウマルに（前述のハディースにあるような）質問をした。
彼は（前述のものに）加えて次のようなことも言った。
それには「み使いは夜の礼拝の最後を一ラカートにして奇数にされていた」また「やめよ、やめよ、あなたはまことに巨大な御方である」等がある。
イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは「夜の礼拝は対で行われる。そして、あなたが夜明けが近付いたのを知ったら、その数を一ラカートによる奇数にせよ」と言われた。
するとイブン・ウマルは「対とは何ですか」と尋ねた。
み使いは「それは各二ラカートの後で（あなた方の上に平安あれ）の挨拶を唱えることである」と申された。
アブー・サイード（フドリー）は伝えている
アッラーのみ使いは「ウィトルの礼拝は朝になる前に挙行せよ」と言われた。
アブー・サイードは「アッラーのみ使いの教友の幾人かがみ使いにウィトルについて尋ねた。すると『ウィトルは朝になる前に挙行せよ』と言われた」と言った。

宵口と明け方のウィトルについて

明け方近くの起床が困難なのを懸念する者は宵の口にウィトルを済ます
1巻　P.516

ジャービルは伝えている アッラーのみ使いは「明け方近くの起床が困難なのを懸念する者は、宵の口にウィトルを済ませよ。そして、明け方近くに起床しその刻のウィトルを切望する者はそれを挙行せよ。明け方近くの礼拝は（慈悲の）天使が見ている。それはより好ましいことである」と申された。（アブー・ムアーウィヤは「天使が訪れる」と言った）ジャービルは伝えている アッラーのみ使いは「あなた方の中で明け方近くの起床が困難なことを懸念する者は、宵の口にウィトルを済ませよ。それから休むがよい。明け方近く起床し礼拝の挙行に確信のある者はその刻に挙行せよ。明け方近くの読唱には（天使が）訪れる。それはすばらしいことである」と言われた。

長い立礼について

長い立礼が望ましい
1巻　P.516-517

ジャービルは伝えている
アッラーのみ使いは「最も良い礼拝は立ったまゝの時間が長く続くものである」と言われた（注）。
（注）アブー・ハニーファとシャーフィーは立ったまゝの礼拝は脆拝を行うより良いとしている。
これには昼夜の区別はない
ジャービルは伝えている
アッラーのみ使いはどのような礼拝が最も良いのかについて尋ねられた。
み使いは「それは立ったまゝの礼拝の時間が長く継続するものである」と言われた。
このハディースは別の伝承者経路でも伝わっている。

夜間の祈願について

夜間の祈願は受け入れられる
1巻　P.517

ジャービルは「アッラーのみ使いが『夜間には、ムスリムがアッラーに現世や来世の幸福を祈願すれば、主も必ずそれをお聞きとどけ下さる時がある。それは毎夜である』と言われるのを聞いた」と言った。
ジャービルは伝えている
アッラーのみ使いは「夜間に、アッラーの下僕たるムスリムが現世、来世の幸福を祈願すれば、主は必ずそれをお聞き下さる時がある」と言われた（注）。
（注）アッラーへの祈願はいつかは必ず叶えられる。
祈願する者は叶えられるとはいっても私利私欲からの願いも叶えられるというのではない

明け方近くの請願について

明け方近くの請願には（特に）主のお応えがある
1巻　P.517-519

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは、「われらの主は毎夜、未だその三分の一が残っている頃に（天界から）下界の空まで降臨される。
そして　『われは、われに祈願する者には応えるであろう。われに求める者には与えるであろう。われに許しを請う者には許すであろう』と仰せになる」と申された。
アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは「主は毎夜その三分の一が過ぎた頃に（天界から）下界の空まで降臨される。
そして『われは至高の王者である。
われは至高の王者である。
われに祈願する者は誰か。
われはその者に応えるであろう。
われに求むる者は誰か。
われはその者に与えるであろう。
われに許しを請う者は誰か。
われはその者を許すであろう』主は夜が明けるまでこのように仰せになっている」と申された（注）。
（注）以上の二つのハディースでは主の降臨時間が異なっている。
これは、夜半を中心とした数時間は常にそうあるということである。
また、“下界の望まで降臨される”にはいろいろの見解がある。
一）主自らが降臨される。
二）主の慈悲と恩寵である。
三）主の命をおびた天使である、などである。
ここで間違えてはならないのは、主はこの時間にのみ祈願に応えられるというのではない、ということである。
常に慈悲あふれる主は夜のその時間には、より慈悲深くなられ、その別に主のため甘い眠りを捨てて起床し祈願する者に、ひとしおの慈悲と恩寵を垂れ給う、というのである
アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは「主は夜、その半分、または三分の二が経過する頃（天界から）下界の空まで降臨される。
そして『与えられるよう願っている者はあるか。応えを求めて祈願する者はあるか。許されるよう請い願っている者はあるか』と朝が来るまで仰せ続けられる」と言われた。

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは「主は夜、その半分、または三分の二が経過する頃（天界から）下界の空までご降臨される。
そして、『われに祈願する者には応えるであろう。
または、われに求める者には与えるであろう。
それから、貸しをする者（の相手は）貧しくもなく暴君でもない（注）と申された』」と言われた。
（注）“貸しをする者”とは善行をなす信者である。
（その相手は）“貧しくもなく暴君でもない”とは主のことである。
主は御自身を借りる者の立場におかれた。
貧しい人は借金をしてもその返済手段をもたないであろう。
また、暴君はたとえ返済手段はあっても、それを実行しないかも知れない。
主は万有の所有者であり、慈悲深き御方である。
それ故、善行を為す者はその行為に見合う報酬が必ず約束される
このハディースは同一の伝承者経路を経て、次のハディースも付加されてサアド・ビン・サイードによって伝えられた
「それから主は『貸しをする者（の柏手は）貧しくもなく暴君でもない』と仰せられてその両手を広げられる（注）」
（注）“両手を広げられる”は主の御慈悲や恩寵があまねくゆきわたるの意
アブー・サイードとアブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは「主は夜になってその三分の一が過ぎるまでお待ちになられて下界の空まで降臨される。
そして『許しを請い願っている者はあるか。悔い改めている者はあるか。慈悲と恩寵を求めている者はあるか。そして（それらすべてのため）祈願している者はあるか』と朝になるまで仰せ続けられる」と言われた。
このハディースは別の伝承者経路を経てもたらされている。

タラウィーフ礼拝について

ラマダーン月におけるタラウィーフ（注）礼拝の勧め
（注）この礼拝はラマダーン月の斎戒中に毎晩イシャーの礼拝後二十ラカート捧げるものである
1巻　P.519-521

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは「ラマダーンに夜間、信仰（と善行）に対する報償を求めて礼拝を行う者はその者の過去の罪科は許されるであろう」と申された。
アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは（彼の親友達に）タラウィーフの礼拝をお命じにはならなかったが、ラマダーン（の夜）に義務のようにそれを行うよう勧めてきた。
そして、「ラマダーンに信仰（と善行）に対する報償のために、夜間礼拝を行う者はその者の過去の罪科は許されるであろう」と言われた。
アッラーのみ使いが亡くなられてもこれは実行された（注）。
それはカリフ・アブー・バクルの時や、ウマルの初期の時代まで続いた。
（注）人々はこの礼拝を多くは個人的に家庭で、または小人数のグループで行った。
これはアブー・バクルの時代、ウマルの初期の時代まで続いたが、ウマルの時代に国内が安定すると、かつて預言者が行われたことのある三日だけ集合して行うようになった
アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは「ラマダーンに信仰と報償のため断食を行う者は過去のすべての罪科が許される。
そして、ライラトル・カドル（注）に信仰と報償のために礼拝を行う者は過去のすべての罪科が許される」と言われた。
（注）ライラトル・カドルはラマダーンの二十六日から二十七日にかけての夜であり、クルアーンが啓示された夜であった
アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは「ライラトル・カドルに礼拝を捧げる者はそれがその夜であることを認識するであろう」と言われた。
（その意味について）私はみ使いが「それを信仰と報償のために行う者は、その者の（過去の）罪科が許される」と言われた（のと同じである）と確信する。
アーイシャは伝えている
み使いはある夜モスクで礼拝され、人々もその御方と一緒に礼拝しました。
み使いは次の夜も礼拝されました。
そこには大勢の人々が集まりました。
それから三日目、あるいは四日日の夜もそこには大勢の人々が集まりました。
しかし、アッラーのみ使いはその両日には（タラウィーフの礼拝を先導するために）彼等の所へ

は出て行かれませんでした。
朝になってみ使いは「私はあなた方が大勢集まったのを知っていた。それで、私はあなた方の所に出て行くにやぶさかではなかったが思い止まった。
それはこの礼拝があなた方にとって義務となってしまうのを恐れたからである」と言われた。
（伝承者は）「それはラマダーンの月であった」と言った。
アーイシャは伝えている
み使いは夜間モスクに行って礼拝されました。
（その時）若干の人々が彼と一緒に礼拝しました。
朝になって、その人達はその事を人々に話しました。
そうしますと、次の日はもっと多くの人々が集まりました。
二日日の夜も、み使いは出て行かれました。
そして、そこに参集した人々は、その御方と一緒に礼拝しました。
朝になると、人々はその事について語り始めました。
そうしますと、三日日の夜は人々でモスクは埋まりました。
（この時は）み使いは出て行かれました。
そして、人々はその御方と一緒に礼拝しました。
四日日の夜になりますと、モスクは身動きの不自由なくらい（人々が）集まりました。
しかし、み使いは（そこには）出て行かれませんでした。
人々の中の幾人かが突然“礼拝”と叫びました。
でも、み使いは早朝の礼拝（の刻）までお出にはなりませんでした。
その御方が早朝の礼拝を完全に済まされた時、お顔を人々の方に向けて「私は、〃アッラーの他に神はない”と証言し、そして、“ムハンマドこそはアッラーのみ使いなり”と証言すると誓われてから、私はあなた方の夜の事は良く知っていた。
だが（私の継続的な礼拝で）あの夜の礼拝があなた方にとって義務と化し、（あげくには）あなた方にとって実行が困難なものとなるのを恐れたのだ」と言われた。
ズィッル・ビン・フバイシュは伝えている
私は、ウバイユ・ビン・カアブが「アブドッラー・ビン・マスウードは『一年を通して（毎夜）礼拝の為に起床する者はライラトル・カドルに出合う』と言った」と話しているのを聞いた。
ウバイユは「アッラー以外に神はない。
そのアッラーに誓って、それ（ライラトル・カドル）はラマダーン月にある。
（彼は絶対的な誓いをして）私はアッラーに誓い、その夜を知っている。
それはアッラーのみ使いがわれわれに礼拝をお命じになった夜である。
それは二十七日の朝を迎える夜である。
その徴候は、その日の太陽が毫光のない輝きで昇ってくる」と言った。
ウバイユ・ビン・カアブは伝えている
「アッラーに誓い、私はライラトル・カドルに関して知っている。
私はそれが（ラマダーン月の）二十七日の夜で、アッラーのみ使いがわれわれに礼拝の挙行をお

命じになったその夜であることを熟知している」
だがシュウバ（伝承者の一人）は“アッラーの御使いがわれわれに礼拝の挙行をお命じになったその夜”という言葉について疑った。
この事は私の友人が私に話してくれた。
シュウバはこのハディースが同一の伝承者経路をもっていると伝えてはいるが、彼が疑った事、またその後のことについては言及していない。

夜の礼拝における祈願について

夜の礼拝における祈願
1巻　P.522-532

イブン・アッバースは伝えている
私はある夜、私の母の姉妹であるおば（マイムーナ）の許で一夜を過した。
アッラーのみ使いは、夜間起床されて用をたされた。
それからお顔と両手を洗われて（また）お休みになった。
その後、そのかたは再び起床されて水の入った皮袋の所へ行かれ、その草ひもをゆるめて、二つの沐浴の間のウドゥーされた（注1）。
（その時）そのかたは水を無駄にすることなく、定められた部分を清められ、お立ちになって礼拝された。
私もまた、み使いがされることを知っていながら眠っているふりをしている、ということを彼に気付かれるのを恐れて（ちょうど今眠から覚めたようなふりをして）体を伸ばした。
そして、私も沐浴をして礼拝のために立った。
それはそのかたの左側であった。
すると、そのかたは私の手を掴んで御自身の右側へまわして立たせられた。
それからみ使いは、夜の礼拝十三ラカートを行われた。
その後、そのかたは横たわられて休まれるといびきをかいておられた。
（それはみ使いがお休みになっている時の習癖であった）
やがて、ビラールが来てみ使いに礼拝の時刻を告げると、そのかたは礼拝のためにお立ちになられたが沐浴はされなかった（注2）。
その時の彼の祈願の言葉の中には「おおアッラー、私の心に光を、私の視覚に光を、私の聴覚に光を、私の右に光を、私の左に光を、私の上に光を、私の前に光を、私の後に光をお置き下さい。そして、私のために光を強力にして下さい」というのがあった。
クライブ（伝承者）は「（更に）七つ（の言葉）が私の心にはあるが、それらを思い出すことが出来ない。
私はアッバースの幾人かの子供達に会った。
彼等は私にそれらの言葉を言った。
（すなわち）私の神経に（光を）、私の肉に（光を）、私の血に（光を）、私の毛に（光を）、私の皮膚に（光を）という言葉を述べた他に、更に二つの言葉を述べていた」と言った（注3）。
（注1）二つの沐浴の間のウドゥーは、二つの両極端のウドゥー、つまり、非常にていねいなもの、辛うじて認められるものとの間
（注2）前述したが、預言者の眠りは目は眠っていても心はそうではないといわれる。
それは、彼が眠っている間でも啓示は下るからである。
アッラーは預言者の心が常にその命を受けられるよう用意させておかれた。

故に、預言者はたとえ眠っても彼自身のことは十分知っているのである
（注3）更に二つのものは「私の魂に光を、私の舌に光を」である
イブン・アッバースのマウラー、クライブは伝えている
イブン・アッバースは彼に（次のように）話した。
イブン・アッバースは一夜、信者達の母で彼の母の姉妹であるマイムーナの家で過した。
彼は「私たちは（一つの細長い枕を共用し）私は横の狭い部分を使用してその方向に、み使い御夫婦は縦の方向に並んで休まれた。
そのかたは眠られて、真夜中かあるいはその少し前、あるいはその少し後に起床された。
そして、眠りを覚ますために両手で顔をこすり始められた。
それからイムラーン家章の結びの十節を読唱された。
その後、み使いは立って皮の水袋が掛かっている所に行き、ていねいに沐浴された。
そして、お立ちになって礼拝を行われた」と言った。
イブン・アッバースは「私は起きてアッラーのみ使いがされたようにした。
そして、そのかたの所に行きその側に立った。
み使いは彼の右手を私の頭の上に置かれてから、私の右の耳を掴んでよじられた（注）。
それからみ使いは二ラカート、次に二ラカート、次に二ラカート、次も二ラカート、更に二ラカート、更に二ラカートをされ、最後に（ウィトル）の一ラカートを行われた。
その後、彼は横たわられた。
（早朝近くなって）彼はお立ちになって短い二ラカートを行われてから出て行き、早朝の礼拝を捧げられた。
（注）はっきりと目を覚まさせるための行為
マハラマ・ビン・スライマーンはこれに次のハディースを付加している
「み使いはそれから水袋の所へ行き、歯を磨かれた。
そして、ていねいに沐浴を行われたが、水の使用はむしろ少な目であった。
それから、そのかたは私を起された。私は立った」
残余のハディースは前述のものと同一である。
イブン・アッバースは伝えている
私は（一夜）預言者の妻であるマイムーナの所に泊った。
アッラーのみ使いは、その夜は彼女と一緒に過された。
み使いは（夜半まで眠られた後起床され）沐浴された。
そしてお立ちになって礼拝された。
私も立ってそのかたの左側に立った。
み使いは私を掴まれてそのかたの右側に立たされた。
み使いはその夜十三ラカートの礼拝を捧げられた。
その後、み使いは眠られていびきをかかれた。
眠っている間そのかたがいびきをかかれるのは習癖であった。
それからムアッジンが彼のところへ（礼拝の刻を告げに）来た。

み使いは出て行って礼拝されたが、（その時は）沐浴はされなかった。
（アムルは「ブカイル・ビン・アシャッジュが私にこれを話した」と言った）
イブン・アッバースは伝えている
私は、一夜、私の母の姉妹でハーリスの娘、マイムーナの家に泊った。
私は彼女に「アッラーのみ使いが（夜）礼拝に起きられたら私も起こして下さい」と言った。
（彼女が私を起こしてくれた時）アッラーのみ使いは礼拝のためにお立ちになっていた。
私はみ使いの左側に立った。
するとそのかたは私の手を掴んで彼の右側に立たされた。
そして、私が完全に目を覚まし切れないでいる時は耳たぶを掴まれた。
彼（伝承者）は「み使いは十一ラカートを行われた。
それからそのかたは衣服を体に巻き両膝を抱えるようにして眠られたので、私は彼の眠っている時の寝息を聞かなかった。
そして夜が明けると、そのかたは（スンナの）短い二ラカートを行われた」と言った。
イブン・アッバースは伝えている
私は、夜、私の母方のおば、マイムーナの所に泊った。
アッラーのみ使いは夜、お起きになって近くに掛けられていた皮の水袋（の水）で短い沐浴をされた。
（預言者の沐浴の様子を）イブン・アッバースは「それは短時間に少量の水で行われた」と言った。
そして「私は立ってみ使いが行われたと同様のことを行った。
それから（み使いの所へ）行ってその左側に立った。
するとそのかたは私を彼の背後をまわして右側に立たされた。
み使いは礼拝を済ますと休まれていびきをおかきになった。
やがて、ビラールがそのかたに礼拝（の刻を）告げに来た。
み使いは出て行き早朝の礼拝をされたが（その時は）沐浴はされなかった」と言った。
スフヤーンは「これは預言者に限られた行為である。われわれには“預言者の目は眠っていても心は眠らない”ということが伝わっている」と言った。
イブン・アッバースは伝えている
私は一夜、私の母方のおばマイムーナの家に泊った。
そして、アッラーのみ使いが夜、どのように礼拝されるのかを観察した。
そのかたは起きて用をたされた。
それから、顔と手を洗いまた眠られた。
しばらくの後、再び起き上がられ皮の水袋のところに行って紐を解かれた。
そして少量の水を器にとり御自身の手に注がれた。
そしてそのかたは二つの沐浴の良い方を行われた。
それから礼拝のために立たれた。
私も（そのかたの所へ）行きその左側に立った。

するとみ使いは私を掴んで彼の右側に立たせられた。
み使いが行った礼拝は十三ラカートであった。
その後、み使いは休んでいびきをかかれた。
われわれはそのかたが眠った時はいびきをおかきになるのを知っていた。
（夜明けの礼拝の刻になると）彼は出て行き礼拝された。
み使いは（顔を上げて）祈る時、あるいはひれ伏して祈る時
「おゝアッラー、私の心に光を、私の聴覚に光を、私の視覚に光を、私の右に光を、私の左に光を、私の前に光を、私の後に光を、私の上に光をお置き下さい。
そして、私のために光をお与え下さい。
あるいは、私に光をお与え下さい」と申されていた。
サラマは「私はクライブに会った。彼はイブン・アッバースが（次のように）言った」と述べた
「私は私の母方のおばマイムーナの所に居た。
そこへアッラーのみ使いが来られた」
それからクライブはグンダルによって伝えられたハディースを述べた。
（すなわち）イブン・アッバースは疑いなく「私に光をお与え下さい」という言葉（の方）を言ったというものである。
アブー・リシュディーン（マウラー・クライブの異名）は伝えている
イブン・アッバースは「私は一夜、私の母の姉妹マイムーナの家で過した」と言った。
それから（前述のような）ハディースを話したが、彼は（預言者が）顔と両手を洗ったことについては述べなかった。
しかし、彼は「み使いは皮の水袋の所へ行って紐を解かれ、二つの沐浴の間のウドゥーを行われた。
それからベッドに戻って眠られた。
しばらくの後、そのかたは再度起床され水袋の所に行って紐を解き沐浴された。
それはまことにていねいなものであった。
そしてみ使いは『主よ、私にたくさんの光をお与え下さい』とは言われなかった」と言った。
クライブはイブン・アッバースがアッラーのみ使いの家で一夜を過し（次のように）言ったと伝えている
「アッラーのみ使いは皮の水袋の近くに立ち、水を注いで沐浴された。
その時の水の量は多くもなく少なくもなかった」
その後のハディースは他と同じであるが、その中にアッラーのみ使いがその夜、十九の祈願の言葉を述べたというのがある。
クライブは「私はそれらの中から十二の言葉を覚えているが残りは忘れた。
（その十二は）私の心に光を、私の舌に光を、私の聴覚に光を、私の視覚に光を、私の上に光を、私の下に光を、私の右に光を、私の左に光を、私の前に光を、私の後に光をお置き下さい、私の魂に光をお置き下さい。
そして、私のために光を強力にして下さい。である」と言った（注）。

（注）残りの七つの言葉は、私の神経に、私の肉に、私の血に、私の毛に、私の皮膚に光をお置き下さい、私に光をお創り下さい、私に光をお与え下さい、である
イブン・アッバースは伝えている
「私はアッラーのみ使いがおられる時、そのかたが夜の礼拝をどのようにされるのかを拝見するために、マイムーナの家で一夜を過した。
み使いは彼の妻としばらくの間話をされていて、それからお休みになった」
その後のハディースは他と同様であるが、その中に、「彼は起き上がって沐浴をし歯を磨かれた」というのがある。
アブドッラー・ビン・アッバースは伝えている
私は（一夜）アッラーのみ使いの家で過した。
み使いは起床すると歯を磨かれてから、「本当に天と地の創造、また夜と昼の交替の中には思慮ある者への印がある」（クルアーン第3章190節）と唱えられ、その章の最後まで読唱し続けられた。
それからそのかたは時間をおかけになって、直立、立礼、叩頭による二ラカートの礼拝を行われた。
それを終えるとお休みになっていびきをおかきになった。
み使いはそのようなことを三度行われたので合計六ラカートを捧げられたことになる。
彼は毎回、歯を磨き沐浴され（クルアーンの）それらの節を読唱された。
それからそのかたは三ラカートのウィトルを行われた（注）。
やがてムアッジンがアザーンを唱えると、み使いは「おおアッラー、私の心に光を、私の舌に光をお置き下さい。
私の聴覚に光をお置き下さい。
私の視覚に光をお置き下さい。私の後に光を、私の前に光をお置き下さい。
私の上に光を、私の下に光をお置き下さい。おゝ、アッラー、私に光を強力にして下さい」と申されながら礼拝に出て行かれた。
（注）イスラーム法学者、アブー・ハニーファがウィトルの礼拝は一二ラカートから成ると信ずるのは、このハディースに由来している
イブン・アッバースは伝えている
「私は一夜、私の母の姉妹、マイムーナの家で過した。
アッラーのみ使いは夜、ナフルの礼拝のために起床された。
み使いは皮の水袋の所にお立ちになって沐浴され、そして礼拝された。
私もそのかたがそのようにされるのを見た時起きた。
そして、水袋の水で沐浴を済ませてそのかたの左側に立った。
すると、彼は後方から私の手を掴み、御自身の背後をまわしてその右側に立たせられた」
私（アターウ・伝承者）は「それはナフルの礼拝でしたか」と尋ねた。
彼は「そうです」と答えた。
イブン・アッバースは伝えている

「私の父（アッバース）は預言者が私の母方のおばマイムーナの家にいた時、私をみ使いの所に行かせた。
私はその夜、み使いと一緒に過した。
そのかたは起きて夜の礼拝をされた。
そこで私は彼の左側に立った。そのかたは後方から私を掴み（彼の背後をまわして）御自身の右側に立たされた」
イブン・アッバースは伝えている
「私は一夜、私の母の姉妹、マイムーナの家で過した」
この後のハディースは他と同一である。
アブー・ジャムラは伝えている
私はイブン・アッバースが「アッラーのみ使いは夜（の礼拝に）十三ラカートを行っておられた」と言っているのを聞いた。
ザイド・ビン・ハーリド・ジュハニーは伝えている
私は夜、アッラーのみ使いの礼拝をたしかに見た。
そのかたは二ラカートの短い礼拝を行った。
それから二ラカートの長い長い礼拝を行った。
次にそのかたは二ラカートの礼拝を行ったが、それは前の二ラカートよりは短いものであった。
それから（また）二ラカートを行われたがそれは前の二ラカートより更に短いものであった。
それから（また）二ラカートを行われたが、それもその前の二ラカートより更に短いものであった。
そして（また）二ラカートを行われた。
それもその前の二ラカートより短いものであった。
次にそのかたは一ラカートの礼拝（ウィトル）をされた。それらは都合十三ラカートである（注）。
（注）これは預言者がテントで一夜を過した時の話である
ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
私はアッラーのみ使いと一緒に旅をした。
われわれが水のある所に来た時、み使いは「ジャービル、お前、（水の中に）入ってくれぬか」と言われた。
私は「はい」と答えた。
それからみ使いは（らくだから）降りられた。
私は水に入った。
その時、み使いは用をたしに行かれた。
私はみ使いに沐浴の水を用意した。
み使いは帰って来られると沐浴し、お立ちになって、一枚の布で出来た衣服の両端を交差させて肩にお掛けになって礼拝された。
私がそのかたの後に立つと私の耳を掴まれて御自身の右側に立たされた。

アーイシャは伝えている
み使いは夜、礼拝に立たれた時は、短い二ラカートの礼拝で始められました。
アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは「あなた方の誰でも、夜、起きた時は短い二ラカートで礼拝を始めるように」と言われた。
イブン・アッバースは伝えている
アッラーのみ使いは夜間、礼拝にお立ちになると「おおアッラー、栄光はあなたにございます。
あなたは天地の光です。
栄光はあなたにございます。
あなたは天地を創造され保護される御方です。
栄光はあなたにございます。
あなたは天と地とそれに存在するすべてのものの主です。
あなたは真理でございます。
あなたの約束は真実です。
あなたのお言葉は真実です。
あなたとの出合いは真実です。
天国は真実です。
地獄も真実です。
（復活の）その時も真実です。
おおアッラー、私はせつにあなたに服従いたします。
私は心よりあなたへの信仰を告白いたします。
私はひたすらあなたを頼りとしております。
私はあなたにざんげいたします。
私はあなたがお与え下さった証明によって（真理を否定する者すべてに）論駁しました。
あなたの御決定を仰ぎます。
そして、私がずっと以前に犯した罪、また最近犯したもの、公然と為したるもの、密かに行ったものをお許し下さい。
あなたは私の唯一至高の神でございます。
あなた以外に神はございません」と申しておられた。
このハディースはイブン・アッバースを根拠とし、二語程の相違をもって別の伝承者経路でも伝えられている。
それは、قيام qayyam（上述のハディースでは“支持者”の意を、ここではقيم qayyim“守護・監視者”として使用している。
また、預言者が「私が密かに行ったもの」と言っている言葉について、イブン・ウマイヤによって伝えられたハディースには若干の（言葉の）付加がある。
このハディースはイブン・アッバースを根拠として別の伝承者経路でも伝えられているが、その言葉は（上述のものと）ほとんど同じである。

アブドル・ラフマーン・ビン・アウフは伝えている
私は信者達の母アーイシャに預言者が夜、礼拝に立たれた時は、どのような言葉でそれを始められたのかについて尋ねた。
彼女は「み使いが夜（礼拝に）お立ちになった時は『おおアッラー、ガブリエル、ミカエル、そしてイスラーフィール（音楽の天使）の主、天と地の創造主、見えぬ（世界）、見える（世界）を知り給う御方、あなたはあなたの下僕らの行状を裁かれる御方。
どうか、（人々が）進む正しい道についての様々な意見の中で、あなたが適合と看なすもので私をお導き下さい。
あなたは必ずあなたが望まれる者を正しい道にお導きになられます』と申されました」と言った
。
アリー・ビン・アブー・ターリブは伝えている
アッラーのみ使いが夜、礼拝にお立ちになった時、彼は（次のように）言われた。
「私は天地創造の主に異教の念をもって対します。
私は多神教徒達の一人ではありません。
まことに、私の礼拝、献身、私の生と死は唯一無二の万有の主のものでございます。
私はムスリムの一人としてそのような（信仰の告白を）命じられました。
おおアッラー、あなたは王であり、あなた以外に神はございません。
あなたは私の主、私はあなたの下僕です。
私は私自身に過ちを犯しました（注）。
私は私の罪の告白をいたします。
どうか私のすべての罪をお許し下さい。
まことに、あなた以外に罪を許す者はございません。
どうか、私をこの上なき徳性の者にお導き下さい。
あなた以外に導く者はございません。
私から罪を払いのけて下さい。
あなた以外にそれの出来る者はありません。
私は常にあなたにお仕えいたします。
善、そのすべてはあなたによってもたらされるものであります。
そして、悪はあなたのせいではごぎいません。
私の能力はあなたの恩恵の賜であり、私はあなたにおすがりする者です。
あなたは讃美、賞揚される御方です。
私はあなたに許しを請い願います。
私はあなたにざんげいたします」
そして、み使いがひぎまずかれた時は「おおアッラー、私はあなたのために立札を捧げます。
私はひたすらあなたに服従いたします。
私は心よりあなたへの信仰を証言いたします。
そして、私の聴覚、視覚、脳髄、骨そして神経はあなたの御前に畏れ従っております」

そしてみ使いが頭を上げた時は「おおアッラー、われらの主、天は満ち地は満ち、その間に存在する空間も満たされました。
そしてその後、あなたの望まれたものはすべて、満たされました。
故に、栄光はあなたにございます」と申されました。
み使いが叩頭されました時は「おおアッラー、私がひれ伏しますのはあなたに対してでございます。
私は心よりあなたへの信仰を告白いたします。
私はひたすらあなたに服従いたします。
私の顔はそれを創造され形造られた御方の前にひれ伏しております。
そして、耳は聞き目は見守っております。
アッラー、この上なき創造主、彼は尊く高くおわします」と申されました。
そして最後に「アッラーの他に神はなし」という誓いの言葉と、
礼拝の最後に行う挨拶の間に
「おおアッラー、私が犯した古い罪過、また最近のもの、公然となせるもの、密かに行えるもの、そして私が制限を越えて行った行為もお許し下さい。
それについてあなたは私よりも良く御存知でございます。
あなたは（望まれる者を）上位につけられ、（また望まれる者を）下位に下げられます。
あなたを除いて神はございません」と言っておられました。
（注）預言者は決して意図的に罪は犯さない。
彼が過ちとしているのは、小さな省略やなおざりのようなものである
アアラジュは伝えている
アッラーのみ使いが礼拝を始められた時は
「アッラーフ・アクバル（アッラーは偉大なり）」を唱えられた後、
「私は私の顔を（あなたに）お向けしました。
私は最初のムスリムでございます」と言われた。
そのかたが立礼から頭を上げられた時「アッラーが彼（アッラー）を称えた者の言葉を聞こし召されますように。
おお、われらの主よ、栄光はあなたにございます」と言われた。
それから「主は（人間を）形造られました。その形状はなんとすばらしいことでありましょう」と言われた。
ここで彼（伝承者）は「み使いが（礼拝の終りの）挨拶を唱えられた時
『おおアッラー、私がずっと以前に犯した罪をお許し下さい』
から、このハディースの終りまでの言葉を言われた」と言った。
しかし、「それを“アッラーの他に神なし”と誓う言葉と礼拝の最後の挨拶の間に言われた」とは言わなかった。

夜の礼拝での読唱について

夜の礼拝での読唱は長い方が好ましい
1巻　P.532-533

フザイファは伝えている
私は一夜、アッラーのみ使いと礼拝を行った。
そのかたは初めに雌牛章（クルアーン第2章）を読まれた。
私は、み使いは100節読まれた後に立礼されるのではないかと思っていた。
しかしそのかたは（なおも読唱を）続けられた。
そこで私は、み使いは一ラカートでその章の大半を読まれてしまうのであろうと考えた。
しかしそのかたはなおも続けられた。
私は、み使いはこの章を完結した後立礼されるのであろうと思った。
それからみ使いは婦人章（クルアーン第4章）に入られてそれを読唱し終えられ、更にイムラーン家章（クルアーン第3章）に入られて、それをゆっくりと読まれた。
そしてそのかたはアッラーを讃美することに言及している節にかかりますと“アッラーに称讃あれ”と讃美されました。
み使いは（主への）祈願の節にさしかかりますと祈願されました。
また（主に）救いを求める節にさしかかりますと、救いを求められた後立礼され、そして「偉大なるアッラーに称えあれ」と言われました。
み使いの立礼の時間はそのかたが立っていたのと同じくらい継続しました。
そしてみ使いは（また直立の姿勢に戻られて）「アッラーが彼を称えた者の言葉を聞こし召されますように」と言われた。
それからそのかたは、そのかたが立礼されていたのと同じくらい長い間立っておられてから叩頭に移られました。
そして「至高のわが主に称えあれ」と言われました。み使いの脆拝の時間はそのかたが立っていたそれに近いものでした。
ジャリールによって伝えられたこれと同じハディースの中には、“み使いは「アッラーが彼を称えた者の言葉を聞こし召されますように。われわれの主、彼にこそ栄光はおわします」と言われた”がある。
アブドッラーは伝えている
私はアッラーのみ使いと一緒に礼拝した。
そのかたは私が（その間に）悪い考えを心に抱く程長い時間をそれにかけられた。
（その後）み使いは私に「あなたはどんなことを、心に抱いたのか」と言われた。
私は「座りたいことや、あなたを置いて去ることを考えておりました」と言った。
このようなハディースは同一の伝承者経路を経てアアマシュによってもたらされた。

朝まで眠り続ける者について

朝まで夜もすがら眠り続ける者についての預言者の言葉
1巻　P.533-535

アブドッラー・ビン・マスウードは伝えている
アッラーのみ使いは朝まで夜どおし眠っている者について「それは悪魔が彼の両耳に放尿した者である（注）。あるいは、彼の耳に放尿した者である」と言われた。
（注）悪魔が彼を意のまゝにしたという風刺である。
これは悪魔がその者を愚弄し完全に支配してしまうことで、この為に彼はアッラーへの服従を怠って、眠ってしまうのである。
不浄なるものは身体に付着しやすく、それが体内に侵入して諸々の器官に害を及ぼし、怠惰な肉体となる因となる。
糞尿は不浄なものの代表で、人体のあらゆる孔から侵入して器官を侵す。
特に耳は鋭敏な器官の一つで、侵されやすいとされる
フサイン・ビン・アリーは（彼の父）アリー・ビン・アブー・ターリブを根拠として伝えている
アッラーのみ使いはある夜、私（アリー）とファーティマ（預言者の娘）に会いに来られ「あなた方は（夜の）礼拝を行わないのか」と言われた。
私（アリー）は「アッラーのみ使いよ、確かにわたし達の魂はアッラーの御手の中にあります。彼（アッラー）がわれわれを目覚めさせようと望まれればわれわれを目覚めさせます」と申しますと、み使いはお帰りになった（注1）。
彼は帰る道すがら御自身の大腿部をうちながら（注2）「まことに、人というものは（都合の良いように）色々のことを論議するものである」と言われた。
（注1）アリーとファーティマが敬度なムスリムであったことは言をまたない。
彼等は常々その礼拝を行っていたが、その夜に限って夜の礼拝をしなかったのである。
アリーはその時、ハディースにあるような言葉を預言者に言った。
しかし、彼は怒らず黙って帰った。
というのも彼は強制を好まなかったし、また、夜の礼拝が随意のものでもあったからである。
実のところ預言者は、己れの怠慢を正当化しようとするアリーの言葉には不快を覚えていた。
確かに人の魂はアッラーの御手の中にあるとはいえ、夜の礼拝のような敬神的行為は自らの努力で行われねばならないものである
（注2）大腿部をうつということは、アラブが不愉快な言葉や行動に接した際に行う習慣である
アブー・フライラはアッラーのみ使いから（次のような話を開いたと）伝えている
「あなた方の誰でも就寝した時、悪魔があなた方の首筋に三つの結び目をつくる（注）。
もしそれら一つ一つの結び目をつけたまま寝れば苦しみの長い夜を過すこととなる。
もし、彼が起きてアッラーの御名を唱えればその結び目の一つは解ける。
そして、もし彼が沐浴すれば二つの結び目が解ける。

なお、彼が礼拝を行えばもう一つの結び目は解けて、彼ははつらつとして朝を迎えるであろう」
（注）悪魔がつくる結び目とは人を怠惰な習性に落しめる端緒となる事柄を比喩的に表現したものである。
夜間の礼拝には三つの関門がある。
一）深夜の起床、二）沐浴、三）礼拝であり、それぞれの行為遂行はなまやさしいことではない
。
それを悪魔の三つの妨害に例えたのである。
そして、人が敬神性を喪失し、あるいは忘却して惰眠をむさぼることで、その結び目は固くなって解けなくなってしまう

家庭でのナフルについて

家庭でのナフルの礼拝は好ましいが、それはモスクで行っても良い
1巻　P.535-536

イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは「あなた方の礼拝のうちどれかは家庭で挙行せよ。ここを（家）を墓場のようにしてはならぬ（注）」と申された。
（注）死者が墓で礼拝しないように、家庭をただ眠るだけの墓同様の空しい状態にしないように、ということである
この他、家庭での礼拝の重要性について、いくつか言われている。
一）本人自身への影響である。それは、誠実さやひたむきな敬神性を教え培うものである。というのも家庭での人知れぬ宗教的行為は世間の称讃を目的とはしないからである。
二）家族への影響である。家族で宗教的行事を実践することで、高潔な人格の形成、健康的な雰囲気の家庭つくりに役立つのである
イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは「あなた方の家で礼拝を挙行せよ。そして、そこを墓場のようにしてはならぬ」と申された。
ジャービルは伝えている
アッラーのみ使いは「あなた方の誰でもモスクで（義務としての）礼拝を行う時、（義務以外に行う礼拝の中から）彼の家庭で行うものをとっておくべきである。誠にアッラーは、人が家庭で礼拝を行えばその家に祝福を垂れ給う」と申された。
アブー・ムーサーは伝えている
アッラーのみ使いは「アッラーの御名がそこで唱えられるような家庭と、アッラーの御名がそこで唱えられないような家庭とでは生と死のような相違がある」と申された。
アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは「あなた方の家を墓地にしてはならぬ。誠に、悪魔は雌牛章が読唱される家からは逃避する」と申された。
ザイド・ビン・サービトは伝えている
アッラーのみ使いは、椰子の葉で編んだござで囲んだ小さな部屋をつくられ、そこで礼拝する為に出てこられた。
人々は彼の後に続き、彼と一緒に礼拝しようとやって来た。
それから彼等は、ある日、再びやって来てみ使いを待った。
しかし、彼は容易に彼等の所に出てこられなかった。
人々は声高に呼び、小石を扉に投げた。アッラーのみ使いは怒って出て来られた。
そして「私はあなた方の行為が継続的に行われることで、あなた方に義務と化してしまうのではないかと考えたのだ。あなた方は各自の家庭で礼拝を行うが良い。義務の礼拝以外は、人が家庭

で礼拝を行うのは大いに結構なことである」と言われた。
ザイド・ビン・サービトは伝えている
アッラーのみ使いはモスクの中に（椰子の葉で編んだ）ござで部屋をおつくりになった。そこで、後は幾夜も礼拝されておられたので、人々がその周囲に集まり始めた。
この後のハディースは前と同様であるが、これには（次のような言葉が）付加されている。
「もしこの（ナフルの）礼拝があなた方に義務になったら、あなた方はそれを遵守し得ないであろう」

宗教上尊ばれる行為について

宗教上の行為で尊ばれるのは継続的な行為である
1巻　P.536-537

アーイシャは伝えている
み使いはござをもっておられて、夜間にはそれで部屋をしつらえ、その中で礼拝されていました
。
人々はその御方と一緒に礼拝し始めました。
み使いはそれを昼は広げていらっしゃいました。
人々はある夜、その御方の周囲に集まりました。
その時あの御方は「あなた方は皆、あなた方に出来ることは完全に果さなければならぬ。まことに、アッラーはお飽きになることはないがあなた方は飽きてしまう。アッラーが最も喜ばれる行為（注）は、たとえそれが少いものであっても継続してなされるものである」と申されました
。
預言者ムハンマドの家族は彼等があることを始めた時は、それを継続して行っておりました。
（注）ここでの行為は主として宗教上の事柄についてである
アーイシャは「アッラーのみ使いがアッラーの最も好まれる行為について尋ねられた時『それがたとえ少しではあっても、継続的になされるものである』と申されました」と言った。
アルカマは伝えている
私は信者達の母、アーイシャに「信者達の母よ、アッラーのみ使いはどのように物事をされていましたか。（たとえば）彼は日を選んで何か事を起されていたのでしょうか」と尋ねました。
彼女は「いいえ、み使いの行為は継続的に行われておりました。そして、あの御方のされたことはあなた方の誰にでも可能なものです」と申されました。
カーシム・ビン・ムハンマドはアーイシャについて伝えている
アーイシャはアッラーのみ使いが「アッラーの最も好まれる行為は、たとえそれが少しであっても継続して行われるものである」と話していた。
またアーイシャは、あることを始めたならば、続けて行っていた。

礼拝中居眠りする者に関して

礼拝中に居眠りをしたりクルアーンの読唱に口ごもる者は、はっきり目覚めるまでそれを中止させること
1巻　P.537-539

アナスはアッラーのみ使いがモスクに入られると二本の柱の間に綱が張られているのを見て（次のように）言われたと伝えている
「これは何のためか」
彼等は「ザイナブが礼拝するためです。彼女が疲れて気力を失ったらそれにつかまるのです」と言った。
するとみ使いは「それを解け。礼拝は人が元気である時にのみ行わせるがよい。人が疲れて元気を失うような場合はそれを止めさせよ」と申された。
別の伝承者のハディースには「彼を座らせよ」とある。
別の伝承者経路で同様なハディースが伝わっている。
ウルワ・ビン・ズハイルは伝えている
預言者の妻アーイシャは、ハウラーウ・ビント・トワイト・ビン・ハビーブ・ビン・アサド・ビン・アブドル・ウッザーが彼女の側を通った時、
そばにいた預言者に「これはトワイトの娘ハウラーウです。
人々は、彼女は夜寝ないと言っております」と言った。
するとみ使いは「彼女は夜寝ないのか。
あなた方は、あなた方に可能な行為を行えば良いのである。
アッラーに誓って、アッラーはお疲れにはならないが、あなた方は疲れてしまうであろう」と申された。
アーイシャは伝えている
み使いは、ある女性が私と一緒におりました時、私の所に来られました。
彼は「この女性はどなたですか」と申されました。
私は「彼女は礼拝のために眠らないという女性です」と言いました。
み使いは「あなた方に出来ることをしなさい。アッラーに誓って、アッラーはお飽きにならないがあなた方は飽きてしまうであろう。アッラーの最も好まれる宗教上の行為は継続的に行われるものです」と申されました。
アブー・ウサーマによって伝えられたハディースによると、この女性はアサド族の女性であったとされている。
アーイシャは伝えている
み使いは「あなた方の誰かが礼拝の最中に眠くなったら、眠気が消えるまで眠らせよ）誰でも居眠りしながら礼拝すれば、彼は許しを請うているのか、それとも自分をのろっているのか、分別出来ないであろう」と申されました。

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは「あなた方の誰かが夜（礼拝のために）起床し、クルアーンの読唱に口ごもったり、何を読んでいるのか分らない時はその者を眠らせよ」と申された。

クルアーンの記憶保持について

クルアーンの記憶がうすれないよう配慮すべきこと
1巻　P.539-541

アーイシャは伝えている
み使いは夜、ある人がクルアーンを読唱しているのをお聞きになった。
その時彼は「彼にアッラーの御慈悲がありますように、彼は私が忘れていた（注）何々の章の何々の節を思い出させてくれた」と申されました。
（注）アッラーが私にその章句の読唱を忘れさせるの意
アーイシャは伝えている
み使いはモスクで、ある人がクルアーンを読唱しているのをお聞きになった。
その時み使いは「彼にアッラーの御慈悲がありますように。彼は私が忘れていた章句を思い出させてくれた」と言われました。
アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは「クルアーンを暗記している者をたとえれば、（逃げないように）足を縛られているらくだを所有しているようなものである。
もし彼が用心深く（しっかり縛って）いれば、それを保持していられるが、ゆるめればそれは逃げてしまう（注）」と申された。
（注）らくだは注意深く監視していれば、保持し駆使出来る。
クルアーンを暗記している者も、それと同様に、注意深く繰り返し読唱するよう心がけていれば、身から触れることはない。
しかし、一旦、無関心になれば忘れて失われて行く
このハディースは預言者から聞いた話としてイブン・ウマルによって伝えられたが、ムーサー・ビン・ウクバによって伝えられたものには（次のような）ハディースの付加がある
クルアーンを暗記（または精通）したなら、夜も昼もそれを読唱して記憶を保持するのである。
だが、もし彼が（夜の礼拝にも起きず読唱もしなければ）忘れてしまう。
アブドッラーは伝えている
アッラーのみ使いは「人々の中で、私はクルアーンのこれこれの節を忘れてしまった、と言う者こそまことにあわれな者である。
（彼はこのように言う代りに）私はそれを忘れるようにして来たのだ（と言うべきである）。
それは（逃げられぬよう）足を縛られているらくだより人の記憶から失われ易いものであるから、その暗記を保持し続けるよう心がけよ」と申された。
アブドッラー（について次のように）伝えられている
神聖な教典に関するあなた方の知識をはっきりと記憶しているようにせよ（または、この神聖な教典に関するあなた方の知識を常に保ち続けるようにせよ）と言っていた。
また彼は時々次のように言っていた。

クルアーンについての記憶は、足を縛られた動物より、人の記憶から逃げ易いものである。
アッラーのみ使いは「あなた方の誰一人、私はクルアーンのこれこれの節を忘れた、と言ってはならぬ。
彼は（それを）忘れるようにして来たのだ」と申された。
イブン・マスウードは伝えている
アッラーのみ使いは「私は（クルアーンの）これこれの章を忘れた。
あるいは、私はこれこれの節を忘れた、と言う者こそまことにあわれな者である。
彼は（それを）忘れるようにして来たのだ」と言っておられた。
アブー・ムーサー・アシュアリーは伝えている
アッラーのみ使いは「クルアーンに関するあなた方の知識を、はっきりと保持しているようにせよ。
ムハンマドの心がその御手の中にある御方（注）に誓って言う。
それは足を縛られたらくだより、人の記憶から逃れやすいものである」と言われた。
（注）これも、“アッラーに誓って”のような誓いの言葉である

美声による聖典読唱について

美声によるクルアーンの読唱がより好ましいものである
1巻　P.541-542

アブー・フライラは預言者から直接聞いた次の言葉を伝えている
アッラーは預言者が甘美な声でクルアーンを読唱されるのをお聞きになられる。
（しかしながら）他の何ごともそれと同じようにお聞きになるというものではない（注）。
（注）つまり、アッラーは甘美な声によるクルアーンの読唱をひとしおの喜びでお聞きになるということ
このハディースは同一の伝承者経路を経て、“預言者が甘美な声でクルアーンを読唱されるのをお聞きになられる（と同様に）”という言葉をそえて、イブン・シハーブによって伝えられた。
アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは「アッラーは彼のみ使いが甘美な声でクルアーンを声高に読唱するのを聞かれる。
しかしながら、他の何ごともそれと同じように、お聞きになるというものではない」と申されたのを聞いた。
このようなハディースは同一の伝承者経路を経てイブン・ハードによってもたらされた。
彼はアブー・フライラは「アッラーのみ使いが（かくかく）申された」とは言ったが、彼がそれを「み使いから聞いた」と言った、というようには言ってはいない。
アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは「アッラーは彼のみ使いが甘美な声でクルアーンを読唱されるのを聞かれるように、すべてのものをお聞きになるのではない」と言われた。
このハディースは別の伝承者経路によっても伝えられたが、言葉に若干の変更がある。
アブドッラー・ビン・ブライダは彼の父を根拠として伝えている
アッラーのみ使いは「アブドッラー・ビン・カイス、または、アシュアリー（アブー・ムーサー・アシュアリー）の美声は、ダウード（ダビデ）の一族がもつ美声をわかち与えられたのだ」と言われていた（注）。
（注）預言者の一人ダビデはたいへんな美声のもち主で、常々礼拝の形式をそなえた歌、アッラーへの讃歌を歌っていたと言われるところから、上記のようなハディースが出たものと考えられる
アブー・ムーサーは伝えている
アッラーのみ使いはアブー・ムーサーに「私は昨夜、あなたのクルアーンの読唱を聞いた。
もしあなたがその時の私を見たなら、あなたはきっと喜んだであろう。
あなたはたしかにダウードの一族の美声をわかち与えられている」と申された。

預言者と「勝利章」について

預言者はマッカ征服の日“勝利章”（クルアーン第48章）を読唱された
1巻　P.542-543

ムアーウィヤ・ビン・クッラは伝えている
アブドッラー・ビン・ムガッファル・ムザニーは（次のように）言った。
「アッラーのみ使いはマッカ征服の年、進行中の乗物の上で“勝利章”を繰り返し読唱されていた」
ムアーウィヤは「もし私が、人々が私の周囲に群がるのを恐れなかったなら、彼（アブドッラー）の読唱を実際に行って見せるのだが」と言った。
ムアーウィヤ・ビン・クッラはアブドッラー・ビン・ムガッファルが（次のように）言っているのを聞いたと伝えている
私は預言者がマッカ征服の日、彼のらくだの上で“勝利章”を読唱されているのを見た。
彼（伝承者）は「イブン・ムガッファルは、（み使いは）それを読唱し繰り返された」と言った。
ムアーウィヤは「人々が群がらないならアブドッラー・ビン・ムガッファルが預言者について話した様子を、実際に行って示すのだが」と言った。
“（マッカ征服の日）預言者は彼の乗り物の上で進行中に“勝利章”を読唱されていた”というハディースは別の伝承者経路を経ても伝えられている。

聖典読誦と「静穏」降臨について

クルアーンの読唱によって“静穏”（注）の降臨がある
（注）アラビア語のسكنة sakinaを“静穏”と直訳したが、これは“神の臨在”とも訳されている。
しかし、次のハディースを見るとここではملائك malaika（天使・複数）のことである
1巻　P.543-544

アル・バラーウは伝えている
ある男が洞窟章（クルアーン第18章）を読唱していた。
彼の近くには二本の綱でつながれていた馬がいた。
その時、雲が彼の上に陰をつくり、それか次第にその馬に近付くと馬はそれにおびえた。
翌朝彼は預言者の許に行きその事を話した。
預言者は「それはクルアーンの読唱によって下った静穏であった」と申された。
イブン・イスハークは伝えている
私はバラーウが（次のように話したのを）聞いた。
（すなわち）ある男が動物がいる建物の中で洞窟章（クルアーン第18章）を読唱していた。
するとその動物はおののき始めた。
そこで彼があたりを見廻すと雲の陰がその上にかかっていた。
彼はそれを預言者に話した。
預言者は「読唱せよ、それは静穏（のため）である。あなたがクルアーンを読唱した際に、（または、クルアーンの読唱のために）降ったのだ」と申された。
このハディースは言葉に若干の変更があるが、バラーウを根拠として伝えられた。
アブー・サイード・フドリーはウサイド・ビン・フダイルについて次のように伝えている
ある夜、ウサイド・ビン・フダイルは動物をつないで置く所で、クルアーンを読唱していた。
その時、彼の馬が跳ね始めた。
彼が再び読唱を始めると、（その馬は）再び跳ねた。
彼がまた読唱すると、また同じように跳ねた。
ウサイドは言った
「私はそれが私の息子ヤヒヤーを踏みつぶしはしないかと恐れた。
そこで、私は立って馬の側へ行った。
その時、突然私の頭上に天蓋のようなものを見た。
それには幾つかのランプのようなものが付いていて、天高く昇って行って遂に見えなくなった。
翌朝アッラーのみ使いの所へ行き、『み使いよ、私は夜間、わが家の家畜小屋でクルアーンを読唱しておりました時、私の馬が跳ね始めたのです』と私は言った。
『イブン・フダイル（ウサイド自身のこと）よ、あなたは読唱を継続すべきであった』とみ使いは申された。
『私は読唱しました。するとそれはまた跳ねました』と私は言った。

『イブン・フダイル、あなたは読唱を継続すべきであった』み使いは再び申された。
『私は読唱しました。するとまたもやそれは跳ねたのです』と私は言った。
『イブン・フダイル、あなたは読唱を継続すべきであった』み使いはなおも申された。
『私は息子ヤヒヤーが（馬の）近くに居りましたので（読唱を）止めました。
私はそれが息子を踏みつぶしはしないかと恐れたのです。
私は幾つかのランプのようなものを付けた天蓋のようなものを見ましたが、それは天に昇って遂に見えなくなりました』と言った。
すると、『それはあなた（の読唱）を聞いていた天使であった。そして、もしあなたが読唱を続けていたなら、人々は朝彼等（天使）を見たであろう。彼等もまた、彼等自身の姿を隠さなかったであろう』とアッラーのみ使いは申された（注）」
（注）このハディースは例外的な場合において、人間が天使を見ることが出来るのを証拠立てるものとしている

クルアーン暗誦者の徳点について

クルアーン暗誦者の徳点
1巻　P.545

アブー・ムーサー・アシュアリーは伝えている
アッラーのみ使いは「クルアーンを読唱する信者は、甘い香りと美味なオレンジのようである。
クルアーンの読唱を行わない信者は、美味ではあっても芳香のない椰子の実のようなものである
。
クルアーンを読唱する偽善者は、めぼうき（注1）のようなもので香りは良いがその味は苦い。
偽善者でしかもクルアーンの読唱を行わない者は、コロシント瓜（注2）のようで芳香はなくその味は苦い」と言われた。
（注1）はっかに似た草で香味料
（注2）アラビア語ではハンザラといい、アジア、地中海方面の温暖地方に産する瓜科の植物
これと同様のハディースは同一の伝承者経路を経て伝えられたが、ハンマームによるものには منافق munafiq（偽善者）を فاجر fajir（邪悪な者）という語に入れ替えてある。

聖典読誦熟達者について

クルアーンに熟達している者とそれを口ごもる者の徳点
1巻　P.545

アーイシャは伝えている
み使いは「クルアーンの読暗に熟達した者は、気高くて敬虔な記録天使と会いまみえる。（一方）それに口ごもる者は（注1）刻苦勉励することで、二倍の報償（注2）が得られる」と申されました。
（注1）ここでは、アラビア語を母国語としていない人々を指しているようである
（注2）二倍の報償というのは、それに熟達した者の二倍という意味ではない。
刻苦勉励の後、熟達した者には、それなりの多くの報償があるということである。
このハディースは同一の伝承者経路を経てカターダによって伝えられたが、ワキーウのものには「（クルアーンの読唱に）困難を見出す者には二倍の報償がある」と述べられている。

クルアーン読誦の熟達に関して

クルアーンの読唱は読唱者の地位のいかんを問わず、より熟達せる者による方が好ましい
1巻　P.545-546

アナス・ビン・マーリクは伝えている
アッラーのみ使いはウバイユ・ビン・カアブに「アッラーは私があなたのためにクルアーンを読唱するようお命じになった」と言われた。
ウバイユは「アッラーはあなたに名指しで私のことを申されたのでしょうか」と言った。
み使いは「アッラーは私にあなたの名前を述べられた」と言われました。
（これを聞くと）ウバイユ・ビン・カアブは（感激して）泣いた。
アナスは伝えている
アッラーのみ使いはウバイユ・ビン・カアブに「アッラーはあなたのため私に「（真理を）拒否した者も多神教徒も…」（クルアーン第98章）の読唱をお命じになった」と言われた。
彼は「アッラーは名指しで私のことを申されたのでしょうか」と尋ねた。
み使いは「その通りです」と答えられた。
この時ウバイユは（感激して）涙を流した。
カターダは伝えている
私はアナスが「アッラーのみ使いはウバイユに対して（前述のハディースと）同じことを言われた」と言っているのを聞いた。

クルアーン読唱と傾聴について

クルアーンの読唱者に読唱を求め、それに傾聴して涙を流し
反省の時をもつことは好ましいことである
1巻　P.546-548

アブドッラー・ビン・マスウードは伝えている
アッラーのみ使いは私にクルアーンの読唱をお求めになった。
私は「アッラーのみ使いよ、それはあなたに啓示されたものですのに、（どうして）私があなたにお読みするのでしょう」と言った。
み使いは「私は私以外の誰かからそれを聞きたいのだ」と言われた。
そこで私は"婦人章"を「われが、それぞれのウンマから一人の証人を連れてくる時、またあなた（ムハンマド）を、彼等の悪に対する証人とする時は、どんな（有様）であろうか」（クルアーン第4章41節）まで読娼した。
私は頭を上げた。
あるいは誰か私のわき腹に触れたので、私は頭を上げた。
その時、私はみ使いが涙を流されているのを見た（注）。
（注）いつの時代にも、預言者達はアッラーに託された使命を誠実に遂行し、人々を正道に導いて来た。ムハンマドはアッラーの最後のみ使いとして、大使命をになう存在となった。
彼が涙を流したのは、最後のみ使いとしての責任の大きさを考えてのことであった。
このハディースは同一の伝承者経路でアアマシュによってもたらされた。
しかし、これには"アッラーのみ使いが私に読唱を求められたのは説教台の上であった"という言葉がハンナードによって付加されている。
イブラヒームは伝えている
アッラーのみ使いはアブドッラー・ビン・マスウードに（クルアーンの）読唱をお求めになった。
彼は「それはあなたに啓示されましたのに私が誦まなければなりませんか」と言った。
み使いは「私は誰か他の者からそれを聞きたいのだ」と言われた。
そこで彼（アブドッラー・ビン・マスウード）はその御方に婦人章の初めから「われが、それぞれのウンマから一人の証人を連れてくる時、またあなた（ムハンマド）を、彼等の悪に対する証人とする時は、どんな（有様）であろうか」（クルアーン第4章41節）まで誦んだ。
するとみ使いは涙を流しておられた。
これはイブン・マスウードを根拠として伝えられたが、別の伝承者経路を絶たものには、預言者が"私が彼等の中で生活した、あるいは私が彼等の中で生活して来た限りは私が彼等の証人である"と言われたという話が伝えられている。
アブドッラーは伝えている
私は（シリアの町）ヒムスにいた。

その時、人々は私にクルアーンの読唱を求めた。
そこで私は彼等に“ヨセフ章”（第12章）を読唱した。
すると彼等の中の一人が「アッラーに誓って、それはそのように啓示されたのではなかった」と言った。
私は「汝に災いあれ、アッラーに誓って、私はこれをアッラーのみ使いにお誦みした。そのかたは私に『あなたの読唱は見事である』と申された」と言った。
私がその男と言い合っていると、彼に酒のにおいがした。
私は「お前は酒を飲んでアッラーからの聖なる教典をうそ呼ばわりする。私がお前を鞭で打つまでは去ってはならぬ」と言って、（飲酒の）罰として規定されているものに従って鞭で打った。
このようなハディースは同一の伝承者経路を経てアアマシュによってもたらされた。
しかし、アブー・ムアーウィヤを経たものには“アッラーのみ使いは私に『あなたの読唱は見事である』と申された”という言葉は除かれている。

クルアーン読唱と教授について

クルアーンの読唱とそれを教えることの徳点
1巻　P.548-549

アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いは「あなた方が家族の所に帰った時、そこに三頭の肥えて身ごもった大きならくだがいたら嬉しいであろう」と言われた。
われわれは「言われる通りでございます」と言った。
すると、そのかたは「礼拝時の（クルアーンの）三節の読唱はあなた方の誰にとっても、三頭の肥え身ごもった大きならくだより良いものなのである」と言われた。
ウクバ・ビン・アーミルは伝えている
われわれがスッファ（注1）にいた時、アッラーのみ使いがお出になって「あなた方の中で、毎朝、ブトハーン（注2）またはアル・アキーク（注3）に行って罪を犯すとか、あるいは親族との縁が断たれるというようなこととは無関係に、二頭の大きな牝らくだを手に入れてくるのを望む者はないか」と言われた。
われわれは「アッラーのみ使いよ、われわれはそれを望みます」と言った。
するとみ使いは「それで、あなた方の中には朝モスクへ行って聖クルアーンの中の二節を教えたり、あるいは読唱しようという者はないのか。
その行為は二頭の牝らくだより良いものである。
それが三節であれば（三頭の牝らくだより）良いし、四節なら四頭の（牝らくだより）良い。
同様にして、（それ以上の節を読むことは）その節の数に匹敵する叱らくだより良いものなのである」と申された。
（注1）マディーナにある預言者のモスクの一隅にあって、一段と高い場所のことである。
そこは、アッラーの道に献身する教友達の為にしつらわれたもので、常々そこにいた教友達は、“スッファの教友”と呼ばれていた
（注2、3）ブトハーンとアキークは、マディーナにある二つの場所である。
前者は中心に近い位置にあり、後者は中心から四マイル程の地点にある。それぞれらくだの市が開かれることで知られている

「雌牛章」の読唱に関して

クルアーンの“雌牛章”（第二章）読唱の徳点
1巻　P.549

アブー・ウマーマはアッラーのみ使いが（次のように）言われるのを聞いたと言った
「クルアーンを読唱せよ。
復活の日、それはそれを読唱した者の仲裁者として来てくれる。
読唱せよ、光輝の二章、雌牛章とイムラーン家章を。
復活の日、それらはあたかも二つの雲か陰のように、あるいは翼を広げた二群の鳥のように、それを読んだ者の弁護のために来てくれる。
雌牛章を読唱せよ、その実行は喜びの因でありそれの放棄は悲しみの因である。
魔術師に雌牛章は出来ぬことである」
（ムアーウィヤは私にここで“使用された”batala（という語）は“魔術師”を意味すると言った）（注）。
（注）アラブは古来より魔術で知られた民族
このようなハディースは同一の伝承者経路を経てムアーウィヤによって伝えられた。
しかし、前述のハディースの最後にある（ムアーウィヤが云々）という言葉は述べられてはいなかった。
ナッワース・ビン・サムアーヌはアッラーのみ使いが（次のように）言われるのを聞いたと言った
「復活の日、クルアーンとその教えに従って行動して来た人々は、雌牛章とイムラーン家章に導かれ（弁護され）るであろう」
なおみ使いはその様子を三つの例で示されたが、私は未だそれらを忘れてはいない。
み使いは「その二章が二つの雲、あるいは明かりをつけている二つの黒い天蓋、または（クルアーンを読唱した人々の弁護のための）二群の鳥たちのようである」と言われた。

「開端章」と「雌牛章」に関して

開端章（クルアーン第一章）と雌牛章（クルアーン第二章）の終り数節の徳点と雌牛章の結びの二節読唱の勧め
1巻　P.549-550

イブン・アッバースは伝えている
ガブリエルがアッラーのみ使いの側に座っていた時、彼の上で軋る音を聞いた。
彼は頭を上げ「今まで開けられなかった天の扉が今日開かれた」と言った。
そして、そこから天使が降りて来た時「これは今日始めて地上に降臨された天使です」と言った。
天使は挨拶をして「お喜びあれ、あなた以前のいかなる預言者にも与えられなかった二つの光を、あなたは与えられたのです。（それは）クルアーンの開端章と雌牛章の最後の数節です。そして、あなたが読唱するものは一文字たりと、報償の対象とされぬものはないでありましょう」と言った。
アブドル・ラフマーン・ビン・ヤズィードは伝えている
私はアブー・マスウードにその家（カーバ聖殿）の近くで会った。
私は彼に「雌牛章の結びの二節についてあなたを根拠とする一つのハディースが私に伝わった」と言った。
彼は「確かに私は言った。アッラーのみ使いは誰でも夜、雌牛章の結びの二節を読唱する者はそれによって満足を覚えるであろう」と言われた。
このハディースは同一の伝承者経路を経てマンスールによってもたらされた。
アブー・マスウードは伝えている
アッラーのみ使いは「夜、雌牛章の結びの二節を読唱する者は誰でも、それによって満足を覚えるであろう」と言われた。
アブドル・ラフマーンは「私はカーバ聖殿を巡回しているアブー・マスウードに出合った。そこで私は彼にそれについて尋ねた。すると彼はそれをアッラーのみ使いから聞いたと私に話した」
このようなハディース（すなわち）アッラーのみ使いから聞いたとするものは、別の伝承者経路を経てアブー・マスウードによって伝えられている。

「純正章」読誦に関して

純正章（クルアーン第112章）の「言え、彼はアッラー、唯一なる御方である」読唱の徳点
1巻　P.551-553

アブー・ダルダーウは伝えている
アッラーのみ使いは「誰かあなた方の中で一夜にクルアーンの三分の一を読唱しきれる者はあるか」と言われた。
彼等（教友達）は「いかにしてクルアーンの三分の一も（一夜で）読唱出来ましょうか」と言った。
み使いは「言え、彼はアッラー、唯一なる御方である」（クルアーン第112章1節）（またはその章）はクルアーンの三分の一に相当する（内容をもつものである）」（注）と申された。
（注）クルアーンには、神の唯一性の信仰、イスラーム聖法、人格教育が解かれている。アル・イフラース（純正章）にはその三つの基本的知識の中の一つである神の唯一性の信仰が述べられているためである
このハディースはカターダを根拠とし、同一の伝承者経路を経て伝えられた。
なおこれを伝えた伝承者の中には、アッラーのみ使いは「アッラーはクルアーンを三つの部分に分けられた。そして「言え、彼はアッラー、唯一なる御方である」をその中の一つにされた」と言われた、という言葉を付加している者もある。
このハディースはアブー・フライラを根拠として伝えられた
アッラーのみ使いは「一同、集合せよ、私はあなた方にクルアーンの三分の一を読唱するであろう」と言われた。
人々は急いで集まった。
み使いは出て来られて「言え、彼はアッラー、唯一なる御方である」を読唱され家にお入りになった。
われわれは互いに「多分、天からあるお告げがもたらされてみ使いは家の中にお入りになったのであろう」と言った。
それからみ使いは再び出て来られ「私はあなた方にクルアーンの三分の一を読むであろうと述べた。そして一同心に止めておくが良い。これ（純正章）はクルアーンの三分の一に相当する」と言われた。
アブー・フライラは伝えている
アッラーのみ使いはわれわれの所に出て来られ「私はあなた方にクルアーンの三分の一を読むであろう」と言われた。
そして「言え、彼はアッラー、唯一なる御方である」をその章の終りまで読唱された。
アーイシャは伝えている
み使いは一人の男を分遣隊に送られました。
その人は彼の仲間のために礼拝の時はクルアーンの読唱を行っていました。

彼は「言え、彼はアッラー、唯一なる御方である」で（読唱）を終りました。
彼等が帰った時、そのことがアッラーのみ使いに告げられました。
み使いは彼等に「どうして彼がそのようにしたのかを尋ねてみよ」と申されました。
彼等は彼に尋ねました。
すると、彼は「それは慈悲深い特性をもつもので、私はそれを読唱するのを好むのです」と答えました。
（これを聞いて）み使いは「彼に、アッラーがあなたを愛するであろう、と告げよ」と彼等に言われました。

加護を求める二つの章について

アッラーの御加護を求め願う二章（クルアーン第113章、第114章）読唱の徳点
1巻　P.553

ウクバ・ビン・アーミルは伝えている
アッラーのみ使いは「今日、啓示された数節は何とすばらしいのであろう。私はそのようなものは今まで知らなかった」と言われた。
それは「言え『黎明の主に御加護を求め願う』」（クルアーン第113章）と、「言え「御加護を求め願う』」（クルアーン第114章）である（注）。
（注）両章とも数節から成る短い章である
ウクバ・ビン・アーミルは伝えている
アッラーのみ使いは私に「私が今まで全く知らなかった（すばらしい）数節の啓示があった。それらは「御加護を求め願う」二つの章（注）である」と言われた。
（注）この二章は前述の「黎明章」と「人々章」である
このハディースは別の伝承者経路で伝えられた。
なお、これは預言者の教友から直接伝えられたものである。

クルアーン教義の実践について

クルアーンの教えを実践し、イスラーム法学その他より学んだものを遵守し、
かつそれを教える者の徳点
1巻　P.553-555

サーリムは彼の父を根拠として伝えている
アッラーのみ使いは「ねたみは（次の）二例を除いては正当ではない。
（その一は）アッラーによってクルアーン（の知識）を与えられ、昼といわず夜といわずそれを読唱し、（その内容を実践）する者に対してである。
（その二は）アッラーによって富を与えられ、昼といわず夜といわず（他人の幸福を願いアッラーの御満足を求めて）それを消費する者に対してである」と言われた。
サーリム・ビン・アブドッラー・ビン・ウマルは彼の父を根拠として（次のことを）言ったと伝えられている
アッラーのみ使いは「ねたみは（次の）二例を除いては正当ではない。
すなわち、アッラーによってこの書物の知識（クルアーンの知識）を与えられ、昼といわず夜といわずそれを読唱し（それを実践する）者に対してである。
そして、（もう一例は）アッラーから富を与えられ、それを昼となく夜となく、慈善のために費す者に対してである」と言われた。
アブドッラー・ビン・マスウードは伝えている
アッラーのみ使いは「ねたみは（次の）二例を除いては正当ではない。
（すなわち）アッラーによって富を与えられ、それを真理のために行使する者に対して。
そして（もう一例は）アッラーによって知恵（注）を与えられ、それによっていろいろな（事件、懸案などを）解決し、また（人々に）それを教える者に対してである」と言われた。
（注）ここでいう知恵は、クルアーンやスンナの勉強をとおして得られた洞察力を意味するとされる
アーミル・ビン・ワースィラは伝えている
ナーフィウ・ビン・アブドル・ハーリスはウスファーンの地でウマルに会った。
ウマルは彼をマッカで徴税吏として採用していた。
彼はナーフィウに「あなたは峡谷の人々に対し誰を徴税吏として採用したか」と言った。
彼は「イブン・アブザーという者です」と答えた。
「イブン・アブザーとはどのような者か」とウマルは尋ねた。
彼は「それはわれわれのマウラー（奴隷の身分から解放された自由民）です」と答えた。
「そうか、あなたは彼等に対してマウラーを指名したのか」
「はい、彼はアッラーの聖なる教典の良き読唱者です。また宗教上の諸事にも精通しております」
これを聞いてウマルは「まこと、あなた方の預言者は『アッラーはこの聖なる教典によってあ

る人々を高め、また他の者達の等級を下げ給う（注）』と申されていた」と言った。
（注）クルアーンを信じそれに従って行動する者の社会的地位は高まり、それに反して、記憶もせず行動も起こさない者達の地位は下る
前述と同様なハディースは別な語り手でも伝えられている。

七種の読誦法について

クルアーンの七つの読唱法とその意図の説明
1巻　P.555-557

ウマル・ビン・ハッターブは言った
私はヒシャーム・ビン・ハキーム・ビン・ヒザームが識別章（クルアーン第25章）を、私の読唱とは違った誦み方で行っているのを聞いた。
アッラーのみ使いは私に読唱をお教えになっていたので、私は彼に論争をしかけんばかりであった。
しかし、彼が（その読唱を）終えるまで待った。
それから、私は彼の外衣を掴み、彼をアッラーのみ使いの許に連れて来て言った。
「アッラーのみ使いよ、私はこの者が、あなたが私に教えて下さった読唱とは異なった様式で、識別章を読唱しているのを聞きました」
するとアッラーのみ使いは私に「彼にかまわずに（そのままにして）おくが良い」と言われ、彼から彼の読唱を求められた。
（それを聞かれた後）み使いは「それはそのようにくだされたのです」と言われ、私にも「読唱せよ」と言われた。
そこで私は私の様式で読唱した。
彼は「それはそのようにくだされたのです。クルアーンは七つの方言でくだされたのです。そういうわけで、その中から容易と思われる様式で読唱せよ」と申された（注）。
（注）このハディースに関しては、真実の意をめぐって非常に多くの解釈と多数の学者の激論の交換があった。
しかしながら、現在ではクルアーンは単にそれを読唱する者が困難でないように、七つの方言による読み方があるという意見で一致している
このハディースはウマル・ビン・ハッターブによって伝えられたが、（伝承者により）若干の言葉の相違をもっている。
（すなわち）「私はアッラーの御使いが生存中、ヒシャーム・ビン・ハキームが識別章を読唱しているのを聞いた」である。
残りのハディースは同様だが、その中に「私は礼拝中に彼につかみかかろうとしたが、彼が（礼拝の終りの）挨拶を済ますまで待った」という付加もある。
このハディースは別の伝承者経路でも伝わっている。
イブン・アッバースは伝えている
アッラーのみ使いは「ガブリエルは私に一つの様式での読唱を教えた。私は彼の意見を請い更に多くの（様式）を与えるよう願った。すると彼はそれに応じ（アッラーの御許しを得）て七つの方言まで増加してくれた」
イブン・シハーブは「その七つの方言はそれぞれ非常に重要なものであり、どれが許されてどれ

が禁止されるというような相違をもつものではない、ということがわかった」と言った。
前述のハディースは別の語り手でも伝えられている。
ウバイユ・ビン・カアブは伝えている
私がモスクにいた時、一人の男が入って来て礼拝し、私が反対した様式で（クルアーンを）読唱した。
それからまた、別の男が入って来て先の仲間とは違った様式で読唱した。
われわれ一同が礼拝を終えた時、預言者の所に入って行った。
私はみ使いに「この者は私が反対した様式で読唱を行いました。それから別の者が入って来て、彼の友人とはまた違った様式で読唱を行いました」と言った。
すると、アッラーのみ使いはその二人に読唱を求められた。
二人が読唱し終えると、み使いは両者の読唱の様式に賛成の意を表された。
その時私の心にはジャーヒリーヤ時代にさえ起きなかった預言能力に対するある種の否定の気持ちが起こった。
アッラーのみ使いは（悪い考えによる）私の心の動きをみて、私の胸をお打ちになった。
私は冷や汗がどっと溢れ出るのを感じた。
それはちょうど恐怖の念でアッラーを見つめているかのようであった。
彼は私に言われた
「ウバイユよ、神託は（初め）私に一つの方言でクルアーンを読唱するよう降った。
私は“私の国民のために（諸事を）容易ならしめ給え”と祈願した。
すると、私に『それは二つの方言で読唱して良い』　とのお告げがあった。
私は（また）“私の国民のために諸事を容易ならしめ給え”と祈願した。
すると、私に『それは七つの方言で読唱して良い』とのお告げがあった。
今私はあなたが捜し求めていた問題の一つ一つについて答えた。
私は既に二度“おゝアッラー、私の国民をお許し下さい、私の国民をお許し下さい”と祈願した。
ここに私は預言者イブラヒームを含め、全ての人々が私に（仲裁を）頼む日の為に第三の仲裁（の祈願）を延期している」
ウバイユ・ビン・カアブは伝えている
彼がモスクに座っていた時、一人の男が入って来て礼拝を行い読唱した。
この後のハディースは（前述のものと）同一である。
ウバイユ・ビン・カアブは伝えている
アッラーのみ使いがギフアール族の沼地の近くにおられた時、ガブリエルが彼の所に来て「アッラーはあなたにあなたの国民がクルアーンを一つの方言で読唱することをお命じになられました」と言った。
み使いは「私はアッラーの御救済とお許しを祈ります。私の国民は仰せのようには出来ないでしょう」と申された。
それからガブリエルは再度み使いの所に来て「アッラーはあなたにあなたの国民が二つの方言で読唱するようお命じになりました」と言った。

み使いは「私はアッラーの御救済と御許しを祈ります。私の国民は仰せのようには出来ないでしょう」と言われた。
それから、彼は三度み使いの所に来て「アッラーはあなたにあなたの国民がクルアーンを三つの方言で読唱するようお命じになりました」と言った。
み使いは「私はアッラーの御救済と御許しを祈ります。私の国民は仰せのようには出来ないでしょう」と言われた。
それから、彼は四度み使いの所に来て　「アッラーはあなたにあなたの国民がクルアーンを七つの方言で読唱するようお命じになられました。
それで（それらの中の）どの方言で人々がそれを読唱しても彼等は正しいのです」と言った。
このハディースは別の伝承者経路を経てももたらされている。

読誦のスピードや明瞭さについて

クルアーンの読唱は、ある程度のスピードと明瞭さがなければならない。
しかし、度を越えた速さは慎まねばならない。
なお、一ラカートにおける読唱に、二章ないしそれ以上の章の結合が許されている
1巻　P.558-561

アブー・ワーイルは伝えている
ナヒーク・ビン・スィナーンという名の者がアブドッラー（・ビン・マスウード）の所に来て「アブドル・ラフマーンの父よ、あなたはمن ماع غير آسن min ma'in ghaira asinまたは、من ماع غير ياسن min ma'in ghaira yasinに見られるalifまたはya（注1）をどのように読まれるのですか」と尋ねた。
アブドッラーは「あなたはここに（指摘した）ものを除いてクルアーン全てを記憶されたようですね」と（答えにならないことを）言った（注2）。
ナヒークは（再び）「私は一ラカートで全ての解明諸章（注3）を読唱します」と言った。
アブドッラーは「（あなたはそれを）詩の朗唱のように朗朗と読まなければならない。
まこと、多くの人々がクルアーンを読唱する。
しかし、それは彼等の鎖骨より下に降りることはない（注4）。
それが心にまで到達してそこに根を張り、確固不動のものとなってこそ有益なのである。
礼拝での最重要事は立礼と叩頭である。
私はアッラーのみ使いが立礼ごとに二つの章を結合させておられたのに気付いている（注5）」
こう言って、アブドッラーは立って出て行った。
その直後、アルカマが入って来た。
彼はわれわれに近付き「イブン・ヌマイルがハジーラ族の男がアブドッラーの所に来た、とは言ったが、ナヒーク・ビン・スィナーンという名前は出さなかった」と言った。
（注1）asinのa（アリフ）とyasinのya（ヤー）
（注2）そのような問題は取るに足らぬもので、クルアーンには、他に重要な問題が多くあるということを暗に示したのだという
（注3、5）アブー・タウードはみ使いがどの章を結合させていたかについて述べている。
それによると、一ラカート目には“慈悲あまねく御方章”（第55章）と　“星章”（第53章）を結合させ、第二ラカートでは“月章”（第54章）と“真実章”（第69章）を結合された。同様にして、“山章”（第52章）と“撒き散らすもの章”（第51章）そして“出来事章”（第56章）と“筆章”（第68章）、“階段章”（第70章）と“引き離すもの章”（第79章）そして“慈善章”（第107章）と“眉をひそめて章”（第80章）、“包る者章”（第74章）と“衣をまとう者章”（第73章）、“人間章”（第76章）と“復活章”（第75章）、“消息章”（第78章）と“送られる者章”（第77章）、“煙霧章”（第44章）と“包み隠す章”（第81章）などである。
これらの各章がいわゆるムファッサル（解明諸章）とされているのは、そのそれぞれがそれだけで完備され他とは明瞭に分離された独自の存在だからである

（注4）クルアーンは完全な知識、知恵、信仰などの教えを内蔵する巨大な宝庫である。
しかしそれは衷心からの宗教的献心をもってのぞまない限り開くことが出来ないものである
アブー・ワーイルは伝えている
ナヒーク・ビン・スィナーンという者がアブドッラーの所に来た。
そして（次に記すことを除いて）残余のハディースは同一である。
（すなわち）アルカマは彼（アブドッラー・ビン・マスウード）の所にやって来た。
そこで、われわれはアルカマに「彼にみ使いが一ラカートに読唱されていた諸章について尋ねなさい」と言った。
すると、彼はアブドッラーの所に入って尋ねた。
そして、われわれの所に戻って来ると「アブドッラーが編集した解明諸章の数は20章である」と言った。
このハディースは同一の伝承者経路を経て、アアマシュによってもたらされた。
その中に（アブドッラー・ビン・マスウード）は「私はアッラーのみ使いは一ラカートで二章お読みになっていた。それ故十ラカートでは二十章となる」と言った、というのもある。
アブー・ワーイルは伝えている
われわれはある日、早朝の礼拝を行った後、アブドッラー・ビン・マスウードの所に行き門の側に立って挨拶した。
彼はわれわれに入るよう言ったが、なおしばらくの間、門の所に立っていた。
すると、女の召使いが出て来て「皆様方、どうして内にお入りにならないのですか」と言った。
そこで、われわれは内に入った。
そこには、アブドッラー・ビン・マスウードがアッラーを讃美しながら座っていた。
彼は　「私が入りなさいと言ったのにどうしてあなた方はお入りにならなかったのですか」と言った。
わたし達は「いえ、別にどうというわけではありません。ただ御家族の中でどなたか未だお休みではないのかと考えたのです」と言った。
彼は「あなた方はイブン・ウンム・アブド（注1）の家族に（宗教上の義務の上で）何か怠慢なことがあると思ったのですか」と言った。
そう言って彼は（再び）アッラーを讃美し始めたが（その時）太陽は昇っていると思った。
そして例の女性に「太陽は昇ったであろう。見よ」と言った。
彼女が外を見ると太陽は未だ昇っていなかった。
彼はまたアッラーを讃美し始めた。
そしてもう太陽は昇ったであろうと考えて、その女性に「太陽は昇ったであろう。見てみよ」と言った。
この時太陽は昇っていた。
彼は「われわれはこの一日、われらの罪をお咎めにならなかったアッラーを讃美し奉る」と言った。
（マハディーは「私は彼が『アッラーはわれわれが罪深くあるにもかかわらずわれわれを破滅さ

せ給わず』と言ったと思う」と述べた）
人々の間にいた一人の男が「私は昨夜の間にすべての解明諸章を読唱しました」と言った。
アブドッラーは「あなたはそれを詩のように（朗朗と読まなければならない）。私は（み使いが
）幾章かを結合されて読唱されるのを聞いた。
なお、私は彼が結合させて読唱されていた章を覚えている。
それは解明諸章の18の章とハー・ミーム（注2）で始まっている二つの章であった」と言った。
（注1）イブン・ウンム・アブドとは、アブドッラーの母の息子という意であるから、彼自身のことを言っている
（注2）クルアーンの章の中には、アリフ・ラーム・ミーム、アリフ・ラーム・ミーム・サードあるいはアリフ・ラーム・ラーのように、深遠神秘な真理を表わす象徴と解される文字で始まる章がある。
このハディースにあるハー・ミームで始まる章は40、41、42、43、44、45、46の各章である。それの意味するものについては諸説があるが、本当の意はアッラーのみが御存知であるとされている
シャキークは伝えている
名前がナヒーク・ビン・スィナーンというように言われているハジーラ族の男が、アブドッラーの所に来て「私は解明諸章を一ラカートで読唱します」と言った。
アブドッラーは「あなたはそれを詩の朗唱のように朗朗と読まなければならない。私はアッラーのみ使いが一ラカートで結合して読唱されていた解明諸章の、それぞれの二章がどれであるかを知った」と言った。
アブー・ワーイルは伝えている
ある男がアブドッラー・ビン・マスウードの所に来て「私は解明諸章を一晩の中にすべて読唱しました」と言った。
アブドッラーは「あなたはそれを詩の朗唱のように朗朗と読まなければならない」と言った。
そして彼は「私はアッラーのみ使いが結合されていた各二章を知った」と言い、20の解明諸章と（み使いが）一ラカートで（それら20章の中から）結合されていた各二章について述べた。

クルアーン読誦に関することがら
1巻　P.561-563

アブー・イスハークは伝えている
私は、モスクでクルアーンを教えていたアスワド・ビン・ヤズィードに、ある男が（次のように）尋ねているのを見た。
「あなたはこの節のفهل من مدكر fahal min muddakirのد dとذ dhのいずれにお読みになりますか」
「それはد dです。私はアブドッラー・ビン・マスウードが『アッラーのみ使いはمدكر muddakirをد dで読まれているのを聞いた』と言っていたのを知っています」とアスワドは言った。
イスハークはアブドッラー・ビン・マスウードを根拠として伝えている
彼がアスワドから聞いた話では、アッラーのみ使いはفهل من مدكر fahal min muddakirと読まれていたということてある。
アルカマは伝えている
われわれはシリアに行った。その時アブー・ダルダーウがわれわれの所に来て「どなたかあなた方の中でアブドッラーの読唱で読まれる方はありませんか」と言った。
私は「はい、私が読みましょう」と言った。
彼は再び言った
「あなたはアブドッラーがこの節والليل إذا يغشى wa'l-lail-i-idhayaghsha（覆われる夜において）をどのように読んだか聞きましたか」
彼（アルカマ）は「私は彼がوالليل إذا يغشى والذكر والأنثى wa'l-lail-i-idha yaghsha wa' dhdhakar-i-wa'l-untha（覆われる夜において、男女を）のように読むのを聞いた」と言った。
彼は「アッラーに誓って、私はアッラーのみ使いが（それとは異なって、これこれのように）読まれるのを聞いた」と言った。
この他、彼等（シリアのムスリム達）は私に対してوما خلق wama khalaqa（創造されたお方に）を読み入れるよう望んだ。
しかし私は彼等に従わなかった（注）。
（注）これは夜章（第92章）の一節から三節間の、語句の脱落に関する問題である。
時に、クルアーンの集録はウスマーンの時代になってからであった。
それまでは、アブドッラーのようなクルアーンを読唱し説明する人は自分の記憶のため、また説明のために部分的に書き留めていた程度に過ぎない。
このようなわけで、これはアブドッラーがクルアーンの完全なものを所持していなかったために起こった問題である。
ところで、アブドッラーが脱落させた言葉はما خلق ma khalaqa（創造されたお方に）である。
彼が常々読唱していたのは、このハディースには記述されてはいないがوالليل إذا يغشى والنحار إذا تجلى والذكر والأنثى wa'l-lail-i-idha yaghsha wan-nahar-i-idha tajalla wa'dhdhakar-i-wa'l-untha（覆われ

た夜において、輝く昼において、男女を）である。
ここで、実は対格であるべきはずの次の語がوالذكر والأنثى wa'dhdhakhar-i-wa'll-unthaのように属格になっているのは、アブドッラーのメモランダムには、ما خلق ma khalaqaが欠落していた為である。
なお、ハディースには“シリアの人々は私にما خلق ma khalaqaを読み入れるよう望んだ”とあるが、これはその言葉を読み入れて、その目的語としてالذكر والأنثى a'dhdhakar-a-wa'l-unthaと対格で読むよう望んだという意味である
イブラヒームは伝えている
アルカマはシリアに来てモスクに入った。
礼拝を終えた後そこに輪になって座っていた人々のグループに加わった。
その時、一人の男がそこに来た。私は（彼の到来に）人々の困惑した気配を感じ取った。
その男は私の側に座って「あなたはアブドッラーがどのように（クルアーンを）読唱していたか知っているか」と言った。
残余のハディースは既述の通りである。
アルカマは伝えている
私はアブー・ダルダーウに会った。
彼は私に「あなたのお国はどちらですか」と言った。
私は「イラクの者です」と言った。
彼は再び「で、どちらの都市ですか」と尋ねた。
私は「クーファに住んでいます」と答えた。
彼はまた「あなたはアブドッラー・ビン・マスウードに習って読唱しているのですか」と言った。
私は「はい、そうです」と言った。
彼は「このوالليل إذا يغشى wa'l-lail-i-idha yaghsha（覆われる夜において）の節を読唱して下さい」と言った。
そこで私はوالليل إذا يغشى والنحار إذا تجلى والذكر والأنثى wa'l-lail-i-idha yaghsha wan-nahar-i-idha tajalla wa'dhdhakar-i-wa'l-untha（覆われた夜において、輝く昼において、男女を）と読唱した。
すると彼は笑い「私はアッラーのみ使いが（これこれのように）読まれるのを聞いている」と言った（注）。
（注）アブー・ダルダーウが笑ったのは、読唱された節の中のخلق khalaqaという語の脱落に帰因すると考えられる。
前述したように、預言者からクルアーンの集録・記述を委任された人達を除いては、自身の記憶の為に部分的にメモを取る程度であったという。
従って、その中には言葉の脱落があったのも十分にあり得ることである
このハディースは別の伝承者経路を経て伝えられたものである。

礼拝の禁止時刻について

礼拝が禁止されている時刻について
1巻　P.563-565

アブー・フライラは次のように言ったと伝えられている
アッラーのみ使いはアスルの礼拝後日没まで、また早朝の礼拝後太陽が昇るまでの間は、礼拝の挙行を禁じられた。
イブン・アッバースは伝えている
私は多くの教友達からそれ（前述のハディース）を聞いたが、その中の一人で私の最も親愛な方ウマル・ビン・ハッターブは「アッラーのみ使いは、早朝の礼拝から日の出までと、アスルの後日没まで、礼拝の挙行を禁じられた」と言った。
このハディースは同一の伝承者経路でカターダによってもたらされたが言葉に若干の変更がある。
アブー・サイード・フドリーは伝えている
アッラーのみ使いは「アスルの礼拝の後より日没までの間の礼拝は、有効ではない。
また早朝の礼拝の後より日の出までの間の礼拝も、有効ではない」と言われた。
イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは「あなた方一人たりと太陽が昇る時、またそれが沈む時に礼拝を意図してはならぬ」と言われた。
イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは「あなた方は太陽が昇る時、またはそれが沈む時に礼拝を意図してはならぬ。
それは悪魔の角の間に昇るのだ（注）」と言われた。
（注）背信者、特に太陽崇拝者たちがその時刻に太陽に向かってひれ伏すため、といわれている
イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは「太陽の縁が現れ始めたら、それが完全に現れるまで礼拝を延ばすがよい。
また太陽の縁が沈みかけたら、それが完全に沈むまで礼拝を延ばすがよい」と言われた。
アブー・バスラ・ギファーリーは伝えている
アッラーのみ使いはムハンマス（地名）でわれわれのアスルの礼拝を先導された。
その時み使いは「この礼拝はあなた方の前に（生きそして）亡くなられた方々のために、捧げられたものである。
その人々は（多忙の時期に生きられたために）礼拝の継続を放棄せざるを得なかったのである。
この礼拝を遵守し続ける者には、アッラーから二倍の報償がある。
そして、その礼拝の後星が現れるまでの礼拝は有効ではない」と言われた。
このハディースは別の伝承者経路を経て、アブー・バスラ・ギファーリーによってもたらされた。

ウクバ・ビン・アーミルは伝えている

アッラーのみ使いがわれわれに禁じられた礼拝の時刻と、死者埋葬の時刻がある。

それは太陽が昇り始めて高くなるまでの間、太陽が中央にかかる刻から傾く間、そしてそれが沈み始めてから沈んでしまうまでの間である。

アムルのイスラーム入信について

アムル・ビン・アバサのイスラームへの帰依について
1巻　P.565-567

アムル・ビン・アバサ・スラミーは伝えている
私はジャーヒリーヤ時代に人々は正道を誤って歩いていると考えていた。
彼等は偶像を崇拝し（正道と考えられるような）まともな生き方は何一つしていなかったのだ。
時に、私はマッカで（預言的知識に基づいて）情報を与える人物について耳にした。
そこで私はらくだに乗ってそのかたを尋ねた。
その頃アッラーのみ使いはその地の人々に厳しい仕打ちを受けていたので、身を隠しておいででした。
そこで、私は（マッカの人々に）友交的な態度をとることで（はじめて）そのかたの所に行きつくことが出来た。
私は彼に会って「あなたはどのような方なのですか」と言った。
彼は「私は預言者である」と言われました。
私は（再び）「預言者とはどのような者ですか」と尋ねた。
彼は「アッラーからそのみ使いとして送られた者である」と言われた。
私は「アッラーはどのような事柄であなたを（み使いとして）送られたのですか」と言った。
彼は「（アッラーは愛情や思いやりで）血族関係を強固にし、偶像を破壊し、そしてアッラーは唯一にして同位者は全く無いことを宣言するためである」と申された。
私は「それで、（それらのことを信じ）あなたと（行動を）共にしているのは誰ですか」と尋ねた。
彼は「一人の立派な市民と一人の奴隷である」と申された。
（彼〔伝承者〕は「その時み使と一緒にいた者はイスラームに帰依した人々の中のアブー・バクルとビラールであった」と言った）。
その時私はみ使いに「私はあなたについて参ります」と言った。
彼は「今はそのようにするわけには行かぬ。あなたは私や（私の）人々が厳しい状況下にあるのを知らないのですか。
あなたは御家族の許に帰って私の勝利を聞いたらお出になるとよい」と申された。
それで、私は私の家族の所に帰った。
私は色々の情報を得ようとして多くの人々を尋ねた。
この時、ヤスリブ（マディーナ）の人達のグループが私の所を訪れた。
私は（彼等に）「マディーナに来られた方はどうされましたか」と尋ねた。
彼等は「人々はその方の許に馳せ参じました。一方、彼の地の人々（マッカの多神教徒達）はみ使いを殺害しようと企てましたが果たせませんでした」と話した。
（この話を聞いた時）私はマディーナに行った。

そしてみ使いにお会いして「アッラーのみ使いよ、あなたは私を御存知ですか」と言った。
み使いは「存じている。あなたはマッカでお会いした方である」と申された。私は「その通りです」と言った。
つづけて「預言者よ、アッラーがあなたに教えられたことで私が知らないと思われることについてお話し下さい。礼拝についても是非」と言った。
そのかたは申された
「早朝の礼拝を挙行しなさい。
それから太陽が昇りきるまではそれを止めなさい。
それが昇る時は悪魔の角の間に昇って来るのです。
その刻、背信者達はそれに対してひれ伏すのです。
それから礼拝しなさい。
まこと、槍の影が（大地から）消えるまで（注）の礼拝は天使がそれを証明してくれるものです
。
その後、礼拝を（再び）止めなさい。
その刻、地獄の業火は燃えさかっている最中です。
影が長くなってきたら礼拝しなさい。
アスルの前の礼拝は天使がそれを証明してくれます。
その後太陽が沈みきるまでは礼拝を止めなさい。
それは悪魔の角の間に沈みます。その刻、背信者達はそれに対してひれ伏すのです」
私は（次に）「預言者よ、沐浴のことについてお話し下さいませんでしょうか」と言った。
み使いは申しました
「あなた方誰でも沐浴に水を使用して口をすすぎ鼻孔を清潔にすれば、その者の顔、口、鼻孔の過ちが流し落されるのです。
それから、アッラーがお命じになったように顔を洗えばその者の顔の過ちはあご髭の先端から水と共に落ちます。
そして、両手で肘まで洗えば、その者の両手の過ちは指先から水と共に落ちます。
髪の毛をぬぐえば、その者の頭の過ちは頭髪の先端から水と共に落ちます。
両足をくるぶしまで洗えば、その過ちは指先から水と共に落ちます。
こうして彼は礼拝のために立ち、まことにそうすることがふさわしい、アッラーの栄光を讃美し称讃し奉るなら彼の過失は消え去って、彼の母が生んでくれた日の彼の肉体のように、全くけがれの無いものになりましょう」
アムル・ビン・アバサはこのハディースをアッラーのみ使いの親友アブー・ウマーマに話した。
アブー・ウマーマは「アムル・ビン・アバサよ、君は、一つの場所で（唯沐浴と礼拝するだけで）そのような（多大な報償が）与えられると言っているが（その言葉に責任をもてるのか）よく考えてみるがよい」と言った。
アムルは「アブー・ウマーマよ、私は既に歳をとってしまった。
私の骨は脆くなって死期もそう遠いことではあるまい。

（どうして今）私がアッラーやそのみ使いに嘘をつく必要があるだろうか。
それに、私がそのことをみ使いから一回、あるいは二回、いや三回（彼は七回までそれを数えた
）と（幾度も）聞いたのでなかったら、けっしてそれを話しはしなかったであろう。
しかし、私はそれを彼からそれ以上多く聞いたのだ」と言った。
（注）槍の影が消える、つまり太陽が真上に来る。
アラブは真昼の刻を、昔、槍を立てて知る習慣があった

日の出と日没の礼拝について

日の出と日没の刻に礼拝を意図してはならない
1巻　P.567

アーイシャは伝えている
ウマルは、アッラーのみ使いが日の出と日没の刻の礼拝の挙行を禁じられた事実についての解釈を誤りました（注）。
（注）ウマルはアスルの後の時間すべてにおいてそれが禁じられたものと考えた
アーイシャは伝えている
み使いはアスルの礼拝の後、随意の二ラカートを必ず挙行されておりました。
なおみ使いは、太陽が昇る刻と沈む刻に礼拝を意図してはならぬ。
礼拝することは（もちろん）ならぬ、と申されました。

アスル礼拝後の礼拝に関して

アスルの礼拝後のニラカートについて
1巻　P.567-569

イブン・アッバースのマウラー・クライブは伝えている
アブドッラー・ビン・アッバース、アブドル・ラフマーン・ビン・アズハル、ミスワル・ビン・マハラマは彼（マウラー・クライブ）を預言者の妻アーイシャの許に送った。
（その時）彼等は「先ずわれわれ一同からの挨拶を彼女に伝えた後、アスルの礼拝の後のニラカートについて尋ねよ。
そして、われわれはアッラーのみ使いがそのニラカートを禁止されたのにあなたは挙行されていると聞き及んでいます、と伝えよ」と言った。
イブン・アッバースは「私はウマル・ビン・ハッターブと共に人々に（そのニラカートを）行わないように言って来た」と述べた。
クライブは言った
「私は彼女の所に行って私が託された伝言を伝えた。
すると彼女は『ウンム・サラマ（注1）に尋ねて下さい（その方が良い）』と言った。
私は彼等の所に戻り彼女の言葉を伝えた。
すると彼等は私をアーイシャの許に送ったのと同じ目的でサラマの所に行かせた。
ウンム・サラマは『私はみ使いがそれを禁止されるのを聞きました。
その後、私はそのかたがその礼拝を行われているのを見たのです。
そのかたがそのニラカートを挙行されたのはたしかにアスルの礼拝を終えた後でした。
時に、私がアンサールのハラーム族の女性達と一緒に居りました折、み使いが来られてそのニラカートを挙行されました。
私は奴隷女に申しつけました
『お前、み使いの所に行ってウンム・サラマが、“み使い様、私はあなたがそのニラカートを禁止されるのを聞いております。
それなのに私はあなたがそれを挙行されるのを目にします”、と申しておりますと言いなさい。
そして、もしそのかたが手で（待つよう）合図されたら待つのです』とこのように。
彼女は私の言いつけ通りにしました。
彼は手で合図されました。
そこで彼女は離れた所で待ちました。
み使いが礼拝を終えた時『アブー・ウマイヤの娘よ、あなたはアスルの礼拝の後のニラカートについて尋ねた。
これより先、アブドル・カイス（注2）の中でイスラームに帰依するために私の所へ来た人々が正午の礼拝の後に挙行するニラカートを妨げた。
それで、あのニラカートが（今、私が行った）それである』と申されました」とこのように彼女

は言いました（注3）。
（注1）ウンム・サラマは預言者の妻の一人である。
彼女の実名はヒンド・ビント・アブー・ウマイヤ・ホザイファ・ビン・ムギーラ・マハズミーである
（注2）アブドル・カイス家はバハレーン北部に拠った部族で628年にイスラームに帰依している
（注3）預言者が正午の礼拝の後挙行するはずの随意の礼拝を後らしていたのは、イスラームを信奉するために訪れた人々に、この宗教について説いていたためである。
これはイスラームを説いて人々を正道に導くことが、ナフルの礼拝以上に重要であるのを示したものであるとされる。
なお、一般的な規則としては、アスルの礼拝後の二ラカートは禁止されている。
しかし、預言者はこの限りではない
アブー・サラマはアーイシャに、アッラーのみ使いがアスルの礼拝後に挙行されていた二ラカートについて尋ねた。
彼女は「み使いはそれを最初、アスルの前に行っておりました。
その後、その御方はその二ラカートに差し障りをお感じになったのか、アスルの後に挙行されるようになりました。
それからは続けてそのようにされております。
その御方が礼拝を行われた時は、それを継続的にされるのが（習慣です）」と申しました。
イスマイールは「それはみ使いがその二ラカートを継続して行われたことを意味する」と言った。
アーイシャは伝えている
み使いは私の家ではアスルの後の二ラカートの礼拝を決して放棄されることはありませんでした。
アーイシャは伝えている
み使いが私の家で、公然とあるいは内々に、欠かすことなく挙行された二ラカートは、早朝の未明の二ラカートと、アスルの後の二ラカートです。
アスワドとマスルークは述べている
アーイシャが「み使いは私と共に居られた日は、私の家でアスルの後の二ラカートを決して欠かすことはありませんでした」と言ったことについて、われわれは証言致します。

マグリブ礼拝前の礼拝について

マグリブの礼拝の前にニラカートの挙行は好ましいものである
1巻　P.569-570

ムフタール・ビン・フルフルは伝えている
私はアナス・ビン・マーリクにアスルの後の自発的な礼拝について尋ねた。
彼は「ウマルはアスルの後の礼拝に対しては彼の手をたたいていた（注1）。
そして、われわれは預言者が御存命の時は太陽が沈んだ後のマグリブの礼拝の前にニラカートを行っていた」と言った。
私は彼に「アッラーのみ使いはそのニラカートを挙行されていましたか」と尋ねた。
彼は「み使いはわれわれがそれを行うのを御覧になっておられたが、別にそれをお命じになるというのでもなかったし、禁止されもしなかった」と答えた（注2）。
（注1）手をたたくのは不愉快な感情を示す動作
（注2）このニラカートはあくまで随意のものとして、イスラームが起こった初期の頃に行われていた。
だか、これがマグリブの礼拝を遅らせる因となったようであり、やかて行われないようになってしまった。
しかしながら、ほとんどのイスラーム法学者は、このナフルの礼拝は許されるものと考えている
アナス・ビン・マーリクは伝えている
われわれはマディーナに居た。
そこで、ムアッジンがマグリブの礼拝のアザーンを唱えた時人々はモスクの支柱の所へ急行した（注）。
そして彼等はめいめいニラカートニラカートと、礼拝を行った。
もし（状況を）知らない人がモスクに入ったなら、あまりにも多くの人々が礼拝を行っているので、義務としての礼拝は既に終えたのではないかと考えるような光景であった。
（注）人々が柱の側へ急行するのはその後に位置を占めるのを望むからである。
その理由は礼拝中に前を歩かれるのを嫌うためである

アザーンの間の礼拝について

アザーンの間の礼拝
1巻　P.570-571

アブドッラー・ビン・ムガッファルは伝えている
アッラーのみ使いは二つの呼び掛け（アザーンとイカーマ）の間に礼拝がある」と申された。
み使いはそれを三度言われたが三度目に「（これは）それを望む者が行えば良い」と申された。
このハディースはアブドッラー・ビン・ムガッファルによって別の伝承者経路でも伝わっている
。
だがそれには若干の相違がある。
（すなわち）み使いは四度目に「（これは）それを望む者が行えば良い」と申された。

危険時の礼拝について

危険時の礼拝について
1巻　P.571-574

サーリム・ビン・アブドッラー・ビン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いは二つのグループの一つが敵と対峙している間に他の一つのグループを導いて、危険時に一ラカートの礼拝を挙行された。
その後、彼等（礼拝を行ったグループの人々）はそれまで敵と対峙していた仲間と交代した。
第二のグループが来るとみ傾いは（再び）彼等を導いて一ラカートの礼拝を挙行された。
これを終えるとみ使いは（礼拝終了の）挨拶をされた。
その後（第一のグループの）人々は（再度）一ラカートを挙行し、次いで（第二のグループの）人々も一ラカートを挙行した（こうして礼拝は完全に行われた）（注）
このハディースは別の伝承者経路でも伝えられている。
（注）これは危険時における十六の礼拝形式の中の一つである。
これは状況に応じて変えられる
イブン・ウマルは伝えている
アッラーのみ使いはある日、危険時に（次のような方法で）礼拝を挙行された。
一つのグループが敵と対峙し、別のグループはみ使いと礼拝を行った。
このグループの人々がみ使いと一ラカートを挙行し終えると（前線へ）戻った。
（代って）別のグループの人々が来て（み使いと共に）一ラカートを挙行した。
この後両グループはそれぞれ一ラカートを済ませて礼拝を完結した。
イブン・ウマルは「そこに非常な危険がある場合には（馬、らくだに）乗ったまま、あるいは立ったまま（礼拝の）身ぶりでそれを挙行せよ」と言った。
ジャービル・ビン・アブドッラーは伝えている
私は危険時にアッラーのみ使いと礼拝を行った。
み使いは敵がわれわれとキブラとの間にいる時われわれを横に二列に整列させ、前列を彼のすぐ後に位置させた。
み使いが「アッラーフ・アクバル」と唱えられるとわれわれも「アッラーフ・アクバル」と唱えた。
彼が立礼されるとわれわれも立礼した。
彼が頭を上げられるとわれわれも頭を上げた。
それから、彼が叩頭されると前列はそれに従って叩頭した。
その時、後列は敵を監視するために立ったままであった。
み使いが叩頭を終えられると前列も立ち上った。
それに代って後列が叩頭した。
全員が立った時、前列と後列は位置を交代した。

それからみ使いが（再び）立礼されると、われわれ全員も立礼した。
み使いが頭を上げられると、全員頭を上げた。
そのかたが叩頭されると、前列（それは最初の一ラカートでは後列であった）はそのかたに従って叩頭した。
その間、後列は敵を監視して立ったままであった。
み使いと前列が叩頭を終えると、後列が叩頭した。それからみ使いは（礼拝の最後の）挨拶をされ、われわれも全員挨拶した（注）。
（ジャービルは）あなた方の護衛たちが長につき従うように（われわれもそうした）と言った。
（注）これは、イスラーム法にのっとった危険時での第二の礼拝形式である。
この形式では、人々はイマームの後に二列に整列し、一ラカートでその位置を交代するが、その場合一グループは敵を監視しなければならないために、必要があればその姿勢を変えても良いとされる
ジャービルは伝えている
われわれはアッラーのみ使いと一緒に出陣して、ジュハイナ族と戦った。
彼等はわれわれに激しく挑んで来た。
ところで、われら一同が正午の礼拝を遂行し終えた時、多神教徒たちは「もしわれわれが（あの礼拝の折に）速攻していれば彼等を殺すことが出来たであろうに」と言った。
天使ガブリエルはその事をアッラーのみ使いに告げた。
み使いはそれをわれわれに話された。
多神教徒たちは「間もなく彼等にはアスルの礼拝の時刻が来る。
それは彼等が彼等の子供達以上に重要視しているものだ」と言った。
アスルの礼拝の時刻が来た時、敵がわれわれとキブラとの間にいる状況の中で、われわれは横に二列に整列した。
み使いが「アッラーフ・アクバル」と唱えられた。
われわれもそれに従って「アッラーフ・アクバル」と唱えた。
み使いが立礼されると全員立礼した。
そのかたが叩頭されると前列が叩頭した。
彼等が立ち上った時、後列が叩頭した。
（それが終ると）前列は後へさがり、後列が前へ出て位置を交代した。
その時、み使いは「アッラーフ・アクバル」と唱えられた。
われわれも「アッラーフ・アクバル」と唱えた。
そのかたが立礼されると全員立礼した。
そのかたが叩頭されると、前列はそれに従って叩頭した。
後列は（敵を監視して）立った。
そして、後列も叩頭し終えわれわれ全員が（大地に）座わるとみ使いは（礼拝終了時の）挨拶を彼等にされた。
アブー・ズバイルは「それからジャービルは『ちょうどあなた方の長たちが（部下に危険がおよ

ばないよう配慮して）礼拝を行うように』という言葉を特につけ加えた」と言った。
サハル・ビン・アブー・ハスマは伝えている
アッラーのみ使いは危険時に教友達を導かれて礼拝された。
み使は人々を横に二列に整列させ後に立たせせた。
そのかたは（最初）前列の人々と一ラカートを挙行してお立ちになった。
（それから後列の人々が一ラカートを行ったが）彼は後列の人々が礼拝し終えるまで立ち続けておられた。
それから後列の人々は前に、前列の人々は後にさがって位置を交代した。
み使いはまた前列に位置した人々を導いて、一ラカートを挙行されて座った。
そして、後列の人々が一ラカートを終了するのを待って挨拶を行われた。
ヤズィード・ビン・ルーマーンはザートル・リカーウ（注）の戦で、危険時にアッラーのみ使いと礼拝を共にした教友を根拠としたサーリハ・ビン・ハウワートの話を伝えている
一グループが横に一列になってみ使いと礼拝していた間に、別の一グループは敵と対峙していた。
み使いはそのかたと一緒の人々と一ラカートを挙行されて、お立ちのままであった。
人々は彼等自身で（残りの一ラカートを行ってその礼拝を）完結した。
礼拝を終えた人々は（敵と対峙するために）去った。
（それと交代に）別のグループがやって来た。
するとみ使いはその人々と一緒に、彼の残りの一ラカートを済まされて座られた。
人々は彼等だけで礼拝を完結した。
それと同時にみ使いは挨拶を行われ人々もそれに従った。
（注）ガタファーンの一地区遠征の戦いである。
これはヒジュラ暦五年のことである
ジャービルは伝えている
われわれはアッラーのみ使いと共に道を進んでいた。
ザートル・リカーウに着くとそこに木陰があって、み使いはその下にお入りになった。
そこに多神教徒の一人が現れて木に掛けてあったみ使いの剣を奪った。
彼は鞘をはらってみ使いに、「お前は私を恐れないのか」と言った。
み使いは「恐れない」と言われた。
彼は「私の襲撃に、お前を護る者は誰か」と言った。
み使いは「アッラーが私をお前からお護りくださる」と言われた（注）。
その時、み使いの親友達がその男をおどかした。
彼は剣を鞘に収め（もと在ったように木に）掛けた。
折りしも、礼拝のアザーンが唱えられた。
み使いは、一グループと二ラカート挙行された。
それから（そのグループは）後にさがった。
み使いは別のグループとまた二ラカート挙行された。

アッラーのみ使いは、ここでは、四ラカート挙行され、人々は二ラカート挙行したのである。
（注）これは預言者のアッラーに対する黙信の観念の表明であるとされる
アブー・サラマ・ビン・アブドル・ラフマーンは伝えている。
ジャービルは危険な時にアッラーのみ使いと礼拝をしたと彼に告げた。
み使いは、二グループの中の一グループと、二ラカート挙行された。
その後み使いは、残りのグループと、二ラカート挙行された。
すなわち、アッラーのみ使いは四ラカート、各々のグループは二ラカート挙行したのである。

奥付

WEB版　日訳サヒーフ・ムスリム

http://p.booklog.jp/book/73111

著者：日本ムスリム協会
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/muslimkyokai/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/73111

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/73111

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ